【擯棄】（ヒンキ）　意義退けて棄ること。出典書経、皐陶謨に、擯棄不勝衆、遠見擯棄。

【擯卻】（ヒンキヤク）　意義しりぞくること。擯斥に同じ。出典漢書中山王傳に、使夫宗室擯卻骨肉冰釋。

【嬪嬙】（ヒンシヤウ）　意義宮中の女官なり。出典左傳昭公三年に、以備嬪嬙、寡人之望也。

【嬪嬪】（ヒンダツ）　意義カハヤツなり。小人に比していふ。出典陶侃愈の壓科目時與人書に、爲嬪嬪之笑。

【檳榔】（ヒンラウ）　意義植物の名。出典本草綱目に、檳榔生南海及嶺外州郡、大如統樹、高五七丈、正直無枝、皮似青桐、節如桂竹、葉生木巔、似椶頭、又似芭蕉、實作房、從葉中出、一房數百、狀如雞子。

【殯】（ヒン）　意義屍、棺に在り將に葬柩に遷さんとし之を賓遇するをいふ。出典禮記檀弓上篇に、子思曰、喪三日而殯。

【瀕海】（ヒンカイ）　意義海濱をいふ、瀕はノゾムと訓ず。出典漢書、公山傳に、江湖之上、瀕海之觀畢至。

【壘】（ヒン）　意義酒を入るゝ器、トクリ、品字壺ヒ缶非とあり。出典許渾の夜歸驛樓詩に、橫邊沽酒牛壘空と。又た陸龜蒙の謝山泉詩に、石壘封寄野人家。

【蘋】

【蘋蘩薀藻】（ヒン）　意義四種皆菜となして食キクサ）なり、白花を開く、蘋は大萍（ウキクサ）なり、白花を開く、蘋は蓱蕭（シロモリ）春生ず、薀は水草、藻はモなり。出典左傳隱公三年に、苟有明信、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公。

【蘋風蓼雨】　意義夏日蘋蓼に當れる雨なり。出典吳樹珠の詩に、蘋風蓼雨晚蕭蕭。

【繽繽】（ヒンヒン）　意義モツレ亂るゝ貌。出典陶弘景の尋山誌に、鳥迷雖分繽繽。

【繽紛】（ヒンフン）　意義㊀盛なる貌。㊁亂るゝ貌。出典㊀孔子家語に、旗旌繽紛、下繽于地。㊁離騷に、時繽紛以變易兮。

【顰笑】（ヒンセウ）　意義眉をヒソメてワラフなり。出典イの部顰に、（イウ）顰一笑、顰を見よ。出典袁中道の詩に、臨事何貪掛顰笑。

【顰】

【顰毛】（ヒンマウ）　意義ビンの毛なり。出典李白の詩に、知己猶未報、顰毛頗已蒼と。又た杜甫の詩に、天涯故人少、更憶顰毛斑。

【顰鴉】　意義顰毛の黑きをいふ。出典杜牧の詩に、鑾得閒身掠顰鴉。

【顰眸】　意義ビンの毛のはえきはをいふ。出典鄭谷の詩に、年來顰眸未一垂白。

【顰絲茶烟之感】　意義少年の頃に輕遊に戯り居しものが、老後に至りて、淡泊なる生涯を樂み、餘生を送るをいふ。出典杜牧の題禪院詩に、賦船一棹百分空、十歲青春不負公、今日顰絲茶烟輕、離落花風。

五　平（ヒヤウ）

【平仄】（ヒヤウソク）　意義仄の字、一に側に作る、文字平仄あり、仄は上・去・入の三種に別る、今は之を一百六韻に概括せらる、（オの部貢オン）韻を見よ）詩を作るには、此の平仄の文字を規則に從ふて配置するなり、左にその式を掲ぐ、○は平にして、●は仄、◐は平仄執れにても可なるものなり。

五言絶句正格（仄起）

●●○○●
◐○◐●○
◐○○●●
●○○●●
●●○○●
同　偏格（平起）
◐○○●●
○●●○○
◐●○○●
◐●○○●
◐●●○○

七言絶句正格（仄起）

◐●○○●●○
◐○◐●○○●
◐○○●●○○
◐●○○●●○
○○●●○○●
○●○○●●○
◐●○○●○○
◐○○●○○●
◐●○○●●○

同　偏格（平起）

◐○○●●○○
◐●○○●●○
◐●○○○●●
◐○○●○○●
◐○○●●○○

五言律正格（仄起）

◐●○○●
◐○○◐●
○○●●●
○○●●○
◐○○●●
前聯
○○●●●
○○●●○
◐○○●●
後聯
◐◐○○●
○○●●●
○○●●○
前聯
○○●●●
○○●●○
◐○○●●
後聯

同　偏格（平起）

●○○●●
●○○●●
○○●●○
○○●●●
前聯
○○●●○
○○●●●
後聯

七言律正格（仄起）

◐●○○◐●
◐●○○◐●○
◐○◐●●○○
◐○◐●●○○
○○●●○
前聯
◐○○●●○
◐○○●●●
後聯
◐●○○●●
◐○○●●○
◐○○●●●
前聯
◐●○○●●
◐○○●●○
◐○○●●●
後聯

同　偏格（平起）

●○○●●○○
◐●○○●●○
◐●○○○●●
◐○○●○○●
◐○○●●○○

五言律正格（仄起）

◐●○○●
◐○○◐●
○○●●●
○○●●○
◐○○●●
前聯
○○●●●
○○●●○
◐○○●●
後聯

同　偏格（平起）

●○○●●
●○○●●
○○●●○
○○●●●
前聯
○○●●○
○○●●●
後聯

七言律正格（仄起）

◐●○○◐●
◐●○○◐●○
◐○◐●●○○
◐○◐●●○○
○○●●○
前聯
◐○○●●○
◐○○●●●
後聯
◐●○○●●
◐○○●●○
◐○○●●●
前聯
◐●○○●●
◐○○●●○
◐○○●●●
後聯

九　屏

同　偏格（平起）

●○○●●○○
◐●○○●●○
◐●○○○●●
◐○○●○○●
◐○○●●○○
前聯
○○●●●
○○●●○
◐○○●●
後聯

左の如きを忌むなり。

●○○　孤平
○●○　孤仄
○○○　平三連
●●●　仄三連

【平等】（ヒヤウドウ）　意義平均同等なり、即ち親疎上下等によりて、區別を立てざるをいふ。出典涅槃經に、悉皆平等、無有差別。

【屏風】（ヒヤウブ）　意義座を繞らして風を障く具なり。出典事物紀原に、周禮掌次設皇邸、鄭司農云、邸後板也、唐成謂後板屏風、禮記明堂位曰、天子負斧扆而立、陸法言云、今屏風扆遺象也、三禮圖曰、屏風之名出於漢世、故班固之書多言其制、徐堅爲初學記、亦載漢劉安羊勝等賦、然則漢制屏風、蓋起於周皇邸斧扆之事也と。又た史記孟嘗君傳に、屏風後常有侍史。

【如屏風】（ヒヤウ）　意義人の屈曲して世俗に從ふ者をいふ。出典世說賞譽下篇に、宋世爲之語曰、王光祿如屏風、屈曲從俗、能令風靡。

一〇　病

【病人】（ヒヤウニン）　意義病者なり。出典荀子法行篇に、良醫之門多狂木。

【病者】（ヒヤウシヤ）　意義前條に同じ。出典北史費長孫稚傳に、危難之日、病者先行。

【病根】（ヒヤウコン）　意義㊀人の身に受けたる病のもとをいふ。㊁惡しき習慣が深く心に浸み込めるをいふ。出典㊀後漢書華佗傳に、有疾詣佗求療、佗曰、君病根深、應當剖腹。㊁橫渠語錄に、甚則至於徇私意、義理都喪、也唯爲病根不去、隱所誤所接而長。

【病死】（ヒヤウシ）　意義ヤミて死するをいふ。出典史記龜策傳に、文王病死。

【病證】（ヒヤウシヤウ）　意義病氣の徵候なり。出典水滸傳第六回に、府裏老都管、也來看病內病證。

【病氣】（ヒヤウキ）　意義病の模樣なり。出典冥祥記に、君有病氣。

【病措大】（ヒヤウソダイ）　意義病人の學者をいふ。出典病措大習白猿公術。

【萍迹】（ヒヤウセキ）　意義萍蹤に同じ。次條を參看せよ。出典黃公度の春日懷王慶長詩に、王孫緣底事、萍迹久他鄉。

【萍水相逢】（ヒヤウ）　意義萍は、蘋（ウキグサ）、根なくして水に浮びて生じ、風の吹くに任せ、遷移してその所を定めず、因て人の旅中にて偶然に相逢ふに比す。出典王勃の滕王閣序に、萍水相逢、盡是他鄉之客。

評

【苹蹤靡定】（ヒヤウ）〔意義〕四方に奔走して、一處に止り居らざるをいふ、苹は浮き草なり。〔出處〕後漢書鄭玄傳に、黃巾爲寇、萍浮南北、復歸邦鄕、入此歲來、已七十矣と。又た初學記草部に、晉夏侯湛浮萍賦、淳不安處、行無定軌と。又た王儔の詩に、十年滄海寄萍蹤。

【評】（ヒヤウ）〔意義〕文體の名。〔出處〕文體明辯に、按、字書云、評、品論也、史家褒貶之詞、蓋古者史官各有論著、以訂一時君臣言行之是非、然隨意命名、莫協於一、故司馬遷史記稱太史公曰、而班固西漢書則曰贊、范曄東漢書又謂之論、其實皆評也、而評之名則始見于三國志、後世緣此、作者漸多、則不必身在史局手秉史筆而後爲之矣、故二評載諸文粹、而評史見於蘇文忠公集中、蓋文章之一體也、今以陳壽史評爲主、而其他作者亦並列焉、分爲史評雜評二品云。

【評議】（ヒヤウギ）〔意義〕はかり議するなり。〔出處〕後漢書東夷傳に、評議乃殺之。

【評論】（ヒヤウロン）〔意義〕はかり論ずるなり。〔出處〕隋書楊异傳に、評論得失。

白（五）

【白虎通義】（ヒヤク）〔意義〕書名。〔解題〕漢の班固撰す、凡そ四十四篇あり、或は略して白虎通と曰ふ、後漢建初四年に、群儒に詔して北宮の白虎觀に會し、五經の異同を考定せしめ、其議奏を裒め、白虎通論を爲る、後固に詔して、更に撰集せしめ、始めて此書を定む、書中に述ぶる所、讖緯の學に渉ると雖も、多く古義を傳ふるを以て、今に至る迄考證家の依據する所となること多し。

百（六）

【百官】（ヒヤククワン）〔意義〕多くの官吏。〔出處〕書經周官篇に、總百官、均四海と。又た論語憲問篇に、君薨、百官總己、以聽於冢宰三年。

【百辟】（ヒヤクヘキ）〔意義〕諸侯なり。〔出處〕詩經周頌烈文篇に、不顯維德、百辟其刑之、於乎前王不忘。

【百揆】（ヒヤクキ）〔意義〕庶政を揆り度る官なり。〔出處〕書經舜典篇に、納于百揆、百揆時敍。

【百職】（ヒヤクショク）〔意義〕多くの職掌をいふ。〔出處〕月令問答に、月令與周官、竝爲時王政令之記、官名百職、皆周官解と。又た權德輿の文に、書命者、古先哲王之所以發德音而賦百職。

【百吏】（ヒヤクリ）〔意義〕多くの役人のこと。〔出處〕史記夏紀に、皐陶曰、百吏肅謹、毋敎邪淫奇謀と。又た管子に、正月之朔、百吏在朝、君乃出令、布憲于國。

【百宰】（ヒヤクサイ）〔意義〕多くの料理するものをいふ。〔出處〕張衡の天象賦に、天府廠令供百宰、博合開兮進四方。

【百僚】（ヒヤクレウ）〔意義〕百官なり。〔出處〕書經皐陶謨篇に、百僚師師。

【百谷】（ヒヤクコク）〔意義〕多くの谷をいふ。〔出處〕老子第六十六章に、江海所以能爲百谷王者、以其善下之、故能爲百谷王と。又た宋玉の賦に、遇天雨之新霽兮、觀百谷之俱集。

【百王】（ヒヤクワウ）〔意義〕多くの王をいふ、即ち百代の王といふに同じ。〔出處〕漢書董仲舒傳に、天下洽和、百王同之。又た宋書樂志に、陶甄百王、稽則黃軒と。又た北史に、百王損益、一以貫之、雖政圬隆、而斯文不墜。

【百司】（ヒヤクシ）〔意義〕多くの官署をいふ。〔出處〕書經立政篇に、百司庶府と。又た宋書に、空置百司、權不外假と。又た唐太宗の詩に、端扆朝群后、無爲任百司。

【百葉】（ヒヤクエフ）〔意義〕百代といふこと、代の重なること葉の如きに取る。〔出處〕三國魏志高堂隆傳に、秦不修聖道、乃構阿房之宮、築長城之守、自謂本支百葉、永垂洪暉。

【百日】（ヒヤクジツ）〔意義〕一百日のことをいふ。〔出處〕禮記雜記下篇に、百日之蜡、一日之澤と。又た韓愈の雙鳥の詩に、春風捲地起、百鳥皆飄浮、兩鳥忽相逢、百日鳴不休。

【百頃】（ヒヤクケイ）〔意義〕一頃は、百畝なり。〔出處〕漢書王莽傳に、遂營長安城南、提封百頃と。又た庾信の濟池詩に、百頃浚源開。

【百將】（ヒヤクシヤウ）〔意義〕多くの大將をいふ。〔出處〕荀子議兵篇に、仁人之兵、百將一心、三軍同力、臣之于君、下之于上也、若子之事父、弟之事兄、若手臂之扞頭目、而覆胸腹也。

【百聖】（ヒヤクセイ）〔意義〕多くの聖人をいふ。〔出處〕鶡冠子に、閉百聖而不聽、蔽百地而不恥。

【百神】（ヒヤクシン）〔意義〕多くの神をいふ。〔出處〕詩經周頌時邁篇に、懷柔百神、及河喬嶽と。又た孟子萬章上篇に、使之主祭、而百神享之と。又た孔子家語に、夏禹敬

給、堯舜其德、不與其功、百神之主、其寧爲民之父母。

【百舌】（ヒヤクゼツ）〔意義〕鳥の名、モヅなり。〔出處〕禮記月令篇（仲夏）に、反舌無聲と。鄭注に、反舌、百舌鳥と。又た淮南子說山訓に、人有多言者、猶百舌之聲と。又た杜甫の詩に、赤葉楓林百舌鳴、黃泥野岸天鷄舞。

【百念】（ヒヤクネン）〔意義〕種種なる思念のこと。〔出處〕何遜の詩に、客心已百念、孤遊重千里と。又た朱熹の詩に、一杯且復醉、百念中闌干。

【百慮】（ヒヤクリヨ）〔意義〕種種なる思慮あるをいふ。〔出處〕易經繫辭下傳に、天下同歸而殊塗、一致而百慮と。又た後漢書に、或出或處、一致百慮と。又た文心雕龍に、心生文辭、運裁百慮。

【百鬼】（ヒヤクキ）〔意義〕多くの妖怪をいふ。〔出處〕荊楚歲時記に、正月貼畫雞戶上、懸葦索于其上、插桃符其傍、百鬼畏之。

【百眉】（ヒヤクビ）〔意義〕種種なる眉の畫き方をいふ。〔出處〕清異錄に、瑩姐、平康妓也、畫眉日作一樣、數十而未窮、唐之立戲之曰、西蜀有十眉圖、布之四方、汝今眉癖若是、今可作百眉圖。

【百頭】（ヒヤクトウ）〔意義〕㊀草の名。㊁牛馬百匹を百頭といふ。〔出處〕㊀本草に、貫衆、一名百頭。㊁舒頓の百牛圖歌に、橫斜錯態百頭殊、牧豎牽籠雜踐阡陌。

【百男】（ヒヤクダン）〔意義〕男子の多きをいふ。〔出處〕詩經大雅思齊篇に、大姒嗣徽音、則百斯男と。又た王安石の賀生皇子表に、詩歌嗣徽、爰至百男。

【百子】（ヒヤクシ）〔意義〕多くの子をいふ。〔出處〕西京雜記に、漢宮七夕臨百子池、以五綫相羈、謂之相連愛と。又た張翥の詩に、舊聞百子漢家池。

【百孫】（ヒヤクソン）〔意義〕多くの孫をいふ。〔出處〕海錄碎事に、玄宗諸子、同爲大宅分院居、爲十王宅、又於十宅外置百孫宅。

【百姓】（ヒヤクセイ）〔意義〕㊀庶民なり。㊁百官なり。〔出處〕㊀詩經小雅天保篇に、群黎百姓、徧爲爾德と。又た孟子梁惠王上篇に、梁惠王曰、誠有百姓者。㊁書經堯典篇に、九族既睦、平章百姓と。孔傳に、百姓、百官と。疏に、百官謂之百姓者、隱八年左傳云、天子建德、因生以賜姓、謂建立有德以爲公卿、因其所生之地而賜之以爲其姓、令其收斂族親、自爲宗主、明王者任賢不任親、故以百姓言之、周官篇云、唐虞稽古建官惟百、大禹謨云、率百官若帝之初、是唐虞之世、經文皆稱百官、而禮記明堂位云、有虞氏之官五十、後世所記、不合經也。

【百賈】（ヒヤクコ）〔意義〕多くの商人をいふ。〔出處〕漢書尹翁歸傳に、翁歸爲市吏、莫敢犯者、公廉不受餽、百賈畏之。

【百氏】（ヒヤクシ）〔意義〕多くの學者、即ち諸子百家なり。〔出處〕漢書敍傳に、緯六經、綴道綱、總百氏、贊篇章と。又た晉書陸雲傳に、思樂百氏、博採其珍、辭邁翰林、言敷其藻。

【百人】（ヒヤクニン）〔意義〕多くの人といふこと。〔出處〕左傳成公二年に、楚侵及陽橋、孟孫請往賂之、以執斫執鍼織紝、皆百人。

【百役】（ヒヤクエキ）〔意義〕多端なる事務を勤むることと。〔出處〕左傳襄公十四年に、晉之百役、與我諸戎、相繼于時、以從執政、猶殽志也、敢離逷と。又た揚雄の逐貧賦に、身服百役、手足胼胝。

【百利】（ヒヤクリ）〔意義〕種種なる利益のことをいふ。〔出處〕宋史に、王安石、富國、崔公度、獻熙寧稽古一法百利論、安石解衣握手、與之語。

【百劫】（ヒヤクカウ）〔意義〕劫とは年を經ること多きをいふ。〔出處〕智度論に、問曰、三十二相、幾時能成、答曰、極遲、百劫極疾、九十一劫と。又た劉禹錫の文に、聽于金石、傳信百劫。

【百會】（ヒヤククワイ）〔意義〕ツムジをいふ。〔出處〕康熙字典に、方書、頂中央旋毛中爲百會、百會前一寸半爲前頂、百會前二寸即囟門。

【百事】（ヒヤクジ）〔意義〕百端の事務をいふ。〔出處〕書經舜典篇に、納于百揆、百揆時敍と。孔傳に、舜擧八凱、使揆度百事、百事時敍、無廢事業と。又た荀子に、百事齊于官、衆庶齊于下。

【百爲】（ヒヤクヰ）〔意義〕百方の所爲あるをいふ。〔出處〕書經多方篇に、至于百爲、大不克開。

【百法】（ヒヤクハフ）〔佛〕〔意義〕多くの法論をいふ、佛の法のこと。〔出處〕傳燈錄に、丁氏始講百法、因明二論と。又た白居易の詩に、空王百法學未得、姹女丹砂燒即飛。

【百味】（ヒヤクミ）〔意義〕種種なる食物をいふ。〔出處〕曹植の上表文に、身被輕煖、口厭百味と。又た庾肩吾の文に、珍諭百味、

来鶴、黄槃、恩重千金、遂沾菲席。

【百名】（ヒヤクメイ）　禮聘禮に、將命、百名以上、書于策、不及百名、書于方。

【百數】（ヒヤクスウ）　百を以て數ふるをいふ。曹參等百數、何缺于漢。又た漢書藝文志に、元始中、徵天下通小學者、以百數、各令記字于庭中。

【百韻】（ヒヤクイン）　の詩をいふ。　杜甫蜀賦譜に、百韻、合以兩色材、織之、其橫視常紙、長三之二、可以寫詩百韻、故云。

【百憂】（ヒヤクイウ）　多くの憂慮あるをいふ。　詩經王風兎爰篇に、我生之初、尚無造、我生之後、逢此百憂、尚寐無覺。又た歐陽修の秋聲賦に、百憂感其心、萬事勞其形、有動中、必搖其精。

【百罹】（ヒヤクリ）　兎爰篇に、我生之初、尚無爲、我生之後、逢此百罹、尚寐無吪。

【百愁】（ヒヤクシウ）　多く悲しきことあるかふ。　張正元の臨川羨魚詩に、有客百愁侵、求魚正在今。

【百怨】（ヒヤクエン）　多く人に怨まるることをいふ。　戰國策に、蘇代謂魏王曰、使秦無百怨百利と。又た淮南子に、優優簡簡、百怨不起。

【百計】（ヒヤクケイ）　種種なる計略をなすをいふ。　張籍の詩に、白髮如今欲滿頭、從來百計盡應休と。又た陳游の詩に、百計不能逃白髮、一生堪笑役虛名。

【百感】（ヒヤクカン）　種種なることを心に感ずるをいふ。　江淹の別賦に、鬱陶悽惻と。又た羅鄴の詩に、縱入新秋百感生、就中蟬噪最堪驚。

【百行】（ヒヤクカウ）　多くの行爲をいふ。　詩「柳風賦」篇に、士之耽兮、猶可說也。鄒衍に、士有百行、可以功過相除。又た北史に、燕常篤信、百行靡遺。又た白虎通に、孝、道之美、百行之本也。

【百步】（ヒヤクポ）　百足歩むをいふ。　戰國策に、獨不見夫服牛駕轅乎、不可以行百步と。又た唐書忠義傳に、南霽雲善騎射、見賊百步內、乃發、無不應、號「雲霽」。

【百尋】（ヒヤクジン）　八尺なり。　晉書陳頵傳に、百尋之屋、突直而焚燎、千里之隄、蟻蛭而穿敗と。又た庾信の文に、直幹百尋、澄波千頃。

【百尺】（ヒヤクセキ）　百尺は十丈なり。　梁書桐百尺、垂楊五株。

【百鈞】（ヒヤクキン）　イの部一（イッ）鈞を見よ。

【百仞】（ヒヤクジン）　イの部一（イッ）仞を見よ。

【百石】（ヒヤクセキ）　俸給とす、故に百石千石といふ。　漢書百官公卿表に、百石以下、有斗食佐史之秩、是爲少吏と。又た同書趙廣漢傳に、其後百石吏、並自重、不敢枉法妄繫留人。

【百斤】（ヒヤクキン）　清傳に、袁毅、嘗爲蘇令、賂遺公卿、以求虛譽、赤遣濟赫百斤、濟受而藏閣上、後毅事敗、取絲付吏、印封如初と。又た五代史に、楊行密爲人、長大有力、能手舉百斤。

【百擔】（ヒヤクタン）　荷物の百荷あるをいふ。　宣和書譜に、道士陳景元歸廬山、行李無他物、百擔皆經史也。

【百鎰】（ヒヤクイツ）　金の斤量にて、二十五兩を一鎰といふ。　韓非子五蠹篇に、鎰金百鎰、盜跖不掇と。又た風俗通に、廣卿一見、超孝成王、賜黃金百鎰、白璧一雙。

【百一】（ヒヤクイチ）　百一物、及び百一詩を見よ。

【百二】（ヒヤクニ）　百二關を見よ。

【百三】（ヒヤクサン）　漢書郡國志に、至於孝平、郡國百三、縣邑千四百八十七。

【百五】（ヒヤクゴ）　三月の寒食の節をいふ。　荊楚歲時記に、冬至後、一百五日、爲寒食と。又た韋莊の詩に、一百五日又欲來。

【百六】（ヒヤクリク）　を缺くにより百六公といふ。　張裕の對策に、百問に一寒食の節をいふ。　南史張裕傳に、少與兄讚齊名、湘東王繹、嘗策之百事、裕對欠其六、號爲百六公。　元稹の詩に、初過寒食二百六、店舍無煙宮樹綠。

【百八】（ヒヤクハチ）　百八鐘聲を見よ。

【百千】（ヒヤクセン）　或は百、或は千なり、物の多きことにいふ。　宋史に、福州厚於俸錢、其費無藝、孫覺裁爲中法、使資饗無得過百千と。又た白居易の詩に、霜竹百千竿、櫛波六七畝。

【百萬】（ヒヤクマン）　多數のことをいふ。　國語晉語に、公子夷吾曰、中大夫里克、與我矣、吾命之、以汾陽之田百萬と。又た史記高祖紀に、高祖曰、連百萬之兵、戰必勝、攻必取、吾不如韓信。

【百億】（ヒヤクオク）　諸葛亮の答李嚴書に、吾本東方下士、誤用於先帝、位極人臣、祿賜百億と。又た徐陵の孝義寺碑に、三千世界、百億須彌。

【百種】（ヒヤクシュ）　種種なることをいふ。　梁武帝の白銅鞮の歌に、一香百種。

【百疊】（ヒヤクヂヨウ）　物の百も累なることをいふ。　江淹の文に、石青紅兮百疊、山濃淡兮萬里。

【百般】（ヒヤクハン）　百種に分れ居ることをいふ。　韓愈の詩に、草樹知春不久歸、百般紅紫鬪芳菲と。又た杜牧の初春の詩に、跡去夢一覺、年來事百般。

【百寶】（ヒヤクハウ）　時天雨百寶蓮花、青黃赤白、間錯紛糅と。又た王勃の文に、聖人作、而萬物覩、神功資而百寶用。

【百錢】（ヒヤクセン）　錢一百文をいふ。　漢書景帝紀に、賜諸侯王列侯馬二駟、吏二千石、黃金二斤、庶民月百錢。

【百朋】（ヒヤクホウ）　朋は五貝なり、一說に兩貝なり。　詩經小雅菁菁者莪篇に、錫我百朋と。疏に、漢食貨志、大貝壯貝厚、於俸錢、其費無藝、孫覺裁爲中法、使資饗無得過百千と。又た白居易の詩に、霜竹百千竿、櫛波六七畝。

【百萬】（ヒヤクマン）　多數のことをいふ。　國語晉語に、公子夷吾曰、中大夫里克、與我矣、吾命之、以汾陽之田百萬と。又た史記高祖紀に、高祖曰、連百萬之兵、戰必勝、攻必取、吾不如韓信。

【百億】（ヒヤクオク）　諸葛亮の答李嚴書に、吾本東方下士、誤用於先帝、位極人臣、祿賜百億と。又た徐陵の孝義寺碑に、三千世界、百億須彌。

【百種】（ヒヤクシュ）　梁武帝の白銅鞮の歌に、一香百種。

【百疊】（ヒヤクヂヨウ）　物の百も累なることをいふ。　江淹の文に、石青紅兮百疊、山濃淡兮萬里。

【百般】（ヒヤクハン）　百種に分れ居ることをいふ。　韓愈の詩に、草樹知春不久歸、百般紅紫鬪芳菲と。又た杜牧の初春の詩に、跡去夢一覺、年來事百般。

【百寶】（ヒヤクハウ）　時天雨百寶蓮花、青黃赤白、間錯紛糅と。又た王勃の文に、聖人作、而萬物覩、神功資而百寶用。

【百錢】（ヒヤクセン）　錢一百文をいふ。　漢書景帝紀に、賜諸侯王列侯馬二駟、吏二千石、黃金二斤、庶民月百錢。

【百朋】（ヒヤクホウ）　朋は五貝なり、一說に兩貝なり。　詩經小雅菁菁者莪篇に、錫我百朋と。疏に、漢食貨志、大貝壯貝厚、於俸錢、其費無藝、孫覺裁爲中法、使資饗無得過百千と。又た白居易の詩に、霜竹百千竿、櫛波六七畝。

【百福】（ヒヤクフク）　經大雅假樂篇に、千祿百福と。又た同書魯頌閟宮篇に、降之百福。

【百拜】（ヒヤクハイ）　きをいふ。　叢說數拜するなり、百とは多數なり。　禮記曲禮に、賓數拜、辭、百數、一獻之禮賓主百拜、終日飲酒而不得醉焉。

【百年】（ヒヤクネン）　人の一生をいふ。　杜甫の詩に、百年地僻柴門迥と。注に、邵雍云、百年、猶言一生。

【百篇】（ヒヤクヘン）　尚書の篇數なり。　シの部一（シヨ）經を見よ。

【百戲】（ヒヤクギ）　種植なる演戲をいふ。　百物紀原に、漢元帝葉要曰、百戲起於秦漢、曼衍之戲、後乃有高絙吞刀履火尋橦等也、一云、都盧尋橦、都盧山名、其人善緣竿百戲。

【百丈】（ヒヤクヂヤウ）　舟を引くに用ふる綱なり。　南史朱超石傳に、軍人掠河邊、今南人百丈、南岸、率百丈、有漂度北岸者と。又た通鑑胡三省注に、百丈者、所以挽船、今南人用麻繩、北人以竹爲之、陸游曰、蜀人百丈、以巨竹、四破爲之、大如人臂。（入蜀記九月一日の條に見ゆ）

【百字】（ヒヤクジ）　雕龍に、百字之偶、爭價一句之奇と。又た李洞の詩に、書成百篇字、庭轉殺遺燈と。又た吳融の詩に、瓊瑤一百字、千古見清櫻。

【百軸】（ヒヤクヂク）　書畫軸を箇をいふ。　元好問の詩に、先生愛寶如憎玉、練鵲翔鸞餘百軸。

【百瓷】（ヒヤクサン）　坡題跋に、歐公盛年時、能飲百盞と。又た硯北雜誌に、東坡云、梅聖俞、身長、秀眉、大耳、紅顏、飲酒過百盞、略正坐高拱、此其醉也。

【百穀】（ヒヤクコク）　粱稻菽薤果二十種あり、合せて百之を百穀といふ。　詩經豳風七月篇に、疏爾于茅、宵爾索綯、亟其乘屋、其始播百穀と。又た書經舜典篇に、帝曰、棄黎民阻飢、汝后稷播時百穀と。又た初學記草部に、果楊物理論曰、果者蓏之總名、稻者穀種之總名、菽者果豆之總名、三穀各二十種爲六十、蔬果之實、助穀各二十、凡爲百穀。

【百卉】（ヒヤクキ）　種種の草花をいふ。　詩經小雅四月篇に、秋日凄凄、百卉具腓と。又た張衡の西京賦に、雨雪飄飄、氷霜慘烈、百卉具零と。又た草應物の詩に、山明宿雨霽、風暖百卉舒。

【百藥】（ヒヤクヤク）　種の藥草をいふ。　禮記月令篇に、孟夏之月、麥秀蓋百藥と。又た淮南子時則訓に、麥秀百藥、靡草死。

【百鍊】（ヒヤクレン）　百たびも練りたる金鐵をいふ。　西京雜記に、或絕以百鍊

金、爲ニ彈琴一。昭ニ見指骨一。又た古今注に、吳大帝寶刀三、一曰ニ百錬一、二曰ニ青犢一、三曰ニ漢章一。

【百全】 出典 百事完全なるをいふ。 出處 晉書に、聖人相ニ時而動一、百舉百全と。又た淮南子に、若ニ雷之擊一、不ニ可ニ爲ニ備一、所レ用不レ復故勝、可ニ百全一。

【百拙】 ヒヤクセツ 類義 百事皆拙劣なるをいふ。 出處 晁詠之の文に、欲ニ一宜一、彌嘆ニ百拙一。

【百悔】 ヒヤククワイ 出處 清異錄に、閩士劉乙、嘗乘レ醉與人爭、敍玄、既醒、慙悔、集ニ書籍一、凡因レ酒致レ失、買ニ鬧者一、編以自警、題曰ニ百悔經一。

【百囀】 ヒヤクテン 出處 種種にサエズルをいふ。 出處 劉孝綽の反舌の詩に、孤鳴若レ無、時、百囀似ニ欲吟一。

【百惱】 ヒヤクナウ 類義 種種に心なやますをいふ。 出處 薛季宣の詩に、百惱愁作レ解、群疑鬼敝車。

【百怪】 ヒヤククワイ 類義 多くの怪しきもの。 出處 韓愈の詩に、百怪入ニ我膓一と。又た蘇軾の詩に、蛟龍百怪不ニ敢近一、回風倒レ浪歸無レ蹤。

【百巧】 ヒヤクコウ 類義 種種と巧みにするをいふ。 出處 師友談記に、范蜀公曰、家中子弟、連ニ名百字一、幾ニ乎處一矣、麻、曰、轍有ニ便談一可ニ以一笑一、公曰、何也、百伶、百利、百巧、百窮、必不ニ一取以爲ニ名也一、蜀公爲ニ之掀レ髯大笑。

【百艦】 ヒヤクカン 類義 戰艦百艘をいふ。 出處 晉書に、軸艫千里、前驅不レ過ニ百艦一。

【百艘】 ヒヤクソウ 類義 舟百個をいふ。 出處 漢武故事に、帝作ニ昆明池一、以習ニ水戰一、中有ニ樓船百艘一。

【百鳥】 ヒヤクテウ 類義 百種の鳥をいふ。 出處 吳越春秋に、天美ニ禹德一、而勞ニ其功一、使ニ百鳥迎爲一、民田、大小有ニ差一、進退有レ行、一盛一衰、往來有レ常。

【百花】 ヒヤククワ 類義 百種の花をいふ。 出處 曲江錄に、曲江貴家遊賞、剪ニ百花一、裝爲ニ獅子一、互相送遺と。又た王昌齡の詩に、西宮夜靜百花香。

【百雉】 ヒヤクチ 類義 城の大さなり。杜預云、方丈を堵と曰ひ、三堵を雉と曰ふ、一雉は長さ三丈、高さ一丈なり、淸の魏禧云、雉飛ぶこと三丈にして墮つ、故に三丈を雉といふ。 出處 左傳隱公元年に、都城過ニ百雉一、國之害也と。侯伯の城は方五里、徑三百雉の制なるを以て、其大夫の都城にして三分の一、卽ち百雉を過ぐるは害を爲すと言ひしなり。又た禮記坊記篇に、都城不レ過ニ百雉一と。又た史記孔子世家に、臣無ニ藏甲一、大夫毋ニ百雉之城一。 類義 杜預の解の外、尙數說あり、小學紺珠に云、五板爲ニ堵一、五堵爲ニ雉一、百雉曰ニ城一（公羊傳）一丈爲ニ板一、五板爲ニ堵一（毛詩傳、鄭氏曰、板六尺、八尺爲ニ堵一、三百丈方五百步。（坊記都城不ニ過ニ百雉一注）と。これなり。

【百里】 ヒヤクリ 類義 一縣のこと。 出處 漢書に、明帝曰、郎官出宰ニ百里一（百里才を參看せよ）

【百鼎】 ヒヤクテイ 類義 南越の總稱。 出處 漢書高帝紀に、秦徙ニ中縣之民一、使ニ與ニ百粵雜處一。又た柳宗元の詩に、共來百粵文身地。

【百口】 ヒヤクコウ 類義 一家族のものをいふ。 出處 晉書劇頭傳に、初敦之舉ニ兵也、司空導率ニ羣從一詣ニ闕請一罪、值ニ頭痛一、導呼曰、伯仁、以ニ百口一累ニ卿一、頭直入不ニ顧、既見ニ帝申救甚至、導不ニ知而其痛一之と。又た通鑑唐德宗紀に、杜佑謂ニ李泌一曰、君愼勿ニ出口、吾已密論、用ニ百口一保ニ君矣一と。胡注に、人謂ニ其家之親屬一爲ニ百口一。

【百足】 ヒヤクソク 類義 蟲の名、ムカデなり。 出處 埤雅に、蜈蚣、一名蚰蜒、今俗謂ニ之百足一。

【百體】 ヒヤクタイ 類義 一身の耳目鼻口骨肉血毛表裏大小の次第をいふ、體は次第の義。 出處 禮記樂記篇に、使ニ耳目鼻口、心知百體、皆由ニ順正一と。又た釋名釋形體に、體、節也、骨肉毛血、表裏大小、相次第也。

【百病】 ヒヤクビヤウ 類義 種種の病。 出處 白居易の詩に、右眼昏花左足風、金篦石水用無ニ功一、不ニ如廻念三乘樂一、便得ニ浮生百病空一。

【百一物】 ヒヤクイツブツ 類義 諸種の物の義。 出處 釋氏要覽に、百一物、大概之辭也、薩婆多論云、百物各可ニ著一也。

【百一詩】 ヒヤクイツシ 類義 譏の應璩の作りし詩なり、璩、字は休璉、博學にして、好みて文を屬す、明帝の時、散騎常侍となる、此詩は曹爽の失政を諷譏せしなり。 出處 應璩の百一詩に、下流不可處、君子愼厥初、名高不ニ對著一、易用受ニ毀譽一、前者驅ニ官去一、有ニ人適ニ我閭一、田家無ニ所有一、酌醴焚ニ枯魚一、問ニ我何功德一、三入ニ承明廬一、所以占ニ此土一、是謂ニ仁智居一、文章不ニ經國一、饒飯

無ニ尺書一、用卒稱ニ才學一、往往見ニ欺蠻一、避ニ席跪自陳一、賤子實空虛、宋人遇ニ周客一、慙愧辭レ所如と。又た文選の李善注に、序云、時謂ニ曹爽一曰、公令聞周公魏魏之稱、安知ニ百慮有一失一乎、百一之名、蓋興ニ於此一也。

【百二險】 ヒヤクニケン 類義 天然の地勢險阻にしてふ、古人倍を謂て二と爲す、百二位百倍なりと。案ずるに、秦得ニ百二一といへば、秦は、諸侯に比して百倍の險あるをいふ。 出處 史記高祖紀に、秦形勝之國、帶ニ河山之險一、憑阻千里、持戟百萬、秦得ニ百二焉、地勢便利、其以下兵於諸侯、譬猶ニ居ニ高屋之上一建ニ瓴水一也。

【百五篇】 ヒヤクゴヘン 類義 詩經の篇數なり。 出處 シの部詩（し）經を見よ。

【百六會】 ヒヤクリクワイ 類義 厄運をいふ。 出處 漢書直百六之災阨と。又た漢書音義に、四千五百歲爲ニ一元一、一元之中有ニ九厄一、陽厄五、陰厄四、陽爲ニ旱一、陰爲ニ水一、一百六歲有ニ陽厄一、故曰ニ百六會一。

【百六掾】 ヒヤクリクヱン 類義 司馬晉の時の官吏をいふ。 出處 晉書元帝紀に、辟ニ掾屬百餘人一、時人謂ニ之百六掾一。

【百六公】 ヒヤクリクコウ 百六を見よ。

【百谷王】 ヒヤクコクワウ 類義 江海は百川の集る所なり、猶ほ萬民の天子に從ふが如きなり。 出處 老子第六十六章に、江海所ニ以能爲ニ百谷王一者、以ニ其善下一之、故能爲ニ百谷王一と。又た杜審言の詩に、谷王常不レ讓、深可ニ戒中盈一。

【百花王】 ヒヤククワワウ 類義 牡丹の異稱なり。 出處 北山集に、既全國色興ニ黃香一、底用人家紫與ニ黃一、卻寡駿人稱ニ第一一、至ニ今喚作ニ百花王一（クワの部花王を參看せよ）

【百花魁】 ヒヤククワクワイ 類義 梅花の異稱なり。 出處 書官故事に、宋王曾布衣時、以ニ梅花詩一獻ニ呂蒙正一、蒙正、雪中未ニ聞和羹時一、卽以ニ向ニ百花頭上一開、蒙正曰、此生已安排ニ狀元宰相一也。

【百里命】 ヒヤクリメイ 類義 百里は諸侯の國なり、命は民命なり、一國の政事をいふ。 出處 論語泰伯篇に、曾子曰、可ニ以託ニ六尺之孤一、可ニ以寄ニ百里之命一、臨ニ大節一而不奪也、君子人與、君子人也。

【百鍊剛】 ヒヤクレンカウ 類義 百回も鍛錬せし金の剛なるが如しといふことにて、勇氣の强きに喩ふ。 出處 事類全書に、晉劉琨爲ニ段匹磾所ニ拘、自知必死、爲ニ五言詩一、贈ニ其故吏盧諶一、末云、何意百鍊剛、化爲繞指柔一。

【百結衣】 ヒヤクケツイ 類義 ボロを綴りて作りたる衣。 出處 晉書隱逸傳に、賈威在ニ洛陽一、隱ニ居白社一、得ニ殘絮敗絮一、以自裁、名ニ百結衣一。 類義 淸異錄に、鳳尾袍、桑維翰時未仕、褐衣謂ニ其襤褸穿結類ニ于鳳尾一也。

【百枝燈】 ヒヤクシトウ 類義 上元（陰曆正月十五日）の夜、韓國夫人の高山の上に點ずる百枝の燈樹をいふ。 出處 開元遺事に、韓國夫人、諱ニ百枝燈樹一、堅ニ之高山一、上元夜、點ニ之、光明寧ニ月色一。

【百弓地】 ヒヤクキユウチ イの部一（イツ）弓を見よ、

【百歲後】 ヒヤクサイノチ 類義 人の死するといふことを忌みていふ。 出處 詩經唐風葛生篇に、冬之夜、夏之日、百歲之後、歸ニ于其室一、室は墓なり。又た史記高祖紀に、陛下百歲後、蕭相國卽死、令誰代ニ之一。

【百里才】 ヒヤクリサイ 類義 百里は縣をいふ、縣の長たるべき才をいふ。 出處 三國志に、劉備以ニ龐統一爲ニ耒陽令一、魯肅曰、士元非ニ百里才一、使ニ爲ニ治中別駕一、乃得ニ展ニ其議足一。（百里を參看せよ）

【百壽圖】 ヒヤクジユヰヅ 類義 張燮といふ人の藏幅に、係る一の大いなる壽の字を百字を書き、その中に小き壽の字一百字を書き收めたる圖をいふ、吉祥の意を表したるものなり。 出處 湧幢小品に、御史張燮之家、藏ニ大壽字一幅一、自ニ其始祖一、所ニ遺字一、崇四尺有七寸、楷體黑文、其點畫中皆小壽字白文、一一作ニ別體一、滿ニ百無一同者一、昔庾元威書十條屏風一、作ニ百體書一、今鄴字百體多脫出、而鮮ニ古傳一、然非ニ精書者一、不ニ能據一、此則百壽圖、亦自ニ明以來始行ニ于世一。

【百家姓】 ヒヤクカセイ 類義 書名。 出處 宋の世、吳越王の時、民間にて作りしものにして、諸家の姓を集めたる書なり、我邦往時坊間に行はれし、「名頭」と稱し、源平藤橘を始めとし、多くの姓氏を錄したる本ありしが、これもその類にて、村勢の蒐集の課本なり、陸放翁の詩に、見書冬學閑ニ比鄰一、據案愚儒卻自珍、授ニ雞村學閉ニ門晴一、終年不ニ著面看人一と。自注に、農家十

月に乃ち子を遣して入學せしむ、之を冬學といふ、讀む所雜字百家姓の類、之を村書といふといへり、即ちこの書の宋の時より有りしこと明かなり、昔に宋の姓趙を揭げ、次に錢を揭げ、趙錢孫李、周吳鄭王と、此の如く排列せり、凡そ單姓四百零八にして、複姓三十なり、全文を玆に揭ぐ、曰く、趙錢孫李、周吳鄭王、馮陳褚衛、蔣沈韓楊、朱秦尤許、何呂施張、孔曹嚴華、金魏陶姜、戚謝鄒喩、柏水竇章、雲蘇潘葛、奚范彭郎、魯韋昌馬、苗鳳花方、俞任袁柳、酆鮑史唐、費廉岑薛、雷賀倪湯、滕殷羅畢、郝鄭安常、樂于時傅、皮卞齊康、伍余元卜、顧孟平黃、和穆蕭尹、姚邵湛汪、祁毛禹狄、米貝明臧、計伏成戴、談宋茅庞、熊紀舒屈、項祝董梁、杜阮藍閔、席季麻強、賈路婁危、江童顏郭、梅盛林刁、鍾徐邱駱、高夏蔡田、樊胡凌霍、虞萬支柯、昝管盧莫、經房裘繆、干解應宗、丁宣賁鄧、郁單杭洪、包諸左石、崔吉鈕龔、程嵇邢滿、裴陸榮翁、荀羊於惠、甄麴家封、芮羿儲靳、汲邵糜松、井段富巫、烏焦巴弓、牧隗山谷、車侯宓蓬、全郗班仰、秋仲伊宮、寧仇栾暴、甘斜厲戎、緱武符劉、景詹束龐、葉幸司韶、郜黎薊薄、印宿白懷、蒲邰從鄂、崇黃農鑄輝、卓蘭屠蒙、池喬陰鬱、胥能蒼雙、聞莘党翟、譚貢勞逄、姬申扶堵、冉宰酈雍、郤璩桑桂、濮牛壽通、邊扈燕冀、郟浦尚農、溫別莊晏、柴瞿閻充、慕連茹習、宦艾魚容、向古易慎、戈廖庾終、暨居衡步、都耿滿弘、匡國文寇、廣祿闕東、歐殳沃利、蔚越夔隆、師巩車賓、晁勾敖融、冷訾辛闞、那簡饒空、曾毋沙乜、鞠須豐、巢關蒯相、荀後荊紅、游竺權逯、蓋益桓公、万俟司馬、上官歐陽、夏侯諸葛、聞人東方、赫連皇甫、尉遲公羊、濟濟公冶、宗政濮陽、淳于單于、大叔申屠、公孫仲孫、軒轅令狐、鍾離宇文、長孫慕容、司徒司空、百家姓終と。又た康熙帝の御製に係る百家姓一篇あり、亦玆に揭ぐ、曰く、孔師閔顏、孟席齊梁、高山崔仰、鄭魯梁昌、冉季宗敬、游夏文章、蓋都顓閔、及邵蘇晁、余宗伊傅、何賈孫龐、軒轅皇甫、夏侯殷湯、莘苗鄒尹、華封戚唐、雷俞明濮、桓侯胥匡、阜許司馬、施黃范郎、赫連万俟、鍾離濮陽、燕向王謝、魚勾嚴姜、鑑宜稻粱、禹貢鄒梁、穆宋莊、衡茅諸葛、滑稽東方、黃巢屠暴、石家富彊、程顥刁鼎、廣任安常、尉遲斬寇、宇文魚房、池邊那椰、東諸扶桑、郭汲童馬、武牧狄羊、逢蒙段翳、養弓杭楊、愚敦阮籍、暴勉杜康、查支婆鑾、洪水湛汪、耿慈元白、尤尚歐陽、溫公紀古、左史公羊、劉巫井宿、項單烏江、蕭熊蔣鳳、徐母閥賈、呂伏丁董、申屠晁寅、單于冷淹、寥都樊喬、皮袁柴東、戎戚干戈、蔣鑑過竹、陶宓林柯、鉛東公冶、步舒滑棗、鄧錢鄭印、路米曾柴、時沈郁李、逢茹紅梅、際邢郭鄔、鄂郁酈邸、班羽管鮑、金鞠閻康、馮權賢相、充國成田、蔵仲居察、淳于單談、衛應空谷、韓危蔓關、益賀伍寶、戴郟雙甘、平包臨計、補習陰符、上官權宰、司農司徒、蒼松蔚柏、豐艾融蒲、凌雲鳳翼、蒯熊令狐、翟鑑王周、岑邱沙浦、麻葛歐樊、景從諸葛、霍隆于周、喻儒牛、花盛姚魏、桂宏毛裘、劉通能卜、龔喻儒牛、花盛姚魏、桂宏蓬宮、宰須慎簡、庾倪司空、巖費甄別、奚晉荀龍、潘車廖滿、閔惠懷容、卞和隨雍、秋胡也金、黎閻宰鞠、虞芮屈申、伍威吳越、吉廖朱陳、壽翁彭韻、大叔公孫、郁雍解易、貝業鄭經、終於樂巴、姓終百姓。

【百眼櫥】 黒紙 引き出しを多く設けたる箱笥なり。出處 閒情偶寄に、抽替之設、非但必不可少、且自多格式、以便分門別類、凡所有百眼櫥者、此非取法于物、乃朝廷設官之遺制、所謂五府六部羣僚百執事、各有所居之地、與所掌之簿書錢穀是也、醫者若無此櫥、藥石之名、盈于桑、百用一物、尋一物、則虛費鑑識、無暇療病、止能爲到、舟求劍之人矣、此櫥不但宜于醫者、凡大家富室、皆當用、則而倣之、而學士文人、更宜取法、能以一層分作數層、一格獨爲數格、是者取物之勞、以備作文著書之用、則思之思之、鬼神通之、心無他役、而鬼神得效其靈矣。

【百尺樓】 黒紙 高樓なり。出處 三國誌 忘天下士、沈曰、陳元龍豪氣不除、昔嘗見之、無客主意、久不語、自上大牀、臥使客臥下牀、備曰、求有國士名、今天下大亂、望君憂國忘家、有救世之意、而君求田問舍、言無可采、何緣當與君語、如小人、欲臥百尺樓上、臥君於地、何但上下牀之間耶、表大笑。

【號百萬】 黒紙 軍隊を張るをいふ。出處 漢書高帝紀に、於是號士、且日合戰、是時羽兵四十萬號百萬、沛

公兵十萬號二十萬、力不敵と。顏注に、兵家之法、不言實數、皆增之。

【鞭百草】 黒紙 古、神農氏の百草を鞭して醫藥を創めたるをいふ。出處 搜神記に、神農以薬鞭百草、盡知其平毒寒溫之性、臭味所主、以播百穀、故天下號神農也。

【鬪百草】 黒紙 草合せの戲れなり。出處 歲華紀麗に、端午結彩菖蒲、鬪百草と。又た劉禹錫の詩に、若共吳王鬪百草、不如應是欠西施。出處 七修類稿に、劉詩、鬪草即起于吳王、非也、劉蓋假設辭耳、申公詩說、以茅首爲兒童鬪草嬉戲歌謠之辭、則周初已有此戲。

【長于百】 黒紙 數は一に始まりて百に達するをいふ。出處 漢書律歷志に、紀于一、協于十、長于百、大于千、衍于萬。

【百藥之長】 黒紙 酒の異名なり。出處 漢書食貨志に、夫璽食者之好、鐵田農之本、酒者、酒百藥之長、嘉會之好、鐵田農之本と。酒は將帥の將なり、主といふに同じ。

【百世之師】 黒紙 百世の後まで師法となる人をいふ。出處 孟子盡心下篇に、聖人百世之師也、伯夷柳下惠是也、又た蘇軾の韓文公廟碑に、「而爲百世之師、一言而爲天下法」。

【百舌之聲】 黒紙 百舌は鳥の名、モズなり。出處 淮南子說山訓に、人有多言者、猶百舌之聲、人有少言者、猶不腊之月と。注に、不腊之月、難開閉也。

【百八鐘聲】 黒紙 鐘を鳴らす數をいふ。出處 洪邁の俗考に、鐘聲一百八撞、以應十二月二十四氣七十二候。出處 瓦釜漫錄に、釋氏念珠一百零八、蓋年有十二月二十四氣七十二候、華一歲之義。

【百獸率舞】 黒紙 多くの獸が引き連れて舞ふなり、是れ音樂の徹妙なるを形容する語なり。出處 書經益稷篇に、鳥獸蹌蹌、予擊石拊石、百獸率舞。

【百味飲食】 黒紙 種種の供物をいふ。出處 後漢書 皆悉備有と。又た智度論に、有人云、能以百種羹供養、是名百味、有人言、餅種數五百、其味有百、是名百味、有人言、飲食燒餅、總有百味、有人言、飲食種種備足、故稱爲百味。

【百代文宗】 黒紙 後代永久の文章の本宗なるをいふ。出處 晉書陸機傳に、唐太宗制、遠超枚馬、高躡王劉、百代文宗、一人而已。

【百福莊嚴】 黒紙 三十二相を具するをいふ。出處 法華經に、彩畫作佛像百福莊嚴相。

【百子全書】 黒紙 書名。出處 一大叢書の名、湖北省崇文書局にて刊行す、儒家・兵家・法家・農家・術數家・雜家・小說家・道家の八類に分ちて、その主要なる者百種を彙編す、左に其の目を列す。

○儒家類

孔子家語十卷魏、王肅。孔子集語三卷宋、薛碧。荀子二卷周、荀況。孔叢子二卷漢、孔鮒。新語二卷漢、陸賈。忠經一卷漢、馬融。新書十卷漢、賈誼。鹽鐵論二卷漢、桓寬。新序十卷漢、劉向。說苑二十卷同上。法言一卷漢、揚雄。方言十三卷同上。潛夫論十卷漢、王符。申鑒五卷漢、荀悅。中論二卷漢、徐幹。傅子一卷晉、傅玄。文中子一卷隋、王通。機孟子三卷唐、林慎思。伸蒙子三卷同上。素履子三卷唐、張弧。胡子知言六卷宋、胡宏。薛子道論三卷明、薛瑄。海樵子一卷明、王崇慶。

○兵家類

握奇經一卷風后。六韜三卷周、太公望。孫子三卷周、孫武。吳子二卷周、吳起。司馬法一卷齊、司馬穰苴。尉繚子一卷周、尉繚。素書一卷秦、黃石公。心書一卷漢、諸葛亮。何博士備論一卷宋、何去非。李忠定輔政本末一卷宋、李綱。

○法家類

管子二十四卷齊、管仲。晏子春秋八卷齊、晏平仲。商子五卷秦、公孫鞅。鄧析子一卷周、鄧析。尸子二卷周、尸佼。韓非子二十卷周、韓非。

○農家類

齊民要術十卷後魏、賈思勰。

○術數類

太玄經十卷漢、揚雄。易林四卷漢、焦延壽。

○雜家類

鬼子一卷周、鬼臾。計倪子一卷周、計然。於陵子一卷齊、陳仲子。子華子二卷晉、程本。晏子十六卷宋、晏嬰。尹文子一卷周、

尹文。慎子一卷周、慎到。公孫龍子一卷周、公孫龍。鬼谷子一卷周、失名氏。鶡冠子三卷楚、失名氏。呂氏春秋二十六卷秦、呂不韋。淮南子二十一卷漢、劉安。金樓子六卷梁、元帝。劉子二卷北齊、劉晝。顏氏家訓二卷北齊、顏之推。獨斷二卷漢、蔡邕。論衡三十卷漢、王充。白虎通四卷漢、班固。風俗通十卷漢、應劭。牟子一卷漢、牟融。古今注三卷晉、崔豹。鹽鐵論一卷漢、桓寬。潛夫論十卷漢、王符。抱朴子八卷晉、葛洪。尤倉子一卷梁、庾肩吾。元眞子一卷唐、張志和。天隱子一卷唐、無名氏。无能子三卷唐、無名氏。抱朴子一卷周、慎到。公孫龍子一卷周、公孫龍。鬼谷子一卷周、失名氏。鶡冠子三卷楚、失名氏。呂氏春秋二十六卷秦、呂不韋。淮南子二十一卷漢、劉安。金樓子六卷梁、元帝。劉子二卷北齊、劉晝。顏氏家訓二卷北齊、顏之推。獨斷二卷漢、蔡邕。論衡三十卷漢、王充。白虎通四卷漢、班固。風俗通十卷漢、應劭。牟子一卷漢、牟融。古今注三卷晉、崔豹。鹽鐵論一卷漢、桓寬。潛夫論十卷漢、王符。抱朴子八卷晉、葛洪。尤倉子一卷梁、庾肩吾。元眞子一卷唐、張志和。天隱子一卷唐、無名氏。无能子三卷唐、無名氏。抱朴子一卷周、慎到。公孫龍子一卷周、公孫龍。鬼谷子一卷周、失名氏。呂氏春秋二十六卷秦、呂不韋。淮南子二十一卷漢、劉安。金樓子六卷梁、元帝。劉子二卷北齊、劉晝。顏氏家訓二卷北齊、顏之推。獨斷二卷漢、蔡邕。論衡三十卷漢、王充。白虎通四卷漢、班固。風俗通十卷漢、應劭。牟子一卷漢、牟融。古今注三卷晉、崔豹。鹽鐵論一卷漢、桓寬。潛夫論十卷漢、王符。抱朴子八卷晉、葛洪。尤倉子一卷梁、庾肩吾。元眞子一卷唐、張志和。天隱子一卷唐、無名氏。无能子三卷唐、無名氏。抱朴子一卷周、慎到。公孫龍子一卷周、公孫龍。鬼谷子一卷周、失名氏。呂氏春秋二十六卷秦、呂不韋。淮南子二十一卷漢、劉安。金樓子六卷梁、元帝。劉子二卷北齊、劉晝。顏氏家訓二卷北齊、顏之推。獨斷二卷漢、蔡邕。論衡三十卷漢、王充。白虎通四卷漢、班固。風俗通十卷漢、應劭。牟子一卷漢、牟融。古今注三卷晉、崔豹。鹽鐵論一卷漢、桓寬。潛夫論十卷漢、王符。抱朴子八卷晉、葛洪。尤倉子一卷梁、庾肩吾。元眞子一卷唐、張志和。天隱子一卷唐、無名氏。无能子三卷唐、無名氏。抱朴子一卷周、慎到。公孫龍子一卷周、公孫龍。鬼谷子一卷周、失名氏。呂氏春秋二十六卷秦、呂不韋。淮南子二十一卷漢、劉安。金樓子六卷梁、元帝。劉子二卷北齊、劉晝。顏氏家訓二卷北齊、顏之推。獨斷二卷漢、蔡邕。論衡三十卷漢、王充。白虎通四卷漢、班固。風俗通十卷漢、應劭。牟子一卷漢、牟融。古今注三卷晉、崔豹。鹽鐵論一卷漢、桓寬。潛夫論十卷漢、王符。抱朴子八卷晉、葛洪。尤倉子一卷梁、庾肩吾。元眞子一卷唐、張志和。天隱子一卷唐、無名氏。无能子三卷唐、無名氏。

○小說家雜事類

燕丹子三卷燕、太子丹。玉臯子一卷唐、無名氏。金華子二卷南唐、劉崇遠。

○小說家異聞類

山海經注十八卷晉、郭璞注。山海經圖讚一卷晉、郭璞。山海經補注一卷明、楊慎。神異經一卷漢、東方朔。海內十洲記一卷、同上。洞冥記四卷吳、郭憲。穆天子傳六卷晉、郭璞。拾遺記十卷秦、王嘉。搜神記二十卷晉、干寶。搜神後記十卷晉、陶潛。博物志十卷晉、張華。續博物志十卷唐、李石。述異記二卷梁、任昉。

○道家類

陰符經注一卷漢、張良。關尹子二卷周、尹喜。老子道德經注二卷晉、王弼。道德眞經注四卷元、吳澄。莊子三卷周、莊周。莊子闕誤一卷明、楊慎。列子二卷周、列禦寇。抱朴子八卷晉、葛洪。尤倉子一卷梁、庾肩吾。元眞子一卷唐、張志和。天隱子一卷

【百工五種】 [illegible]諸種の器物を製作する職工と五穀の種子となり。[illegible]歐陽修の日本刀歌に、百工五種與之居、至今器玩皆精巧と。又た漢書伍被傳に、秦使徐福入海求仙藥、多齎金寶童男女三千人五種百工而行と。注に、五種は五穀の種なり。[illegible]日本刀歌、一に司馬光の作ともいふ。[illegible]百工を百一に作れるものあるは誤りならん。或は百一物の義と見るべきか、百一物は前方に見ゆ。

【百發百中】 [illegible]百たび射て百たびとも的に中るなり。[illegible]史記周紀に、楚有養由基者、善射者也、去柳葉百步而射之、百發而百中之、左右觀者數千人、皆曰善射。[illegible]聖人の道の多く缺けたるをいふ。[illegible]韓愈の百孔千瘡、隨亂隨失。[illegible]陳師道の詩に、昔日劍瘡今捕肉、百孔千瘡何事もすべて宜しと。[illegible]何事もすべて宜しと。[illegible]癸辛雜志に、鹽官敎諭黃諫之題桃符板二句云、宜入新年、忽生呵、百事大吉那敎者と。又た遊覽志餘に、忱俗元旦簽、栢枝于柱餅、以大橘承之、謂之百事大吉。

【百舍重繭】 [illegible]百舍を以て一舍として宿するなり。重繭は、足傷つき皮厥して、繭の如きなり。是れ遠路に往くことなり。[illegible]戰國宋策に、公輸般爲楚設機、將以攻宋、墨子聞之、百舍重繭往見公輸般。

【百祿是荷】 [illegible]天より多くの幸福を經商頌玄鳥篇に、殷受命咸宜、百祿是荷。[illegible]詩[illegible]與へらるゝをいふ。[illegible]明の左圭の書名。[illegible]百川は海を學びて海に至るの意に取り、(次條を見よ) 諸書を集めて文學の淵源に至らしむるを旨とす、凡て十集に分ちたり。[illegible]吳永、纂百川學海を輯し、馮可賓、廣百川學海を輯す。

【百川學海】 [illegible]海も川も同く水なり、川は海を學びて流れて止まず、故に遂に海に至る。人の道を學ぶものに譬ふ。[illegible]揚子、法言學行篇に、君子貴遜、善遜者聖人之徒與、百川學海而至于海、丘陵學山而不至于山と。是故に、惡夫言也と。注に、百川も亦海の類にして小なり、故に海を學ぶといふ、百川は動きて息まず、故に海に至る、丘陵は止まりて進まず、故に山に至らず、學者も亦猶ほ是のごとし。

【百里負米】 [illegible]貧くして親に孝養を盡せるをいふ。[illegible]孔子家語、致思篇に、子路嘗曰、昔者由也事二親之時、嘗食藜藿之實、爲親負米百里之外、親歿之後、爲楚大夫、從車百乘、積粟萬鍾、累茵而坐、列鼎而食、雖欲食藜藿、爲親負米、何可得也。

【百折不撓】 [illegible]度失敗しても志を屈せざるなり。[illegible]蔡邕の橋太尉碑に、有百折不撓、臨大節而不可奪之風。

【百獸畏虎】 キの部狐（キツネ）假虎威を見よ。

【百卉含英】 [illegible]多くの花が美事に開くをいふ。[illegible]後漢書馮衍傳に、開歲發春兮、百卉含英。[illegible]後漢書張衡傳に、天地絪縕、百卉含蘊。

【百不失一】 [illegible]決して目的とする所を失はざるをいふ。[illegible]論衡須頌篇に、從門庭、轟堂室之言、什而失九、如登堂闚室、百不失一。

【百馬伐驥】 [illegible]一賢臣にして羣臣之を攻むるに喻ふ。[illegible]管子に、驥之材而百馬伐之、驥必罷矣。

【平章百姓】 [illegible]百姓を平かに明かは平和軍明なり。[illegible]書經堯典篇に、平章百姓、百姓昭明。

【百里而異習】 [illegible]地を過る百里に至れば、已に此と彼と習慣を異にするをいふ、以て風俗習慣の土地によりて別なるを示す。[illegible]吳子春秋に、百里而異習、千里而殊俗。

【百步射柳葉】 百發百中を見よ。

【百三十國寶書】 [illegible]孔子の春秋を作るとき、周の史記を求むるに、百三十の國寶書を得たりといふ。[illegible]公羊傳の疏に、孔子制春秋之義、使子夏等十四人求周史記、得百三十國寶書。

【百聞不如一見】 [illegible]耳にて聞くよりは、目にて見たる方確實なるをいふ。[illegible]漢書趙充國傳に、充國曰、百聞不如一見、兵難論度、臣願馳至金城圖上方略。

【百年三萬六千日】 [illegible]太陰曆一年は三百六十日なり。[illegible]李白の詩に、君三萬六千日、歲歲年年金樂同。[illegible]襄陽歌に、百年三萬六千日、一日須傾三百杯と。又た杜牧の詩に、百年三萬六千日、與子期於局上消。[illegible]李白抱朴子內篇勤求に、百年之壽、三萬餘日耳、幼弱則未有所知、衰邁則歡樂並廢、而除憂病、略消其半、計得百年者、喜樂平和、不過五六十年、顧盼已盡矣。

【百萬胡兒犯大朝】 [illegible]宋人の詩南の春日偶成詩に、百萬胡兒犯大朝、奔南狩北愼逗遛、我非辨得中興事、一點英靈死不消。

【百年通計老時多】 [illegible]唐人の詩の句。[illegible]白居易の春晚詠、懷暨皇甫朗之詩に、艷陽時節又蹉跎、遲暮光陰復若何、一歲年分春日少、百年通計老時多、多中更被愁牽引、少處兼遭病折磨、賴有餘憂君家遺財我狂歌。

【百千萬劫菩提種】 [illegible]唐人の詩の句。[illegible]白居易の鉢塔院如大師の詩に、百千萬劫菩提種、入十三年功德林、若不、聚持僧行苦、將何報答佛恩深、慈悲不、說諸天眼、清淨無、塵幾地心、每歲八關齋九戒、殷勤一戒直千金。

【百花過盡綠陰成】 [illegible]宋人の詩の句。[illegible]蘇軾の新夏感事の詩に、百花過盡綠陰成、漢漢鶯香睡晚晴、病起餘句疎把酒、山深四月結蹄、[illegible]近傳下、詔遇言語、已下餘年見太平、[illegible]主不忘初秋美、小僧惟有涕縱橫。

【百尺竿頭進一步】 [illegible]身は既に百尺の長竿の上に在り、更に一步を進むるなり。既に工夫を盡したる上、更に工夫を加へて上に向ふをいふ。[illegible]傳燈錄に、招賢大師示一偈、百、百丈竿頭須進步、十方世界是全身、[illegible]問只如百丈竿頭、如何進步、師云、朗州山澧州水、[illegible]百尺、傳燈錄は百丈に作れり。然れども秉燭談に此の偈を引て、百尺に作れり、人の字を身の字に作れり。

【行百里者半九十】 [illegible]人は僅か旅行する者は九十里を行き、適に五十里と爲すに足るとの喻にして、事を爲すに始めの易くして、終りの難きに喻ふ。[illegible]戰國秦策に、逸詩を引きて云、行百里者半九十、於此言未路之難。

【百日之勞一日之樂】 [illegible]久しく勞力して一日の歡樂を得るをいふ。[illegible]孔子家語觀鄉射篇に、子貢觀於蜡、孔子曰、賜也樂乎、對曰、一國之人皆若狂、賜未知其爲樂也、孔子曰、百日之勞、一日之樂、一日之樂、非衆所知也と。又た禮記雜篇に見ゆ。

【百工居肆以成其事】 訓義 百穀の職工は、その造作處に在りて、以て業をなす、君子は學に就て以てその道を求む、各その處に就て以て道を研究するをいふ。 出處 論語子張篇に、百工居肆以成其事、君子學以致其道。

【百禮之會非酒不行】 訓義 多くの禮を行ふに當り、酒なければ、其禮行はれざるをいふ。 出處 漢書食貨志に、酒者天之美祿、帝王所以暢四肢、悅顏色、享祀所以福神祇、扶衰養疾、百禮之會、非酒不行。

【百萬買宅千萬買鄰】 訓義 居をトするに、隣を擇ぶべきをいふ。諺へ。 出處 南史呂僧珍傳に、初宋季雅認南蘇郡市宅居僧珍宅側、僧珍問宅價、曰、一千一百萬、怪其貴、季雅曰、一百萬買宅、一千萬買鄰。

【百姓有過在予一人】 訓義 百官過失あれば、百官の過失に非ず、予一人の罪なりと、天子自ら其責を負ふなり。 出處 書經泰誓中篇に、天視自我民視、天聽自我民聽、百姓有過、在予一人、今朕必往。

【百不爲多一不爲少】 訓義 善者は百人ありとも多しとせず、又一人にても少しとせざるをいふ。 出處 南史任昉傳に、幼而聰敏、早稱神悟、四歲誦詩數十篇、八歲能屬文、自製月儀、辭義華美、褚彥回嘗謂遙曰、聞卿有令子、相爲喜之、所謂百不爲多、一不爲少、由是聞摩霄甚。

【百足之蟲至死不僵】 訓義 韓け多きものは、容易に滅亡せざるをいふ。 出處 孔子家語六本篇に、孔子曰、依賢者固不困、依富者固不窮、馬蜈斬足而復行、何也、以其輔之者衆、而蛇曹問の六代論に、夫泉竭則流涸、根朽則葉枯、枝繁者蔭根、條落者本孤、故語曰、百足之蟲、至死不僵、扶之者衆也と。李善注に、魯連子曰、百足之蟲、至斷不僵、扶之者衆也。

【罔弗百姓從己之欲】 訓義 王者專ら己れの欲を制して、以て百姓に從ふべきをいふ、弗は戻るなり。 出處 書經大禹謨篇の語。

【百官總己聽于冢宰】 訓義 子の喪中の事にして、冢宰は、大宰なり、今の總理大臣なり、百官悉く冢宰に諮職の事を聽きて、政を行ひ、天子は政事に預らざるなり。 出處 論語憲問篇に、子張曰、書云、高宗諒陰三年不言、何謂也、子曰、何必高宗、古之人皆然、君薨、百官總己以聽於冢宰三年。

【百戰百勝非善之善者】 訓義 數々戰ふて勝てば必ず人を殺し財を傷り、國に鬬すること多きが故に、善の善なる者に非ざるなり。 出處 孫子謀攻篇に、凡用兵之法、全國爲上、破國次之、全旅爲上、破旅次之、全卒爲上、破卒次之、全伍爲上、破伍次之、是故百戰百勝非善之善者也と。又た鶡冠子武靈王篇に、武靈王問廉頗曰、寡人聞飛語流傳曰、百戰而斷、非善之善者也、不戰而勝、善之善者也。

【百川異源而皆歸于海】 訓義 人物各その趣く所は異なるも、歸する處一なるをいふ。 出處 淮南子に、百川異源、而皆歸于海、百家殊業、而皆務于治。

【百里之海不能飲一夫】 訓義 所謂る所あるの義。 出處 尉繚子に、百里之海、不能飲一夫、三尺之泉、足止三軍渴。

【百里不販樵千里不販糴】 訓義 遠地に往來して商業を營まざるの義。樵は、薪木、糴は、穀を買ふなり。 出處 史記貨殖傳に、百里不販樵、千里不販糴。

【百星之明不如一月之光】 訓義 凡俗百人ありと雖、一賢に及ばざるに喩ふ。 出處 文子に、百星之明、不如一月之光と。又た淮南子に、百星之明、不如一月之光、十牖畢閉、不如一戶之明。

【以百金與搏黍以示兒子兒子必取搏黍矣】 訓義 百金と一握りの黍とを小兒に示せば、搏は一握りなり。 出處 呂氏春秋に見ゆ。

【冰輪】 訓義 月の異稱なり。 出處 蘇軾の詩に、夜半老僧呼客起、雲巖缺處湧冰輪。

【冰山】 訓義 氷は、熱を受くれば直ちに消釋す、因つて權勢の盡き易きに喩ふ。 出處 開元天寶遺事に、楊國忠權傾天下、四方之士爭詣其門、進士張彖者、陝州人也、志氣高大、未嘗低折於人、人有勸彖、令修謁國忠、可圖題榮、彖曰、汝蠢以謂楊公之勢、倚嶽如泰山、以吾所見、乃冰山也、或朝日大明之際、則此山當消、人、爾後果如其言、時人美彖生知幾。

【冰人】 訓義 媒妁人なり。 出處 ケの部月（ゲツ）下氷人を見よ。

【冰語】 訓義 媒妁の言をいふ。 出處 書言故事に、媒曰氷人、媒言曰氷語。（ケの部月（ゲツ）下氷人を參看せよ）

【冰夷】 訓義 河の神の名、馮夷に同じ。 出處 山海經海內北經に、氷夷即河伯也。

【冰室】 訓義 ヒムロ、氷を貯藏する處。 出處 越絕書に、閶門外郭中冢者、闔廬氷室也。

【冰鮮】 訓義 冰ヅケの魚をいふ。 出處 清異錄に、土人餌客氷、街坊擔賣謂之涼冰、鮮魚肆以渫魚謂之冰鮮。

【冰釋】 訓義 ㊀氷の解けたる如く迹を殘さざるをいふ。㊁疑團の解けたるにいふ。 出處 ㊀老子第十五章に、儼兮其若客、若氷之將釋。㊁杜預の左傳の序に、渙然冰釋、怡然理順、然後爲得也。

【冰渙】 訓義 氷のとけちる義、渙は散なり。 出處 閒丘冲の詩に、冰渙川盈。

【冰肌】 訓義 皮膚のツヤクシキをいふ。 出處 莊子逍遙遊篇に、藐姑射之山有神人、肌膚若冰雪、綽約若處子。

【冰笋】 訓義 氷柱をいふ、ツラヽなり。 出處 類書纂要に、義淵淩云、于齋下、日氷笋。 訓義 事物異名錄に、黃庭堅詩、皇後拂壺從銀竹、按銀竹亦謂氷條。

【冰雪心】 訓義 潔白なる心をいふ。 出處 古節鄭吟に、瑤池古冰雪心爲妾作心肝、死者儻復生、剖與良人看と。又た文天祥の正氣歌に、或爲遼東帽、清操厲冰雪。

【冰壺心】 訓義 前條に同じ、冰を玉壺の中に容れたるに喩ふ。 出處 鮑昭の詩に、清如玉壺冰と。又た姚崇の冰壺誡に、冰壺者、清潔之至也、君子對之不忘乎清、 出處 王昌齡の芙蓉樓送辛漸に、洛陽親友如相問、一片冰心在玉壺。

【冰柴聲】 訓義 清苦の名あるをいふ。 出處 書言故事に、王質、王文正公且之廷、以貧爲室、文正爲舍人時、家虛貧、余、贈昆弟過、期不入、乘馬儀之、倘書時、乞米帖、刺石遺親友、雅尙如此、今故所、至有冰柴帖、刺と。注に、柴、黃木也、今黃柴苦藥是也、以此故、但所至處、則有冰清柴苦之聲名、言其聲名若冰柴之清苦也。

【冰壺玉尺】 訓義 氷壺に玉尺を立てたる如く、挺立の鮮明なるに喩ふ。 出處 元史黃溍傳に、溍天資令特、在州縣、唯以清白爲治、月俸弗給、每罷產以佐其費、及升朝、行挺立無所附、足不登鉅公勢人之門、君子稱其清風高節如氷壺玉尺、纖塵弗汙。

【冰壺玉壺】 訓義 氷 壺に滿ち、玉の壺に在るが如く、清冷なることを いふ。 出處 杜甫の詩に、驛之子鳳之鍾、烱如清氷出萬壺、鑑在迎風發璽玉壺。

【冰壺玉鑑】 訓義 氷を壺に入れ玉を鑑とす、これ極めて潔白なる心に喩ふ。 出處 杜甫の詩に、氷壺玉鑑雪爲姿作心肝、死者儻復生、剖與良人看と。又た文天祥の正氣歌に、或爲遼東帽、清操厲冰雪。

【冰肌玉骨】 訓義 梅花の異名なり、隆冬寒氣の中に白き花を開くによりていふ。 出處 竹坡詩話に、氷肌玉骨清無汗、水殿風來暗香滿、此詩爲花忘夫人作と。又た蘇軾の梅花詞に、玉骨那堪瘴霧、冰肌自有仙風、海仙時遣探芳叢、倒掛綠毛么鳳。

【冰姿玉骨】 訓義 前條に同じ。 出處 草芳譜果譜一に、梅、霊壽之耳、冰姿玉骨、世外佳人、但恨無、傾城之笑、耳、出、桂林記。

【冰姿雪魄】 訓義 その部雪（セツ）魄冰姿を見よ。

【冰清玉潤】 訓義 氷の清きが如く、玉の潤へるが如しと、婦德と女耀と、共に人物の優れたるをいふ。 出處 晉書衛玠傳に、玠妻父樂廣、有海內重名、識者以爲、每公冰清、女婿玉潤。

【冰紈純麗】 訓義 深白にして光澤ある紈をいふ。 出處 漢書地理志に、齊俗織作、氷紈綺繡純麗之物と。顏注に、氷謂布帛之細、其已鮮潔宛如氷也、紈素也、純精好也、麗華麗也。

【氷柱雪車】 その部雪(セツ)車 氷柱を見よ。

【氷炭相愛】 氷と炭火と相互に愛するをいふ。氷炭相容れずとの反對なり。出典 淮南子說山訓に、天下莫相憎于膠漆、而莫相愛于氷炭。と。注に、氷得炭則解、炭得氷則滅、其性不相入、故曰相愛。

【氷蠶作繭】 長さ寸なり。出典 拾遺記に、員嶠山有氷蠶、長七寸、黑色、有角有鬚、以綿雪覆之、然後作繭。

【氷炭不相竝】 氷と炭火とは其の性相反す、故に相容れず、以て君子と小人とに喩ふ。出典 楚辭 東方朔七諫傳に、氷炭不可以相竝兮。

【氷炭不同器】 前條に同じ。出典 韓非子 顯學篇に、夫氷炭不同器而久、寒暑不兼時而至、雖反之學、不能立而治。と。又た 淮南子 說山訓に、氷炭不同器。日月不竝明。と。又た後漢書傳 奚傳に、邪正之人不宜共國、亦猶氷炭之不可同器。

【氷炭不言冷熱自明】 人其實ある者は、之を口にせざるも、人之を信ずるをいふ。出典 晉書 王沈傳に、鄭舜周公所以能致忠諫者、以其歎歌之心著也、氷炭不言而冷熱之質自明者、以其有實也。

【馮】 ガツクなり。出典 左傳 僖公五年の杜注に、憑凭之子、未有念慮之慮、而會成、嗜

馮

歎之言、似若有馮者、其言或中或否、博覽之士能懼思之人、參而志之、以爲鑑誡、以爲將來之險、有益於世教。

【馮馮】 ㊀ 滿つる貌。㊁ 盛に憑に作る。出典 ㊀ 詩經 大雅 縣篇に、倒屋馮馮。㊁ 漢書 樂志に、桂華馮馮翼翼。㊂ 太玄經 聚に、百肆馮馮。

【馮河】 ハの部 憑(ヒヨウ)虎馮河を見よ。

【馮怒】 馮は盛なり、滿なり、怒の花きなり。出典 左傳昭公五年に、今君賓焉、使臣將執、君執使臣將、馮怒。と。注に、馮怒、使臣減龍伯之國、使民疲、怒小龍伯之民使短。帝は天帝なり。

【馮夷】 ㊀ 水神なり。出典 ㊀ 容齋四筆に、馮夷、使淸津令、馮夷。と。㊁ 古の善く陰陽を御するもの。出典 ㊀ 楚辭 遠遊篇に、乘鸞駕鳳、從飛廉而上下、馮夷使我乘龍舟、以濟于江、李善注、文選引書 命傳、曰、河伯姓馮名修、斐氏新語、河伯姓馮氏名夷、浴於河中、而溺死、是爲河伯、太公金匱曰、河伯姓馮名夷、字公子、蓋說不同、然皆不經、謂馮夷、前此未有用者。南子曰、馮夷服夷石而水仙、後漢張衡傳注引聖賢冢墓記曰、馮夷者、弘農華陰潼鄉隄首里人、服八石得水仙、爲河伯、又龍魚河圖曰、河伯姓呂、名公子、夫人、姓馮、名夷、唐碑有河侯新祠頌、秦宗權文曰、河伯姓馮、名夷、字公子、蓋說不同、然皆不經之傳也、蓋本於風俗通遊篇、所謂使湘靈鼓瑟令馮夷舞若練、馮夷、前此未有用者。㊂ 淮南子 原道訓に、馮夷、大丙之御也、乘雲車入雲霓。と。許慎注に、皆古之得道、能御陰陽者。出典 山海經に、一の馮夷を水夷に作れり。

【憑陵】 憑は厚なり、滿なり、勢を盛に作る。出典 左傳 襄公二十五年に、介特楚衆、以憑陵我敝邑。と。又た李華の弔古戰場文に、當此苦寒、天假惡胡、憑陵殺氣、以相剪屬。と。庸殺の氣の盛なるをいふ。

【憑億】 多大の義。憑は滿、億は億に、億は億憑億。出典 漢平都侯相碑に、億億憑億。

【苗宋樓藏書志】 書名。清の陸心源は生平珍本古籍を好み、之を採集すること十餘年にして、凡そ十五萬卷の多きに達す、是れ其の儲ふ所の藏書目錄なり、張金吾の藏書志に倣ひて、流別を識し、經史子集の四部に分ちて、其の體略々四庫提要と大差なし。往年其書全部岩崎氏靜嘉堂の有に歸せり。

【愊憶】 胸の塞りて澄れざる貌、一傳に、心愊憶而紛紜。出典 後漢書 馮衍傳に作る。

【溫浴】 溫は浴室なり、沐浴することをいふ。出典 禮記 內則篇に、外內不共溫浴。

【逼迫】 衆の詩に、逼迫見逼迫と。又た 法華經 方便品に、受胎之儀形、世世常增長、薄德少福人、衆苦所逼迫、入邪見稠林。出典 雜の ハ ヘタキをいふ。

【腷膈】 に、腷膈、膈膈、難初鳴、蓋蓋將落向、嗜

屋。

【腷膈】 前條を見よ。

【腷臆】 胸の塞りて澄れざる貌。一に憤憶に作る。出典 李華の弔古戰場文に、地闊天長、不知歸路、寄身鋒刃、腷臆誰訴。

晝

【晝三更】 正午なり、夜三更より轉じて晝三更といふ、詩人の語なり。出典 楊萬里の夏夜月下獨酌に、誰道今年熱、今宵分外淸、竹風秋九夏、淡月晝三更、此景天堂與、無人酒自傾、明朝火鐵上、別作一經營。

【晝如錦】 花の咲き揃へる景色を いふ。出典 李白の月下獨酌の詩に、三月咸陽城、千花晝如錦。

【俾晝作夜】 白晝と雖、夜の如く遊宴して以て政事を視ざるをいふ。出典 詩經 大雅 蕩篇に、式號式呼、俾晝作夜。と。鄭注に、用晝日作夜、不視政事。

【卜晝未卜夜】 日を擇ぶに晝間の善きことは之を卜ひて知りしも、夜間はいかゞなるや未だ卜はざりしといふ義。出典 左傳 莊公二十二年に、飲桓公酒、樂、公曰、以火繼之、齊曰、臣卜其晝、未卜其夜、不敢。と。これ陳の公子完の語なり、桓公は齊侯なり。

【晝生者類父夜生者似母】 晝は陽たり、故に晝生るゝ子は父に類し、夜は陰なり、故に夜生るゝ子は母に似ると いふ。

蛭

【呑蛭】 楚王の故事なり。出典 新書 春秋篇に、楚惠王食寒葱而得蛭、因遽呑之、腹有疾而不能食、令尹入問疾、王曰、吾食葱而得蛭、蛭而行、其誅則庖宰監食者、法皆不立也、蛭而行、其誅則令尹賀曰、天道無親、唯德是輔、王有仁德、病不爲、獲、夕王如當死、故遽呑之、令尹賀曰、天道無親、唯德是輔、王有仁德、病不爲、獲、夕王如蛭出、其久病心腹之積皆愈。と。

汎

【汎愛衆而親仁】 愛して好惡する所なく、而して仁德ある人に近づき親むなり。出典 論語 學而篇に、子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力、則以學文。

博

【博學篇志】 博く書を學びて、然心に志すをいふ。出典 論語 子張篇に、博學而篤志、切問而近思、仁在其中矣。と。朱注に、四者皆學問思辨之事耳、未及乎力行而爲仁也、然從事於此、則心不外馳、而所存自熟、故曰仁在其中矣。

【博通經籍】 博く經書に通達するをいふ。出典 後漢書 馬融傳に、馬融字季長、扶風茂陵人也、將作大匠敞之子、當人美辭貌、有俊才、初京兆摯恂以儒術教授、隱于南山、不應徵聘、名重關西、融從其遊學、博通經籍、恂奇融才、以女妻之。

【博愛之謂仁】 博く愛するを之れ仁といふと 讀むべし、「コレヲ」と讀むときは、代之は助詞なり、「コレヲ」と讀むときは、代

名詞となり、博愛を指す辭の如く聞ゆ、代名詞として用ふるには之の字、謂の字の下に位すべし。出典 韓愈 原道に、博愛之謂仁、行而宜之之謂義。と。

【博學而詳說之】 君子の博學詳說するものは、我が學問の博きを誇るに非ず、反りて以てその至約の處を說かんが爲めなるをいふ。出典 孟子 離婁下篇に、孟子曰、博學而詳說之、將以反說約也。

【博學於文約之以禮】 ハの部 博禮を見よ。

【博觀而約取厚積而薄發】 學問を爲すには、胸中に蘊蓄して、輕輕しくこれを外にあらはし用ゐざるべきをいふ。出典 蘇軾の稼說送張琥に、嗚呼吾子其去、此而務學也哉、博觀而約取、厚積而薄發、吾告子止於此。と。

フ

三 亡

【亡狀】（ボウジヤウ）（漢）無禮といふに同じ。（出）漢書項籍傳に、秦中遇之多亡狀。

【亡賴】（ボウライ）（漢）村の特むべきなきをいふ。（出）史記高祖紀に、始大人常以臣亡賴と。又た同書張釋之傳に、尉亡賴。

【亡是公】（ボウシコウ）（漢）亡は無に通ず。「是の公」といふ義にて、假設の人名なり。（出）ウの部烏（ウ）有を見よ。

四 父

【父母】（フボ）（漢）父と母とをいふ。（出）詩經大雅泂酌篇に、豈弟君子、民之父母。

【父子】（フシ）（漢）親子に同じ。（出）論語子路篇に、父父子子と。又た孟子離婁上篇に、父子有親。（同）孟子離婁上篇に、夫章子、子父責善、而不相遇也。

【父師】（フシ）（漢）父とし師とし尊ぶなり。（出）漢書叙傳に、是所望於父師矣と。顔注に、言爾爲諸父、尊之如師、故曰父師。

【父執】（フシツ）（漢）父の友をいふ。（出）禮記曲禮上篇に、見父之執、不謂之遇、不敢遽、不敢退、不問不敢對、此孝子之行也。疏に、父之執とは、父と志を同ふするものをいふ。後漢書馬援傳に、援爲梁松父執、松貴、拜援林下、援不敢之答一と。又た禮記曲禮下篇に、天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰妻、公侯有夫人、大夫曰孺人、士曰妻、夫人自稱曰小童、邦君之夫人、君稱之曰寡小君、自稱於天子曰老婦、自稱於諸侯曰寡小君、自稱於其君曰小童、自世孫以下自稱曰婢子、子於父母曰、則自名也。

【夫人】（フジン）（漢）一古は人の母を稱していふ。二古は己の母を稱していふ。三諸侯の正妻、又は貴人の妻の稱なり、夫は扶なり、夫を扶くる義に取る。四天子の后をいふ。（出）一史記刺客傳に、進百金者、將用爲夫人慈幃之費、得以交足下之歡心と。注に、韋昭云、古者名二男子一爲丈夫、婦人爲大龜、爲夫人一と。又た韓愈の孟東野墓志に、年逾五十、始以尊夫人之命來集京師、從進士試。二後漢書廉范傳注に、汝南記云、元義謂人曰、此我故婦、非有他過、家夫人遇之實酷。三春秋閔公二年に、夫人子氏薨と。又た禮記曲禮下篇に、天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰妻、庶人曰妻。（夫人稱謂を參看せよ）四周禮考工記玉人に、夫人以勞諸侯一と。注に、夫人、天子夫人。

【夫稅】（フゼイ）（漢）一夫田百畝の稅をいふ。（出）周禮載師の注に、夫稅百畝稅。

【夫役】（フエキ）（漢）人夫の役をするものをいふ。（出）續文獻通考に、掌夫役之事。

【夫人稱謂】（フジンしようい）（漢）諸侯の夫人の名稱なり。（夫人を參看せよ）（出）論語季氏篇に、邦君之妻、君稱之曰夫人、夫人自稱曰小童、邦人稱之曰君夫人、稱諸邦曰寡小君、異邦人稱之亦曰君夫人一と。又た禮記曲禮下篇に、天子之妃曰后、諸侯曰夫人、大夫曰孺人、士曰妻、公侯有夫人、大夫曰孺人、士曰妻、夫人自稱曰小童、邦君之夫人、君稱之曰夫人、稱諸邦曰寡小君、自稱於天子曰老婦、自稱於諸侯曰寡小君、自稱於其君曰小童、自世孫以下自稱曰婢子、子於父母曰、則自名也。

【夫須獨速】（フシユドクソク）（漢）夫須、もと草の名にして、笠に作る、因て直に笠の義とす、獨速は蓑の形容する語なり。（出）詩經南山有臺篇に、「夫須は笠子なり、詩の南山有臺篇に出づ」（篇の下に毛傳の二字を脫す、詩に云、南山有臺、北山有萊と。毛傳に、臺、夫須也、萊、草也とあり。）疏に、夫須、莎草也、可爲蓑笠、古詩に、笠子錢、夫須の句あり。萬里（楊誠齋なり）が句に、尙書親餉老農夫、蓑道夫須繁獨速、孟郊が詩に、脚踏小船頭、獨速蓑、短蓑と。獨速は蓑の形をいふなるべし。（考）廣韻に、「簡俠短隴親とあり。簡俠は獨速に同じ。又た禿速、禿速に作ることあり。葛原詩話後編卷二にも多く例を引て之を言へり。

【夫倡婦隨】（フショウフズイ）（漢）一家相和合するをいふ。（出）關尹子三極篇に、天下之理、夫者倡、婦者隨、牡者鼎、牝者鼎、雄者鳴、雌者鼎、是以聖人制二言行一、而賢人拘之一と。

【夫貴妻榮】（フキさいえい）（漢）妻は其の夫次第にて、榮顯なるをいふ。（出）魏書宗室傳に、詔曰、夫貴於朝、妻榮於室、婦女無定、升從其夫、三潘既啓、王封紀名、亦宜同等。

【夫家之征】（フかのせい）（漢）周の制にて、民の常業なきものに罰金として出さしむるをいふ。（出）周禮に、凡民無職事者、出夫家之征一と。鄭注に、民無常業者、罰之、使出一家力役之征一也。

【夫里之布】（フリのふ）（漢）夫布と里布となり、里は居なり、布は錢なり。夫布は、一夫力役の征なり、里布は、居宅に桑麻を植ゑざる者を罰するなり。（出）孟子公孫丑上篇に、「廛無二夫里之布一、則天下之民皆悅而願爲之氓一矣。

【夫須獨速】（フシユドクソク）（漢）夫須、もと草の名にして、笠に作る、因て直に笠の義とす、獨速は蓑の形容する語なり、因て直に蓑の義とすることあり。（出）詩經南山有臺篇に、「夫須は笠子なり、詩の南山有臺篇に出づ」（篇の下に毛傳の二字を脫す、詩に云、南山有臺、北山有萊と。毛傳に、臺、夫須也、萊、草也とあり。）疏に、夫須、莎草也、可爲蓑笠、古詩に、笠子錢、夫須の句あり。萬里（楊誠齋なり）が句に、尙書親餉老農夫、蓑道夫須繁獨速、孟郊が詩に、脚踏小船頭、獨速蓑、短蓑と。獨速は蓑の形をいふなるべし。（考）廣韻に、「簡俠短隴親とあり。簡俠は獨速に同じ。又た禿速、禿速に作ることあり。葛原詩話後編卷二にも多く例を引て之を言へり。

【夫妻反目】（フさいはんもく）（漢）夫婦相爭ふなり。（出）易經小畜卦に、九三、輿說輻、夫妻反目。

【夫妻本是同林鳥】（フさいもとこれどうりんちよう）（漢）夫婦は林中の鳥の如しと、浮薄なる女の言なり。（出）同じくして宿する法苑珠林に、有人耕田、被蛇噬殺、或詩其家、以語其婦、婦說喻言、譬如飛鳥暮棲高樹、同林共宿、何明旱、起各自飛去、行求飲食、有緣更合、無緣即離、我等夫婦、亦復如是。

【夫婦污穢】（フフをわい）（漢）不潔なる物なり。（出）孟子離婁下篇に、西子蒙不潔、則人皆掩鼻而過之一と。西子は西施なり、越國の美女なり。

【不腆】（フテン）（漢）腆は厚なり、禮の厚からざるをいふ。（出）左傳文公十二年に、不腆敝邑、不足辭也と。又た禮記郊特牲篇に、幣必誠、辭無不腆。

【不穀】（フコク）（漢）穀は善なり、諸侯自ら稱して不穀といふは謙遜して不善と

【夫君】（フクン）（漢）前條に同じ。（出）唐晉祠鐘に、知、夫君初破黑山、奪、如今又獻征南策、早晚備、鐵帶號衣。

【父母】（フボ）（漢）父と母とをいふ。（出）論語子路篇に、父母之遺體、行、父母之遺也。（同）禮記祭義篇に、曾子曰、身也者父母之遺體也、行、父母之遺也、敢不敬乎、居處不莊、非孝也。

【父子】（フシ）（漢）父子とともに、經學に明かにして、品詩論語一敎父師と。（出）漢書王吉傳に、初吉以父任爲郎。

【父任】（フニン）（漢）父の御蔭に因りて官を受くるをいふ。（出）漢書に、孫安世以父任爲郎。

【父母令名】（フボれいめい）（漢）父母の善き譽れをいふ。（出）禮記內則篇に、將爲人子者、出必告、反必面、所游必有常、習必有業、恐父母令名一必聚。

【父母之邦】（フボしほう）（漢）己れの生國をいふ。（出）論語微子篇に、「狂接輿、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而、孔子下而欲與之言、趨而辟之、不得與之言、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不可諫、來者猶可追、已而已而、今之從政者殆而一と。注に、接輿は楚人、姓陸、名通、狂者、世人以其佯狂、故稱之一と。又た禮記內則篇に、將爲人子者、出必告、反必面、所游必有常、習必有業、恐父母令名一必聚。

【父子聚麀】（フシしゆうゆう）（漢）禽獸は禮なし、故に父子牝を共にす、麀牝を麀といふ。（出）禮記曲禮上篇に、夫惟禽獸無禮、故父子聚麀一と。

【父母之遺體】（フボのいたい）（漢）子の身をいふ。（出）禮記祭義篇に、曾子曰、身也者父母之遺體也、行、父母之遺也、敢不敬乎、居處不莊、非孝也。

【父子經明行脩】（フシけいめいこうしう）（漢）父子ともに、經學に明かにして、品詩論語一敎師と。（出）漢書王吉傳に、初吉以父任爲郎。

【父子之間不責善】（フシのかんふせきぜん）（漢）父と子の間には善を責め求むるを爲さざるをいふ。（出）孟子離婁上篇に、夫章子子父責善、善而不相遜也、責善朋友之道也、父子責善、賊恩之大者。

【父母愛之喜而不忘】（フボあいしきこしてわすれず）（漢）南親が之を愛すれば、子たるものは喜びて忘れかねるをいふ。（出）孟子萬章上篇に、萬章曰、父母愛之、喜而不忘、父母惡之、勞而不怨、然則舜怨乎。（同）これ萬章が古語を引きたるにて、禮記祭義篇に此語あり、唯く下句を僅而無怨に作れり。

【父母有疾雖不可爲無不下藥之理】（フボいうしつすいふかためなきしたくすりのり）（漢）親の身に疾ありて、敢みなきも、藥を勤めずして打ち捨て置くの道理なし。（出）宋史文天祥傳に、元丞相脩羅怒曰、「君以存二宗社一、存一日、則盡二臣子一日之責、何功之有、曰既知其不可、何必爲、天祥曰、父母有疾、雖不可爲、無不下藥之理、盡吾心焉、不可救則天命也、今日天祥至此、有死而已、何必多言。

【父母唯其疾之憂】（フボゆいそしつのうれい）（漢）父母の子を愛するの心至らざるなし、惟其の疾病あらんことを恐るる（朱注の說に據る）（出）論語爲政篇に、孟武伯問孝、子曰、父母唯其疾之憂。

【父子之間不責善】（フシのかんふせきぜん）（漢）父と子の間には善を責め求むるを爲さざるをいふ。（出）孟子離婁上篇に、夫章子子父責善、善而不相遜也、責善朋友之道也、父子責善、賊恩之大者。

【父母愛之喜而不忘】（フボあいしきこしてわすれず）（漢）南親が之を愛すれば、子たるものは喜びて忘れかねるをいふ。（出）孟子萬章上篇に、萬章曰、父母愛之、喜而不忘、父母惡之、勞而不怨、然則舜怨乎。（同）これ萬章が古語を引きたるにて、禮記祭義篇に此語あり、唯く下句を僅而無怨に作れり。

【夫婦】（フフ）（漢）夫婦は林中の鳥の如しと、浮薄なる女の言なり。（出）同じくして宿する法苑珠林に、有人耕田、被蛇噬殺、或詩其家、以語其婦、婦說喻言、譬如飛鳥暮棲高樹、同林共宿、何明旱、起各自飛去、行求飲食、有緣更合、無緣即離、我等夫婦、亦復如是。

【夫稱】（フしよう）（漢）王維の詩に、夫婦輕薄兒。

いふなり。出處禮記曲禮下篇に、於内自稱曰不穀、於外自稱曰王老と。又た老子第三十九章に、貴以賤爲本、高以下爲基、是以侯王自稱孤寡不穀、此其以賤爲本邪と、又た同書第四十二章に、人之所惡、唯孤寡不穀、而王公以爲稱。

【不仁】 意義 ㊀仁の德なきをいふ。㊁手足痿痺（シビレル）するをいふ。出處 ㊀左傳文公三年に、仲尼曰、臧文仲、其不仁者三、不知者三、下展禽、廢六關、妾織蒲、三不仁也、作虛器、祭逆祀、祀愛居、三不知也。㊁後漢書に、班超妹昭以兄老、西域請命、超還漢土、上書云、兄年七十、兩手不仁と。又た康熙字典に、方書手足痿痺爲不仁。

【不忠】 意義 忠義を守らざるものをいふ。出處 荀子に、人臣不忠也。

【不孝】 意義 父母に對し心力を盡し養はざるをいふ。出處 孝經五刑章に、子曰、五刑之屬三千、而罪莫大於不孝。

【不道】 意義 道義に背くをいふ。出處 左傳僖公二年に、乃使荀息假道於虞、曰、虞爲不道、入自顚軨、伐鄍三門、滅之既病、則亦唯君故、今虞爲不道、保於逆旅、以侵敝邑之南鄙、敢請假道以請罪于虞。

【不德】 意義 道德に背くをいふ、又た身に德なきをいふ。出處 史記始皇紀に、以重吾不德也。

【不才】 意義 ハタラキの無きなり。出處 左傳成公三年に、楚子送黃荀罃曰、子其怨我乎、對曰、二國治戎、臣不才不勝其任、以爲俘馘と。又た孟浩然の歳暮歸南山詩に、北闕休上書、南山歸耕田、不才明主棄、多病故人疎、白髮催年老、青陽逼歲除、永懷愁不寐、松月夜窓虛。

【不直】 意義 正直ならざるなり。出處 孟子滕文公上篇に、不直則道不見、我且直之。

【不恪】 意義 不敬のこと、恪は敬なり。出處 左傳に以警不恪。

【不法】 意義 法則に違ふものをいふ、出處 北魏書に、舉吉牧守之不法。

【不經】 意義 常の法を用ゐざるをいふ。出處 左傳襄公二十六年に、夏書曰、與殺不辜、寧失不經。此の語また書經大禹謨篇（僞古文）に見ゆ。

【不軌】 意義 國家の法を守らざるなり。出處 史記淺興以來諸侯年表に、大者叛道、小者不軌于法、以危其命と。又た漢書ト式傳に、此非人情、不軌之臣、不可以爲化而亂法。

【不敏】 意義 物事に明かならぬなり。出處 論語顏淵篇に、回雖不敏、請事斯語矣と。又た戰國策に、寡人不敏と。又た孝經開宗明義章に、參不敏、何足以知之と。參は曾子の名なり。

【不佞】 意義 ㊀口なきなり。㊁不才なり、謙辭として用ふ。出處 ㊀論語憲問篇に、雍也仁而不佞。㊁左傳昭公二十年に、寡人不佞と、又た國語晉語に、夷吾不佞。

【不君】 意義 君たるの道を失ふなり。出處 左傳宣公二年に、晉靈公不君と。又た論語顏淵篇に、君不君、臣不臣。

【不選】 意義 ㊀檢束なき驕慢なる者をいふ。㊁選は快なり、不選は滿足せざるをいふ。出處 ㊀張衡の思玄賦に、遇九皐之介鳥兮、怨素質之不遇。㊁左傳隱公十一年に、鬼神實不遇、于許君と。又同書成公十三年に、稼公是以不克、遇志於我。

【不淑】 意義 ㊀人の死するをいふ。㊁生き別れなり。㊂失德をいふ。㊃國の亡ぶるをいふ。出處 ㊀禮記に、如何不淑。㊁人の不賢なるをいふ。有蕩篇に、遇人之不淑矣。㊂詩經王風中谷有蓷篇に、子之不淑、云如之何。㊃逸周書に、王乃升汾之阜、以望商邑、曰、嗚呼不淑。㊄韓愈の對禹問に、傳之子而當不淑則奈何。

【不祥】 意義 吾詳ならざるなり。出處 老子第三十一章に、夫佳兵、不祥之器。

【不遜】 意義 傲慢にして人に下らざること、遜は孫と通ず。出處 論語述而篇に、奢則不遜、儉則固、與其不遜也、寧固と。又た同書陽貨篇に、子貢曰、惡不孫以爲勇者、惡訐以爲直者。

【不天】 意義 天の祐くる所ろとならざることをいふ。出處 左傳に、孤不天不能事君。

【不享】 意義 前條に同じ、諸侯の朝享せざるをいふ。出處 史記五帝紀に、

賓用干戈、以征不享。

【不庭】 意義 王庭に來朝せざるものをいふ。出處 詩經大雅韓奕篇に、榦不庭方、以佐戎辟と。又た左傳隱公十一年に、以王命討不庭、註 周官篇に、惟周王撫萬邦、巡侯甸、四征弗庭、綏厥兆民。

【不然】 意義 命を用ゐざるものをいふ。出處 左傳莊公二十四年に、征伐以討其不然と。杜注に、不然、不用命。

【不齒】 意義 人と列を同くせざる義なり。出處 左傳隱公十一年に、寡人若朝於蔡、不敢與諸任齒。

【不食】 意義 物を食はざることをいふ。出處 史記灌夫傳に、不食欲死。

【不借】 意義 草履なり。その說紛紛一に言、其價賤不須借也といへり。又た儀禮喪服の注に、繩菲、今時不借也と。疏に、漢時謂之不借者、此因屨不得從人借、亦不得借人也と。これ皆人に借らずといふ義に取れり。通雅には、不を以て發聲とせり、云ふ不爲發聲、如夫褐之夫、借與鶴膝錯通、屨、周禮玉藻注、有薄借藻、即不借と。出處 古今注に、漢文帝履、不借、以觀人、又た齊民要術に、冬月令、民作不借と。又た陸游の詩に、穿林雙不借、汲谷一軍持。參考 字詁に、不借草履名、按齊民要術、乃作不憤、初以爲其字有誤、諦思之、當以不惜爲正、蓋因此物極賤、雖屨泥濕地、亦不惜之、故以爲名、乃知字作不借、誤久矣、謂不須假借、義殊無謂と。又云不借見釋名、齊人云、榦脚曾把齒、壓貌也、方言、麻作者、謂之不借、說文不借蔗、古今注不借者、草履也、漢文帝履不借、觀周禮玉藻注、有薄借藻、儀禮菲注、今時不借也と。承吉按、不借者、乃薄蔗耳、若不得從人借、亦不得借人也、此俗、且亦聲義本之、承吉は字詁の著者。

【不幸】 意義 死去なり。出處 漢書昭帝紀に、有不幸者、嗣以中牢、註 これ論語の不幸短命死の語より來りしものなり。

【不幸】 意義 罪なき者なり。出處 孟子公孫丑上篇に、行一不義、殺一不辜、而得天下、皆不爲也。（不辜を參看せよ）

【不遇】 意義 不仕合なり。出處 トの部不遇時（トキ）を見よ。

【不器】 意義 クの部君子不器を見よ。

【不羣】 意義 羣衆を離れて超出するをいふ。出處 漢書十三王傳贊に、夫惟大雅卓爾不群、河間獻王近之矣。

【不決】 意義 決斷のならぬこと。出處 六韜に、有好謀而不決者。

【不次】 意義 順序によらず、俄に登庸せらるをいふ。出處 漢書東方朔傳に、待以不次之位と。顏注に、不拘常次、言超擢也。

【不敵】 意義 人の敵する能はざる威力をいふ。出處 荀子に、以不敵之威、輔人之道。

【不咸】 意義 吾と心を同一にせざるものをいふ。出處 左傳僖公二十四年に、周公弔二叔之不咸と。杜注に、咸、同也。

【不通】 意義 貧人をいふ。出處 論衡別通篇に、通人、猶富人、不通者、猶貧人也、通人胸懷百家之言、不通者、空讀無一條之語。

【不弔】 意義 ㊀猶ほ不仁といふがごとし。㊁哀閔の辭なり、天の弔恤する所とならざるをいふ。出處 ㊀左傳襄公十三年に、君子以吳爲不弔と。又た同十四年に、有君子以吳爲不弔と。㊁詩經小雅節南山篇に、不弔昊天と。又た書經に弗弔、天降喪于殷と。又た孔子家語終記篇に、昊天不弔。

【不律】 意義 サの部三（サンす）不律を見よ。

【不惑】 意義 ㊀道理を知ることの明かなるをいふ。㊁四十歲のことなり。出處 ㊀論語子罕篇に、孔子曰、知者不惑、仁者不憂、勇者不懼。㊁陶潛の詩に、行行向不惑、流留遂無成と。又た黃滔陳黯集序に、方起于鄉閭、求試貢闈、已過不惑之年矣。參考 シの部志（シ）學を見よ。

【不奠】 意義 不測の禍なり。出處 詩經大雅抑篇に、用戒不奠と。又た左傳桓公十七年に、壓場之事、慎守無一、而備其不奠。

【不平】 意義 平は常なり、常を失へるを不平といふ、人の喜怒哀樂等種種の感情を起す、これ平ならざる」なり、

されど世間多くは物の意に滿たざるときに限り用ふ。【出處】莊子列禦寇篇に、以不平二平一其平一也不平。又た韓愈の送孟東野序に、大凡物不得二其平一則鳴。

【不審】【意義】審は詳なり、熟究なり、即ち詳悉熟究せざるの義。【出處】戰國策に、不レ審君之聖孰與堯也。

【不快】【意義】一意に可ならざることあるをいふ。二疾あるをいふ。【出處】一戰國策に、蔡澤入説二秦昭侯一、應侯不レ快。二後漢書華陀傳に、體有二不快一、起作二禽之戲一、怡然汗出と。又た三國魏志華陀傳に有二士患二體中不快一、詣二華陀一、陀曰、君疾當二破腹取一之。

【不營】【意義】資財乏くして限數なきをいふ。【出處】漢書貨殖傳に、家亦不レ營。

【不肖】【意義】不才の人をいふ、人は天の生ずる所なり、故に天に似ざるを不肖といふなり。餘論を見よ。【出處】中庸第四章に、子曰、道之不レ明也、我知之矣、賢者過レ之、不肖者不レ及也と。又た史記五帝紀に、堯知二子丹朱之不肖一不レ足レ授二天下一。【餘論】不肖を以て天に似ずといふ義に解するは、下に記せる諸條を見て之を明にすべし。漢書刑法志に、人肖二天地之貌一と。注に、庸妄之人謂二之不肖一、言二其狀貌無一所二象似一也。又た列子楊朱篇に、楊朱曰、人肖二天地之類一、稟二五常之性一と。注に、肖、似也、類同。除陽篇に、性稟二五性一也。又た論衡自然篇に、問曰、人生二於天地一、天地無レ爲、人稟二天性一者、亦當二無一爲一、兩有爲何也、曰、聰睿純遲之人、稟二天氣一多、故能則レ天自然無爲、稟二氣薄少一、不レ達二道德一、不レ似二天地一、故曰二不肖一、不肖者不似也、不レ似二天地一、不レ類二聖賢一、故有爲也。

【不意】【意義】不慮に同じ。【出處】孫子始計篇に、攻二其無一備、出二其不意一と。又た戰國策に、卒起二不意一、盡失二其度一。

【不盡】【意義】我邦の富士山なり。【出處】大明一統志に、富士山曰二之不盡一。

【不足】【意義】意に滿たざるなり。【出處】論語顏淵篇に、百姓不レ足、君孰與足。

【不動】【意義】五大明王の中尊なり、大日如來の化身なりといふ。【出處】大日經卷二に、薄伽梵爲二息一切障一故、住二於火王三昧一、說二此大摧障聖者不動主眞言一。

【不騰】【意義】アの部不レ興（アガラ）を見よ。

【不拔】【意義】豈乎として拔くべからざること。【出處】宋史に、崇奬維持、以成二不拔之基一。

【不屈】【意義】人に對して屈伏せざるをいふ。【出處】唐書に、田承嗣據二有魏兎一、郭子儀遣レ使至レ魏、承嗣西望拜曰、玆膝不レ屈、於人久矣、今爲レ公拜。

【不耦】【意義】不幸にして世間に合はざるをいふ。【出處】漢書雋去疾傳に、諸宿將常留落不耦。

【不實】【意義】庸實ならざるをいふ。【出處】漢書王莽傳に、費民不レ實。

【不時】【意義】時ならぬをいふ。【出處】漢書賈捐之傳に、此皆不時之物。

【不吉】【意義】吉祥ならざること。【出處】晉語に、勝而不レ吉。

【不順】【意義】順當ならざること。【出處】史記武帝紀に、天下有二不順者一、責帝從而征之。

【不用】【意義】用にならぬをいふ。【出處】孫子始計篇に、兵、詭道也、故能而示二之不能一、用而示二之不用一。

【不易】【意義】萬代も變らざるをいふ。【出處】莊子天道篇に、上必無爲而用二天下一、下必有爲、爲二天下用一、此不易之道也。

【不類】【意義】不善なること、類は善と訓ず。【出處】晉書元帝紀に、抗明威、以儆二不類一。

【不淨】【意義】濟からざるをいふ。【出處】世說に、居心不淨。

【不日】【意義】一日限の遠からざるをいふ。又た期日を設けざるをいふ。【出處】一詩經大雅靈臺篇に、營二始靈臺一、經二之營一之、庶民攻二之一、不レ日成レ之。二詩經邶風終風篇に、終風且曀、不レ日有曀。【餘論】一の解、數說あり、鄭箋に云、不レ殿二期日一而成レ之と。國語楚語に、此詩を引く、其の韋注に、不レ程レ課以期二日一、と。嚴粲云、不二多日一也と。余傳に、不レ終レ日也。

【不學】【意義】學問せぬものをいふ。【出處】國語晉語に、唯不學也。

【不覺】【意義】知り得ぬこと。【出處】世說に、不覺胸自屈。

【不乙】【意義】凡そ書を讀みて筆を以て其に書簡の末尾に不乙と書するは意の未だ盡きざるをいふなり。【出處】漢書東方朔傳に、朝初上書、人主從二上方一讀レ之、止曰二乙、其處讀三月乃盡。

【不宜】【意義】書牘の末尾に記する語なり。【出處】文選楊德祖の答二臨淄侯一書に、造次不レ能二宜備一と。又た香祖筆記に、宋人書簡以レ牘與レ卑曰二不具一、以レ卑上レ尊曰二不備一、朋友交誼曰二不宜一、見二東軒筆錄一。今人多不レ辨、然三字分別殊亦未レ解。

【不備】前條に同じ。

【不具】不宜に同じ。

【不壹】【意義】德の二三にして終始一ならざるをいふ。【出處】左傳に、不致二其無一成德一、是以宜レ之懲二不壹一。

【不祿】【意義】一士の死をいふ、士は祿を終へざる譏に取りて、その死をいふ。二大夫の天死するをいふ。三諸侯死すれば薨ずといふべきを、他國に告ぐるときに、謙遜していふ名稱とす。【出處】一禮記曲禮下篇に、人の階級に因つて死の名稱の異なるあるを述べて、士曰二不祿一と。二禮記曲禮下篇に、壽考曰二卒一、短折曰二不祿一と。大夫老て死すれば大夫の稱に從ひ、少にして未だ大夫とならずして死すれば、士の稱に從ふなり。三禮記に、君訃於他國之君、曰寡君不祿、敢告於執事。

【不朽】【意義】死すとも朽ち滅ぶることなき立レ德を見よ。【出處】タの部太（タイ）上をいふ。

【不死】【意義】人の死せざるをいふ。【出處】山海經に、不死民、在二其東一、其爲レ人黑色、壽不レ死、一曰在二穿匈國東一。

【不諱】【意義】一君父の名を諱み避けざるをいふ。二直言して諫むること。【餘論】不可諱の略語なり。イの部不レ可諱（イカラズ）を見よ。【出處】一禮記曲禮上篇に、詩書不レ諱、臨レ文不レ諱。臨文（ブン）不レ諱を參看せよ）二楚辭卜居篇に、寧正言不レ諱、以危二身乎一。三後漢書桓榮傳に、如有二不レ諱一、食粥、一日食二不托一と。出處五代史李茂貞傳に、一日食二不托一と。又た諸田錄に、唐人謂二湯餅一爲二不托一。

【不豫】【意義】一心に悅びざるなり。又た樂まざるをいふ。【出處】二孟子樂惠王下篇に、吾王不レ豫、吾何以助と。又た公孫丑下篇に、夫子若有二不豫色一、然。三書經金縢篇に、王有レ病弗レ豫。

【不若】【意義】ちゑ妖怪をいふ、若は、順なり、即宜公三年に、民入二川澤山林一、不レ逢二不若一。【餘論】左傳滅ぜざるをいふ、ヲトラズと訓ず。【出處】岑參の詩に、二人事二慈母一、不レ弱二古老菜一。

【不弱】【意義】我國の富士山なり。【出處】ハの部博（ハク）山を見よ。

【不二山】

【不毛地】【意義】土地に五穀草木を生ずるは、猶ほ身體に毛を生ずるがごとし、故に不毛地は、瘠磽の地をいふ。【出處】史記儒林傳に、不レ絕二其祀一、錄二不毛地一と。又た公羊傳宣公十二年に、君如勢、此喪人、錫之不毛之地と。何休の注に、墝埆不レ生二五穀一曰二不毛一。

【不急官】【意義】急務ならざる官職をいふ。【出處】漢書昭帝紀に、日者者レ用鞀二不急官一。

【不如意】【意義】自分の意に思ふ如くならざるなり。【出處】三國魏志曹爽傳に、萬一有レ不レ如レ意。

【不恤緯】リの部蓼（リ）不レ恤レ緯を見よ。

【不二價】アの部無二二價（アタヒ）の題語を見よ。

【不繫舟】ウの部若不レ繫（ツナカ）舟を見よ。

【不虞譽】ハの部不レ虞（ハカラ）譽を見よ。

【不知足】【意義】其分限に安んじて足ることを知らざるもの。【出處】道教經に、雖二處天堂一、亦不レ稱レ意、不知足者、雖富而貧。

【不思議】【意義】不可思議の略語なり。【出處】維摩經序に、此衆說、皆不思議之本也。

【不如歸】【意義】杜鵑（ホトトギス）の鳴く聲、不如歸去（今の支那音にてはブルークイチュイ）と聞ゆる故に、杜鵑のことをいふ。【出處】蜀王本紀に、爲二蜀望帝淫二其臣鱉靈妻一、乃禪レ位亡去、時此鳥鳴、故蜀人見二杜鵑鳴一而悲二望帝一、其鳴如レ曰二不如

歸去と。又た蘇軾の詩に、身無啼鳥不如歸と。又た范成大の詩に、杜鵑終勸不如歸と。又た留靑日札に、子規、其聲曰歸去了と。

【不成人】〔意義〕不具の人をいふ、因て禮を知らざるものに喩ふ。〔出處〕禮記禮器篇に、禮也者、猶體也、體不備、君子謂之不成人。

【不世出】〔意義〕世に稀れに有るの義なり。〔出處〕淮南子泰族訓に、夫欲治之主不世出と。又た史記淮陰侯傳に、功無二於天下、而略不世出者也。又た韓愈の與于襄陽書に、側聞閣下抱不世出之才。

【不倒翁】〔意義〕紙にて老翁の坐せる形體を作り、その中を空虛にして、臀部に泥土を實てて、之を投ずるも、倒れざらしむ、我邦にて「起き上りこぼし」といふ玩具なり。〔出處〕陔餘叢考に、兒童嬉戲有不倒翁、糊紙作醉漢狀、虛其中而實其底、雖按捺旋轉不倒也、吳偉業集中有詩、考之摭言、則唐人已有此物、名酒胡子、乃勸酒具也、盧汪連舉不第、賦酒胡子長篇以寓意、序曰、巡觴之胡、聽人旋轉、所向者舉杯、頗有意趣、然傾倒不定、緩急由人、不在酒胡也、乃爲之作歌、按此則其形製與今所謂不倒翁者正相似也、特其名不同耳と。又た通俗編に、捕醉仙の條あり、云ふ、酒譜、酒令有捕醉仙者、爲偶人轉之以指席者、墨莊漫錄、飲席、刻木爲人、而銳下、置之盤中、左右欹側、僛僛然、如舞狀、久之力盡乃倒、視其傳籌所至、酬之以杯、亦謂之勸酒胡、按、俚俗所謂、不倒翁蓋源于此。

【不凡子】〔意義〕尋常ならざる子といふこと。〔出處〕汝南先賢傳に、薛勤爲郡功曹、陳蕃、字仲舉、年十五、爲父齎書詣勤、勤願而異之、明日勤造焉、仲舉父出迎、勤曰、足下有不凡子、吾來候之、不從卿也、言論終日。

【不夜城】〔意義〕㈠地名なり、夜、太陽出でて、晝の如き義に取れり。㈡燈火の多きを形容していふ。㈢行燈（アンドウ）の異名。〔出處〕㈠三齊略記に、不夜城、在陽邑東南、蓋古有日夜出、此城以不夜名、異之也。㈡蘇廷の廣達樓下夜侍酺宴應制の詩に、棲鶯絕勝宜春苑、燈火還同不夜城。㈢齊燕に、今之燈、亦謂不夜城。

【不脂戶】〔意義〕戶に油を塗らざるをいふ、人の言語少なきに喩ふ。〔出處〕淮南子說山訓に、人有多言者、猶百舌之聲、人有少言者、猶不脂之戶也。

【不退轉】〔佛〕〔意義〕佛道修行の過程に於て、既に得たる功德を決して、退失することなきをいふ。〔出處〕維摩經佛國品に、已能隨順轉不退轉輪と。注に、肇曰、無生之道、無有得而失者、不退也、流演圓通、無繫于一人、輪也、諸佛既轉此輪、諸大士亦能隨順而轉之、別本云、轉不退轉法輪、什曰、法輪無生忍也、以輪授物、物得此輪、故名轉授者得不失、名不退轉、自乘轉進、亦名爲轉也。

【不刊之書】〔意義〕刊は削なり、不刊は猶は不朽のごとし、永く世に傳はりて滅びざる書籍なり。〔出處〕劉歆の答揚雄書に、懸諸日月、不刊之書と。又た杜預の左傳集解序に、左丘明受經於仲尼、以爲經者不刊之書也と。又た字彙に、揚愼曰、劉歆答揚雄、懸諸日月、不刊之書、言不可削除也、今俗誤作剞梓之用、各處鄉試序多云、刊其文之佳者若干篇、張睿甫曰、刊字亦可用、刊其字外之餘木而後字成、故剞字謂之刊、猶遂官而謂之除也。

【不死之藥】〔意義〕人が之を飮めば、永久に死せずといふ仙藥なり。〔出處〕史記封禪書に、蓬萊方丈瀛州三神山在渤海中、諸仙人及不死之藥皆在焉と。又た李白の詩に、安得不死藥、高飛向蓬瀛。〔又〕韓非子說林篇に、有獻不死之藥于荊王者、中射之士、奪而食之、王欲殺之、中射之士曰、客獻不死之藥、臣食之而王殺臣、是天藥也、乃不殺。この事又た戰國策・列子・孔叢子等に見えたり。

【不死之樹】〔意義〕枯死せざる木をいふ。〔出處〕博物志に、員丘上有不死之樹、食之乃壽。

【不變之法】〔意義〕永久、變ぜざる法則をいふ。〔出處〕尹文子に、不變之法、君臣上下是也。

【不急之察】〔意義〕急ならざる事を察するをいふ。〔出處〕荀子天論篇に、無用之辯、不急之察、棄而不治、若夫君臣之義、父子之親、夫婦之別、則日切磋而不舍也。

【不測之淵】〔意義〕危ふくして測られざる深淵なり。〔出處〕史記袁盎傳に、陛下從代乘六乘傳、馳不測之淵。

【不食之地】〔意義〕耕作の成らざる地をいふ。〔出處〕禮記檀弓上篇に、成子高曰、我死則擇不食之地而葬我焉。

【不羈之才】〔意義〕非凡の才ある士をいふ、才識衆に超えて羈束すべからざる義なり。〔出處〕漢書司馬遷傳に、少負不羈之才。〔用例〕鄒陽の獄中上梁王書に、使不羈之士與牛驥同皁。

【不言之敎】〔意義〕老莊の無爲自然の敎をいふ。〔出處〕老子第四十三章に、天下之至柔、馳騁天下之至堅、無有入無閒、吾是以知無爲之有益、不言之敎、無爲之益、天下希及之。

【不肖之主】〔意義〕愚なる君なり。（不肖を參看せよ）。〔出處〕論衡福虛篇に、案、惠王之呑蛭、不肖之主也、有不肖之行、天不祐也。

【不肖之父】〔意義〕愚なる父なり。〔出處〕孔子家語七十二弟子解に、冉雍生於不肖之父。

【不言之花】〔意義〕桃李不言の語によりて桃李のことを不言の花といふ。〔出處〕タの部桃（タウ）李不言下自成蹊を見よ。〔反語〕カの部に、解語（カイ）花あり。

【不平之鳴】〔意義〕物はその當を得ざれば、必ず鳴聲を發するをいふ。不平の兩字、その意極めて廣し、凡そ人の感情に於て、喜怒愛樂孰れの場合にもいふ、俗間心に不滿を抱ける時にのみ限りて「不平」の字を用ふれど、その他にも用ふることを得るなり。〔出處〕韓愈の送孟東野序に、大凡物不得其平則鳴云云。（文章軌範に載せたり、通篇許多の鳴の字を用ゐたり）

【不立文字】〔佛〕〔意義〕道は心を以て悟るべし、文字を以て傳ふ可らず、故に「文字を立てず」といふ。〔出處〕セの部世（セ）尊拈華迦葉微笑を見よ。

【不老不死】〔意義〕人の極めて長壽なるをいふ。〔出處〕列子湯問篇に、海中の五山を述べて云、珠玕之樹皆叢生、華實皆有滋味、食之皆不老不死。

【不滅不生】〔意義〕滅せず生ぜずとて、佛法には其心に繫る所なきをいふ。〔出處〕王巾の頭陀寺碑に、視聽之外、若存若亡、心行之表、不生不滅と。李善注に、維摩經曰、畢竟不生不滅、是無常義と、呂向注に、心無所繫、故不生不滅也。

【不義富貴】〔意義〕不義の富貴は達者より之を視れば輕くして浮雲の如くなるをいふ。〔出處〕論語述而篇に、子曰、飯疏食飮水、曲肱而枕之、樂亦在其中矣、不義而富且貴、於我如浮雲。

【不學無術】〔意義〕學問藝術の素養なきをいふ、無の字一に亡に作る。〔出處〕漢書霍光傳に、光爲師保、雖周公阿衡、何以加此、然光不學亡術、闇于大理。〔使用〕宋史寇準傳に、張詠謂準曰、霍光傳不可不讀、準歸取其傳讀之、至不學無術、笑曰、此張公謂我矣。

【不根持論】〔意義〕樹の根なきが如く、浮薄にして確實ならざるを不根の說とす、それを以て持論とするなり。〔出處〕漢書東方朔傳に、漢武帝時、司馬相如以詞賦得幸、東方朔、枚皐不根持論好詼諧、上以俳優畜之。

【不倶戴天】チの部父（チチ）讐弗與共戴天を見よ。

【不可思議】〔意義〕不思議ともいふ、測度すべからざる義なり。〔出處〕法苑珠林に、佛變化無量、三昧力不可思議。

【不逮門女】〔意義〕夜閒門限に後れて還行する能はざる女子なり。〔出處〕詩經小雅巷伯篇の毛傳に、昔者顏叔子獨處于室、鄰人嫠婦、又獨處于室、夜暴風雨至而室壞、婦人趨而至、顏叔子納之而使執燭、放乎旦而蒸盡、縮屋而繼之、自以爲辟嫌之不審矣、若其審者、宜若魯人然、魯人有男子、獨處于室、鄰人嫠婦、又獨處于室、夜暴風雨至而室壞、婦人趨而託之、男子閉戶而不納、曰吾聞之、男女不六十不閒居、今子幼、吾亦幼、不可以納子、婦人曰、子何不若柳下惠然、嫗不逮門之女、國人不稱亂、男子曰、柳下惠固可、吾固不可、吾將以吾不可、學柳下惠之可、孔子曰、欲學柳下惠者、未有似於是也と。又た荀子大略篇に、柳下惠與後門者同衣、而不見疑、非一日之聞也。

【不孝有三】〔意義〕父母に不孝なる事、三件あるをいふ。〔出處〕孟子離婁上篇に、不孝有三、無後爲大と。朱注に、於禮不孝者有三事、阿意曲從、陷親於不義、一也、家貧親老、不爲祿仕、二也、不娶無子、絕先祖祀、三也、三者中無後

爲し大。

【不朽之盛事】 文(ブン)章經國之大業不朽之盛事を見よ。

【不屑之教誨】 高級人を啓發せしめんが爲めに、敢と之に教へずして、自ら之を思はしむるなり。中国孟子告子下篇に、孟子曰、教亦多術矣、予不屑之教誨也者、是亦教誨之而已矣。

【不龜手之藥】 高級龜は皸裂(ブン)皮膚の水に濡ふて凍裂し、龜の甲の拆の如くなるをいふ。「不龜手之藥」とは、それを防ぐ靈藥なり。ロビ藥なり。中国莊子逍遙遊篇に、莊子曰、宋人有善爲不龜手之藥者、世世以洴澼絖爲事、客聞之、請買其方百金、聚族而謀曰、我世世爲洴澼絖、不過數金、今一朝而鬻技百金、請與之、客得之以說吳王、越有難、吳王使之將、冬與越人水戰、大敗越人、裂地而封之、能不龜手一也、或以封、或不免於洴澼絖、則所用之異也。

【高不事之心】 高級高く塵退の心を持つをいふ。中国韓愈の諍臣論に、若夫龜之上九、居無用之地、而致匪躬之節、以蹇之六二、在王臣之位、而高不事之心。高級易經蹇卦に、上九、不事王侯、高尚其事。

【不信之至欺其友】 高級不信實の至極は、其の朋友を欺くをいふ。中国禮記儒行に、不仁之至、愈其親、不信之至、欺其友。

【不仁者不可以久處約不可以長處樂】 高級仁の心なき人は、長く窮約に堪ふる能はず、又た富樂にも堪ふる能はざるをいふ。中国孔子の語、論語里仁篇に見ゆ。

【不潔在面人皆恥之不潔在心人不肯媿】 高級面貌にある不潔は、容易に知ることを得るも、心の不潔は、知り難きをいふ。中国劉蓋の新論に、不潔在面、人皆恥之、不潔在心、人不肯媿、以面露外、而心伏內、故善飾其情、潛姦隱智、終身不可得而見也。

【不衣】 高級士庶人の仕へざる者をいふ。中国史記蘇秦傳に、蘇秦謂趙肅侯曰、天下卿相人臣及布衣之士、皆高賢君之行義、而願得爲從者久矣。又た田單傳に、王蠋不衣也、義不北面於燕、況在位食祿者乎。又た鹽鐵論に、古者庶人老者而後衣絲、其餘則麻枲而已、數命曰布衣。

【不被】 高級この部公(コウ)孫布被を見よ。

【不裳】 高級布にて作れる下衣なり。中国左傳定公四年に、左司馬戌曰、我實失子、可哉、三戰皆傷、曰、吾不可用也已、句卑布裳、到而奏之、疏其身、而以其首歸。又た史記魏書に、大路越席、皮弁布裳。

【布裘】 高級布の裏に皮を附けたる衣なり。中国宣和書譜に、山人翥云、有方外癖、布裘紫帽出、染荊。

【布袍】 高級布にて作れる大袖の衣なり。中国後漢書に、大學皆魁頭、露紒、布袍、草履と。又た唐彥謙の詩に、荒村紒煙火、獨凍布袍濕。

【布褐】 高級布に毛を織込みたる賤者の服なり。中国晉書に、何琦常變性、老而不衰、布褐蔬食、恆以逸作爲事と。又た蘇雲卿傳に、身長七尺、美鬚髯、著青笑、草履終歲不易。

【布袖】 高級布衣の袖なり。中国耶律楚材の詩に、布袖龍鍾兩眼廉、丹、誠如得白頭新。

【布袴】 高級布にて作れる袴。中国三國志魏志に、趙息聞有家禍、因從官食、逃走之、河間嚴姓字又、韓詩、北海、著梁巾布袴、常於市中販胡餅。

【布襪】 高級布のムカバキ、吾邦のキヤハンの如し。中国陸游の文に、李丈參政、罷政歸鄉里、一日來共飯、謂先君曰、聞趙相過、憤悲愛出、明僕不然、請命下、布襪青鞋行矣、豈能作兒女態乎。

【布帳】 高級布にて作れる紋帳のごときもの。中国晉書元帝紀に、布帳錄帳、詳刑簡化、拘前軌、光啓中興。

【布幕】 高級布にて作れる帷の幕ひなり。中国禮記檀弓上篇に、穆公之母卒、使人問于曾子曰、如之何、對曰、申也聞諸申之父曰、哭泣之哀、齊斬之情、饘粥之食、自天子達、布幕衡也、設幕魯也と。鄭注に、幕所以覆棺上也。

【布袋】 高級一布にて造れる袋をいふ。中国二入り嚢をいふ。中国一事物紀原卷八に、召康公奚公劉之厚於民也、其詩曰、乃裹餱糧、於橐於囊、毛傳曰、大曰橐、小曰囊、御覽云、古行者之食、以布囊貯糧、則是布囊爲裹糧之用、自公劉之世、已然矣、蓋在夏后之世者也。二既餘叢考に、俗以贅壻爲布袋、天香樓偶得云、三餘帖、馮布少時贅於孫氏、其外舅有二瑣事、令布代之、布袋之訛本、此。

【布衾】 高級布にて作れる夜具。中国漢書叙傳に、布衾疏食、用儉飭身と。又た杜甫の詩に、布衾多年冷似鐵、驕兒惡臥踏裏裂。

【布囊】 高級布にて作れるフクロ。中国漢書楊王孫傳に、及病且終、先令其子曰、吾欲裸葬以反吾眞、必亡易吾意、死則爲布囊、盛尸、入地七尺、既下從足引脫其囊、以身親土。

【布錢】 高級布は今の紙幣にて、錢と共に通貨とす。中国漢書王莽傳に、更民出入、持布錢、以副符傳、不持者、罰傳勿食、關津苛留。

【布泉】 高級後周の錢の名なり。中国後漢書武帝紀に、保定元年七月、更鑄錢、文曰布泉、以一當五、與五銖錢並行。

【布令】 高級命令を發布すること。中国國語に、布令陳辭、而又不至、則又增修於德、無勤民於遠、是以近無不聽、遠無不服。

【布法】 高級法度を布き示すをいふ。中国管子に、民知禮矣、而未知法以任力、務然後布法以任力、

【布告】 高級上の命令を天下に布き告るをいふ。中国史記匈奴傳に、詔曰、告天下、使明知之。

【布被】 高級水滸傳に、石秀在布被裡、聽見。

【布簾】 高級布を垂れて簾の如くするなり。中国水滸傳に、石秀在布被裡、聽見。

【布覆】 高級四方に布き覆ふの義なり。中国馬融の長笛賦に、氣噴勃以布覆兮。

【布施】 高級人に物を施すをいふ。中国國語周語に、享祀時至、布施侯裕と。又た文子自然篇に、爲惠者布施也と。又た法界次第に、檀那、梵言布施。

【布穀】 高級鵓鳩の一名、ハトの屬。中国爾雅の注に、鳲鳩、一名鵲鶻、即今鳲鳩也、農事方起、此鳥飛鳴於桑間、若云布穀、故云布穀一と。又た戒庵漫筆に、布穀鳥、當四月播秧時、自呼其名、分明云布穀布穀、因重壓其聲、人驚聞之、番相近、而疑似云郭公郭公、又云看蠶看火、今人遂稱爲看蠶看火鳥、亦稱郭公鳥、失其本名矣。

【布衣交】 高級平民的の交りなり。中国史記藺相如傳に、布衣之交、尚不相欺、況大國乎と。又た戰國策に、臨君與文布衣交と。文は孟嘗君の名なり。

【布帆無恙】 高級船中無事なるをいふ。中国晉書顧愷之傳に、愷之嘗因假還、殷仲堪特以布帆倚之、至破冢、遭風大敗、愷之與仲堪牋曰、地名破冢、眞破冢而出、行人安穩、布帆無恙。中国李白の秋下荊門詩に、霜落荊門江樹空、布帆無恙掛秋風、此行不爲鱸魚興。自愛名山入剡中。

【布鼓過雷門】 高級布にて張りたる大鼓を以て雷門を過ぐるなかれと戒るなり。雷門の鼓は、其聲大なる故にいふ。中国晉書元帝紀に、王導曰、毋持布鼓過雷門、雷門會稽城門有大鼓、越擊之、此鼓聲聞洛陽。

【布衣韋帶之士】 高級韋(ナメシカハ)の帶を締めたる士にて貧賤の士といふこと。中国漢書賈山傳に、布衣韋帶之士、修身於內、成名於外と。又た晉書阮籍傳に、夫布衣韋帶之士、孤居特立。

【煖於布帛深於矛戟】 高級侵奸人の所爲をいふ。中国荀子榮辱篇に、雖有戈矛之刺、不如恭敬之利也、故與人善言、煖於布帛、傷人之言、深於矛戟。中国王念孫云、之言は、以言の誤。中国荀子非相篇に、凡人莫不好好言、其所善而君子爲甚、故贈人以言、重於金石珠玉、觀人以言、美於黼黻文章、聽人之言、樂於鐘鼓琴瑟。○荀子大略篇に、曾子行、晏子從、於郊、曰、愚聞

之、君子贈人以言、庶人贈人以財、嬰貧無財、請假於君子、贈吾子以言。出處 法苑珠

【付囑】 意義 言ひ附ること。出處 林に、親受付囑。

弗

【弗庭】 意義 不(フ)庭の類語を見よ。

【弗豫】 意義 不(フ)豫を見よ。

六 缶

【擊缶】 意義 歌ふときに、缶を擊ちて拍ギなり、戰文に、瓦器所以盛酒漿、秦人鼓之以節歌。出處 史記藺相如傳に、秦王不樂、爲一擊缶と。缶は缶に同じ。

【鼓缶】 意義 前條に同じ。出處 易經離卦に、九三、日昃之離、不鼓缶而歌、則大耋之嗟、凶。

七 扶

【撫缶】 意義 擊缶に同じ。出處 漢書楊惲傳に、仰天撫缶。

【扶桑】 意義 ㊀東海の中にある大なる神木なり。㊁太陽の出る處なり。古へ支那より我が國を指していふ。出處 ㊀山海經に、湯谷之上有扶桑、十日所浴、在黑齒北、居水中、有大木、九日居下枝、一日居上枝と。又た十洲三島記に、扶桑在碧海之中、地多林木、葉皆如桑、又有梧子、樹長者數千丈、經三千圍、樹兩同根俱生、更相依倚、是名扶桑。㊁夜航詩話に、言所謂扶桑樹者、蓋在伊豫海濱、洪荒時物云、按史景行天皇西巡時、覆盧臥巨木一度、海邊火州、此其是矣、其大且長何如哉、所謂其未偃之時、當朝日則蔽阿蘇山者、理或然也、故西土及夕日則覆阿蘇山者、指筑紫地方也、王維送吳監察還國扶桑外、主人孤島中、韋莊送僧敬龍、扶桑已在渺茫中、家在扶桑東更東、言日本去扶桑更遠也。意義 淮南子地形訓に、扶木在陽州、日之所、曜と。注に、扶木は扶桑なり、曜は猶ほ照のごとし。陽州は東方なり。又た同篇に、立登保之山、暘谷搏桑在東方と。注に、暘谷は日の出る所なり。又た莊子在宥篇に、雲將東遊、過扶搖之枝、而適遭鴻蒙と。音義に、扶搖の枝、亦夫に作る。扶搖は、神木なり、「東海に生ず。以上みな扶桑の異文なり。

【扶搖】 意義 ㊀扶桑に同じ。㊁扶搖の二字を合せば(ヘウ)の音となる、即ち飄(暴風)なり。出處 ㊀前條の考異を見よ。㊁莊子逍遙遊篇に、摶扶搖而上者九萬里。

【扶植】 意義 扶持樹立するなり。出處 謝(全詩ナの部南(ナン)入男兒終不)屈の條に見ゆ)

【扶枝】 意義 弱の外の枝をいふ。出處 淮南子人間訓に、去高木而墜扶枝。

【扶疎】 意義 木の枝の分ち布く貌。出處 韓非子揚權篇に、木枝扶桑將塞公閒」と。又た漢書武五子傳に、枝葉扶疎異姓不得聞也。

【扶老】 意義 老人を扶助するをいふ。出處 陶潛の歸去來辭に、策扶老以流憩と。又た 古傳考略に、老人所、杖杖曰扶老」と。又た漢書孔光傳に、賜靈壽杖、顏注に、孟康曰、扶老杖と。又た後漢書周勃傳に、同郡蔡順字君仲、亦以至孝稱、注に、汝南先賢傳曰、蔡順事母至孝、井桔槔朽、在母生年上、而順憂不敢理之、俄而有扶老藤生繞之、遂堅固焉。

【扶持】 意義 老人などを介抱して扶ける こと。出處 禮記內則篇に、婦事舅姑云云、以適父母舅姑之所、下氣怡聲、問衣燠寒、出入則或先或後、而敬扶持之と。又た孟子滕文公上篇に、疾病相扶持。

【扶助】 意義 扶け助くる義。出處 後漢書鄧禹傳に、延年傳に、攜手折衝、扶助貧弱。

【扶翼】 意義 前條に同じ。出處 管蔡孫惠傳に、抗辭金門、則秦國之言驗、扶翼皇家、則匡主之功著。

【扶服】 意義 匍匐に同じ、手足并び行くなり。急速の甚しきをいふ。出處 禮記檀弓下篇に、詩(邶風谷風篇)凡民有喪、扶服救之と。又た揚雄の解嘲に、蒐雖銳之亡命也、折骨摺骼免於彝索、扶服入甕。

【扶伏】 意義 前條に同じ。出處 左傳昭公二十一年に、扶伏而擊之。

【扶寸】 意義 手の指を四本並べるを一扶といふ。出處 禮記投壺篇に、籌室中二五扶、堂上七扶、庫中九扶と。注に、鋪四指曰扶と。又た公羊傳僖公三十一年に、隕石而出、扶寸而合と。注に、側手曰扶、按指曰寸、通作膚。

【扶老竹】 意義 老人を扶助する竹の名、此竹は節高くして中實したるを以て杖とす

ることなし故に此の名あり。出處 山海經の中山經に、鑑山多扶竹と。郭注に、扶老、竹也、高節實中中杖、名之扶老竹」と。

巫

【扶木朝暾】 意義 扶桑の木の上に朝日の上るをいふ、扶桑木は佳古我國に在りしと言ひ傳ふ。出處 隋書音樂志に、扶木上朝暾、巖山沉霞景。

【扶搖直上九萬里】 意義 居人の詩の句。出處 李白の上李邕」に、大鵬一日同風起、扶搖直上九萬里、假令風歇時下來、猶能簸卻滄溟水、世人見我恆珠、調、聞、余大言、皆冷笑、宜交猶能見、後生、丈夫未可輕年少」

【巫覡】 意義 巫はカンナギ、又はミコと訓ふ、覡は男巫なり。出處 論語子路篇に、人而無恆、不可以作巫覡。

【巫魂】 意義 巫は女のミコ、魂は男のミコなり。出處 楚辭楚語下に、觀射父曰、在男曰覡、在女曰巫、是使制神之處位次主、而爲之牲器時服」と。韋注に、巫覡、見鬼者、周禮、男亦曰巫と。又た周禮春官に、凡以神仕者と。賈疏に、男子陽、有兩稱、名巫名覡、女子陰不變、直名巫、無覡稱。

【巫蠱】 意義 巫はミコ、蠱はマジナヒ師なり。連文釋義に、女能以舞降神、謂巫、執左道以惑人、謂蠱と。出處 漢書に、江充傳、治巫蠱。

【巫陽】 意義 ミコなり、女な巫といひ、男な覡といふ、陽はその名なり。出處 宋玉の招魂に、帝告巫陽曰、有人在下、我欲輔之、魂魄離散、汝筮予之と。王逸注に、女曰巫、陽其名也。又た蘇軾の潮州韓文公廟碑に、鈞天無人、帝悲儁、謫吟下招遺、巫陽」と。又た同人の澄遇驛の詩に、餘生欲老海南村、常遣巫陽招我魂。

【巫兒】 意義 前條に同じ。出處 漢書地理志に、襄公淫亂、姑姊妹不嫁、令國中民家長女不得嫁、名曰巫兒、爲家主祠。

【巫山之夢】 意義 巫山は、今の四川省夔州府巫山縣の東に在り、巫山の神女の故事に本づきて、男女相會して綺夢を結ぶ義とす。出處 宋玉の高唐賦に、昔者先王嘗游高唐、怠而晝寢、夢見一婦人、曰、妾巫山之女也、爲高唐之客、聞君游高唐、願薦枕席、王因幸之、去而辭曰、妾在巫山之陽、高丘之岨、旦爲朝雲、暮爲行雨、朝朝暮暮、陽臺之下、旦朝視之如言、故爲立廟、號曰朝雲と。又た襄陽耆舊傳に、赤帝女姚姬、未行而卒、葬於巫山之陽、故曰巫山之女、楚懷王遊於高唐、晝寢、夢見與神遇、自稱是巫山之女、王因幸之、遂爲置觀於巫山之南、號爲朝雲と。又た劉廷芝の公子行に、爲雲爲雨楚襄王と。又た李白の清平調詞に、一枝濃艷露凝香、雲雨巫山枉斷腸。

【巫峽啼猿數行淚】 意義 唐人の詩の句。出處 高適の送李少府貶長沙尉に、嗟君此別意何如、駐馬聽猿淚滿裾、白帝城邊古木疎、聖代卽今多雨露、暫時分手莫躊躇。

【巫峽之水能覆舟】 意義 ㊀の部水(ダイ)行路を見よ。意義 信じてまことに助くるをいふ。出處 書經湯誥篇に、上天孚佑下民、罪人黜伏。

【孚甲】 意義 表面に在る皮をいふ。出處 禮記月令篇に、其日甲乙、萬物皆解、孚甲、自抽軋而出。

【武人】 意義 ㊀武夫といふに同じ。㊁武暴の人といふ義。出處 ㊀詩經小雅漸漸之石篇に、武人東征。㊁易經履卦に、六三、武人爲于大君。

【武士】 意義 武卒といふに同じ。出處 莊子人間世篇に、上徵武士、則支離攘臂於其間」と。支離は支離疏なり。又た史記蘇秦傳に、武士二十萬。

【武夫】 意義 ㊀武士に同じ。㊁玉に似たる石なり、碔砆に同じ。出處 ㊀詩經周南兎罝篇に、赳赳武夫、公侯干城。㊁賦(フ)砆を見よ。

【武將】 意義 式人の大將をいふ。出處 後漢書張奮傳に、遣武將征代。

【武弁】 意義 武官の被る冠なり、因て武官のことゝす。出處 後漢書輿服志に、武冠、一曰武弁大冠、諸武官冠之、侍中中常侍、加黃金璫、附蟬爲文、貂尾爲飾、謂之趙惠文冠」と。又た文獻通考職官門に、校尉在漢爲兵師要職、而後世則爲武弁所不齒之冗秩。

【武周】 意義 周の武王の德を頌する音樂の名。出處 後漢書班彪傳の注に、武周、武王樂也。

【武衛】（ブエイ）　漢書武官にして近く天子を衛るをいふ、又た將軍をもいふ。出典書經禹貢篇に、二百里奮武衛。

【武勇】（ユウ）　漢書武ありて勇ましきこと。出典史記淮陰侯傳に、天下武勇と。又た後漢書呂強傳に、故太尉段熲武勇冠世、習於邊事、彎弧飛矢、成功、成皐首。

【武威】（イ）　漢書武勇威力をいふ。出典史記始皇紀に、武威旁揚。

【武健】（ケン）　漢書武力ありて壯健なるをいふ。出典史記酷吏傳序に、昔天下之網嘗密矣、然姦軌萌起、其極也、上下相遁、至於不振、當是之時、吏治若救火揚沸、武健嚴酷、憂詘縻於其任、而愉快乎。

【武官】（ブクワン）　漢書武術に關する官をいふ。出典漢書百官表に、古者重武官。

【武用】（ユウ）　漢書武士の用あるものをいふ。出典北齊書に、壯健有武用。

【武舉】（キョ）　漢書武藝に熟達せる者を舉げ用ふる義。出典事物紀原に、唐選舉志曰、武舉蓋起於武后之時、其始置在長安二年也、唐會要曰、長安三年正月十七日、詔天下諸州、宜教武藝、每年準明經進士、貢舉例送、此武舉之始也。

【武功】（コウ）　漢書武を以て立てたる功をいふ。出典詩經豳風七月篇に、載續武功。

【武術】（ジュツ）　漢書武藝をいふ。出典張延年の梟太子釋奠會作詩に、偃閉武術、開揚文含。

【武藝】（ゲイ）　漢書南條に同じ。出典北史河南王曜傳に、武藝絕人。

【武略】（リャク）　漢書兵略に同じ。出典後漢書梁憧傳論に、時政平、則文德用、而武略之士、無所奮其力能。又た晉書劉毅傳に、武略以濟事爲先。

【武斷】（ダン）　漢書其餘富を恃みて、擅に威罰を行ふをいふ。出典史記平準書に、豪并豪富之徒、彎弧飛矢、成功、成皐首。

【武節】（セツ）　漢書武道の節操をいふ。出典後漢書南匈奴傳に、單于前言、先帝時所賜呼韓邪、孛惡空侯、皆敗、願復飛鳥、念單于國尚未安、方厲武節以職攻爲務。

【武軍】（グン）　漢書武勇を示す爲めに作れる窟。出典左傳宣公十二年に、潘黨曰、君姦築武軍而收晉尸、以爲京觀。杜注、築武軍、以彰武功。

【武備】（ビ）　漢書武の備へして身を護るをいふ。出典漢書爲不疑傳に、不疑曰、劍者君子武備、所以衛身、不可解。

【武敏】（ビン）　漢書足跡の大なるをいふ、敏は足の拇指をいふ。出典詩經大雅生民篇に、履帝武敏歆と。鄭箋に、敏、拇也。

【武庫】（コ）　漢書博學の人をいふ。出典晉書杜預傳に、杜預爲尚書、損益萬機、不可勝數、朝野稱美、皆曰杜武庫、言其無所不有。

【武器】（キ）　漢書戰爭の諸器械なり。出典後漢書仲長統傳に、修武器、以防偷盜。

【武成】（セイ）　漢書書經周書の篇名にして、梅賾の僞古文なり。出典武成は篇中の字面にして、武王殷を伐ち、其武功の成りし事を記せしものなり、故に序に曰く、武王伐殷、往伐歸獸、講其政事、作武成と。然れども、此篇殷器錯簡、顧る多し、故に蔡沈古來の諸說中最も長ぜる所のものを集め、以て其次序を正し、別に「今考定武成」の一篇を附す、是亦須く參觀すべし、而して其錄する所は、武王既に殷に克ちしを以て、復た戎馬を用ふるの要なし、故に馬を華山の陽に歸し、牛を桃林の野に放ち、又た群神を祀り、群后に告げ、且つ其政は分封法あり、官使要あり、五教修り、三事舉り、信義立ち官賞行はるを以て、乘衣拱手して、天下自ら治るの事なり。

【講武】（コウブ）　漢書武術をならふなり。出典禮記月令篇に、天子乃命將帥講武、習射御角力。

【接武】（セツ）　漢書セの部接（セツ）武を見よ。

【繼武】（ケイ）　漢書足跡をつゞけるなり。出典禮記玉藻篇に、君與尸行接武、大夫繼武、士中武、徐趨皆用是。

【偃武】（エン）　漢書エの部偃（エン）武を見よ。

【武經七書】（ケイ）　漢書七種の兵法の書なり。出典明史選舉志に、安治中刊武經七書、分散兩經武學。

【武夷九曲】（ブイ）　漢書武夷山は、今の福建省建寧府崇安縣にあり、山中に九曲溪あり、風景絕佳なり、宋の朱熹嘗て九曲歌を作れり。出典事類苑調の注に、武夷山在崇安縣南三十里、道書以此爲第十六洞化元之天。相傳昔有神人二日武

夷君者居、此、故名、漢武嘗祀之、九曲溪在武夷山中、と。又た康熙字典に、武夷在今崇安、有十二峰九曲之勝、相傳籛鏗之子、長曰武、次曰夷、隱此、得道、故名と。又た群書拾唾に、武夷山有溪九曲、二曲升眞洞、二曲玉女峯、三曲仙機岩、四曲金雞岩、五曲鐵笛亭、六曲仙掌峯、七曲石唐寺、八曲鼓樓岩、九曲新村市と。又た宋史辛棄疾傳に、棄疾嘗同朱熹遊武夷九曲山、賦武夷九曲櫂歌。

【武陵桃源】（リョウ）　漢書晉の陶淵明の假設の地をいふ、按に、今の湖南省常德府に、武陵縣桃源縣あり、事類統編の注に、桃源山在桃源縣西南三十里、有桃花洞、即陶潛所作桃花源記者也といへり。出典陶潛の桃花源記に、晉太元中、武陵人、捕魚緣溪行、忘路之遠近、忽逢桃花林、夾岸、數百步中無雜樹、芳草鮮美、落英繽紛、漁人甚異之、復前行欲窮其林、林盡水源、得一山、山有小口、髣髴若有光、便捨船從口入、初極狹、纔通人、復行數十步、豁然開朗、土地平曠、屋舍儼然、有良田美池桑竹之屬、阡陌交通、雞犬相聞、其中往來種作、男女衣著、悉如外人、黃髮垂髫、怡然自樂、見漁人大驚、問所從來、具答之、便邀還家、爲設酒殺雞作食、村中聞有此人、咸來問訊、自云先世避秦時亂、率妻子邑人來此絕境、不復出焉、遂與外人間隔、問今是何世、乃不知有漢、無論魏晉、此人爲具言所聞、皆歎惋、餘人各復延至其家、皆出酒食、停數日、辭去、既出得其船、便扶向路、處處誌之、及郡詣太守、說、太守即遣人隨往、尋向所誌、遂迷不復得路。

【武功爵級】（ブコウ）　漢書軍功に因りて賜はる爵位等級なり。出典漢書食貨志に、武帝時大司農陳經、用既竭、不足、以鬻爵賞、置官爵級、十七萬、凡值三十餘萬金。

【武科之士】（ブ）　漢書武藝を以て及第したるを官に舉るなり。出典唐書選舉志に、又有武舉、蓋起於武后之時、長安二年、始置武舉、中、第、亦以鄉飲酒禮、送兵部。

【用武之國】（ユウ）　漢書兵を用ゐて、敵を制するに宜き地なり。出典史記留侯世家に、雒陽雖有此固、其中小國、數百里、田地薄、四面受敵、非用武之國也。

【用武之地】（ユウ）　漢書前條に同じ。出典通鑑綱目に、先主至於夏口、亮謂求教於孫將軍、說權曰、海內大亂、將軍起兵、據有江東、劉豫州亦收衆漢南、與曹操並爭天下、今操破荊州、英雄無用武之地、故豫州遁逃至此、將軍量力而處之。參考三國志諸葛亮傳に、無所用武に作れり。

【偃武修文】（エン）　漢書武器をふせ藏め、文學を修めて、以て太平の化を敷くをいふ。出典書經武成篇に、王來自商至于豐、乃偃武修文、歸馬于華山之陽、放牛于桃林之野、示天下弗服。

【武藝十八事】（ブ）　漢書武藝の十八ヶ條なり。出典讀書記數略に、一弓、二弩、三鎗、四刀、五鈹、六矛、七盾、八斧、九鉞、十戟、十一鞭、十二簡、十三撾、十四殳、十五叉、十六杞頭、十七綿繩套索、十八白打。

附

【武臣不惜死】（ブシン）　文（ブン）臣不愛、綴武臣不惜死を見よ。

【附庸】（ヨウ）　漢書諸侯に附屬する小國なり、我國武家時代の幕下の如きものなり。出典禮記王制篇に、天子之田方千里、公侯田方百里、伯七十里、子男五十里、不能五十里者、不合於天子、附於諸侯、曰附庸と。又た孟子萬章下篇に、不能五十里、附于諸侯、曰附庸。

【附近】（キン）　漢書チカヅクなり。又たチカキなり。出典通俗編に、爾雅、傳、膂也、郭注云、傳近、仲長統昌言、宦豎、傳近臥房之內、交錯婦人之間、按今俗訛作附近。

【附會】（クワイ）　傳會に同じ。

【附傳】（フ）　漢書人の本傳に附して別に傳を立てざるをいふ。出典史記蘇秦傳に、蘇代蘇厲を載せ、張儀傳に陳軫犀首を載するが如きこれなり。

【拊循】（フジュン）　漢書拊は撫に同じ、慰撫するなり。出典荀子富國篇に、拊循之、愛利之、と。又た史記司馬穰苴傳に、問、疾醫藥身自拊循之。

【府】（フ）　漢書府は聚るの意なり、故に都府の義とす。出典事物紀原に、漢制、三公開府、故稱三府、魏晉以後、諸王又稱府、唐高祖武德初、邊鎮帶之地、置總管府、七年改曰都督府、唐會要云、二月十二日

也、開元三年始改京兆河南曰府、此蓋府之始也、注、蘇氏演義曰、府、聚也、聚所在圖籍博書之處、風俗通云、公卿牧守通德之所聚也。

【府然】 訓カタル、貌、府は俯なり。 出典荀子非相篇に、府然若渠搜、隱括之已也と、注に、府、俯通。

【府尹】 訓ツカサ 物紀原に、周成王之命君陳東郊、曰、尹、楚有令尹、此尹之始也、漢京兆河南曰尹、唐以州郡近府者、皆曰尹、按漢百官表曰、右内史、武帝太初元年、更名京兆尹、此名官之始也。

【府君】 訓フクン 本と漢の時の郡守の稱に、後世人子、その祖考の尊稱とす。 出典（一）後漢書に、廣陵太守陳登患胸中煩懣、華佗脈之曰、府君胃中有蟲、（二）又た三國志に、孫策進軍豫章、華歆爲太守、葛巾迎策、策曰、府君年德名望遠近所聽、（三）朱子語錄に、無世而曰府君夫人、漢人碑已有、只是尊神之辭、府君如官府之若、今人亦謂父曰家府君。

【府兵】 訓フヘイ 朝廷に附く兵なり、今の近衛兵の如きものをいふ。 出典後漢書竇武傳に、令明且悉軍闕下、與武對陳、府兵漸盛と、又た古今原始に、南北朝魏初作府兵。

【芙蓉】 訓フヨウ 蓮花なり。 出典謝靈運に、荷、芙蓉と、注に、芙蓉別名芙蓉と、又た文海披

抄に、芙蓉、蓮花也、一名荷、一名芙蕖、一名蕖、茎根爲藕、蕚爲菡萏、實爲蓮、蓮心爲ゝ么荷、又爲ゝ荷、又爲ゝ蕖、命名最多。

【芙蓉峯】 訓フヨウホウ 蓮花に似たり、因て名く、我邦富士山を芙蓉峯といふも此に取れり。 出典文海披沙卷三に、芙蓉峯在衡山、芙蓉峯以蓮花なり、山の形者芙蓉峯在衡山、芙蓉峯以蓮花に似たり、因て名く、我邦餘種を錄せり。又た詩輯卷六、古今の芙蓉を以て山岳の形容せる詩を列擧せり。

【芙蓉城】 訓フヨウジヤウ 仙人の居る城の名なり。 出典實言故事に、芙蓉城星衆仙眷、詩話、石曼卿卒、後人見之者、恍惚如夢、言我今爲仙、所主蓉城、欲與其人遊、不得。

【芙蓉劒】 訓フヨウケン 古の寶劍の名。 出典延絶如芙蓉始出、發其飾、如列星之行、出典盧照隣の長安古意に、相遊俠客芙蓉劍、共宿娼家桃李蹊。

【斧斤】 訓フキン 林に入りて材木を伐る器械なり。 出典孟子梁惠王上篇に、斧斤以時入山林、材木不可勝用也、出典莊子逍遙遊篇に、不夫斤斧、○林琢の詩に、人間斤斧、雖容手。

斤

【斧質】 訓シツ 鉞なり、古は人を斬る器なり、質は加へて之を斬るなり。 出典史記廉頗藺相如傳に、肉袒伏斧質と、又た漢書項籍傳に、執與身伏斧質、妻子爲戮乎。

【斧鉞】 訓フエツ 斧はチノ、鉞はマサカリ、人を刑するに用ふ。 出典左傳昭公四年に、將戮慶封、負之斧鉞と、又た國語晉語に、司寇之刀鋸日繫、而斧鉞不行。

鉞

【斧柯】 訓フカ 斧の柄のことなり。 出典孔子家語觀周篇に、毫末不扎、將尋斧柯、と、又た六韜に、兩葉不去、將用斧柯。

【斧伐】 訓フバツ 斧にて切るなり。 出典淮南子に、夫火熱而水滅之、金剛而火鑠之、木強而斧伐之、水流而土遏之、唯造化者、物莫能勝也。

【斧藻】 訓フサウ 斧藻は、猶ほ綉を刺み繡を丹にするの飾のごとし。 出典揚子法言學行篇に、吾未見好斧藻其藻者也。

【斧劈】 訓フキ との按、と麻を見よ。

【斧扆】 訓フイ 扆は、其の形屏風の如し、王者は之を坐背に備へて南面するなり、斧の柄なきを鑿けるは設けて用ゐざるの義なり。 出典禮記曲禮下篇に、天子當扆而立と、又た儀禮覲禮に、天子設斧依于戶牖之間、と、鄭注に、依如今綉斧屏風也、有繡斧文、所以示威也。

九 怖鳧

（五經圖彙）

【斧鑿痕】 訓フサクノコン 詩文書畫を作るに、自然痕迹を露はすをいふ。 出典宜和畫譜に、遷鑿長于花鳥、精于設色、如良工之無斧鑿之痕、と、又た韓愈の詩に、張籍詩に、徒飄斧鑿痕、不ゝ關ゝ治水統。

【揭ゝ斧入ゝ淵】 ナの部揭斧（オノ）入淵を見よ。

【怖覆】 訓フフク 怖れて顚覆するをいふ。 出典宋玉の神女賦に、神心怖覆。

【鳧鷗】 訓フオウ カモとカモメ。 出典林逋の舟行の詩に、老ゝ蘆蒲葦交千叉、伯ゝ雨鳧鷗著一撮、と、又た文同の成都楊氏江亭詩に、鳧鷗慣入閑千宿、魚蝦長隨一釣艇。

【鳧雁】 訓フガン カモとカリ。 出典詩經鄭風女曰雞鳴篇に、將翺將翔、弋ゝ鳧與ゝ雁、と、又た史記楚世家に、其樂非特朝夕之樂也、其獲非特鳧雁之實也。

【鳧鷖】 訓フエイ カモとコガモ。 出典詩經大雅鳧鷖篇に、鳧鷖在ゝ涇、公尸來燕來寧。

十 負

【鳧頭】 訓フトウ カモのカシラをいふ。 出典吳錄に、袁絕有二石首魚、至秋化爲ゝ鳧、鳧頭中、猶有ゝ石也。

【鳧影】 訓フエイ カモの飛ぶカゲをいふ。 出典杜甫の橋陵の詩に、太史簫ゝ鳧影ゝ王喬鞋ゝ鳥飛。

【鳧氏】 訓フシ 官名なり、其職音樂を司る。 出典周禮考工記に、鳧氏爲ゝ鐘、兩樂謂之鉦、乘氏爲ゝ磬、と、又た、王勃の詩に、鳧氏鳴ゝ秋、雞人唱ゝ曉。

【鳧藻】 訓フサウ 陰歡悅するをいふ。 出典後漢書杜詩傳に、陛下起ゝ兵十有三年、將軍和睦、士卒鳧藻。

【鳧脛雖ゝ短續之則憂】 カの部鳧（カモ）脛雖ゝ短續ゝ之則憂を見よ。

【負負】 訓フフ 恥ぢ入る貌。 出典後漢書張步傳に、負負無可言者と、注に、負負、愧也、再言之者、愧之甚。

【負劍】 訓フケン 劍を抜くに容易ならんが爲に、背に劍を負ふなり。 出典史記刺客傳に、秦王方環柱走、卒惶急不知所爲、左右乃曰、王負劍、負劍、遂拔以擊、荊軻。

【負俗】 訓フゾク 世間一般の識りものとなるをいふ。 出典漢書孝武紀に、士或有負俗之累、而立功名、と、顏注に、晉灼曰、負俗、謂被俗譏論也。

【負債】 訓フサイ 人に金錢を借りて未だ償はざるをいふ。 出典漢書淮陽王傳に、博言負債數百萬、顏王爲償と、博は賭

博なり。

【負笈】 訓フキウ 遊學するをいふ、笈は書箱なり、書箱を負ふて途に就くなり。 出典漢書蘇章傳に、負笈遊師、不ゝ遠千里。

【負荷】 訓フカ 荷物を背や肩に負ふこと、任にたふるをいふ。 出典左傳昭公七年に、古人有ゝ言、曰、其父析薪、其子弗克負荷。

【負擔】 訓フタン 荷物を背や肩に負ふこと。 出典左傳莊公二十二年に、敬仲辭ゝ齊侯、曰、免于罪戾、抱ゝ子負擔、君之惠也、と、又た戰國策燕策に、蘇秦嬴縢履蹻、負ゝ書擔ゝ橐。

【負戴】 訓フタイ 負は任の背に在るなり、戴は任の首に在るなり。 出典孟子梁惠王上篇に、頒白者不ゝ負ゝ戴於道路矣。

【負荊】 訓フケイ 罪を謝するをいふ、荊は枕なり。 出典刎（フン）頸之交を見よ。

【負版】 訓フハン 國民の戶籍を記せる板なり、今の戶籍簿、それを背に負ふものをいふ。 出典論語鄉黨篇に、式負版者、と、式は車前の横木、敬ふ所あれば、伏してこれに憑るなり。版は、周禮秋官司民に、掌登萬民之數、自生齒以上皆書于版、と、注に、今の戶籍なり。

【負販者】 訓フハンシヤ 物を負ふて販賣せるもの、賤民をいふ。 出典禮記曲禮上篇に、夫禮者、自卑而尊人、雖負販者、必有尊也、而況於富貴乎、と、疏に、負販者、とは、大意納貧賤の者を指す。

【負薪憂】（フシンウレヒ）【訓義】病を稱する謙辭なり。（サ）の部采（サイ）薪之憂を參看せよ。【出處】禮記檀弓下篇に、君使二士射一不レ能、則辭以疾、言曰、某有二負薪之憂一と。又た後漢書袁紹傳に、臣以二負薪憂一、投二于陪隸之中一。

【負嵎之勢】（フ）トの部虎（トラ）負レ嵎を見よ。

【負日之暄】（フ）ケの部獸（ケン）芹意を見よ。

【負郭二頃之田】【訓義】負は背なり、郭は城郭なり、城に近き地を負郭といふ、城に近き地は沃潤にして肥沃なれば、收穫多し、一頃は一畝なり。【出處】史記蘇秦傳に、使二我有二雒陽負郭田二頃一、吾豈能佩二六國相印一乎。

城郭の圖

【抱鼓】【訓義】抱と鼓となり、抱は鼓を擊つバチ。【出處】左傳成公二年に、左執轡右授二抱而鼓一、馬逸不レ能レ止と。又た史記叔孫通傳贊に、舍二抱鼓一而有二一王之儀一。

【訃音】【訓義】訃は喪を告ぐるなり、音は報に作る。【出處】儀禮既夕記に、赴曰、君之臣某死。注に、赴、走告也、今文赴作レ訃。又た賈公彥疏に、赴、取二急疾之義一、故云、走告也、非記作レ訃、義取二以言語一相通一、亦一塗也。

【罘罳】【訓義】宮門内の屏なり、凡そ人臣朝して將に事を請ほんとすれば、行て門内屏外に至れば、復た應に思ふべし、罘は復（音フ）罳は思なり。居の時に、檐際に網を張りて鳥雀を護るを罘罳といふ。【出處】漢書文帝紀に、未央宮東闕罘罳災。唐書に、甘露の變の時に、官者扶二上輿一、決二殿後罘罳一、疾趨北出と。又た温庭筠の文に、罘罳甃捲、閶闔夜開。

【罘罔】【訓義】車の上に網を張りて、禽獸を捕ふるもの。【出處】司馬相如の子虛賦に、罘罔彌二山一と。顏注に、罘、覆車也、即今轎車罔也、詩雉雉二于罟罟一、亦罘字耳。

【浮】【訓義】酒杯なり。【出處】班苑臣銘篇に、景於公曰、請浮晏子。

【浮浮】【訓義】盛んなる貌。【出處】詩經小雅湛露篇に、南雪浮浮と。毛傳に、浮浮、衆彊也と。朱傳に、浮、猶二漉漉一也と。又た同書大雅江漢篇に、江漢浮浮と。毛傳に、浮浮、衆彊也と。朱傳に、水盛貌。

【浮礁】【訓義】海鰍の異稱、海鰍は鯨の類礁の浮きたるが如しとの意なり。【出處】寧波府志に、海鰍大者長數十丈、海中浮戴、如二一二里山一、俗呼爲二浮礁一、舟行避之。

【浮華】【訓義】漢書司馬相如傳に、浮華無節、但有二浮華之辭一、不レ周二于用一。

【浮嵐】【訓義】山の峯著たる氣を嵐といふ。【出處】黃庭堅の詩に、有二人半夜出一山去、頓覺浮嵐鎖二翠空一。

【浮沈】【訓義】㊀水に浮き、又は沈むをいふ。㊁轉じて變遷常なきをいふ。【出處】㊀詩經小雅菁菁者莪篇に、載沈載浮。㊁史記游俠傳に、與二世浮沈一而取二榮名一哉。

【浮湛】【訓義】前條に同じ、湛は沈に通ず。【出處】漢書袁盎傳に、與二閭里一浮湛。

【浮誇】【訓義】文章などの浮虛誇大なるをいふ。【出處】韓愈の進學解に、春秋謹嚴、左氏浮誇。

【浮浪】【訓義】住所不定の無籍者をいふ。【出處】通典に、高齊時、無賈之人、不レ樂二州縣編一者、爲二之浮浪人一と。又た水滸傳第一回に、東京開封府汴梁宣武軍便有二一個浮浪破落戶子弟、姓高、排行第二一。

【浮生】【訓義】人生の定まりなきをいふ。【出處】賈誼の服鳥賦に、其生若二浮一兮其死若二休一と。又た杜甫の詩に、是非何處定、高枕笑二浮生一。

【浮民】【訓義】官職なき人民。【出處】近思錄英氏注に、京師浮民逾二百萬一。

【浮言】【訓義】流言といふに同じ、無根の說をいふ。【出處】書經盤庚上篇に、汝曷弗レ告レ朕、胥動以二浮言一。

【浮辭】【訓義】前條に同じ。【出處】鄒陽の獄中上二梁王一書に、兩主二臣、剖レ心析レ肝相信、豈移二於浮辭一哉。

【浮梁】【訓義】支那江西省饒州の縣名、茶邑行に、前月浮梁買レ茶去。

【浮橋】（フケウ）ウの部浮（ウキ）橋を見よ。

【浮子】【訓義】釣を爲すときに、綸に水片を附けて、水上に浮べ、其動くを見て魚の餌を喰ふを知るもの、之をウキといふ。【出處】雜肋編に、釣二之半、繫以二荻梗一、謂二之浮子一。

【浮人】【訓義】浮漚人をいふ。【出處】唐書揚炎傳に、天下殘率蕩盡二浮人一。

【浮榮】【訓義】定まりなき世俗の榮耀をいふ。【出處】王臘の詩に、浮榮未レ能レ捨。

【浮囊】【訓義】游泳の時に用ふるウキブクロなり。【出處】潛虛に、城堤浮囊不レ可レ不レ完と。又た翻譯名義に、自レ今聽二諸比丘畜一浮囊若牛皮若羊皮、傳聞西域渡レ海之人、多作二烏鵠皮袋一、或畜二巨羊脬一、海船或失、吹レ氣浮レ身。

【浮利】【訓義】浮虛なる利益をいふ。【出處】後漢書逸民傳に、飾二智巧一以逐二浮利一と。又た管道昇の詩に、人生貴極是王侯、浮利浮名不二自由一。

【浮圖】【訓義】㊀佛なり。佛陀、浮屠、浮圖といふ。㊁僧のことなり。㊂塔なり。【出處】㊀後漢書襄楷傳に、宮中立二黃老浮圖之祠一と。注に、浮圖卽佛陀、但聲轉耳、並謂二佛也一。又た祖庭事苑に、梵語佛陀、或云二浮圖一、或云二部多一、或毋馱、或沒陀、皆五天語、今譯爲二覺道士一、三破論云、佛道經本云二浮屠一、羅什改爲二佛徒一、知二其源惡一故也、所以翻爲二浮屠一、胡人兇惡、故老子化之、其始不欲傷レ形、故兜其頭、況居割也、釋順法師曰、經云二浮圖一者、梵語也、或謂聖瑞靈圖浮海而至、故云二浮圖一也、吳中石佛泛二海來一卽其事矣。㊃歐陽修の釋秘演詩集序に、曼卿醉於酒、秘演醉於浮圖、皆奇男子也。㊄韓愈の文集に、送二浮屠文暢一序あり。又た同人の送二高簡上人一序に、吾聞、浮屠人善二於技能一。㊅唐書袁恕傳に、南蠻雲抽矢回射、此矢所二以志一也。又た洛陽伽藍記に、永寧寺中有二八層浮圖一と。又た傳燈錄に、茶毘牧二蹇骨一於院之後山、建二浮圖一と。又た空に浮べる雲の如き一時的の不義の富貴を惡めるに、水盛貌。

【浮雲富貴】【訓義】不（フ）義富貴を見よ。

【浮生若夢】【訓義】人生の頼みがたきをいふ。（浮生を參看せよ）【出處】李白の春夜宴桃李園序に、浮生若レ夢、爲二歡幾何一。【出處】莊子刻意篇に、其生如レ浮、其死如レ流。○成淳集に、蚊看浮生夢。

【浮光躍金】【訓義】月光の波面に映じてチラ〳〵とするをいふ。【出處】范仲淹の岳陽樓記に、長煙一空、皓月千里、浮光躍二金一、靜影沈二璧一。

【倒植浮圖】【訓義】寺の塔が倒に建てるなり、危き勢にいふ。【出處】宋史兵志に、帝曰、邊上老人亦謂、今之邊兵過二於昔時一、其勢如二倒植浮圖一、朕亦每以此爲二憂也一。

【浮世半日閑】【訓義】俗世界を離れたること。【出處】李涉の題二鶴林寺僧舍一の詩に、終日昏昏醉夢間、忽聞二春盡一強登山、因二志をいふ。【出處】揚雄の答賓戲に、仲尼抗二浮雲之志一、孟軻養二浩然之氣一。【參考】論語述而篇に、不義而富且貴、於二我如一浮雲一。

【浮家泛宅】【訓義】舟中に住居するをいふ。【出處】新唐書陸逸傳に、妻志和自稱二烟波釣徒一、顏眞卿爲二湖州刺史一、欲二館一之、以二舟敝漏一請レ更之、志和曰、願爲二浮家泛宅一、往二來苕霅間一と。又た王士禎の詩に、便可レ泛レ宅仍浮レ家。

【浮瓜沈李】ウの部浮（ウリ）瓜（ウリ）沈李を見よ。

【浮生】（フセイ）

【浮光】（フ）

【浮嵐】（フ）

【浮沈】（フ）

【浮誇】（フコ）

【浮浪】（フラウ）

【浮湛】（フチン）

【浮礁】（フセウ）

【浮華】（フクワ）

【浮世半日閑】

【浮雲富貴】

【浮生若夢】

【浮光躍金】

【浮瓜沈李】

【浮家泛宅】

【浮圖】

【浮利】

【浮囊】

【浮榮】

【浮人】

【浮子】

【浮橋】

【浮梁】

【浮辭】

【浮言】

【浮民】

【浮世半日閑】

【浮雲志】

【浮生若夢】

【倒植浮圖】

【浮光躍金】

【浮瓜沈李】

【浮家泛宅】

【浮圖】

【浮利】

【浮囊】

【浮榮】

【浮人】

【浮子】

【浮橋】

【浮梁】

【浮辭】

【浮言】

【浮民】

過ぎ竹院に逢ひ僧話す又得る浮世半日閑。

【浮嵐暖翠千萬狀】句。出處宋人の詩の嵐山高の詩に、美君買田築室老其下、掃徠盆畿今醸酒盈缸、欲令浮嵐暖翠千萬狀、坐臥常對乎軒窗。

【浮雲時事改孤月此心明】人の詩の句。出處蘇軾の次韻江晦叔に、鐘鼓江南岸、歸來夢自驚、浮雲時事改、孤月此心明、雨已傾盆落、詩仍翻水成、二江爭送客、木杪看橋橫。○漁隱叢話に、東坡自嶺外歸、次韻江晦叔二云、浮雲世事改、孤月此心明、語意高妙、如參禪悟道之人、吐露胸襟、無一毫窒礙也。○困學紀聞に、更無柳絮隨風起、惟有葵花向日傾、見司馬公之心、浮雲世事改、孤月此心明、見東坡公之心。

郭

【郭郭】城外曰郭。出處進文釋義に、城外小城曰郭、小城と城外の地とをいふ。

釜

【釜鬲】空虛なるもの。出處戰國策に、秦澤見逐于趙而入韓魏、遇秦拜爲于塗、開應侯任鄭安平王稽皆負重罪、應侯內慙乃西入秦。

【釜甑】釜とコシキとをいふ。出處孟子滕文公上篇に、許子以釜甑爨、以鐵耕乎、曰然、自爲之與曰否、以粟易之。

釜

【釜臍】釜の底をいふ。出處本草に、釜臍鼎上塗、釜鳥、釜鳥、皆鍋底墨。釋名に、釜月中墨、鍋月中墨、皆鍋底墨。

【釜竈】カマとカマドをいふ。出處新序に、譯闕鑑識、天下之駿馬也、使之與狸鼠試于釜竈之間、其疾未必能過狸鼠也。

【釜鬻】檜風匪風篇に、誰能烹魚、載之釜鬻。出處詩經も釜の類なり。釜と、毛傳に、鬻、釜屬。

【釜鼎】魏志鍾繇傳の裴注に、魏略曰、繇爲相國、以五熟釜鼎、因太子、繇之。

【釜鳴】釜の自ら鳴るなり、神異を書所居釜鳴。出處搜神錄に、太廟齋郎盧

【釜煮】法藏經に、釜煮不爛。出處付

【釜煤】鍋炭をいふ。出處本草に、釜

【釜中之魚】ウの部如魚（ウヲ）遊釜中を見よ。

【釜鼓滿則人概之】滿つるときは、人が之を概（マスカキ）にて拂ひ落すをいふ。出處管子權言篇に、釜鼓滿則人概之、人滿則天概之。

【釜中生魚范萊蕪】しば〳〵飯粒を絶ち、范冉、字史雲、桓帝時、以後漢書獨行傳に、范冉、字史雲、桓帝時、以爲萊蕪長、遭母憂、不到官、議者欲以冉爲侍御史、因遭身逃命於梁沛之間、所止輒陋、有時絶粒、閭里歌之曰、甑中生塵、范史雲、釜中生魚、范萊蕪と。袁懷太子注に、冉、或作丹。

俯

【俯仰】いふ。出處禮記樂記篇に、就其干戚、習其俯仰詘伸、容貌得莊焉。

【俯仰不愧天地】アの部仰（アフイデ）不愧天を見よ。

俛

【俛仰】俯仰に同じ。出處淮南子に、與道沈浮俛仰と。又た漢書龔鮑傳に、在俛仰之間耳。

【如俛拾地芥】易きをいふ。出處漢書夏侯勝傳に、取青紫、如俛拾地芥耳。

祔

【祔祭】出處周禮春官に、大祝付、祔祭、先王、以祔、後死者。

【祔媚】出處蔡邕の青衣賦に、都冶試綢、卓犖多委。

婦

【婦】出處說文に、婦、服也、从女持帚灑掃也、一曰、對、姑曰、婦。

【婦人】出處禮記奔喪傳に、婦人何以不杖、其不能病也。

【婦德】出處ヨメの德行をいふ。出處周禮冢宰九嬪に、掌婦學之法、以教九御、婦德婦言婦容婦功と。又た禮記昏義篇に、古者婦人先嫁三月、廟成、然後子

公宮、祖廟既毀、教于宗室、教以婦德婦言婦容、婦功、敬成祭祀之、性用魚菊之以蘋藻、所以成順也と。又た禮記郊特牲に、信者人也、信、婦德也、夫與之齊、終身不改。

【婦言】出處ヨメの言語をいふ。出處前

【婦容】出處ヨメの容姿をいふ。出處列女傳に、不必顏色美麗也、盥洗塵穢、服飾鮮潔是謂婦容。（婦德を參看せよ）

【婦功】出處ヨメの爲すべき仕事をいふ。出處孔子家語に、霜降而婦功成、嫁娶者行焉。（婦德を見よ）

【婦翁】出處嫁の父をいふ。出處後漢書第五倫傳に、帝數、第五倫曰、聞君爲吏、捐婦翁、不過從兄飯、有諸、對曰、臣之三妻皆無妻父。

【婦姑】出處ヨメとシウトメとをいふ。出處新書に、婦姑不相悅、則反辱而既。

【婦學】出處書名。出處清の章學誠撰す、術文藝等を簡約に述べ、又た女學の沿革をも略敍せり。

【婦寺】出處婦は宦女、寺は宦官なり。出處詩經大雅瞻卬篇に、時維婦寺。

【索婦】出處ヨメを求るなり。出處老學庵筆記に、今人謂娶、婦爲索婦、蓋古語也、孫權欲爲子索關羽女、裴衛欲爲子索呂布女、皆見三國志。

【婦姑勃谿】出處ヨメとシウトメと相爭ふをいふ。出處莊子外物篇に、心無天遊、則六鑿相攘、室無空虛、則婦姑勃谿。

【婦之五等】コの部五（コ）等を見よ。

【婦人三從】サの部三（サン）從を見よ。

【婦人之仁】出處婦人の慈心の極めて小なるをいふ。出處史記淮陰侯傳に、韓信曰、項王見人、恭敬慈愛、言語嘔嘔、人有疾病、涕泣分食飲、至使人有功當封爵者、印刻弊忍不能予、此所謂婦人之仁也。

【婦言是用】出處書經周書牧誓篇に、今商王受、惟婦言是用。又出處通俗編に、漢書王陵傳、引鄙語、兒婦人口不可用。○晉書劉伶傳に、婦人之言慎不可聽。○明史孝義傳に、太祖問鄭濂、治家長久之道、對曰、謹守祖訓、不聽婦言。

【婦人爲竈】カメと成りたるをいふ。出處燕石錄に、婦人浴而化爲竈者二事、一江夏黃氏母見後五行志、一丹陽宣城母見晉書五行志、又清河宋士宗母化爲竈、赤見晉志、此餘如人化爲虎、或男女互化、其事相類者多既見類書中、余又有化志一篇、故略之、凡言化者虛誕不少、恐不可悉信焉。

【婦有長舌】出處鶴の鳴を起すといふ。出處詩經大雅瞻卬篇に、婦有長舌、維厲之階と。鄭箋に、長舌、猶多言語と。孔疏に、舌動而爲言、故謂多言爲長舌。

【婦有七去】シの部七（シチ）去を見よ。

【爲婦畫眉】ケの部京（ケイ）兆眉を見よ。

【敎婦初來】出處新婦を敎ふるは初めて我家に來りし時に於てせよといふこと。出處顏氏家訓に、俗諺曰、敎婦爲初來、敎兒爲嬰孩、誠哉此語。

【婦人從人者】出處女は陰柔なれば、人に從ふを善しとするをいふ。出處禮記郊特牲篇に、婦人從人者也、幼從父兄、嫁從夫、夫死從子。

【可使婦無揮乎】出處婦人をして鄰もなからしむべけんやとて、極めて貧しき形容にいふ。出處世說に、宣范潔行廉約、韓蘭宣書、絹百匹不受、減五十匹、復不受、如是減半、遂至一匹、既終不受、韓後與范同載就車、車裂二丈、與范云、人寧可使婦無揮耶、范乃笑而受之。

【不死於婦人手】出處死生の際は、人の最も謹むべき處なり、故に男女の區別を明にせんが爲めに、男子は婦人の手に死せざるなり。出處禮記喪大記篇に、男子不死於婦人之手、婦人不死男子之手。

【婦人生鬚男子誕子】出處婦女にして鬚の生じ、男子にして子を生むは、事の奇怪なるをいふ。出處唐書李光弼傳に、母李、有鬚

符

數十、長五寸許、封韓國太夫人一。又た宋史五行志に、宣和六年、都城有寶青果男子、孕而生子、尋母不能收、曷去而逸去、豐樂樓酒保朱氏子之妻、可四十餘、忽生髭、長僅六七寸、疏秀而美、宛然一男子、特詔度爲女道士。

【符】 文體の名。 文體明辯に、按、古無此體、晉以後、始有之、唐世凡上迨下、其制有六、其六曰符、尚書省下於別、別下於熊、熊下於鄉、皆用之、蓋亦沿晉制、也然唐文不少概見、姑錄晉及南朝諸篇列之、亦以備一體云。

【符水】 神の符と神に供へし水とをいふ。 後漢書鳥甫嘉傳に、初鉅鹿張角自稱大賢良師、來事黃老道、畜養弟子、跪拜、首過符水呪說、以療病、病者頗愈、百姓信向之、又た陸游の家世舊聞に、或擇日施符水、竊人治病。

【符節】 に、以別り符なり。 周禮掌節

英蕩輔之、門關用符節、道路用旌節、皆有期以反節。

【剖符】 に、竹の長さ六寸なるを分ちて兩片となし、各一を持して信となすなり。 史記高祖紀に、剖符封功臣。

【若合符節】 符節は玉にて作り、文字を刻し、之を中分し、二人各其の一を藏して、以て信とするなり。 孟子離婁下篇に、地之相去也千有餘里、世之相後也千有餘載、得志行於中國、若合符節。

桴　烰　埠　部

【乘桴浮海】 イの部乘、桴（イカダ）浮海を見よ。

【烰烰】 氣の蒸し昇る貌。 爾雅釋訓に、烰烰、烝也と。注に、氣出盛貌と。疏に、大雅生民云、烝之浮浮、毛傳、浮浮、氣也。烰浮音義同。

【埠頭】 波止場なり。（ホの部步（ホ）を見よ） 康熙字典に、埠頭、謂貨物積販商泊之所と。又た品字箋に、類書纂要曰、山崖水涯謂之埠、埠步也、捨舟登陸、僅數步也、古作步。

【部署】 組を立てて署置するなり。 史記項羽紀に、部署吳中豪傑と。又た同書淮陰侯傳に、欲調呂后太子、部署已定。

【部曲】 兵隊の部分けのこと、部の下に曲あり。今の大小中小隊の區別の如し。 漢書李廣傳に、廣行無部曲行陳と。顏注に、續漢書百官志云、將軍領軍皆有部曲、大將軍營五部、部校尉一人、部下有曲、曲有軍候一人、今廣尚於道長、故行道之中、而不立部曲也。

【部索】 手を分けて探索するをいふ。 漢書許后傳に、部索雜人と。顏注に、罪人を部分して搜索するなり。

【部勒】 て治むるなり。 勒は治なり、兵を部わけして、以て法、部勒資斧及子弟。 史記項羽紀に、以兵法、部勒資斧及子弟。

普

【部落】 蕃將軍驛傳に、大討邊部と。 索隱に、崔浩云、匈奴、部落名と。又た唐書李勣傳に、酋長率部落五萬降于勣。

【部婁無松柏】 部婁は小阜なり、小さき場所には大なる者の生ぜざるをいふ。部婁、一に、塿に作る。說文に、附塞に作る、風俗通に云、部は阜の類なり。 左傳襄公二十四年に、子太叔曰、部婁無松柏。

【普汜】 風俗などの普く廣く行き屆くをいふ。 漢南子本經訓に、普汜無私。

【普施】 あまねく施すなり。 史記五帝紀に、高辛普施利物、不於其身。

【普及】 ヒロク行き屆くをいふ。

【普賢】 佛の偈に、願以此功德、普及於一切、此外不可枚擧。

【普現】 あちこちの國土に出沒して、衆生を濟度する菩薩なり。 大日經疏に、普是遍一切處義、賢最勝妙善義。

【普請】 アマネク乞ふといふ義なり。 法苑珠林に、一切聖凡、亦皆普請と。又た陸游の詩に、堂幹僧間普請疏。 我邦にて、フシンと讀みて、家屋を建築する義とす、正名緒言に、本朝中古寶掾浮屠、因挾朝旨、以募建堂塔、普請之名蓋起于此、後來不問、編案、通寶、工作之目也といへるは、轉用の由來を說き得て明かなり。

宣

【普天之下率土之濱】 溥（フ）天之下率土之濱を見よ。

【富士山】 我邦の富士山なり。 蘇楚六帖に、日本王城東北千餘里、有山名富士、或云是蓬萊也、高峻無際、三面臨海、山頂常有烟突起焉。

【富士巖】 明の宋濂の詩に、絕入層雲、富士巖、蟠根直壓三州閒、六月雪花翻素雲、何處深林覓白鶴、紅雲起處是蓬瀛、十二樓臺白玉京、不知秦世童男女、遇有兒孫跨鶴行。

【傳會】 ㊀正理を知らずして、事の合はすなり。 ㊁宜しきにより、附著して其說に成するないふ。 ㊀一篇の文章首尾完全に構成するないふ。 漢書宴金傳に、雖不好學、亦善傳會と。注に、因宜附著會合之。 ㊁後漢書張衡傳に、作二京賦、精思傳會、十年乃成と。又た文心雕龍附會篇に、何謂附會、謂總文理、統首尾、彌綸一篇、使辯雜而不越者也。

【傳險】 殷の傅說の隱れ居たる所の巖窟なり。故に又た傅巖に作る。 漢書地理志に、傳險、卽說所隱之窟名と。又た楊升菴曰、險、古巖字、聖人窟、今在陝州。

【傳近】 附近といふに同じ、附き近づくことなり。

【傳子】 仲長統の昌言に、宣曹傳之近臥房之內、交踏師人之閒。 書名。 晉の傳玄撰す、もと一百四十卷ありしが、宋に至りて僅に二十三篇を存するのみ、後ち遂に散佚せしが、幸に永樂大典によりて重輯して十二篇を得たり、卽ち百子全書に收むる者是れなり、淸の紀昀は、此の書論ずる所、皆治道に關切にして儒風を闡啓し、精意名言、往往にして在り、實貴とすべきなりといへり。

【傳粉郎】 白粉を附けたる男といふことにて、魏の何晏のこと なり。 世說容止篇に、何平叔晏美鬚眉、帝疑其傅粉、正夏月、與熱湯餅、既啖、大汗出、以朱衣自拭、色轉皎然と。注に、魏略曰、晏性自喜、粉帛不去手、按、此則晏之妖麗、本實外飾、且養自宮中、與帝相長、豈復晏其形姿待驗而明也。

【築傅巖】 殷の傳說が未だ湯王に遇はざるとき、傅巖といふ處に居りしをいふ。 書經說命上篇に、夢帝賚予良弼、其代予言、乃審厥象、俾以形旁求于天下、說築傅巖之野、惟肖、又た其の序に、高宗夢得說、使百工營求諸野、得諸傅巖、作說命三篇。

【傳璣之珥】 傳は附るなり、璣は珠の角あるもの、珥は耳環なり。 李斯の逐客上書に、宛珠之簪、傳璣之珥。

【傳說比列星】 殷の傳說といふ人は、死して天に上り星となりしといふ。 莊子大宗師篇に、傳說得之以相武丁、奄有天下、乘東維、騎箕尾而比於列星。

鈇　補　斌　無

【鈇鉞】 斧にヲノなり、鉞は大にして鉞は小なり。 禮記王制篇に、諸侯賜弓矢然後征、賜鈇鉞然後殺と。又た春秋繁露に、公侯賢者爲州、方伯賜鈇鉞、置虎賁百人。

【鈇鑕】 鈇はヲノ、鑕は體を載せるもの、刑することをいふ。

【補陀落】 ふ、海島と譯す。 一に補陀落迦ともいふ。 世說容止篇に、帝疑其傅粉、正夏月、與熱湯餅、既啖、大汗出、以朱衣自拭、色轉皎然と。注に、魏略曰、晏性自喜、粉帛不去手、按、此則晏之妖麗、本實外飾、且養自宮中、與帝相長、豈復晏其形姿待驗而明也。

【斌砆】 戰國魏策に、魏文侯曰、夫物多相類而非也、白骨疑象、武夫類玉。

【無事】 事なきをいふ、安閑なること。 老子第四十八章に、故取天下、常以無事。

【無逸】 書經周書の篇名にして、卽ち眞古文なり。 序に曰く、周公作無逸と、逸は、時君世主の最も忽にすべからざるもの、古より國家を有つもの、勤を以て興り、逸を以て廢れざるはなし、故に周公、成王の初政に當り、其逸を知りて無逸を知らざることを恐れ、是の書を作りて、以て之に訓えしなり、全篇凡そ六百餘言、上天命の精微より、下、耿祖の艱難閭里の怨詛に至るまで、具さに載せざるはなし、而して端を更むること七、皆嗚呼を以て之を發す、蓋し深嗟永嘆の餘なり、其の戒を垂るることの深切劃至

なるを見る。

【無似】 無似賢人に似たることなしとの意にて、謙遜の辭とす。出處禮記哀公問篇に、公曰、寡人雖無似也、顧聞所以行三言之道。

【無賴】 無賴 ㊀放懶にして、賴り托すべきなきをいふ。㊁物を惡み嫌りていふ。㊂愛するの極、卻て憎惡の語とす。出處 ㊀史記高祖紀に、始大人常以臣無賴不能治產業、不如仲力、今某之業所就孰與仲多と。又た南史王僧辯傳に、無賴者多依之、遂謀爲亂。㊁徐陵の烏棲曲に、唯憎無賴汝南蕪、天河未落猶爭鳴。㊂段成式の楊柳詞に、長恨早梅無賴極、先催春色出前林と。又た徐凝の憶揚州詩に、天下三分明月夜、二分無賴是揚州。

【無賴人】 無賴惡しき徒をいふ。出處雜纂三續に、不逢時宜、與無賴人、辨曲直。

【無事日月長】 無事唐人の詩の句。出處白居易の詩に、無事日月長、不覺天地闊。

【無事此靜坐一日是兩日】 無事人、何事をも爲さず、唯く心を靜にして坐せば、一日は兩日に當る程も時閑が長しとて、精神を靜にするの益あるをいふ。出處蘇軾の司命宮楊道士息軒の詩に、無事此靜坐、一日似兩日、若活七十年、便是百四十、黃金幾時成、白髮日夜出、開眼三千秋、速如駒過隙、景故東坡老、貴汝一念息、時來登此軒、目送過冲席、家山歸未能、題詩寄屋

薄

蜉

壁、と注に、按、碧溪漁隱叢話云、東坡云、無事此靜坐、便是一日似兩日、若能度此生、常似今日、年至七十、便是百四十歲、人世何藥能有此效、此方人人收得、但苦無人好湯、使多嚥不下、坡題息軒詩云云、城南朝天宮中、（ヤの部山（ヤマ）參日長を參看せよ）

【薄將】 テの部帝（ティ）命薄將を見よ。

【薄天之下率土之濱】 薄は徧なり、率は蒲なり、天の徧く覆ふ所の下、陸地の連續せる際限なり、因て天下中といふ義とす。出處詩經小雅北山篇に、普天之下、莫非王土、率土之濱、莫非王臣。孟子萬章上篇に引きて、薄を普に作る。

【蜉蝣之命】 蜉蝣は、朝に生じて夕に死す、極めて短命なる蟲なり、以て人生の短きに喩ふ。出處詩經曹風蜉蝣篇に、蜉蝣之羽、衣裳楚楚。毛傳に、蜉蝣渠略也、朝生夕死と。又た爾雅の疏に、一名渠略、似蜉蝣、身狹而長、有角黃黑色、震生糞土中、朝生暮死と。又た淮南子說林訓に、蟪蛄不識千歲、以極其樂、蜉蝣朝生而暮死、而龜其樂一と。又た白居易の詩に、長生無得者、學世如蜉蝣。

【蜉蝣戴盆】 負任の重き喩へ。能く上に山。

【蜉蝣校巨鰲】 蜉蝣が大なる海龜と力比べをなすとて、到底比較すべからざるに喩ふ。出處抱朴子に、蜉蝣校巨鰲、白蓋料大樟、豈所能及哉。

酉

葡

博

蒲

腐

【葡萄美酒夜光杯】 唐人の詩の句。出處王翰の凉州詞に、葡萄美酒夜光杯、欲飲琵琶馬上催、醉臥沙場君莫笑、古來征戰幾人回。

【博木之地】 博木は扶桑といふに同じ。出處淮南子に、東方之極、自碣石山過朝鮮、貫大人之國、東至日出之次博木之地、青土樹木之野、太蓬旬之所、司者萬二千里。

【蒲團】 蒲は蒲團の略、傳燈錄に、與我過蒲團來。

【蒲陶酒】 葡萄の實を以て釀造せし酒なり。出處史記大宛傳に、宛左右以蒲陶爲酒、富人蓄酒至萬餘石、久者數十歲不敗。

【腐儒】 腐は爛なり、用に立たざる學者をいふ。出處荀子非相篇に、易曰、括囊、無譽無咎、腐儒之謂也と。又た史記季布傳に、上折廟何之功、曰爲天下、安用腐儒。

【腐刑】 宮刑なり、腐臭なる故に腐刑といふ。一說に、丈夫勢を割き、復た子を生むこと能はず、腐木の實を生ぜざるが如し。出處司馬遷の報任安書に、最下腐刑極矣。

【腐索】 キの部朽（キウ）索馭六馬を見よ。

【腐心】 むね苦しめ煩はすこと。出處史記刺客傳に、日夜切齒腐

心。

【腐膓之藥】 フの部伐（バツ）性之狂を見よ。

【腐草爲螢】 腐れたる草が化して螢となるをいふ。出處禮記月令篇に、季夏之月、腐草爲螢。

【腐木不可以爲柱】 腐朽せる木は家の柱とならず、愚劣の人は要職に任ず可らざるをいふ。出處漢書劉輔傳に、腐木不可以爲柱、卑人不可以爲主。

賦

【賦】 賦文體の名。出處文體明辯に、按、詩有六義、其二曰、賦、所謂賦者、敷陳其事而直言之也、古者諸侯卿大夫交接鄰國、揖讓之時、必稱詩以喻意、以別賢不肖、而觀盛衰、如春秋傳所載、晉公子重耳亡之秦、秦穆公享之、賦六月、魯文公如晉、晉襄公享之、賦菁菁者莪、鄭穆公興、魯文公享于棐、子家賦鴻鴈、魯穆叔如晉、見中行獻子、賦圻父之類、皆以吟詠性情、各從義類、故情形於辭、則麗而可觀、發合於理、則則而可法、使讀之者有興起之妙趣、有詠歌之遺音、揚雄所謂詩人之賦、麗以則者是已、此賦之本義也、春秋之後、聘問詩歌不行、於列國、學詩之士、後在布衣、而賢士矣、志之賦作矣、即前所列楚辭是也、揚雄所謂詞人之賦、麗以淫者正指之也、然自今而觀、楚辭亦發乎情、而用以諷、風、實發六義、而時出之辭、蓋太麗而義尚可則、故朱子不敢直以詞人之賦目之、而雄之言如此、則已過矣、趙人荀況遊宦于楚、考其時在屈原之前、所作五賦、工巧深刻、純用隱語、若今人之揣謎、於詩六義、不當天壤、君子蓋無取焉、爾漢而下、作者繼起、獨賈生以命世之才、傍就騷律、非一時詩人所及、他如相如長於叙事、而或略於辭、或昧於情、揚雄長於說理、而或略於辭、至於班固、辭理俱失、若是者何、凡以不發乎情耳、然上林甘泉極其鋪張、而終諫於諷諫、而風之義未泯、兩都等賦極其炫曜、終折以法度、而雅頌之義未泯、故雖詞人自悼等賦、緣情發義、托物興詞、咸有和平從容之意、而比興之義未泯、故雖詞人之賦、而君子猶有取焉、以其爲古賦之流也、三國兩晉以及六朝、再變而爲俳、唐人又再變而爲律、宋人又再變而爲文、夫俳賦尚辭而失於情、故讀之者無興起之妙趣、不可以言則矣、文賦尚理而失於辭、故讀之者無詠歌之遺音、不可以言盛矣、至於律賦、其變愈下、始於沈約四聲八病之拘、中於徐庾隔句作對之陋、終於隋唐宋取士限韻之制、但以音律諧協、對偶精切、爲工、而情興辭皆置弗論、嗚呼、極矣、今分爲四體、一曰、古賦、二曰、俳律、三曰、文賦、四曰、律賦、然則學古者奈何、曰發乎情止乎禮義、其賦古也則、於古有徵、其賦今也則、於今有驗、其賦物也則、於物有況、以樂而賦、則讀者懽然以吁、以怨而賦、則讀者愀然以泣、按劍而賦、則讀者人欲掩袂而立、動容而賦、則讀者人欲拖紳而趨、發乎人心、而發出於六義、然後得賦之正體、合賦之本義、苟爲不然、則雖能配乎俳律、而不知其又入於文矣、學者宜細求之。

五

腐

【腐見】 フの部皮（ヒ）膚之見を見よ。

【腐寸】 腐寸を膚とし、指一本を寸とす、細きことにいふ。出處公羊傳僖公三十一年に、觸石而出、膚寸而合、不崇朝而徧雨乎天下者、惟太山爾と、注に、側手爲膚、按指爲寸と。又た風俗通に、雲觸石而出、膚寸而合、不崇朝而徧雨天下、其唯泰山乎、故爲五嶽之長。

【腐合】 前條を見よ。

【腐敏】 腐敏容貌大にして才智敏捷なるをいふ。出處詩經大雅文王篇に、殷士膚敏、祼將于京、出處孟子離婁上篇に此の詩を引けり。

【腐公】 腐公大なる功をいふ。出處詩經小雅六月篇に、薄伐玁狁、以奏膚公。

【腐理】 腐理肌の文理をいふ、俗にハダノキメといふこと。出處荀子榮辱篇に、骨體膚理、辨麤理疏、以說、以腐理、以說、と。發は擦に同じ。

【腐剄】 腐剄肌にイレズミをすること。出處座陵官下記に、上都街肆惡少年、皆黥而膚剄、備衆物形狀。

【鍑腐】 鍑腐文身に同じ、入れ墨なり。出處左思の魏都賦に、或鍑膚而鏤、髮。

敷

【膚受之愬】 意義肌膚の受くる如く利害の身に切なるウッタヘなり。出處論語顏淵篇に、浸潤之譖、膚受之愬、不行焉、可謂明也已矣。

【膚不生毛】 意義勞役を勤めて、皮膚いふ。出處司馬相如の難蜀父老に、煩心於膚、而身親其勞、躬膝胝無胼、膚不生毛。

【敷政】 意義政事を敷き弘めること。出處詩經商頌長發篇に、不競不絿、敷政優優、百祿是遒。

【敷教】 意義教を敷き弘めること。出處書經舜典篇に、舜命契曰、百姓不親、五品不遜、汝作司徒、敬敷五教、在寬。韓愈祭柳子厚文に、惟帝俾敷教、敷教叶天工。

【敷道】 意義道を敷き弘めること。出處晉書に、成帝詔曰、王以明德茂親、居宗師之重、宜敷道養德、醇一其操。

【敷治】 意義政を敷き治ること。出處孟子滕文公上篇に、舉舜而敷治焉。

【敷言】 意義天下に廣く言ふこと。出處書經洪範篇に、皇極之敷言、是彝是訓、于帝其訓。

【敷告】 意義天下に敷き告ぐること。出處晉書に、可敷告天下、使知區區之朝、思開過也。

【敷納】 意義言語を以て敷き弘めて、君の心に納ること。出處書經益稷篇に、敷納以言、明庶以功、車服以庸。

【敷奏】 意義言を以て敷き弘めて、君に奏すること、猶は奏聞といふがごとし。出處書經舜典篇に、敷奏以言、明試以功、車服以庸と。又た詩經商頌長發篇に、何天之龍、敷奏其勇。

【敷衍】 意義廣く敷き延ばすことなり。出處張衡の西京賦に、蓊蔚敷衍、鬱町成墓と。又た舊唐書代宗紀に、撫民除疹氣、敷衍德音、延洪納祉、帝謙何深。

【敷英】 意義敷き廣がりて、花のさくを いふ。出處傅咸の賦に、攜昵友一以遊逸兮、覽偉草之敷英。

【敷榮】 意義草木の茂り榮えて廣く敷くをいふ。出處王筠の蜀奏花の賦に、仰椒屋而敷榮、植蘭房而舒漢と。又た許敬宗の文に、百卉敷榮、六合清朗。

【敷條】 出處應瑒の賦に、朝敷條以匿節、夕結秀而垂華。

【敷施】 意義普く政教を敷き施すをいふ。出處書經皐陶謨篇に、翕受敷施。孔傳に、能合受三六之德、而用之布施と。孔穎達の疏に、敷施、普徧也。史記夏本紀に、翕受普施と作る。

駙

【駙馬】 意義（一）天子の乘輿に用ふる副馬なり。漢の武帝のときに、駙馬都尉の官を置き、駙馬を掌らしめたり。（二）魏晉の世より以後、公主（天子の女）に尚するもの、必駙馬都尉に拜す、魏の何晏、晉の杜預、王濟の如きこれなり。因て女婿を駙馬と稱すること、なれり。出處漢書百官公卿表に、駙馬都尉、掌駙馬、武帝初置、秩比二千石と。顏注に、駙、副馬也、非正駕車、皆爲副馬。（三）陳書貴戚傳に、駙馬都尉、從由漢武、武以備諸功臣、或以加恩戚屬、齊職儀曰、凡尚公主、必拜駙馬都尉、魏晉以來、因爲職準、蓋以王姬之貴、庶姓之輕、若不加其等級、寧可合卺而醮、所以假駙馬之位、乃崇於皇女也と。又た行書羅錄に、皇女爲公主、其夫必拜駙馬都尉、故謂之駙馬。

憮

【憮然】 意義心を取り失ふ貌。廣韻に、憮、失意貌と。三蒼に、怪愕之辭とあり。出處論語微子篇に、夫子憮然曰と。又た孟子滕文公上篇に、夷子憮然。

嘸

【嘸然】 意義轉明ならざる貌。出處漢書韓信傳に、令其裨將傳餐曰、今日破趙曾食、諸將皆嘸然、陽應曰諾。

嫵

【嫵媚娘】 意義唐の樂府の曲名なり。出處海錄碎事に、鮮卑娘、古樂府也、又有五銅娘歌、東信鮮卑娘歌云、朝來戶前照、鏡含奩盈盈自看眉心濃、直點額角輕黃細安と。又た樂苑に、鮮卑娘、大鮮卑娘、竝羽調曲也、唐高宗永徽末、天下歌鮮卑娘、未幾立武后、按陳後主已有此歌、則永徽所歌蓋舊曲云、鮮亦作武と。又た羅虬比紅兒詩に、誰能更把聞心事、比竝當時武卑娘。

撫

【撫箏】 意義琴を彈ずること。出處晉書桓伊傳に、謝安女壻王國寶、利無檢、安惡其爲人、每抑制之、及孝武末年、國寶以安功名盛、極而構會之、帝召伊飲、讌安侍坐、命伊吹笛、伊吹笛一弄、放笛云、臣於尊分乃不及笛、然自足以韻合、歌賞、請以尊歌、伊便撫箏而歌、怨詩、曰、爲君既不易、爲臣良獨難、忠信事不親、乃有見疑人、周旦佐文武、金縢功不刊、推心輔王室、二叔反流言、聲節慷慨、安泣下沾衿、越聞就之、撫其聲曰、使君於此不凡、帝甚有愧色。

舞

【撫軍】 意義軍の總督をいふ。出處左傳閔公二年に、太子、君行則守、有守則從、從曰撫軍、守曰監國、古之制也。

【撫育】 意義下民を撫で養ふこと。出處後漢書齊武王傳に、撫育恩愛甚篤。

【舞人】 意義舞を舞ふ人。出處論語八佾篇首章の皇侃義疏に、舞人亦有八行。

【舞子】 意義前條に同じ。出處周禮鄭注に、皷折五來繪、今舞星舞子持之。

【舞扇】 意義舞ふときに用ふる扇。出處張正見の詩に、月來疑舞扇。

【舞蹈】 意義足ぶみして踊るなり。出處草木子に、山呼、漢制也、自武帝祀嵩岳始、舞蹈、唐制也、自武后賜宋之問始。

【舞臺】 意義舞を舞ふ臺をいふ。出處沈全期の詩に、林香散舞臺。

【舞馬之災】 意義馬（バ）舞之災を見よ。

無

【舞雩歸詠春花香】 意義宋人の詩の句。出處朱熹の四時讀書樂の詩に、鉢雩歸詠春花香。

【舞榭歌臺羅綺叢】 意義ヨ泰淮丁家水閣の詩に、舞榭歌臺羅綺叢、都無人跡有春風、踏青無限傷心事、併入南朝落照中。

燕

【燕然】 意義草の荒れ茂る貌。出處李白の詩に、燕然蕭草暮、颯爾涼風吹。

【燕仕】 意義燕（ヨ）沂を見よ。

賻

【賻儀】 意義喪儀を助くるものをいふ。出處公羊傳隱元年に、車馬曰賵、貨財曰賻、衣被曰襚、何休注に、賵、猶覆也、賻、猶助也、皆助生送死之禮、襚、猶遺也、遺是助死之禮知生者賵賻、知死者賻襚と。又た穀梁傳隱公元年に、乘馬曰賵、衣衾曰襚、貝玉曰含、錢財曰賻と。又た白虎通に、賵助也、賵報也、所以助生送死、賻、助也、賻賻、車馬曰賵、玩好曰賻、衣服曰襚。

賻

【賻】 意義カメのフタをするをいふ。出處周禮地官舞人に、凡萬民之食食者、人四升を容る。

覆

【覆載】 意義（一）天の覆ひ地の載するをいふ。（二）直ちに天地の義とす。出處禮記に、天之所覆、地之所載と。又た莊子天道篇に、覆載天地、彫刻衆形、而不爲巧。（三）周禮小宰疏に、覆載之德、其功尤盛、欲執之、德無可稱焉、故無課、直加敬而已と。又た班婕妤の賦に、猶被覆載之厚德兮、不蹇捐于中路。

【覆幬】 意義前條の一に同じ。幬は覆なり。出處中庸第三十章に、譬如天地之無不持載、無不覆幬。

【覆育】 意義覆幬（オホフ）して育成するをいふ。出處淮南子に、吻嘘覆育、萬物群生。

【覆載】 意義者書の世に行はれずして反古となり、醬油瓶を覆ふの用に供せらるゝなり。出處漢書揚雄傳に、雄既侯邑常從、雄居、受其太玄法言、焉、劉歆亦嘗觀之、謂雄曰、空自苦、今學者有祿利、然尚不能明易、又如玄何、吾恐後人用覆醬瓿也、雄笑而不應と。瓿は小甕なり。又た晉書左思傳に、陸機曰、聞有會稽、欲以三都、詩、其成、取覆醬瓿。

【覆瓿】 意義カメのフタをするをいふ。出處晉書孔臻傳に、性嗜酒、醇音戒之、曰、駙恒飲、不見酒家覆瓿布、日月久糜爛邪、答曰、公不見肉精淹更堪久邪。

【覆藏】 **字義** 心に覆ひ藏すをいふ。**出處** 大集經に、從佛懺悔、不敢覆藏。

【覆面】 **字義** 面を覆ふものの類なり。**出處** 顯密法儀便覽に、密灌に覆髮・帽・巾・譜系なり。

【譜第】 **字義** 譜系なり。**出處** 二猶ほ血屬といふがごとし。**出處** 一晉書杜預傳に、參考秉世譜第在朝胤親。二宋元通鑑に、李生年者、壽陽公主之譜第也。

四 夫 フウ

【夫婦】 **字義** メウトなり。**出處** 易經序卦傳に、有天地然後有萬物、有萬物然後有男女、有男女然後有夫婦、有夫婦然後有父子。又た中庸第十二章に、君子之道造端乎夫婦、及其至也、察乎天地。又た涵典に、燧皇氏始有夫婦之道。注に、人皇是也。

【夫子】 **字義** 子といふべき處に、夫の字を加へたるなり、日知錄に、直に子と曰はずして、夫の字を加ふるは、不成辭を避くるなりといへり。二春秋の時先生長者を呼ぶ辭。三將士をいふ。四男子の通稱。**出處** 孔子の門人、孔子を稱して夫子といへるにより、後世遂に師を尊ぶの稱となれり。五妻、その夫（チット）を稱する辭。**出處** 一左傳文公元年に、秦伯曰、孤實貪食以鴟夷子、夫子何罪と。又た國語楚語に、屈宗將死、謂麦曰、夫子屬之。麦曰、夫子何罪。又た論語憲問篇に、夫子は屈到を指すと。又た論語憲問篇に、信乎夫子不言不笑不取乎。夫子は、衛の大夫公叔文子を斥すなり。又た隋餘叢考卷三十六に、夫子本春秋時先生長者之稱、故孔門弟子稱孔子、皆曰夫子、須溪曰、夫子謂賢者、夫子之文章、蓋皆治當時之稱、非特創也。二書經泰誓中篇に、勗哉夫子、丈夫之通稱。四史記孔子世家の贊に、中國言六藝者、折中于夫子、可謂至聖矣。夫子は、孔子を斥す。同書鄧鴻傳に、校先生嚴夫子と。注に、當時師を敬尚して之を夫子と稱す。五白虎通號篇に、夫者、扶也、以道扶接者也。謂婦之夫也と。又た孟子滕文公下篇に、女子之嫁也、母命之往送之門、戒之曰、往之女家、必敬必戒、無違夫子。

【夫子自道】 **字義** 自分の行ひを自分で言ふなり。**出處** 論語憲問篇に、子曰、君子道者三、我無能焉、仁者不憂、知者不惑、勇者不懼、子貢曰、夫子自道也。

九 風

【風日】 **字義** 風と日とをいふ。**出處** 晉書陶潛傳に、陶潛少懷高尚、博學善屬文、頗說不羈、環堵蕭然、不蔽風日、短褐穿結、簞瓢屢空、晏如也。

【風月】 **字義** 清風明月をいふ。**出處** 南史徐勉傳に、徐勉嘗巽門人、夜集、客有廣談、求當事五官、勉正色答曰、今夕止可談風月、不宜及公事。

【風雨】 **字義** 風吹き雨降るをいふ。**出處** 詩經鄭風雨篇に、風雨淒淒。

【風霾】 **字義** 風吹きて土を降らすをいふ。**出處** 釋名に、風而雨土降、霾、晦也と。又た詩經邶風終風篇に、終風且霾。

【風水】 **字義** 陰陽家の說にして、墳墓の地を相する術なり。**出處** 蜃子全書に、郭法有風水山岡之說、卜其宅兆、非者今陰陽家相其山岡風水也。朱子語錄に、古今建都之地、其過于冀、所謂無風以散之、有水以界之也と。又た葬書札記に、葬書云、乘風則行、界水則止、此風水二字所由始也、按易之大過、巽下兌上、巽、風也、兌、澤水也、風水之義、蓋取諸此。**出處** 韓愈の柳子厚墓誌銘に、銘曰、是惟子厚之宅、既固既安、以利其後人と。海保漁村の補注文章軌範に云ふ、此謂風水、其術始見史記樗里子傳、至後世益詳と。蓋し風水宜しきを得ば、その子孫繁昌すといふ。

【風波】 **字義** 二風と波となり。三爭論の辭九章に、願風波以從流兮焉、洋洋而爲容。四莊子人間世篇に、言者風波也、行者

實喪也、夫風波易、以動、實喪易、以危と。又た黃庭堅の題玄眞子圖に、人間底是無波處、一日風波十二時。

【風潮】 **字義** カゼとシホとなり。**出處** 謝靈運の詩に、客遊瞻水宿、風潮相接連、風潮無極已と。又た孟浩然の舟中曉望の詩に、軸艫爭利涉、來往接風潮。

【風塵】 **字義** 一兵亂をいふ。二物外に對して、人世のことをいふ。三塵累俗累といふに同じ。四官途を指していふ。五俗吏の職務をいふ。六京官に對して、地方の官をいふ。七花柳の地をいふ、汚亂の義より出づ。八風と塵とをいふ。**出處** 一杜甫の詩に、風塵三尺劍、社稷一戎衣。風塵之警の條を參看せよ）二晉書王衍傳に、神姿高徹、如瑤林瓊樹、自然是風塵表物。三嵇叔倫の贈盤亮に來往風塵、共白頭。四晉書虞寄傳に、處靜味道無風塵之志と、又た方干の詩に、風塵辭帝京、舟纜到家林。五李白の鳴皐歌に、若使巢由枉趾於軒冕兮、亦奚異乎蟠龍隱鱗於風塵。六杜甫の詩に、悲君隨燕雀、薄宦走風塵。又た高適の詩に、一風東山三十春、豈知書劍老風塵。七荀寄雜說に、妾失身風塵、又た云、我在風塵中。八漢書刑法志に、春不得避風塵と。又た陸機の詩に、京洛多風塵、素衣化爲緇。

【風土】 **字義** 風氣と水土とをいふ。**出處** 後漢書衛颯傳に、先是含瀛須陽曲江三縣、越之故也、武帝平之、內屬、桂陽民居溪山、深谷、習其風土、不出田租。

【風師】 **字義** 風の神をいふ。**出處** 風俗通記典篇に、風師者、箕星也。

【風聲】 **字義** 一土地風俗に因て、爲めに消息を聞くをいふ。**出處** 書經畢命篇に、旌別淑慝、表厥宅里、彰善癉惡、樹之風聲と。又た左傳文公六年に、君子曰、秦穆之不復爲盟主也、宜哉、云云、樹之風聲と。又た徐幹の法象論に、風聲紀乎鄉黨。三國魏志許靖傳の裴注に、三閭消息于風聲、托、寄情于思想。

【風聽】 **字義** 風の如く微かに聞くこと。**出處** 國語晉語に、風聽臚言於市と。韋注に、風、采也、聽、傳也、采聽商旅所傳善惡之言。

【風聞】 **字義** 前條に同じ。**出處** 後漢書討陀弟宗族已誅論と。又た晉書顧和傳に、對王導曰、明公使網漏吞舟、何器不采風聞、以察察爲政と。又た魏書任城王雲長子澄傳に、御史之贈、風聞是司。**出處** 容齋四筆に、御史計、風聞論事、相承有此言、蓋自晉王源、下如此、齊沈約爲御史中丞、奏彈御史臺無受訟之例、有詞狀在門、御史採狀、有可彈者、即略其姓名、皆云風聞訪知。

【風動】 **字義** 四方の民を敎勸すること、風の物を動かすが如くなるをいふ。**出處** 書經大禹謨篇に、帝曰、俾予從欲以治、四方風動、惟乃之休。

【風刺】 **字義** 直言せずして遠まわしにいふこと。**出處** 詩經關雎篇の序に、詩有六義焉、一曰風、上以風化下、下以風刺上、主文而譎諫、言之者無罪、聞之者足以戒、故曰風。

【風靡】 **字義** 風の草木を靡かすが如くに從ふなり。**出處** 史記淮陰侯傳に、燕從風而靡。

【風岸】 **字義** 人となり威風あり て驍悍なるをいふ。**出處** 唐書官傳に、稜稜有風岸。

【風景】 **字義** 風趣景色なり。**出處** 世說に、羊祜每風景必造峴山。

【風物】 **字義** 其土地の風光景狀をいふ。**出處** 宋史張觀傳に、父居業、嘗過洛、喜其山川風物、曰、吾得老於此足矣、觀於是買田宅、營林樹、以適其意。

【風體】 **字義** 容貌風采をいふ。**出處** 梁書蕭遜傳に、風體若枝、準繩斯在。

【風骨】 **字義** 風采骨格をいふ。**出處** 宋書武帝紀に、身長七尺六寸、風骨奇特、家貧有大志、不治廉隅。

【風漢】 **字義** 風は瘋に通ず、漢は人なり、瘋を疾める人。**出處** 玉泉子に、劉蕡試策直言、中官仇士良曰、奈何放此風漢及第。

【風疾】 **字義** 狂疾をいふ。**出處** 後漢書袁閎傳に、封觀者有志節、當舉孝廉、以兄名位未顯、恥先受之、遂稱風疾、瘖不能言、火起、觀屋、徐出避之、忍而不告。

【風邪】 **字義** 感冒症に罹るをいふ。**出處** 道德指歸論に、大難之將生也、猶

風邪之中ニ人。

【風穴】（フウケツ） 意義風の吹き出だす穴をいふ。出處遊異記に、列禦寇鄭人、御ニ風而行、常以ニ立春日一、陟ニ乎八荒一、立秋日遊ニ於風穴一、是風至即草木皆落、謂ニ之離合風。

【風鐸】（フウタク） 意義簷間に懸け、風にて鳴る鈴なり、フウリン。出處開天遺事に、岐王宮中於ニ竹林内一懸ニ碎玉片子一、每夜聞ニ玉片子相觸聲一、即知ニ有ニ風、號爲ニ占風鐸一と。又た宋之問の詩に、風鐸喧ニ行瀾一、天花拂ニ舞筵一。

【風鈴】（フウレイ） 意義前條に同じ。出處百緣經に、風鈴如ニ帙簪一。

【風車】（フウシヤ） 意義カザグルマなり。出處帝城景物略に、剖ニ秫稭二十一錯一豆貼ニ方紙其兩端一、紙各紅綠、中孔以細竹一、横安ニ秫竿上一、迎ニ風張而疾趨、則轉如ニ輪、紅綠渾渾如一、曰ニ風車一。

【風輪】（フウリン） 意義虛空の上に在るといふも の。出處俱舍論、世間品に、先於ニ最下一依ニ止虛空一有ニ風輪生一、廣無數、厚十六億踰繕那。

【風鑑】（フウカン） 意義風采鑑識をいふ。出處南史風鑑明遠、或識準宏正、才略開遇と。又た宋史趙積傳に、少好ニ學、吳大府劉田霖、名ニ有ニ風鑑一、故以ニ女妻一積と。又た蒙求に、王衍風鑑。

【風爐】（フウロ） 意義席上にて茶の湯を沸かす具なり。出處朱子語類に、鄭少梅解ニ草卦一、以爲ニ風爐一、赤解得好と。又た茶經に、風爐以ニ銅鐵一鑄之、如ニ古鼎形一、厚三分、緣闊九分、令ニ六分虛一中致其爇場、凡三足、其灰承作ニ三足鐵杵一、擡之。

【風箏】（フウサウ） 意義紙鳶の、ことなり、風に逢て鳴聲を發す、故に箏（コト）といふ。出處杜甫の詩に、風箏ニ吟ニ玉柱一、露井凍ニ銀牀一と。又た詢蒭錄に、風箏即紙鳶、又名ニ風鳶一、初五代漢李鄴於ニ宮中一作ニ紙鳶一、引ニ線乘ニ風爲ニ戲一、後於ニ高首一、以ニ竹爲ニ笛一、使ニ風入作ニ聲一、如ニ箏鳴一、俗呼ニ風箏一。

【風刀】（フウトウ） 意義人の死せんとするとき、刀風皆動く、千刀を以て身を剌すが如しと、善果あるもの多く苦悶なく死るといふ。出處正法念經に、命終時、風刀皆動、千尖刀如ニ刺ニ其身上一、中略、若有ニ善業一則多不ニ苦惱一。

【風化】（フウクワ） 意義風は諷なり、人を諷導して善に化せしむるなり。出處詩經鄘風、鶉奔、后妃之德也、風之始也、所ニ以風ニ化天下一而正ニ夫婦一也、故用ニ之鄉人一焉、用ニ之邦國一焉、風、風也、教也、風以動之、教以化之。

【風教】（フウケウ） 意義前條に同じ。

【風憲】（フウケン） 意義日用役なり。出處明律に、凡風憲官吏。

【風俗】（フウゾク） 意義風は上の化する所、俗は下の習ふ所なり。出處孝經廣要道章に、移ニ風易ニ俗、莫ニ善ニ於樂一。又た史記樂書に、以爲州異國殊、情習不ニ同、故博採ニ風俗一爲ニ比樂律。

【風格】（フウカク） 意義風采品格なり。出處世說德行上篇に、李元禮風格秀整、高自標搖。

【風槩】（フウガイ） 意義前條に同じ。出處晉書祖逖傳に、逖豪爽有ニ風槩一、姿貌甚偉。

【風味】（フウミ） 意義猶ほ好味のごとし。出處陳師道の詩に、風味若ニ對君一と。蘇君は酒をいふ。

【風儀】（フウギ） 意義容貌威儀の整ふをいふ。出處北齊書段孝言傳に、少警發有ニ風儀一。

【風情】（フウジヤウ） 意義風趣に同じ。面白き樣子をいふ。出處白居易の詩に、倘有ニ風情一或可求。

【風丰】（フウフウ） 意義丰は豐滿なり、一說に美好の貌なり、風姿の美はしきをいふ。出處詩經鄘風、蝃蝀、子之丰兮、俟我於著。

【風度】（フウド） 意義風采度量なり。出處唐書張九齡傳に、風度能若ニ九齡乎一と。

又た同書宋璟傳に、風度凝遠、人莫ニ涯ニ其量一。

【風貌】（フウバウ） 意義男振りなり。出處北夢瑣言に、路侍中山嚴風貌之美爲ニ世所一聞。

【風姿】（フウシ） 意義姿は形貌なり。出處晉書王衍傳に、王衍字夷甫、神清明秀、風姿詠雅。

【風采】（フウサイ） 意義威風光采、即ちヤウスなり。出處漢書黃霸傳に、霸材長ニ於治一民、及爲ニ丞相一、總ニ綱紀一、號合ニ風采不一及ニ丙魏于定國一と。又た同書雲光傳に、天下想ニ聞其風采一。

【風色】（フウシヨク） 意義風の色といふことにて、晴天にいふ。出處何遜の詩に、風色極天淨と。又た盧照鄰の詩に、今朝風色好。

【風韻】（フウイン） 意義風采と趣味とをいふ。出處晉書桓石秀傳に、石秀幼有ニ令名一、風韻秀徹、博ニ涉群書一、尤善ニ老莊一、常獨ニ處一室、簡ニ於應接一、時人方ニ之庾純一、甚爲ニ簡文帝所一重。

【風神】（フウシン） 意義人の容姿にいふ。出處晉書裴楷傳に、風神高邁、容儀俊爽。

【風操】（フウサウ） 意義風采と節操とをいふ。出處南史袁粲傳に、清警有ニ風操一。

【風流】（フウリウ） 意義一先王の遺風餘流なり。二詩酒にして世俗に超脫せるなり。出處一漢書趙充國傳贊に、秦詩曰、王子興ニ師、修ニ我甲兵一、與ニ子偕行一、其風聲氣俗、自ニ古而然、今之歌謠、慷慨風流、猶存ニ焉一と。又た後漢書王暢傳に、國期出ニ于漢陵三后生一、自ニ新野一、士女沾ニ教化一、黔首仰ニ風流一、自ニ中興一以來、功臣將相繼ニ世而隆一と。又た北史李彪傳に、金不ニ可滅一、而風流不ニ泯者一、其惟載籍乎。三晉書樂廣傳に、天下言ニ風流一者、以ニ王樂一爲ニ稱首一と。又た同書王獻之傳に、少有ニ盛名一、而高邁不羈、風流爲ニ一時冠一。

【風雅】（フウガ） 意義詩の國風と雅頌となり、因て詞章の義とす。出處文選の序に、風雅之道、粲然可ニ觀一。

【風蔦】（フウエン） 意義紙鳶（タコ）なり。出處唐書田悅傳に、以ニ紙爲ニ風蔦一。

【風花】（フウクワ） 意義斑紋の狀を成せる雲をいふ。出處楊慎の集に、集雲如ニ斑駁形一、舟人謂ニ之風花一。

【御風】（ギヨフウ） 意義風に乘るなり。出處莊子逍遙遊篇に、列子御ニ風一、冷然善也と。又た蘇軾の前赤壁賦に、憑ニ虛御一風。

【移風】（イフウ） 意義風俗を移し易ること、上の習を風といひ、下の習を俗といふなり。出處孝經廣要道章に、移ニ風移ニ俗、莫ニ善ニ于樂一。

【望風】（ボウフウ） 意義祿子を望見するなり。出處阮籍の歌に、望ニ風旗一服と。又た唐書に、李邕少知名、李峱等薦爲ニ諫官一、拜ニ拾遺一、東封獻ニ書、稱旨、嘗陵後進之流不ニ識一李邕一、降ニ阡陌一、衆觀望風尋訪。

【風流人】（フウリウジン） 意義風流の人なり。出處晉書流人、神曰、劉惔清蔚簡令、王濛溫潤恬和、桓溫高爽遇出、謝商清易合達。

【風月主】（フウゲツシユ） 風月主人を見よ。

【風雅頌】（フウガシヨウ） シの部詩（シ）經を見よ。

【風草政】（フウサウセイ） 意義凡そ政は君子より、始まる、君子仁なれば、民は之に從ふこと、風の草に加はりて、草の之れに偃すがごとし、故にいふ。出處汲冢周書に、周公旦曰、嗚呼殷政總總若ニ風草一、有ニ所偃一、有所虛、知此如何。

【風土記】（フウドキ） 意義書名。出處晉書周處傳に、風土記十卷。

【風雨時】（フウウキアリ） 意義五風十雨といふことなり。出處漢書晁錯傳に、日月光、風雨時。

【風中燭】（フウチユウシヨク） 意義風の中の燈火の滅へきに喩ふ。出處古樂府忽謂行に、百年未ニ幾時一、奄若ニ風中燭一と。又た杜甫の詩の注に、阮瞻九日會ニ親友一、曰、人生如ニ風中燭一、不ニ知明年此日再聞一。此食、誰是強健。

【風狂夫】（フウキヤウフ） 意義狂人なり。出處山堂肆考に、寒山子翻身搖掌大笑、問丘公見而拜之、寺僧曰、大守何禮ニ風狂夫一耶。

【風字硯】（フウジケン） 意義風の字の形につくりたる硯。出處硯譜に、曾榕有ニ老奥一、云、右草（王羲之）之後、持ニ一風字硯一、大尺餘、色正赤、用之不ニ竭一、蠟石、云右東所用石。

【風流宰相】（フウリウサイシヤウ） 意義風流なる宰相なり。出處齊書王儉傳に、儉音調

し人曰、江左風流宰相、唯有謝安、蓋自比也。

【風流安石】 風聲品流、晉の謝安に似たりといふ。安石は、謝安の字。出典宋史遼傳に、遼故受知於王安石、安石嘗與詩、有風流謝安石、瀟灑陶淵明之稱。

【風流警拔】 ッとしたる所あるをいふ。出典北齊書斐讓之傳に、爲太原公開府記室、與楊愔友善、相過則清談竟日、愔每云、此人風流警拔、斐文手爲不亡矣。

【風流罪過】 ふこと。出典北齊書郎基傳に、基爲潁川太守、清慎無所營求、唯顏令寫書、潘子義遣之書曰、在官寫書、亦是風流罪過。書生寫したればとて、法律にも觸れず、人の害にもならず、故にいふ。

【風舉雲搖】 く彼地此地へ行くこと。出典班固の西都賦に、遂乃風舉雲搖、浮游薄寶、前乘秦領、後越九嵕。

【風伯雨師】 風の神と雨の神なり。出典史記、司馬相如傳に、召屏翳、誅風伯、而刑雨師。又た搜神記に、風伯雨師、星也、風伯者箕星也、雨師者畢也。

【風雨淒淒】 風や雨の物さびしきをいふ。出典詩經鄭風風雨篇に、風雨淒淒、雞鳴喈喈、既見君子、云胡不夷。出典杜牧の阿房宮賦に、舞殿冷袖、風雨淒淒。

【風雨對牀】 唐の韋蘇州が、弟に贈る詩に、風雨對牀の文字あり、蘇東坡が見て深く感じ、その弟子由に詩を贈りて、亦此の語を用ゐたり、因て兄弟相會する故事となれり。出典韋應物の贈し弟詩に、余解郡符去、寢爲外事牽、寧知風雨夜、復此對牀眠、始話南池飲、更跡西樓篇、無將二會夢、淺月坐推遷。又た蘇軾の辛丑（仁宗の嘉祐六年）十一月十九日、既長子由別於鄭州西門之外、馬上賦詩、篇寄之、詩に、不飲胡爲醉兀兀、此心已逐歸鞍發、歸人猶自念庭闈、今我何以慰寂寞、登高回首坡壠隔、但見烏帽出復沒、苦寒念爾衣裳薄、獨騎瘦馬踏殘月、路人行歌居人樂、幸僕怪我苦憔悴、亦是知人生要有別、但恐歲月去飄忽、君知此意不可忘、慎勿苦愛高官職、と、自注に、嘗對記、嘗昔、夜雨何時聽蕭瑟、君知此意不可忘、慎勿苦愛高官職、と、又た王直方詩話に、東坡與子由在懷遠驛、嘗讀韋蘇州詩、至寧知風雨夜、復此對牀眠之句、惻然感之、乃相約早退、共爲閒居之樂、故在鄭別子由云、寒燈相對記疇昔、夜雨何時聽蕭瑟、又初秋子由與坡相從彭城、賦詩云、誤喜對牀尋舊約、不知飄泊在彭城、子由使虜、在神水館、賦詩云、夜雨從來對榻眠、技行萬里隔渤天、坡在御史獄、有云、他年夜雨獨傷神、在東府有云、對牀定悠悠、夜雨今蕭瑟、其同韓對有云、對牀食聽連宵雨、又曰、對牀欲作連夜雨、又曰、對牀老兄弟、夜雨鳴竹屋、此其兄弟所賦也、退休之約、可謂無日忘之、然竟不能成其約、其意見於遡遙堂詩叙云。

【風雲月露】 空詞浮文といふこと。出典陶青李謂懲に、涯爲累屢、不能成其約、月露之形、積采盈箱、此是風雲之狀。

【風花雪月】 四時の好き景色をいふ。出典鄭谷の寄趙大諫詩に、雪風花月好、中夜便招延と、又た蘇軾の雪後の詩に、風花誤入開春苑、雪月長臨不夜城。

【風月主人】 なるをいふ。出典清風明月の主人公となるをいふ。出典九代劉史に、歐陽彬嘗文辭、劉主以親爲嘉州太守、彬大喜曰、青山綠水中爲二千石、作詩飲酒、爲風月主人、豈誠不喜乎、忻然就任と。又た黃庭堅の詩に、試問淮南風月主と。注に、江山風月本無常主、閑者便是主人。

【風月玄度】 といふ人を思ふといふ故事にて、人と疎濶なることに用ふ。出典世說に、劉尹曰、清風朗月、會人思玄度。

【風月無邊】 風月の二字外廓を去れば、虫二となる。出典鉅雨亭隨筆に、唐伯虎題岐湘英家圖云、風月無邊、見者皆贊美、祝枝山見之曰、此嘲汝輩爲虫二也、湘英問其義、枝山曰、風月字無邊非虫二乎、湘英終以爲美、不之易。

【風塵表物】 人をいふ。出典晉書王衍傳に、王戎謂王衍曰、神姿高徹、如瑤林瓊樹、自然是風塵表物。

【風聲鶴唳】 敗軍の兵が風の聲や鶴の鳴聲を聞て、追兵ならんと狼狽せることをいふ。俗に臆病神に襲はるゝといふ意に用ふ。出典晉書苻堅載記に、堅銳意荆襄、將謀入寇、引群臣會議、堅曰、以吾衆旅、投鞭於江、足斷其流、苻融等諫、不從、堅發長安、戎卒六十餘萬、騎二十七萬、水陸齊進、融等攻陷壽春、晉遣謝石謝元等、水陸七萬、相繼距融、堅與融登城而望王師、見部陣齊肅、將士精銳、又北望八公山、草木皆類人形、顧謂融曰、此亦勁敵也、憮然有懼色、列陣逼肥水、融略陣馬倒被殺、軍遂大敗、堅爲流矢所中、單騎遁還、風聲鶴唳、皆謂晉師之至。

【風檣陣馬】 航海し、健馬に跨りて陣頭に立つ、共に俊爽の事なり。出典全唐詩話卷三に、李賀、杜牧之序、其文集云、風檣陣馬、不足爲其勇也、瓦棺篆鼎、不足爲其古也、時花美女、不足爲其色也、荒國陵殿、梗莽邱隴、不足爲其恨怨悲愁也、鯨呿鼇擲、牛鬼蛇神、不足爲其虛茫誕幻也。

【風雲之會】 ㊀雲と龍とは遇ひ、風と相際會するをいふ。㊁龍が風雲を得て天地の間に飛躍するが如く、英傑の士が時機に投じて大功を建つるをいふ。出典㊀易經文言傳に、雲從龍、風從虎と。又た韓非子愼勢篇に、愼子曰、飛龍乘雲、騰蛇遊霧、雲罷霧霽而龍蛇與螾螘同矣、則失其所乘也と。又た王褒の聖主得賢臣頌に、世必有聖知之君、而後有賢明之臣、故虎嘯而風列、龍興而致雲と。又た陸愈の雜說に、雲と龍とを以て君臣に喩へたり、文章軌範卷五に出づ。㊁班固の答賓戲に、皆謂風雲之會と。又た後漢書馬武傳に、咸能感風雲、奮其智力。

【風雲之器】 風雲に際會して功名を立つる人をいふ。出典袁宏の後漢紀に、袁宏曰、馬援才氣智略、足爲風雲之器、躍馬委質、編名功臣之錄、遇其時矣、天下既定、偃然休息、猶復垂白據鞍、慷慨不亦過乎。

【風霜之任】 司法官をいふ。出典文獻通考に、御史臺、龍朔二年、改爲憲臺、云云、門北闢主陰殺、故御史爲風霜之任、彈糾不法、百寮震恐、官之雄峻、莫之比焉。

【風霜之氣】 文章の勁烈なるをいふ。出典世說に、淮南王安著書二十篇、號淮南子、自云、字中若挾風霜之氣。

【風塵之警】 兵亂をいふ。出典漢書終軍傳に、邊境時有風塵之警、班固の答賓戲に、蹈風塵之會、卽顏師古之勢。

【風塵之會】

【風塵之變】 風塵の警。出典晉書陶瑣傳に、風塵之變出於非常。

【風波之民】 心の動搖し易き人をいふ。出典莊子天地篇に、若夫人者、非其志不之、非其心不留、雖以天下譽之、得其所謂警然不顧、以天下非之、失其所謂儻然不受、天下之非譽無益損焉、是謂全德之人哉、我謂之風波之民。

【風木之悲】 シの部樹（ジュ）欲靜而風不止を見よ。

【風樹之歎】 前條に同じ。

【風騷之士】 猶ほ風流の士といふがごとし。出典宇貫に、今謂詩人爲騷人と。又た高適の詩に、晚晴催論藁、秋興引風騷。

【風魚之災】 海上に颶風の起るをいふ。出典韓愈の送鄭尙書序に、嶺南帥得其人、則一邊靜治、不相寇盜賊殺、無風魚之災水旱癘毒之患。風魚の字面、他に見る所なし、韓愈の潮州刺史謝上表に、颶風鯨魚、患禍不測の語あり。風魚は卽ち颶風鯨魚の略語ならんか。一說に、風魚は魚の名なり、坤輿外記に云、西江海產風魚、可以占風、國人晒乾掛于房內、以其身首所向、卽爲風起之方と。未だ孰か是なるを知らず。賴山陽日本政記の論文に風魚之警として、兵亂の義とせるは、稍々誤用を免れず。

【風俗通義】 風俗通と稱す、後漢の應劭の撰にして、十卷、附錄一卷あり、卷每に各々總題あり、題每に散目あり、總題には其大意を陳べ、散目には先づ其の事を詳かにし、案語を附して、其得失を辨正す、書中

典體を考論せる所は白虎通に類し、流俗を糾正せる所は論衡に類す、其自序に曰く、之を風俗通義と謂へるは、言流俗の過謬を通じ、事之を義理に該するなりと、以て此書の大要を知るべし。

【想聞風采】 意義其人の樣子柄を思ひ遣るなり。出處漢書霍光傳に、天下想聞其風采。補註後漢書に、趙壹字元叔、鬱鬱短梧、望之甚偉、司徒袁逢・河南尹羊陟共之、名動京師、士大夫想望其風采。

【使風伯掃塵】 意義風の神に前驅せしむるなり。出處淮南子原道訓に、使風伯掃塵。

【風雅頌賦比興】 シの部詩(シ)經を見よ。

【風馬牛不相及】 意義風は、放なり、放逸せる牛馬も相及ばずとて、兩地の相離るゝことの遠きを形容していふ、因つて事の我と相關せざるにもいふ。出處左傳僖公四年に、齊侯以諸侯之師侵蔡、蔡潰、遂伐楚、楚子使與師言曰、君處北海、寡人處南海、唯是風馬牛不相及也、不虞君之涉吾地也、何故と。杜注に、牛馬風逸、蓋末界之微事、故以取喻と。孔疏に、服虔云、風放也、牝牡相誘謂之風。補註書經費誓篇に、馬牛其風、臣妾逋逃、勿敢越逐。補註陸游の詩に、醉自醉倒愁自愁、愁與酒如風馬牛。○同人の詩に、八十又過ぐ二、與人風馬牛。補註杜氏は、風を風合の義として解したれど、本文の意に非るに似たり、清の焦循云、風は放逸なり、馬牛各羈縶ありて、疆界を越えず、惟放縱走逸するときは、則ち界を越えて行くべし、不相及といふは、其の遠きを言ふなりと、此說從ふべし。

【不風流處卻風流】 意義眞の風流は、無風流なる處にあるをいふ。出處晉樂廣集に、沈樞鎬鈞州、撝二靈、去數年歸縣、皆處子、潘方壽以詩寄曰、鐵石心腸延壽藥、不風流處卻風流。

【風神外偉黃中內潤】 意義風采精神は外に秀でゝ偉異なり、而して德義は中に潤ふといふ。出處魏書清河王懌傳に、幼而敏惠、美姿貌、高祖愛之、影城王露茈嘗異之、竝曰、此兒風神外偉、黃中內潤、若天假之年、比二南矣。

【風伯進掃雨師灑道】 意義大子の行幸前きを掃、雨師灑道。補註舊唐書狄仁傑傳に、風伯進掃、雨師灑道。出處韓非子十過篇傳四に、風伯進掃、雨師灑道、以仁傑爲知頓使并州長史、李神元以道出妬女祠、俗云、盛服過者、必致風雷之災、乃發數萬人別開御道、仁傑曰、天子之行、千乘萬騎、風伯淸塵、雨師灑道、何妬女之害耶、遽令罷之。

【風流不墜政在江郎】 意義天下風流の事は、未だ墜ちず、正さに江郎に在りといふ。出處齊書江斐傳に、斐尙孝武女臨汝公主、拜駙馬都尉、除著作郎太子舍人丹陽丞、時袁粲爲尹、見斐歎曰、風流不墜政在江郎。

郎、數與宴賞、留連日夜。

【風雨無鄉而怨怒不及】 意義風雨は自然鄉背なし、故に怨怒も及ばざるをいふ。出處管子に、風漂物者也、風之所漂不避貴賤美惡、雨濡物者也、雨之所濡無私、所行無常、鄉人難遇、漂濡而莫之怨也、故曰、風雨無鄉、而怨怒不及也。

【風景不殊舉目有江山之異】 意義風景は依然たれども、只何となく見渡す所、江山の異れるあるを覺ゆるをいふ。出處晉書王導傳に、過江人士每至暇日、相要出新亭飲宴、周顗中坐而歎曰、風景不殊、舉目有江山之異、皆相視流涕、惟王導愀然變色曰、當共戮力王室、克復神州、何至作楚囚相對泣耶、衆收淚而謝之。

【風荷老葉蕭條綠水蓼殘花寂寞紅】 意義唐人の詩の句なり。出處白居易の鮮西郊秋寄贈馬造の詩に、紫閣峯西淸渭東、野烟深處夕陽中、風荷老葉蕭條綠、水蓼殘花寂寞紅、我厭官遊君矣窺、可憐秋思兩心同。

【富貴】 意義富み且つ貴きをいふ。出處易繫辭上傳に、縣象著明莫大乎日月、崇高莫大乎富貴と。又た禮記儒行篇に、不闕穆於貧賤、不充詘於富貴と。又た史記項羽紀に、富貴不歸、故鄉如衣繡夜行。

【富國】 意義國を富ますこと。出處唐書李適之傳に、山澤生金、采之可以富國。

【富利】 意義富める財をいふ。出處李斯の諫逐客書に、向使卻客而不內、疏士而不用、是使國無富利之實、而秦無靈大之名也。

【富翁】 意義財貨を積み貯へたる老人をいふ。出處論衡初稟篇に、富家之翁、生有富骨、治生積貨至於年老、成富翁矣。

【富豪】 意義かねもちなり。出處漢書卜式傳に、是時富豪皆爭匿財、惟式尤欲助費。

【富窟】 意義富の巢窟といふこと。出處開元天寶遺事に、王元寶、都中巨豪也、常以金鋌・瑯琅屋、於宅中、壘一一礎賢窟、以沈香爲軒檻、以碧砌甃地面、以錦文石爲柱礎、時人呼爲王家富窟。

【富貴花】 意義牡丹をいふ。出處周惇頤の愛蓮說に、牡丹、花之富貴者也。

【富貴在天】 意義富貴は天賦の定むる所にして、力の及ぶ所に非るをいふ。出處論語顏淵篇に、司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天と。邢疏に、言人死生長短、則有所禀之命、財富位貴、別在天之所予。

【富貴草頭露】 意義富貴は、草の上の露の如くはかなきものなるをいふ。出處杜甫の詩に、富貴何如草頭露と。又た蘇軾の詩に、生前富貴草頭露、身後風流陌上花。

【富貴如浮雲】 意義富貴は人に過り來るを生ずるをいふ。出處論語述而篇に、不義而富且貴、於我如浮雲。

【富貴生驕奢】 意義富み貴くなるときは、自然に驕奢の心を生ずるをいふ。出處賓鑑に、富貴生驕奢、驕奢生淫亂、淫亂生貧賤、貧賤生動儉、動儉生富貴。

【富貴逼人來】 意義人自ら勉むれば富貴は人に過り來るをいふ。出處北史に、楊素少爲周文帝知、尤欲助費。素曰、善自勉、不憂不富貴、素曰、但恐富貴來逼、臣、臣不圖富貴。

【富貴生驕奢】 意義富貴にも斯心を生ずるをいふ。出處禮記儒行篇に、不臨君王、不累長上、不閡有司、故曰儒。補註韓愈の上張僕射書に、又將曰、韓愈之識其所依歸也如此、韓愈之不閡屈於富貴之人如此。

【富貴逼人來】 意義富貴は天賦の定むる所にして、力の及ぶ所に非るをいふ。出處論語顏淵篇に、司馬牛憂曰、人皆有兄弟、我獨亡、子夏曰、商聞之矣、死生有命、富貴在天と。邢疏に、言人死生長短、則有所禀之命、財富位貴、別在天之所予。

【富貴草頭露】 意義富貴は、草の上の露の如くはかなきものなるをいふ。出處杜甫の詩に、富貴何如草頭露、身後風流陌上花。

【富貴不能淫】 意義富貴にも斯心を生ずるをいふ。出處禮記儒行篇に、不臨君王、不累長上、不閡有司、故曰儒。補註韓愈の上張僕射書に、又將曰、韓愈之識其所依歸也如此、韓愈之不閡屈於富貴之人如此。

【富貴他人合貧賤親戚離】 意義人情富貴を好んで、貧賤を厭ふをいふ。出處晉摯虞の感舊詩に、富貴他人合、貧賤親戚離、廉頗門客移、晏嬰相奪移、晏嬰集茂林、棲鳥去枯枝、今我唯困蒙、郡士所背馳、鄉人敎愚癡、濟濟陸光儀、對賓頌有客、舉觴詠蓼蓼、臨樂何所歎、素絲與路岐。補註續晉陽秋に、殷浩雖廢、猶、夷、神委、命、雅詠不輟、外物絡生始陷至使所、周年還都、浩送至水側、乃詠曹顏遠詩曰、富貴他人合、貧賤親戚離、因泣下、其悲見于外者、惟此一事而已。補註韓愈冠子に、家富疎族、家貧兄弟離。○愼子に、家富則族來、家貧則兄弟離。

【富貴而無禮不如貧賤之孝悌】 意義富貴にして無禮なるは、貧賤にして孝悌な行ふに如かざるをいふ。出處鹽鐵論の語なり。

【富貴之畏人兮不若貧賤之肆志】 意義富貴になりて人を畏るゝよりは、貧賤にして志を肆にするにしかざるをいふ。出處高士傳に商山四皓の榮芝歌を載せて云、莫莫高山、深谷逶迤、曄曄紫芝、可以療飢、唐虞世遠、吾將何歸、駟馬高蓋、其憂甚大、富貴之畏人兮、不若貧賤之肆志。

【富者送人以財仁人者送人以言】 意義仁人の所爲を示すなり。出處史記孔子世家の語。補註荀子非相篇に、贈人以言、重於金石珠玉。

【富貴如將軍力求仲尼年少合封侯】 意義宋人の詩の句。出處邵雍の詩に、富貴如將軍智力求、仲尼年少合封侯、世人不解青天意、空使身心半夜愁。

【風風乎】 意義水際の大いなるをいふ。出處左傳襄公二十九年に、歌

楓

【楓宸】 意義天子の居らるゝ處を宸といふ、楓樹を宸中に植ゆ、故に朝廷を楓宸といふ。出處何晏の景福殿賦に、芸若充廷、槐楓被宸と。又た說文に、楓木、漢宮殿中多植之、故稱楓宸。

【楓人】 意義楓樹のコブなり。出處酉陽雜俎に、楓人十尺負匡立。類語遠異記に、南中有楓子鬼木之老者、爲人形。

【楓橋】 意義蘇州に在る橋の名なり、唐の張繼の楓橋夜泊の詩によりて世に顯はる。出處一統志に、楓橋在蘇州府城西七里、面山臨水、南北往來、必經於此、と。又た釣隱紀談に、楓橋舊作封橋、王鄙公居吳時、書張繼詩刻石作楓字、相承至今、蓋因詩中江楓字而訛也、天平寺讖經多唐人書、背有封橋常住四字朱印、霜逢龍亦云、寺有藏經、題至和三年曹文穎寫施封橋寺、作楓者非。（ツの部月（ツキ）落烏啼霜滿天を見よ）

【楓落吳江冷】 意義唐人の詩の句。出處唐書崔信明傳に、鄭世翼過信明江中、謂曰、聞公有楓落吳江冷、願見其餘、信明欣然多出衆篇、世翼覽未終曰、所見不逮、所聞、引舟去、と。又た世說輕詰下篇に見ゆ。補說漁隱叢話に、古今以詩名世者、或一句聯爲人口者、往往不出楓落吳江冷。

【楓岸紛紛落葉多】 意義唐人の詩の句。出處賈至の初至巴陵與李十二白同泛洞庭湖に、楓岸紛紛落葉多、洞庭秋水晚來波、乘興輕舟無近遠、白雲明月弔湘纍。類語楚辭に、臨睨兮秋風、洞庭波兮木葉下。補說李白の陪族叔刑部侍郎暉及中書舍人賈至遊洞庭湖に、洞庭西望楚江分、水盡南天不見雲。

六 諷

【諷諫】 意義それとなく遠ほ廻はしに諫むるをいふ。出處孔子家語辨政篇に、孔子曰、忠臣之諫、君有五義、一曰譏諫、二曰戇諫、三曰降諫、四曰直諫、五曰諷諫と。又た唐書吳兢傳に、朝有諷諫、猶聲之有律、蘇洵の諫論參看すべし。

【諷誦】 意義詩文等を節調するをいふ。出處世說に、諷誦朗暢。

【諷師】 意義樂器の名。出處周禮春官に、祀諷師。

【笛】 意義融長笛賦序曰、此器也、於近代、本出羌中、風俗通曰、漢武時、丘仲所造、長尺四寸七孔、京房曰、丘仲工、其事、不言所造、廣雅曰、篴謂之笛、有七孔、而周官笙師教、歌遠、藝文類聚有宋玉笛賦。

【深藏】 意義深くかくすをいふ。出處史記老子傳に、老子曰、吾聞之良賈深藏若虛、君子盛德、容貌若愚、類聚韓愈の送溫處士序に、悖才能、深藏而不市者、洛之北涯曰石生、其南涯曰溫生。

【伏祠】 意義六月土用の祀をいふ。出處漢書、郊祀志に、作伏祠、と。顏注に、孟康曰、六月伏日也、周時無、至此乃有之、師古曰、伏者謂陰氣將起迫於隱蟄而未得升故爲藏伏、因名伏日、也立秋之後、以金代火、金畏於火、故至庚日必伏、庚金也。

【伏日】 意義盛夏三伏の日なり。出處陰陽書候に、夏至後第三庚爲初伏、四庚爲中伏、立秋後初庚爲終伏、故謂之日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君。

三伏と。又た漢書東方朔傳に、伏日詔賜從官肉。（サの部三（サン）伏を見よ）

【伏陰】 意義夏時となるも、猶ほ陰氣滯し、發して霜雹あるの類なり。出處國語に、天無伏陰、地無散陽。

【伏臘】 意義暑中の三伏日と、十二月の臘の祭日とをいふ。出處漢書楊惲傳に、歲時伏臘。

【伏兔】 意義馬車の軸の板覆なり。

之をトコシバリといふ。出處周禮考工記鄭注に、鄭司農云、枳、輿也、轅讀爲旃僕之僕、謂伏兔也、と。疏に、謂伏兔也者、漢時名、今人謂之車展、是也。

【伏櫪】 意義馬が厩の中に伏し居るをいふ、櫪は櫪に通ず。馬を飼ふに板を厩に布くをいふ。出處漢書李尋傳に、不伏櫪不可以馳道、と。顏注に、伏櫪、謂伏槽櫪而秣之也。

【伏兵】 意義フセゼイなり。出處孫子行軍篇に、鳥起者伏也、獸駭者覆也、と。又た史記淮陰侯傳に、陳餘、絳欲渡軍、臨登、而伏兵從夏陽、以木罌瓶、渡軍、と。又た事物紀原に、易曰、伏戎於莽、左氏北戎侵鄭、公子突曰、君爲三覆、以待之、杜預注云、覆、伏兵也、周公繇易言、此、疑亦三代之事耶。

【伏甲】 意義前條に同じ。出處史記劉客傳に、公子光出其伏甲。

【伏戎】 意義伏兵に同じ。出處易經同人三歲不興。

【伏流】 意義水の地下を潛り流るるをいふ。出處錢起の詩に、藥井通伏流。

【伏魔殿】 意義惡魔の伏在せる所をいふ。出處水滸傳楔子に、書四箇金字、寫道伏魔之殿、太尉指着問道、此是甚麼去處、眞人答道、此乃是前代老祖天師、鎭鎭伏魔之殿、（中略）眞人答道、此是老祖大唐洞玄國師封鎭魔王、在此、と。又た皇甫冉の贈普門上人に、慧力堪傳教、歸功久伏魔と。又た杜荀鶴の詩に、伏魔寧是獸、巢頂亦非禽。

【伏龍鳳雛】 意義伏したる龍とは、諸葛孔明のこと、鳳の雛とは、龐士元のこと、皆俊傑に喩ふ。出處三國蜀志諸葛亮傳の裴注に、襄陽記曰、劉備訪世事於司馬德操、德操曰、儒生俗士、豈識時務、識時務者在乎俊傑、此閒自有伏龍鳳雛、備問爲誰、曰諸葛孔明、龐士元也。

【伏波將軍】 意義漢の馬援伏波將軍となる、世に馬伏波と稱す、然れども尙ほその他にもあり、鼓に揭出す。出處漢書南匈奴傳に、衛尉路博德爲伏波將軍、出桂陽下湟水、と。又た後漢書馬援傳に、璽書拜援伏波將軍、南擊交趾、と。又た三國魏志夏侯惇傳に、太祖平河北、爲大將軍、後鉅鹿破、遷伏波將軍、と。又た魏書溫子昇傳に、子昇加伏波將軍。

【伏櫪老驥】 ラの部老（ラカ）驥伏櫪を見よ。

八 服

【服從】 意義君に服して從ふなり。出處禮記に、明君在上、諸臣服從。

【服匿】 意義何紋といふ夷國に用ふる樂器にて、缶の類なり。出處漢書蕃武傳に、賜武馬畜服匿寫鷹。

【服膺】 ケの部拳（ケン）拳服膺を見よ。

【服木】 意義猛獸を掌る官の名。出處周禮に、服不氏、掌養猛獸而教擾之。

【服之不衷身之災也】 意義衣服の身に相當せざるは、人に怪まる、故に、身の災となるなり。出處左傳僖公二十四年に、鄭子臧出奔宋、好聚鷸冠、鄭伯聞而惡之、使盜誘之、八月、盜殺之於陳宋之閒、君子曰、服之不衷、身之災也、と。杜注に、鷸、鳥名、聚鷸羽以爲冠、非法之服、衷、猶適也。

九 茯

【茯苓】 意義樂種なり。松の舊根の土中に自生し、拳の如く塊をなすなり、皮は黑くして皺あり、肉は白きあり赤きあり、一名不死麭といふ。出處淮南子說山訓に、千年之松下有茯苓。

十 副

【副馬】 意義馬車に用ふる副ヘ馬。出處北魏書李裔傳に、帝向殺副馬、足三日食、手。

【副車】 意義副ヘ車なり。出處史記留侯世家に、良擊秦皇帝博浪沙中、誤中副車、と。又た事物紀原に、禮記、有貳車、鄭康成云、副車、又有佐車、然則副車亦周事也。

【副本】 [illegible]正本に副へる本をいふ。[illegible]李清照の金石錄叙に、凡書史百家、字不[illegible]刻鋟者、輒市之、儲作[illegible]副本。

【副鼓】 [illegible]本大鼓に副へたる太鼓を拍[illegible]副鼓。

【副淨】 [illegible]俳優の稱。[illegible]綴耕錄に、唐有[illegible]院本雜劇諸宮調、院本雜劇、其實一也、國朝院本雜劇、始盛而二之、院本則五人、一曰副淨、古謂[illegible]之參軍、一曰副末、古謂之蒼鶻、鶻能擊[illegible]禽鳥末、可打[illegible]副淨、故云。

【副急淚】 [illegible]マニアハセのナミダを[illegible]いふ。[illegible]世說排調下篇に、宋世祖至[illegible]殷貴妃墓、謂劉德願曰、卿等哭貴妃、若悲、當[illegible]加[illegible]厚賞、劉歷[illegible]聲號慟、涕淚交橫、上以爲豫州刺史、帝又令羊志哭、羊亦鳴咽甚哀、他日有問羊者、卿那得此副急淚、羊曰、我關日自哭亡姪耳。

【副以覆首】 [illegible]薄き帛を以て首を覆ふをいふ。[illegible]周禮天官追師の鄭注に、副以覆首、若今步搖。

【幅員】 [illegible]幅は邊幅なり、員は圓なり、周圍をいふ。[illegible]詩經商頌長發篇に、幅隕既長と、隕は員に同じ。

【幅巾】 [illegible]一と幅の帛にて作りたる頭巾なり。品字箋に、幅巾、全幅爲[illegible]巾、隱士之服也といへり。[illegible]事物紀原に、古庶人服巾、士則冠矣、傳子曰、漢末王公多委士服、以幅巾爲雅素、則幅巾古隱者服也、漢末始爲士人之服、袁紹敗、幅巾渡河、是也と。又た後漢書鮑永傳に、永悉罷兵、但幅巾與諸將及同心客百餘人、詣河內。

幅復

【幅億】 [illegible]憤怒の貌、一說に氣滿つるなり。[illegible]漢書陳湯傳に、策慮幅億、義勇奮發。

【復辟】 [illegible]再び天子の位に即くをいふ。[illegible]書經咸有一德篇に、伊尹既復政厥辟と。又た文獻通考經籍考に、唐中宗甲申武后廢之後二十二年乙巳復辟、[illegible]伊藤東涯の名物六帖に云、按明英宗即位改元、正統爲虜所執、北狩後七年、復入鑾大統、改元曰天順、明人稱復辟、本取商書復子明辟、本朝則曰重祚、曰再辟、至復辟則爲[illegible]政還政之稱、與中夏之名不同、此熙本係伊尹還政之事、則本朝之稱、卻得其實と。これ復辟の字面の用法を見るべし。

【復性】 [illegible]は其の性は渾然たる至善にて、凡人も堯舜も初は少異なけれども、堯舜は私欲の蔽なくして、能く其性を充て、凡人は氣稟前に拘し、物欲後に蔽ふて、原初の性の照然たるもの昧む、故に學の功にて性の初に復へるべしといふことなり。[illegible]孟子集注に、程子曰、性卽理也、理則堯舜至於塗人一也、才稟於氣、氣有[illegible]清濁、其清者爲賢、稟其濁者爲愚、學而知之則氣無清濁、皆可至於善、而復[illegible]性之本、[illegible]武身之、是也。又た論語集注に、朱子曰、人性皆善、而覺有先後、後覺者必效[illegible]先覺之所爲、乃可[illegible]以明[illegible]善而復[illegible]其初[illegible]也。

[illegible]莊子繕性篇に、繕性於俗學以求復[illegible]其初、滑[illegible]欲於俗、思以來[illegible]致[illegible]其明、謂之蔽蒙之民、又た云、民始惑亂、無以反其性情、而復[illegible]其初、これ復性の字面の出處なり。

【復初】 前條を見よ。

【復道】 [illegible]複道に同じ、上と下と二重の廊下なり。[illegible]史記秦始皇紀に、爲復道自[illegible]阿房渡渭屬[illegible]之咸陽と。又た漢書高帝紀に、上從復道上望見、諸將往往耦語と。顏注に上下有、道、故謂之復。

【復命】 [illegible]命を受けて之を行ひ、其の事を報ずるなり。[illegible]論語鄉黨篇に、賓退必復命曰、賓不顧矣。

【復土】 [illegible]墓穴を堀りて、既に棺を下したる後ち土を其の上に掩ふをいふ。[illegible]周禮少司徒に、大喪帥[illegible]邦役、治其政教と。鄭注に、喪役正棺引窆復土と。疏に、復土者、掘坎之時、掘[illegible]土上向下、棺之時、反[illegible]復此土、以爲丘陵、故云復土也と。又た史記秦始皇紀に、營[illegible]阿房宮、爲[illegible]室、室未就、會上崩、徽其作者、復土驪山。

【復讐】 [illegible]カタキ打ちなり。[illegible]孟子[illegible]篇に、爲西夫西嬉、復讐也。

【復性書】 [illegible]文章の篇名。[illegible]唐の韓愈の門人李翺字は習之の作に係る、三篇あり、云ふ、誠者聖人性之也、復其性者、聖人倚之、又た云、情者妄也、邪也、妄與邪、則無所滅矣、妄情滅息、本性清明、周[illegible]流六虛、所[illegible]以謂之能復、其性也といへり。歐陽修は、此書を評して、中庸

の疏のみと言へり、蒙齋筆談には秦漢以下諸儒に於て略々聞ふ所なし、獨超然として頗子の用心を知れりと、一發一既、また以て其の眞價を知るに足らんか、後世宋の學者が、復性復初の說は皆此に淵源せるなり。

三 福

【福衡】 [illegible]牛の角に木を橫に繫ぐもの。[illegible]詩經魯頌閟宮篇に、秋而載嘗、夏而楅衡と。朱傳に、嘗、秋祭名楅衡施[illegible]於牛角[illegible]所[illegible]以止[illegible]觸也、周禮封人云、凡祭飾其牲、設[illegible]其楅衡、是也と。孔疏に、福設[illegible]於角、衡設[illegible]於鼻。

腹

【腹心】 [illegible]腹心之臣を見よ。

【腹稿】 [illegible]胸中に於て文章を組み立ふ。[illegible]唐書王勃傳に、勃屬文、初不[illegible]精思、先磨[illegible]墨數升、引[illegible]被覆[illegible]面臥、及寤投筆成[illegible]文、不[illegible]易一字、時人謂[illegible]勃爲腹稿、又た蘇軾の詩に、筆手獨不言、默稿已在腹。

【腹痛】 [illegible]書橋玄傳に、腹痛勿怨。

【腹中書】 [illegible]腹の中に貯へたる書籍。[illegible]古詩に、看取腹中書。

【腹笥虛】 [illegible]して、一冊の書をも收めずといふことにて、學力の乏しきをいふ。[illegible]馮億の詩に、談經腹笥虛。

【按腹心】 [illegible]衷心を盡すをいふ。[illegible]史記淮陰侯傳に、願披腹心、輸肝膽、效愚計。

【布腹心】 [illegible]懷ふ所を敷き陳ねて陛公十二年に、非所[illegible]敢望也、敢布腹心。

【腹心之臣】 [illegible]心を同じくし德を同周南兎罝篇に、赳赳武夫、公侯腹心、又た後漢書に、袁紹領[illegible]冀州、以審配爲[illegible]別駕、委腹心之任、并總[illegible]幕府。又た胡銓の上[illegible]高宗封事に、秦檜以[illegible]腹心大臣、而亦爲之。

【腹心之友】 [illegible]腹となり心となるの親友をいふ。[illegible]漢書翟方進傳に、故光祿大夫陳咸與[illegible]王立）交通、相與爲腹心。

【腹誹之法】 [illegible]口に言はずして、腹に非とするものを罰するの法をいふ。[illegible]史記平準書に、頗異常九卿見[illegible]令不便、不[illegible]入言、而腹誹論死、自是之後有腹誹之法。

【曝腹中之書】 [illegible]書を讀みて、腹中に貯へたるものを日郡陸七月七日、見[illegible]富家皆曝[illegible]曝衣書、乃出日中、仰臥人問其故、曰我曝腹中書也。

【福德】 [illegible]に、孔安國曰、所好福德之道。又た福田經に、緣[illegible]此福德。

【福田】 [illegible]佛に供養し、又は僧に施の物を生ずるが如くなりとの義に取る。[illegible]韓愈の與[illegible]孟簡尙書書に、及來[illegible]賞[illegible]衣服[illegible]爲別、乃人之情非崇[illegible]信其法、求福田利益也。

四 福

【福地】 [illegible]仙人の住む處をいふ。[illegible]康熙字典に、天姥山在[illegible]紹興新昌縣東、道家稱爲第十六福地、石壁上有科斗字、高不可識、謝靈運詩、誤投剡中宿、明登天姥岑、高高入雲霓、還期何可尋と。又た北史韓麒麟傳に、王業所基、聖躬所啟、其爲神鄉、福地實不遠矣と。又た龜山白玉上經に、七十二福地あり。

【福履】 同じ。[illegible]詩經周南樛木篇に、樂只君子、福履綏之。

【福祿】 [illegible]福と祿との幸ひをいふ。[illegible]詩經小雅瞻彼洛矣篇に、福祿如茨。

【福祐】 [illegible]サイハヒなり、祐も福なり。[illegible]漢書王嘉傳に、以求[illegible]福祐。

【福禧】 [illegible]幸福のこと。[illegible]范曄の詩に、同心仰[illegible]福禧。

【福薑】 [illegible]前條に同じ。[illegible]沈約の詩に、其德不爽、受[illegible]福薑。

【福堂】 [illegible]半獄の異名なり。[illegible]資治通鑑に、余尚繫錦衣獄、覩壁上有[illegible]大書福堂字、甚傷、近因[illegible]吳越春秋、大夫種殿詞有[illegible]云、禍爲福根、憂爲福堂、因知出處。

【福水】 [illegible]酒の異名なり。[illegible]留書日札に、酒曰福水、而陶翰林名曰鵝泉。[illegible]通俗編に、晉書地理志有福祿縣、屬酒泉郡、水經注所謂福祿水由是縣出也、俗呼酒爲福水、當因乎此。

【作福】 [illegible]人に恩を施すをいふ。[illegible]書經泰誓上篇に、惟辟作福、惟

辟作ル威、惟辟玉食。

【福建子】 意義閩人ヲ罵ル辭。出處可談に、余裘姪李熙叟狂生登ル第、太尉呂吉甫以ニ孫女ヲ妻シ之、自ニ延安帥ニ遣シ人納ル吉、禮貌甚盛、熙叟在ニ京師ニ、忽詣ニ開封、投ル牒願ル罷ル婚、蔡元長尹ル京、驚問ニ所以ニ、竝無ニ違ル律、及不ル爭ニ財物ニ、熙叟但言、不ル寧ニ與ニ福建子ニ相交ニ、元長怒叱出、卒成ル婚、中州人每笑ニ閩人所ニ窘、目爲ニ福建子ニ、畏而憎之之辭、吉甫元長皆閩人、故熙叟戲ル之耳と。又た十八史略卷七哲宗の條に、王安石在ニ金陵ニ、常獨ニ語福建子ニ、恨ニ惠卿ニ也。

【福田院】 補 意義慈悲心もて貧民を救ふ所なり。出處事物紀原に、唐會要曰、開元五年、宋璟蘇頲奏、悲田院養病徙ニ長安ニ、以來置ル使專知、所ル稱ニ悲田ニ、乃關ニ釋教ニ、此是僧尼職掌、宋朝又因ル之ニ、以ル僧院ニ名ニ福田ニ。

【福惠全書】 意義書名。解説三十三卷あり、清の黃六鴻撰す、地方施政者の心得べき諸件を彙說す、其の自序に云、夫是書也、乃政事之事也、而預ニ之福惠ニ何居、曰福者、言ニ予施ル惠之事ニ也、夫人有ニ是心ニ、而後有ニ是事ニ、無ニ是心ニ而即無ニ是事ニ、故在ニ上者、必先存ニ有ニ造ニ福地方之心ニ而後能有ニ施ニ惠百姓之事ニ、事者心之推、而惠者福之實云云と、以て其の內容を想像するに足らん。六鴻は時に知到城東光兩縣事より、遷りて工科掌印給事中たり。

【福建通志】 意義書名。解説清の金鉷の康熙帝の命を奉じて編輯せるものにして、凡て六十四卷とす、福建は古への八閩にして、此書は興圖、星野、建置、山川、疆域、城池、祀典、戶役、田賦、學校、兵防、公署、封貢、人物、職官、方伎、仙釋等の二十八類に分ち、卷首には奏序目錄凡例等あり。

【福至心靈】 意義幸福の至るときは、精神も靈明となるをいふ。出處幕府燕閒錄に、吳參政以ニ學究ヲ登ル科、後爲ニ學士、常草ル制以示ニ歐公、公曰、君福至神靈。

【福過禍生】 意義幸福の大過なるは、災害の來る原因となるをいふ。出處宋書劉敬宣傳に、敬宣報ニ豫州刺史諸葛長、書曰、下官自ニ義熙ニ以來、首尾十載、遂忝ニ三州七郡ニ、今此杖節、常懼ニ福過禍生ニ、實思ニ避ニ盈居ニ損、富貴之旨、非ル所ニ敢當ニ。又た同書謝晦傳に、曉言ニ於高祖ニ曰、臣本素士、父離位不ル過ニ二千石ニ、弟年始三十、志用、凡近榮冠ニ臺府ニ、位任顯密ニ、福過災生、其應無ル遠、特乞ニ降黜ニ、以保ニ衰門ニ。

【福祿綏之】 意義福と祿とを以て身を安んずるをいふ。出處詩經小雅鶴鳴篇に、君子萬年、福祿綏ル之ニ。

【福生有基】 意義幸福の來るは其原因あるをいふ。出處枚乘の錬ニ吳王ニ書に、福生有ル基、禍生有ル胎。

【福生於微】 意義福は微細なるより生ずるをいふ。出處設苑說叢篇に、福生ニ於微ニ、禍生ニ於忽ニ、日夜恐懼、唯恐ル不ル卒。

【福輕乎羽】 意義福は鳥の羽よりも輕し、自ら爲すに容易なるをいふ。解説莊子人間世篇に、福輕ニ乎羽ニ、莫ニ之知ル載、禍重ニ乎地ニ、莫ニ之知ル避。

【不爲福先】 意義幸福を得るに、他人より先きにするときは人に嫉まる、故に先とならざるなり。出處莊子刻意篇に、不ル爲ニ福先ニ、不ル爲ニ鰌始ニ。

【增綏福履】 意義福祿を增綏して、此躬を安泰ならしむるをいふ。出處詩經周南樛木篇に、樂只君子、福履綏ル之ニ。毛傳に、履、祿也、綏、安也。

【福聚海无量】 補 意義福の集り來ること、大海に水の來るごとしといふこと。出處法華經に、福聚海无量、是故應ニ頂禮ニ。

【福生於隱約】 意義幸福は隱微にして人の見ざる處に生ずるをいふ。出處福生ニ於隱約ニ、而禍生ニ於得意ニ。

【福生於無爲】 意義幸福は淡泊無爲に生ずるをいふ。出處淮南子に、福生ニ於無爲ニ、患生ニ於多慾ニ、害生ニ於弗ル鑄、綠生ニ於弗ル種ニ。

【復姓】 意義二字の姓なり、諸葛・歐陽の類是れなり。出處萬姓統譜に、凡例、複姓取ニ上字ニ爲ル據。

【複名】 意義二字の名をいふ。出處石林燕語に、唐詰勳、宰相複名者、皆不ル出ル姓、唯單名則出ル姓、蓋以爲、宰相人所ニ具知ニ、不ル待ル書ル姓而見、余多ル見ニ人告身ニ、類如ル此、國朝宰相雖ニ單名ニ、亦不ル出ル姓、他執

欧則書、所ニ以異ニ宰相之禮ニ也。

【複衣】 意義重ね衣なり。出處世說に、晉孝武年十二、冬天晝日、不ル著ル複衣。

【複語】 意義二重に累なる語にて、洋洋悠悠の類なり。出處滑稽雜說に、古人書ニ複語ニ、則書ニ二字ニ。

【複道】 意義復道に同じ。出處史記秦始皇紀に、殿屋複道、周閣相屬。

【輻湊】 意義人物の多く來り來るをいふ。湊は聚なり、車軸の轂に聚るに喻ふ。出處戰國策に、地四平、諸侯四通、條達輻湊と。又た淮南子に、百官修同、群臣輻湊。參考漢書叔孫通傳に、吏人奉ル職、四方輻輳と。輳の字車に从ふ、字相通ずるなり。

【輹】 意義車の軸を縛するもの、說文に車軸縛也と。即ちトコシバリなり。出處易經大畜卦に、九二、輿脫ル輹と。象傳に輿說ル輹、中无ル尤也。

【覆馥】 意義香ある貌。出處何晏の景福殿賦に、覆馥芬芬。

【覆新】 意義正月元旦の慶賀をいふ。出處書言故事に正旦以書啓賀人曰、謹致ニ覆新之慶ニ、唐禮樂志皇帝受ニ群臣朝賀ニ、曰元正首祚、景福繼新、惟陛下與ル天同ル饋、臣等謹上ニ千秋萬歲壽ニ。

【覆姓】 意義複姓に同じ。出處十八史略の注に、万俟、普屬其、覆姓。

【覆轍】 意義敗亡せしことに喻ふ。出處左思の吳都賦に、喪亂之丘墟、顚覆之軌轍と。又た新論に、立法者、譬如ニ善御ニ、察ニ馬之力ニ、編ニ途之數ニ、齊ニ其衝轡ニ、以從ニ其勢ニ、故能登ニ阪赴ニ險無ニ覆轍之敗ニ、乘ニ危涉ル遠、無ニ越軌之患ニ。（セの部前（セン）車覆後車戒及び覆轍を參看せよ）

【覆鍊】 意義鼎に盛りたる餗を覆すなり、宰相の其の任に堪へざるに喩ふ。出處後漢書謝弼傳に、弼上ニ封事ニ曰、今之四公、唯司空劉寵、諤諤首善、餘皆素餐、致ル遠之人、必有ニ折ル足覆ル餗之凶ニ。李賢注に、易曰、鼎折ル足、覆ル公餗、鼎以喻ニ三公、餗、鼎實也、折ル足覆ル餗ニ、言ル不ル勝ニ其任ニ。（カの部鼎（カナヘ）折ル足覆ル公餗ニを參看せよ）

【覆車之戒】 意義前人の失敗せしことを後人が見て戒めとするなり。出處潘岳の西征賦に、追ニ覆車ニ而不轍ル參看せよ。

【覆水不ル返盆】 意義（一）婦一たび夫家を去らば、再び返ること能はざるに喩ふ。（二）事を爲すに、事機既に去りて、再び得がたきに喩ふ。出處（一）拾遺記に、太公初娶ニ馬氏ニ、讀ル書不ル事、產馬求ル去、太公封齊、馬求ニ再合ニ、太公取ル水一盆ニ傾ニ于地ニ、合ニ歸ル水ニ、惟得ニ其泥ニ、太公曰、若能離更合、覆水定難ル收。又た鶡冠子の注に、太公既封齊侯、道遇ニ前妻ニ、再拜求ル合、公取ル盆水ニ、覆ニ地命ル收之ニ、惟得ニ少泥ニ、公曰、誰言離更合、覆水定難ル收。（二）後漢書光武紀に、反水不ル收、後悔無ル及。又た李白の詩に、雨落不ル上ル天、覆水難ニ再收ニ。意義一の典故覆之軌轍と。又た新論に、立法者、譬如ニ善語考に、可ル怪者賈臣之妻、因ル貧求ル去、不ル忍ニ覆去ル璧ル收と。注に、朱買臣家貧、負薪讀ル書、其妻求ル去、買臣曰、吾至ニ五十一、必當貴、妻曰、從ル君終餓死、竟去、後買臣爲ニ會稽守ニ、妻求ル復、買臣曰、能收ニ覆水ニ方復、妻遂自縊而死と。漢書朱買臣傳に此事を載せず、成語考果して何の書に據れるを知らず。

【覆巢之下復有ル完卵乎】 意義根本が亡ぶれば枝葉は從ふて亡ぶるをいふ。出處世說言語篇に、孔融被ル收、時融兒大者九歲、小者八歲、融謂ニ使者ニ曰、冀罪止ニ於身ニ、二兒可ル得ル全不、兒徐進曰、大人豈見ニ覆巢之下、復有ニ完卵ニ乎。

【鵩鳥賦】 意義文章の篇名。出處前漢の賈誼が長沙に貶せられしときに作りし文にして自らその不遇を悲みたるなり。鵩はフクロフなり。鵩鳥賦序に云、誼爲ニ長沙王太傅ニ、三年、有ル鵩飛入ニ誼舍ニ、止ニ於坐隅ニ、鵩似ル鴞ニ、不ル祥鳥也、誼以爲、壽不ル得ル長、乃爲ル賦以自廣と。賦は文選及び史記賈生傳に載す。

【鰒魚】 意義一名、石決明といふ、アハビなり。出處後漢書伏隆傳に、諺曰、上言獻ル鰒魚ニ。李賢注に、鰒似ル蛤而ニ一名ニ石ニ。

【如探囊】 意義甚だ易きをいふ。出處中國用ル吾爲ル相、取ニ江南ニ如ル探ニ囊中之物ニ耳。

【伏惟】 意義（一）臣下より天子に上奏するときに用ゆる語なり。伏してお

もふに」と讀む。㊁古は天子に對するときに非るも之を用ゐたり。出處㊀魏書に、高允上酒誡二曰、伏惟陛下以濟哲之姿、撫運萬國。㊁漢の樂府焦仲卿の詩に、府吏長跪告、伏惟啓阿母。

九　臥

【臥治ニ淮陽】　意義政治を簡單にして、安樂ならしむるないふ。出處史記汲黯傳に、召拜淮陽太守、黯伏謝不受印、上(武帝)曰、君薄淮陽邪、願淮陽吏民不相得、吾徒得君之重臥而治之。

【恐臥】　意義縮んことを欲するを領遣ふをいふ。出處禮記樂記篇に、魏文侯問ニ於子夏一曰、吾端冕而聽ニ古樂一、則唯恐臥、聽ニ鄭衛之音一、則不知倦。

【爲ル淵歐魚】　意義魚をかり立て、淵中に入らしむるとて、豪君が人民を驅逐して仁者に歸せしむといふこと。出處孟子離婁上篇に、爲ル淵歐魚者獺也、爲ル叢歐ニ爵者鷹也、爲ル湯武歐ニ民者桀與紂也。

【臨ル淵羨ニ魚不ル如ニ退而結ニ網】　意義空望を抱かんよりは、實行を務むべきないふ。出處董仲舒の天人策に、古人有ル言曰、臨ル淵羨ニ魚一、不ル如ニ退而結ニ網一、今臨ル政而願ル治、七十餘歲矣、不ル如ニ退而更ニ化一。

【臨ル河而欲ル魚、不ル若ニ歸而織ニ網一。】　意義戰林訓に、臨ル河而羨ニ魚一、不ル如ニ歸ル家織ニ網一。○漢書禮樂志に、臨ル淵羨ニ魚一、不ル如ニ歸而得ニ網一。○抱朴子勸學篇に、夫不學而求ニ知一、猶ニ臨ル淵而無ニ網一。

四　勿

【勿】　意義州里に建る旗の名なり。出處說文に、勿州里所ニ建旗一、其柄有ニ三游一、雜帛幅半異、所ニ以惡ニ民一、故遽稱ニ勿勿一。

【勿勿】　意義今の匆匆といふこと、急遽の義。出處顏氏家訓篇に、書翰稱ニ勿勿一、及ル考ニ說文一、乃知忽遽者稱爲ニ勿勿一。又た東觀餘論に、今俗勿中加ニ點一作ル匆一、爲ニ忽遽字一、彌失ニ眞矣。

五　弗

【弗弗】　意義猶ほ否否といふがごとし、人の言ひ然りとせざるなり、弗は嘰なり。出處屈子親士篇に、君必有ニ弗弗之臣一。通雅に、古動言ニ唯唯否否一、弗弗正否否之寢。

【弗乎】　意義否といふ意。出處史記孔子世家に、子曰、弗乎弗乎、君子疾ニ沒世而名不ニ稱焉一。

六　沕

【沕沕穆穆】　意義深く且つ遠き貌。出處顏延年の祖謝靈運の觀海聖應詩に、沕沕穆穆と、又た漢書賈誼鵩鳥賦に、沕深潛以自珍と。顏注に沕穆、深微也。

【佛】　意義西域の神の名。出處書言故事に、漢の明帝夢金人長丈餘飛ニ空而下、訪ニ之群臣一、傅毅曰、西域有ニ神、其名曰ニ佛一、乃使ニ蔡愔等一往ニ天竺一、求ニ其道一、得ニ其書、及ニ沙門一、由ニ是化流一ニ中國一。

【佛經】　意義佛の經文なり。出處事物紀原に、漢明帝永平中、摩騰竺法蘭以ニ白馬一載ニ經至一ニ東都一、即四十二章經、中國之有ニ佛經一、此蓋其始也、鄴城舊事云、永平十年、經像初來也。

【佛法】　意義佛の法なり。出處後漢書西域傳に、天竺國、一名身毒、其人修ニ浮圖道一、不ニ殺伐一、遂以成俗、世傳明帝夢見ニ金人一、長丈、頂有ニ光明一、以問ニ羣臣一、或曰、西方有ニ神一、名曰ニ佛一、其形長丈六尺、而黃金色、帝於是遣ニ使天竺一、問ニ佛道法一、遂於ニ中國一、圖畫像焉。章懷太子注に、浮圖、即佛也。又た正字通に、世傳漢明帝永平七年佛法始入ニ中國一、非ニ三、秦時沙門室利房等至ニ始皇以爲ニ異、因ニ之一、夜有ニ金人一、破ニ戶以出、漢武帝時霍去病過ニ焉支山一、得ニ休屠王祭ニ天金人一、以歸ニ帝置ニ之甘泉宮一、金人者、浮屠所ニ祠、今佛像、即其遺法也、哀帝時、博士弟子秦景、使ニ伊存口ニ授浮屠經一、中土未ニ之信一、迨ニ明帝一、夜夢金人飛ニ行殿庭一、以問ニ於朝、傅毅以ニ佛對一、曰、天竺國有ニ佛、即神也、帝遣ニ中郎蔡愔及秦景使ニ天竺一、求ニ之一、得ニ佛經二十四章、釋迦立像、併與ニ沙門攝摩竺法蘭一、東還、以ニ是考一之、秦西漢知ニ有ニ佛久矣、非ニ羽帝始一也、又古本列子周穆王篇、西域之國有ニ化人一、無ニ西方聖人名一、佛之說、獨伸尼篇載ニ孔子曰、西方之人有ニ聖者一、蓋假借孔子之語一也、字彙沿ニ正韻一、改ニ化人一爲ニ聖人一、非。

【佛陁】　意義如來なり。出處六論に、秦言ニ知者一、知ニ過去、未來、現在、衆生、非衆生、數有常無常等一、一切諸法、菩提樹下了了覺知、故名ニ佛陁一。

【佛圖】　意義寺をいふ、字或は浮圖、浮屠に作る。出處世說言語中篇に、廢公嘗入ニ佛圖一、見ニ臥佛一、曰、此子發ニ於淮澤一、時以爲ニ名言一。

【佛龕】　意義ブシ、佛像を安置するもの、なり。出處雞林志に、鷄山有ニ佛龕一、林木益鬱、傳云、羅漢三藏行化至ニ此一。顏師古楊炯樂公碑に、雕檀之妙、倩對ニ禪龕一。

【佛道】　意義佛法の道なり。出處唐書に、召ニ能言ニ佛道孔子一者一。

【佛骨】　意義釋迦佛の骨なり、即ち舍利なり。出處法苑珠林に、舍利者、西域梵語、此云骨身、舍利有ニ三種一、一骨舌利、白色、二髮舍利、色黑、三肉舍利、色赤、若ニ佛舍利一、推打不ル破、若ニ弟子舍利一、推擊便破、案佛骨即舍利也、晉書樂志、後漢正旦、天子臨ニ德陽殿一受ニ朝賀一、舍利從ニ西方一來、梁武帝牙像詔、眞形舍利降在ニ中畫一、舍利又爲ニ鳥名一、是鳥眼似ニ舍利一、故名焉、阿彌陀經、白皓孔雀鸚鵡舍利。

【佛日】　意義佛法は日の如しといふこと。出處書言故事に、李士謙善論ニ玄理一、有ニ客問一、三教優劣、士謙曰、佛、日也、道、月也、儒、五星也、客不ル能ニ難一。三教は、儒と佛と道となり。

【佛前】　意義佛の前といふこと。出處琴邪代酬編に、折ニ花供ニ佛前一。

【佛學】　意義佛法の學問。出處石林詩話に、晉初爲ニ佛學一者、皆從ニ其師姓一。

【佞佛】　意義佛の冥護を蒙らんと望び拜すること。出處五代史に、莊宗由ニ此一、亦佞ニ佛一。又た梁書に、武帝晚測ニ信佛道一。

【佛法僧】　意義これを三寶といふ、如來氏要覽に、彥鉉法師福田論云、夫福田者何也、三寶之謂也、功成ニ妙智一、道登ニ圓覺一、佛也、玄理幽微、正教精誠、法也、禁戒守ニ眞一、威儀出ニ俗一、僧也。

【佛生日】　意義釋迦の誕生日をいふ。出處東京夢華錄に、四月八日佛生日十大禪院有ニ浴佛齊會一、乃煎ニ香藥雜水一、相遺、謂ニ之浴佛水一。

【佛郎機】　意義もと國の名なり、その國にて製せし銃を支那內地に、て佛郎機と名づけたり。出處名山藏に、世宗即位、佛郎機、寧ニ其屬疎世利等千餘人一、破ニ巴西國一、入寇、新會縣海道副使汪鋒遂得ニ其銃一、以獻、名ニ佛郎機銃一。注に、鉉既擒ニ佛郎機一、傳ニ其銃一、後爲ニ吏部尙書一、會北虜入寇、鉉請ニ頃ニ佛郎機銃於諸邊一、邊鎮賴ニ其用一。

【佛頭着糞】　意義善美なる著書に、惡なる序文を附くるを譏りていふ。出處典籍便覽に、歐公修五代史、或作序冠ニ其上一、王荊石曰、佛頭上豈可ニ着ニ糞乎一。

八　佛

【論佛骨表】　意義文章の篇名。出處此篇は、唐の韓愈の撰する所にして、憲宗皇帝の元和十三年に、功德使あり、相傳ふ、三十年に一たび開く、開けば則ち歲豐に人安し、請ふ之れを迎へんと、帝其の言に從ひ、十二月に迎へて大內に入れ、留むること三日、王公士庶奔走して贊嘆す、明年愈此の表を上りて佛の信奉するに足らざるを言ひ外蕃人枯朽の骨は、之れを水火に投じて、永く根本を絕ちて、天下後世の惑を斷つべきないひたり、憲宗其書を見て大に怒り、韓愈を貶して潮州の刺史とせり、全篇唐宋八家文讀本卷二に載す。出處千百年眼に、韓昌黎表諫佛骨表、潮陽一貶、至ル死不ル悔、晚乃與ニ佛子大顚一、遊、又作ニ奉ニ于嘉志一、歷序ニ以服食敗考數人一、爲ニ烈、晚年至ル親ニ脂粉一、故事服食用ニ火鹽草一、卒致ニ絕命一、是所ル謂笑ニ前車之覆轍一而疾驅以追ニ其後一也、讀者之無ニ特操一如ル此。

【佛然】　意義心に怒る貌。出處莊子天地篇に、佛然作ル色と。又た孟子公孫丑上篇に、吾子與ニ管仲一、孰賢、曾西佛然不ル悅。

【佛鬱】　意義心のフサガリ、イカルをいふ。出處魏攀府苦寒行に、我心何佛鬱。

【探沸湯】 [意義]沸騰する熱湯に手を入るゝなり。[出處]昆山方鳳夷傳に、侯國、女子不淫不妬、訊獄置小石於沸湯、令犯法者探之、云理曲手爛、或置毒蠱於甕、令罪人、曲者即斃手。

【沸聲如雷】 [意義]沸きアツリの部流(ヨウ)血成川を見よ。

【懲沸羹者吹冷齏】 [意義]熱きアツモノを スゝリて、口中を燒きたるに懲りて、冷たきアエモノを見ても、恐れて之れを吹くなり、懲戒に過ぎたるをいふ。[出處]唐書傳奕傳に、時隋制草具多仍舊、奕謂承亂世之後、當有變更、乃上言、陛下發亂反正、而官民律令、一用隋舊目、懲沸羹者吹冷齏、傷已之烏驚曲木、況天下久苦隋暴、安得不新其耳目、故改正朔、易服色、變律令、革官名、功極作樂、治終制禮、使民知盛德之隆、此其時也。(カの部懲、羹カヽ者吹齏を參考せよ)

【物故】 [意義]人の死するをいふ。その解紛紛たり、顏師古云ふ、其の鬼物に同じくして故するをいふなり。一說に、死を斥言することを欲せず、故に其の服用せる所の物、皆已に故となるといふと。後漢書の注に、物は無なり、故は事なりと。人死すれば萬事休す、即ち事なきなりとの意なり(參考の欄を見よ)。[出處]荀子君道篇に、疾病物故之變と又た史記司馬相如傳に、治道二歲不成、士卒多物故。又た漢書蘇武傳に、武官屬前以降及物故。又た後漢書馬廖傳に、瑛隨廖歸國、考擊物故。

[意義]義府に、漢書霍去病傳、士馬物故、又霍光傳、卒有物故、師古云、物、無也、故、事也、人死無所復能爲事也、釋名云、人死諱物皆朽、故也、按二解皆非、物猶事也、不正。昔死、但謂云事故、猶孟子所謂大故耳。

【物議】 [意義]猶ほ世論と言ふがごとし。[出處]南史謝幾卿傳に、二人意相得、政肆情誕縱、或乘露車、歷游郊野、不肩物議。(二人は、幾卿と庾仲容となり。)

【物怪】 [意義]變怪の物をいふ、石言ひ、木起るの類、佛語には之をモックといふ。[出處]史記封禪書に、依物怪、欲以致諸侯。

【物色】 [意義]骨相を畫きて人を求むるを以て物色(勝)之と。帝は光武なり。又た晉書明帝紀に、王敦使五騎物色追帝。[同類]通俗編に、禮月令仲秋之月命宰祝祭祠(物色)と。物色は、始めて此に見ゆ。本義は犧牲の色を調ふなり、人の形貌も亦大小肥瘠黝皙の不同あること物と相等し、因て即ち借て辭となすのみ。

【物論】 [意義]謝安傳に、桓沖既卒、荊江二州並世の物論をいふ。[出處]晉書

【物類相感】 [意義]同類の物は相感應するをいふ。[出處]孔安國の孝經序に、物之相感、有自然者。

【茀茀】 [意義]張盛なる貌。[出處]詩經大雅皇矣篇に、臨衝茀茀と。毛傳に、張盛貌。

九 茀

【祓禊】 [意義]三月上巳の日の祀なり。[出處]潘岳物紀序に、蜂詩曰、三月桃花水下之時、鄭國之俗、以上巳於溱洧之上、執蘭招魂續魄祓除不祥。

十 祓

【艴然】 [意義]怒る貌。[出處]孟子公孫丑上篇に、貧西艴然不悅。

十一 艴

【紼】 [意義]喪み送るを引く索(ナワ)なり。[出處]禮記曲禮上篇に、執紼不笑、臨樂不歌と。又た同書檀弓下篇に、弔於葬者、必執引、若從柩及壙、皆執紼。

【紱冕】 [意義]組綬を以て冕の角に繫ぐなり、子の生れたるを賀していふ。[出處]治遺記に、孔子生、母徵在以繡紱繫麟角、及孔子欲死、抱麟解紱而泣。

【紱冕】 [意義]紱は章を以て作れる蔽膝なり、冕は冠なり、並に祭服なり。[出處]論語子罕篇に、惡衣服而致美乎黻冕。又た左傳宣公十六年に、晉士會、滅赤狄、晉侯問于王、戊申以黻冕、命士會、將中軍、且爲太傅。

十二 紱

【紱衣】 [意義]前條を見よ。[出處]詩經秦風終南篇に、君子至止、黻衣繡裳と。毛傳に、黑與青謂之黻、五色備謂之繡。

【紱班】 [意義]紱を被る貴顯の士列をいふ。[出處]張載の文に、至如阡冕

數班之士、苟不能匡化補政、佐時益世、而徒俯仰取容、要榮求祿、厚自封之。

【筆】 [意義]毛筆は秦の蒙恬の創製する所なりとの說あれど、其の實、周の頃より有りしを、蒙恬が之を改善せしなり。[出處]說文に、楚謂之聿、吳人謂之不律、燕謂之弗、秦謂之筆。爾雅に、不律謂之筆と。注に、蜀人呼筆爲不律と。古今注に、古之筆不論以竹以木、但能染墨成字、即謂之筆、秦吞六國、滅前代之美、故蒙恬得、稱於時、蒙恬造筆、即秦筆耳、以枯木爲管、鹿毛爲柱、羊毛爲被、所謂蒼毫也、形管赤漆耳、史官記事用之。又た五雜俎に、古人書爲文小篆、似不用筆、亦可自眞草八分興、而筆之權遂重矣。[參考]筆に就いて、陵餘叢考卷十九に詳密に攷證せり、就いて見るべし。

【載筆】 [意義]筆を自ら携へること。[出處]禮記曲禮上篇に、史載筆、士載言。

【落筆】 [意義]筆を紙に下すをいふ。[出處]杜甫の詩に、閱書百紙盡、落筆四座驚。

【閣筆】 [意義]筆をさし置きて、字を書くことを止めるなり。[出處]三國魏志王粲傳の裴注に、至子朝廷奏議、皆閣筆不能措手。

【茹筆】 [意義]筆を裂するをいふ。慣夏漫筆に、蓋言含毫終日也といへり。[出處]筆史に、劉筆謂之茹筆。

【投筆】 [意義]筆をナゲスツルをいふ。[出處]後漢書來歙傳に、蜀人使刺客刺歙、未殊歙自書表、投筆抽刃而絕と。又た同書班超傳に、超家貧爲官傭書、嘗輟業投筆歎曰、丈夫無他志、畧倣富平侯、安能久事筆硯間乎。[用例]駱賓王の詩に、投筆安能久事筆硯間乎。[用例]駱賓王の詩に、投筆懷遊藥、臨戎想召勛。○魏徵の出關の詩に、中原還逐鹿、投筆事戎軒。

【呵筆】 [意義]冬月寒冷のとき、字を書するに、毛に氣息を吹きかけて、凍れるを暖むるなり。[出處]開元遺事に、李白予便殿對明皇、撰詔誥、時大寒筆凍、李命令各執牙筆一呵之、遂取而書、其詔其受聖容如此と。又た方干の苦寒の詩に、挑懷青燈少、呵筆尺書遲。

【筆生花】 [意義]文字の美なるをいふ。[出處]生花を見よ。

【筆有神】 [意義]詩文に長ずるを形容していふ、神は神靈の義なり。[出處]杜甫の奉贈韋左丞丈二十二韻に、紙筆不銀死、儒冠多誤身、丈人試靜聽、賤子建請具陳、甫昔少年日、早充觀國賓、讀書破萬卷、下筆如有神、賦料揚雄敵、詩看子建親、李邕求譽日、王翰願卜鄰、自謂頗挺出、立登要路津、致君堯舜上、再使風俗淳、此意竟蕭條、行歌非隱淪、騎驢三十載、旅食京華春、朝扣富兒門、暮隨肥馬塵、殘杯與冷炙、到處潛悲辛、主上頃見徵、欲飛無翼、欲求伸、青冥卻垂翅、別離無縱鱗、甚饑丈人厚、甚知丈人眞、每於百寮上、微論佳句新、竊效貢公喜、薇蕨甘原憲、貧瘠能心快快、秪是走踉蹌、今欲東入海、即將西去秦、尙憐終南山、回首落淚痕、萬里誰能歸。

【下筆成篇】 [意義]筆を下せば立所に文章の成るをいふ。[出處]左思の贈妹詩に、才藝美奪、默議若記、下筆成篇。

【下筆成章】 [意義]前條に同じ。[出處]三國魏志文帝紀評に、文帝天資文藝、下筆成章、博聞强識、才藝絕倫。

【秪筆和墨】 [意義]筆をナメ墨をツクルをいふ。[出處]莊子田子方篇に、宋元君將畫圖、衆史皆至、受揖而立、秪筆和墨、在外者半、有一史後至者、儀容不趨、受揖不立、因之舍、公使人視之、則解衣槃礴、君曰、可矣、是眞畫者也。

【誤筆作蠅】 [意義]吳の趙逢が書に巧みなりし故事。[出處]三國吳志趙逢傳の裴注に、吳錄曰、曹不興善畫、權使畫、誤筆點素、因成以作蠅、既進御、權以爲生、蠅擧手彈之。

【舟膠】 [意義]舟の淺瀨にスワルをいふ。[出處]莊子逍遙遊篇に、覆杯水於坳堂之上、則芥爲之舟、置杯焉則膠と。[同例]續通鑑綱目に、祥興二年、崖山北淺、舟膠不可進。

【操舟】 [意義]舟を漕ぐなり。[出處]莊子逸篇に、津人操舟若神。

【棹舟】 カの部濟河(カハノ)に於舟を見よ。

【方舟】 [意義]南船々并ぶなり。[出處]爾雅釋水に、大夫方舟と。又た莊

子山木篇に、方舟濟於河。【補】史記酈食其傳に、方舟而下。

【爭舟】フネ　【意】舟に乘ることを我れ先き【解】左傳宣公十二年に、中軍下軍爭舟、舟中之指可掬也。【補】公羊傳宣公十二年に、才師大敗、晉衆之走者、舟中之指可掬矣。

【同舟濟江】フネ　【意】一艘の舟に共に戰ふなり、憂樂共にするにいふ。【解】孔叢子に、吳越之人同舟濟江、中流遇風波、其相救如左右手者、所惡同也。【補】孫子九地篇に、夫吳人與越人相惡、當其同舟而濟、遇風、其相救也如左右手。

【刻舟求劍】フネ　【意】舟に乘り居りて劍を水中に墜したれば、刀もてその舟の舷に刻して、此處に劍が沈めりとて之を求め、舟の移れるを知らず、以て愚人が舊を守りて時勢の推し移れるを知らざるに喩ふ。【解】呂氏春秋察今篇に、楚人有涉江者、其劍自舟中墜於水、遂契其舟曰、是吾劍之所從墜、舟止、從其所契者入水求之、舟已行矣、而劍不行、求劍若此、不亦惑乎。

【藏舟於壑】フネ　【意】物を藏することの堅固なるにいふ。壑は大なる溪谷なり。【解】莊子大宗師篇に、夫藏舟於壑、藏山於澤、謂之固矣、然而夜半有力者負之而走、昧者不知也。

【推舟於陸】フネ　【意】我意を以て無理を通さんとするにいふ。【解】莊子天運篇に、夫水行莫如用舟、而陸行莫如用車、以舟之可行於水也、而求推之於陸、則沒世不行尋常、今古非水陸異、周魯非舟車異、今觀行周於魯、是猶推舟於陸也。

船

【舟非水不行】フネ　【意】舟は水なければ行かず、君は民なければ治らざるに喩ふ。【解】孔子家語に、舟非水不行、水入舟則沒、君非民不治、民犯上則傾。【補】荀子王制篇及び哀公篇に類語あり。

【舟覆乃見善游】フネ　【意】舟が顚覆し、然る後其人の善く游ぐことが知れるといふ意。【補】淮南子に、舟覆見善游、馬奔乃見良御。

【艤船】フネ　【意】船を作りて岸に著け出發を待つこと。【補】史記項羽記に、烏江亭長艤舟待。

【發船】フネ　【意】船を出だすをいふ。【補】國公案に、相公行李發、舟之時。

【刺船】フネ　【意】舟に棹をさすなり。【補】漢書陳平傳に、乃解衣盤而佐刺船。

【以船爲家】フネ　【意】船に棲みて家とするなり。【補】漢書五行志に、吳地以舟爲家、以魚爲食。

【沈船破釜】フネ　【意】カの部破釜（カマ）沈船を見よ。

【乘船走馬三分命】フネ　【意】易く、馬は頼き易し、若し操縱宜しきを得ざれば、死傷を招くに至る、故に七分の人事三分の天命とするなり。【補】北夢瑣言に見ゆ。【補】朝野僉載に、乘船走馬、去死一寸。

【好船者溺騎好者墮】フネ　【意】船を好むものは水に溺れ、騎を好むものは馬より墮つるなり。人は其の好む所に就いて警むべきをいふ。【補】感經書に、夫好船者溺、好騎者墮、君子各以所好爲禍。

文

【文】フン　【意】①アヤなり、古來種種の解釋あり、②文體の名。【補】左傳昭公二十八年に、經緯天地曰文。又た周書謚法解に、道德博聞曰文、學勤好問曰文、慈惠愛民曰文、錫民爵位曰文、愍民惠禮曰文と。康熙字典に、說文、錯畫也。玉篇、文章也。釋名、文者、會集衆綵以成錦繡、如文繡一然也。易繫辭、物相雜、故曰文。周禮天官典絲、供其絲纊組文之物。注、雜給之事、青與赤謂之文。禮樂記、五色成文而不亂。③文體明辯に、按、編內所載、約謂之文、而此類獨以文名者、蓋文中之一體也、其格有散文、有韻語、或偶、楚辭或爲四六、或以聖神、或以國人、其體不同、其用亦異。

【文字】フン　【意】文と字との意義及び文字製作の始めとを出處の部に出だす。【補】周禮の鄭注に、古曰名、今曰字と。儀禮の鄭注に、名、書文也、今謂之字。又た說文の序に、依類象形謂之文、形聲相益謂之字、著於竹帛謂之書。又た古今注に、倉頡造書、形立謂之文、聲具謂之字。又た鄭樵曰、獨體爲文、合體爲字。又云、文、識學也、字、耳學也。（以上文字の意義、事物紀原に、淮南子曰、蒼頡之初作書、以辨治百官、領理萬事、愚者得以不忘、智者得以

志、遂、又曰、昔者蒼頡作書、而天雨粟、又曰、見鳥跡而知著、書、呂氏春秋曰、蒼頡作書、注云、蒼頡生而知、書、寫倣鳥跡、以造文字、黃帝內傳曰、帝殺蚩尤、因命蒼頡、取像鳥跡、始作文字、以變質帝王世紀曰、蒼頡取像鳥跡、始作文字、李論象求曰、蒼頡黃帝下臣、觀鳥跡以作文字、鬼夜哭、龍潛藏、晉衛恆曰、昔在黃帝創制造物、有沮誦蒼頡、始作書、發觀鳥跡、以興思、世本亦曰、沮誦蒼頡造書、宋衷云、皆黃帝史也、字源曰、太昊時始有文字、或云、蒼黃帝史也、字源曰、古爲文字、又曰庖犧氏獲、景龍作龍書、炎帝因嘉禾作穗書、蒼頡變古文、寫鳥跡、作鳥跡篆、少昊作鸞鳳書、取似古文、高陽作科斗書、堯因軒轅龜圖作龜書、夏后氏作形似篆、商湯作鳥書、又蘇氏作壇書、今曰勒字、書斷曰、古文、黃帝史蒼頡作、大篆、周宣王史史籀作小篆、秦丞相李斯作八分、秦羽人上谷王次仲作隸書、秦獄吏下邽程邈作飛帛、漢左中郎將蔡邕作草、草、漢黃門令史史游作行書、後漢潁川劉德升作草書、王右軍云、其先出杜氏、名伯度、趙壹云、興於秦末、或云、漢時杜伯度、草所作、因章帝所好名、章草、章讀謂之草聖、漢興有之、不知誰作、書斷謂如淳之作、起草爲、漢、草書起於此、一說、李斯又作刻符書、雲頭鳥脚、斯及趙高俱善之、漢章帝時、曹喜作垂露鼎針二體、晉王羲之作龍爪篆、山嶌作花篆、蘇顧繇作正書散隸、漢蔡邕見門吏帛飛白、因成字、故名飛帛、劉公嘉話曰、飛帛始於蔡邕、在鴻都學、見匠人施堊帶、遂效之、唐太宗爲飛帛書、唐會要曰、正觀十八年五月、太宗爲飛帛書、作鸞鳳綵觀等字、蒼頡是陽氷論、篆云、秦始皇時、王次仲作八分、蒼頡生而知、書、寫倣鳥跡、以造文字、黃帝內傳曰、帝殺蚩尤、因命蒼頡、取像鳥跡、始作文字、以變質帝王世紀曰、蒼頡取像鳥跡、始作文字、李論象求曰、蒼頡黃帝下臣、觀鳥跡以作文字、鬼夜哭、龍潛藏、晉衛恆曰、昔在黃帝創制造物、有沮誦蒼頡、始作書、發觀鳥跡、以興思、世本亦曰、沮誦蒼頡造書、宋衷云、皆黃帝史也、字源曰、太昊時始有文字、或云、蒼黃帝史也、字源曰、古爲文字、又曰庖犧氏獲、景龍作龍書、炎帝因嘉禾作穗書、蒼頡變古文、寫鳥跡、作鳥跡篆、少昊作鸞鳳書、取似古文、高陽作科斗書、堯因軒轅龜圖作龜書、夏后氏作形似篆、商湯作鳥書、又蘇氏作壇書、今曰勒字、書斷曰、古文、黃帝史蒼頡作大篆、周宣王史史籀作小篆、秦丞相李斯作八分、秦羽人上谷王次仲作隸書、秦獄吏下邽程邈作飛帛、漢左中郎將蔡邕作草、草、漢黃門令史史游作行書、後漢潁川劉德升作草書、王右軍云、其先出杜氏、名伯度、趙壹云、興於秦末、或云、漢時杜伯度、草所作、因章帝所好名、章草、章讀謂之草聖、漢興有之、不知誰作、書斷謂如淳之作、起草爲、漢、草書起於此、一說、李斯又作刻符書、雲頭鳥脚、斯及趙高俱善之、漢章帝時、曹喜作垂露鼎針二體、晉王羲之作龍爪篆、山嶌作花篆、蘇顧繇作正書散隸、漢蔡邕見門吏帛飛白、因成字、故名飛帛、劉公嘉話曰、飛帛始於蔡邕、在鴻都學、見匠人施堊

【文章】フンシヤウ　【意】①アヤあるをいふ。②道德に、書籍之事、青與赤謂之文、赤與白、謂之章。③論語泰伯篇に、大哉堯之爲君也、巍巍乎其有文章と。又た同書公冶長篇に、子貢曰、夫子之文章可得而聞也。④周禮冬官考工記典論に、文章、經國之大業、不朽之盛事と。又た顏氏家訓に、文章當以理致爲心腎、氣調爲筋骨、事義爲皮膚、華麗爲冠冕。

【文集】フンシフ　【意】一家又は諸家の文を編輯せし書籍をいふ。【補】古今原始に、文集起于漢武帝、今田夫野老亦皆有集と、又た隋國語筆に、隋經籍志曰、集之名漢東京所創、蓋指班史某人文幾大、某人詩幾大、而言、實後人及之、非自爲及也、及、梁聞、始有自爲及者、南史阮孝緒爲七錄、四曰、文、及王筠、以一官爲一集、江淹自名前後集、是也。

【文學】フンガク　【意】①詩書禮樂の文を學ぶをいふ、武藏に對していふ。②官名なり。【補】①論語先進篇に、文學、子游子夏。②事物紀原に、漢都國皆有文學掾、則文學漢官也、唐會要曰、大曆十四年十二月五日、諸州府學博士、改爲文學、品秩同、參軍、唐志曰、文學州學於吏部、然無職事、衣冠取之、故朝以爲散官、炙轂子曰、隋開皇中、諸州刺史柳昂表勸學、帝令州置博士、皆其教授、唐嘉宗時、顏眞卿曰、文學蓋復漢置號也。

【文人】フンジン　【意】①文德ある人をいふ。②文字を好む人、又は文學に長ぜる人。【補】①書經文侯之命篇に、說孝于前文人と。又た詩經大雅江漢篇に、肇敏戎公、錫爾圭瓚、秬鬯一卣、告于文人と。毛傳に、文人、文德之人也。②典論に、文人相輕、自古而然。

【文儒】フンジユ　【意】文學に熟達せる儒者をいふ。【補】晉書に、虞喜、字仲寧、武、崇尚文儒。

【文部】フンブ　【意】文學を掌る所なり。【補】唐書百官志に、天寶十一載、改吏部曰文部。

【文德】(ブントク)　〔意義〕文學の德なり。〔出處〕易經小畜卦象傳に、風行天上小畜、君子以懿文德と。又た書經大禹謨篇に、帝乃誕敷文德、舞干羽于兩階、七旬、有苗格と。又た詩經大雅江漢篇に、矢其文德、洽此四國。

【文種】(ブンシユ)　〔意義〕學問好きの子をいふ、讀書種子に同じ。〔出處〕龍城錄に、裴令公常訓其子、凡吾輩但可文種無絕、然其間有成功能致身爲萬乘之相、則天也。

【文宗】(ブンソウ)　〔意義〕文人の宗師なり。〔出處〕晉書陸雲傳に、百代文宗一人而已。

【文豪】(ブンガウ)　〔意義〕文章の大家なり。〔出處〕名臣言行錄に、楊億作文、頃刻之間、成數千言、眞一代之文豪也。

【文藝】(ブンゲイ)　〔意義〕文字のこと、武藝に對していふ。〔出處〕大戴禮に、有隱於智禮者、有隱於文藝者。

【文林】(ブンリン)　〔意義〕㊀儒林の鬱然繁茂せるに取りて、儒宗の義とす。㊁文才あるものを集め錄せる帳簿の名。〔出處〕㊀後漢書崔駰傳論に、崔氏世有美才、兼以沈淪典籍、遂爲儒家文林。㊁林下偶談に、歐公凡遇後進投卷、可採者、錄爲一册、名曰文林。

【文籍】(ブンセキ)　〔意義〕書籍をいふ。〔出處〕孔安國の尙書序に、古者伏犧氏之王天下也、始畫八卦、造書契、以代結繩之政、由是文籍生焉。

【文賦】(ブンプ)　〔意義〕文章の篇名。〔解題〕晉の陸機の作に係る、文心雕龍に、陸氏文賦號爲曲盡、然泛論纖悉、而實體未該といへり、全篇文選賦類に載す。

【文筆】(ブンピツ)　〔意義〕文章といふに同じ。〔出處〕法華經安樂行品に、菩薩摩訶薩不親近國王王子大臣官長、不親近外道梵志尼揵子等、及造世俗文筆讚詠外書。

【文墨】(ブンボク)　〔意義〕文を書し墨を磨るなり、文筆と同じ意なり。〔出處〕史記蕭相國世家に、徒持文墨議論、不戰と。又た漢書杜周傳に、張湯杜周、並起文墨小吏。

【文房】(ブンバウ)　〔意義〕文書を作る房をいふ。〔出處〕南史江革傳に、任昉與革書云、文房之職、總卿昆季。

【文案】(ブンアン)　〔意義〕机なり。〔出處〕世說任誕下篇に、王敬弘爲尙書僕射、關署文案、初不省讀と。又た通鑑晉孝武帝紀胡三省注に、按、據也、文案、謂諸曹文書留爲按據者。

【文才】(ブンサイ)　〔意義〕文章を作る才氣をいふ。〔出處〕後漢書應劭傳に、以文才稱。

【文場】(ブンヂヤウ)　〔意義〕文壇といふに同じ、文章を作るもの〻集る所をいふ。〔出處〕沈佺期の詩に、累年同畫省、四海接文場。

【文臺】(ブンタイ)　〔意義〕書册を載する臺なり。〔出處〕會典に、覗金文臺。

【文勢】(ブンセイ)　〔意義〕文章の勢といふこと。〔出處〕法苑珠林に、依此文勢。

【文句】(ブンク)　〔意義〕文章の句をいふ。〔出處〕世說に、定點文句而已。

【文祖】(ブンソ)　〔意義〕堯帝の廟をいふ。〔出處〕書經舜典篇に、月正元日、舜格于文祖。

【文命】(ブンメイ)　〔意義〕天子文德の敎命なり。〔出處〕書經大禹謨篇に、文命敷于四海。〔參考〕史記夏紀に夏禹名曰文命。

【文敎】(ブンケウ)　〔意義〕文字の敎なり。〔出處〕書經禹貢篇に、五百里綏服、三百里揆文敎、二百里奮武衞。

【文武】(ブンブ)　〔意義〕㊀文道と武道とをいふ。㊁周の文王武王をいふ。〔出處〕㊀帝範崇文篇に、文武二途、捨一不可、與時優劣、各有其宜、武士儒人焉可廢也。㊁文武之道を見よ。

【文恬】(ブンテン)　〔意義〕世の治りて文事を以て樂む義。〔出處〕韓愈の平淮西碑に、相臣將臣、文恬武嬉。

【文明】(ブンメイ)　〔意義〕㊀世の開け治るなり、文章ありて光明なる義。㊁人の德の輝けるをいふ。〔出處〕㊀易經文言に、見龍在田、天下文明。㊁書經舜典篇に、濬哲文明。

【文采】(ブンサイ)　〔意義〕文章光彩なり。〔出處〕荀子に、此夫文而不采者歟。

【文官】(ブンクワン)　〔意義〕武官に對していふ。〔出處〕後漢書禮儀志に、立春遣使者齎束帛以賜文官。

【文道】(ブンダウ)　〔意義〕治平の道をいふ。武道に對して文道といふ。〔出處〕國語齊語に、行文道。

【文物】(ブンブツ)　〔意義〕禮樂典章の類を稱す。〔出處〕左傳桓公二年に、火龍黼黻昭其文也、五色比象昭其物也。〔詩〕李白の詩に、朝野盛文物、衣冠何翕絕。

【文法】(ブンハフ)　〔意義〕法律をいふ。〔出處〕漢書酷吏傳に、司馬安之文法と。注に文法を以て人を傷害するなり、法禁なり。

【文罔】(ブンマウ)　〔意義〕罔は網に同じ、法禁なり。〔出處〕史記游俠傳に、雖時扞當世之文罔、然其私義廉潔退讓有足稱者。

【文致】(ブンチ)　〔意義〕法文によりて罪を致すをいふ。〔出處〕漢書景帝紀に、詔曰、諸獄疑、若雖文致於法、而於人心不厭者、輒讞之。

【文身】(ブンシン)　〔意義〕肌膚に入れ墨をすること。〔出處〕禮記王制篇に、東方曰夷、被髮文身、有不火食者と。又た史記吳世家に、太伯仲雍二人、乃奔荊蠻、斷髮文身示不可用、以避季歷。

【文幕】(ブンバク)　〔意義〕錢の模樣ある面を文といひ、無き面を幕といふ。〔出處〕漢書西域傳に、罽賓、以金銀爲錢、文爲騎馬、幕爲人面と。顏注に、張晏曰、錢文面、作騎馬形、漫面作人面目也、如淳曰、幕音漫、師古曰、幕卽漫耳、無勞借音、今所呼幕皮者、亦謂其平而無文也。

【文莫】(ブンバク)　〔意義〕忞慔の省字にして、强勉なり。〔出處〕論語述而篇に、子曰、文莫、吾猶人也、躬行君子、則吾未之有得。〔參考〕論語駢枝に、楊愼丹鉛錄引晉欒肇論語駁曰、燕齊謂勉强爲文莫、又方言曰、侔莫、强也、北燕之北郊、凡勞而相勉、若言努力者、謂之侔莫、案說文、忞、强也、慔、勉也、忞讀若旻、文莫、卽文慔也、假借字也、廣雅亦云、文、勉也、黽勉、密勿、蠠沒、文莫、皆一聲之轉、文莫、行仁義也、躬行君子、由仁義行也。○論語古注集箋に、說文、忞、从心文聲、慔、从心莫聲、二字相夾、則文莫者、忞慔之省、非假借也。

【文紗】(ブンシヤ)　〔意義〕綾ある紗をいふ。〔出處〕唐書代宗紀に、文紗吳綾。

【文繡】(ブンシウ)　〔意義〕衣裳の模樣と色合なり、五色具備せるを繡といふ。〔出處〕禮記月令篇に、乃命有司、具飾衣裳、文繡有常。

【文鸞】(ブンラン)　〔意義〕藝妓の名。〔出處〕劉長卿の贈妓文鸞詩に、文鸞蕭灑美如玉、眉黛春山螺黛綾。

【文鷁】(ブンゲキ)　〔意義〕美しき船をいふ、ケの部鷁(ゲキ)首を見よ。〔出處〕司馬相如の子虛賦に、浮文鷁、揚桂枻と。注に、鷁、水鳥也、畫其象於舡首。淮南子曰、龍舟鷁首、天子之乘也。

【文螭】(ブンチ)　〔意義〕文ある鯛をいふ。螭は角なき龍なり。〔出處〕王㬎の七夕の詩に、六龍齊轡、文螭負環車。

【文魚】(ブンギヨ)　〔意義〕奇麗なる魚をいふ。〔出處〕山海經の中山經に、睢水其中多文魚。

【文子】(ブンシ)　〔意義〕書名。〔解題〕此書二卷あり、作者の名知るべからず、或は傳ふ周の辛鈃字は文子、號を計然と云へる人の著なりと、漢書藝文志には、但だ老子の弟子と曰ふのみ、蓋し後の學者の僞作せる者なり、凡て十二篇あり、皆老子の說を述べたり、唐の柳宗元は、多く他書を竊取して之を合すといへり、然れども要するに唐以前の古本たるは疑なし。〔參考〕宋の杜道堅、之が爲めに纘義を作れり。

【文則】(ブンソク)　〔意義〕書名。〔出處〕宋の陳騤の撰する所にして、二卷あり、此書は文の法則を論ずるものにて、十干に分ち、甲より戊までを上卷とし、經傳の文を評す、下卷は主として文體句法を論ぜり。

【文編】(ブンペン)　〔意義〕書名。〔出處〕明の唐順之の撰する所にして、六十四卷とす、五代周より宋に至るの文を編纂して、制策諫疏封事上書等の三十三體に分錄せり、順之の文を論ずるや、法を以て先とせるものなれば、學者唐宋より秦漢に適くものは、正に此書より入るべし。

【修文】(シウブン)　〔意義〕文德を修め民に仁を施す。〔出處〕エの部偃(エン)武を見よ。

【縟文】(ジヨクブン)　〔意義〕縟は殺るなり、殺文また作文に同じ。〔出處〕漢書賈誼傳に、誼年十八、以能誦詩書屬文稱於郡中。

【文昌星】(ブンシヤウセイ)　〔意義〕北斗星の魁前にある六つの星なり、魁といふにより、科第を此星に祈ること〻なれり。〔出處〕五雜俎に、俗以魁故祠文昌、以祈科第、因其近斗也、故亦稱文昌司命云、傅會甚矣。

【文星暗】(ブンセイクラシ)　〔意義〕落第して歸ること。〔出處〕書言故事に、言人下第而歸曰無惟文星暗、唐大中閒、天官奏云、文星暗、科場當有事、後經三科覆試、復落、考官皆罰俸。

【文字飲】(ブンジノイン)　〔意義〕詩を賦し文を談じて酒を飲むなり。〔出處〕韓愈の醉贈張秘書の詩に、長安衆富兒、盤饌羅羶葷、不解文字飲、惟能醉紅裙。

【文字癖】（ブンジヘキ）　造の八月晦試院中詩に、官居課程地、生有文字癖。

【文無害】（ブンガイ）　文は文法、即ち刑法なり、文法公平にして、人を傷害することなきをいふ。出典史記蕭相國世家に、蕭相國何者、沛豐人也、以文無害爲沛主吏掾と。又た漢書趙禹傳に、亞夫曰、極知禹無害、然文深不可以居大府。解説文無害の解、史記漢書の注に數説あり、唯〻無劾の雖爲文吏、而不刻害也の解を妥當とす、金曲園曰く、後漢百官志、秋冬遣無害都吏、案劾訊諸囚、注案律有無害都吏、如今言公平吏、漢書音義曰、文無所枉害也、乃知無害吏亦漢中語と、并せ錄して參考に供す。

【文山集】（ブンザンシフ）　書名。解説二十一卷あり、凡そ詩文十七卷、指南前錄一卷、後錄二卷、紀年錄一卷とす、天晴の大節炳然として竹帛を照らす、而して其の詞章も亦實に卓然として傳ふべし。

【文中子】（ブンチウシ）　説と曰ふ、舊本に隋の王通撰すと題す、通は當時逸名の學者にして、煬帝、通を徵すも、辭して仕へず、專ら徒を集めて教授を事とせり、唐初の房玄齡、魏徵等の俊傑の士、其門人たりしなり、此書通の自撰に非ずして、通の卒後其子福郊、福時等の編せし所なり、凡て十卷あり、字句句、皆論語に摹倣し、師弟亦互に相輾榜して、孔子及び其弟子に比せり。解説宋の阮逸之が注を作れり。

【文武兩道】（ブンブリヤウダウ）　チの部忠（チュウ）孝兩全を見よ。

【文武兼備】（ブンブケンビ）　文武の才を兼ね備へたる士をいふ。出典唐書裴行儉傳に、帝曰、行儉提孤軍、深入萬里、兵不血刃、而叛黨衰、可謂文武兼備矣。

【文武二道】（ブンブニダウ）　文武、二道、頓かに竝び出づるをいふ。出典魏書宗室蕃傳に、蕃於爾日、勇冠三軍、高祖大悅、而言曰、任城康王大有祖德、文武頓出、其門以功賜爵高平縣侯。

【文武頓出】（ブンブトンシユツ）

【文恬武嬉】（ブンテンブキ）　の官吏安恬嬉遊して居るをいふ。出典韓愈の平淮西碑に、相臣將臣、文恬武嬉と。又た宋史樂志に、帝撫熙運、憂樂協期、禮明樂備、文恬武嬉。

【文行忠信】（ブンコウチウシン）　孔子、人に教ふるに、文を學び、行を修め、忠心を盡し、信實ならしむ、これ孔門教育の大綱なり。出典論語述而篇に、子以四教、文行忠信。

【文陣雄帥】（ブンヂンユウスイ）　その技の優れたる人をいふ。出典唐書蘇頲傳に、張九齡嘗覽頲文卷、謂同列曰、蘇生之後、辭無敵、眞文陣雄帥也。

【文場元帥】（ブンヂヤウグンスイ）　踏といふに同じ、出典事文類聚に、張九齡號詞人之冠、又號文場元帥。

【文人相輕】（ブンジンサウケイ）　文章家は、高く自ら標致して、互に相輕蔑し居るをいふ。出典典論に、文人相輕、自古而然、傳毅之於班固、伯仲之間耳、而固小之、與弟超書曰、武仲以能屬文爲鹿裘含史、下筆不能自休、夫人善於自見、而文非一體、鮮能備美、是以各以其所長、相輕所短と。又た文心雕龍に、班固傳毅、文在伯仲、而固嗤毅謂下筆不能自休、及陳思論才亦深排孔璋、故魏文稱文人相輕、非虛談也。

【文質彬彬】（ブンシツヒンピン）　彬彬は、猶ほ班班のごとし、物の入り亂れて兩して能く均し、即ち文と質と適度に相雜はるをいふ。出典論語雍也篇に、質勝文則野、文勝質則史、文質彬彬、然後君子。

【文章鉅公】（ブンシヤウキヨコウ）　文章の大家をいふ。出典李賀の高軒過の詩に、馬蹄隱隱耳摩隆、入門下馬氣如虹、云是東京才子、文章鉅公。

【文章宿老】（ブンシヤウシユクラウ）　文章界の老先生といふ意。出典唐書に、李嶠字巨山、爲鳳閣舍人、文翰太號令多主、嶠之、嶠富才思、然其仕前與王勃、楊盈川、接、中興、崔湜、蘇味道、齊名、晚諸人沒、而爲文章宿老、一時學者取法焉。

【文章絕唱】（ブンシヤウゼツシヤウ）　文章の絕美なるをいふ。出典鶴林玉露に、太史公伯夷傳、蘇東坡赤壁賦、文章絕唱也。

【文質三統】（ブンシツサントウ）　夏殷周三代の政事を子曰、殷因於夏禮、所損益可知也、周因

於殷禮、所損益可知也。集解に、馬融云、所因謂三綱五常、所損益謂文質三統。

【文王四乳】（ブンワウシニウ）　周の文王四の乳房あり といふ。出典白虎通に、文王四乳、是謂至仁。

【文章四友】（ブンシヤウシユウ）　文章家の四人の朋友なり。出典唐書杜審言傳に、少與李嶠、崔融、蘇味道、爲文章四友、世號崔李蘇杜。

【文房四侯】（ブンバウシコウ）　文房四譜に、管城侯毛元銳、筆也、即墨侯石虛中、硯也、好時侯楮知白、紙也、松滋侯易玄光、墨也。

【文武之道】（ブンブノミチ）　いふ、即ち聖人の道なり。出典周の文王武王の道を論語子張篇に、衛公孫朝問於子貢、曰、仲尼焉學、子貢曰、文武之道未墜於地、在人、賢者識其大者、不賢者識其小者、莫不有文武之道焉、夫子焉不學、而亦何常師之有。

【文王之囿】（ブンワウノユウ）　周の文王の獸物を畜へる園なり、囿は禽獸を放し畜にしたる處なり。出典孟子梁惠王下篇に、齊宣王問曰、文王之囿方七十里有諸、孟子對曰、於傳有之。解説詩經大雅靈臺篇に、經始靈臺、經之營之、庶民攻之、不日成之、經始勿亟、庶民子來、王在靈囿、麀鹿攸伏、麀鹿濯濯、白鳥鶴鶴、王在靈沼、於牣魚躍。

【文侯之命】（ブンコウノメイ）　晉經周書の篇名にして、即ち眞古文なり。解説幽王犬戎の爲めに殺さるゝや、晉の文侯、鄭の武公と共に其太子宜臼を東都に迎へて之を立て、平王と爲す、是を以て文侯平王の寵用する所と爲り、遂に方伯に擧げられ、且つ秬鬯弓矢を賜ひしとき、策書を作り之に命ず、即ち此篇なり、故に序に曰く、平王錫晉文侯秬鬯圭瓚、作文侯之命と、而して全篇二百十言、成な文武の業を昔ひ、以て文侯の德を稱揚す、然れども平王は己を立てし者なるを以て、德ありと なし、而も其父の讎を復することを忘れ、是れ義に背けるの甚しきものなり、然るに孔子之を此に存するは、蓋し戒を天下後世に示さむが爲ならん。

【文之烏獲】（ブンシウノウクワク）　狗は文豪といふがごとし、烏獲は古の力士なり。出典論衡に、世稱力者、常蔓烏獲、然則蓋仲舒、揚子雲、文之烏獲也。

【文心雕龍】（ブンシンテウリヨウ）　書名。解説梁の劉勰撰す、十卷ありて上下二篇に分つ、上篇二十有五、體裁の別を論じ、下篇二十有四、巧拙の由を論ず、序志一篇を合して亦二十五篇と爲す、此書は文章の利病に於て其微妙を窮極せり、文を論ずる書、此書より古きはなく、亦此書より精なるは無し。解説黃叔琳これが爲めに輯注を作れり、清の紀昀之が評を作れり。

【文體明辯】（ブンテイメイベン）　書名。解説明の徐師曾撰す、明の吳訥の撰する文章辯體に據りて之を取捨して編したるものなり、分ちて文章綱領一卷、詩文六十七卷、附錄十六卷、總て八十四卷あり。綱領は、古今の文章詩賦に關する議論、及び各〻文體詩格の源流を揭げたり、詩文は、三代以下廣く例を取りて之を載せたり、洵に文體明辯の名に負かず。

【文苑英華】（ブンエンエイクワ）　書名。解説宋の李昉等勅を奉じて撰する所、一千卷あり、此書は齊統の文選に續ぐの意を以て作れるものにして、梁末より始め、唐朝の文を收めたり、其目は、賦・詩・歌行・雜文・策判・表・書・序・論等の三十七類とす。

【文館詞林】（ブンカンシリン）　書名。解説唐の許敬宗の勅を奉じて撰する所にして、漢より唐初に至る詩文を蒐集したるもの、凡そ一千卷あり、文選に次ぎ最古の總集なりしが、宋の初に既に散佚したり、吾邦の僧奮然の宋に入るや、此書の在ることを話せしに、宋人之を知らずといふ。吾邦には平安朝に舶來せるも、祕閣貞觀の火災に罹れる時、此書散佚して、僅かに存するものあり、高野山及び大覺寺章大寺に藏する所最も多しといへども數十卷に過ぎずといふ。

【文章緣起】（ブンシヤウエンキ）　書名。解説梁の任昉の撰にして、一卷あり、秦漢以來の詩文の諸體八十五の起原を說きしものゆへに、緣起と名づく、唐の張縝補注を作り、又續編を撰す、清の方熊之を補へりといふ。

【文章軌範】（ブンシヤウキハン）　書名。解説宋の謝枋得撰す、枋得字は君直、疊山と號す、枋得が舉業者の爲めに軌範と爲すべき漢晉唐宋の文章凡て六十九篇を撰集せるものにして、分ちて放膽小心の二

格とし、侯王相將有種乎の符號を設け、之を七卷に分纂せり、各圈點評語あり、惟だ前出師表歸去來辭二篇のみ評語なく、圈點なし、蓋し枋得は宋の忠臣にして、此書は宋亡びし後編せるものなれば、寓意あるならん。**考**明の都守益纂文章軌範を作れり。我邦にて類山陽は韓柳歐及び三蘇の文を集め謝選拾遺と名づけたり。

【文章正宗】 書名。**解**宋の眞德秀の撰する所にして、二十四卷と目錄一卷あり、此書は後世文辭の變多きを以て、學者其源流を失ふを慮ひ、正眞なる文章を集めて、正宗と名づく、辭命・議論・叙事・詩賦の四類に分ち、左傳國語以下唐宋に至る諸作を錄して、自ら之に注したるものなり。

【文章辨體】 書名。**解**明の吳訥の撰する所にして、五十卷と外集五卷とあり、文章正宗に倣りて編集せしもの、古歌・謠辭・樂府・古詩・歌行・論・告・奏書・批答・詔・册・制・誥・議・彈文等の四十類に分ち、卷首には諸家の詩文に關する意見を集め、外集には四六對偶、及び律詩歌曲を集めたり。

【文章一貫】 書名。**解**二卷あり、明の高琦等編す、文章の法則を論ず、上卷は、立意・氣象・篇法・章法・句法・字法に分ち、下卷は、起・結・敍事・議論・引用・譬喩・含蓄・形容・繳結に分ちたり。

【文章歐冶】 書名。**解**元の陳繹曾の撰する所にして、一卷あり、此書は文章の法則を論じたるものにて、古文譜・識題法・式・製・體・格を記し、四六附說等ありて、每類又之を細分して數小目に分つ、終りには詩譜を附けたり。

【文章精義】 書名。**解**此書の撰者判然せざるも、宋の李塗の作といふ說は眞に近し、其文を論ずる、六經に本づき、聲律章句に屑屑ならず、工拙繁簡の閒、源流得失の辨に於ては、白黑判然たり。

【文獻通考】 書名。**解**元の馬端臨の撰す、三百四十八卷あり、此書は杜佑の通典に因り、更に之を廣め通典八門を析して一十有九と爲し、增すに經籍・帝系・封建・象緯・物異の五門を以てし、共に二十四門と爲す、述ぶる所の事蹟制度は、上は通典を承け、下は南宋の寧宗帝に至る、條を分ち排纂すること、通典の體裁に倣ひて一家言を成すが如くなる能はずと雖も、宋朝の制度最も詳博なること、宋史各志の未だ備らざる所も大抵記載せり。（サの部三（サン）通を參看せよ）

【文獻不足】 文は典籍、獻は賢なり、徵證すべき典籍と賢者との乏しきをいふ。**出處**論語爲政篇に、之を夏禮吾能言之、杞不足徵也、殷禮吾能言之、宋不足徵也、文獻不足故也、足則吾能徵之と。杞國は、夏の後、宋國は、殷の後なり。

【文當學遲】 文章は司馬遷を學ぶべきをいふ。**出處**事文類聚別集卷五に、唐庾曰、六經以後便有司馬遷、三百五篇之後、便有杜子美、文當學遲、詩當學杜子美。

【文不加點】 文章が成りて後ち、一點をも加筆せずとて、其の文の美なるをいふ。**出處**禰衡の鸚鵡賦序に、時黃祖太子射、賓客大會、有獻鸚鵡者、坐客於酒前曰、今日無緣、賓、願先生爲之賦、使四座成共榮觀、衡因爲賦、筆不停綴、文不加點と。又た北史杜鉉傳に、杜正元、文不加點。

【文如春華】 文詞の華麗なるをいふ。**出處**曹植の文に、文如春華、思若湧泉。

【文過其實】 文飾が實地より甚だ過ぎたるをいふ。**出處**後漢書馮衍傳に、以文過其實、遂廢於家。

【文炳雕龍】 文章の炳然と耀くは、巧にして龍を彫刻したるが如しといふ。**出處**魏書高允傳に、高論朗達、默識淵通、領新橋異、發自心胸、實俾和璧、文炳雕龍、耀姿天邑、衣錦舊邦。

【臨文不諱】 文書に書するに當りては、天子の御名といへども諱まざるをいふ。**出處**禮記曲禮上篇に、詩書不諱、臨文不諱と。又た同書玉藻篇に、士於君所言、大夫沒矣、則稱諱若字、名士、與大夫言、名士、字大夫、於大夫所有公諱、無私諱、見祭不諱、廟中不諱、敎學臨文不諱。

【以文爲詩】 文章の作り方を以て詩を爲るをいふ。**出處**後山詩話に、黃魯直云、詩文各有體、韓以

文爲詩、杜以詩爲文、故不工爾。

【以文會友】 朋友に交るに學問を以てするをいふ。**出處**論語顏淵篇に、曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。

【飛文染翰】 文章を書く形容なり。**出處**蕭統の文選序に、詞人才子、即名淫於繡轂、飛文染翰、則卷盈乎湘帙。

【賣文爲活】 文章を以て糊口の資とすること。**出處**杜甫の寄岑參斯六官詩に、故人南郡去、去索作碑錢、本賣文爲活、饒令室倒懸。

【因文得錢】 文學に因りて財貨を得當貴の身となるをいふ。**出處**故事成語考に、因文得錢、乃曰稽古之力。**考**後漢書桓榮傳に、建武十九年、顯宗始立爲皇太子、帝召榮令說尙書、甚善之、入使授太子、二十八年、以榮爲少傅、賜以軺車乘馬、榮大會諸生、陳其車馬印綬、曰今日所蒙、稽古之力也、可不勉哉。

【舞文弄法】 巧に法律を用ふるをいふ。**出處**史記汲鄭傳に、張湯好興事、舞文法と。又た同書貨殖傳に、皮士舞文弄法、刻章爲賣。

【文忠公全集】 書名。**解**一百五十三卷、附錄五卷あり、宋の歐陽修の撰する所にして、周必大の編纂に係る、必大も亦歐陽公と同く、宋代廬陵の人なり、修の詩文、唯居士集五十卷は、その手定せしところ、其の餘の諸集は、皆他人の撰拾して、編せしところにして、諸州にて刻せし異本亦多し、必大參互考訂して合せて、この集を成す、諸本に比すれば特に精善となす、その目は、居士集五十卷、外集二十五卷、易童子問三卷、外制集三卷、內制集八卷、表奏書啓四六集七卷、奏議集十八卷、雜著十九卷、集古錄十卷、書簡十卷これなり。

【文獻徵存錄】 書名。**解**清の錢林と王藻との編輯するところにして、十卷あり、清初より道光年間に至るまでの學者、百九十三人附傳二百六十六人、合せて四百五十九人の傳記なり。

【文章憎命達】 文章の作家は兎角不遇なるもの多し、故にいふなり。**出處**杜甫の天末懷李白詩に、涼風起天末、君子意如何、鴻雁幾時到、江湖秋水多、文章憎命達、魑魅喜人過、應共冤魂語、投詩贈汨羅。

【文所以載道】 文章は先王の道を載するものにして、千載の後に傳ふるものなり。道は譬しと雖、獨傳ふる能はず、必ず文を假りて而後に傳ふるなり。**出處**通書文辭章に、文所以載道也、輪轅飾而人弗庸、徒飾也、況虛車乎と。又た元史儒學傳に、六經者、道之所在、文則所以載夫道者也。

【以文取士】 文章を以て士を試みて之を採用するをいふ。**出處**文獻通考選擧門に、神宗熙寧二年、議更貢擧法、罷詩賦明經諸科、以經義論策試進士、按、熙寧四年、始罷詞賦、專用經義取士、元祐元年、復詞賦與經義並行、紹聖二年、復罷詞賦、專用經義、建炎二年、又兼用經賦、蓋熙寧紹聖、則專用經而廢賦、元祐建炎、則雖復賦而未嘗不參經、**考**唐宋士を取る皆な詩賦策論とす、但重ずる所同じからざるのみ。

【文武代爲雌雄】 文と武、互に雌となり雄となり、武雌となるが如し。**出處**淮南子に、文武代爲雌雄、有時而用也。

【文起八代之衰】 久しく振はざりし文運を盛んにせしをいふ、八代とは、東漢・魏・晉・宋・齊・梁・陳・隋をいふ。**出處**蘇軾の潮州韓文公廟碑に、文起八代之衰、而道濟天下之溺。

【文王嗜菖蒲葅】 周の文王は、菖蒲のクキヅケを好むをいふ。**出處**韓非子難言四に、屈到嗜芰、文王嗜菖蒲葅、非正味也、而二賢尙之、所味不必美と。又た呂氏春秋孝行覽遇合に、若人之於滋味、無不說、甘脆、未必受也、文王嗜菖蒲葅、孔子聞而服之、終身不食之、三年然後勝之。**考**屈到嗜芰こと、國語楚語に見ゆ。

【文者貫道之器也】 文章は道を載せて、以て千載を貫くなり。**出處**李漢の集昌黎文序に、文者、貫道之器也、不深於斯道、有至焉者不也、（全文古文眞寶後集に載す）と。又た潤飾類函文章門に、李華崔孝公文集序曰、文者貫道之器也。**考**晦菴語錄に、

或問韓文李漢序頭一句甚好、先生曰、公道道之器、且如文章、是文者貫道之器、如何有病、先生曰、不然、道文是徑道中流出、豈有文反能貫道之理、文是文、道是道、文只如喫飯時下飯耳、若以文貫道、卻是把本爲末、以末爲本、可乎、又曰、載道之器猶飯器也、食則非無道、知道則非無書と。又た、鶴林玉露卷一に、文章一小技、於道未爲大、此論後世之文也、文者貫道之器、此論古人之文也、天以雲漢星斗爲文、地以山川草木爲文、巧女之刺綴、雕繪妙絕、機可人目、初無補於實用、後世之文似之。

【莫把文章動蠻貊】 詩の句。出典 宋人の雜將家集に過嶺都、每被看人問大蘇、莫把文章動蠻貊、惡妨談笑臥江湖。

【文生於情情生於文】 意義 文章は情より生じ、情は亦文より生ずるをいふ。出典 晉書孫楚傳に、初楚除服作詩以示王濟、濟曰、知文生於情、情生於文、覽之悽然、增伉儷之重。

【有文事者必有武備】 意義 治に居て亂を忘れざるの意。出典 史記孔子世家に、孔子攝相事曰、臣聞、有文事者、必有武備、有武事者、必有文備、古者諸侯出疆、必具官以從、請具左右司馬、定公曰、諾、具左右司馬、會齊侯夾谷。出典 穀梁傳定公十年に、

雖有文事、必有武備に作れり。又た同書襄公二十五年にも此語あり、昔に古者の二字を冠せり。

【文章一小技於道未爲尊】 意義 文章はもと一の小技藝なれば、道の上に於て尊きものといふを得ずとなり。出典 杜甫の詩の句なり。意義 洪容齋は、此の句を評して、杜子美激することありて云ひしなれど、甚だ矢言なりといへり。

【文臣不愛錢武將不惜死】 意義 文官は錢を愛し武將死を惜むは、古今の通弊なり、故に此くいへり。出典 宋史岳飛傳に、或問岳飛、天下何時太平、飛答曰、文臣不愛錢、武臣不惜死、則天下平矣、蓋有史稽斯言。

【文臣不愛錢武臣不惜死、岳飛所以致有斯言。】

【文籍雖滿腹不如一囊錢】 意義 學問に長ずと雖、之を實行せざれば、囊中錢あるに及ばざるをいふ。出典 後漢書趙壹傳に、何清不可、後、人命不可延、願風激霧、清、富貴者稱賢、文籍雖滿腹、不如一囊錢、伊優北堂上、抗辭倚門邊。出典 李樂龍の弟敬美にふる尺牘に、空言盈篋、不如一囊錢と。暗に後漢書の語を用ゐしなり。

【文章經國之大業不朽之盛事】 意義 文章は國家を經綸する一大事にして、永久に朽つることなき盛大なるものなりといふこと。出典 魏文帝の典論、文章、經國之大業、不朽之盛事、年壽有時而盡、榮樂止於其身、二者必至之常期、未若文章之無窮。

【文章自古無憑據惟願朱衣暗點頭】 意義 文章は古より巧と拙と定りたる證據なし、惟だ朱衣を着たる人の暗に點頭するを願ふなり、是は歐陽公の故事なり。出典 侯鯖錄に、歐陽公知貢舉、常處座後有一朱衣人點頭者、然後其文入格、因語同列三嘆、嘗有句云、文章自古無憑據、惟願朱衣暗點頭と。又た衡子文の同唱和詩に、徒勞爭墨榜、須信有朱衣と。自注に、朱衣吏事見登科記定錄。

【分】 イの部（イチ）分を見よ、

【分歲】 ひとしいふ。出典 康熙字典に、風土記除夜祭先、歲事長幼聚飲祝頌而散、謂之分歲。

【分至】 意義 分は、春分と秋分との二分をいひ、至は、夏至と冬至との二至をいふ。出典 ニの部二（ニ）至及び二分を見よ。

【分野】 意義 戰國の世に、天文家が其時に在りし國を以て、分て之を天體に配當し、甲の國の分野に星變あれば、其の配當せる國に災ありといふ。出典 周禮宗伯禮官之職に、保章氏掌天星以志星辰日月之變動、以觀天下之遷、辨其吉凶、以星土辨九州之埒所封、封域皆有分星、以觀妖祥と。又た國語周語に、歲之所在、則我有周之分野焉是也。

【分地】 意義 分け與る地の謂にして、戰に勝ち敵地を取り、其將士に分ち賜ぶる土地をいふ。出典 史記項羽紀に、未有分地。

【分明】 意義 判然として明瞭なること。出典 史記始皇紀に、貴賤分明。

【分際】 意義 區別といふ意。出典 漢書儒林傳に、明天人分際。

【分限】 意義 區域といふ意。出典 北魏書邢巒傳に、若不裁其分限、便恐無以支遠。

【分別】 意義 分ち別ちて、條理を立て區別するをいふ。出典 荀子に、分別以喻之。

【分付】 意義 人に物を分け與ふるをいふ。出典 漢書原涉傳に、具記衣被裕木、下至飯含之物、分付諸客、諸客奔走市買。

【分外】 意義 己れの身分の外なり。出典 三國魏志に、程曉疏曰、上不實非職之功、下不務分外之賞。

【分內】 意義 領分の內といふ義。出典 屈の論語義疏に、君子思慮當已分內。

【分陰】 惜分陰を見よ。

【分析】 意義 分解辨析の義なり。事の紛雜なるものを一一辨明するをいふ。出典 通鑑梁太祖紀に、帝命冠彥卿分析と。胡注に、分析者、使彥卿置對分疏辨析、梁現我死之由。

【分北】 意義 分ち背きて離れしむること、北は背に同じ。出典 書經舜典に、分北三苗と。蔡傳に、分其頑梗、使背離也。

【分銖】 意義 一分一銖として少しの分量をいふ。出典 史記大宛傳に、其人皆深眼多須髯、善市賈、爭分銖。

【分理】 意義 爭を辯解するをいふ。出典 鄭氏家範に、子孫受長上訶責、不論是非、但當俯首默受、毋得分理。

【分誘】 意義 人の讒りを吾身にも引受ること。出典 國語に、敢不分謗乎。

【分散】 意義 離散に同じ。出典 左傳に、國人分散。

【分袂】 意義 人と別るゝ義なり。出典 謝惠連の西陵遇風獻康樂詩に、飲餞野亭館、分袂澄湖陰。

【分韻】 意義 韻を分ちて詩を賦するなり、其の法は種種あり、古語詩句等を截て韻とす、蓋し宿構をさせまじき意に出づ、韻を分ち取りたるものは、得て案韻、若しくば得て某字と書するなり。出典 白居易の詩に、寒窗發題分韻句、紅爐巡飲暖寒杯。出典 分韻は何人より始まりしや詳かならず、案穆錄に、梁庾肩吾、暮遊山水賦韻得磯字、令と分韻の始なるにやとあり、錄して以て博雅に質す。

【分疏】 意義 言ひ分けをすること。出典 通鑑梁太祖紀に、世俗謂自辯解曰分疏、顏師古注、猶今言分疏と。又た品字箋に、分疏、卽條暢也。

【分定】 意義 人人分限一定せるをいふ。出典 尹文子に、彭蚿曰、雄兎在野、衆人逐之、分未定也、雞家滿市、莫有志者、分定故也。

【守分】 意義 自身の分限だけを守ること。出典 文子自然篇に、廉者可令守分、不可令消取。

【安分】 意義 身の分限に安んじて外物に誘はれざるをいふ。出典 蘇軾の詩に、胡不安其分、但疑物所誘。

【隨分】 意義 分限に相應ずるなり。出典 易經坤卦の疏に、厚德載物、隨分多少、不必如至聖之極と。又た白居易の詩に、笙歌與談笑、隨分自將行。

【分龍雨】 意義 雖に、俗五月雨日之分龍雨、又曰隔轍雨、言夏雨多至、龍各分域、雨暘

往往隔一轍而異也。

【惜分陰】（フン）（意義）僅か一分許りの時間を惜むをいふ。（出處）晉書陶侃傳に、嘗語人曰、大禹聖者、乃惜寸陰、至於衆人、當惜分陰、豈可逸遊荒醉、生無益於時、死無聞於後、是自棄也。

【窺窬分毫】（フン）（意義）一分一毫の些細の事を窺ひ盜むとて、商賈のことをいふ。書言故事に、作商而竊、謝人曰窺窬分毫耳とあり。（出處）晉成伯陽の市賦、談智於尺寸之間、窺窬於分毫之際。

六　刎

【刎頸之交】（フン）（意義）生死を齊しくせんと要し頸を刎ねらるも悔ゆることの無き親密なる交りなり。（出處）史記廉頗藺相如傳に、廉頗肉袒負荊、至門謝罪曰、鄙賤之人、不知將軍寬之至此、卒相與驩、爲刎頸之交とと。又た同書張耳陳餘傳に、兩人相與爲刎頸交。

七　紛

【紛戲子】（フン）（意義）俳優が種種の衣裳を着けて、各種の人物に擬するをいふ。（出處）傳習錄卷上に、若只是那些儀節求得是當、便謂至善、即如今紛戲子、紛得許多溫凊奉養的儀節是當、亦可謂之至善矣、愛於是日又有省と。（愛は徐愛なり、王陽明の門人、又た裏燭譚に、正字通を考ふれば、紛の字は本房吻切音粉、擬也とあり、紛戲の時は、道思切、班去聲、今俗以裝飾爲打扮、演劇者飾其面謂之紛戲と。又た品字箋には、紛の下に打扮粉扮とあり、又龍圖公案第一將、銀僱二道士、假紛轉夫と。此等にて紛戲のわけ著明なり。

ゝ題新拙惡小屏唯錄古篇章。

【粉牆】（フン）（意義）白く塗りたる土垣をいふ。（出處）白居易の詩に、照灼憑朱檻、玲瓏映粉牆と。又た方干の詩に、四面烟花出粉牆。

【粉米】（フンベイ）（意義）袞衣十二章の一。（出處）ヨの部袞（コン）冕を見よ。

【粉團】（フンダン）（意義）團子なり。（出處）開元天寶遺事に、宮中每歲到端午節、造粉團角黍。

【粉本】（フンポン）（意義）畫の草稿をいふ、古は胡粉を用ゐて其の大樣を畫き、然る後ち墨を施す、後世柳炭を用ふるが如し、故に粉本といふ。（出處）世說巧藝篇に、玄宗忽思嘉陵江山水、假吳生驛遞、令往寫貌、及回、帝問之、道玄云、臣無粉本、並記在心、遂於大同殿圖之、嘉陵江山水、一日而畢、時有李將軍、山水擅名、亦畫大同殿、數月方畢、上曰、李思訓數月之功、吳道玄一日之跡、各極其妙也と。又た圖繪寶鑑に、古人畫稿謂之粉本、南齊多寶蓋之、蓋其草草不經意處、有自然之妙、宣和紹興所藏粉本、多有神妙者と。又た圖畫見聞誌に、王殷工畫佛道士女、有職貢遊春士女等圖、并粉本佛像傳於世と。又た方臺山靜居畫論に、畫稿謂粉本者、古人於壁落上加粉筆、用時撲入紙素、依粉痕落墨、故名之也、今畫手多不知此義。

【粉骨】（フンコツ）（意義）骨を粉にするなり、轉じて盡力の義に用ゆ。（出處）南齊書王僧虔傳に、粉骨衛生。

【粉碎】（フンサイ）（意義）粉の如く碎くるをいふ。（出處）世說に、柏粉碎。

【粉飾】（フンシヨク）（意義）㊀女子の假粧をすること。㊁白粉を附けて飾る如く、人を褒め立てゝ善き者にするをいふ。（出處）㊀史記滑稽傳に、視人家女好者、云當爲河伯娶、共粉飾之。㊁韓詩外傳に、善辯治人者、故人安之、善粉飾人者、故人樂之。

【粉白黛黑】（フン）（意義）粉は、白粉なり、黛は眉墨なり、皆女子の裝飾なり。（出處）容齋四筆に、列子周穆王篇に、鄭衛之處子、蛾眉曼睩、粉白黛黑以臨之と。又た戰國策に、張儀謂楚王曰、鄭周之女、粉白黛黑、立於衢側、見者以爲神と。又た楚辭大招篇に、粉白黛黑、施芳澤只。

【粉白黛綠】（フン）（意義）前條の語に本づきて黑を綠に換へたるなり。（出處）韓愈の送李愿歸盤谷序に、粉白黛綠、列屋而閑居、鼓瑟而娛、爭妍而取憐。

【粉骨碎身】（フン）（意義）身を粉碎するなり、勞力の甚しきをいふ。（出處）百億。

【粉白不去手】（フン）（意義）白粉を常に用ゐて手を去らぬことと。（出處）三國魏志何晏傳の裴注に、魏略曰晏性自喜、動靜、粉白不去手、行步顧影。

【加粉則思其心之鮮】（フン）（意義）白粉を加ければ、鮮かに奇麗にするのみならず、心も清鮮ならしめんと思ふをいふ。（出處）蔡邕の女誡に、加粉則思其心之和と。

【紛紛】（フンフン）（意義）事多く煩はしくして亂るゝなり。（出處）孟子滕文公上篇に、何爲紛紛然與百工交易と。又た管子稱言に、紛紛乎若飛絲、遺遺乎若有從治と。又た漢書禮樂志に、羽旄紛紛。

【紛如】（フンジヨ）（意義）亂紛如、厥德暉如。（出處）太玄經に、鬱鳳紛如と。

【紛紜】（フンウン）（意義）㊀亂るゝ貌。㊁盛なる貌。（出處）㊀楚辭九歌傳怨思に、腸紛紜以轉兮。㊁史記司馬相如傳に、威武紛紜。

【紛縕】（フンウン）（意義）盛んに亂るゝ貌。（出處）楚辭九章に、紛緼宜修、憂而不醒兮。

【紛披】（フンヒ）（意義）㊀花の亂れ咲く貌。㊁物の亂れもつれゝ貌。（出處）㊀杜甫の詩に、此節東籬菊、紛披爲誰秀。㊁蘇軾の詩に、誰遣茅茨劣容膝、海天風雨響紛披。

【紛拏】（フンダ）（意義）亂れて相搏つなり。拏、又た如に从ふて拏に作る。（出處）漢書霍去病傳に、賞賜奴紛拏と。又た韓愈の李花の詩に、賞春天地爭奇華、洛陽園苑尤紛拏。

【紛更】（フンカウ）（意義）紛亂改更するをいふ。（出處）史記波豎傳に、何乃取高皇帝約束、紛更之論。

【解紛】（フン）（意義）紛の亂れたるを解くこと、轉じて人の爭を解くことにも

金

【金湧】（フンヨウ）（意義）金は聚るなり、物の盛に湧き出るにいふ。（出處）後漢書綱衡傳に、飛詞騁辯、溢氣金湧。

【粉鄉】（フンキヤウ）（意義）地名なり。（出處）蕭詵の詩に、策拙粉鄉塵、想望。

【粉邑】（フンイウ）（意義）地名にして、漢帝の陵墓のある所なり。（出處）江淹の詩に、宮廟禮哀敬、粉邑道歲元。

【粉榆】（フンユ）（意義）故鄉といふこと。（出處）漢書郊祀志に、高祖禱豐枌榆社と。顏注に、鄒氏曰、枌榆、鄉名也、師古曰、以此樹爲社神、因立名焉、又た張衡の西京賦樹榆、豈伊不懷、陽、于枌榆。

忿

【忿忿】（フンフン）（意義）怒る形容。（出處）阮瑀の爲曹公與孫權書に、以爲老夫包藏禍心、使仁君翻然自絕、以是忿忿。

【忿懥】（フンチ）（意義）怒りて癇癪を起すなり。（出處）大學に、身有所忿懥、則不得其正。

【忿悁之節】（意義）忿りを止めるなり。（出處）史記魯仲連傳に、奮其忿悁之節。

芬

【芬芬】（フンフン）（意義）香ある貌。（出處）詩經大雅鳧鷖篇に、爞炙芬芬と。又た何晏の景福殿賦に、馥馥芬芬。

【芬然】（フンゼン）（意義）土の高くもちあがれる貌。（出處）管子地員篇に、芬然若灰と。注に、芬然堰起の貌。

【芬馥】（フンフク）（意義）花の匂のプン〳〵とすること。（出處）左思の吳都賦に、光色炫晃、芬馥盼蠁。

氛

【氛氳】（フンウン）（意義）氣の盛なる貌。（出處）謝惠連の雪詩に、散漫交錯、氛氳繁素。

【氛祥】（フンシヤウ）（意義）天の氣なり、凶氣を氛と爲し、吉氣を祥と爲す。（出處）國語に、臺不過望氣氛祥。

兎

【兎身】（フンシン）（意義）子を產むなり。兎は分に通ず、母と子と二つに身を分つなり。（出處）漢書外戚傳に、今皇后當兎身。

粉

【粉黛】（フンタイ）（意義）白粉と眉墨となり。因つて美人の養とす。（出處）杜甫の玉華宮の詩に、美人爲黃土、況乃粉黛假、當時侍金輿、故物獨石馬と。又た白居易の長恨歌に、六宮粉黛無顏色。

【粉綠】（フンリヨク）（意義）白粉と綠とにて粧をするを世粧、粉綠徒爭妍。（出處）元好問の詩に、乃知世粧、粉紅（フンコウ）（意義）白粉と紅とをいふ。（出處）吳融の詩に、粉紅輕淺凝殘雪、和露別、近籬。

【粉澤】（フンタク）（意義）白粉を用ゐて光澤をつけること。（出處）六韜に、禮樂治之、粉澤之、又た潛虛に、偶人粉澤徒飾外也。

【粉藥】（フンヤク）（意義）粉にしたる藥物をいふ。（出處）宋史太祖紀に、乾德五年、禁新小鐵鑄等錢、疏惡布泉入粉藥者。

【粉堞】（フンテフ）（意義）白く塗りたる城のヒメガキ。（出處）梁簡文帝の樂府に、岸陰垂柳素、平江含粉堞と。又た駱賓王の詩に、夜烏喧粉堞、宿鴈下蘆洲。

【粉壁】（フンベキ）（意義）胡粉にて塗りたる壁をいふ。（出處）漢官儀に、省中皆胡粉塗壁、故曰粉壁と。又た韓愈の詩に、粉壁不

蚊

いふ。〔出典〕老子第四章に、挫其鋭、解其紛、和其光、同其塵と。又た戰國趙策に、魯連曰、所貴於天下之士者、爲人排患釋難解紛亂而無所取也。

【紛紅駭綠】（フン）〔字義〕紅は花の色をいひ、綠は草木の葉をいふ。風が吹き起りて、草木の飄ることをいふ。〔出典〕柳宗元の袁家渇記に、每風自四山而下、振動大木、掩苒衆草、紛紅駭綠、蓊葧香氣と。又た陸游の詩に、人在紛紅駭綠中。

【解紛糾者不控拳】（フン）〔字義〕絲の亂れたるを解かんには、徐徐とその頭緒を求めて之を解くべきをいふ、事を處理するには、各その條理に從ふべきに喩ふ。〔出典〕史記孫子傳に、孫子曰、夫解雜亂紛糾者不控捲、救鬬者不搏戟。

【蚊雷】（ブンライ）〔字義〕蚊の聚り鳴く聲の雷に似たるをいふ。〔出典〕漢書中山靖王傳に、衆喣漂山、聚蚊成雷と。又た劉禹錫の詩に、沈沈夏夜蘭堂開、飛蚊伺闇聲如雷と。又た陸游の詩に、暑近蚊雷先隱隱、雨前蟻垤正崔嵬。

【蚊廚】（ブンチウ）〔字義〕蚊帳なり。〔出典〕薛能の詩に、退紅香汗濕輕紗、高捲蚊廚獨臥斜と。又た陸游の詩に、黃葛蚊廚睡欲成。

【蚊幌】（ブンクワウ）〔字義〕蚊幬の小さきもの。〔出典〕元稹の詩に、蚊幌雨來捲、燭蛾燈上稀。

【蚊翼】（ブンヨク）〔字義〕蚊の羽根。〔出典〕神異經に、蚊翼下、有小飛蟲焉、生九卵、復成九子、飛而俱去、蚊遂不知と。又た宋玉の小言賦に、纖軀蚊翼形微蚤鱗。

【蚊脚】（ブンキヤク）〔字義〕蚊の足。〔出典〕庾肩吾の文に、蚊脚傍低、鵠頭仰立、埃濺板上、謬起印中。

【蚊聲】（ブンセイ）〔字義〕蚊の鳴く聲。〔出典〕梁簡文帝の納涼の詩に、草化飛爲火、蚊聲合似雷と。又た元稹の詩に、蚊蟁鬧窓戶、螢火繞屋梁。

【蚊睫之蟲】（ブン）〔字義〕睫はマツゲなり、蚊の睫に栖めるとて、極めて微細なるに喩ふ。〔出典〕列子湯問篇に、江浦之間生麼蟲、其名曰焦螟、群飛而集於蚊睫、弗相觸也、栖宿去來、蚊弗覺也と。睫は纖細なり。

【蚊虻之勞】（ブン）〔字義〕虻はカアブなり、細小なる蟲なり、因て些細なる技能をいふ。〔出典〕莊子天下篇に、由天地之道、觀惠施之能、其猶一蚊一虻之勞。

【蚊虻宵見】（ブン）〔字義〕智の明なる明月の如くなれば、蚊虻の如き小人も悉く見ゆるをいふなり。〔出典〕漢書中山靖王傳に、明月夜曜、蚊虻宵見。

【蚊蚋負山】（ブン）〔字義〕蚋も亦蚊なり、說文に秦晉は之を蚋といひ、楚は之を蚊といふとあり。〔出典〕カの部使蚊負山を見よ。

【使蚊負山】（ブン）カの部使蚊（カ）負山を見よ。

【蚊虻走牛羊】（ブン）〔字義〕小弱なる者が能く強大なる者を動かすをいふ。〔出典〕說苑說叢篇に、蠹蝝剖梁柱、蚊虻走牛羊に作る。

聉　問　賁

【聉合】（フンガフ）〔字義〕脣の上下相合ふが如く、事の相叶ふをいふ。〔出典〕莊子齊物論篇に、爲其聉合、置其滑涽。

【問安】（ブンアン）〔字義〕人の安否如何を問ふなり。〔出典〕杜甫の集に、起居衞尙書大夫人と。注に、邵寶云、起居猶云動止、卽今之問安也。

【問對】（ブンタイ）〔字義〕文體の名。〔出典〕文體名辯に、按、問對者、文人假設之詞也、其名旣殊、其實復異、故名實皆問者、屈平天問、江淹遂古篇之類是也、名問而實對者、柳宗元晉問之類是也、其他曰難、曰諭、（宋劉敞有論客）曰答、曰應、（宋柳開有應責）又有不同、皆問對之類也、古者君臣朋友口相問對、其詞詳見於左傳史漢諸書、後人倣之、乃設詞以見志、於是有問對之文、而反覆縱橫、眞可以舒憤鬱而通意慮、蓋文之不可闕者也、若其詞雖有問對、而名入體者、則各從其類、不復列於此云。

【問罪之師】（ブン）〔字義〕賊、罪あり、その罪を問ひたゞねんとて差遣する軍兵をいふ。〔出典〕胡銓の上高宗封事に、羈留虜使、責以無禮、徐興問罪之師、則三軍之士、不戰而氣自倍。

【賁然】（フンゼン）〔字義〕文采ある貌。〔出典〕詩經小雅白駒篇に、皎皎白駒、賁然來思。

【賁鼓】（フンコ）〔字義〕大なる鼓なり。〔出典〕詩經大雅靈臺篇に、虡

雰　焚　聞

業維樅、賁鼓維鏞、於論鼓鐘、於樂辟廱。

【雰雰】（フンフン）〔字義〕㊀雪のふる貌。㊁雨のふる貌。〔出典〕㊀詩經小雅信南山篇に、上天同雲、雨雪雰雰。㊁楚辭九章に、淑凝霏之雰雰と。又た元稹の大雲寺の詩に、果枝低、翳翳花雨濕雰雰。

【焚室】（フンシツ）〔字義〕焚失家屋なり。〔出典〕左傳昭公十八年に、書焚室、而寬其征、與之材。

【焚黃】（フンクワウ）〔字義〕墓前に行ふ禮なり。〔出典〕水東日記に、焚黃之禮、行於墓次、蓋自宋世已然、朱子亦云、不知於禮何據、張魏公得贈諡其家、則惟告廟云、今則世皆然矣、意者流俗以加有官封、必爲明器人馬僕從類、非祠廟中所可容、亦以義起、然竊無他據也。

【焚書坑儒】（フン）〔字義〕秦の始皇帝が詩書六經を燒き滅し儒者を穴埋めにせしをいふ。〔出典〕孔安國の尙書序に、秦始皇滅先代典籍、焚書坑儒と。又た史記秦始皇紀に、三十四年、丞相李斯曰、臣請史官非秦記皆燒之、非博士官所職、天下敢有藏詩書百家語者、悉詣守尉雜燒之、所不去者、醫藥卜筮種樹之書、制曰、可、三十五年、侯生盧生相與謀、乃亡去、始皇聞亡、大怒、使御史悉案問諸生、諸生傳相告引、乃自除、犯禁者四百六十餘人、皆阬之咸陽。

【聞達】（ブンタツ）〔字義〕聞は名譽の世に聞へるなり、達は身の世に顯はれ高位に登るなり。〔出典〕論語顏淵篇に、在邦必聞、在家必聞、云云、在邦必達、在家必達と。

憤　噴

又た諸葛亮の前出師表に、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。

【聞人】（ブンジン）〔字義〕名聲の世間に聞へし人をいふ。〔出典〕孔子家語始誅篇に、少正卯、魯之聞人也。

【聞道】（ブンダウ）イの部聞道（イフ）を見よ。

【憤憤】（フンフン）〔字義〕㊀心の結ぼれて解けざる貌。㊁怒る貌。〔出典〕㊀禮記學記篇に、旣不告語學者、則心憤憤、口悱悱、然後啓之と。論語朱注に、憤者、心求通而未得之意、悱者、口欲言而未能之貌。㊁後漢書劉縯傳に、自王莽篡漢、常憤憤懷一復社稷之慮。

【憤悱】（フンピ）前條に同じ。

【憤懣】（フンマン）〔字義〕心中に怒を含み發せざるなり。〔出典〕司馬遷の文に、不得舒憤懣。

【憤發】（フンパツ）ケの部啓（ケイ）發を見よ。

【發憤忘食】（フン）〔字義〕理の解すべからざるときは、憤を發して食事を忘るゝ程に勉強するをいふ。〔出典〕論語述而篇に、子曰、其爲人也、發憤忘食、樂以忘憂、不知老之將至云爾。

【不憤不啓不悱不發】（フン）〔字義〕物理は先づ憤悱して、而る後に啓發する所あるをいふ。〔出典〕論語述而篇に、子曰、不憤不啓、不悱不發、擧一隅不以三隅反、則不復也。

【噴飯】（フンパン）〔字義〕口中に含める飯粒を吐き出だすことにて、大に笑ふ形容なり。〔出典〕東坡云、文與可見予詩云、料得淸貧饞太守、渭川千畝在胸中、失笑噴飯滿案。

墳　奮

【噴嚏】（フンテイ）〔字義〕古語ハナヒル、卽ちクサメなり。〔出典〕搜采異聞錄に、今人噴嚏不止者、必噀唾祝曰、有人說我、婦人尤甚。〔出典〕伊藤東涯云、詩寤言不寐、願言則嚏と。注に、女思我則嚏也と。今俗人嚏して、人、我を道ふと云ふは、此古の遺語なり。

【噴雪】（フンセツ）〔字義〕浪の碎けて雪を吐くが如くなるをいふ。〔出典〕李白の詩に、瀾似連山噴雪來。

【墳典】（フンテン）〔字義〕古書といふことなり、卽ち三墳五典なり。〔出典〕南史丘巨源傳に、少好學、居貧、屋漏、恐濕墳典、乃舒被覆書、書獲全、而被大濕と。又た唐の太宗の詩に、對此乃淹留、欹案觀墳典。

【墳墓】（フンボ）〔字義〕墓は葬る穴なり、墳は土を積みかさねて封ずるをいふ。〔出典〕管子に、大者親戚墳墓之所在也と。又た禮記檀弓上篇に、古者墓而不墳と。又た揚子方言に、凡葬無墳謂之墓、有墳謂之塋、故檀弓云、墓而不墳、又平曰墓、封曰冢、高曰墳。

【墳羊】（フンヤウ）〔字義〕怪物なり、墳又た羊に从ひ、羵に作る。〔出典〕國語魯語に、土之怪曰墳羊。

【奮迅】（フンジン）〔字義〕勢ひよく奮ひ起つ義。〔出典〕後漢書劉植傳に、奮迅拔起。

【奮飛】（フンピ）〔字義〕フルヒトブなり。〔出典〕詩經邶風柏舟篇に、靜言思之、不能奮飛

奮飛。

【奮躍】(フンヤク) 〔意義〕フルヒ、オドルなり。〔出處〕宋史李稠傳に、至是綱下令、能殺敵者、厚賞、衆無不奮躍。

【奮鬭】(フントウ) 〔意義〕フルヒ、タヽカフなり。〔出處〕宋史吳挺傳に、挺被檄與姚仲攻德順、金左都監空平涼之衆以援合喜駐軍六盤、挺獨趣瓦亭、身冒矢石、衆從之、金人操短兵、挺遣別將奪其馬、金衆遂潰。

糞

【糞土】(フンド) 糞土之牆不可杇を見よ。

【訾糞】(フン) 〔意義〕人に諂ふの甚しきをいふ。〔出處〕甘言故事に、言人諛諂無恥、曰訾糞之徒、唐郭弘霸爲侍御史、時大夫魏元忠病、僚屬省候、弘霸獨後請覽便液、卽染指嘗、以驗病輕重、賀曰、甘者、病不瘳、今味苦、當愈無患、元忠惡其媚、暴語于朝。

【糞土言】(フンドノゲン) 〔意義〕道理に協はずして賤むべき言なり。〔出處〕左傳襄公十四年に、臧紇留衞侯、與之言、虐、退而告其人曰、衞侯不得入矣、其言糞土也。

【糞土之牆不可杇】(フン) 〔意義〕糞土とて腐りたる土にて塗れる牆屏は、杇にて塗るべからず、人も志氣昏惰なるときは敎を施すべからざるをいふ。〔出處〕論語公冶長篇に、宰予晝寢、子曰、朽木不可雕也、糞土之牆、不可杇也、於予與何誅。

鼖

【鼖首】(フンシュ) 〔意義〕敝の首なり。微細のことをいふ。〔出處〕淮南子に、權輕重、不差鼖首。

殞 フルキ 故

【殞羊】(フンヤウ) 墳(フン)羊に同じ。

【溫故知新】(フルキ) 〔意義〕溫は燖溫の溫にて、アタヽムと讀む、故(モト)學びたることを、時に之を習はして、新しき道理を發明するなりと。朱子論語の注に於ては、溫、尋繹也と曰ひ、中庸の注に於ては、溫猶燖溫之溫と曰へり、鄭玄の中庸の注に、溫讀如燖溫之溫とこれ燖溫の義を長とすべし。〔出處〕論語爲政篇に、溫故而知新、可以爲師矣と。又た中庸第二十七章に、溫故而知新、敦厚以崇禮と。〔參考〕鶡冠子の欲知來者察往、欲知古者察今。管子の疑今者察之古、不知來者觀之往の如き、また溫古知新の意なり、竝せ見ば益あらん。

平(ヘイ)

へ

【平平】(ヘイヘイ) 〔意義〕㊀平にしてかたよらぬないふ。㊁少しも珍らしきことなきをいふ。〔出處〕㊀書經洪範篇に、無黨無偏、王道平平。㊁後漢書班超傳に、我以班君當有奇策、今所言平平耳。

【平地】(ヘイチ) 〔意義〕平坦の處なり。〔出處〕左傳隱公九年に、平地尺爲大雪。

【平民】(ヘイミン) 〔意義〕庶人なり、又た平は善なり、農民をいふ、先王は農を以て本と爲すが故なり。〔出處〕書經呂刑篇に、蚩尤惟始作亂、延及于平民。

【平人】(ヘイジン) 〔意義〕前條に同じ。〔出處〕後漢書皇甫規傳に、出於平人、回入姦吏。

【平昔】(ヘイセキ) 〔意義〕つねぐといふこと。〔出處〕杜甫の柴門詩に、書此豁平昔、回首猶暮靄。

【平意】(ベイイ) キの部虛(キヨ)心平意を見よ。

【平心】(ヘイシン) キの部虛(キヨ)心平意の類語を見よ。

【平氣】(ヘイキ) 平(ヘイ)氣虛心を見よ。

【平明】(ヘイメイ) 〔意義〕夜のひき明けをいふ。〔出處〕史記留侯世家に、後五日平明と。又た同書叔孫通傳に、先平明。

【平日】(ヘイジツ) 〔意義〕平常に同じ。ツネなり。〔出處〕漢書汲黯傳に、加于平日。

【平生】(ヘイゼイ) 〔意義〕前條に同じ。〔出處〕論語憲問篇に、不忘平生之言。

【平輦】(ヘイレン) 〔意義〕一に平頭輦ともいふ、蓋(カサ)なき車にして、郊野の逍遙に用ふるものなり。〔出處〕文獻通考王禮考に、平頭輦、制如逍遙輦、而無屋、是也、仁宗御逍遙輦、御無屋之平輦、而又撤蓋者、喜雨之甚、欲濕其衣也。

【平衡】(ヘイカウ) 〔意義〕人を拜する法式なり、磬折して頭と腰と衡の平かなるが如きをいふ。〔出處〕荀子大略篇に、平衡曰拜、下衡曰稽首、至地曰稽顙。

【平準】(ヘイジュン) 〔意義〕物價を平均にする義。〔出處〕史記平準書に、抑天下物名曰平準と。注に、索隱曰、大司農屬官有平準令丞者、以鈞天下郡國輸斂、貴則糶之、賤則買之、平賦以相準、輸賦於京都、故命曰平準。

【平均】(ヘイキン) 〔意義〕公平均一なり。〔出處〕國語に、平均其政事。

【平城】(ヘイジヤウ) 〔意義〕洛陽城の門の名。〔出處〕後漢書百官志に、雒陽城十二門、其正南一門曰平城門。

【平安】(ヘイアン) 〔意義〕無事にて平かなること。〔出處〕酉陽雜俎に、李衞公言、北都惟童子寺有竹一窠、纔長數尺、相傳、其寺綱維每日報竹平安と。又た岑參の逢入京使詩に、馬上相逢無紙筆、憑君傳語報平安。

【平治】(ヘイヂ) 〔意義〕天下を太平に治むるをいふ。〔出處〕孟子公孫丑下篇に、如欲平治天下、當今之世、舍我其誰也。

【平和】(ヘイワ) 〔意義〕平かに和かなること。〔出處〕春秋繁露に、仁人之所以多壽者、外無貪而內清淨、心平和而不失中正。

【平頭】(ヘイトウ) 〔意義〕俗にいふ丁度(チヤウド)の義なり。〔出處〕白居易の詩に、青山纂取三千里、白髮平頭五十人と。又た同人の除夜の詩に、火銷燈盡天明後、便是平頭六十人。

【平闕】(ヘイケツ) 〔意義〕白書等の書き樣に、竝べ書くと、闕字とあるをいふ。〔出處〕唐六典に、凡上表疏箋啓及判策文章如平闕之式と。又た伊藤東涯の名物六帖に、按注云、昊天・后土等類皆平出、社稷・太社・朝廷之類皆闕字、平出卽後世所云擡頭也、闕字、卽空字也。

【平愈】(ヘイユ) 〔意義〕病氣の治るをいふ。〔出處〕通鑑宋孝武紀に、魏主嗣疾、崔浩曰、陛下春秋富盛、行就平愈。

【平定】(ヘイテイ) 〔意義〕亂を治むるなり。〔出處〕漢書高帝紀に、平定海內、功臣皆受地食邑。

【平文】(ヘイブン) 〔意義〕散文なり。〔出處〕墨客揮犀に、張景羣始爲平文、當時謂之古文。

【平凡】(ヘイボン) 〔意義〕尋常にして優れたる處なきをいふ。〔出處〕朱子齋居感興詩序に、顧以思致平凡、筆力萎弱、竟不能就。

【平反】(ヘイハン) 〔意義〕反は飜なり、獄を斷じ、罪人の辭を飜して輕きに從はしむるをいふ。〔出處〕漢書雋元王傳に、劉德寬厚好施生、每行京兆尹事、多所平反罪人。

【平復】(ヘイフク) 〔意義〕病氣全快するなり。〔出處〕韓詩外傳に、上古醫曰弟父、弟父之爲醫也、以莞爲席、以芻爲狗、北向而祝、發十言耳、諸扶輿而來者、皆平復如故。

【平章】(ヘイシヤウ) 〔意義〕㊀平は均、章は明なり、善く庶民を治むるをいふ。㊁物を品評するなり。㊂夫婦を媒合するなり。〔出處〕㊀書經堯典篇に、平章百姓、百姓昭明。㊂太平廣記に、天寶中范陽盧子臨其從姑、姑謂盧未婚、曰、吾外甥女有姓鄭者、甚有容質、當爲兒平章。㊁陸游の詩に、平章秋菘味。又た朱熹の梅の詩に、暖熱惟須酒、平章卻要詩。

【平勃】(ヘイボツ) 〔意義〕漢の高祖の臣陳平と周勃となり。〔出處〕漢書刑法志に、夫以孝文之仁、平勃之知、猶有過刑謬論如此甚也、而況庸材溺于末流者乎。

【輸平】(ヘイ) 〔意義〕平和をやぶるをいふ。〔出處〕左傳隱公六年に、鄭人來渝平と。公羊傳に、輸平、猶墮成也。

【平章雨】(ヘイ) 〔意義〕平章事王伯勝の祈禱の德によりて降る雨の義、平章は官名、平は均、章は明、善く庶民を治むるの義なり。〔出處〕元史王伯勝傳に、拜遼陽等處行中書省平章事、歲大旱、伯勝齋戒以禱、禱畢卽雨、人謂之平章雨。

【平泉莊】(ヘイ) 〔意義〕唐の李德裕の別莊の名なり。〔出處〕康駢劇談錄に、李德裕東都平泉莊、去洛城三十里、卉木臺榭、若造仙府、賈氏談錄、平泉莊周圍十里、天下奇花異草、珍松怪

石、雖不事故、其間、自製平泉草木記。

【平生歡】（ヘイセイクワン） 出典 史記張耳傳に、貴高の獄中にあることを述べて、彼與前、仰視漢公、勞苦如平生歡。

【平旦之氣】（ヘイタン） 出典 平旦は天將に曉けんとして未だ物と接せざる時を謂ふ、清明の氣なり。出典 孟子告子上篇に、平旦之氣、其好惡與人相近也者幾希。

【平允之士】（ヘイイン） 出典 公平誠實にして巧文雕刻をなさざる者をいふ。出典 宋史仁宗紀の賛に、刑法似縱寬而決獄多平允之士。

【平氣虛心】（ヘイキ） 出典 氣を平にし心を虛にして、落ち附きて躁がざるをいふ。出典 莊子に、欲靜則平氣、欲神則順心と。又た同書に、得聞至教、敢不虛心。

【平原督郵】（ヘイ） 出典 惡き酒をいふ。出典 七の部青（セイ）州從事を見よ。

【平易正直】（ヘイ） 出典 性質の平坦・簡易・中正・眞直なるをいふ。出典 後漢書班彪傳に、傳曰、殺史見極、平易正直、春秋之義也。出典 蘇軾の荀卿論に、是故其言平易正直而不敢爲非常可喜之論。

【平易近人】（ヘイ） 出典 政事を簡單にして、人民を上に親ましむ。出典 史記書世家に、平易近人、人民必歸之。

【平臺紀略】 出典 書名。清朝一卷あり、康熙六十年四月より雍正元年四月に至る間、臺灣の賊朱一貫を討平せし始末を記せり。

【平津館叢書】（ヘイシン） 出典 書名。出典 清の孫星衍の輯むる所にして、主として自ら校勘せしものを收めたり、甲より癸に至る十集とす、甲集には吳子、尸子、司馬法、魏の武帝注の孫子等二十四部を收め、乙集には穆天子傳、竹書紀年等の九部を收め、以下十一部を集めたり、其中には自著書及び近人の著を收む。

【平地起波瀾】（ヘイ） 出典 故へなくして事を生ずるをいふ。出典 劉禹錫の竹枝詞に、瞿塘嘈嘈十二灘、此中道路古來難、長恨人心不如水、等閒平地起波瀾。

【平野入青徐】（ヘイ） 出典 杜甫の登兗州城樓詩に、東郡趨庭日、南樓縱目初、浮雲連海岱、平野入青徐、孤嶂秦碑在、荒城魯殿餘、從來多古意、臨眺獨躊躇。

【平山堂下五清明】（ヘイ） 出典 清人の詩の句。出典 王士正の冶春絶句に、東風花事到江城、早有人家喚賣餳、他日相思忘不得、平山堂下五清明。

【平生所爲未嘗有不可對人言者】 出典 宋の司馬溫公の言なり、言行一致せるをいふ。出典 宋史司馬光傳に、自少至老、語未嘗妄、自言吾無過人者、但平生所爲、未嘗有不可對人言者耳。

丙

【丙夜】（ヘイヤ） 出典 午後十二時なり。出典 子の部乙（オツ）夜之覽を見よ。

【丙殿】（ヘイデン） 出典 東宮の稱なり。出典 山堂肆考に、丙殿太子宮也、又曰青殿。

【付丙丁】（ヘイ） 出典 丙丁は五行の火なり、故に物を燒き棄てるをいふ。出典 王守仁の復宣克剛書に、會同志諸友、共付丙丁、爲克剛發此慶餘。

【丙午丁未】（ヘイ） 出典 丙午と丁未の歲なり、丙午の兩年には禍多しといふ。出典 容齋五筆に、丙午丁未之歲、中國遇此輒有變故、非禍生於內、則寇狄外侮、（此下に漢以下丙午丁未の歲に係る禍患を列擧せり）總而言之、大抵丁未之災、又發於丙午、昭昭天象、見於運行、非人力之所能爲也、又た宋の俞文豹の吹劍錄に見ゆ。出典 丙丁龜鑑といふ書あり、亦多くその證を擧げ、この年の忌むべきをいへり。又た鹿谷宿陰翁の著に丙丁桐戒錄といふあり、命名の義此に本づけるなり。

【丙吉問牛喘】（ヘイ） 出典 丙吉は漢の賢相なり、牛の喘ぐを見て時氣の節を失ふを思ひしをいふ。出典 漢書に、丙吉字少卿、魯國人、宣帝時爲丞相、嘗出逢、清道驅逐者死傷橫道、吉過之不問、吉前行逢人逐牛、牛喘吐舌、吉止駐使騎吏問、逐牛行幾里矣、逐吏稱謂、丞相前後失問、或以譏吉、吉曰、民鬬相殺傷、長安令京兆尹職所當禁備逐捕、歲竟、丞相課其殿最、奏行賞罰而已、宰相不親小事、非所當於道路問也、方春少陽、用事未可太熱、恐牛近行用暑故喘、此時氣失

米

宜、恐有所傷害、三公典調和除陽、職當憂、是以問之、掾史乃服、以吉知大體。

【米穀】（ベイコク） 出典 白米雜穀をいふ。出典 列仙傳に、以米穀食之。

【米粟】（ベイゾク） 出典 米穀のこと、粒のまゝなるを粟といふ。出典 周禮に、掌米粟之出入、辨其物。

【米粒】（ベイリフ） 出典 米の粒をいふ。出典 易林に、堅冰黃鳥常哀、悲愁不見米粒、但觀蓬高。

【米糧】（ベイリヤウ） 出典 米穀をカテとするをいふ。出典 急就篇に、國粟果菜助米糧。

【米麥】（ベイバク） 出典 米と麥とをいふ。出典 書經費誓篇に、峙乃糗糧、と。疏に、說文云、糗熬米麥也、謂整米麥使熟又擣之以爲粉也。

【米船】（ベイセン） 出典 米を積みたる船。出典 庾信の哀江南賦に、陶侃空爭米船、と。又た陳造の詩に、已有米船衝尾來。

【米食】（ベイジキ） 出典 米飯を食ふをいふ。出典 書經益稷篇に、烝民乃粒、萬邦作乂、と。孔傳に、米食曰粒、言天下由此爲治本。

【米塩】（ベイエン） 出典 もと米と鹽といふことに子非命篇に、吾嘗米鹽數、天下害之、と。又た韓非子說難篇に、徑省其說、則以爲不智、而拙之、米鹽博辯、則以爲多而交之。

【米肉】（ベイニク） 出典 米と肉とをいふ。出典 後漢書に、魯自號飾君、其來學者、初名鬼、卒後號祭酒、諸祭酒、各起義舍於路、同名之亭傳縣、置米肉、以給行旅、食者是、廉取足、過多則鬼能病之。

【米價】（ベイカ） 出典 米の價のこと。出典 蘇軾の詩に、市頭米價新來減、一錢覓糴五六鬭。

【米泔】（ベイカン） 出典 米をカシたる水をいふ。出典 本草に、米泔氣味、甘涼無毒。

【米運】（ベイウン） 出典 米を運搬するをいふ。出典 元史世祖紀に、阿朮以宋人高郵水路不通、必由陸路、餽運千戶也、先忽都、以千騎、要之、獲米三千石。

【米庾】（ベイユ） 出典 米倉なり。出典 禮記明堂位、有虞氏之米庾、虞帝上孝、令藏粟庾之委焉。

【米年】（ベイネン） 出典 米の字を分析すれば、八十八歲のことなり、故に八十八歲を米年と稱す、吾邦ばにいふ、華年桑年の類なり。出典 葛原詩話後編卷一に、八十八を米年と稱す、吾邦ばかりにて云ふことなりや、未だ詳ならず、と。又た夜航詩話卷三に、邦俗稱八十八爲米年、亦未審不典也。

【米囊】（ベイナウ） 出典 楊花の異名。出典 康熙字典に、米囊、楊花別名、見容齋隨筆、

【米點】（ベイテン） 用ふるをいふ。出典 嚴石巖巒を畫くに細き點を用ふるをいふ。出典 徵古畫傳（本邦平安の人杜徵著）に、杜子曰、豆鞋綾芥子圓畫便不戰、畫式目今稱米點者、爲頭辨類、余持此問于木世肅、世肅云、頭豆同音、或鑄者即豆鞋也、前輩皆以米點者一爲豆鞋、又云、如刺梨綾、即小米之變、山石頭邊多爲扁點者、蓋巨及子久多用之、予謂

蓋巨先于米、非變自米法、米也、後世依據立名耳、と。又た云、豆鞋綾大小米專寫之、謂之米法、後高房山方萬壑皆畫之、と。又た芥子園畫傳に、二米石法此米點而微闊之、麻點也、元陳父子、于高山茂林中、時一筆之、層層點染、以桐調爲主、雖不露石法、殺角、然視其疎鄙下手處、定被麻也、又云、既爲米畫、尋得組織、故即次米於北苑之後、以見兩公首尾相連、雖分是一是二、然此法最要、淋漓有致、濃淡得宜、近程青溪先生、力爲米家洗冤、謂吳松雪惡一味模糊、如老年眼霧中花者、帶累南宮、誤過不小、故此法不惜層層烘染以度金針、所謂有點有筆是也、有筆無點則乾燥、有點無筆則滯俗、小米樹法、二米雲柳法、大米樹法、此關全法也、小米用於雲烟出沒之內、珠璣青出於藍、沈石田亦時爲之、

【米囊】（ベイナウ） 出典 楊花の異名。出典 康熙字典に、米囊、楊花別名、見容齋隨筆、

【米桶】（ベイトウ） 出典 米を納るゝオケなり。出典 毅齋錄に、忽米桶中有人、

【米囊花】（ベイナウクワ） への部馬（バ）頭初見米囊花を見よ。

【米家書畫船】（ベイ） 出典 宋の米芾の多くの古書畫を載せたる舟。出典 韻語陽秋卷十四に、米元章書畫奇絕、從人借得古本、臨寫併與臨本眞本、令自擇其一、不能辨也、以此得人古書畫甚多、山谷戲贈云、澄江靜夜虹貫月、定

七 兵

是米家書畫船。

【兵】（イ）【訓】㊀武器なり。㊁武器を執る人、即ち兵卒、又は軍隊をいふ。【出】㊀說文に、兵、械也と。又た左傳隱公三年に、公子州吁、嬖人之子也、有寵而好兵。㊁左傳襄公二十七年に、欲弭兵諸侯之兵以爲名。

【兵部】【訓】官職の名なり。【出】唐物紀原に、周禮夏官司馬之職也、魏有五兵尚書、宋官司馬之職周始曰兵部と。又た宋史職官志に、兵部掌兵衛、儀仗、鹵簿、武舉、民兵、廂軍、蕃軍、四夷官封承襲之事、與馬器械之政、天下地土之圖。

【兵曹】（イ）【訓】事物紀原に、漢公府掾史有兵曹主兵事、司隸屬官有兵曹從事史、郡國爲刺史、北齊同諸曹爲參軍、今又獨置於開封府也。

【兵革】（イカク）【訓】兵（ハモノ）と甲（ヨロヒ）となり、轉して軍の義とす。正字通に、軍旅曰兵革とあり。【出】詩經邶風出其東門篇の序に、兵革不息。

【兵法】（イフ）【訓】事物紀原に、沈起吳子序曰、兵法始於黃帝、其後得其傳者周太公、齊管仲、吳孫武、魏曹操、蜀諸葛孔明、其書皆行於世。

【兵籍】（イセキ）【訓】兵卒の數を記載したる帳簿なり。【出】列仙傳に、若人問兵籍と。又た續文獻通考に、嘉靖八年、桂萼上天下兵籍、僅九十七萬。

【兵主】（イシュ）【訓】兵主者、必先審知地圖。

【兵亂】（イラン）【訓】戰亂といふが如し。【出】國語楚語に、金足以禦兵亂。

【兵艦】（イカン）【訓】軍艦なり。【出】列仙傳に、大業兵艦、欲渡襄陽。

【兵燹】（イセン）【訓】宋史神宗紀に、詔峽州界、經鬼章兵燹者、釋其罪。

【勒兵】（イ）【訓】隊伍を整齊檢して、戒め飾ふなり。【出】史記孫子傳に、敵に悟られぬ樣に軍兵を隱し置くなり。【出】史記淮陰侯傳に、兵從夏陽以爲名。

【伏兵】（イ）【訓】隱し置くなり。【出】史記淮陰侯傳に、陳船欲渡臨晉、而伏兵從夏陽以爲名。

【按兵】（イ）【訓】樂毅傳に、江人黃人各守其境、按兵不動。

【弭兵】（イ）【訓】列國の平和を維持するために、戰爭を止めるをいふ、弭は止なり。【出】左傳襄公二十七年に、宋向戌請於趙文子、又善於令尹子木、欲弭兵諸侯之兵、以爲名。

【醵兵】（ケン）【訓】酒食を以て兵士を養ふなり。【出】史記淮陰侯傳に、魏都賦曰、脩醵士大夫、醵兵士。集解に、魏都賦曰、脩醵順時、劉逵曰、醵酒也。索隱に、劉氏依劉逵作醵酒、謂以酒食養兵士也。

【兵車行】（イシヤコウ）【訓】杜甫の詩題なり。是生女好を見よ。

【兵猶火】（イ）【訓】兵事は常に用心すべきに、桑仲曰、夫兵猶火也、弗戢將自焚也。

【兵者凶器】【訓】兵は人を害ふものなるを以て凶器といふ。【出】國語越語に、范蠡曰、勇者逆德也、兵者凶器也、爭者事之末也。【訓】史記主父偃傳に、怒者逆德也、兵者凶器也、爭者末節也、古之君一怒、亦伏尸流血、故聖王重行之。○賈誼、過秦論に、兵者凶器也、爭者逆德也、將者死官也、故不得已而用之。○韓非子存韓篇に、兵凶器也、不可不審用也。○漢書龔遂傳に、兵凶器、戰危事也、以大爲小、以强爲弱、君宜留意之耳。○淮南子に、怒逆德也、兵者凶事也、爭者人之所惡也。

【兵連禍結】（イ）【訓】漢書何武傳に、兵連禍結三十餘年。

【兵貴神速】（イ）【訓】兵を用ふるは神速を要するをいふ。【出】三國魏志郭嘉傳に、太祖將襲袁尙、嘉言兵貴神速、孫子作戰篇に、兵聞拙速、未覩巧之久也。○歐陽修の王彥章畫像記に、乃知古之名將必出於奇、然後能勝、然非等於爲計者、不能出奇、奇在速、速在果。

【兵聞拙速】【訓】兵を用ふるは拙劣なるも速かなるを貴ぶをいふ。【出】孫子作戰篇に、兵聞拙速、未覩巧之久也。【訓】李衛公問對に、兵聞拙速、不聞巧遲。○舊唐書韋挺傳に、兵尙拙速、不貴工遲。○唐書に、陸贄曰、兵貴拙速、不尙巧遲。

【兵無常勢】【訓】兵を用ふるには常に一定の勢形なく、變化

するものなるをいふ。【出】孫子虛實篇に、水因地而制流、兵因敵而制勝、故兵無常勢、水無常形、能因敵變化而取勝者、謂之神。

【兵不厭詐】【訓】むくことを咎めざるなり。【出】韓非子難篇に、舅犯對晉文公曰、繁禮君子不厭忠信、兵陣之間不厭詐僞。

【用兵之道】【訓】戰を行ふの道なり。【出】三國蜀志馬謖傳に、用兵之道、攻心爲上、攻城爲下と。又た十六國春秋前燕錄に、用兵之道敵强則用智、敵弱則用勢、是故以大事小、獨食豚也、以治易亂、獨日之消雪也と。食は養なり。

【兵者詭道也】【訓】兵を行るには、正道のみを履まず、種種の奇計を用ふ、故にいふ、詭は正しからざるなり。【出】孫子始計篇に、兵者詭道也、故能而示之不能、用而示之不用。

【兵者不祥之器】【訓】兵は人を害ふものなり、故にいふ。不祥とは、不吉なり。【出】老子第三十一章に、兵者不祥之器、非君子之器と。又た三畧下畧に、夫兵者不祥之器、天道惡之、不得已而用之、是天道也。

【兵貴先聲後實】【訓】軍事は先づ恐嚇を加へて、服從せざれば後に兵を以て攻むるを上策とするをいふ。【出】この部先聲(コエ)後實を見よ。

【養兵千日用在一朝】【訓】平生兵士を養ひ、一朝事あるときの用意なるをいふ。【出】本諺曾第六十回に、李固便道、小人近日有些脚氣的症候、十分走不得多路、盧俊義聽了大怒道、養兵千日、用在一朝。

【用兵之害猶豫最大】【訓】兵を用ふるは迅速をいふ。【出】六韜軍勢篇に、用兵之害、猶豫最大、三軍之災、莫過狐疑。

【兵者百歲不一用】【訓】軍兵は忌まはしきものなれば、百年の間に、唯一度も之れを用ひざるも可なるをいふ。【出】鶡冠子に、兵者百歲不一用、然不可一日忘也。

【兵車】（イ）【訓】下部の人なり。【出】玉堂雜字に、伴當、奴僕之人。

【兵者詭道也】【訓】人の土地を并せて我が有となす義。【出】漢書武帝紀に、兵者詭道也、故能而示之不能、用而示之不用。

八 并 伻 乘

【用兵之害猶豫最大】【訓】兵を用ひるは迅速を貴びて、猶豫を禁ずるをいふ。【出】六韜軍勢篇に、用兵之害、猶豫最大、三軍之災、莫過狐疑。

【兵者百歲不一用】【訓】百年の間に、唯一度も之れを用ひざるも可なるをいふ。【出】鶡冠子に、兵者百歲不一用、然不可一日忘也。

【伻當】（イタウ）【訓】下部の人なり。【出】玉堂雜字に、伻當、奴僕之人。

【并吞】（イドン）【訓】人の土地を并せて我が有となす義。【出】漢書武帝紀に、并吞海內。

【并州之情】【訓】賈島が并州の地に久しく滯在せしが、去るに臨みて、其の地を惜しび故郷にて、第二の故郷といふ義なり。【出】賈島の渡桑乾の詩に、客舍并州已十霜、歸心日夜憶咸陽、無奧記に、桑乾河、直隸保安州城西南、一名盧溝水、自渾源州流至、此、與溫河洋河合流、入宛平縣界、爲盧溝河。

【乘輦】（イ）【訓】その部輦、乘(イ)を見よ。

九 炳 坪 邴 柄

【邴邴】（イイ）【訓】憂ひの多きをいふ。【出】詩傳に、邴邴憂盛滿也。毛傳に、邴邴憂盛滿也。

【邴邴】（イイ）【訓】明白なる貌。【出】莊子大宗師篇に、邴邴乎其似喜乎と。注に簡文云、邴邴、明貌。

【坪】（イ）【訓】同文通考に、坪音平、地平處といへり。此字我俗「ツボ」と訓じ、方一歩の稱とすれど、此の字もと其義あるに非ず。

【炳炳】（イイ）【訓】明かなる貌。【出】唐書陸贄傳に、炳炳如丹と。又た柳宗元の答韋中立書に、不苟爲炳炳煌煌。

【炳然】（イゼン）【訓】前條に同じ。【出】漢書劉向傳に、是非炳然可知。

【炳煥】（イクワン）【訓】明かにかゝやくこと。【出】張衡の東京賦に、瑰異譎詭、煥爛炳煥。

【炳靈公】（イレイコウ）【訓】泰山の神をいふ。【出】文獻通攷に、從唐長興三年、詔以泰山三郎爲威雄將軍、宋大中祥符元年加封炳靈公。

【柄用】（イヨウ）【訓】朝廷に於て重く用ゐられて、政の權を握れるなり。【出】漢書谷永傳に、永知鳳(王鳳)方見柄用、陰欲自托。

【柄臣】（イシン）【訓】朝廷中第一權柄を握る臣をいふ。【出】漢書朱雲傳に、賤人間柄臣。

【陛下】（イカ）【訓】㊀戰國の世に、秦國にて臣が其君に對して稱する詞なり。㊁秦の始皇帝の時より、人民が天子に對

十 陛

して稱する詞となれり。出處㊀戰國秦策に、陛下嘗聚〻事於趙一矣と。陛下とは秦王を指せり。㊁史記秦始皇紀に、淳于越進曰、今陛下有〻海内一而子弟爲〻匹夫一と。又た蔡邕獨斷に、陛下者、陛階也、所〻由升〻堂也、天子必有〻近臣、執〻兵陳〻于陛側一、以戒〻不虞一、謂〻之陛下一者、羣臣與〻天子一言、不〻敢指〻斥天子一、故呼〻在〻陛下一者〻而告〻之、因卑達〻尊之意也、上書亦如〻之、及羣臣士庶相與言、曰〻殿下閣下執事一之屬、皆此類也。又た事物紀原に、周以前天子無〻陛下之呼一、史記李斯議〻事、始呼〻之耳、則此號秦禮也、漢書霍光傳、太后亦曰〻陛下一也。又た日知錄に、賈誼新序、天子卑號稱〻陛下一、蔡邕獨斷云云、據此則陛下猶〻言〻執事一、後人相沿、遂以爲〻至尊之稱一。注に、許善心以〻陳臣一入〻隋、宇文述言其祭〻陳叔寶一文稱〻陛下一、召問、善心言、陛下者、本是呼〻執事之人一、與〻尊號一不同、事乃得〻釋、然後世非〻天子一亦不敢用。出處陛下の意義、日知錄の說を見て明かなり、安井息軒の睡餘漫筆にも、陛下は天子に對して稱し奉る詞なり、貴人を關下と稱し、同輩相互に足下と稱するが如し、達用すべき詞にあらずといへり。

【陛坐】（イザ）出處宋史孫傅何傅に、銘〻陛坐之側一、因斯以戒〻所以保〻身全穩、其莫〻尙於慎一乎。

【陛列】（イレツ）出處陛下に位列するをいふ。出處宋書禮志に、虎賁中郎將、羽林監、銅印墨綬、給〻四時朝服武冠一、其在〻陛列一及備〻鹵簿一。

【陛衛】（イエイ）出處陛下の警衛の兵をいふ。出處唐書に、百姓託〻義、以清〻君側一、逐〻鹿之人、即〻關而至、陛衛左右從中以應、爭〻鋒朱雀之門一。

【陛戟】（イゲキ）出處陛下に警衛の爲に戟を持てるものを置くこと。出處漢書霍光傳に、期門武士、陳戟陳〻列殿下一と。又た後漢書馬援傳に、臣與〻公孫述一同〻里閈一、少相善、臣前至〻蜀、述陛戟而進一臣。

【陛覲】（ヘイキン）出處陛下にて天子に拜謁すること。出處後漢書禮儀志に、百官夸陪朝賀、覆詔、胡羌、朝貢畢、見〻屬郡計吏一、皆陛覲、庭燎。

【陛見】（ヘイケン）出處陛下にて天子を拜するをいふ。出處北史張普惠傳に、表乞朝直之日、時聽〻奉見一、自〻此之後、月一陛見。

【陛楯郎】（ヘイジユンラウ）出處楯を捧して陛下に守衛する者をいふ。出處史記馮唐傳に、馮唐傳、傳言、漢文帝、上輦、而問〻唐曰、父老何自爲〻郎、以〻何爲〻官、唐具以〻李廣事一對、上大悅、拜〻唐爲一車騎都尉一、盡以〻內官之錢一、令〻唐以〻節赦一、魏尚之罪、復〻尚雲中守一、故獄謂〻之狂一也。又た揚子法言子篇に、鉅客論曰、鉅可以愛〻身、曰、狂狂使〻人多證一乎。宋咸注に、狂狂、牢獄也、鉅可以愛〻身、則囹圄之中、囚者多悉、豈使〻人多證一乎。

【狴牢】（ヘイロウ）出處牢獄をいふ。出處荀子宥坐篇に、獄牢不〻治、不〻可〻刑也と。楊倞注に、狂、亦獄也、詩曰、宜〻狂宜〻獄、獄字從〻二犬一、象〻所以守一者〻狂、胡地野犬、亦善守、故獄謂〻之狂一也。又た揚子法言子篇に、鉅客論曰、鉅可以愛〻身、曰、狂狂使〻人多證一乎。宋咸注に、狂狂、牢獄也、鉅可以愛〻身、則囹圄之中、囚者多悉、豈使〻人多證一乎。

二 屏

【屏居】（ヘイキヨ）出處世間を退き居ること。出處漢書嬰傳に、嬰謝〻病屏居一。

【屏氣】（ヘイキ）出處屏は藏なり、氣を藏めて鼻息を顯はに出入せざるなり。恐懼謹慎の態度にいふ。出處論語鄉黨篇に、屏氣似〻不〻息者一。

【屏樹】（ヘイジユ）出處玄關の前の小屏或は植うるに樹木を以てす。出處爾雅釋宮に、屏謂〻之樹一。郭璞注に、小路當〻門中一。

【屏膈】（ヘイユウ）出處屏風及窓をいふ。出處風俗通に、政和四年、汝察有司上言、連山多〻瑪瑙一、下〻詔封禁、以供〻御用時、遣〻中使一出採、粗者以供〻屏膈欲一、而晶瑩成〻形、巧絕〻天工一者、蓋者〻藏內府一也。

【屏後】（ヘイゴ）出處屏風の（ウシロ）をいふ。出處宋史に、中書舍人、陳傅良引〻帝襟使一、毋入、因至〻屏後一、后叱曰、此何地、留秀才欲〻研一頭邪。

【屏障】（ヘイシヤウ）出處屏風や障子の目かくしになるものをいふ。出處晉書に、阮籍嘗從容言〻於帝一曰、蕃平生曾游〻東平一、樂〻其風土一、帝大悅、即拜〻東平相一、蕃乘〻驛到〻郡、壞〻府舍屏障一、使〻內外相望、法令清簡と。又た元稹の詩に、四面常時對〻屏障一、家終日在〻樓臺一。

三 俾 鵝

【俾倪】（ヘイゲイ）出處睥睨を見よ。

【鵝鶩】（ヘイボク）出處美くしき鵝。出處杜甫の詩に、不〻線惜〻鵝鶩一と。又た陳無己の詩に、當年不〻線惜〻鵝鶩一、傳〻粉施〻朱爭〻後生一、不〻惜養〻鵝適一〻與一、怕君著〻眼求〻分明一。

【屏當】（ヘイタウ）出處品物を收むるなり。出處晉書阮孚傳に、祖約性好〻財、正料〻財物一、客至、屏當不〻盡一。

【屏營】（ヘイエイ）出處廣雅に、屏營、怔忪也とあり、旁皇（ウロ〳〵）として安んぜざる形容なり。出處國語吳語に、屏營、彷徨山林之中一と。又た後漢書清河王慶傳に、夙夜屏營一。

【屏語】（ヘイゴ）出處人を避けて語るをいふ。屏はシリゾクルなり。出處漢書傳介子傳に、入〻帷中一、屏語と。注に、屏、人而獨共語也。

【屏風】（ヘイフウ）出處ビヤウブなり。出處唐書房玄齡傳に、治〻家有〻法度一、嘗恐諸子驕侈席〻勢凌一〻人、乃集〻古今家誡一書爲〻屏風一、令〻各取〻一具一、曰留〻意於此一、足〻保〻躬矣。

【屏面】（ヘイメン）出處便面ともいふ、團扇の類なり。出處漢書王莽傳に、後常翳〻雲母屏面一、非〻親近一莫〻得一見也。顏注に、屏面便面、蓋扇之類。

【屏翳】（ヘイエイ）出處風の神の名。出處司馬相如の大人賦に、時苦〻夔〻將一、混〻凌一、召〻屏翳一、誅〻風伯一、而刑〻雨師一と。又た曹植の洛神賦に、屏翳收〻風、川后靜波、馮夷擊鼓、女媧清歌と。注に、屏翳、風神也。

【屏棄】（ヘイキ）退け棄つるをいふ。出處書經泰誓下篇に、屏〻棄典刑一。

【瓶花】（ヘイクワ）出處イケ花をいふ。出處渭南嘉錄に、畦菊乍放、虎皐花濃、已千盆百盂、擅入〻城市一、居人買爲〻瓶洗一、供〻賞者一、或五器七器爲一一盞一、梗中置〻熟鐵線一、偃仰如〻人意一、或於〻廣庭大廈一、堆疊千百盆一、爲〻玩者一、綴紙爲〻山、號爲〻菊花山一。

【瓶盆】（ヘイボン）出處瓶と盆とをいふ。出處劉峻の文に、瓶盆衾裯、雜椅麗之樹、柏桂樟之木、分〻形異一色一、千族萬種一。

【瓶槌】（ヘイカフ）出處酒を入るゝカメ。出處傳信記に、麴生復至、掘〻腕抵一、拳、論蘇鋒起、勢不〻可一、當、法善、密〻以小劍一擊一之、所〻乃盈缾釀醴也、成大笑、飲〻之、其味甚美。

【瓶子】（ヘイシ）出處前條に同じ。出處唐書李靖傳に、小瓶子と。又た宋史に、今之所謂罈者、皆琉璃瓶子一、行也打碎、坐也跌碎。

【見〻瓶水凍一知〻天下之寒】（ケンヘイスイトウイチチテンカノカン）出處微細なることを以て巨大なることを推知するをいふ。出處北史崔浩傳に、夫見〻瓶水凍一、知〻天下之寒一、嘗〻內一臠一、識〻鼎中之味一。出處漢書王莽傳に、閉門自守。

【閉口】（ヘイコウ）出處口を閉ぢて言はざる義なり。出處史記張儀傳に、願陳子閉口無復言。

【閉門】（ヘイモン）出處門をトヅルなり。

【閉藏】（ヘイザウ）出處トヂ、カクルなり。出處淮南子天文訓に、萬物閉藏。

【閉戶先生】（ヘイコセンセイ）出處戶を閉ぢて學問を勉むるをいふ。出處楚辭先賢傳に、孫敬、字文寶、常閉戶讀書、睡則以繩繫〻頭、懸〻之梁上一、警入〻市、市人見〻之皆曰、閉戶先生來也と。孫敬は、三國の時の人なり。

三 辟 萍

【萍水相逢】（ヘイスイ）出處偶然出逢ひたるをいふ、萍は浮草なり。出處王勃の滕王閣序に、萍水相逢、盡是鯔鄉之客。

【辟倪】（ヘイゲイ）出處睥睨に同じ。

【掉鬮】（ヘイカウ）出處掉は擢と通ず、開くなり、鬮は閉づるなり、戰國縱橫の術をいふ。出處鬼谷子捭闔篇に、捭闔者、天地之道、捭闔者、以變〻動陰陽一、四時開閉、以化〻萬物一、縱橫反出反復、反忤必由〻此矣と。尹知章注に、闔戶謂〻之坤一、闢戶謂〻之乾一、故謂〻天地之道一。

三 敝 埤

【埤倪】（ヘイゲイ）出處睥睨に同じ。

【敝帷】（ヘイヰ）出處破れたる戶張をいふ。出處禮記檀弓下篇に、敝帷不〻棄、爲〻埋〻馬也一。

【敝邑】（ヘイイウ）出處敝はヤブルゝなり、我邦といふことを謙遜していふ。出處左傳僖公四年に、衞告〻宋曰、君爲〻主、敝邑以賦從一。又た同五年に、鄭告〻鄭曰、請君釋〻憾于宋一、敝邑爲〻道一。

【敝膝】（ヘイシツ）出處漢書東方朔傳に、主自執〻宰敝膝一。

【敝屣】（ヘイシ）出處草木の茂りて日光を蔽ふ。

【敝屣】（ヘイシ）をいふ。出處司馬相如の上林賦に、岑崟參差、日月蔽虧と。又た蕭統の詩に、屣棄〻蔽虧一。

【若〻棄〻敝蹝】（ヘイヘイ）出處蹝は草履なり、之を棄つるも亳も惜む所なきなり。出處孟子盡心上篇に、舜視〻棄〻天下一、猶〻棄〻敝蹝一也。

睥

【睥睨】（イヘイ）〔字義〕㊀邪に視るなり。㊁城上の女牆（ヒメガキ）なり、牆に箭眼（ヤザマ）とて矢を射る爲めに設けたる穴あり、此處より敵を望み見るなり、故に睥睨といふ。㊂天子の馬車の上に立つる蓋（カサ）なり。〔出處〕㊀史記信陵君傳に、侯生下見其客朱亥、俾倪故久立。又た同書魏其武安侯傳に、魏其灌夫、睥睨兩宮間、幸天下有變而欲有大功。㊁水經注に、城上女牆名睥睨。又た韓愈の雪詩に、城寒堅睥睨、樹凍裂毬苞。㊂酒雅釋詁に、唐盧藻有傳倪、宋志載睥睨、漢柔與用之如菲蓋、而小、顏師古注、意就傳倪、謂持蓋之杠、在軾中央、環蔽之、所以止蓋弓之前卻也、今曰傳倪扇。〔補說〕一の本字は睥睨なり。二の本字は埤睨なり。三の本字は傳倪なり、而して此の三字及び辟倪睥睨の字往往にして通用せり。

聘

【聘問】（イブン）〔字義〕かとづれたづねるなり。〔出處〕禮記曲禮下篇に、諸侯使大夫問、他諸侯、曰聘、又た儀禮聘禮に、大問曰聘、小聘、曰問。

拼

【拼搔】（イタウ）（ヘイ）屏當に同じ。

餅

【餅之罄罍之恥】〔字義〕罄は大、みな酒を入るゝ器なり、缾は常に罍より酒を受くるなり、受くる所の盡るは、罄の供給足らざるに因る、故に恥とするなり。〔出處〕詩經小雅蓼莪篇に、缾之罄矣、維罍之恥と。又た左傳昭公二十四年に、詩曰、缾之罄矣、惟罍之恥、王室之不寧、晉之恥也と。これ缾を周

篦

【篦頭鋪】〔字義〕理髮店なり。〔出處〕水滸傳第二十回に、只見那漢去路邊、一個篦頭鋪裡、剛道大奇、前面那個押司、是繼篦頭待詔應道、這位是宋押司。

弊

【弊弊】（イイ）〔字義〕事を謀り爲す貌。〔出處〕莊子逍遙遊篇に、孰弊弊焉以天下爲事。

【弊帚】（イサウ）〔字義〕破弊ぜる箒を千金の重寶とすることなり、以て吾身の程を知らざる過失に喩ふ。〔出處〕典論に、里語曰、家有弊帚、享之千金、斯不自見之患也。〔補說〕奚れたるヨロヒとなり。〔出處〕通鑑晉紀に、以羸兵繁鎧給之。〔補說〕前條に同じ。〔出處〕通鑑、樂紀に、王思政每戰、常著破衣弊甲、敵不知其將帥。

【弊袴】〔字義〕明君は繫れたる袴の如き微物をも愛し惜みて、猥りに功なきものには與へざるをいふ。〔出處〕韓非子

内儲說上篇傳三に、韓昭侯使人藏弊袴、侍者曰、君亦不仁矣、藏弊袴不以賜左右、而藏之、昭侯曰、非子之所知也、吾聞、明主之愛一賜一笑、賜有爲賜、而笑有爲笑、今夫袴豈特賜笑哉、袴之與賜笑遠矣、吾必待有功者、故敢以藏之、未有予也。

蔽

【蔽芾】（イヒ）〔字義〕樹木の蔽び茂るをいふ。〔出處〕詩經召南甘棠篇に、蔽芾甘棠勿翦勿折、召伯之所息と。又た同書小雅我行其野篇に、我行其野、蔽芾其樗。

【蔽牛之木】（イウ）〔字義〕牛を蔽ひかくす程の大木なり。〔出處〕莊子人間世篇に、匠石之齊、見櫟社樹、其大蔽牛、絜之百圍。

嬖

【嬖人】（イヘイジン）〔字義〕ものをいふ。〔出處〕左傳隱公三年に、公子州吁、嬖人之子也。

【嬖臣】（イヘイシン）〔字義〕佞幸の臣なり。〔出處〕漢書項籍傳に、張平嬖臣也。

【嬖妾】（イヘイセウ）〔字義〕無に入りの妾をいふ。〔出處〕左傳襄公十四年に、又有嬖妾、使師曹誨之琴。

【嬖人】（イヘイジン）〔字義〕新菓子なり。〔出處〕北史に、智知ちざる家有嬖人、有待讀公孫尙識、山東儒士、府佐楊君英、蕭德言、並有文學、時延于堂、所設唯餅果、酒若三酌。

【餅餌】（ヘイジ）〔字義〕ウテなり。〔出處〕宋史吳元扆將壞、元扆躬涉、泥淖、奔注、溝澮、城壘木樹、以避水、元扆命濟、以舟楫、設餅餌以食。

【餅銀】（ヘイギン）〔字義〕餅の如く丸き塊銀なり。〔出處〕水經注に、林水源裏有室、室前盤石上、列置十盒、中悉是餅銀、采伐過之、不得取、取必迷悶。

【餅金】（ヘイキン）〔字義〕餅の如く丸き金塊なり。〔出處〕綏明遺錄に、張文定公、以藥獻公、公子府第小亭、躬取水銀、搗火、一粒落之、既來有聲、如彈沸、有紅光、自鼎中起、俄頃光罩一亭、而鼎中聲亦屢變、火滅、鼎中、爛然餅金矣。

薛

【薛荔】（ヘイレイ）〔字義〕和名カヂヲラといふ。〔出處〕離騷に、貫薜荔之落蕊と。注に、薜荔香草、緣木而生、蕊實と。又た、柳宗元の詩に、鸞鳳鵾鵡、棲水、密蔽薜侵薜荔墻。

【薛芷】（ヘイシ）〔字義〕クシ、皆香草なり。〔出處〕漢書揚雄傳に、卷薜芷與若蕙兮、臨湘流而投之、又た方騷の詩に、薜芷不妨甘自蝕、白圭有玷尚堪磨。

【薛屋】（ヘイヲク）〔字義〕カヂヲラの籬へる屋根。〔出處〕高啓の詩に、坐覺雲中金粟薛屋一間綿。

【薛衣】（ヘイイ）〔字義〕カヂヲラを編みて衣とするなり。〔出處〕王建の詩に、蘚衣帶胡鄉、三年限朝儀。

【薛帶】（ヘイタイ）〔字義〕カヂヲラを帶とするなり。〔出處〕李白の詩に、薜帶何時發桃源堪、泝秦。

【薛帷】（ヘイヰ）〔字義〕カヂヲラのトバリをいふ。〔出處〕錢起の詩に、皇鑾帶芳芝、雲霞生薜帷。

【薛蔓】（ヘイマン）〔字義〕カヂヲラのツルをいふ。〔出處〕水經注に、林水源裏有室、室前盤石上、列置十盒、中悉是餅銀、采伐過之、不得取、取必迷悶。

辟

【辟睨】（ヘイダイ）睥（ヘイ）睨を見よ。

蹩

【蹩鼓】（ヘイコ）〔字義〕敵の攻め來る太鼓の音なり。〔出處〕皮日休の詩に、蹩鼓迎王任、

〔字義〕說文に、擊は鬻鼓なり と。白居易の長恨歌に、漁陽蹩鼓動地來と。又た釋名に、蹩拌也、拌、助鼓節也。

表

【表】（ヘウ）〔字義〕文體の名。〔出處〕文體明辯に、按、宇書、表者、標也、明也、標著事績、使之明白、以告乎上也、古者獻言於君、皆稱上書、漢定禮儀、乃有四品、其三曰奏、然但用以陳情而已、後世因之、其用寖廣、於是有論諫、有謝恩、有勸進、（勸進有陳乞、（待罪同）有進（進書如唐薛頴士爲陳正卿、進魏尙書、宋寶儀進刑統之類是也）獻、（獻物有推薦、有慶賀、有慰安、有辭、（辭官附解官、如晉殷仲文解尙書表是也）有謝、（謝官謝上謝恩）有啟理、有彈劾、（漢蔡邕、馮亮有奏、李平、表之所施既殊、故兵祠亦異、至論其體、則漢晉多用散文、唐宋多用四六、而唐宋之體、又自不同、唐人聲律時有出入、而不失乎雄渾之風、宋人聲律極其精切、而有得乎明暢之旨、蓋各有所長也、然有唐宋人而爲古體者、有唐人而爲宋體者、此又不可不辯也

と。又た郡物紀原に、堯舜、舜命九官、始置祠官、假令、禹、則數奏以言、章表之義也、漢乃有章表奏駁四等、則表蓋漢制也、蘇氏演義曰、表者、白也、言以情旨、表白於外也、按衣外爲表、論語必表而出之、又以披露於意、雜事曰、說定、禮儀、則有四品、

【表情】（ヘウジヤウ）〔字義〕白虎通に、人之相拜者何、所以表情見意。

【表裡】（ヘウリ）〔字義〕禮書に、具見其表裡。

【表背匠】（ヘイハイシヤウ）〔字義〕表具師なり。表また襷に作る。〔出處〕唐書百官志に、校書郎有裝書手筆匠三人、熟紙裝潢匠八人、と。又た唐田餘に、裝潢匠悉是今之裝背匠。

【爲表裏】（ヘウ）〔字義〕内外に在りて互に相援くること。〔出處〕漢書蕭望之傳に、中書令弘恭、石顯久典樞機、明習文法、冰與、軍謀、將軍高、爲表裏、と。高は史高なりと。又た漢書盧植傳に、今毛詩左氏周禮、各有師記、其與春秋、共相表裏。

【表著之位】（ヘウ）〔字義〕公會に其位次を表し著はすこと。〔出處〕左傳昭公十一年に、朝有著定、會有表、會朝之言必聞、表著之位、所以昭事序也。

【表則之地】（ヘウ）〔字義〕宰相の位をいふ、宰相の位は人民の儀表として之れに則とる所なればなり。〔出處〕書經伸愈之誥篇に、表正萬邦、上者表也、下者影也、表正則影正矣、表則之地、指宰相之位、百僚之所具瞻而則效也。

【表裏精粗】 表面も裏面も、精密なる處も粗疎なる處もといふことにて、隅から隅までといふ意なり。出典矢薨の大學の補傳に、至於用力之久而一旦豁然貫通焉、則衆物之表裏精粗無不到。

【抄抄】 涼の昭武王の述志賦に、抄抄余躬。

【眇眇】 ㊀少さき貌。㊁遠視の貌。㊂高遠の貌。出典㊀書經顧命篇に、眇眇予末小子。又た史記秦紀に、寡人以眇眇之身、興兵誅暴亂。㊁楚辭九歌に、目眇眇兮愁余。㊂陸機の文賦に、志眇眇而臨川。

【眇然】 遠き貌。出典王裁の聖主得賢臣頌に、何必低仰詘信若彫蹤。

【眇爾】 前條に同じ。出典晉書許邁傳に、永和二年移入臨安西山、登靈茹芝、眇爾自得、有絕塵之志。

【眇忽】 眇は少なり、忽は蜘蛛の網の細かなるもの、因て極めて小き數をいふ。出典司馬相如の子虛賦に、眇忽微、若神仙之雰氣。

【眇身】 細小なる身といふことにて、天子自ら謙遜し給ふ辭なり。出典漢書武帝紀に、詔曰、朕以眇身、託于王侯之上。

【眇小丈夫】 吞の低き男の義。出典史記孟嘗君傳に、趙人聞孟嘗君賢、出觀之、皆笑曰、始以薛公爲魁然也、今視之乃眇小丈夫耳、孟嘗君聞之怒、客與俱者下斫擊殺數百人、遂滅一邑以去。

【眇視跛履】 百眇の人にして明かに視んとし、跛足の人にして遠く履まんとするは、危地に陷るを免がれず、因て力足らざる者、强ひて事を行ふは、遂に禍敗を招くといふ意とす。出典易經履卦に、六三眇能視、跛能履履虎尾、咥人、凶。

【秒忽】 秒は禾芒なり、忽は蜘蛛の細かなる者なり、極めて少き數をいふ。出典漢書叙傳に、造計秒忽。

【苗裔】 所なり、裔は草の莖葉、根の生ずる故に遠き子孫をいふ。出典史記司馬穰苴傳に、帝高陽之苗裔兮。

【苗心】 隱公五年に、穎考叔、苗心爲災、故書。

【苗民】 政を承くるものなり。出典書經呂刑篇に、苗民勿用靈、蚩尤惟始作亂、延及于平民、罔不寇賊。

【苗莠】 種苗の中に、生ずる苗に似たる草を莠（ハクサ）といふ。出典書經仲虺之誥篇に、莠有根株。

【豹變】 善に移るの義なり、君子善の著見なること、豹の斑采の換蔚たるが如し。出典易經革卦に、上六、君子豹變、小人革面、征凶、居貞、吉。

【豹尾】 天子の車を豹の尾にて飾るをいふ。出典事物紀原に、古今注曰、周禮也、所以象君子豹變、尾言豫也、古軍正建之、今惟乘輿得建、謂晉代也、通典曰、漢制大駕法駕出、屬車最後一乘、懸豹尾、豹尾以前比省中、宋志按徐廣注南子、軍正執豹皮以前比省中、宋志按徐廣注禮記前有士師、則載虎皮、乘輿豹尾、以其義烈、宋朝會要曰、唐正觀後、始加此車於鹵簿內、又た漢書揚雄傳に、在屬車閒豹尾中、と、顏注に、服虔曰、屬車八十一乘、作三行、尚書御史乘之、最後一乘、懸豹尾、豹尾以前、皆屬省中。

【豹脚】 紋生草中者、吻尤利、而足有花紋、異異號爲豹脚紋子。

【豹飾】 豹の皮を以て衣服を飾るをいふ。出典詩經鄭風羔裘篇に、羔裘豹飾、孔武有力と、毛傳に豹飾、緣以豹皮也、又た禮記玉藻篇に、君子狐背裘、豹飾。

【豹蔚】 豹の皮の文蔚なることなり。出典柳宗元の詩に、挺生性豹蔚、遐步仰龍鱗。

【豹隱】 豹は其の毛を愛するが故に雨霧の時は山中に隱るゝをいふ。出典賈暇錄に、豹性潔、雪雨霧霧、伏而不出、慮污其身、列女傳云、南山有文豹、霧雨七日而不食、欲以澤其毛衣而成文章、小謝詩云、雖無玄豹隱南山霧。

【豹胎】 豹の腹に在る子をいふ。出典杜牧の詩に、歸來煮豹胎、饞飫不能飽。

【豹皮】 豹の毛の附ける皮をいふ。出典周禮大行人の鄭注に、執束帛而已、豹皮表之爲飾。

【豹革】 豹の毛を去りたる皮をいふ。出典淵與錄に、豹已爲變、風神呼吸之具也。

【豹鞹】 豹のツクリカハをいふ。出典論語顏淵篇に、棘子成曰、君子質而已矣、何以文爲、子貢曰、惜乎夫子之說君子也、駟不及舌、文猶質也、質猶文也、虎豹之鞹、猶犬羊之鞹、と。又た李嶠の文に、質異鳳毛、憑豹鞹。

【豹虎】 豹と虎とをいふ。出典山海經に、荆山、其中、多犀牛、多豹虎、と。又た易林に、蕤有豹虎、不敢危身。

【豹裘】 豹のカハゴロモをいふ。出典淮南子に、豹裘而弊、不若狐裘而粹。

【豹文】 豹のごとき文あるをいふ。出典山海經に、玉山是西王母所居也、有獸焉、其狀如犬而豹文、其角如牛、其名曰狡、其音如吠犬、見則其國大穰。

【豹采】 豹のごとき毛色あるをいふ。出典郭璞の文に、有鼠豹采、厥號爲鼫、漢朝英、知、鄙中能名、賞以東帛、雅業遂成。

【豹斑】 豹の文の一斑をいふ。出典晉王獻之傳に、嘗製門生樗蒲、曰、南風不競、門生曰、此郎亦善中窺豹一斑。

【豹皮揮】 虎の皮のフンドシなり。出典宋張舜民實墨錄に、嘉祐中、中人出使看夜叉、狀如圖畫、裝束皮如螺蚌、著豹皮揮、常以大樹爲身。

【豹死留皮人死留名】 ら死後に美名を殘さゞる可からざるをいふ。出典歐陽修の王彥章畫像記に、公本武人、不知書、其語質、平生嘗謂人曰、豹死留皮、人死留名、蓋其義勇忠信出於天性、而然。又た五代史記王彥章傳に、武人不知書、常爲俚語、謂人曰、豹死留皮、人死留名、其於忠義、蓋天性也。

【俵】 我邦にて「タワラ」と讀めども、此の義あるに非ず。出典南畝莠言に云、文獻通考に、唐宋和糴の事を論じて曰く、自唐始以和糴充他用、至于宋、糴遂爲軍餉儲邊一大事、熙豐後始有結糴、寄糴、均糴、俵糴、博糴、兌糴等名、何其多也と。此の俵の字は應に是れ俵散の義なるべし、是等の書に因て誤て一俵二俵の名あるか。（止）此又た餞屑談に云、類書纂要賞賜部云、分俵、俵散也。これによれば、則ち本と賜賞の分俵に出るなり。

【俵子】 張居士一日設齋百分、先期數俵子、至日、齋此赴齋、臨期、止收九十九俵子、齋訖、此心終不滿、後因往補眞遺院、見所塑鐵拐仙上有一俵子、題云、特來赴齋、見我不采、空腹而歸、俵綽我拐。

【票】 人以官牌、曰票、勞約亦曰票。

【票姚】 剽（ヘウ）を看よ。出典品字箋に、今人以官牌、曰票姚、テフダなり。

【猋風】 下より上に吹き上る烈風なり。出典禮記月令篇に、孟春行秋令、則猋風暴雨總至。

【森森】 水の遠き貌。出典沈約の法王寺碑に、森森洪波、と。又た隋煬帝の早渡淮詩に、平淮既森森。

【森漫】 廣くして際涯なきをいふ。出典左思の吳都賦に、瀰渺森漫。

【森花】 前條に同じ。出典郭璞の江賦に、狀沿天以森花。

【渺渺】 カスカにして遠き貌。出典晉子內篇篇に、渺渺乎如窮無極、と。又た張衡の思幻賦に、風渺渺兮震余興。

【渺瀰】 水の天に連る如く廣きをいふ。出典木華の海賦に、渺瀰瀁漫、と。又た白居易の詩に、江平絲渺瀰。

【猫鼠】 に、高宗廢皇后王氏、詔言至、良娣曰、武氏狐媚、反覆至此、我後爲猫、武氏爲鼠、吾當掐其喉以報、と。又た通鑑綱目に、朱泚軍中、猫鼠相乳、宰相常衮、率群臣賀。

【猫言】 猫が人の言を發するをいふ。出典機墨客揮犀に、鄧陽讓氏、其家衆妖競作、乃召女巫徐姥者、使治之、

時尙寒、有二猫、正伏燼側、家人指謂姥曰、吾家百物皆爲異、不爲異者、獨此猫耳。於是猫亦人立、拱手而言曰、不敢、姥大駭、走去。

【猫睛】猫の眼の玉なり。娜嬛記に、南香白胡山出猫睛、極多且佳、他處不及也、古傳、此山有胡人、惟齎一猫、猫死、埋于山中、久之猫忽夢曰、我已活矣、不信可掘觀、及掘猫身已化、惟得二睛、堅滑如珠。

【猫王】猫のカシラなり。緩巳編に、景泰初、西番貢一猫、其猫罩於鐵籠、納于空室內、明日起視、有數十鼠伏籠外盡死、蓋猫之王也。

【猫馴】猫のよくなれたるをいふ。張蠢の詩に、鼠劣翻書冊、猫馴伴坐氈。

【猫德】猫に五の德ありといふこと、戯言なり。揮塵新談に、萬壽寺彬師、善謔、嘗對客、猫踞其旁、彬師謂客曰、人言雞有五德、今吾猫亦有之、客問其說、曰猫見鼠不捕仁也、鼠奪其食而讓之義也、客至設饌則出矣禮也、藏物雖密能竊食之智也、每冬月輙入竈信也、客聞之爲之絕倒。

【猫犬】猫と犬とをいふ。范成大の詩に、婢子鬪爭君莫鬨、猫犬汚穢君莫嗔。

【猫精】猫の魂氣をいふ。南部新書に、連山張大夫搏、好養猫、衆色備有、皆自製佳名、每視事退、至中門、則數十頭曳尾、盤接而入、以綠紗爲幃、聚其內以爲戲、或謂搏是猫精。

【猫頭】竹の名なり。桂海虞衡志に、猫頭竹、性類筋竹。

【猫眼】猫の目。埤雅に、近有人收牡丹圖者、叢下有一猫、有別之者曰、此正午牡丹也、何以明之、猫眼黑睛如線、此正午牡丹也。

【猫鼠同眠】猫と鼠と同く眠に就くをいふ。新唐書五行志に、龍朔元年、洛州猫鼠同處、鼠象盜、猫職捕、而反與同處、象捕盜者廢職容姦と。又た舊唐書代宗紀に、隴右節度使朱泚于軍士家、得猫鼠同乳不相害、籠而獻之。

剽

【剽姚】漢の武官の名なり。史記衞將軍驃騎傳に、大將軍姊子去病年十八、幸爲天子侍中、善騎射、再從大將軍、受詔與壯士、爲剽姚校尉。漢書霍去病傳に、剽を票に作る。又た杜甫の後出塞に、借問大將誰、恐是霍嫖姚と。康熙字典に、按唐人詩用票姚、率作平聲、且改票作嫖、尤屬舛謬。

【剽悍】手キビシクしてアラキなり。漢書地理志に、自全晉時、已患其剽悍と。顏注に、剽、急也、輕也。

【剽掠】物をカスムルなり。唐書に、山賊剽掠。

【剽賊】詩文など前人の作を竊みて、以て己の作とするなり。韓愈の樊宗師墓銘に、惟古於詞必己出、降而不能乃剽賊、後皆指前以相襲、從漢迄今同一律。

僄 褾 漂 嫖 摽

【剽剝】カスメてハギ取るなり。史記莊周傳に、指事類情、用剽剝儒墨。

【僄悍猾賊】僄は疾なり、悍は勇なり、猾賊は、狡猾にして人を賊害するなり。史記高祖紀に、懷王諸老將皆曰、項羽爲人僄悍猾賊。

【褾褙】書畫を表裝するをいふ。品字箋に、褾、表、褙、背也、凡糊物者必兩層以上、有裝褙者向外、謂之褾、以無染素紙托其背、爲褙也。

【漂漂】高く飛ぶ貌。史記賈誼傳に、鳳漂漂其高逝と。注に、漂漂高飛貌、與飄同。漢書賈誼傳に、標標に作る。

【漂杵】戰爭の劇烈にして流血の杵を漂すをいふ。杵は(キネ又はタテと解す)。書經武成篇に、罔有敵于我師、前徒倒戈攻于後以北、血流漂杵。

【漂泊】水の上にたゞよふ、ことに、人の住所定まらざるにいふ。杜甫の詩に、卽今漂泊干戈際。

【嫖】一に僄に作る、邪淫をいふ。康熙字典に、俗謂邪淫曰嫖。

【嫖姚】剽(ヘウ)姚を見よ。

【摽梅】女子婚期の少しく過ぐるをいふ。詩經召南摽有梅篇に、摽有梅其實七兮、求我庶士迨其吉兮と。鄭箋に、梅實尙餘七未落、喩始衰也、謂女二十、春盛而不嫁、至夏則衰。朱傳に、言梅落而在樹者少、以見時過而太晚矣。

標

【摽末之功】僅少の功をいふ、摽はきつさきと訓ず。漢書王莽傳に、摽末之功、一言之勞。

【標準】標は本表、準は平を量くる者なり、標的として據準する義なり。韓愈の伯夷頌に、聖人乃萬世之標準也。

【標榜】㊀門外に札を掛けて之を表はすなり。㊁名目を附けること。㊀史記留侯世家に、武王表商容之閭と。索隱に云、表者、標榜其里門。㊁後漢書李膺傳に、海內共相標榜。

【標牌】敵の丸を防ぐ板なり、一には標は槍にして牌は盾なりといふ。正字通に、標子槍名、今瀘兵、用籐牌三枝、空中手擲、謂之標子。通鑑唐肅宗紀胡三省注曰、牌古謂之楯、晉宋之間謂之彭排、南方以皮編竹爲之、以捍敵、北人以木爲之、左傳欒祁以楊楯賈禍、蓋北方之用木也尙矣と。又た事物紀原に、宋朝會要曰、太宗聞南方以標槍旁排爲兵、令薰延皓取演衞軍習之、軍士之用標牌、此其始也。

【標致】旨趣を發示するなり。魏書文苑傳に、自昔聖達之作、賢哲之書、莫不統理成章、蘊氣標致。

【標季】物の末をいふ、末季に同じ。漢書谷永傳に、當陽數之標季と。顏注に、孟康曰、陽九之末季也。

麃

【麃麃】武威ある貌。詩經鄭風清人篇に、清人在消、駟介麃麃。

廟

【廟】祖先の靈殿なり。古今注に、廟者貌也、所以彷彿先人之形容也と。又た釋名に、先祖形貌所在也と。又た爾雅釋宮に、室有東西廂曰廟と。注に、夾室前堂と。疏に、凡大室有東西廂夾室及前堂、有序牆者曰廟。

【廟號】宗廟の稱號なり。事物紀原に、王者、祖有功、宗有德、始自有虞、祖高陽而宗堯、故舜典有歸格於藝祖、受終於文祖、大禹矣謨、亦有受命於神宗之文、商有天下、太甲號太宗、太戊爲中宗、武丁爲高宗、始列宗廟之號、故漢氏因之、西京有太宗世宗、東京有顯宗肅宗、而唐室諸帝、乃例稱之、蓋其事原於虞舜、而備於商人也。

【廟貌】宗廟。詩經周頌淸廟篇序の鄭箋に、廟之言貌也、死者精神不可得而見、立宮室象貌爲之耳。

【廟堂】㊀宗廟に同じ、祖先の靈を祀れる處なり。朝廷をいふ、廟は祖先を祀れる所なり、因て人君政を爲し事を舉ぐるには、必ず宗廟に告げ之を明堂に議するなり。㊀禮記に、廟堂之上、罍尊在阼、犧尊在西、廟堂之下、縣鼓在西、應鼓在東。㊁呂覽類似篇に、夫修之於廟堂之上、而折衝乎千里外と。又た漢書徐樂傳に、賢主覩萬化之原、明於安危之機、修之廟堂之上、而銷未形之患也と。又た劉向の九歎に、始結言於廟堂兮、信中塗而叛之。

【廟宇】神明の靈堂なり。漢書郊祀志に、作渭陽五帝廟同宇と。

顏注に、宇、謂屋之覆也、言同一屋之下、而列爲五廟、各立門室。

【廟兆】廟所といふに同じ。釋名に、先祖形貌所在也と。又た孝經喪親章に、卜其宅兆而安措之と。兆は、墳墓の界域なり。

【廟寢】廟の奥殿をいふ。淮南子時則訓の注に、前に在るを廟といひ、後に在るを寢といふ。晉書賀循傳に、別立廟寢。

【廟祧】宗廟に同じ、祧は、遠なり、上去の意とす、七世以上の祖は之を遷す、之を遷廟といふ、卽ち祧なり。周禮春官に、守祧掌守先王先公之廟祧。

【廟門】タマヤの門をいふ。書經顧命篇に、諸侯出廟門俟と。疏に、廟門、謂路寢門也と。又た禮記に、入廟門、三揖而后至階、三讓而后升、所以致尊讓也。

【廟楹】タマヤのハシラをいふ。唐書に、昔魯莊公、丹桓公廟楹、而刻其桷、春秋書之。(春秋莊公二十三年二十四年に見ゆ)

【廟垣】タマヤのカキをいふ。宋史に、親謁華陰西嶽廟、群臣陪位、廟垣內外、列黃麾仗。

【廟廊】朝廷をいふ。趙賢の贈趙祭酒詩に、廟廊贊晉贊成謀。

【廟廷】廟庭なり、廷は庭に同じ。三國魏志齊王芳紀に、詔祀於廟廷。

【廟社】宗廟と社稷とをいふ。魏書に、古者軍行必載廟社之主、

所ニ以樂ニ其威惠ニ、各有ル攸詩。

【廟神】（ベウシン）　廟ニ祭ル神。出典齊書ニ、王敬則引ル神篇ヲ曰ク、必不ニ相負ニ。又た漢祐の詩ニ、烟渡山烏散、風雨廟神歸。

【廟食】（ベウシヨク）　廟ニ祭られることをいふ。出典史記滑稽傳ニ、齊趙陪ニ於位、韓魏翼ニ面其後ニ、廟ニ食太牢ニ、奉ル以ニ萬戶之邑ニ。又た南史ニ、馮道根、謝召伯ニ曰ク、吾當ニ使ニ封侯廟食ニ、安能ニ爲ニ體吏邪。

【廟算】（ベウサン）　將ニ戰端ヲ開かんとするときは、先づ廟堂にて彼此の優劣を計算するをいふ。出典孫子始計篇ニ、夫未ニ戰而廟算ニ、勝者得ル算多也、未ニ戰而廟算ニ、不ル勝者得ル算少也、多ル算勝、少ル算不ル勝、而況於ニ無算乎、吾以ニ此觀ニ之勝負見ル矣。

【廟勝】（ベウショウ）　廟算ニ勝つをいふ。（前條を參看せよ）出典漢書趙充國傳ニ、非ニ案定ニ廟勝之冊ニ。冊は策ニ通ず。

【廟謀】（ベウボウ）　廟算ニ同じ。出典杜甫の詩ニ、猛將紛填委、廟謀蓋長策ニ。又た同人の詩ニ、徙倚瞻ニ王室、從容仰ニ廟謀ニ。

【廟謨】（ベウボ）　廟謀ニ同じ。出典後漢書光武紀贊ニ、雲慶既啓、人謀咸贊、明明廟謨、赳赳雄斷。

【廟略】（ベウリヤク）　廟謀ニ同じ。出典晉書羊祜傳ニ、外攘ニ王化ニ、內經ニ廟略ニ、著ル德推誠、江漢歸ニ心。

【廟議】（ベウギ）　廟算の議論をいふ。出典唐高祖廟碑ニ、帝詔ニ有司ニ、詳議。

【廟諱】（ベウキ）　廟中にて神の名を諱むなり。出典唐書百官志ニ、祠部郎中、一員外郎、各一人掌ニ祀ニ祠享祭國忌廟諱卜筮醫藥僧尼之事。

【廟事】（ベウジ）　宗廟にて行ふ事をいふ。出典韓愈の徐偃王廟碑ニ、太末之黑、姑蘇之城、廟事時修、仁孝振ル旌。

【廟見】（ベウケン）　新婦の始めて先祖の廟ニ謁ずるをいふ。出典禮記曾子問篇ニ、三月而廟見、稱ニ來婦ニ也と。鄭注ニ、謂ル舅姑沒者ニ也。孔疏ニ、婦入三月之後、而於廟中ニ以ル禮見ル舅姑ニ、其說詳ニ告ル碑、稱ニ來婦ニ也。

【繹】

【繹迢】（ヘウテウ）　遠くカスカに見ゆる貌。玉篇ニ遥ニ。

【繹緲】（ヘウベウ）　前條ニ同じ。出典宜和畫譜ニ、李思訓工ニ山石林泉、筆格遒勁、得ル幽邃蕭浸煙霞縹緲離離之狀。

【繹青】（ヘウセイ）　ハナダイロ、繹は青黃色なり。出典曹植の樂經賦ニ、石榴植ル詣庭、綠葉無ル繹青。

【繹鉄】（ヘウテツ）　鉄は、書册を被ひ包むもの、鉄舒遲卷。出典唐の太宗の帝京篇ニ、章編斷復續、繹

【鏢鏑】（ヘウテキ）　ハナダ色の鉄をいふ。出典(一)人の盛んに行く貌。(二)禽獸の多き貌。出典(一)詩經蓼蕭風載驅篇ニ、行人儦儦。(二)詩經小雅吉日篇ニ、儦儦俟俟。

【瓢壺】（ヘウコ）　瓢と壺とをいふ。出典李白の春日詩ニ、感此節ニ一觴、顧君覆ニ瓢壺ニ。

【瓢簞】（ヘウタン）　瓢と簞と、簞は竹にて造れる食器なり。出典陶潛の祭從弟敬遠文ニ、冬無ニ纖褐、夏渴ニ瓢簞ニ。論語雍也篇ニ、一簞食、一瓢飲。

【瓢勺】（ヘウシヤク）　瓢の破れたるを以て勺とするなり。出典賈書卞彬傳ニ、彬性飲酒、以ル氣壺瓢勺、抗皮爲ル膏。

【瀟瀟】（ヘウ）　雪の盛んに降る貌。出典詩經小雅角弓篇ニ、雨雪瀟瀟。

【飄飄】（ヘウヘウ）　風の輕く吹くこと。出典楚辭ニ、東風飄飄兮神靈雨と。又た陶潛の歸去來辭ニ、風飄飄而吹ル衣。

【飄爾】（ヘウジ）　風ニ吹かるが如く身輕ニ行く貌。出典呂安の奧論茂齊書ニ、鸞鳴戒ル旦、明月照ル晨、從ル日游ル西山、則馬首隨ル託。

【飄客】（ヘウカク）　後世は遊客に作る。出典類書異要ニ、飄客、言ル人輕ル身子花柳之中ニ、如ル物之飄流而無ル定也。

【飄颻】（ヘウエウ）　詩ニ、飄颻隨ル長風。出典曹植の

【飄風】（ヘウフウ）　暴風なり。出典詩經小雅何人斯篇ニ、彼何人斯、其爲ル飄風。

【飄忽震蕩】　輕くして振ひ動くをいふ。出典曹植の洛神賦ニ、體迅ル飛鳧、飄忽若ル神と。又た左傳ニ、楚鮮輕佻易ル震蕩ニ也。

【飄風不ル終ル朝】　暴風の吹くは暫時にして、決して長時間に渉らざるをいふ、朝は晨に起きてよ

り、朝飯までの間をいふ。出典老子第二十三章ニ、飄風不ル終ル朝、驟雨不ル終ル日、孰爲ル此者、天地、天地尚不ル能ル久、而況於ル人乎。

【驃騎】（ヘウキ）　前條ニ同じ。出典漢書霍去病傳ニ、禁中端午有ル龍舟驃騎之戲、驃騎者、一人騎而挽ル機前行、從騎繼ル之、各於ル馬上ニ爭ル巧技ニ、蓋以習ル騎乘ニ云、實元朔也。

【飈風】（ヘウフウ）　暴風下より上へ吹きあぐる暴風なり。飈は猋ニ同じ。出典森（ヘウ）風を見よ。

【鰾膠】（ヘウカウ）　鰾膠ニ、腰、俗謂ニ之鰾膠ニ、惟石首者、粘物甚固。

【鑣】（ヘウ）　馬のクツワなり。出典說文ニ、鑣、馬銜、馬銜勒ニ口中也。

【汨羅之鬼】（ベキ）　ヲの部弔（チウ）屈を見よ。

【辟書】（ヘキシヨ）　諸侯が人を招聘する書をいふ。出典斐子野碑ニ、玉帛賁ニ于丘園、辟書交ニ乎愈路ニ。

【辟易】（ヘキエキ）　驚き卻くなり。出典國語吳紀ニ、赤泉侯追ル項王ニ、項王瞋目而叱ル之、赤泉侯人馬俱辟易數里。

【辟王】（ヘキワウ）　樸篤ニ君をいふ。出典詩經大雅棫樸篇ニ、濟濟辟王、左右奉ル之。

【辟雍】（ヘキヨウ）　天子の學宮にして、大射の禮を行ふ處なり、辟は明、雍は和にして、明達諧和ならしむる義に取る。一說に、雍或は廱に作る、廱は澤なり、辟は壁に通ず、水、丘を旋ること壁の如し、以て觀

る者を節す、故に辟雍といふ。出典禮記王制篇ニ、天子命ニ之諸侯ニ、然後爲ル學、小學在ル公宮南之左ニ、大學在ル郊、天子曰ニ辟廱ニ、諸侯曰ニ頖宮ニ。又た詩經大雅靈臺篇ニ、於論ニ鼓鐘ニ、於樂ニ辟廱ニ。（ヘの部頖（ハン）宮の條參看）

【辟公】（ヘキコウ）　諸侯なり。出典詩經周頌雍篇ニ、相維辟公、天子穆穆。

【辟纊】（ヘキコウ）　麻を績み麻を練るをいふ。出典左子滕文公下篇ニ、彼身織ル屨、妻辟ル績ニ以易ル之也。

【辟邪】（ヘキジヤ）　獸の名、其の形を刻して佩ぶれば、邪惡を避くと云、故に古ニ之を佩びたり。出典後漢書輿服志ニ、皇太子侍ル祀則平冕九旒、袞衣九章、采織成袞帶、金辟邪首ニ。又た水經注ニ、溼水南、

漢中常侍長樂太僕吉侯惡冢、人有ル掘出一獸、作制甚工、左蹲上刻作ル辟邪字ニ。又た急就篇ニ、射戟辟邪、寧倜ニ於赤符ニ、顏師古曰、勞ニ於朱雀ニ。

【幎碧】

【幎目】（ベキモク）　カヽシなり。帛を以て之を作る。出典儀禮士喪禮ニ、幎目用ル緇ニ。鄭注ニ、幎目覆ニ面者也。出典十八史畧卷一ニ、夫差吳王ニ曰、吾無ニ以見ニ子胥ニ、爲ル幎目ニ、乃死。

【碧落】（ヘキラク）　太空をいふ。出典度人經の注ニ、東方第一天有ル碧霞遍滿、是ニ名ル碧落ニ。又た黃庭堅の詩ニ、心似ル綠絲遊ル碧落ニ。

【碧天】（ヘキテン）　青天に同じ。出典王羲之の蘭亭集詩ニ、仰觀ル碧天際ニ、俯察ル綠水濱ニ。

【碧霄】（ヘキセウ）　前條ニ同じ。出典崔鉉の詩ニ、萬里碧霄終一去、不ル知誰是解ル織人。又た林傑の詩ニ、七夕今宵看ル碧霄、牽牛織女渡ル河橋ニ。

【碧虛】（ヘキキヨ）　碧天ニ同じ。出典吳均の詠雪詩ニ、飄飄上ル碧虛、霧霧曉ル青林ニ。

【碧宇】（ヘキウ）　碧天ニ同じ。出典陳樵の夜聞曲ニ、碧宇星回夜漫漫。

【碧空】（ヘキクウ）　碧天ニ同じ。出典李白の黃鶴樓送孟浩然ニ詩ニ、孤帆遠影碧

空碧、唯見長江天際流。

【碧漢】（キカン）　出典 青空。出處 江總の和衡陽王高樓看雨詩に、北、檐使碧漢初日照紅妝。

【碧雲】（キウン）　出典 ミドリの雲。出處 江淹の擬休上人詩に、日暮碧雲合、佳人殊未來と。又た戴叔倫の夏日登鶴巖詩に、願借老僧雙白鶴、碧雲深處共翱翔。

【碧山】（ヘキザン）　出典 李白の山中問答詩に、問余何意栖碧山、笑而不答心自閑。

【碧海】（ヘキカイ）　出典 十洲記に、扶桑在東海之東岸、岸直陸行登岸一萬里、東復有碧海、海廣狹浩汗與東海等、水既不鹹苦、正作碧色、甘香味美。

【碧瀾】（ヘキラン）　出典 ミドリの小波をいふ。出典 李賀の詩に、金塘間水搖碧瀾。

【碧巖】（ヘキガン）　出典 緑の巖といふこと、深山の賦に、碧嵩無霧、緑水不風と。又た李白の宿清溪主人詩に、夜到清溪宿、主人碧巖裏。

【碧溪】（ヘキケイ）　出典 緑色の水の流るゝ溪。出典 張籍の夜宿黑龍溪詩に、夜到碧溪裏、無人秋月明。

【碧潭】（ヘキタン）　出典 水の碧なる淵。出典 劉勰の新論に、懸瀨碧潭、淵波恂湧、魚龍之所安也、人入而長。

【碧眼】（ヘキガン）　出典 緑の色の眼なり。出典 高僧傳に、達摩、眼紺青色、稱碧眼胡僧。

【碧玉】（ヘキギヨク）　出典 碧色の美しき玉。出典 拾遺記に、周穆王即位三十二年、巡行天下、駕黃金碧玉之車。

【碧桃】（ヘキタウ）　出典 碧色の桃の實。出典 尹喜內傳に、老子西遊省太眞王母、共食碧桃紫梨。

【碧梧】（ヘキゴ）　出典 アチギヽなり。出典 韓愈の馬少監誌銘に、翠竹碧梧、鸞鵠停峙と。又た范成大の詩に、雪橫朱閣碧梧寒。

【碧蘚】（ヘキセン）　出典 緑色の苔をいふ。出典 權德輿の趙昌丞崔君墓誌に、疏清沸、蘚碧蘚、樹蔦偃仰、有終焉之志。

【碧蔓】（ヘキマン）　出典 緑のツルをいふ。出典 范成大の西瓜園詩に、年來處處食四瓜、碧蔓凌霜臥軟沙。語を見よ。

【碧海菜】（ヘキカイサイ）　カの碧荷（カ）菜の意義及び類なり。出典 仙家に用ふる上品の藥。出處 漢武內傳に、王母曰、仙之上藥、有碧海之瑰菜。

【碧雞坊】（ヘキケイバウ）　出典 成都の坊の名、唐の詩鈔薛濤の住せし處をいふ。又た神の名に碧雞と云ふ。出處 漢書郊祀志に、宣帝即位、或言益州有金馬碧鷄之神、可致祭而致、於是遣王褒持節求之。顏注に、如淳曰、金形似馬、碧形似雞と。又た益州記に、成都之坊百有三十、第四曰碧雞坊。

【碧霞元君】（ヘキカ）　出典 泰山の神をいふ。出處 五雜俎に、泰山之稱雄、於江北、亦無佛處稱尊耳、實嵩之地、曠野千里、周殷北阜、踞以爲奇、而俗宗儀然、嶽大峙而控中原、其氣象雄偉、莫之與京、國宜以爲鎮岳之宗也、又俗爲東方主、發生之地、故新嗣者必禱於是、而其後乃傳會爲碧霞元君之神、以實愚俗、故古之祠泰山者、爲元君也、嶽不能自有其尊、而令他姓女主僭然奪其上、而旁走四方之人、其倒置亦甚矣。

【碧毯線頭抽早稻】　出典 唐人の詩の句。出處 白居易の蓉題紬上詩に、湖上春來似畫圖、亂峰圍繞水平鋪、松排山面千重翠、月點波心二顆珠、碧毯線頭抽早稻、青羅裙帶展新蒲、求詩能攜和杭州、去年一半勾留是此湖。

僻

【僻姓】（ヘキセイ）　出典 めづらしき姓氏をいふ。出處 鄭冠代醉謫に、偶得近時人僻姓、錄之。

【僻書】（ヘキシヨ）　出典 偏僻にして道義に依らざる書をいふ。出處 世說黜免篇に、令狐綜曾以著作郎訪於溫庭筠、庭筠答曰、事出南華經、非僻書也、竇相公熒坐之暇、時宜覽古、綜甚怒、奏庭筠有才無行、不許登第、遂輟嗣終身。

【僻書】（ヘキシヨ）　出典 かべがきなり。出處 太平廣記謂自然傳に、二天神無、其門屏如今壁書。

【壁門】（ヘキモン）　出典 ㊀壁を穿ち門と爲すをいふ。㊁陣屋の門なり。出處 ㊀史記武帝紀に、其南有玉堂璧門、大鳥之屬、乃立神明臺。㊁史記孫侯世家に、吾欲入勞軍、亞夫乃傳言開壁門。

壁

【壁泥】（ヘキデイ）　出典 壁に塗りたる泥をいふ。出處 李商隱の詩に、麝烟舊苾緣屏繞、銀燭新香一和壁泥。

【壁畫】（ヘキグワ）　出典 壁の上に畫くをいふ。出處 楓窗小牘に、即鋪門兩壁、亦爲淋漓潑墨、識者謂壁畫場入神妙、僧在白墨上耳と。又た崔國輔の宿法華寺詩に、壁畫感畫跡、龕經傳異香。

【壁壘】（ヘキルイ）　出典 城のかべと石がけなり。出處 張衡の思玄賦に、觀壁壘於北落。

【壁立】（ヘキリフ）　イの部家（イヘ）徒四壁立を見よ。

【壁藏】（ヘキザウ）　出典 物を壁中に塗りこめるをいふ。出處 史記伏生傳に、秦時焚書、伏生求其書亡、壁藏之、其後兵大起、流亡、漢定、伏生求其書亡、數十篇。

【壁中書】（ヘキチユウシヨ）　出典 前漢の世に、孔子の舊宅の壁中に塗り込めて藏めありし書をいふ。出處 漢書藝文志に、古文尚書者、出孔氏壁中、武帝末、魯共王、壞孔子宅、欲以廣其宮、而得古文尚書、禮記、論語、孝經、凡數十篇。

【壁立千仞】　出典 嚴石の峻ゆるをいふ。出處 水經注に、偉法顯曰、度葱嶺已入天竺境、於此順流、當西南行十五日、其道險隘、崖岸峻絕、其山唯石、壁立千仞、臨之目眩、欲進則投足無所と。又た世說賞譽上篇に、王公目太尉、巖巖清峙、壁立千仞。

【擘標】（ヘキヘウ）　出典 陶を搏ち、悲む義なり。出處 張協の七命に、執殷爲之擘擊。

擘

【擘踊】（ヘキヨウ）　出典 詩經邶風柏舟篇に、靜言思之、寤辟有擘。出處 悲しみて手を以て胸を搏ち、躍るなり。出典 孝經喪親章に、哭泣、擗踊、哀以送之。

【擘柳風】（ヘキリウフウ）　出典 柳の枝を折る風なり、春の暴風をいふ。出典 風土記に、河朔春時、疾風數日、一作三日乃止、曰擘柳風。

【擘窠字】（ヘクワ）　ハの部壁（ヘク）窠書を見よ。

【壁宮】（ヘキキユウ）　出典 壁にて飾れる宮をいふ。出處 詩賓王の詩に、壁宮相趨落、空階人跡滿、懷、壁宮相趨落、空階。

【壁殿】（ヘキデン）　出典 壁にて飾れる殿をいふ。出處 詩賓王の詩に、壁殿規、殿桑、金隄沟、斗標。

【壁堂】（ヘキダウ）　出典 壁にて飾れる堂をいふ。出處 文心雕龍に、明帝臺爛、崇愛儒術、肆、壁堂、講、文虎觀。

【壁臺】（ヘキダイ）　出典 壁にて飾れる臺をいふ。出處 宋書に、弔新宮之奄映、嘆、壁臺之無蹤。

【壁房】（ヘキバウ）　出典 壁にて飾れる ヘヤをいふ。出處 王勃の樂府に、紫閣丹樓相照耀、壁房錦殿相玲瓏。

【壁門】（ヘキモン）　出典 壁の飾ある門をいふ。出處 三輔黃圖に、發道以上、下宮之正門、日圓闕、高二十五丈、又曰壁門。

【壁帛】（ヘキハク）　出典 璧と帛帛とをいふ。出處 三國魏志に、咸熙元年、春正月、壬申、以璧帛祀華山。

【壁玉】（ヘキギヨク）　出典 丸きた玉といひ、平面なる璧を璧といふ。出處 新語に、璧玉珠璣、不御於上、則玩好之物、棄於下と。又た新序に、於是乃出其國寶璧玉以賜之。

【壁月】（ヘキダツ）　出典 月のまるく玉のごときをいふ。出處 王筠の文に、璧月珠星、驂驥月、綵船當夕泛銀河。

【壁沼】（ヘキセウ）　出典 丸き池をいふ。出處 呂令問の文に、問、儒士于壁沼、貯美人于玉臺。

【壁碎】（ヘキサイ）　出典 璧を碎くをいふ。出處 史記藺相如傳に、臣觀大王無意償趙城邑、故臣復取璧、大王必欲急臣、臣頭與璧俱碎於柱矣と。又た阮瑀の文に、華璧易碎、金殿難陶。

【壁聯】（ヘキレン）　出典 壁にて飾れる聯をいふ。聯とは柱に掲けるもの。出處 王僧孺の詩に、壁聯珠燦、輪映階平と。又た黃滔の詩に、壁聯榕驚、分詩、雪詩篇、奉互倡酬。

【壁假】（ヘキカ）　出典 人と物を交換するをいふ。出處 春秋趙公元年に、三月、鄭伯以璧假許田と。杜注に、魯不宜離國、祀周公、又不宜易取祈田、犯二不宜以動、故璧其實、不言祈稱、璧假、若過璧以假田、非久易也。

【壁帛】（ヘキハク）　出典 璧と帛帛とをいふ。出處 趙の藺相如の故事。出處 ヲ見よ。

【反壁】（ヘキ）　いふ。出典左傳僖公二年に、晉人の贈り物を受けざるを公子重耳及び曹、倍負覊・馳・盤盂・匜・瑰、公子受、殺反、壁。出典史記廉頗藺相如傳に、乃使其從者衣褐懷其璧、從徑道亡歸于趙。

【衙壁輿櫬】（ヘキ）　棺を背に負ふ、古代の降服の禮式なり。出典左傳昭公四年に、輕子面縛銜璧、士袒輿櫬、從之。

【懷壁有罪】（ヘキ）　タの部寶璧（タマ）有罪を見よ。

【癖】（ヘキ）　好之病と。佩文韻府に、錢癖・馬癖・詩癖・遁癖・潔癖・眉癖・研癖・石癖・睡癖・性癖・病癖・書癖・氣癖・酒癖・琴癖・嬾癖・茶癖・野癖・飲癖・香癖・鶴癖・癡癖・杜癖・舊癖・墨癖・桶癖・嗜癖・茗癖・山癖・痴癖・笑癖・醫癖・畫癖・潔癖・清癖・基癖・奇癖・清癖・瘞癖・左傳癖・譽兒癖・主家癖・愛古癖・山水癖・詩書癖・春秋癖・好奮癖・知音癖・留侯癖・冥搜癖・文字癖・酒經癖・烟霞癖・林壑癖・耽奇癖・葡萄癖の諸條を載せたり。

【襞稿】（ヘキ）　衣裳のヒダなり。出典漢書司馬相如傳に、襞積褰縐。

【霹靂】（ヘキレキ）　雷霆・霹靂所感也、をいふ。出典枚乘の七啓に、夏則雷霆霹靂、

【霹靂手】（ヘキレキシュ）　敏捷なる才ある人をいふ。出典唐書に、裴琰爲司戶參軍、凡舊事未決、命書吏數人、連紙數幅、須臾剖斷並平、時人謂霹靂手と。又た

樓論の詩に、奸胥及强使、時用霹靂手。

【霹靂車】（ヘキレキシャ）　發する車なり。出典後漢書竇紹傳に、曹操發石車擊紹、軍中呼曰霹靂車と。注に、卽今拋車也。出典唐書高麗傳に、李勣列拋車飛大石、所當輒潰。

【丿】（ヘツ）　〔數勿反（音ホツ）なり。廣韻に、普蔑反（音ヘツ）〕　一の熟語を用ふるを見ざれど、翠雨軒詩話に云、紀瀟松平元賓所著童課百絕有增氣檣駛近、濟舟丿一卽帆歸之句といへり。

【別】（ヘツ）　右戾也、丿、左戾也。出典漢土の書に、丿

【別日】（ヘツジツ）　別日に同じ、他日といふ義。出典楊升菴外集に、俗謂異日爲別日と。又た通俗編に、列子周穆王篇有別日升崑崙邱語、另或爲別字之省。

【別歲】（ヘツサイ）　出典蘇軾の饋歲詩序に、蜀中俗歲晚間遣謂之饋歲、酒食相遺爲別歲。

【別離】（ヘツリ）　楚辭九歌に、悲莫悲兮生別離、樂莫樂兮新相知と。又た杜甫の詩に、不致佳句愁來賦別離。

【別心】（ヘツシン）　他心、或は異心に同じ。出典王微の觀海の詩に、我來無別心。

【別紙】（ヘツシ）　闕吳志の裴注に、別紙言、足下不死、孤不得安。出典三國志の官吏なり、刺史が州を巡るときに隨ひ行く官なり。別に一乘の車に乘る、故に別駕といふ。出典事物紀原に、唐六典曰、後漢州置別駕、歷代皆有之と。杜佑云、別駕本因漢置、隨刺史巡察、若今觀察之有副使也、宋朝興長史司馬並爲散官云、通典曰、從刺史行、別乘一乘傳車、故謂之別駕、漢制也。

【別號】（ヘツガウ）　別に一の名を立つるなり、而して又た人既に名あり、出典書經君奭篇に、在太甲時、則有若保衡と。疏に、保衡伊尹一人也、異時而別號と。又た後村題跋に、上用則角印、其文爲楚辭、豈號の條あり、云、月令大零帝、鄭康成注云、帝、上帝也、乃天之別號、別號二字、始見於此（以下古今人の別號に就いて攷證せり）出典別號は號といふに同じ。號の外に別號あるに非ず、例せば、山陽は輔嶠の別號なり、梅坨も亦別號なり、三十六峯外史も亦別號なり、世に山陽を號とし、梅坨、三十六峯外史を以て別號とするは、大なる誤なり。出典史記越王勾踐世家に、范蠡浮海出齊、變姓名、自謂鴟夷子皮、耕于海畔、苦身戮力、父子治產、居無幾何、致產數千萬、齊人聞其賢、以爲相、范蠡喟然嘆曰、居家則致千金、居官則至卿相、此布衣之極也、久受尊名不祥、乃歸相印、盡散其財、以分與知友鄉黨、而懷其重寶、間行以去、止于陶、以爲此天下之中、交易有無之路、通爲生可以致富矣、於是自謂陶朱公。出典別號に就いて、丹鉛錄及郭止餘に詳論せり、文繁きを以て錄するを得ず、隙餘叢考と共に併せ考ふべし。

【別業】（ベツギフ）　別に田園を他所に置く、之を別業と謂ふ、亦之を莊と謂ふ。出典南史謝靈運傳に、移籍會稽、修營別業、傍山帶江、靈運嘗居之。

【別墅】（ベツシヨ）　傳に、安與兄子玄圍棊、賭別墅と。又た唐書裴度傳に、東都立第於集賢里、又於午橋創別墅、花木萬株、起凉臺琴館、名曰綠野堂。出典前條に同じ。

【別屋】（ベツオク）　別屋。出典世屋の外別に建てたる家をいふ。出典晉書魏詠之傳に、處之

【別宅】（ベツタク）　別宅。出典分家といふが如し。出典晉書裴楷傳に、晉營別宅。

【別所】（ベツショ）　我書に、引之則所。出典他所といふが如し。出典北

【別行】（ベツカウ）　別行。出典特別なる行ひなり。出典酉陽雜俎に、術中有天狐別行法。

【別當】（ベツタウ）　別當。出典官名、一官廳の頭をいふ。出典唐書儀衛志に、五門別當步甲隊。

【別人】（ベツジン）　別人。出典宋書謝晦傳に、或用別人。

【別名】（ベツメイ）　別名。出典異名に同じ。出典史記五帝紀の注に、族者、氏之別名也。

【別才】（ベツサイ）　別才。出典シの部詩（シ）有別才を見よ。

【別腸】（ベツチヤウ）　別腸。出典サの部百（サケ）有別腸を見よ。

【別而聽之】（ベツ）　別而聽之。出典一人一人に就き聞くをいふ。出典管子に、夫民別而聽之則聾、離者湯武之德、復合於市人之言。

【別有天地非人間】（ベツ）　別有天地非人間。出典人間界以外の天地があるといふ意にて、山中の隱棲なるをいふ。出典李白の答山中人に、問余何意棲碧山、笑而不答心自閑、桃花流水杳然去、別有天地非人間。

【蔑】（ベツ）　蔑。出典物が亡びたる窟。出典漢書東方朔傳賛に、揚雄以爲朝官不純師、行不純德、其流風遺蔑也。

【蔑爾】（ベツジ）　蔑爾。出典北史晉泰傳に、泰愛好知己、無蔑如者、泰蔑爾、泰之蔑爾。

【蔑然】（ベツ）　蔑然。出典忽下流、非其意、著謂之蔑爾。

【蔑蔑】（ベツベツ）　蔑蔑。出典王逸の九思に、日曖曖兮西沒。又た沈佺期の入少密溪詩に、游魚然蔑見也と。徐曰、蔑蔑、目也、又た蔑に過ぎず、廣韻に、蔑蔑、日落勢也。

【蔑見】（ベツケン）　蔑見。出典猶に目を過ごして見るがごとしふ。出典樂書王瑤傳に、余少好書、雖傳寫力を用ふる、皆乃疲眊。

【蔑聯】（ベツレン）　蔑聯。出典莊子馬蹄篇に、聖人蹩躠爲仁、踶跂爲義と。香義に心を用ゐて仁義を爲す說。

【蔑才】（ベツサイ）　蔑才。出典自らの才の短なるを謙する說。

【蔑線】（ベツ）　蔑線。出典太平廣記嘲誚五に、侯蒙韓昭、仕王氏、爲禮部尚書、屢文殿大學士、粗有文章、至於琴棋書射法、悉皆涉獵、以此承恩於後主、朝士李台瑕曰、韓八座

【蟞】（ベツ）　蟞。出典空中に飛ぶ蟲蚊の類なり。出典揚雄の甘泉賦に、浮蟞蠛、而陰天。

【蟞甲】（ベツカフ）　蟞甲。出典㊀瑞現（タイマイ）の甲。㊁棺の蓋。出典㊀唐書地理志に、愛州南海郡土貢、蟞皮鎧甲、㊁釋名に、輿棺之車、曰轜、其蓋曰蟞甲、亦曰輴。

【蟞脚】（ベツキヤク）　蟞脚。出典ワラビの異稱。出典詩經召南草蟲篇に、言采其蕨、と。毛傳に、蕨、蟞也と。疏に、周姜曰、蕨、齊魯曰、蟞、俗云、其初生似蟞脚、故名焉。

【蟞靈】（ベツ）　蟞靈。出典人名なり、蜀の望帝の臣なり。出典禽經に、蜀志曰、望帝將王於蜀、荆州有一人、化從井中出、名曰蟞靈、於楚身死、屍反沈流上、至汶山之陽、忽復生、乃見望帝、立以爲相、後數歲、望帝以其功高、禪位于蟞靈、號曰開明氏。

【蟞語】（ベツ）　蟞語。出典スツポンの物語をいふ。出典六度集經に、昔者菩薩、觀市觀蟞、心悼之焉、問貨賣蟞主、知者薩有普慈之德、答曰、百萬、菩薩答曰、大善、將蟞歸家、臨水放之、蟞子後夜、來謝其門、怪門有聲、便出見、蟞語、善薩曰、吾受重報、身得獲全、無以報恩、水居之物、知水之虛盈、洪水將至、必爲巨害矣、願速離舟、臨時相迎、答曰、大善、明晨詣門、如事啓王、王以善薩宿有靈名、信用其言、遂下處高、果洪水至矣。

【埋】（ヒ）　埋。出典孫叔敖の幼時に、陰德を行ひし故事。出典新序雜事篇に、孫

叔敖爲嬰兒之時、出遊見兩頭蛇、殺而埋之、歸而泣、其母問其故、叔敖對曰、聞見兩頭之蛇者死、嬰者吾見之、恐去母而死、其母曰、蛇今安在、曰、恐他人又見、殺而埋之矣、其母曰、吾聞有陰德者、天報之、汝不死也、及長爲楚令尹、未治而國人信其仁也。

【蛇呑象】 蛇が其の身より大なる象を呑みしなり。奇怪の譬なり。 出典 山海經海內南經に、巴蛇食象、三歲而出其骨、君子服之、無心腹之患。と。又た楚辭天問に、一蛇呑象、厥大何如。

【片時】 叢話に、片時則皮石。 出典 西京雜記カタトキをいふ。

【片言隻辭】 論語 鬻は一言半句といふが如し。 出典 陸機の謝瑞に、片言隻辭不調其間。

【片言折獄】 論語 片言は、一言なり、折は斷なり、簡單なる語にて獄を斷ずるといふ。 出典 論語顏淵篇に、片言可以折獄者、其由也與。由は子路の名なり。

【卞急】 論語 卞は躁疾なり、人の性の輕躁急促なるをいふ。 出典 左傳定公三年に、卞急而如澤。

【卞隨】 論語 古の潔白なる人。 出典 史記伯夷傳に、及夏之時、有卞隨務光者、此何以稱焉。と。又た莊子讓王篇に、湯遂與伊尹、伐桀克之、以讓卞隨。

【卞和之璧】 クの部和（クワ）氏之璧を見よ。

【弁髦】 論語 弁は緇布冠なり、髦は童子の垂髮なり、冠を加ふるの禮、始めに緇布冠を加へて垂髮を放捨し、次に皮弁を加へ、次に爵弁を加へ、三加の後始冠の弁と垂髮とを棄て去りて復た用ゐず。故に無用の物の喩と爲す。 出典 左傳昭公九年に、文武成康之建母弟、以蕃屏周、亦其廢壞是爲也、豈如弁髦而因以敝之。と。杜注に、童子垂髮、始冠必三加、冠成禮而擯其始冠、弁亦冠也と。孔疏に、弁謂緇布冠、髦、謂童子垂髮、見加冠之禮、先用緇布冠之冠、斂捨垂髮三加之後去緇布冠、不復更用、故云、因以敝之、劉炫以爲弁髦二物、以童子垂髮爲髦、彼兩髦、又云、因以敝之者、謂親殁不髮。

【弁冕】 論語 三字ともにカンムリなり。 出典 儀禮士冠禮に、周弁、殷冔、夏收、鄭注に、弁名出於槃、槃大也、冔名出於殷、殷質也、收言所以自覆飾也、收言所以收斂髮也。又た公羊傳宣公元年に、已練可以弁言所以自光大也、弁名出於槃、槃大也、冔名出於殷、殷質也、收言所以自覆飾也、收言所以收斂髮也。と。何休注に、弁禮所謂皮弁、爵弁也、夏曰收、殷曰冔、周曰弁、加旗曰冕。と。又た說文に、冕、大夫以上冠也。

【扁舟】 論語 扁は小舟なり。 出典 史記貨殖傳に、乃乘扁舟浮于江湖。と。又た蘇軾の前赤壁賦に、駕一葉之扁舟。

【扁額】 論語 說文に、扁は署なり、門戶に署するの文なりと。解額は門戶の額に字を扁するなり。 出典 門隱逸傳に、吳山有在員嗣、諱闔閭、都人敬畏之、有貧民、捐貲爲扁額、金碧莊飾、觀者如始至、觀乞靈焉。

【扁鵲】 論語 戰國の世の名醫の名なり。 出典 史記扁鵲傳に、扁鵲渤海郡人、姓秦、名越人、少時長桑君知扁鵲非常人、出其懷中藥、與之飲、乃悉取其禁方書、予之、忽然不見、扁鵲以此視病、盡見五藏疾結、特以診脈、爲名耳、於是遂隱、醫太子死、扁鵲曰、臣能生之、乃使弟子子豹、鍼太子死、扁鵲曰、臣能生之、乃使弟子子豹、鍼云、云、二旬而復、故天下盡以扁鵲爲能生死人、過邯鄲、聞貴婦人、即爲帶下醫、過雒陽、聞周人愛老人、即爲耳目痺醫、入咸陽、聞秦人愛小兒、即爲小兒醫、隨俗爲變、秦太醫令李醯自知伎不如扁鵲、使人刺殺之、至今言脈者由扁鵲。 論語 史記扁鵲傳、極めて讀み難し、本邦人にして之が解を作れるもの數家あり、姑く余の藏する所のもの二三を錄し、參照に供す。扁鵲倉公傳疏攷二卷、丹波元簡著。影宋本扁鵲倉公傳攷異一卷、堀川濟著。扁鵲傳傳參一卷、堀川濟著。扁鵲倉公列傳劄解二卷、安藤惟實著。扁鵲傳正解一卷、中嶽謙著。扁鵲傳解一卷、石坂宗哲著。（以上攷に版本扁鵲傳解一卷、邯井梅著。扁鵲傳考

一卷、邯井梅著。（以上攷に寫本）

【扁舟浮五湖】 論語 范蠡が勇退高蹈せしをいふ。 出典 楚國先賢傳に、勾踐滅吳、謂范蠡曰、吾將與子分國有之、蠡曰、君行令臣行、意、乃乘扁舟、泛五湖、終不返。

【扁舟一櫂歸何處】 論語 宋人の詩の句。 出典 蘇軾の蓬萊春江晚景詩に、野水參差落漲痕、疎林欲倒出霜根、扁舟一櫂歸何處、家在江南黃葉村。

【扁鵲不能肉白骨】 論語 神醫も死人を生ずる能はざるを喩ふ。 出典 鹽鐵論に、扁鵲不能肉白骨、微箕不能存亡國。と。微箕は、殷の微子箕子なり。

便

砭

【砭愚】 論語 愚なるものを戒むるなり。砭はイシバリと訓ず。 出典 伊洛淵源錄に、其室之左、曰砭愚（セの部西（セイ）銘の參考を見よ）

【便便】 論語 ㊀口辯あるなり。㊁肥滿したる貌。㊂治むる貌。 出典 ㊀論語鄉黨篇に、便便言、㊁後漢書邊韶傳に、邊孝先腹便便、懶讀書、唯眠。孝先は韶の字なり。㊂史記張釋之傳唐傳贊に、書曰、王道便便。書經洪範篇に平平に作る。

【便佞】 論語 辯口にのみ巧にして見聞の實なく、心に誠信を缺くもの。 出典 論語季氏篇に、友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

【便娟】 論語 輕き貌、雪の如くみだれて飛ぶ貌にも用ふ、又た舞女の袖を振ふにもいふ。 出典 謝惠連の雪賦に、初便便于鄰屋、未棄盈于帷席。

【便旋】 論語 彼此とあちこちすること。 出典 博雅に、徘徊便旋也とあり。

【便時】 論語 便宜ある時間をいふ。 出典 漢書王后傳に、便時上林延齋門本起經に、目冥耳聾、便旋即忘。

【便風】 論語 たよりをいふ。 出典 山谷刀筆に、餘須它日便風也。

【便道】 論語 近路なり。 出典 杜甫の詩に、便道即長驅。

【便衣】 論語 便利なる衣服なり。 出典 漢書李陵傳に、陵便衣獨步出營。と。顏注に便衣、謂著短衣小袖也。

【便殿】 論語 天子の休息せらるゝ所なり、便安に就く義なり。 出典 漢書武帝紀に、便殿火。

【便辟】 論語 便は人の欲する所に順ふなり、辟は人の惡む所を避くるなり。 出典 書經周命篇に、無以巧言令色側媚。と。又た論語季氏篇に、孔子曰、益者三友、損者三友、友直、友諒、友多聞、益矣、友便辟、友善柔、友便佞、損矣。

【便腹】 論語 肥滿したる腹なり。 出典 便の二を見よ。

【便面】 論語 顏の類なり、人を見るを欲せざる時、此を以て自ら面を障へば則ち其便を得と。 出典 漢書張敞傳に、無威儀、走馬章臺街、自以便面拊馬。と。顏注に、便面所以障面、蓋扇之類也、不欲見人、以此自障其面、則得其便、故曰便面、亦曰障面、今之沙門所持竹扇、上斜平而下圓、即今之便面也。と。又た匡謬正俗に、便面者所執以平面、或有所蔽、或自整飾、蓋其隱翳得之面安、故呼便面耳、今人所持總謂之扇、蓋轉易之稱乎。と。又た群書札記に、便面二字、切音爲扇、此切音之以音而象義者也。

【便嬖】 論語 近侍して嬖寵せらるゝ者。 出典 孟子梁惠王上篇に、便嬖不足使令於前與。

【便利】 論語 便宜利益の義にて、己の身の都合よきこと。 出典 史記范雎傳に、人生百體骸骸、手足便利、耳目聰明、而心智智、豈非士之願與。

【便人】 論語 世に慣れたる人なり。 出典 禮記喪記篇に、唯欲行之浮于名、故自曰便人。

【便地】 論語 便利の土地なり。 出典 漢書樂毅傳に、三十萬衆、數便地。

【便坐】 論語 便は便殿便室などの便にして、正寢に非ずして、佈息の小室なり、便安に就く義なり。 出典 漢書張禹傳に、見之于便坐。と。顏注に、謂非正寢、可以延賓之處。と。又た同書萬石君傳に、子孫有過失、不誚讓、爲便坐對案不食。

【便了】 論語 僕をいふ。 出典 書言故事に、ふへば則ち其便を得と。 出典 漢書張敞傳に、無威儀、走馬章臺街、自以便面拊馬。と。顏注に、便面所以障面、蓋扇之類也、不欲見人、以此自障其面、則得其便、故曰便面、亦曰障面、今之沙門所持竹扇、上斜平而下圓、即今之便面也。と。又た匡謬正俗に、便面者所執以平面、或有所蔽、或自整飾、蓋其隱翳得之面安、故呼便面耳、今人所持總謂之扇、蓋轉易之稱乎。と。又た群書札記に、便面二字、切音爲扇、此切音之以音而象義者也。

【便宜行事】 論語 其場の計らひにて都合好きやふにする。

二〇 勉　俛　二一 偏

〔出處〕史記蕭相國世家に、即不及奏上、輒便宜施行、上來以聞。上は高祖を指す。

【勉勉】(ベンベン) 〔意義〕勉て已まざる貌。〔出處〕詩經大雅棫樸篇に、勉勉我王、綱紀四方。

【勉强】(ベンキヤウ) 〔意義〕强ひて勤むるの意。〔出處〕漢書儒林傳に、願少自勉强と。又た歐陽脩の詩に、引吭知其音、力盡猶勉强。〔出處〕漢書董仲舒傳に、强勉學問、則聞見博而知益明、强勉行道、則德日起而大有功。

【俛焉】(ベンエン) 〔意義〕俛は勉に同じ、勤勞の貌。〔出處〕禮記表記篇に、俛焉日有孶孶。

【俛仰】(ベンギヤウ) フの部俛(フ)仰を見よ。

【偏國】(ヘンコク) 〔意義〕片田舍のこと。〔出處〕列子楊朱篇に、雖殊方偏國。

【偏諱】(ヘンキ) 〔意義〕諱は名なり、二字名のその一をいふ。〔出處〕禮記曲禮上篇に、二名不偏諱と。又た南史に、王鑒字思玄、本字玄成、與齊高帝偏諱同、故改焉。

【偏諸】(ヘンシヨ) 〔意義〕ヘリツキの裙なり。〔出處〕漢書賈誼傳に、爲之繡衣絲履偏諸緣と。顔注に、服虔曰、如牙條以作履緣。師古曰、偏諸若今之織成以爲要襻及褾領者也、古謂之車馬裘、其上爲乘車及騎從之象也。

【偏提】(ヘンテイ) 〔意義〕酒器の名、注子の類。〔出處〕資暇錄に、元和初、酌酒、猶用樽杓、居無何、稍用注子、其形若罃、蓋觜柄皆具、大和九年後、中貴人惡其名同鄭注、乃去柄安系、若茗瓶而小異、目之曰偏提、論者亦便其利と。系は弦なり。

【偏見】(ヘンケン) 〔意義〕僻見に同じ、カタクナなる意見なり。〔出處〕宋名臣言行錄に、呂誨謂司馬光曰、王安石雖有時名、然好執偏見、不通物情。

【偏陂】(ヘンパ) 〔意義〕偏は不中なり、陂は頗に同じ、不平なり、中正公平ならざるをいふ。〔出處〕書經洪範篇に、無偏無陂、遵王之義。

【偏旁】(ヘンバウ) 〔意義〕文字のヘンとツクリとなり。〔出處〕捃言に、未識偏旁、高談稷契。

【偏枯】(ヘンコ) 〔意義〕半身枯れたるをいふ。即ち半身不隨の人のこと。〔出處〕管子に、聾盲瘖啞跛躄偏枯者、上收而養之。

【偏侍】(ヘンジ) 〔意義〕父母の中、一人存在するをいふ。〔出處〕捃言に、舉進士者、有九、一曰大相識、主司有具慶者、二曰次相識、主司有偏侍者。

【偏罰】(ヘンバツ) 〔意義〕父母の中一方を失ひしをいふ。〔出處〕駱賓王の靈泉頌序に、幼丁偏罰、早喪慈親と。陳繼儒の注に、偏罰、指喪母。謂雙親不全。

【偏頗】(ヘンパ) 〔意義〕かたよりて正しからぬこと。〔出處〕晉書熊遠傳に、于思爲沓、無偏頗之失。

【偏聽】(ヘンテイ) 〔意義〕片言を聽信するをいふ。〔出處〕漢書鄒陽傳に、偏聽生姦、獨任成亂。

【先偏後伍】(ヘン) 〔意義〕軍旅の制なり、偏は車二十五乘なり、車騎を先にして、卒伍之れに次ぐをいふ。〔出處〕左傳桓公五年に、先偏後伍、伍承彌縫と。杜注に、司馬法、車戰二十五乘爲偏、以車居前、以伍次之、承偏之隙、而彌縫闕漏也。

【無偏無黨】(ヘン) 〔意義〕中正にして公平なるをいふ。〔出處〕書經洪範篇に、無偏無黨、王道蕩蕩、無黨無偏、王道平平。

匾　二三 惼　胼　冕

【匾額】(ヘンガク) 〔意義〕ガクメンをいふ。〔出處〕閑情寓寄に、筵于粉壁之上、謂之匾額と。又た品字箋に、額、顙也、俗以顙之兩旁、爲額角、又匾額象取額頭重出之意。

【惼心】(ヘンシン) 〔意義〕狹き心をいふ。一に褊心に作る。〔出處〕莊子山木篇に、有虛船來觸舟、雖有惼心之人不怒。

【胼胝】(ヘンテイ) 〔意義〕手足裂け傷くなり、手を胼といひ、足を胝といふ。〔出處〕莊子讓王篇に、曾子居衞、縕袍無表、顏色腫噲、手足胼胝と。又た荀子子道篇に、夙興夜寐、耕耘樹藝、手足胼胝、以養其親。

【冕服】(ベンプク) 〔意義〕禮服に禮冠を着くるをいふ。

〔出處〕書經太甲中篇に、伊尹以冕服奉嗣王歸于亳。

【冕旒】(ベンリウ) 〔意義〕冕はカンムリ、旒は、冠の前後に垂れ下る珠なり。〔出處〕大戴禮に、冕而前旒、所以蔽明と。又た世本に黄帝作冕旒。

冕　二二 遍　二四 褊　二五 編

【冕而前旒所以蔽明】(ベン) 〔意義〕帝王の冕旒黈纊の飾りを用ふるは、皆人君たるの德を養護する所以なるをいふ、旒は冕のかざり、黈纊は耳玉なり。〔出處〕淮南子に、冕而前旒、所以蔽明、黈纊塞耳、所以掩聽。

【遍身】(ヘンシン) 〔意義〕全身或は滿身に同じ。〔出處〕古文眞寶前集に無名氏の蠶婦に、昨日到城郭、歸來淚滿巾、遍身綺羅者、不是養蠶人。

【褊心】(ヘンシン) 〔意義〕急促狹隘の心なり。〔出處〕詩經魏風葛屨篇に、維是褊心、是以爲刺。

【編髮】(ヘンパツ) 〔意義〕髮をよりて編むなり。辮髮に同じ。〔出處〕史記西南夷傳に、皆編髮隨畜遷徙。

【編管】(ヘンクワン) 〔意義〕罪ありて地方へ流さるゝをいふ。〔出處〕吏學指南に、宋法不文面而流者謂之編管。

【編貝】(ヘンバイ) 〔意義〕貝を編みたるごとく齒並の美麗なるをいふ。〔出處〕漢書東方朔傳に、臣長九尺三寸、目若懸珠、齒若編貝。

【編列】(ヘンレツ) 〔意義〕いへなみなり、編戶の聯。〔出處〕漢書司馬相如傳に、編列之民。

【編戶民】(ヘンコノタミ) 〔意義〕戶籍に編列せる民なり、即ち庶人。〔出處〕漢書高帝紀に、諸將故與帝爲編戶民と。顔注に、編戶者、言列次名籍也と。又た同書梅福傳に、孔子子孫不免編戶。

【編年體】(ヘンネンタイ) 〔意義〕史體の一にして、年月に繫けて、史實を叙記するをいふ、春秋を以て此體の祖とす。資治通鑑、開國方略の類、之に屬す。〔出處〕史通に、夫春秋者繫日月而爲次、列時歲以相續、中國外夷、同年共世、莫不備載其事形於目前、理盡一言、語無重出、此其所以爲長也、至於賢士貞女、高才儁德、事當衝要者、必盱衡而備言、跡在沈冥者、不枉道而詳說、如絳縣之老、杞梁之妻、或以酬晉卿而獲記、或以對齊君而見錄、其有賢如柳惠、仁若顏回、終不得彰其名氏、顯其言行、故論其細也、則纖芥無遺、語其粗也、則丘山是棄、此其所以爲短也と。春秋とは、春秋左氏傳を指して言ふ。

蝙　蹁　翩

【蝙蝠不自見笑他梁上燕】(ヘン) 〔意義〕己れの醜きを知らずして、人の陋態を笑ふに喩ふ。〔出處〕玉泉子に、婁勛容貌么麼、嘗從其父飲客、父飛觴付之、有嫗人饒舌語、勛復酸、蝙蝠不自見、笑他梁上燕、父怒笞之。

【蹁躚】(ヘンセン) 〔意義〕旋り行く貌。〔出處〕張衡の南都賦に、翹遙遷延、蹩躠蹁躚と。又た蘇軾の後赤壁賦に、夢一道士羽衣蹁躚、過臨皋之下。

【翩翩】(ヘンヘン) 〔意義〕㈠輕擧の貌。㈡往來の貌。㈢才の美なる貌。㈣鳥又は蝴蝶などの飛ぶ貌。〔出處〕㈠易經泰卦に、六四、翩翩不富、以其鄰、不戒以孚。㈡詩經小雅巷伯篇に、緝緝翩翩。㈢史記平原君傳に、翩翩濁世之佳公子也と。又た魏文帝の書に、元瑜書記翩翩致足樂也と。元瑜は阮瑀の字なり。又た杜審言の贈蘇綰書記に、知君書記本翩翩、爲許從戎赴朔邊。㈣張衡の西京賦に、衆鳥翩翩。

篇　箯　二六 諞　辯

【翩翻】(ヘンペン) 〔意義〕翻り飛ぶこと。〔出處〕張衡の西京賦に、衆鳥翩翻。

【篇章】(ヘンシヤウ) 〔意義〕詩文の篇と章となり。〔出處〕北史東平公神舉傳に、美風儀、善辭令、博涉經史、性愛篇章。〔出處〕陳師道の詩に、稍回功奮入篇章。

【篇什】(ヘンジフ) 〔意義〕詩歌をいふ。(シの部詩(シ)什を參看せよ)〔出處〕[illegible]卷六に、今詩稱篇什者、本左傳、所謂以什共事、必克之義、什者、十人爲耦也、國風詩少、可以同卷、雅頌篇多、每什爲卷、而卽以卷首之篇爲什と。又た詩人玉屑に、詩二雅及頌、前二卷題曰某詩之什、陸德明釋云、歌詩之作、非止一人、篇數既多、故以十篇編爲一卷、名之爲什、今人以詩爲篇什、或稱譽他人所作爲佳什、非矣と。又た詩經集傳に、詩雅頌無諸國之別、故十篇爲一卷、猶軍法十人爲什也と。又た晉書樂志に、三祖紛綸、咸工篇什、聲歌雖有損益、愛翫在乎彫章。

【箯輿】(ベンヨ) 〔意義〕竹輿なり。〔出處〕史記張耳陳餘傳に、上使泄公持節問之箯輿前。

【諞言】(ヘンゲン) 〔意義〕スカシゴトなり、諞は巧なり。〔出處〕書經秦誓篇に、番番良士、旅力既愆、我尚有之、仡仡勇夫、射御不違、我尚不欲、惟截截善諞言、俾君子易辭、我皇多有之。

【辯理】(ベンリ) 〔意義〕判別して處理するなり。〔出處〕柳宗元の文に、遣租匿役、期月辯理。

【辨才天】（ベンザイテン）訓 梵語辨財天とは別なり、辨財天は、梵音サラスワティといふ、辯舌に長じ、智慧または財寶の福を與ふといふ、天竺の女神の名、との天の寶冠中には、一の白蛇あり、その顏面は老人の如く、眉毛甚白し、過去諸佛の出世に遭ひ、衆生を利益することを久しきを裏するの相なり、また琵琶を彈ずる相をも畫く、妙音天女の名もあり。出典 翻譯名義集に、佛底婆、此云辯才辯說也、展轉無滯、故辯別也、分明說了、故轉行明辯有四種、謂義、法、詞、樂說也義、謂了諸法之義法、謂了諸說法之名字、詞謂能說一名之語言、樂說有此三、必須樂說、說前三也。

【辨亡論】（ベンボウロン）機の作にして上下二篇あり、交遊論類に載す、大意、吳の亡ぶる所以を言ふ。

【辨姦論】（ベンカンロン）洵の作なり、蘇老泉先生集に載す、又た唐宋八家文讀本に載す。（張文定の老蘇墓表に、嘉祐初、王安石名始盛、當友側二時、歐陽脩亦善之、勸先生與之遊、而安石亦願交於先生、先生曰、吾知其人矣、是不近人情者、鮮不爲天下患、安石母死、士大夫皆往弔、先生獨不往、作辨姦論とあり。）

【辨嚴】（ベンゲン）旅裝を整へること。正字通に、治裝就道曰辨嚴とあり。出典 後漢書陳紀傳に、紀見鴻鵠、不復辨嚴、即時之都。

辨

【駢脅】（ヘンケフ）訓 駢は比なり、脅は腋下の名なり、脅骨合比して一の如く、俗に一枚あばらといふもの。出典 左傳僖公二十三年に、晉公子重耳之及於難也、及寶、曹共公聞其駢脅、欲觀其裸、浴、薄而觀之。杜注に、薄迫也、駢脅、合幹。孔疏に、脅是腋下之名、其骨謂之駢、骨相比迫、若一骨然。又た史記商君傳に、多力而駢脅者爲參乘。

【駢雅】（ヘンガ）書名。訓 七卷あり、明の朱謀瑋撰この書は爾雅の體例に倣ひ、釋詁・釋訓・釋名稱・釋宮・釋服食・釋器・釋天・釋地・釋草・釋木・釋蟲魚・釋鳥・釋獸の十三篇に分ちて訓釋せり、その引據する所頗る精確なり。

【駢儷體】（ヘンレイタイ）次條を見よ。

【駢儷文】（ヘンレイブン）東晉以後、景喬文體、六朝駢儷體、故自清麗可喜、不失爲佳文。

【駢四儷六】（ヘンシレイロク）はれし四字と六字とを配合して作れる文章なり、駢儷體又は四六體ともいふ。（シの部四（シ）六文を見よ。）出典 柳宗元の乞巧文に、駢四儷六、錦心繡口。

【駢拇枝指】（ヘンボシシ）駢拇は、足の大指と第二指とを相連るなり、枝指は一指を多く生ずるなり、手足の常に異なるをいふ、因て無用の贅物といふ轡に用ふ。出典 莊子駢拇篇に、駢拇枝指出於性者、謂之淫德。

鞭

【鞭】（ベン）ムチの部鞭（ムチ）を見よ。

【鞭撻】（ベンタツ）訓 鞭は鞭にてうちたゝくこと。出典 論語、記、上船、奴婢僕婢者、鞭撻之、襄公益奇之、其人乃張徐州と。又た譚子化書に、欺罔非民愛、而聚斂者數、之殺害非民願、而鞭撻者訓之。

【鞭笞】（ベンタ）鞭うつこと、笞とは麻繩にて造れるムチなり。出典 賈誼の過秦論に、始皇奮六世之餘烈、振長策而馭宇內、吞二周而亡諸侯、履至尊而制六合、執捶拊以鞭笞天下、威震四海。

【鞭策】（ベンサク）馬のムチをいふ。出典 禮記曲禮上篇に、乘路馬、必朝服、鞭策不正、不敢授、綏、左必式と。又た莊子駢拇篇に、前有橛飾之患、而後有鞭策之威。

【鞭朴】（ベンボク）ムチのたきものをいふ、刑罰に用ふるなり。出典 國語魯語に、薄刑用鞭朴、以威民也と。又た孔子家語に、鞭朴之子、不從父之教、刑戮之民、不從君之令。

【鞭杖】（ベンヂヤウ）ムチなり。出典 三國魏志明帝紀に、頃多以無事死、其減鞭杖之制、著於令と。又た顏氏家訓に、鞭有小人之應、皆可鞭杖篇。

目方隅・采色・器物・草木・鳥獸・蟲魚・補遺の十三門に分ち、經史子集中の詞藻を採るに皆二字為駢べて分類編輯せり、佩文韻府は韻為基礎として二字若くは三字四字の最下の字を標準とせしが、此書は韻字を標準として集めたり。

【鞭影】（ベンエイ）鞭を振ふ影をいふ。出典 指月錄に、世尊曰、如良馬見鞭影而行と。又た陸游の詩に、生憎快馬陸鞭影、寒作癡人記劍痕。

【着鞭】（ベン）その部着先（セン）鞭（ベン）を見よ。

【投鞭斷流】（ベン）鞭を投げ河を埋めるなり、江を渡る兵の多きをいふ。出典 晉書苻堅載記に、石越曰、晉國有長江之險、朝無骨鯁之臣、宜勸師堅曰、以吾之衆旅、投鞭於江、足斷其流。

騙

【騙】（ヘン）訓 騙人を欺くなり俗にカタルといふ意。出典 南史蘭欽傳に、幼而果決、超徒過人、宋末隨父子雲在洛陽、恆於市騙棄賣。

【騙樹】（ヘンジユ）訓 騙ツギキなり。出典 通雅地輿部に、騙樹、接樹也、月令廣義有騙樹法。

邊

【邊垂】（ヘンスイ）訓 邊境のこと、垂は陲に同じ。出典 左傳成公十三年に、芟夷我農功、虔劉我邊垂と。又た韋昭の詩に、邊垂飛羽檄。

【邊部】（ヘンブ）訓 カタキナカをいふ。出典 左傳襄公四年に、邊鄙不警。

【邊圉】（ヘンギヨ）訓 かたほとりの地、邊陲に同じ。爾雅釋詁に、圉、垂也と、郭注に、守圉在外垂也とあり。出典 魏了翁の詩に、募緣賞邊圉。

【邊國】（ヘンコク）訓 邊陲の國をいふ。出典 皇侃の論語義疏に、邊國之人。

【邊地】（ヘンチ）訓 同じ。出典 李白の蘇武の詩に、牧羊邊地苦と。又た陸逐の同洛陽李少府觀永緒公主入蕃に、邊地驚花少、年來未歸塞と。

【邊邑】（ヘンイウ）訓 前條に同じ。出典 禮記玉藻篇に、左其邊邑。

【邊愁】（ヘンシウ）訓 邊鄙の地に行きて愁情を催ほすをいふ。出典 杜審言の送湘鄉昔漢今春花鳥作邊愁と。

【邊功】（ヘンコウ）訓 邊は夷狄なり、即ち夷狄を伐ちし功をいふ。出典 唐書姚崇宋璟傳贊に、燥勤天子不求邊功、環不貪賞邊臣、而天寶之亂、卒蹈其害、可謂先見矣。

【邊塞】（ヘンサイ）訓 夷狄を禦ぐ爲めに、中國にて廣く夷狄の地の義とす。出典 史記三王世家に、大司馬臣去病上疏曰、陛下過聽使臣去病待罪行閒宜、塞邊塞之患と。又た杜甫の詩に、悠悠照邊塞、悄悄憶京華。

【邊幅】（ヘンプク）訓 修飾邊幅を見よ。

【安邊】（ヘン）訓 邊境の地を安ずるをいふ。出典 漢書趙充國傳に、選擇良吏、知其俗者、拊循和撫、此全師保勝安邊之策。

【無邊無礙】（ヘン）訓 物の廣漠にして際限なきをいふ。出典 起世經に、一切諸天、行時來去、無邊無礙、無有遲疾。

辯

【修飾邊幅】（ヘン）訓 邊幅を事とし布帛のその邊幅を修整するが如きをいふ。出典 後漢書馬援傳に、公孫述僭帝於蜀、嘗（隗囂）使援往觀之、述盛陳陛衛、以延援入、禮饗官屬甚盛、欲授以封侯大將軍位、賓客皆樂留、援喟之曰、天下雄雌未定、公孫不吐哺走迎國士、與論成敗、反修飾邊幅、如俗人形、此子何足久稽天下士乎、因辭歸、謂囂曰、子陽（公孫述字）井底蛙耳、而妄自尊大、不如專意東軍方。又た北史文苑傳に、顏之推好飲酒、多任縱、不修邊幅、時論以此少之。

【邊月隨弓影】（ヘン）訓 唐人の詩の句。出典 李白の塞下曲に、塞虜乘秋下、天兵出漢家、將軍分虎竹、戰士臥龍沙、邊月隨弓影、胡霜拂劍花、玉關如未入、歸莫長嗟。

【辮髮】（ベンパツ）訓 皆書西域傳に、吐谷渾鄯人以金花爲首飾、辮髮垂後、綴以珠貝と。又た南史北狄傳に、北狄種類甚繁、蠕蠕爲族、蓋匈奴裔也、辮髮衣錦、小袖、褶、小口袴と。又た尚書大傳に、武丁思先王之道、辮髮重譯至者六國と。又た北史隋煬帝紀及び五代史四夷附錄等に見ゆ、皆中國以外戎狄の俗なり。

【辯】（ベン）訓 文體の名。出典 文體明辯に、按、字書云、辯、判別也、其字從言、或從辛、蓋執其言行之是非異僞、而以大義辨之也、近世魏校謂從刀、而古文不一體、未敢從也、漢以前初無作者、故文選莫載、而劉

嚴不著其說、至唐韓柳乃始作焉、然其原實出於孟莊、蓋非本乎至當不易之理而以反復曲折之詞發之、未有能工者也、故今取名家諸作、以式學者、其題或曰某辯、或曰辯某、則隨作者之命之、實非有異義也。

【辯士】 [音義]辯舌もて論談する人なり。[出典]莊子天道篇に、驟而語諸刑名賞罰、此有知治之具、非知治之道、可用於天下、天下不足以用於天下、此之謂辯士。[音義]辯舌に同じ。[出典]史記范雎傳に、齊襄王聞雎辯口と。又た後漢書曹世叔傳に、蹈首不辯口利辭也。

【辯口】 [音義]辯舌に同じ。[出典]史記范雎傳に、齊襄王聞雎辯口と。又た後漢書曹世叔傳に、蹈首不辯口利辭也。

【辯護】 [出典]漢書貢禹傳に、以王命辯護生家、雖百子何以加。

【好辯】 [音義]辯論することを好むなり。[出典]孟子滕文公下篇に、公都子曰、外人皆稱夫子好辯、敢問、何也、孟子曰、予豈好辯哉、予不得已也。

【無辯無爭】 [音義]辯論もせず、爭鬪もせざるをいふ。[出典]文中子に、賈瓊問、何以息諍、子曰、無辯、曰、何以止怨、曰、無爭。

【辯足以飾非】 [音義]辯舌の巧なるをいふ。[出典]莊子盜跖篇に、强足以拒諫、辯足以飾非。[音義]史記殷紀に、帝紂資辯捷疾、聞見甚敏、材力過人、手格猛獸、智足以拒諫、言足以飾非。

【不以辯飾知】 [出典]辯舌を以てその智の足らざる所を飾らざるをいふ。[出典]莊子繕性篇に、古之存身者、不以辯飾知。[音義]常事に變りたる怪しき物をいふ。[出典]孔臧の賦に、變怪生家。

【變改】 [音義]變換改易の義なり。[出典]史記禮書に、少所變改。[音義]事物のカハルコトなり。[出典]易經繫辭上傳に、變化見矣。又た史記始皇紀に、變化有時。

【變化】 と。又た史記殷本紀に、變化見矣。

【變徵之聲】 [音義]悲壯の音なり、徵は五音の一。[出典]史記刺客傳に、高漸離擊筑、荆軻和而歌、爲變徵之聲。

【變豆】 [音義]邊は竹豆、豆は木豆、祭肉を盛る器なり。[出典]論語泰伯篇に、籩豆之事、則有司存。（ホの部豆ホ籩豆邊豆に關あり）

【籩笛】 [音義]廟に供へる器なり、竹にて造れる方なるを籩といひ、圓なるを笛といふ。[出典]蕭子雲の歌に、旋雲籩笛。

【籩篋】 [音義]廟祭に用ふる器具の名なり。[出典]王積の古意の詩に、愛骨輪、廟堂鮮膩、蕙籩篋。

ホ

布

【布衣】 フの部布（フ）衣を見よ。

【布衣交】 フの部布（フ）衣交を見よ。

【布袋和尚】 [音義]彌勒菩薩の化身なりといふ。[出典]傳燈錄に、明州奉化縣布袋和尚、未詳氏族、自稱名契此、形裁腮胵、蹙額皺腹、出語無定、寢臥隨處、常以杖荷一布囊、凡供身之具盡貯囊中、時號長汀子布袋師、示人吉凶、必應期無爽、或梁貞明三年、師將示滅、於岳林寺東廊下、端坐磐石、說偈曰、彌勒眞彌勒、分身千百億、時時示時人、時人自不識、儒畢安然化、其後他州有人、見師亦負布袋、行於是四來盛圖其像。

【布衣韋帶之士】 フの部布（フ）衣韋帶之士を見よ。

母

【母儀】 [音義]皇后のことをいふ。僕は僕郭主簿王家女、而好禮節儉、有母儀之德。

【母子】 [音義]母と子とをいふ。[出典]左傳隱公元年に、遂爲母子如初。

【母弟】 [音義]同母の弟をいふ。[出典]漢書季布傳に、母弟丁公と。顏注に、此母弟、爲同母異父之弟也。伊藤東涯云、同父同母亦稱母兄弟、蓋稱同父異母而言、故顏注詳之。[音義]母の弟即ち舅、ヂヂを母弟と稱することあり。

【母妹】 [音義]同じ母に生れたる妹をいふ。[出典]通鑑唐紀に、李惟誠者、惟岳之母兄也、其母妹爲李正巳子綜、母妹者、李惟誠同母之妹也。

【母錢】 [音義]元金なり。[出典]類書纂要に、沈文禎傳、遂持母錢三百緡、就錢癖大治酒食。

帆

【卸帆】 [音義]舟の帆を下すなり。[出典]李頎の詩に、卸帆落夜碧江濱。

【落帆】 [音義]前條に同じ。[出典]宋邦奏の侍兒小名錄に、至舜妃廟前、落帆入廟。

步

【步】 [音義]船の着する所、即ち今の波止場なり。[出典]述異記に、吳中有瓜步、魚步、龜步、湘中有舜妃步。又た韓愈の柳州羅池廟碑に、宅有新屋、步有新船。又た柳宗元の鐵嶺步志に、江之滸凡可步而上下者曰步。又た青箱雜記に、嶺南謂水津爲步、有晉步、即漁者施晉處、有船步、即人渡船處。又た通鑑の注に、水濱泊舟之地、人坎岸爲道、以上下、謂之步。[音義]述異記に云、吳越の間浦（音ホ）を以て步（音ホ）と爲すは、蓋の訛れるのみと。又た通俗編に云、俗に渡を問ふ處を謂て埠頭と曰ふ、諸書に據るに、當に步の字に作るべし、宋史には皆俗に從て埠に作れり、要宗紀に、武陽埠あり、宋以前未だ之を用ふるを見ず。（フの部に埠（フ）頭の條あり宜しく并せ見るべし）

【步士】 [音義]かちの士なり。[出典]唐書李嗣業傳に、提步士升山。

【步行】 [音義]徒步にて行くこと。[出典]項羽紀に、下馬步行。

【步武】 [音義]㊀六尺を步と爲し、半步を武と爲す。僅かの間といふこと。[出典]㊀國語周語に、夫目之察度也、不過步武尺寸之間。㊁蘇軾の詩に、穿竹鳥聲驚步武。

【步搖】 [音義]婦人の冠上の飾りにて、步むときは動搖す、故にいふ。[出典]漢書江充傳に、冠禪璫、故行步則搖。[音義]詩經鄘風君子偕老篇に、副笄六珈と。疏に、副之遺象。

【步行】 [出典]從行を趨といひ、隨行を步といふ。[出典]莊子田子方篇に、夫子趨亦趨、步亦步、夫子趨亦趨。

【步障】 [音義]竹を立てゝ幕を張りて屏とするをいふ。[出典]晉書石崇傳に、崇作錦步障五十里、又た通鑑綱目集覽に、步障今墨憲是也、以小竹交結爲之、衣以布或帛、可舒可卷。

【步輦】 [音義]手車なり。牛馬を駕せずして人の挽く車なり。[出典]通鑑後唐紀に、乘步輦以歸。

【步虛聲】 [音義]空中に步行して、佛經を誦する聲なり。[出典]李白の題隱樂陽先生壁詩に、嘯息滄溟氣、步虛吟眞聲と。王琦注に、異苑、陳思王（曹植）遊山、忽聞空裏誦經聲、清遠遒亮、解音者則而寫之、爲梵唄、仙聲、道士效之、作步虛聲と。又た吳筠の樂府解題に、步虛、道家所唱、倘言、羅勒輕舉之美、與信有道士步虛詞十首。

【步虛詞】 [音義]唐人の詩なり。[出典]唐の高駢の步虛詞に、青溪道士人不識、上天下天鶴一隻、洞門空鎖碧窓寒、滴露研朱點周易。

【步挽車】 [音義]手車なり。[出典]通鑑晉紀に、涼主纂辟乘步挽車と。又た同書齊紀に、魏賜爲尉元游明根、以步挽車及衣服と。又た北齊書に、後魏大臣老者多步挽車。

【步兵厨釀】 [音義]步兵の營中に在る酒をいふ。[出典]晉書阮籍傳に、籍聞步兵厨釀數人善有貯酒三百斛、乃求爲步兵校尉。

【學步邯鄲】 カの部邯（カン）鄲之步を見よ。

【步步生蓮花】 [音義]美人の緩步に喻ふ。[出典]南史齊廢帝東昏侯紀に、鑿金爲蓮華、以帖地、令潘妃行其上、曰、此步步生蓮華也。

【信步行將去、隨天分付來】 [音義]他の憂慮なく、道理のまゝ行ひ去れば、己が天分丈は爾祿の來るをいふ。[出典]七修類稿に、信步行將去、隨天分付來、此古名言、陳世寶筆曉易上句、曰順理行將去。

甫

【甫】 [音義]人の字（アザナ）に添へて某甫と用ふ。[出典]続博雅の注に、甫是丈夫之美稱。又た鉗耳亭隨筆に、或人、古人の字（アザナ）に甫の字を用ふるを問へり、余嘗て一書を閲するに云ふ、德を表するに甫の字を用ふるは、對公（宋の王安石字は介甫）より起れり、當時勢に附く者、多く之に

做ふ、故に表德皆連甫、花實叢蕚圃の配あり、然れども甫の字は止だ字内に用ふ、後人は字の下に於て復た一の甫の字を用ふ、或は換寫して父の字に作る、其の義固より通ず、但だ亦是れ蛇を畫がきて足を添ふるの譬りありといふ。

【甫甫】 [音義]大なり、又た衆なり、[出處]詩經大雅韓奕篇に、魴鱮甫甫。

牡

【牡丹之始】 [音義]牡丹は唐人に愛せられたれど、その以前昏の世に、既に之を賞せしものあり。[出處]五雜組に、牡丹自唐以前無有稱賞、僅謝康樂集中有竹間水際多種牡丹之語、此是花王第一知己也、楊子華有畫牡丹一處、極分明之詩、子華北齊人、與[illegible]遷、稍相後。

姆

【姆訓】 [音義]女教師の訓誡をいふ。[出處]儀禮士昏禮に、姆纚笄宵衣、鄭注に、姆婦人年五十無子、出而不復娶、能以婦道教人者也、又た宋史禮志に、諸王以下納采、儀者入告、主人曰、某之子弗[illegible]、於鄉訓、雖是服備、衆來之鎮、未知所以告虔也、某聽命於廟、敢不拜嘉。

拇

【拇陣】 [音義]指相撲なり。[出處]趙翼の詩に、蠡壺豎敢操牛耳、拇陣羞知[illegible]戰虎牢。

九 匍

【匍匐】 [音義]手と足とにて行くなり、ハラバフこと。[出處]詩經邶風谷風篇に、凡民有喪、匍匐救之。又た孟子滕文公上篇に、赤子匍匐將入井。[考異]匍匐の字、また蒲伏・蒲服・扶服・扶伏に作る、蒲伏は、左傳昭公十三年に、被錦奉盃飲冰、以蒲伏焉、守者御之、乃與之錦、而入と。又

西 浦

た史記淮陰侯傳に、信孰視之、俛出[illegible]袴下、蒲伏、一市皆笑、信以爲怯と。蒲服は、史記蘇秦傳に、蘇秦笑謂其嫂曰、何前倨而後恭也、嫂委蛇蒲服以面按地而謝曰、見季子位高金多也と。扶服は、禮記檀弓下篇に、詩云、扶服救之と。扶伏は、左傳昭公二十一年に、扶伏而擊之。

【匍匐而歸】 カの部匍(カン)の部學ノ歩を見よ。

【匍匐救之】 [音義]匍匐は、手足並び行くことにて、急遽の狀なり、[出處]詩經邶風谷風篇に、凡民有喪、匍匐救之と。又た禮記檀弓下篇に、陽門之介夫死、司城子罕入而哭之哀、晉人之說宋者、反報於晉侯、曰、陽門之介夫死、而子罕哭之哀、而民說、殆不可伐也、孔子聞之曰、善哉、視國乎、詩云、凡民有喪、扶服救之、雖微晉而已、天下其孰能當之。[考異]匍匐は、畢竟その急遽忽忙の狀を形容するのみ、然るに匍匐を以て喪を助くる古禮となすものあり、茲に錄して笑資に供す、石林燕語に、陳烈、福州人、以鄉行稱、尤爲蔡君謨所知、然烈行推多爲、君謨母死、烈往弔、自其門、匍匐而過、人問之、曰、此詩所謂凡民有喪、匍匐救之者也、其所爲類如此。

【浦海】 [音義]浦と海とをいふ、浦とは入江なり。[出處]孔稚珪の表に、微軍岷義、命權船於浦海、使自青徂豫、甲於岷義、命權船於浦海、使自青徂豫、騎星縱、沿江入溟、雲陣萬里。

捕

【浦灣】 [音義]入江をいふ。[出處]鄧陟の詩に、至賓合沖粹、濟虛映浦灣。

【浦嶼】 [音義]入江にある島をいふ。[出處]白居易の詩に、扁舟駐迫煙渡上、杖策閑尋浦嶼間。

【浦溆】 [音義]渚も亦た浦なり。[出處]杜牧の詩に、舟人漁子入浦溆。

【浦月】 [音義]入江に輝く月をいふ。[出處]張正見の詩に、舟移歷浦月、櫂舉蕩蘋蘭。又た李白の詩に、秦山秋浦月、蕩蘋玉關情。

【浦中】 [音義]入江の中をいふ。[出處]宋書に、元從子振、逃於華容之浦中、招集逃竄數千人。

捕

【捕影】 カの部保(ホウ)の部影ノ歩を見よ。

【捕捉】 [音義]人又は物なトラフルをいふ。[出處]居懿宗の登寶位、赦書に、其餘人戶所欠錢物、如身家已亡殁、或在貧窮、無可徵納、並逃竄、捕捉未獲、因緣事勢、如此之類、虛挂簿書、宜並放免。

哺

【含哺鼓腹】 [音義]天下の泰平なるを樂むなり、哺は口中にある食物をいふ。[出處]莊子馬蹄篇に、赫胥氏之時、民居不知所爲、行不知所之、含哺而熙、鼓腹而遊。

【哺乳多則生癲病】 [音義]過ごすの藥をいふ。[出處]清夫論に、哺乳多則生癲病、富貴盛而致癲疾。

圃

【圃田】 [音義]地名なり。[出處]周禮職方志に、河南曰豫州、其澤藪曰圃田。

鄭注に、圃田在中牟。

【圃畦】 [音義]ハタケをいふ。[出處]杜甫の詩に、圃畦新雨潤、蟲子驚鉏來。

【圃事】 [音義]ハタケを作ることをいふ。[出處]祝允明の文に、大抵、事既偶圃事守周、吳多名苑、而技其特優。

【圃翁】 [音義]ハタケを造る老人をいふ。[考異]老圃に同じ。[出處]類苑に、圃翁倚[illegible]鋤轉睨。

哺

【哺時】 [音義]哺は餔に同じ、申の刻(午後四時)なり。[出處]呂覽に、且至食、食至昳、昳至餔、餔至下餔、下餔至日夕と。又た漢書五行志に、日中時食、從東北過半、哺時復。又た淮南子天文訓に、日至於悲谷、是謂哺時。

【哺夕】 [音義]日暮なり。[出處]宋玉の神女賦に、玉對曰、晡夕之後、精神恍忽若有所喜。

【哺賃】 [音義]宮債を返却せずして、逃亡せる者をいふ。[出處]漢書武帝紀に、諸侯遺民在孝景後三年以前、勿聽治。

【哺髮】 [音義]亂れ髮をいふ。[出處]郭茂倩の樂府詩集に、遺髮謂髮之散亂未料理也。

道

【道逃】 [音義]逃亡の人なり。[出處]左傳昭公七年に、封禪天下道逃主孝、(エの部淵(エン)藪を見よ)

【道播】 [音義]道は逃亡なり、播は遷移なり。[出處]書經大誥篇に、予惟以爾庶邦、于伐殷道播臣。

【道賦】 [音義]年貢の未納をいふ。[出處]文獻通考に、吳太帝寶民間道賦。

補

【道負】 前條の類語を見よ。

【道租】 道賦の類語を見よ。

【補醢】 [音義]醢は乾肉、醢は肉漿なり、古昔の刑法なり。[出處]史記殷紀に、九侯女不喜淫、紂怒殺之、而醢九侯、鄂侯爭之强、紂之疾、並脯鄂侯と。又た同侯爭之强、紂之疾、並脯鄂侯と。又た同書魯仲連傳に、易爲與人俱稱王、卒就烹醢之地。

【莫春】 [音義]莫は暮に通ず、春の末をいふ。[出處]陽休之の詩に、遲遲莫春日。

【補苴】 [音義]補は綴繕するなり、苴は包裹するなり、缺點を補ふをいふ。[出處]韓愈の進學解に、補苴罅漏と。又た呂覽に、衣弊不補、履決不苴。

【補闕】 イの部拾(シキ)を見よ。

【補治】 [音義]補ひ治むるなり。[出處]王安石の詩に、蹄尾稍補治。

【補任】 [音義]官位に補し、職司に任ずる義。[出處]後漢書章帝紀に、可以補任。

【補綴】 [音義]補ひツギルとて、破れたるを繕ふこと。[出處]禮記內則篇に、衣裳綻裂、側注、補綴。

【補傳】 [音義]本傳の闕けたる處を補ふために作れる傳なり。朱子が大學舊本の錯簡あるを正し、八條目中の格物致知の一傳を補ひしが如きこれなり。[出處]朱熹の大學章句に、右傳之五章、蓋釋格物致知之義、而今亡矣、閒嘗竊取程子之意、以補之曰、云云。

【補鍋匠】 [音義]鍋の破損せしを治むる職人なり。[出處]晁明文則に、鄉曉五忠德川中補鍋匠亦不知何許人、往來蘇慶間、爲補鍋、皆呼爲老鍋匠。

【補袞資】 [音義]宰相の才をいふ、袞職の[illegible]資稱の詩に、輔想垂裳治、深求補袞具。

【補亡詩】 [音義]古詩の亡びたるを補ひたるなり、晉の束晳の作なり。[出處]束晳の補亡詩六篇、文選に載す。[考異]華書札記に、世說新語、文學夏侯湛作周詩、破示潘安仁、安仁曰、此非徒溫雅、乃則見孝弟之性、潘因此遂作家風詩、注、安士傳曰、湛字孝若、譙國人、有盛才、文章巧思、善補雅詞、名亞潘岳、湛集載其賦曰、周詩者、南陔、白華、華黍、由庚、崇丘、由儀、六篇、有其義而亡其詞、湛續其亡、故云周詩也、其詩曰、既殷斯虔、仰脫洪恩、夕定晨省、奉朝侍昏、退、雝鳴在門、孝孝恭晞、夙夜是敬、則笙詩六篇、孝若已先束晳補之矣、又唐皮日休有補九夏歌、亦以爲九夏詩亡故補之。

【補史記】 [音義]書名。[出處]唐の司馬貞の紀なり、司馬遷の史記は五帝本紀を首にし、其の以前を錄せざるを以て、これを補ひしなり、三皇とは、庖犧・女媧・神農の三氏をいふなり。

【補助之政】 [音義]諸侯の祭秋郊野を巡行し、人民の不足あるを察して、之れを補助する政をいふ。[出處]孟子

梁惠王下篇に、巻省耕而補不足、秋省斂而助不給。

【補梁疆域志】 [書名] 齊孫の撰する所、凡そ八巻にして、梁書に地理志缺けたるを以て、考據して之を審確にしたるものなり、道光元年に李兆洛は之を三國職官表と合刻せり。

【補天浴日之功】 [熟語] 國家に大功あるをいふ。[出典] 宋史趙鼎傳に、鼎上疏、言頃張浚出使川陝、國勢百倍於今、沒有補天浴日之功、陛下有礦山帶河之誓、君臣相信、古今無二。[類語] 列子湯問篇に、然則天地亦物也、物有不足、故昔者女媧氏練五色石以補其闕、斷鼇足以立四極と。山海經大荒南經に、東南海之外、甘水之間、有羲和之國、有女子名曰羲和、方浴日于甘淵、羲和者、帝俊之妻、生十日と。郭璞注に、羲天地始生、主月日者也。

【補後漢書年表】 [書名] 宋の范曄の後漢書に年表を缺けるを以て因て之を補ひ、同姓侯王表二巻、異姓侯王表六巻、百官表二巻を作る、頗る精詳なりとす。

【補元史藝文志】 [書名] 清の錢大昕の撰する所にして、四巻あり、元史藝文志は缺漏多きを以て、之を補ひたるなり。

【補後漢書藝文志】 [書名] 清の侯康の撰にして四巻あり、後漢書藝文志の不備なる所を考證して之を補足したるものなり。

【補續漢書藝文志】 [書名] 清の錢大昕の撰にして二巻あり、漢書藝文志の不備なる所を考證して之を補ひ讃きたるものなり。

菩

【菩薩】 [佛語] 佛に近き人の稱なり、菩提薩埵を省略して菩薩の二字とす。菩提は佛道なり、薩埵は衆生なり、諸佛道を用ゐて衆生を成就するを謂ふ。[出典] 解脫名義集に、薩埵秦言大心、菩提薩埵、菩提道名也、薩埵秦言大心衆生、有大心入佛道、名菩提薩埵、無正名譯也と。又た世說補言語歌文柱注に、金剛經注云、菩薩也、薩、濟也、能濟衆生、故曰菩薩と。又た綱目集覽に、菩之爲言了也、薩之爲言見也、佛書云、菩提薩埵、言覺有情也、從聞稱菩薩。

【菩提】 [佛語] 佛道の至極なるものゝ稱。[出典] 翻譯名義集に、摩師云、道之極者、稱曰菩提、秦無言以譯之、後代諸師、皆譯爲道、以大鈴翻爲佛道故。

【菩提樹】 [熟語] 印度產の名木の名なり。[出典] 西域記に、御畢鉢羅樹也、昔佛在世、數百尺、屢經殘伐、發高四五丈、佛坐其下、成等正覺、因而謂之菩提樹、焉蓋幹黃白、枝葉青翠、冬夏不凋、光鮮無變、每至涅槃之日、葉皆凋落、頃之復故。又た百陽雜俎に、菩提樹出摩伽陀國、蓋釋迦如來成道時樹、一名思惟樹、蓋幹黃白、枝葉青翠、經冬不凋、西域記謂之畢鉢羅樹、

【菩提種】 [佛語] 佛道の種の義、菩提は詩に、百千萬劫菩提種。

【菩薩蠻】 [佛語] 正道を害するものをいふ。[出典] 華嚴經に、佛言諸善男子、善女人等、書寫經時、橫事歎起、書寫不終、當知是爲菩薩蠻事。

【菩薩蠻】 [熟語] 野蠻國の婦女を稱す。[出典] 羣書札記に、南部新書大中初、女蠻國入貢、危髻金冠瓔珞被體、號菩薩蠻、不知何物、廣中見呼蕃婦爲菩薩蠻、方識之、按北夢瑣言云、宣宗愛唱菩薩蠻、詞、今狐相國假溫飛卿新撰密遇之、戒以勿洩、而遽言於人、由是發之、溫詞十四首、載花間集、今曲是也、又李太白有菩薩蠻詞。

蒲

【蒲席】 [熟語] ガマムシロをいふ。[出典] 南史梁簡文紀に、以布帀、蒲尾爲席、東以白茅。

【蒲扇】 キの部葵(キ)扇を見よ。

【蒲牢】 [熟語] 鐘をいふ。[出典] ケの部鐘(ゲイ)音を見よ。

【蒲盧】 [熟語] ㊀蜂(アシ)なり、蘆は蘆に通ず。㊁細腰蜂なり。[出典] ㊁中庸第二十章に、人道敏政、地道敏樹、夫政者、蒲盧也と。朱注に、蒲、蘇也。㊂中庸の鄭注に、蒲蘆、螺蠃、謂土蜂也。又た爾雅に、螺蠃、蒲盧と。注に、即細腰蜂也。

【蒲萄】 [熟語] ガマとアヲとなり、共に水邊に生ずる草。[出典] 晉書食貨志

に、良田變生蒲葦、人居沮澤之際。

【蒲輪】 アの部安(アン)車蒲輪を見よ。

【蒲團】 [熟語] 蒲を以て圓くし坐に敷くものゝ、之をエンザといふ、今は此とをフトンと訓じ夜具をいふ。[出典] 顧況の宿山中僧詩に、不飯香燈燃蒲團坐如鐵と。又た馬一龍の詩に、前取溪蒲密密編、腳遭功巧樣圓圓。

【蒲節】 [熟語] 五月五日の菖蒲の節句をいふ。[出典] 書晉故事に、端午即會蒲節と。又た說郛六十九に、孫思邈、千金月令、端午以菖蒲、或鏤或屑以泛酒。

【蒲伏】 匍(ホ)匐を見よ。

【蒲服】 匍(ホ)匐を見よ。

【蒲陶】 [熟語] 植物の名。葡萄に同じ。[出典] 漢書西域傳に、宛左右以蒲陶、大宛酒。

【伏蒲】 [熟語] 青き蒲を席としたる天子の寢所に伏して奏事をするをいふ。[出典] 漢書史丹傳に、竟寧元年、上寢疾、傅昭儀及定陶王常在左右、而皇后太子希得進見、皇后太子皆憂、不知所出、丹以親密臣、得侍視疾、候上間獨寢時、丹直入臥內、頓首伏青蒲上、涕泣言曰、云云と。注に、孟康曰、以蒲背爲席、用蘇地也。

【蒲柳之姿】 [熟語] 自ら身體の衰弱せるを謂ふ。[出典] 蒲は、カバ、柳は、ヤナギ、一說に蒲柳は、河畔の赤楔柳、秋來先づ落つと。姿は資に通ず。[出典] 世說言語中篇に、顧悅與簡文同年、而髮蚤白、簡文曰、卿何以先白、對曰、蒲柳之姿、望秋而落、松柏之質、經霜彌茂。[類語] 世說の注に、顧凱之爲傳曰云云として、姿を資に作る。

【蒲鞭之罰】 [熟語] 蒲はカバ、水草なり。蒲鞭は痛みなし、但だ罰のみ。故に辱を示すのみといふ、乃ち寬厚の治をいふ。[出典] 後漢書劉寬傳に、寬拜南陽太守、溫仁而多恕、吏有過、但以蒲鞭罰之、示辱已、終不加捶。

募

【募選】 金を出して人を募り選ぶこと。[出典] 荀子議兵篇に、招延募選。[類語] 神祠寺院及び道路橋梁の寄附金を求むること。[出典] 文體明辯に、按橋梁祠廟寺觀經像、與夫鄰老衣食器用之類、凡非一力所能獨成者、必撰疏以募之、詞用麗語、蓋時俗所尚、而橋梁之建、本以利人、祠廟之設、或關祀典、尤非他事之比、則斯文也、豈可闕而不錄哉、故列以募緣疏云と。

【募緣疏】 [熟語] 前項の募選の項を見よ。

輔

【輔翼】 [熟語] たすけるなり。[出典] 書經益稷篇に、予欲左右有民、汝翼と。注に、左右、輔翼也、翼は孟子所謂輔之翼云と。注に、孟康曰、以蒲背爲席、用蘇地也。

【輔行】 [熟語] 副使なり。[出典] 孟子公孫丑下篇に、使蓋大夫王驩爲輔行と。[類語] 左傳に、晉有親暱、以相輔佐。

【輔佐】 [熟語] 君主を助くること。[出典] 傳に、晉有親暱、以相輔佐。

【輔仁】 [熟語] 朋友互に仁道を行(ヒ)勵まして相輔くるをいふ。[出典] 論語顏淵篇に、曾子曰、君子以文會友、以友輔仁。

【輔車相依】 [熟語] 車は物を載する者、輔は兩側に車を挾む木なり、車と輔とは相待ちて用を爲す、故に兩國相助くるをいふ、一說に左傳杜注に輔は頰輔、車は牙車とあり、輔は面の外表にして、車は內骨なり、亦互に相待ちて用を爲すの譬なり。[出典] 左傳僖公五年に、諺所謂輔車相依、脣亡齒寒者、其虞虢之謂也と。又た呂覽に、車依輔、輔亦依車、是虞虢之勢也。又た詩經小雅正月篇に、其車既覆、乃棄爾輔と。又た云、無棄爾輔、員于爾輻と。疏に、輔は解脫すべきの物なり、蓋今人の杖を輻に縛して以て車を防輔するが如しと。

(此に掲げたる圖は盡井孝德の雜圖に据る。云ふ、背面皆同、多則八枚、少則四枚、今國從用八枚者)

醋

【醋】 [熟語] 漢の時に、人民の聚會して酒を飲むことを禁じたり、時に之を許さるゝを賜酺といふ。[出典] 漢書文帝紀に、賜酺五日と。注に、漢律三人以上無故聚飲酒、罰金四兩、今詔橫賜、得令尊酒五日、師古曰、王德布於天下、而合聚飲食爲酺。

墓

【墓所】 [熟語] ハカバなり。[出典] 後漢書蔡順傳に、差車馬到墓所と。又た晉書王裒傳に、旦夕常至墓所拜跪。

【墓祭】 [熟語] 死者の墓に就いて祭りをすることをいふ。[出典] 史記樂書に、三代

以前未有墓祭、至秦始出墾起於墓側、漢因秦制、上陵培有園寢。【補】禮記曾子問篇に、宗子去在他國、庶子無爵而居者、望墓而爲墳、以時祭、若宗子死、告於墓而後祭於家。○文獻通考卷九十七に、唐元和十四年、武元衡議曰、韓皐引漢官儀、古不墓祭、臣案周禮家人之職、凡祭墓則爲之尸、古亦墓祭、但與漢家陵寢不同耳、安得謂之無禮。

【墓表】 【補】文體の名。【出】文體明辯に、墓表自東漢始、安帝元初元年、立識者景君墓表、厥後因之、其文體與碑碣同、有官無官皆可用、非若碑碣之有等級與制也、以其樹于神道、故又稱神道表、其爲文、有正有變、銘而辭之、又取阡表隧之靈表、以附于篇、則迎流而窮源也、著阡墓道也、殯者未葬者姑死之稱、自殯而葬、自墓而阡也、近世用墓表、故以墓表括之。

【封墓】 【補】荒れたる墓を修繕すること。【出】書經武成篇に、釋箕子囚、封比干墓。

【上墓】 ハの部上墓ハカを見よ。

【墓誌銘】 【補】文體の名。【出】文體明辯に、按、誌者、記也、銘者、名也、古之人有德善功烈可名於世、或則後人爲之鑄器以銘、而伸傳於無窮、若蔡中郎集所載朱公叔鼎銘是已、至漢杜子夏始勒文埋墓側、遂有墓誌、後人因之、蓋於葬時、述其人世系名字閥里行治壽年卒葬日月與其子孫之大略、勒石加蓋、埋于壙前三尺之地、以爲異時陵谷變遷之防、而謂之誌銘、其用意深遠、而於古意無害也、始夫宋洸、乃有假手文士、以謂可以信今傳後、而潤飾太過者、亦往往有之、則不肖背徇人以情也、至論其題、則有曰墓誌銘、有誌有銘者是也、曰墓誌銘并序、有序者是也、然云誌銘、而或有誌無銘、或有銘無誌者、則體也、曰墓誌、則有誌而無銘、曰墓銘、則有銘而無誌、然亦有單云誌而卻有銘、單云銘而卻有誌者、有題云誌而卻是銘、題云銘而卻是誌者、皆別體也、其末、葬而繼曆者、曰續誌、曰後誌、或于他所而葬者曰遷祔誌、蔣籍誌、葬于他所而後遷者曰遷祔誌、蔣曰墓碑銘、曾於水版、者曰墳版文、曰墓版文、又有曰葬誌、曰誌文、曰墳記、曰壙誌、曰壙銘、曰塔銘、曰塔記、凡二十題、或有誌無銘、皆誌銘之別題也、其爲文、則有正體二體、正體唯叙事實、變體則因叙事而加議論、爲又有純用也字、爲節段者、有虛作誌文而銘內始叙事者、亦變體也、若夫銘之爲體、則有三言、四言、七言、雜言、散文、有中用也字者、有末用也字者、其用韻、有一句用韻者、有兩句用韻者、有三句用韻者、有間用韻而末無韻者、有前無韻而末用韻者、有篇中既用韻而章內又各自用韻者、有隔句用韻者、有韻在語辭上者、有一字隔句重用自爲韻者、有全不用韻者、其更韻有兩句一更者、有四句一更者、有數句一更者、有全篇不更者、皆雜出於各篇之中、難以例列、故今錄文段、以備。

【墓碣文】 【補】文體の名。【出】文體明辯に、按、潘尼作、潘實門碣、則碣之作、自晉始也、唐碣制、方趺圓首、五品以下官用之、而近世復有高廣之等、則其制益密矣、古者碑之與碣、本相通用、後世乃以官階之故而別其名、其實無大異也、其爲文、與碑相類、而有銘無銘、惟人所爲、故其題有曰碣銘、有曰碣、有曰碣頌并序、皆碣體也、至於墓誌、卻亦稱誌銘之不可或缺者、銘而卻無銘、則亦稱誌銘之不可爲無銘也、其文有正變二體、其銘與頌亦與誌同、說見墓碑條下。

【墓碑文】 【補】文體の名。【出】文體明辯に、按、古葬有無碑、以木爲之、植于棺之前後、窆、其中爲鹿盧、而貫繩以寢始到、死者功業、于其上、稱改用石、則劉勰所謂自漢而徂、墳者也、晉宋間始稱神道碑、蓋堪輿家以東南爲神道、碑立其地、因名焉、唐碑制、龜趺螭首、五品以上官用之、而近世高廣各有等差、則制之害也、蓋葬者既爲誌、以藏、諸幽、又爲碑碣表、以揭、於外、皆孝子慈孫、不忍、沒、先德之心也、其爲體有、文有銘、又或有序、而其銘或謂之歌、或謂之系、或謂之頌、要之皆銘也、文與誌大略相似、而稱加詳焉、故亦有正變二體、其或曰碑或曰碑文、或

曰墓碑、或曰神道碑、或曰神道碑文、或曰墓神道碑、或曰神道碑銘、或曰神道碑銘并序、或曰碑頌、皆別題也、至於釋老之碑、亦得立碑、以僭擬乎品官、豈歷代相沿崇尚之興歟、而其之禁歟、故或直曰碑、或曰碑銘、或曰碑銘并序、或曰碑銘并序、或曰塔碑銘并序、或曰塔碑銘并序、亦別題也、若夫銘之爲體、與其用韻、則諸集所載、雖不能如誌銘之備、而大略亦相通焉、此不復著。

【墓木已拱】 【補】拱は兩手合せ持つなり、墓に栽えたる木、長じて一拱の大さに至るは、死して久しきを經るをいふ。即ち秦の穆公が、人をして孟明に謂はしめたる語にて、汝をして中壽にして既に死せしめば、汝の墓の木は今殆んど、一拱の大さに至らんと、その過老にして死せざるを嘲るなり。【出】左傳僖公三十二年に、召孟明西乞白乙、使出師於東門之外、蹇叔哭之曰、孟子、吾見師之出、而不見其入也、公使謂之曰、爾何知、中壽爾墓之木拱矣。【補】穀梁傳僖公三十三年に、秦伯將襲鄭、百里子與蹇叔子諫曰、千里而襲人未有不亡者也、秦伯曰、子之家木已拱矣、何知。

【模】 【補】黄帝の妾にして醜婦なり。【出】墓文に、嫫母醜人也、黄帝愛幸之。

【鋪】 【補】敷き衍べ張り大にする義なり。【出】文心雕龍に、頌須鋪張揚厲、而以典雅豐縟爲貴。

【鋪張】 【補】日暮の空ないふ。【出】杜荀鶴の題新雁詩に、暮天新雁起、

【暮天】

【暮】

【暮山】 【補】日暮の山色をいふ。【出】王勃の滕王閣記に、潦水盡而寒潭清、煙光凝而暮山紫。

【暮雲】 【補】グレガタの雲。【出】杜甫の薄游詩に、遙空秋雁誠、半嶺暮雲長。

【暮景】 【補】日暮の景色をいふ。【出】劉禹錫の送李舜詩に、暮景巴蜀餘、春風江漢清。

【暮煙】 【補】暮方の烟をいふ。【出】劉禹錫の鶴夜對月詩に、海門雙鶴夜、煙歇萬頃金波涵明月、と。又た殷堯藩の送沈亞之詩に、暮烟葉葉晨、秋月竹枝歌。

【暮風】 【補】暮方に吹く風をいふ。【出】郭璞の九華山の詩に、暮風飄送當軒色、曉霧斜飛入檻煙。

【暮雨】 【補】暮方に降る雨をいふ。【出】儲光羲の秦中の詩に、渭水牧暮雨、處處多新潭、と。又た杜牧の題投靈智寺詩に、古廟陰風地、寒鐘暮雨天。

【暮霞】 【補】日暮にたなびく霞をいふ。【出】劉禹錫の曉泛漢江詩に、雨過遠山出、江澄暮霞生、と。又た同人の秋江晚泊詩に、暮霞千萬狀、賓鴻次第飛。

【暮雪】 【補】暮方の雪をいふ。【出】沈約の桐賦に、枝封暮雪、葉映雲虹、と。又た臭市曾の詩に、返照寒川滿、平田暮雪空。

【暮靄】 【補】暮方のモヤをいふ。【出】顧陶の題士誌に、晨煙暮靄、春煦秋陰、と。又た杜牧の題揚州詩に、暮靄生深樹、斜陽下小樓。

【暮世】 【補】末の世をいふ。【出】素問に、暮世之治、病也不然、治不本四時、不知日月不養、逆從、

【暮歲】 【補】年の暮をいふ。【出】魏書李諧傳に、迫玄冬之暮歲、歷關山之遐阻、風激沙而破石、雪浮河而漫野、

【暮年】 【補】老年をいふ、晩年に同じ。【出】宋書范泰傳に、暮年事佛甚精、と。又た魏武帝の詩に、烈士暮年、壯心不已。

【暮春】 【補】春の暮れなり、陰曆の三月をいふ。【出】詩經大雅臣工篇に、嗟嗟保介、維暮之春、亦又何求、如何新畬、と。又た論語先進篇に、暮春者、春服既成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、詠而歸。

【暮秋】 【補】秋の暮れなり。陰曆の九月をいふ。【出】曹植の迷迭香賦に、方暮秋之國蘭、麗見嘗之芝英、と。又た杜牧の晚泊詩に、蓬雨延鄉夢、江風阻暮秋。

【暮冬】 【補】冬の暮れなり、陰曆の十二月をいふ。【出】魏書彭城王勰傳に、歲月易遷、便迫暮冬、每思聞道、泰承風教。

【暮鐘】 【補】日暮の鐘の音をいふ、晩鐘に同じ。【出】韋應物の淮上即事の詩に、秋山起暮鐘、楚雨連滄海、と。又た朱熹の詩に、詩、書清磬外、看雨暮鐘時。

【暮夜】 【補】夜に入りたる時をいふ。【出】後漢書楊震傳に、王密爲昌邑令、謁見、至夜、懷金十斤、以遺楊震、震曰、故人知君、君不知故人、何也、密曰、暮夜無知者、震曰、天知、神知、我知、子知、何

謂無知、密愧而出。

【暮樓】（ボロウ）　黒表夕方の樓上の眺望をいふ。出典李商隱の潭州詩に、潭州官舍暮樓空、今古無端入望中。

【暮帆】（ボハン）　黒表日暮に帆をかけて行く舟のこと。出典李頎の題秦母校書別業詩に、行客暮帆遠、主人庭樹秋と。又た杜甫の游子詩に、九江春草外、三峽暮帆前。

【暮笳】（ボカ）　黒表日暮に吹く胡笳の聲をいふ。出典劉長卿の代邊將有懷詩に、暮笳吹寒月、曉甲帶朝霜。

【暮鼓】（ボコ）　黒表暮方に大鼓を打ち時を報ずること。出典王貞白の長安道の詩に、曉鼓人已行、暮鼓人未息と、又た李咸用の詩に、朝鐘暮鼓不到耳、明月孤雲長挂衾。

【暮角】（ボカク）　黒表暮方に角といふ笛を吹く聲のこと。出典敬叔淳倫の詩に、暮角發高城、情人坐中起と。又た方干の詩に、暮角梅花怨、游江桂影寒。

【暮鴉】（ボア）　黒表暮方の鴉をいふ。出典高適の詩に、眞成獨坐空憂、首門柳蕭蕭噪暮鴉と。又た景審の詩に、暮鴉不噪禁城樹、衙鼓未殘兵衛秋。

【暮鶯】（ボアウ）　黒表暮方に鳴くウグヒスのこと。出典唐彥謙の詩に、游客寂寥鍵遠恨、暮鶯啼叫惜芳時。

【暮蟬】（ボセン）　黒表暮方に鳴く蟬をいふ。出典王維の詩に、倚杖柴門外、臨風聽暮蟬と。又た賈島の詩に、幽深足暮蟬、驚覺石牀眠。

【暮色】（ボシヨク）　黒表夕暮の景色ばむことをいふ。出典柳宗元の始得西山宴游記に、蒼然暮色自遠而至と。又た李嘉祐の詩に、暮色催人別、秋風待雨寒。

【暮志】（ボシ）　黒表晚年の志望をいふ。出典齊書に、豫章王、性不貪榮、自幼所懷敦、欲以汝兄弟累多、損香暮志耳。

【暮思】（ボシ）　黒表夕暮に思ひかなしむこと。出典劉長卿の詩に、帝子不可見、秋風來暮思。

【暮砧】（ボチン）　黒表日暮頃に響くキヌタの音なり。出典杜甫の秋興八首の詩に、寒衣處處催刀尺、白帝城高急暮砧。

【暮山紫】（ボザンムラサキ）　黒表日暮の山のカスミて紫色を呈ずるをいふ。出典暮山を見よ。

【暮雲春樹】（ボウンシユンジユ）　黒表イの部渭（キ）樹江雲を見よ。

【暮春三月】（ボシユンサンゲツ）　黒表除暦三月は、春の暮れなり。出典杜甫の詩に、暮春三月日章三、

【暮雨南陵水寺鐘】（ボウウナンリヨウスイジシヨウ）　黒表明人の詩の句。出典高啓の逢吳秀才復慈歸江上詩に、江上停舟問、客蹤、佩前相別亂餘逢、暫時握手還分手、暮雨南陵水寺鐘。

【暮搨】（ボウ）　モの部葉（モ）搨を見よ。

【暮寫】（ボシヤ）　モの部摸（モ）寫を見よ。

【膜拜】（ボハイ）　モの部膜（モ）拜を見よ。

【模楷】（ボカイ）　モの部模（モ）楷を見よ。

【模範】（ボハン）　モの部模（モ）範を見よ。

【模樣】（ボヤウ）　モの部模（モ）樣を見よ。

【模糊】（ボコ）　モの部模（モ）糊を見よ。

【餔啜】（ホセツ）　黒表餔は、食なり、啜は、飲なり、に、孟子謂樂正子曰、子之從於子敖來、徒餔啜也、我不意子學古之道、而以餔啜也と。趙注に、學而不行其道、徒食飲而已、謂之餔啜也。

【簠簋蓬豆】（ホキブホウトウ）　黒表食物を盛る器なり、圓簋と曰ふ。出典漢書賈誼傳に、古者大臣有坐不廉而廢者、不謂不廉、曰簠簋不飾と。又た說文に、簠、黍稷方器也と。又た同書に、簋、黍稷方器也と。又た周禮釋器に、竹豆謂之籩と。又た說文に、豆、古食肉器也と。又た爾雅釋器に、木豆謂之豆と。又た三禮圖に、蓋圓云、外方內圓曰、簠、足高二寸、挂其四角、漆赤中、臣崇襲案、掌客注云、簠、稻粱器、又考工記、旗人爲簋及豆、皆以瓦爲之、疏、以簠是相將之器、亦應制、在旗人、亦有簠、疏云、據祭天地之神、尙質、器用陶匏、而已、故郊特牲云、器用陶匏、以象天地之性也、若祭宗廟、則皆用木爲之、今以黍寸之尺、計之、口圓徑六寸、深七寸二分、底徑亦五寸二分、厚半寸、脣寸、所盛之黍、及簋之形制、並與簋同と。又云、內方外圓曰簋、足高二寸、漆赤中、臣崇襲案、鄭注地官舍人、秋官掌客、及禮器云、圓曰簋、盛黍稷器也、方曰簠、盛黍稷器也、簠簋皆有蓋象龜形、外圓內方、以中規矩、天子飾以玉、諸侯飾以金、又案考工記、旗人爲簋、受一升二升、高一尺、厚半寸、脣寸、又以黍寸之尺、校之、口徑五寸二分、深七寸二分、底徑亦五寸二分、厚八分、足底徑六寸、又案賈疏、解舍人注云、方曰簠、圓曰簋、皆據外面言也と。又云、臣崇襲案、鄭注籩人及士虞禮云、籩以竹爲之、口有膝、緣、形制如豆、亦受四升、盛棗栗挑梅、菱芡脯脩、膴鮑糗餌之屬、有巾、案儀禮鄉射賓長尺二寸、橫於篚上と。又云舊圜云、豆高尺二寸、漆赤中、大夫已上畫赤雲氣、諸侯飾以象、天子加玉飾、皆謂飾口足也、臣崇襲案、考工記、旗人爲豆、高一尺又鄭注周禮及禮記云、豆以木爲之、受四升、口圓徑尺二寸、有蓋、盛昌本脾析豚拍之醢、豐蕡兎醢之醢、韭菁芹筍之菹、麋臡之屬、鄭注鄉射記云、豆宜濡物、籩宜乾物、故也。出典賓簋の形に就いて古來諸說一ならず左に之を揭ぐ。

傳（以上方形とす）●說文○玉篇（以上圓形とす）●孝經鄭注○經典釋文○字彙（以上內圓外方とす）

黒表 呉（薄赤色）を質とし斧文を作る。（ウの　負（フ）髮を見よ）

出典 書經顧命篇に、秋設黼扆綴衣と。又た禮記曲禮下篇に、天子當扆而立と。又た禮記學位篇に、昔者周公朝諸侯於明堂之位、天子負黼扆、南嚮而立と。又た漢書嚴助傳に、玩心神明、秉執聖道、負黼扆、馮玉几、南面而聽斷、號令天下、四海之內、莫不衆靡。

【黼黻】（ホフフツ）　黒表左傳の注に、白と黑とを黼といふ。形、斧の如し、黑と青とを黻といふ、兩己相戾ると。左傳鄭語に、黼黻名を得たるは形を以てして、色を以てせずと、袞衣繡裳に之を繪す。出典シの部十（ジフ）二章を見よ。

【黼冕】（ホベン）　黒表黼は禮服にて斧の形を畫く、冕は禮冠なり。出典後漢書に、鮑昱爲南陽太守、時鄧學久廢、其子德乃修起橫舍、備俎豆、黼冕行禮奏樂、又章憲國老、冥會諸儒、百姓觀者莫不歡服。

【黼衣】（ホイ）　黒表大禮服にて斧の模樣を畫くなり。出典漢書韋賢傳に、肅肅我顯、國自豕韋、黼衣朱舄、四牡龐龐。

【黼裳】（ホシヤウ）　黒表黼衣の下に被る裳といふ。禮服なり。出典大戴禮に、黃帝黼黻衣、乘龍屋雲、以順天地之紀、幽明之故、死生之說、存亡之難。

【黼藻】（ホサウ）　黒表斧の形や唐草の模樣なり。出典新論に、夫捧木盤根、採之製爲殿堂、以丹漆、畫爲黼藻、則百辟卿士、莫不顧盼仰視、木性然也、而昔賤今貴、良工爲之容也。

【黼繡】（ホシウ）　黒表斧の形を繡にしたるをいふ。出典漢書禮樂志に、恭承禮祀、繡黼黻爲、紛、黼繡周張、承神至尊と。又た宋史樂志に、光燭黼繡、和、流星鑾。

【簿閥】（ボバツ）　黒表朝廷の帳簿に記せられたる勳閥をいふ。出典沈約の奏彈王源に、王源見貴、窮寒、即索琅之簿閥、見

瑋之任。王國侍郎。鑾又爲王慈吳郡正閤主簿。

【簿書】 簿籍官置の錄數出納を記せる帳簿なり。出典漢書賈誼傳に、大臣特以簿書不報期會問以爲大故。

【簿責】 一一罪を責むるなり。出典史記絳侯世家に、吏簿責條侯と。又た漢書張湯傳に、使八報簿責湯。

【簿書期會】 限と期とを突き合せて租稅を取り立つるをいふ。出典漢書賈誼傳を見よ。

【丰姿】 丰は人の容貌の美麗なるをいふ。出典高啓の詩に、莫把丰姿比楊柳。

【丰丰然】 容貌の豐滿なるをいふ。出典詩經鄭風丰篇に、子之丰兮と。鄭箋に、面貌丰丰然豐滿、善人也。

【矛】 事物紀原に、世本曰、杼作矛、蚩尤作矛。蚩尤爲金鎧矛戟。呂氏春秋、蚩尤作五兵。有金有矛夷矛。則矛蚩尤所作也。

【矛戟】 長柄の兵器にて、矛はホコ、戟はエダホコなり。增韻に、雙枝爲戟、單枝爲戈とあり。出典詩經秦風無衣篇に、修我矛戟與子偕作。

【矛盾】 ムの部矛ムを見よ。

【牟】 土ナベなり。出典一次條を見よ。二禮記內則篇に、敦牟卮匜と。鄭注に、敦牟、黍稷器也と。釋文に、齊人呼土釜爲牟。

【牟然】 牛鳴也。從牛、象其聲氣從口出。出典柳宗元の牛賦に、牟然而鳴、黃鐘滿腹。

【牟首】 閨道の室屋あるものをいふ。出典史記在思の吳都賦に、長筌牟首。

【牟食】 牟は、取るなり、奪なり、食物を食り取るをいふ。出典韓非子七反篇に、牟食之民。

【芃芃】 禾苗又は草木の美しき貌。出典詩經鄘風載馳篇に、駘騤其麥と。毛傳に、麥駘騤然方盛長と。又た同書曹風下泉篇に、芃芃黍苗と。毛傳に、芃芃美貌と。又た同書小雅黍苗篇に、芃芃黍苗と。毛傳に、芃芃長大貌と。又た同書大雅棫樸篇に、芃芃棫樸と。毛傳に、芃芃木盛貌。

【抔飲】 水を掌にすくひ飲むをいふ。出典禮記檀弓篇に、汗尊而抔飲。

【泛駕之馬】 覆駕の馬、以て卓犖不羈の士に喩ふ。泛はくつがへすなり。出典漢書武帝紀に、泛駕之馬、跅弛之士、亦在御之而已。

【朋】 トモダチ、同志を朋といひ、論語公冶篇に、子路曰、願車馬衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾。

【朋友】 同門を友といふ。出典論語公冶篇に、子路曰、願車馬衣輕裘、與朋友共、敝之而無憾。

【朋黨】 同志の者をいふ。出典世範に、不可相規如朋黨。

【朋姦】 黨を組んで惡事をなすをいふ。出典管子明法篇に、外內朋黨、雖有大奸、其蔽主多矣と。又た宋史洪孝昇傳に、遙殿中侍御史、論蔡京敗壞先朝法度、朋姦誤國。

【朋黨論】 文章の篇名。出典宋の歐陽修の撰する文なり。宋史を案ずるに、仁宗時、杜衍富弼韓琦范仲淹位執政、歐陽修余靖王素蔡襄爲諫官、欲盡革弊政、共致太平。陳執中章得象王拱辰魚周詢等不悅、謀傾陷君子、首擊去館職名士十三人、杜富韓范不安、相繼去國、小人創朋黨之說、欲盡去善類、監元震進朋黨論、歐陽公爰之、既上破論、杜富韓范、皆公忠愛國、又上朋黨論、以破邪說、仁宗感悟と、これ歐陽修が此文を作りし所以を察するを得べし、又た歐陽修の子發の撰述に係る、歐陽公事狀に、自范文正公之貶、先公與余襄公等、坐黨人被逐、朋黨之說遂起、久而不能解、一時名士、皆被目爲黨人、公爲朋黨論、以歇、群言遂息、大救當時之弊といへり。

【朋升】 奎外集に、君子有朋而無黨、小人有黨而無朋、易曰、朋至斯孚、語曰、有朋自遠方來、朋者、君子之善類也、語曰、君子不黨、又曰、羣而不黨、黨者小人之凶類也、後世朋黨二字連稱、以困君子、名實皆紊矣。

【朋友講習】 朋友相須つて學識を進むるをいふ。出典易經兌卦象傳に、麗澤兌、君子以朋友講習。

【奉公】 一國家の爲めに盡力するをいふ。二租稅などを上へ差し出し、又は國家の爲に力を盡すこと。出典一後漢書蔡邕傳に、憂國奉公。二史記廉頗藺相如傳に、趙奢曰、今縱君家一而不奉公、則法削。

【奉祿】 俸は俸に同じ、秩祿なり。出典漢書公孫弘傳に、奉祿甚多と。又た同書王莽傳に、不得奉祿。

【奉行】 承けて施し行ふなり。出典漢書魏相傳に、方今務在奉行故事而已。

【奉引】 貧人の導きを爲すをいふ。出典張衡の東京賦に、牽引既畢。

【奉戴】 いたゞき、たてまつる。出典左傳襄公二十五年に、奉戴厲公。

【奉職】 官職を勤むるをいふ。出典史記循吏傳に、奉職循理、亦可以爲治、何必戚戚哉。

【奉將】 命を奉じ行ふなり、出典書經鳥征篇に、奉將天罰。

【奉書】 君主に書をタテマツルをいふ。出典宋書に、奉書而至。

【奉送】 貧人の往くを送るなり。出典白虎通に、諸侯奔王者喪、分爲三部、有始死先葬者、有中來會其哀者、有奔命奉送君者。

【奉和】 貧人の詩句を和するなり。出典李嶠、奉和幸韋嗣立山莊應制の詩あり、又た宋之問、奉和幸長安故城未央宮應制の詩あり。

【奉常】 禮式を掌る官なり。出典漢書百官表に、奉常、奉官、掌宗廟禮儀、景帝中、更名太常と。顏注に、奉常、王者之旌旗、禮官奉持之故曰奉常。

【奉禮郎】 官名にして、朝廷の禮を治るを掌る。出典事物紀原に、漢大鴻臚有治禮郎、蓋設官之始也、按通典、歷代皆爲治禮郎、唐初亦有掌設板位、執儀行事、永徽二年以諫改爲奉禮、國家撰五代史志、杜佑云、奉禮本名治禮、至永徽七年乃成、於時此官已改、故北齊及隋治禮皆爲奉禮、奉禮之名、雖見於史、其改始自永徽。

【奉朝請】 官吏にあらず、たゞ朝廷大禮の時など參會を得る者をいふ。出典晉書職官志に、奉朝請本不爲官、無員、漢東京諸三公外戚宗室諸侯多奉朝請、音、奉朝會請召而已と。又た世說德行下篇に、王僕射子恢之被召爲秘書郎、僕射爲求奉朝請、語恢之曰、秘書有限、故有錢朝請無限、故無錢、吾欲與汝處不錢之地、太祖嘉而許之と。又た云、奉朝請無員、本不爲官、奉朝會請召而已。

【俸莫】 貧人の義なり。出典揚子方言に、俸莫、强也、北燕之外郊、言努力調之俸莫。

【封建】 國土を分ち建て君と爲すをいふ。出典一詩經商頌殷武篇に、天命降監、下民有嚴、不僭不濫、不敢怠遑、命于下國、封建厥福と。又た左傳僖公二十四年に、周之有鑑、魯也、魯曰、莫如兄弟、故封建之、其懷柔天下也、魯懼有外侮、扞蔽爲者、莫如親親、故以親昵周と。又た事物紀原に、沿革曰、黃帝分州畫野、得百里之國萬區、唐虞列爲五等、此封建之始也。

【封君】 諸侯に封ぜられし君。出典五雜俎に、樊重富擬封君。

【封事】 秘密の事の泄洩せんことを恐れ、封じて上申す、故にいふ。出典漢書魏相傳に、故事諸上書者皆爲二封、署其一曰、副、領尚書者、先發、副封事、發問夜如何。

【封禪】 土を積み壇を爲くりて祭るを禪と曰ふ、古は天子巡狩して四岳に至れば、太山に封じて天を祭り、小山に禪して山川を祭る、移世は唯人主その國の盛なる中外に詩示せんが爲めに、封禪の儀式を行ふこととなれり。出典管子に、封泰山、禪梁父者七十二家と。又た事物紀原に、史記封禪書曰、封泰山、禪梁父者、七十二家、無懷氏爲之始、蓋在太昊前也、管子亦云、遙甲開山記、則太昊之後、自上古至無懷、凡十五代、乃在太昊後炎帝前也。

【封域】 一諸侯の領地をいふ。二國各守其封域。三周禮保章氏に、所封封域。

【封圻】 帝都より四方千里をいふ。康熙字典に王畿千里爲圻となす。

とあり。出典孫狄の詩に、封圻滄海合、郭市碧湖明。

【封略】ホウリャク　意義封疆に同じ。出典左傳昭公七年に、封略之内、何非君土。

【封植】ホウショク　意義諸侯を封じ植つるをいふ、封は國境に土を盛りて標識とするなり。出典書問の文に、漢楚秦之失、封植子弟。

【封人】ホウジン　意義封疆を掌り守る官。出典論語八佾篇に、儀封人請見と。又た左傳隱公元年に、潁考叔爲潁谷封人と。又た周禮地官に、封人掌設王之社壝、爲畿封而樹之。

【封守】ホウシュ　意義封域の守りなり。出典書經畢命篇に、慣固封守、以康四海。

【封傳】ホウヂン　意義今の旅行券なり。出典史記孟嘗君傳に、更封傳、變名姓、以出關と。索隱に、封傳、今之驛券也。

【封套】ホウダウ　意義書翰の上を封ずる袋なり。出典稽惠全書に、寫禀啓封套式の條あり。

【封印】ホウイン　意義封じ目へ捺したる印なり。出典世說德行上篇に、吏至、巨源、於梁上、得一鼠、已數年。塵埃封印如故と。又た晉書陶侃傳に、軍資器仗牛馬舟船、皆有定簿封印。

【封狐】ホウコ　意義大なる狐をいふ。出典楚辭招魂に、封狐千里。

【封嶠】ホウケウ　意義諸侯の領分界のツカをいふ。出典丹鉛錄に、王子年云、禹治水所穿鑿處、皆有泥封記、使玄鶴升其上、此封嶠之始、按北堂書抄引山海經、黃帝遊幸天下、有記里鼓、道疏有記里堆、則猴起黃帝、非始于禹、崔豹古今注、費、界者村、上爲臺、以表疆境也、馬融云、爲猴埒、以畫界分程也、十里雙堠、五里單堠。

【封鎖】ホウサ　意義門戶などをフウジトザスなり。出典試陽修の論史館日曆、狀に、已上事節、並令修撰官逐時旋據所得錄爲草、卷標題月、分於史院、躬親入櫃將頭、候諸司供報齊足、修爲日曆。

【封建論】ホウケンロン　意義文章の篇名。出典唐の柳宗元の文なり、唐興りてより、疏屬疎く王たり、太宗の時に至りて、名臣共に封建の事を論ず、宗元是に於て深く其の本を探り、古に據り今を驗して此論を作れり、一篇の論旨は、封建の由つて起るは、生人の初めに在りて、聖人の已むを得るに非るをいふ、而して周秦以下各代の史實を引きて之を詳論せり、通篇一個の勢の字を以て字眼とせり。

【封疆臣】ホウキャウシン　意義封疆は領分なり、臣は當に我が國に死すべし、故に封疆臣といふ。出典禮記樂記篇に、石聲磬、磬以立辨、辨以致死、君子聽金聲、則思死封疆之臣。

【封禪書】ホウゼンショ　意義封禪の事を記錄したる書なり、泰山の頂上に土を築きて高くするを封といひ、地をならして小山を廣くするを禪といふ、天地を祭る家。出典史記司馬相如傳に、相如既病免、居茂陵、天子曰、司馬相如病甚、可令悉取其書、若不然、後失之矣、使所忠往、而相如已死、家無書、問其妻、對曰、長卿未死時、爲一卷書、曰、有使者來、求書奏之、無他書、其遺札書、言封禪事、奏所忠、忠奏其書之。又た史記に、封禪の篇あり。天臨林逋の自作壽塋因書一絕、以志之の詩に、湖上青山封結廬、墳前修竹亦蕭疎、茂陵他日求遺稿、猶喜曾無封禪書。

【封豕長蛇】ホウシ　意義殘忍貪慾の人に喩ふ、封豕は大猪なり。出典左傳定公四年に、吳爲封豕長蛇、荐食上國。

【封氏聞見記】ホウシブンケンキ　意義書名。出典唐の封演撰す、この書殘缺甚し、第一卷より六卷までは多く掌故を述べ、七八の二卷は多く古迹雜論を記す、末二卷は皆唐代の軼事を載す、嘉言善行多きに居る。

【上封事稱旨】ホウジ　意義上書を封じて君に直接に差し出だすを封事といふ、それが君の意に適ひたるなり。出典舊唐書杜正倫傳に、正倫與李延壽、奏世南、姚思廉等、咸上封事、稱旨、太宗爲之設宴。

【悻悻】ホウボウ　意義愛欲の貌。出典荀子榮辱篇に、悻悻然惟利之見と。楊倞注に、悻悻、愛欲之貌、方言云、悻、愛也、宋魯之間曰悻。

【某】ボウ　意義事物又は人を泛く言ふこと。俗にナニガシ又はソレガシといふ。出典禮記少儀篇に、問品味、子食于某乎、問道藝、子習于某乎、子善于某乎、子善于某乎と。又た玉篇に、不知名者曰某と。又た韻會に臣諱君曰某。

【某甲】ボウカフ　意義其の人の名を言はずして呼ぶときにいふ。出典法華經五百弟子受記品に、說偈云、其五百比丘、次第當後、作佛、同號曰、普明轉次而授記、我滅度之後、某甲當作佛、其所化世間亦如我今日と。又た史記韓長孺傳に、蒙獄吏田甲辱安國と。田甲は、即ち田某なり。

【某年月日】ボウネンゲツジツ　意義傳碑誌等の草稿に、其の年月を略して此の如く書す。出典大戴禮に、周迎日辭に、維某年某月上日と。又た司馬法仁本篇に、某國爲不道、征之以某年月日と。又た史記蘭相如傳に、秦御史前書曰、某年月日、秦王與趙王會飲。

峰

【峰巒】ホウラン　意義山のミネなり。出典戴叔倫の偶成詩に、野水連天碧、峰巒入海青。

【峰嶺】ホウレイ　意義峰はミネ、嶺はタウゲといふ。出典魏書に、州治舊被城西北數里、有弁山、峰嶺高峻、北臨滄海、南望岱嶽、一邦游觀之地也。

【峰壑】ホウガク　意義峰とタニとをいふ。出典李白の詩に、減跡遺紛囂、終言本峰壑。

【峰色】ホウシヨク　意義峰の青青としたる色をいふ。出典杜甫の詩に、香爐峰色隱晴湖、種杏仙家近白榆。

【峰影】ホウエイ　意義峰の影の水に映ずるをいふ。出典楊師道の詩に、「口落積峰影、雲歸起夕涼。」

【峰勢】ホウセイ　意義峰の高き形をいふ。出典唐太宗の帝京篇に、橋影通漢上、峰勢接雲危と。又た李參の詩に、斧壽振石壁、峰勢如動搖。

【峰頂】ホウテウ　意義峰のイタヾキをいふ、又た寺の名なり。出典金玉詩話に、新州黃梅縣、峰頂寺在水中央、環伏萬山、人跡罕至と。又た元稹の詩に、擎蒲極峰頂、游目到江流。

【峰尖】ホウセン　意義峰のトガリたるをいふ。出典杜甫の詩に、鏡侯骨擘精爽堅、華岳峰尖見秋隼。

【峰頭】ホウトウ　意義峰のイタヾキのこと。出典簡易、直綴而下、林木勁硬、自成一家體。

【剖判】ボウハン　意義物がワカレルをいふ。出典開闢のごとし。出典韓非子解老篇に、自天地之剖判、以至于今。

【剖符】ボウフ　意義漢書類注に、孟康云、烽は米フの部剖符フを見よ。

【烽燧】ホウスイ　意義烽は薪を積めり、若し寇あらば之を燔し、燧は薪を燃き、夜は烽を擊ぐるなり。出典司馬相如の論巴蜀檄に、邊郡之士聞烽燧、皆撫弓而馳、荷戈而走と。又た漢書賈誼傳に、斥候望烽燧不得臥と。顏注に、文穎曰、邊方備寇立高土樓、樓上設桔槔、桔槔頭兜零薪、舉置其中、常低之、有寇即火然、舉之以相告曰烽、多積薪冠至即然之、以望其煙曰燧、師古曰、置四壁、夜則舉烽。

【烽煙】ホウエン　意義ノロシの煙をいふ。出典席豫の奉和聖製送張說巡邊詩に、春冬見嚴雪、朝夕候烽煙。

逢

【逢逢】ホウホウ　意義鼓の擊つ聲。出典詩經大雅靈臺篇に、鼉鼓逢逢と。又た劉禹錫の詩に、雞人一唱鼓逢逢。

【逢迎】ホウゲイ　意義逢も、亦迎ふなり、人を出迎ふこと。出典王勃の滕王閣宴集詩序に、千里逢迎、高明滿座と。又た揚子方言に、逢迎、遮也、自關而西、或曰迎、或曰逢。

【逢衣】ホウイ　意義次條に同じ。出典荀子儒效篇及び莊子盜跖篇に、逢衣淺帶と。又た列子黃帝篇に、丈人曰、汝逢衣徒也、亦何知、問是乎、修汝所以而後載言其上。

【逢掖衣】ホウエキイ　意義逢は猶ほ大の如し、掖は衣の旋なり、儒者の服をいふ。出典禮記儒行篇に、孔子對哀公曰、丘少居魯衣逢掖之衣、長居宋、冠章甫之冠。丘は孔子の名。

【逢門子】ホウモンシ　意義古の善く弓を射る人。出典王褒の聖主得賢臣頌に、逢門子、彎烏號。孟子離婁下篇に、逢蒙學射於羿と。荀子王霸篇に、人主欲得善射、遠中微、則莫若羿逢門矣と。この逢門子に同じ。

【逢蒙善射不能用不調之弓】ホウ　意義行事は先づその準備を要する義なり。出典劉子新論に、逢蒙善射、不能用不調之弓、造父善御、不能策不服之馬、皎僥善鬬、不能用不利之斧、孫吳善戰、不能戰不習之卒。

捧

【捧讀】（ホウドク）　貴人の書を手にサヽゲ持ちて讀むなり。〔中興〕柳宗元の謝二李夷簡一書に、季幼清傳示二尚書委典一、幹賜二記傑、過蒙二存問一、捧讀喜懼、浪然涕流、慶幸之深、出レ自二望外一。

【捧腹】（ホウフク）　大に笑ふ形容なり。〔中興〕史記日者傳に、司馬季主捧レ腹大笑。

【捧腹絶倒】　捧腹は前條參倒はセの部絶二セツ一倒の一を見よ。

崩

【崩】（ホウ）　天子の死するなり。山岳のクヅルに比していふ。〔中興〕禮記曲禮下篇に、天子死曰レ崩、諸侯曰レ薨、大夫曰レ卒、士曰二不祿一、庶人曰レ死と。鄭玄注に、自上顛壞曰レ崩、薨、顛壞之聲、卒、終也、不祿、不レ終二其祿一、死之言漸也、精神漸盡也。

部

【部婁】（ホウロウ）　十四年に、鄭大叔曰、部婁無二松柏一。

培

【培塿】（ホウロウ）　前條に同じ。

掊

【掊克】（ボウコク）　自ら伐りて、人に勝つことを好むなり。一說に好みて聚斂し、能く人を害するをいふ。〔中興〕詩經大雅蕩篇に、曾是彊禦、曾是在位、曾是在服と。又た孟子告子下篇に、掊克在レ位、則有レ讓と。讓は責なり。

眸

【眸子】（ボウシ）　〔中興〕孟子離婁上篇に、孟子曰、存二乎人一者、莫レ良二於眸子一、眸子不レ能レ掩二其惡一。〔中興〕詩經大雅板篇草木の茂る貌。〔中興〕詩經大雅板篇阿篇に、「蓁蓁萋萋」。

三　蓁

【蓁蓁】（ホウホウ）　雅板篇に同じ。

琫

【琫瑳】（ホウヒツ）　佩刀の飾り、琫は、サヤのかざり、瑳はおもかざりと訓ず。

幇

【幇】（ホウ）　〔中興〕英書王莽傳に、瑪瑙瑳と。顏注に、玉廉曰、瑪玉名也、佩刀之飾、上曰琫、下曰瑳。〔中興〕六書故に、「幇、裨帖なり、省きて幇に作る、凡そ事物旁取する者皆幇といふ、字彙に、襯幇綽腹を沾むるなりと」いへり、助け補ふ義なり。〔中興〕傳習錄卷上に、顏子是箇克己向レ裏德上用レ心的人、孔子恐二其外面末節或有一疎略一、故就二他不レ足數一幇襯說。

【幇閒】（ホウカン）　男子にして酒閒に侍するもの、邦俗之を太鼓持といふ。〔中興〕雜纂三綴に、必不來、五二子弟窮殺遮幇閒一と。又た水滸傳第一回に、只在二東京城裏城外一幇閒と。又云、卻是箇幇閒的破落戶。

貿

【貿貿】（ボウボウ）　頭を垂れ氣を喪ふ貌。一解に目明らかならざる貌。〔中興〕禮記檀弓下篇に、有二餘者一、蒙二袂輯一、屨二貿貿一然來。〔中興〕呂覽高誘注に、此文を引いて瞀瞀然來に作る。

【貿易】（ボウエキ）　交易といふが如し、貿も亦易なり。〔中興〕史記貨殖傳に、以物相貿易。

【貿首之讐】（ボウシュ）　深き讐をいふ、貿は易なり、首を易へ取らんと欲するの意なり。〔中興〕戰國策に、甘茂與二樗里子一貿首之讐也。

三　蜂

【蜂王】（ホウワウ）　蜂の中の王をいふ。〔中興〕禮記雅翼に、蜂以二千百數一、中有二大者一、爲レ王、群蜂皆之從二其所一住。

【蜂巢】（ホウソウ）　蜂の巢なり。〔中興〕白居易の詩に、「蜂巢與二蟻穴一、區分有二君臣一。」〔中興〕荀悅本草に、蜂房有レ四、一名二草蜂窠一、二名二石蜂窠一、三名二獨蜂窠一、四名二草蜂窠一、入レ藥、以二草蜂窠一爲レ勝。

【蜂黃】（ホウクワウ）　蜂の體にある黃色の粉の如きものをいふ。〔中興〕白樂天詩、部郎尤良樂二侍兒一、柔姿宮粉、有二蜂粉蜂黃花蕊玉蘂之號一。又た李商隱の早梅の詩に、何處拂レ胸香二蜂粉一、幾時塗レ額畫二蜂黃一。

【蜂衙】（ホウガ）　蜜蜂、蜂を箱中に作り。朝夕衙は兵卒が軍門に立て守る義なり、蜂を兵卒に譬へていふ。〔中興〕陸龜蒙詩、蜂有二兩衙一、潮レ潮。又た陸游の詩に、勿二回蟻戰一、放二蜂衙一。

【蜂起】（ホウキ）　蜂の群り起るが如く、諸處に兵亂の興るをいふ。〔中興〕史記項羽紀に、楚蜂起之將皆爭附レ君者、以君世世楚將爲二能復立一楚之後也と。又た賈誼の過秦論に、豪傑蜂起と。蠭は蜂の古字なり。（蠭、ホウ）氣を參看せよ。〔中興〕蜂起の語あり。シの部貧（シヤウ）試を見よ。

【蜂出】（ホウシュツ）　蜂の如く群がり出づるをいふ。〔中興〕史記六國表に、「燔稱蜂出、誓盟不レ信。」

【蜂來】（ホウライ）　〔中興〕蜂の如く人の多く來ること。〔中興〕沈約の樂鼓吹曲に、蜂從、旌旗紛載。

【蜂屯】（ホウトン）　蜂の嘯聚するをいふ。〔中興〕韓愈の送二鄭尚書一序に、蜂屯蟻聚、不レ可二爬梳一。

【蜂腰】（ホウエウ）　〔中興〕樂の沈約の詩格八病の一にして、作詩上に忌むべきことな

り、一句五字の中、第二字第五字、上去入を同ふするもの、遠與二君別者一の句、與と者と并に上聲なり、これを蜂腰といふ。〔中興〕詩格に、沈約云、詩有二八病一、謂二平頭・上尾・蜂腰・鶴膝・大韻・旁紐・正紐一。

【蜂腰體】（ホウエウタイ）　〔中興〕律詩の後聯にのみ對を取りて、前聯は對せざるものをいふ。〔中興〕文體明辯に、凡頷聯不二對一、卻以二十字一叙二一事一、而寔與二首二句一相貫、至二頸聯一方到者、謂二之蜂腰體一、言已斷而復續一也。

【蜂房水渦】（ホウボウスイカ）　蜂の巢の如く、水のウズの如しとて、物の多く集合するをいふ。〔中興〕杜牧の阿房宮賦に、蜂房水渦、蓋不レ知二其幾千萬落一。

【蜂準長目】（ホウセツチヤウモク）　蜂の如き鼻柱にして、目の長きをいふ。準音セツ。〔中興〕史記秦始皇紀に、尉繚曰、秦王爲レ人蜂準長目、鷙鳥膺、豺聲、少レ恩而虎狼心、居レ約易二出人下一、得レ志亦輕食レ人。

【蜂蝶隨香】（ホウチヤウ）　蜂や蝶が香氣に隨ふて來るをいふ。〔中興〕開元天寶遺事に、天寶間、都中名妓、楚蓮香、國色無雙、「每レ出、則蜂蝶相隨、蓋慕二其香一也。」

【蜂蠆作二於懷袖一】（ホウタイ）　ハチやサソリが懷袖の間より出れば、勇夫も之れを驚くをいふ。〔中興〕晉書劉毅傳に、猛獸在レ田、荷レ戈而出、凡人能之、蜂蠆作二於懷袖一、勇夫爲レ之驚駭、出二於意外一故也。

封

【蜂房不レ容鵠卵】（ホウ）　〔中興〕蜂の巢の穴には、鵠の卵を入れ難しとて、小なるものは大なるものを包容する能はざるをいふ。〔中興〕淮南子に、蜂房不レ容二鵠卵一、小形不レ足二以包一大體一。

【葑】（ホウ）　草の名。コモ、マコモなり。〔中興〕宋史に、臨安守臣言、西湖目佃侵多、葑茂蔓延、西南一帶、已成二平陸一、而湖之民、每以二葑草圍裹一、種二植荷花一、號菱湖、菱之民、每レ年割而資與レ人、有レ任二浙中官一、方視レ事、民訴失二疏圃一、謀二其朕一、乃葑圃爲レ人所レ竊、以小舟撐引而去と。又た楊慎集に、「葑田、江淮以南有レ之、淮南子大旱葑、卽蒔生、歲久浮二於水上一、根最繁而蓊糾結、以土泥著上、刈去其莫、枯時以火燎、便可二耕種一、吳國圃十三州志云、百尋橫南有二菰田一、架田、卽葑田、以二木縛一、架爲曲、田浮二水面一、以二葑泥一附二木上一、而成二田一、其田隨レ水上下、故南方有二盜田之歌一也と。」

【封田】（ホウデン）　して泥土に化し、輻員數尺となれば、その上に蔬稻を種うるを得、之を葑田といふ、常に水中に浮べり。〔中興〕宋史蘇軾傳に、西湖水多レ葑、自唐及二錢氏一、蔬圃浚治、宋興廢之、「葑積爲レ田、水無二幾矣一、軾奏葑田積二湖中一、南北徑三十里、爲二長堤一、以通二行者一」と。又た皇朝類苑に、楊文公談苑を引て曰、兩浙有二葑田一、蓋湖上葑之相結、積レ久厚至二尺餘一、潤沃葑殖蔬種レ稻、或割而資與レ人、有レ任二浙中官一、方視レ事、民訴失二疏圃一、謀二其朕一、乃葑圃爲レ人所レ竊、以小舟撐引而去と。又た楊慎集に、「葑田、江淮以南有レ之、淮南子大旱葑、卽蒔生、歲久浮二於水上一、根最繁而蓊糾結、以土泥著上、刈去其莫、枯時以火燎、便可二耕種一、吳國圃十三州志云、百尋橫南有二菰田一、架田、卽葑田、以二木縛一、架爲曲、田浮二水面一、以二葑泥一附二木上一、而成二田一、其田隨レ水上下、故南方有二盜田之歌一也と。」又た雙鹿談に、太平縣龍門鄉黃金塢有二浮田一、計黑壤三百餘畝、若二萍鋪一水面、隨レ水升降、錢之、俱動、割之、厚不レ過二數寸一、其下清冷莫測、旁有二定土一、不レ浮、百數十畝、鬼遶之、自稱麥稔外、自生二草塞一、童稚携レ筐歛之、日可二得二斗米一、香美異常。〔中興〕葑田と名くる所以數說あり、廣韻に、葑、方用切、菰（マコモ）根也、今江東有二葑田一、又た晉書音義に、菰草叢生、其根盤結、名曰二葑田一と。これ菰の根が聚りて田となるといふ。夫に史炤の釋文の胡三省の注に、葑音封、深有二淺一、牛者一、此田又不レ產二菰根一といひ、菰也、亦謂二之蔓菁一、江東葑田、乃是葑泥、其蔓菁（カブラナ）の積りて化せるものとす。安井息軒翁は、葑を以て蚌封の會意とせり。（讀書餘適の田羽の浮島を記せる處にあり）是れ又た一說なり。又た村瀨栲亭の齒苑日涉にも葑田の話を揭げたり、文長ければ玆には略す。

【采葑采菲無以下體】（ホウ）　〔中興〕葑菲（カブラ）なり、根莖皆食ふべしと雖も、其根は時に美惡あり、故に葑菲を采る者は、其根の惡きを以て其莖の美を棄つべからざるなり、一局部の惡の爲めに、全部の善を棄つ可らざるをいふ。〔中興〕詩經邶風谷風篇に、采レ葑采レ菲、無以下體、德音莫違、及爾同死。〔中興〕左傳僖公三十三年に、臼季曰、詩曰、采レ葑、采レ菲、無以下體、君取二節焉一可也と。杜注に、此菜上善下惡、食レ之者、不レ以二其惡一而棄二其善一、言可取二其美節一。

〔一四〕 鳳

【鳳凰】（ホウワウ）〔意義〕靈瑞なる鳥の名なり。〔出處〕山海經南山經に、五采而文、名曰二鳳皇一と。又た詩經大雅卷阿篇の毛傳に、鳳凰靈瑞神鳥也。又云、雄曰レ鳳、雌曰レ凰と。又た韻會に、雄曰レ鳳、雌曰レ凰、古詩、鳳兮鳳兮、求二其凰一。〔附記〕左傳雕題に、凰は鳥の王なり、故に之に加ふるに皇の字を以てするのみ、故に古、凰の字なし。

【鳳曆】（ホウレキ）〔意義〕コヨミなり、鳳は能く天時を知る、故に名く。〔出處〕左傳昭公十七年に、少皞摯之立也、鳳鳥適至、故紀二於鳥一、鳳鳥氏歷正也と。杜注に、鳳は天時を知る、故に以て歷正の官に名づく。〔用例〕杜甫の上二韋左相一詩に、鳳曆軒轅紀、龍飛四十春。

【鳳詔】（ホウセウ）〔意義〕後趙の時、木にて鳳皇を作り、その口より詔書を出せし故事により、詔書を鳳詔といふ。〔出處〕鄴中記に、石季龍（後趙主）與二皇后一在二觀上一、爲二詔書五色紙一、著二鳳口中一、鳳旣銜レ詔、侍人放二數百丈緋繩一、轆轤回轉鳳凰飛下、謂二之鳳詔一、鳳凰以レ木作レ之、五色漆畫、味脚皆用レ金。

【鳳城】（ホウジヤウ）〔意義〕宮城をいふ。〔出處〕王維の早朝の詩に、柳暗百花明春深五鳳城。

【鳳闕】（ホウケツ）〔意義〕禁門なり、兩觀の闕の上に、銅の鳳皇を棲ましむ、故にいふ。〔出處〕漢書郊祀志に、鳳闕高二十餘丈と。又た班固の西都賦に、設二璧門之鳳闕一、上二觚稜一而棲二金爵一。

【鳳門】（ホウモン）〔意義〕前條に同じ。〔出處〕洛陽記に、鳳凰門、五層樓、去レ地三十丈、安二金鳳皇二頭一。

【鳳閣】（ホウカク）〔意義〕中書省をいふ。〔出處〕唐書百官志に、光宅元年、改二中書省一曰二鳳閣一と。又た謝靈運の詩に、朝游登二鳳閣一、日暮集二華沼一。

【鳳池】（ホウチ）〔意義〕中書省の異稱なり、中書省は樞近の地に在り、故に鳳凰池と云ひ、又約して鳳池と云ふ。〔出處〕晉書荀勗傳に、勗久在二中書一、專管二機事一、反爲二尚書令一、甚悯悵悵、或有レ賀レ之者一、勗曰、奪二我鳳凰池一、諸君賀レ我耶と。又た李白の詩に、君登二鳳池一去、忽棄二賈生才一。

【鳳樓】（ホウロウ）〔意義〕美しき樓をいふ。〔出處〕鮑昭の詩に、鳳樓十二重、四戶八綺窗、と。又た江總の詩に、來時兎月照、去後鳳樓空。

【鳳臺】（ホウタイ）〔意義〕簫史が簫を吹き居りし臺なり、簫史は後ち鳳に乘りて天に昇れりといふ。〔出處〕鮑昭の升天行に、鳳臺無二還駕一、簫管有二遺聲一。

【鳳苑】（ホウエン）〔意義〕宮中の花園をいふ。〔出處〕唐書百官志に、武后置二仗內六閑一、三曰二鳳苑一と。又た陳翊の詩に、靑春光二鳳苑一、細草遍二龍池一。

【鳳甍】（ホウメウ）〔意義〕鳳凰の形を作せる瓦なり。〔出處〕盧照鄰の長安古意に、復過交窗作二合歡一、雙闕連甍垂二鳳翼一。

【鳳團】（ホウダン）〔意義〕上茶の名なり。〔出處〕石林燕語に、建州歲貢二大瀧鳳團茶一、仁宗時蔡君謨擇二茶之精者一、爲二小龍團十斤一以獻。

【鳳餅】（ホウベイ）〔意義〕前條に同じ。〔出處〕大觀茶論に、本朝之興、歲修二建溪之貢一、龍團鳳餅、名冠二天下一、而壑源之品、亦自レ此而盛。

【鳳吟】（ホウギン）〔意義〕竹の聲を鳳の鳴く聲に比していふ。〔出處〕吳筠の竹賦に、上點點以雲翳、下泠泠而鳳吟。

【鳳車】（ホウシヤ）〔意義〕㊀天子の車をいふ。㊁蝶の異稱。〔出處〕㊀漢官鹵簿圖に、乘輿大駕、則御二鳳凰車一、以二金根一爲レ列。㊁古今注に、蛺蝶一名二鳳車一。

【鳳駕】（ホウガ）〔意義〕天子の車をいふ。〔出處〕竇希玠の奉三和九日幸二臨渭亭一登レ高應制詩に、鑾輿巡二上苑一、鳳駕歇二層城一。

【鳳輦】（ホウレン）〔意義〕前條に同じ。〔出處〕通典に、唐輦有レ七、一曰二大鳳輦一、前世無レ文、疑唐所レ造也、今止曰二鳳輦一。

【鳳兒】（ホウジ）〔意義〕鳳凰の子なり、良き小兒をいふ。〔出處〕指月錄に、龍生二龍子一、鳳生二鳳兒一と。又た庾信の折楊柳に、可レ憐巢裏鳳凰兒、無レ故當年生二別離一。

【鳳種】（ホウシユ）〔意義〕鳳凰の種族なり。〔出處〕抱朴子に、古者太平之世、鳳凰常居二其國一、而生乳、至二夏后一、始食レ卵而鳳去レ之、此則鳳有レ種矣。

【鳳胎】（ホウタイ）〔意義〕鳳凰の孕み子をいふ。〔出處〕玉壺淸話に、太宗問二蘇易簡一曰、食何品何物最珍、對曰、上界仙厨、鸞脯鳳胎、殆恐不レ及。

【鳳占】（ホウセン）〔意義〕婚姻の成るをいふ。〔出處〕江總の皇太子太學講碑に、重華讓レ齊、與二子太庭之野一、敬仲繼業、盛矣鳴鳳之占。〔原據〕左傳莊公二十二年、初懿氏卜レ妻二敬仲一、其妻占レ之、曰、吉、是謂二鳳皇于飛、和鳴鏘鏘、有媯之後、將レ育二於姜一、五世其昌、

竝二於正卿一、八世之後、莫二之與京一と。杜注に、懿氏、大夫、雄曰レ鳳、雌曰レ皇、雄雌俱飛、相和而鳴、鏘鏘然、猶二敬仲夫妻、相隨適一レ齊、有二聲譽一、媯、陳姓、姜、齊姓。

【鳳德】（ホウトク）〔意義〕聖人の德に喩ふ。〔出處〕論語微子篇に、鳳兮鳳兮、何德之衰と。又た晉書周顗傳に、庾亮曰、周侯末年、所レ謂鳳德之衰也。

【鳳鳴】（ホウメイ）〔意義〕鳳凰鳴くをいふ。〔出處〕漢書律歷志に、黃帝制二十二筩一、以聽二鳳之鳴一。

【鳳雛】（ホウスウ）〔意義〕鳳凰のヒヨコをいふ。〔出處〕三國蜀志裴注に、劉備訪二世事于司馬德操一、德操曰、此閒自有二伏龍鳳雛一、備問爲レ誰、曰諸葛孔明・龐士元也。

【鳳舞】（ホウブ）〔意義〕鳳凰の舞ひ遊ぶをいふ。〔出處〕易林に、龍遊鳳舞、歲樂民喜。

【鳳翥】（ホウシヨ）〔意義〕鳳の高く飛びあがるをいふ、超然たる人品に喩ふ。〔出處〕禽經に、鳳翥鸞舉、百羽從レ之と。又た田晝の祭二王和甫一文に、龍騫鳳翥、始見二偉人一。

【鳳峙】（ホウジ）〔意義〕人品の高尙なることを鳳の峙ち立るに比す。〔出處〕晉書赫連勃勃載記に、龍二飛漢南一、鳳二峙朔北一。

【鳳鸞】（ホウラン）〔意義〕鳳凰と鸞とをいふ。鸞は神鳥なり。〔出處〕全唐詩話に、十二層樓倚二翠空一、鳳鸞相對立二梧桐一。

【鳳毛】（ホウマウ）〔意義〕風采の秀美なるをいふ。〔出處〕世說容止篇に、王敬倫、風姿似レ父、作二侍中一、加二授桓公一、（温）公服從二大門一入、桓公望レ之曰、大奴固自有二鳳毛一と。劉孝標注に、劭字敬倫、丞相導第五子、大奴、劭也と。又た南齊書謝超宗傳に、謝靈運孫、超宗好レ學、有二文辭一、新安王子鸞、母殷淑儀卒、超宗作レ誄奏レ之、帝大嗟賞、曰、超宗殊有二鳳毛一、恐靈運復出。

【題鳳】（ホウ）〔意義〕人を愚弄する義なり。鳳の字を分てば凡鳥の二字となる故なり。〔出處〕世說簡傲篇に、嵆康與二呂安一善、每二一相思一、千里命レ駕、安後來、値二康不一レ在、喜出レ戶延レ之、不レ入、題二門上一作二鳳字一而去、喜不レ覺、猶以爲レ欣、鳳字凡鳥也と。劉孝標注に、嵆喜、字公穆、康兄也。〔附記〕遯齋閑覽に、李安義謁二富人鄭生一、辭以二他出一、安義於二門上一大書二午字一、爲二牛不レ出レ頭也。鳳の字、凡に从ふ、凡に从に非ず、然れども、呂安一時の戲謔のみ、必しも字源を討究せず。

【鳳凰池】（ホウワウチ）鳳池を見よ。

【鳳尾蕉】（ホウビセウ）〔意義〕植物の名。蘇鐵の異稱。〔出處〕五雜俎に、鳳尾蕉、其本麁、巨葉、四五尺、密比如二魚刺一然、高者赤丈餘、又有二番蕉一、似二鳳尾一而小、相傳從二流求一來者云、種レ之能避二火患一。

【附二鳳翼一】（ホウ）リの部攀レ龍（ヨウ）鱗附二鳳翼一を見よ。

【鳳兮鳳兮】（ホウ）〔意義〕鳳鳥は道あれば見はれ、道なければ隱る、これ孔子德ありて、隱る能はざるを譏れるなり。〔出處〕論語微子篇に、楚狂接輿歌而過二孔子一曰、鳳兮鳳兮、何德之衰、往者不レ可レ諫、來者猶可レ追、已而已而、今之從レ政者殆而。〔用例〕司馬相如の琴歌に、鳳兮鳳兮歸二故鄉一、遨二遊四海一求二其凰一。〇世說言語中篇に、鄧艾口吃、語稱二艾艾一、晉文王戲レ之曰、卿云二艾艾一、定是幾艾、對曰、鳳兮鳳兮、故是一鳳。

【鳳凰來儀】（ホウ）クの部虞（グ）舜世則鳳凰來を見よ。

【鳳凰銜レ書】（ホウ）〔意義〕天使の勅書を持ちて至るに喩へ。〔出處〕易林に、鳳凰銜レ書、元圭賜レ我、封爲二晉侯一。

【鳳凰在レ笯】（ホウ）〔意義〕賢者棄てられて民間に在るをいふ、笯はトリカゴなり。〔出處〕屈原の懷沙賦に、鳳凰在レ笯兮、雞雉翔舞。

【鳳史吹レ簫】（ホウ）セの部簫（セウ）史を見よ。

【鳳鳥不レ至】（ホウ）〔意義〕聖王興れば、鳳鳥至る、故に世に聖王のなきことを歎きていふ。〔出處〕論語子罕篇に、子曰、鳳鳥不レ至、河不レ出レ圖、吾已矣夫。

【鳳鳴二朝陽一】（ホウ）〔意義〕㊀朝陽は山の東をいふ、瑞祥なる形象なり。㊁性行の優れたる人をいふ。㊂珍らしき行あるをいふ。〔出處〕㊀詩經大雅卷阿篇に、鳳凰鳴矣、于二彼高岡一、梧桐生矣、于二彼朝陽一。㊁世說に、二陸龍二躍于江漢一、彥先鳳二鳴于朝陽一と。二陸は、陸機と陸雲となり、彥先は、晉の賀循の字なり。㊂唐書李善感傳に、自二褚遂良等死一後、群臣無二敢諫者一、李善感嘗因レ事一諫、人以爲二鳳鳴朝陽一。

【鳳鳴而鷙翰】（ホウ）〔意義〕孔子の道を學びて、蘇秦張儀の行ひを爲すをいふ。〔出處〕揚子法言淵騫篇に、或問、儀秦學二乎鬼谷術一、而習二乎縱橫言一、安二中國一、

者各十餘年、是夫、曰、詐人也、聖人惡諸、曰孔子讀而儀秦行、何如也、（李軌注に、欲ッ讀ッ伸尼之書ニ而行ッ蘇張之辯ヲ）曰其矣鳳鳴而鶚翰也、然則子貢不ル爲隙、（注に、言子貢亦行ッ游說ニ抑ッ齊破ッ吳以救ッ魯。）曰亂而不ル解、子貢恥ッ諸、數而不ッ富貴ニ、儀秦恥ッ諸。（注に、恥ッ國亂而不ッ解、於ッ義高、恥ッ游說而不ッ富貴ニ其情下。）

【鳳凰臺上鳳凰遊】 鳳凰唐人の詩の句。出處李白の登ッ金陵鳳凰臺ニ の詩に、鳳凰臺上鳳凰遊、鳳去臺空江自流、吳宮花草埋ッ幽徑ニ、晉代衣冠成ッ古丘ニ、三山半落青天外、二水分ッ白鷺洲ニ、總爲ッ浮雲能蔽ッ日ニ、長安不ル見使ッ人愁ニ。

【夢夢】 鳳凰昏目の貌。出處詩經大雅抑篇に、視ッ爾夢夢ニ、我心慘慘。

【瞀瞀然】 鳳凰昏目を低れ、謹みて視る貌。出處荀子非十二子篇に、蓬蓬然是子弟之容也と。楊倞注に、蓬蓬、不ッ敢正視ッ之貌。

【蓬蓬】 鳳凰（一）風の吹き起る貌。（二）盛なる貌。出處（一）莊子秋水篇に、蛇謂ッ風曰、今子蓬蓬然起ッ於北海ニ、蓬蓬然入ッ於南海ニ而似ッ無ッ有何也。（二）詩經小雅采薇篇に、維柞之枝、其葉蓬蓬。

【蓬勃】 鳳凰（一）雲の起る貌。（二）風の起る貌。（三）火の光の輝く貌。（四）氣の立ち起る貌。出處（一）賈誼の白雲賦に、望ッ白雲之蓬勃ッ。（三）晉書葛容傳起記に、謂曰、大風蓬勃揚塵埃ッ。（四）元稹の詩に、獨星四角光蓬勃ッ。（四）潘岳の笙賦に、鬱蓬勃出氣出。

五　蓬　夢

【蓬萊】 鳳凰仙人の住する所なり。（サの部三（サン）神山を見よ。出處楚辭遠遊篇に、奇傷ッ安期ッ之蓬萊ッ。

【蓬壺】 鳳凰拾遺記に、三壺、海中三山也、一曰方壺、則方丈也、二曰蓬壺、則蓬萊也、三曰瀛壺、則瀛洲也、形如ッ壺器ッ。

【蓬山】 鳳凰同條に同じ。出處李商隱の詩に、劉郎已恨蓬山遠、更隔ッ蓬山二萬重ッ。又た范成大の詩に、鸞背飛來紺碧浮、人間還有ッ小蓬山ッ。

【蓬丘】 鳳凰蓬萊山をいふ。出處十洲記に、蓬丘、蓬萊山是也と。又た李白の詩に、何必探ッ禹穴ッ、遊ッ海ッ蓬丘ッ。

【蓬瀛】 鳳凰蓬萊と瀛洲となり、方丈を合せて海中の三神山といふ。出處拾遺記に、昆臺之山、有ッ垂白之叟ッ、宛若ッ少童ッ、貌若ッ冰雪ッ、膚實腸輕、歷ッ蓬瀛ッ而起ッ碧海ッ。

【蓬島】 鳳凰蓬丘に同じ。出處劉長卿の登ッ東海龍興寺高頂ッ望ッ海詩に、蓬島如ッ在ッ眼ッ、羽人那可ッ逢ッ。又た趙嘏の詩に、瑤臺雪映迢迢鶴、飛島波橫浩浩津。

【蓬頭】 鳳凰（一）カの部首（カウベ）を見よ。（二）カの部首（カウベ）を見よ。

【蓬首】 鳳凰（一）カの部首（カウベ）を見よ。（二）カの部首（カウベ）を見よ。

【蓬髮】 鳳凰蓬髮の亂るゝをいふ。出處東信の文に、蓬髮鬆鬟、蔡容者朽、千甲尊夔與ッ顏遂。

【蓬心】 鳳凰いやしき小さき心をいふ。出處莊子逍遙遊篇に、今子有ッ五石之瓠ッ、何不ル慮ッ以爲ッ大樽ッ、而浮ッ于江湖ッ、而憂ッ其瓠落ッ無ッ所ッ容ッ、則夫子猶有ッ蓬之心ッ也夫。

【蓬累】 鳳凰（一）頭燈の讀書八錄に、蓬は蓬髮を謂ふ、累は傑に同じ、說文に傑は乘るゝ貌。出處史記老子傳に、君子得ッ其時ッ、則駕、不ル得ッ其時ッ、則蓬累而行。

【蓬華】 鳳凰蓬戶萬門の略語。出處論語雍也書に、自稱ッ居處ッ曰ッ蓬蓽ッ。

【蓬屋】 鳳凰草屋抔の家をいふ。出處張說の文に、變ッ蓬屋ッ令、改ッ蘭墻ッ魚鱗瓦ッ令、鳥翼堂と。又た王安石の詩に、數椽蓬屋天ッ生草ッ、三畝荒園晚種蔬。

【蓬廬】 鳳凰草葺のイホリをいふ。出處劉向の軾に、潛ッ坐蓬廬之中ッ、嚴石之下ッ と。又た曹植の文に、去ッ君子之清宇ッ、歸ッ小人之蓬廬ッ。

【蓬宇】 鳳凰草葺の軒（ノキ）をいふ。出處魏書宗欽傳に、編ッ扶蓬宇ッ、歎慨如何、不ル量ッ鄙拙ッ、頁ッ詩數韻ッ。

【蓬舍】 鳳凰草葺の小屋をいふ。出處陳陶の詩に、茫茫蓬舍下、墓ッ否鯀麟閟。

【蓬荊】 鳳凰高啓の詩に、城荒無ッ屋寘ッ來客ッ、旋乞ッ廢地ッ誅ッ蓬荊ッ。

【蓬鬢】 鳳凰蓬と麻とをいふ。出處杜甫の詩に、鬼絲附ッ蓬麻ッ、引ッ蔓故不ル長ッ と。又た孟浩然の詩に、邵平能就ッ我、閉ッ徑剪ッ蓬麻ッ。

【蓬茨】 鳳凰草葺の家をいふ。出處漢書王褒傳に、今臣辟ッ在西蜀ッ、生ッ於窮巷之中ッ、長ッ于蓬茨之下ッ、無ッ有ッ游覽廣觀之智ッ。

【蓬蒿】 鳳凰猶は草莽と言ふがごとし。出處莊子逍遙遊篇に、翱ッ翔蓬蒿之間ッ。

【蓬矢】 鳳凰蓬の莖にて造れる矢にて、邪氣を除ふをいふ。出處禮記內則篇に、射人以ッ桑弧蓬矢ッ、六射ッ天地四方ッ。

【蓬顆】 鳳凰顆は塊に同じ、土塊の義、土塊漢書賈山傳に、使ッ其後世曾不ッ得ッ蓬顆蔽ッ家而托葬ッ焉。

【蓬轉】 鳳凰蓬の根より拔けて風に轉じて飛ぶをいふ。出處呂溫蓍の詩に蓬轉星霜改、隨陰色漸遷。

【蓬征】 鳳凰蓬の轉ずるが如く、先へ先へと進むをいふ。放浪せる人をいふ。出處陸游の詩に、風裏蓬征安稅駕。

【蓬飄】 鳳凰蓬の風に飄るが如く常居なきをいふ。出處錢起の詩に、黎魄久眠蓬飄苦、遲鐘西南悲月傳。

【蓬餌】 鳳凰クサモチの類。出處西京雜記に、成夫人侍兒賈佩蘭說、在ッ宮內ッ時、九月九日、佩ッ茱萸蓬餌ッ、飲ッ菊花酒ッ、令ッ人長壽ッ。

【蓬萊弱水】 鳳凰蓬萊島は仙人の居る處にして、遠く弱水を隔てたりといふ、相隔るの遠きにいふ。出處太平廣記神仙に、獨女謝目然泛ッ海ッ、將ッ詣ッ蓬萊ッ、求ッ師、船爲ッ風飄ッ、到ッ一山ッ、見ッ道人ッ、指言天台山司馬承禎、眞良師也、蓬萊隔ッ弱水ッ三十萬里、非ッ飛仙ッ無ッ以到ッ、自然乃回、求承禎ッ受法ッ と。又た列仙傳に見ゆ、文略同じ。

【蓬戶甕牖】 鳳凰貧家の形容なり、蓬を編みて戶と爲し、敗甕の口を以て牖と爲すなり。出處莊子讓王篇に、環堵之室、茨以生草ッ、蓬戶不ル完、桑以爲ッ樞而甕牖二室、褐以爲ッ塞ッ と。又た禮記儒行篇に、儒有ッ一畝之宮、環堵之室、蓬戶甕牖ッ と。又た淮南子に、蓬戶甕牖、揉桑ッ求ッ師、船爲ッ風飄ッ、到ッ一山ッ、見ッ道人ッ、指言天台山司馬承禎、眞良師也、蓬萊隔ッ弱水ッ三十萬里、非ッ飛仙ッ無ッ以到ッ、自然乃回、求承禎ッ受法ッ と。又た列仙傳に見ゆ、文略同じ。

【蓬頭垢面】 鳳凰髮をみだして蓬のいふ。出處魏書封軌傳に、善自修潔、儀容甚偉、或曰、學士不ッ事ッ修飾、此賢何獨如ッ此、軌聞笑曰、君子譬ッ其衣冠ッ、豈ッ其蓬頭垢面然後爲ッ賢、言者慙退。

【蓬蒿沒人】 鳳凰ヨモギの高く生長して人を隱すほどなるをいふ。出處蓬の風に飄るが如く常居なきもヨモギなり。出處高士傳に、張仲蔚明天官、博物善屬ッ文、好ッ詩賦、常居ッ窮蒿、所ッ處蓬蒿沒ッ人、閉ッ門養ッ性、不ル治ッ榮名ッ。

【蓬生麻中不ル扶而直白沙在ッ涅與ッ之俱黑】 鳳凰蓬生麻中ニ不ル扶而直、白沙在ッ泥、與ッ之皆黑ッ と。又た史記三王世家に、傳曰、蓬生ッ麻中ニ不ル扶而直、白沙在ッ泥中ニ、與ッ之皆黑者、土地敎化使ッ之然ッ也。鳳凰麻中ッ說苑說叢篇には蓬中に作り、論衡には麻間に作れり。鳳凰智度論に、譬如ッ曲草生ッ於麻中ニ不ル扶自直ッ。○文選潘岳の詩に、曲蓬何以直、託ッ身依ッ蓬麻ッ。

六　鋒　盭　謀

【鋒鋩】 鳳凰刀劍の鋒をいふ。出處孟郊の詩に、慷慨丈夫志、可以肆ッ鋒鋩ッ。

【鋒起】 鳳凰鋒刄の集る如く、物の盛に立ち起るをいふ。出處シの部書（シャウ）試を見よ。鳳凰蜂（ホウ）起を見よ。

【鋒出】 鳳凰前條に同じ。出處論衡答佞篇に、權變鋒出。

【爭鋒】 鳳凰敵と鋒鋭の先を爭ふをいふ。出處史記孟嘗君世家に、憤毋ッ與ッ楚爭ッ鋒ッ と。又た同書吳王濞傳に、吳楚兵甚銳、難ッ與ッ爭ッ鋒ッ。

【盭弧先登】 鳳凰頭考叔といふ人、盭弧といふ旗を取りて先登し敵城に入りしをいふ。出處左傳隱公十一年に、鄭伐ッ許ッ、頭考叔取ッ鄭伯之旗盭弧ッ、以先登ッ と。杜注に、盭弧、旗名。

【謀猷】 鳳凰はかりごと、謀は事に切なるをいふ、猷は道に合ふをいふ。出處書經君陳篇に、斯謀斯猷、惟我后之德。

【謀主】 鳳凰參謀長なり。出處左傳昭公九年に、專案謀主。

【謀臣】 鳳凰謀略を運ッ ス臣をいふ。出處史記淮陰侯傳に、離國疏謀臣亡。

憯

【憯憯】（ボウボウ）　意義明かならざる貌。出處江淹の貽袁常侍一詩に、憯憯雲外山と。又た李參の感舊賦に、上帝憯憯英知。我寃、衆人憯憯不爲我言。

【憯慥】（ボウトウ）　意義㊀心亂るゝなり。㊁明かならざる貌。出處㊀談叢に、張龍友平生給使、一時憯慥。㊁蘇繼に、張者年嘲米元暉詩に、善畫無根樹、能描憯慥山。

賵

【賵】（ボウ）　意義死者に物を贈ること、即ち香奠なり。儀禮既夕の鄭注に、賵は主人を助けて葬を送る所以なりと、公羊傳に、車馬を賵といひ、貨物を賻といふ。出處春秋隱公元年に、歸惠公仲子之賵。

【賵弔】（ボウテウ）　意義香奠を贈りて弔ふこと。出處唐書に、帝走中人賵弔。

蓬

【蓬窓】（ホウソウ）　意義舟のトマの窓なり。出處蘇軾の詩に、蓬窓高枕南如繩。

蝨

【蝨賊】（ボウゾク）　意義良民を害する惡人に喩ふ。

【蝨賊】　蝨は苗根を害し、賊は苗節を食ふ蟲なり。出處詩經大雅桑柔篇に、降此蝨賊と。又た左傳成公十三年に、帥我蝨賊、以來蕩搖我邊疆。

繃

【繃帶】（ホウタイ）　意義布を以て物を卷き附るをいふ。出處通俗編に、以疏布蒙物曰繃。說文、繃、補盲切、引愛子禹葬會稽桐棺三寸葛以繃之。

懋

【懋遷】（ボウセン）　意義交易を勉勵する義なり、懋は、勉、遷は物の有無を遷し易ふるの義なり。出處書經益稷に、懋遷有無化居。注に懋勉其民使有於無、交易變化其所居積之化也、化貨通。

六　豐

【豐豐】（ホウホウ）　意義大いなる貌。出處宋玉の九辨に、歷羣靈之豐豐。

【豐寧】（ホウネイ）　意義豐饒安寧なり。出處道德指歸論に、鰥寡既寧、萬物豐寧、天心大稔、宇內欣欣。

【豐饒】（ホウヒウ）　意義ゆたかに多きなり。出處西唐書第五琦傳論に、民不加賦而國豐饒。

【豐富】（ホウフウ）　意義ゆたかに富めるなり。出處易經大有卦に、上九、自天祐之、吉、無不利。王弼注に、大有豐富之世也。又た詩經小雅斯干篇の疏に、民既豐富、得以生長。

【豐碑】（ホウヒ）　意義大いなる碑。出處ヒの部碑（ヒ）の五を見よ。

【豐約】（ホウヤク）　意義オホマカなると、ツヅマヤカナルとをいふ。出處甲鑒に、豐約勞佚、各有其制。

【豐功】（ホウフウ）　意義盛功、又は大功といふが如し。出處班彪の王命論に、帝王之興、必有明聖顯懿之德、豐功厚利積累之業。

【豐豔】（ホウエン）　意義美色の豐滿にして艷美なるをいふ。豔は艷に同じ、美なり。出處唐書楊貴妃傳に、貴質豐豔善歌舞。

【豐年】（ホウネン）　意義れ穀の善くできる歲。出處詩經周頌豐年篇に、豐年多黍多稻、亦有高廩と。又た公羊傳桓公三年に、大有年何、大豐年也と、注に、謂五穀皆大成熟。

【豐熟】（ホウジユク）　意義穀物の善くミノルをいふ。出處宋史食貨志に、許展耳次、料豐熟日納。

【豐稔】（ホウジン）　意義前條に同じ。出處杜光庭の麻姑洞記に、其後果豐稔。

【豐穰】（ホウジヤウ）　意義豐熟に同じ、五穀のゆたかにみのるをいふ。出處漢書食貨志に、歲歲豐穰、穀石至五錢。

【豐歉】（ホウケン）　意義五穀の豐作と不作とをいふ、歉は不滿なり。出處文中子立命篇に、仁生於歉、義生於豐と。又た宋史食貨志に、坐視六路豐歉。

【豐隆】（ホウリユウ）　意義㊀神の名にして、雷を掌る。㊁神の名にして、雲を掌る。出處㊀離騷に、吾令豐隆乘雲兮、求宓妃之所在と。王逸注に、豐隆、雲師。㊁淮南子天文訓に、季春三月、豐隆乃出、以將其雨と。高誘注に、豐隆、雷也。豐隆字又た靈隆に作る。

【豐殺】（ホウサイ）　意義ゆたかなると、ソギたるとなり。出處管子禮志に、禮典軌度、豐殺隨時。

【豐儉】（ホウケン）　意義手びろにすると、引きしめるとなり、豐約に同じ。出處晁仲之の謝「富察見」過詩に、自可隨豐儉、誰能問有無。

【豐樂】（ホウラク）　意義物豐かに民の樂む義。出處詩經大雅旱麓篇に、榛楛濟濟と。鄭箋に、周邦之民、獨豐樂者被其君德歟と。又た歐陽修の豐樂亭記に、使了民知所以安、此豐年之樂、幸生無事之時也。

【豐屋】（ホウオク）　意義大なる家。大屋に同じ。出處易經豐卦に、上六、豐其屋、蔀其家と。本義に、豐大其屋。

【豐肉】（ホウニク）　意義肉の肥へたるをいふ。出處周禮大司徒に、五日、原隰、其動物宜鳥獸、其植物宜穀物、其民豐肉而庫。

【豐上】（ホウジヤウ）　意義顴の廣くして頤（オトガヒ）の細きをいふ、貧賤の人相なり。出處張南子高誘注に、見一士焉、深目而玄鬢、誤注而寓肩、豐上而殺下、軒軒然方迎風而蟬。

【豐下】（ホウカ）　意義頤（オトガヒ）の豐大なるをいふ、富貴の人相なり。出處左傳文公元年に、王使內史叔服來會葬、魯公孫敖聞其能相人、見其二子焉、叔服曰、穀也食子、饉也敗子、穀也豐下、必有後於魯と。又た宋史文天祥傳に、天祥爲人豐下、兩目炯然。

【豐頤】（ホウイ）　意義ふとりたるオトガヒなり。出處王褒の責鞫奴文に、爾乃附以豐頤、表以蛾眉。

【豐膺】（ホウフ）　意義女の膺の柔に肥へたるをいふ。出處王粲の七釋に、豐膺曼肌、弱骨纖形。

【豐肌】（ホウキ）　意義前條に同じ。出處司馬相如の美人賦に、皓體呈露、弱骨豐肌。

【豐頰】（ホウケフ）　意義頰の肥えたるをいふ。出處韓愈の送李延壽鄭鑿谷序に、曲眉豐頰、清聲而便體、秀外而慧中。

【豐悴】（ホウスイ）　意義豐滿と憔悴となり。出處韓愈の坊者王承福傳に、抑豐悴有時、一去一來而不可管耶。

九　麤　鬚

【豐草】（ホウサウ）　意義茂草なり。出處詩經小雅湛露篇に、湛湛露斯、在彼豐草。

【豐狐】（ホウコ）　意義大いなる狐。出處莊子山木篇に、豐狐文約。

【豐衣飽食】（ホウ）　意義衣食に十分なるをいふ。出處李翰の園懷賦に、躬不田而飽食兮、妻不織而豐衣。

【豐亨豫大之運】（ホウ）　意義豐豫並に周易の卦の名なり、豐は盛、豫は樂なり、豐の卦に亨（トホル）の義あり、豫の卦に大の義あり、因て天下太平にして、豐樂の運に屬するといふこと。出處宋史に、蔡京倡邪說、以鎮當、翌亨豫運、專以奢侈導上、窮極土木之功。○易經繫辭卦の彖傳に、豐亨、王假之、勿憂宜日中。易經豐卦に、豐亨、王假之、尚大也、勿憂宜日中。

【鬚髯】（ホウゼン）　意義髮の亂るゝ貌。出處陸游の鐵論に、鬚賦省而民富足、溫衣飽食、藏陳出新、○捷言に、堂頭官人、豐衣足食、所往無不克。

【鬚髯】　詩に、傍架討尋書數帙、倚屏吟嘯鬚髯、頭髮の亂るゝより轉じて廣く他の物の亂るゝにいふ。蘇軾の詩に、數椽挺林、林疎月勝響と。又た范成大の詩に、見女强些元夕供、玉蟻先雖雪鬢鬚。

【麤眉皓髮】（ホウ）　意義麤は大なり、皓は白なり。出處張衡の思玄賦の注に、鎮調漢文帝時爲郎、至武帝時、登過郎署、見調麤眉、上問曰、叟何時爲郎、何其老也。

十　鵬

【鵬翼】（ホウヨク）　意義鵬の翼（ト）南之翼を見よ。

【鵬鷃】（ホウアン）　意義鵬はオホトリなり、鷃はコヤサイ、極めて小き鳥なり。出處李商隱の文に比衛家之一兒、天聽鵬鷃と。又た馬宥甫の賦に、鑒風鯨鯨之差、參齊鵬鷃之慎。鵬鷃莊子逍遙遊篇の大鵬と尺鷃との語に本く。

【鵬程】（ホウテイ）　意義鵬の飛ぶほどの遠き里程なり、大人の行をいふ。出處呂定の登東嶽詩に、鵬程九萬扶搖近、世界三千指顧低と。又た盧綸の詩に、龍馭人寧識、鵬程豈知。鵬の翼（ト）南之翼を見よ。

【鵬擧】（ホウキヨ）　意義大鳥の如く飛び擧るをいふ。出處曹植の賦に、希鵬擧以摶天、蹶青雲而奮翅と。又た白居易の詩に、鵬擧鵬摩天。

【鵬際】（ホウサイ）　意義遠き際限なき所をいふ。出處宋之問の詩に、宿雲鵬際落、殘月蛙中開。

【鵬背】（ホウハイ）　意義鵬のセナなり。鵬背は幾千里なるを知らずといふ。出處莊子逍遙遊篇に、鯤云云、化而爲鳥、其名爲鵬、鵬之背、不知其幾千里也、怒而飛、其翼若垂天之雲。

【鵬程萬里】（ホウ）　意義海上の鯤めて廣きを形容していふ。又た人が海外に趣くに、前程の遼遠なるにいふ。出處鵬程を見よ。

【憑沛】（ホウハイ）　意義雨の盛に降る貌なり。出處風俗通に、暴風急至、大雨憑沛、

三 蠭

【蠭生】 蜂の群り起るが如く、諸處に兵亂の興るをいふ。出典漢書中山王傳に、讒言之徒蠭生。

【蠭起】 蜂（ホウ）起を見よ

【蠭氣】 蜂と通ず。出典漢書趙廣漢傳に、專屬强壯蠭氣と。師注に蠭與鋒同言鋒銳之氣。

【蠭目豺聲】 眼つきの惡しく、音聲の猛きをいふ。出典左傳文公元年に、蠭目而豺聲、忍人也。

【蠭螫有毒】 微物と雖も猶ほ人を害ふをいふ。蠭は蜂に同じ、螫も蜂なり。出典左傳僖公二十二年に、君其無謂邾小、蠭螫有毒、而況國乎と。又た國語晉語に、蚺蛾蠭螫皆毒害人、況君相乎。

外 ホカ

【外强内乾】 表裏ともに强梗乾燥なるをいふ。出典左傳僖公十五年に、慶鄭曰、古者大事必乘其產、生其水土、而知其人心、安其教訓、而服習其道、唯所納之、無不如志、今乘異產、以從戎事、及懼而奔、將與人易、亂氣狡愼、陰血周作、震脉偂興、外寇中乾、過退不可、周旋不能。

【外寇必有内憂】 事を謀りて兩全を得るは、惡人以下の者の難しとする所なるをいふ。出典左傳成公十六年に、范文子曰、吾先君之亟戰也有、故秦狄寧楚皆彊、不盡力、子孫將弱、今三彊服矣、敵楚而已、唯聖人能內外無患、自非聖人、外寧必有內憂、盡釋怨以爲外懼乎。出典曾書に、吳主皓淫虐、自黃、杜預表請遠征、之、表至、張華適興宿棋、即推枰斂手、贊其決、帝許之、山濤告人曰、自非聖人、外寧必有內憂、釋吳爲外懼、豈非算乎。

【外强内乾】 木は判みて以て龜を灼き、その拆裂せる形によりて判斷する龜に兆といひ、筮に卦といふ、而して下の法は後世傳はらず。出典禮記曲禮上篇に、龜爲卜、筴爲筮、卜筮者、先聖王之所以使民信時日、敬鬼神、畏法令也、所以民決嫌疑、定猶與也、故曰、疑而筮之、則弗非也、日而行事、則必踐之。

【卜筮】 なり。筮は蓍策を以て之を數へて判斷する。

二 ホク ト

【卜師】 卜筮者をいふ。出典列仙傳に、漢中關下卜師。

【卜居】 住居を卜し定むるをいふ。出典史記周本紀に、成王使周公卜居と。又た楚辭に卜居篇あり。

【卜以決疑不疑何卜】 卜筮はもと疑て定まらざる者を判せんが爲めなり、故に疑なきときは、卜筮を用ふるには及ばぬといふことなり。出典左傳桓公十一年に、莫敖曰、卜之、對曰、卜以決疑、不疑何卜、遂敗鄖師於蒲騷と。又た舊唐書張公謹傳に、太宗將討建成元吉、謹卜者占之、公謹曰、凡卜筮將以決嫌疑、今既事在不疑、何卜之有。

【卜隣】 リの部卜隣（リン）を見よ。

【卜筮】 卜筮者、先聖王之所以使民信時日、敬鬼神、畏法令也、所以民決嫌疑、定猶與也、故曰、疑而筮之、則弗非也、日而行事、則必踐之。

四 木

【万俟】 姓なり、集韻に、万、密北切、万俟、複姓、俟、音其、今讀木其と。出典北齊書及び北史に、万俟普・万俟洛傳あり、宋史に、万俟偽傳あり。

【木天】 學士の居所なり。故事成語考に、木天署、學士所居と。出典夢溪筆談に、內諸司舍屋、唯秘閣最安壯、閣下窮隨高敞、相傳謂之木天。

【木主】 神主なり、即ち位牌なり。出典史記周紀に、爲文王木主、載以車、中軍と。又た事物紀原に、典禮曰、諱之廟立之主曰帝、攜弓曰、商主綴衆、蓋廟所以藏主、宜始爲廟即立主也と。又た朱子語類に、伊川木主制度、其剡剡闊、蓋皆有除陽之數、存焉、信乎其有制禮作樂之具也。

【木客】 樵父をいふ。出典玉臺新詠に、神仙傳有木客、蔚於山中。

【木公】 松の異稱。出典夷堅志に、木公、松也、木母、梅也。

【木母】 梅の異稱なり。出典錦海新聞に、北朝山濤字致遠、赴召、宋神宗問曰、卿自山路來、木公木母如何、濤曰、木公正做、說、木母正含、蕊、木公松也、木母梅也、稱旨除中書。又た夷堅志に、木公松也、木母梅也。出典李綱樓詩話に、梅樽通用す、樽を「トガ」と訓ずるは、此方限りの誤なり、梅兒の寺を木母寺と號するを誤りなりと云者あれど、實は然らず。

【木奴】 橘（ミカン）の異稱。出典襄陽耆舊傳に、李衡種橘千株、曰、吾

有千頭木奴、又た本草に、柑一名木奴、又曰、橘奴。

【木劍】 木の刀なり。出典通鑑陳紀に、取朝服木劍以逸。

【木刀】 木太刀なり。出典唐書地理志に、定州新樂縣有木刀溝、有民木刀居溝旁、因名之。出典隋書禮志に、佩刀之刃以木代之、名象劍、名又容刀。

【木鐸】 鐸は鈴なり、金鐸木鐸の二種あり、その全體を金屬にて製し、その舌も亦金屬にて作れる者を金鐸といひ、その舌を木にて作れる者を木鐸といふ、凡そ教令を發せんとするとあるに臨み、之を振ひて衆聽を煉動し、然る後ち之を遂ぶるなり。因て學者教を世に施すことにもいふ。出典禮記明堂位篇に、振木鐸於朝、天子之政也。又た論語八佾篇に、天下之無道也久矣、天將以夫子爲木鐸と。又た書經胤征篇に、遒人以木鐸徇于路。

木鐸

【木杯】 木にて作りたる杯なり。出典唐書韋嗣立傳に、嗣立獻木杯藤盤數十物。

【木履】 東方朔の瑣語に、木履起於晉文公時と。又た後漢書五行志に、延熹中京都長者皆著木屐。

木履

【木屐】 木屐登山を見よ。

【木枕】 木のマクラなり。出典唐書陽城傳に、常以木枕布衾、賈錢。

【木丸】 サルグツワなり。出典唐書郝象賢傳に、將刑人、必以木丸、寧口云と。又た湧幢小品に、刑人者、以木丸、始于武明宓殺郝象賢。

【木炭】 畫を描くに用ふるヤキフデなり。出典論書瑣言に、古人以木炭畫圖、隨圖而點之。出典漁洋詩話に、蘇枝筆燒剩枝爲筆所書。

【木彈】 素朴にして飾りなく、木石の如くなるをいふ。彈又た强に作る。出典史記周勃世家に、周昌、木强人也厚、高帝以爲可爲大事。

【木訥】 木は質樸、訥は遲鈍なり、人の文飾なきをいふ。出典論語子路篇に、剛毅木訥近仁。

【木偶】 木製の人形なり。出典史記孟嘗君傳に、見木偶人與土偶人相與語。

【木柿】 柿は梯に同じ、芳廢反、音メイ（ヒキ）の字とは別字なり。㊀木の刱り屑なり。㊁木の札なり。出典㊀後漢書楊由傳に、風吹刱柿、又た晉書王濟傳に、詔能戰盾、木柿蔽江而下。㊁說文に、柿、削木札也。

【木工】 大工なり。出典漢書百官表に、更名東園主章爲木工。

【木石】 木と石とをいふ。出典孟子盡心上篇に、與木石居。

【木階】 階、ハシゴなり。出典事物紺珠に、梯、木階。

【木杪】 木の端なり。出典說文に、木上曰末、从木一在其上、謂木杪也。

【木末】 前條に同じ。出典入蜀記七月八日の條に、塔西南有小軒、往數百年物、木末蓋後人取王文公詩木末北山雲冉冉之句、名之、建康志謂公自命此名、非也。

【木龍】 木を河岸に構へて水の氾濫を防ぐをいふ。出典宋史河渠志に、天禧五年正月、知滑州陳堯佐以西北水壞城、無外禦、築大堤、復鑿橫木、下垂木數條、置水旁、以護岸、謂之木龍、當時賴焉。

【木馬】 木にて作りたる馬なり。出典說苑に、木馬不能行、亦不食食と。又た南史齊東昏侯紀に、帝始欲騎馬、未習、於其側、金鑾鼎爲作木馬、人在其中、行、動迅捷、蓋所適、其後遂爲善騎と。又た通典に、唐武后長安二年、制爲土木馬於里門、教人習騎。

【木星】 柱の一種にして、花に香氣あり、今モクセイといふ。出典白居易の桂花詩に、我愛木中星、不是凡花數と。又た鄧肅の木星詩に、清風一日來、天闕世上能開不敢香。

【木蘭辭】 古の樂府の詩にて、女丈夫木蘭が男子に扮して徵兵

に應じ、戰を畢へ、悉がなく鄉里へ歸りしことを叙べたる七言の古詩なり。【出處】木蘭辭に、唧唧復唧唧、木蘭當戶織、不聞機杼聲、惟聞女歎息、問女何所憶、問女何所憶、女亦無所思、女亦無所憶、昨夜見軍帖、可汗大點兵、軍書十二卷、卷卷有爺名、阿爺無大兒、木蘭無長兄、願爲市鞍馬、從此替爺征、東市買駿馬、西市買鞍韉、南市買轡頭、北市買長鞭、朝辭爺孃去、暮宿黃河邊、不聞爺孃聲、但聞黃河流、暮至黑水頭、不聞爺孃聲、但聞燕山胡騎聲啾啾、萬里赴戎機、關山度若飛、朝聞傳金柝、寒光照鐵衣、將軍百戰死、壯士十年歸、歸來見天子、天子坐明堂、策勳十二轉、賞賜百千萬、可汗問所欲、木蘭不用尚書郎、願馳千里足、送兒還故鄉、爺孃聞女來、出郭相扶將、阿姊聞妹來、當戶理紅妝、小弟聞姊來、磨刀霍霍向豚羊、開我東閣門、坐我西閣牀、脫我戰時袍、著我舊時裳、當窗理雲鬢、對鏡貼花黃、出門看火伴、火伴皆驚惶、同行十二年、不知木蘭是女郎、雄兎脚撲朔、雌兎眼迷離、雙兎傍地走、安能辨我是雄雌。【參考】唐詩話に、木蘭歌最古、然朔氣傳金柝、寒光照鐵衣之類、已似太白矣。○臨漢隱居詩話に、古樂府中、木蘭詩爲實子建作、似矣、然其中云、當世汗問所欲、漢魏時夷狄未有可汗之名、不知果誰之詞也、杜牧之木蘭廟詩云、雙雄弓在壁作男兒、步裏曾能學畫眉、幾度思歸還把酒、拂雲堆上祝明妃、殊有美思也。

【木蘭舟】【讀】ラン、ギの木にて造りたる舟。【出處】遠異記に、木蘭洲在潯陽江中、多木蘭樹、養殺剉爲舟、と。又柳宗元の詩に、破顏山前碧玉流、騷人遊賞木蘭舟。

【木假山】【讀】カザン　蘇洵、木假山記あり、海陵臣試蘇明允木假山の詩あり。蘇軾又た次韻の作あり。又た五雜俎に、余在德平、葛尚寶園中見木假山一座。

【木居士】【讀】コジ　韓愈の題木居士詩に、火透波穿不計春、根如頭面一幹如、身、偶然題作木居士、便有無窮求福人。

【木罌缾】【讀】ボウアウヘイ　瓶を木に縛して乘りて河を渡るなり。筏の類なり。【出處】史記淮陰侯傳に、信擊魏、魏王盛兵蒲坂、塞臨晉、信乃益爲疑兵、陳船欲渡臨晉、而伏兵從夏陽、以木罌缶渡軍、襲安邑、魏王豹引兵迎信、信遂虜豹、と。集解に、服虔曰、以木爲缶、如今人用以渡、師古曰、罌缶、瓶也、如瓶、罌、

（三才圖會）

【木立牌】【讀】ハイ　ハの部牌（ハイ）を見よ。

【木野狐】【讀】ヤコ　嘉祥の異稱。【出處】拊掌錄に、人目機杼爲木野狐、言其鋼惡人如狐也。

【木屑霏霏】【讀】キの部鋸（キヨ）木屑を見よ。

【木屑竹頭】【讀】ヂの部竹（チク）頭木屑を見よ。

【木皮三寸】【讀】ヒ　樹の皮の厚きこと三寸なり。【出處】尸子に、朔方寒冰厚六尺、而木皮三寸、因地寒也。

【木本水源】【讀】ゲン　子たるものは吾が身の本を思ふべき喩、兩親は木の本、水の源の如し。【出處】左傳昭公九年に、主使詹桓伯辭於晉、曰、我在伯父、猶衣服之有冠冕、木水之有本原、民人之有謀主也、伯父若裂冠毀冕、拔木塞源、廢棄謀主、壅滯主、使狄、其何有余一人。

【木牛流馬】【讀】ゴ　諸葛亮の創製に係る兵糧運搬の車にて、其狀、牛馬に象り、機巧を設けて運行に自由ならしむ、杜氏通典にその制度を載せたり。【出處】三國蜀志諸葛亮傳に、亮相先主、後常以木牛流馬運、糧、據武功五丈原、與司馬宣王對於渭南、相持百餘日、卒于軍、年五十四、謚忠武侯、亮長於巧想、損益連弩、木牛流馬、皆出其意、と。又た格致鏡原に、稗編、蜀相諸葛亮之出征、始造木牛流馬、以運糧、蓋巴蜀道阻、便於登陟、故耳、木牛、以運糧、以木押、轉、器、瓶、章昭曰、以木爲器、瓶、

巴蜀有江州縣、疑亮始作之江州縣、故後人以爲名也。

【木偶人衣】【讀】ゴウ　木偶人の餘論を編へるが如く、用をなさざるに喩ふ。【出處】史記任安傳に、趙禹曰、吾聞之將門之下必有將類、傳曰、不知其君視其所使、不知其子視其所友、今有詔舉將軍舍人者、欲以觀將軍而能得賢者文武之士也、今徒取富人子上之、又無智略、如木偶人衣之綺繡耳、將奈之何、

【木屐登山】【讀】ゲキ　音の謝靈運が木屐を脫けて山に上りしをいふ。【出處】世說任誕下篇に、謝康樂、因父祖之資、生業甚厚、奴僕既衆、義故門生數百、鑿山浚河、功役無已、尋山陟嶺、必造幽峻、嚴崎千重、莫不遍歷、登躡常著木屐、上山則去前齒、下山去其後齒。

【木質繁者披其枝】【讀】ヒ　披はヒラクなり、その臣强き者は其主を危くするに喩ふ。【出處】史記范雎傳に、木質繁者披其枝、披其枝者傷、其心、【補】韓非子揚權篇に、不勝春風、母使枝大本小、枝大本小將不勝春風、枝將害心。○漢書蕭望之傳に、附枝大者、賊本心、私家盛者、公室危。

北

【北】【讀】ホク　妻は北堂に居る、故にいふ。【出處】李商隱の夜雨寄北に、君問歸期未有期、巴山夜雨漲秋池、何當共剪西窗燭、卻話巴山夜雨時、（北堂を見よ）

【北極】【讀】キヨク　天の北極に當る處にある星にて、天の樞なり、常に其所に居て動かず、故に、北極謂之北辰と。注に、北極、天之中、以正四時、以其居天之中、故曰北極。

【北辰】【讀】シン　政篇に、子曰、爲政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之と。共は向なり。

【北至】【讀】シ　夏至の別名、太陽の北方に至るをいふ。【出處】淮南子天文訓に、陰氣極、則北至、北極下至黃泉。

【北風】【讀】フウ　北方より吹く風。【出處】詩雅邶風、北風其涼、雨雪其雱。又た詩經豳風、北風、即ち朔山。【出處】書經舜典篇に、巡守至于北岳。

【北岳】【讀】ガク　北方の國をいふ。【出處】北魏典籍に、北國兵動。

【北國】【讀】コク　書崔浩傳に、北國兵動。

【北京】【讀】キヤウ　北の都なり、明の世に燕京を北京と稱せり、南京應天府に對していふ。【出處】明史藝地理志に、永樂元年建北京、十八年始定都焉、改布政司爲直隸。

【北闕】【讀】ケツ　天子の宮殿の北の正門なり、漢の世に未央宮は南に向へども、上奏謁見の徒は、皆北闕に謁せり。【出處】漢書高帝紀に、蕭何治未央宮、立東闕北闕前殿、と。注に、闕中記に曰く、東闕あり、北に玄武闕あり、說文に云ふ、蒼龍闕前殿、北に在り、而して東闕北闕を立つ、蓋し其の便に反る。

【北第】【讀】ダイ　漢の北闕に近き第宅をいふ。【出處】漢書夏侯嬰傳に、嬰北第一と。顏注に、北第者、近北闕之第、嬰最第一也、故張衡西京賦云、北闕甲第、當道直啓。

【北堂】【讀】ダウ　母の異稱なり。ケの部堂（ケン）堂の餘論を見よ。【出處】詩碑愈の示兒詩に、主婦治北堂、膳服適親疏、主婦は即ち一家の主母なり。

【北戀】【讀】クワン　管書陶潛傳に、潛言夏月虛閑高寓、臥北戀之下、清風飄至、自謂羲皇上人。

【北牖】【讀】ユウ　論語鄉黨篇に、疾、君視之、東首、と。篇疏に、病者常居北牖下、爲君來視、暫時遷鄉南牖下東首、使君得南面視之。

【北史】【讀】シ　書名。【參考】唐の李延壽撰す、北朝の魏より隋に至る四代二百四十二年間の事を記す、本紀十二卷、列傳八十八卷、總て一百卷あり、此書は南史に較するに力を用ふること深し、即ち周の如きは文苑傳を加へ、齊には列女傳を補ひ、皆南史の闕略あるに似ず、鄭道元を酷吏に出し、陸法和を藝術に附せるは、亦南史の因仍せるに似ず。

【北宗】【讀】シユウ　ナの部南（ナン）宗北宗を見よ。

【北綱】【讀】カウ　羽紀に、項王項伯東面坐、亞父南鄉坐、亞父者范增也、沛公北鄉坐、張良西鄉侍。

【北面】【讀】メン　㊀君臣の位は、君は南面、臣は北面。㊁師弟の位は、師は南面、弟子は北面。㊂人に臣事すること。㊃官の名なり。【出處】㊀禮記に、君南鄉、答陽也、臣

北面、答ル君也。㊁莊子田子方篇に、鍵解不ル敢入ニ於四竟ニ、則諸侯無ニ二心ニ也、文王於ニ是焉ニ、以爲ニ大師ニ、北面而問曰、政可ニ以及ニ天下乎ト。又た唐書に、崔日用與ニ武甄言ニ春秋疑ニ甄徐舉無ニ留語ニ、日用曰、吾請北面。㊂史記田單傳に、王蠋布衣也、義不ル北面ル於燕ニ。㊃遼史に、其官有ニ契丹樞密院及行官都總管司ニ、謂ニ之北面ニ、以ニ其在ニ牙帳之北ニ、以主ニ番事ニ。

【北垂】 北の邊境をいふ。垂は陲に通ず。出典後漢書魯恭傳に、和帝嘗ニ擊ニ匈奴ニ、恭上疏諫曰、陛下親勞ニ聖思ニ、日昃不ル食、憂在ニ軍旅ニ、誠欲ニ以安ニ定北垂ニ、定ニ萬世之計ニ。

【北狄】 北方のエビスは、時代によりて其の名を異にせり、鼓に之を揭ぐ。出典禮記に、東夷(夏)。鬼方(殷)。玁狁、犬戎(周)。胡、匈奴(秦漢)。突厥(唐)。契丹(宋)。蒙古(元)。韃靼(明)。(大明一統志に據る)

【北枝】 北の方に出たる枝をいふ、梅花に用ふ。出典貫休の閑居詩に、南枝復北枝、玉蹤沾毛衣。

【北齊書】 唐の李百藥撰す、初め百藥の父德林、隋の內史令たる時、北齊書を撰し、未だ成らずして卒せしが、唐の貞觀三年、太宗百藥に詔して北齊書を修めしめたれば、百藥乃ち父の書に據り、補修刪正して此書を成せるなり、本紀八卷、列傳四十二卷、凡て五十卷あり、此書殘闕ありて完からず、往往贋を缺くものあり。

【北邙】 人死して塵土となるを南府城の北十里に在り、山、僰師・率・孟津三縣に連り、綿亘四百餘里、東漢の諸陵、及び唐宋名臣の墳多く此に在りと、洛陽城の北に當る、故に北邙山といふ。出典洛城記に、北邙山遠亘四百餘里、東洛九原之地と。又た劉廷芝の公子行に、百年同謝西山日、千秋萬古北邙塵。

【北海樽】 孔融が樽中酒不ル空といひしによりていふ、孔融北海の相たり。出典後漢書孔融傳に、孔融性寬容少ル忌、好ル士、嘗誡ニ益後進ニ及ル過ニ閑職ニ、賓客日盈ニ門ニ、常歎曰、坐上客恆滿、樽中酒不ル空ニ、吾無ニ憂矣。

【北客若來】 北方の客が若し來るならばとの意なり。出典文與可の戒東坡詩に、北客若來休問ル事、西湖雖ル好莫ル吟ル詩。

【北固】 甘露山(鎮)の前兵兒謠に、北客若來何以酬、文與可の詩の語を用ゐしなり。

【北道主人】 トの部東(トウ)道主人を見よ。

【北富南貧】 ナの部南(ナン)阮を見よ。

【北山移文】 朝のとき齊の周顒、字は彥倫、鍾山(卽ち北山なり、江蘇省江寧府上元縣の東北にあり)に隱る、後詔に應じ出で、海鹽縣の令と爲り、卽て此の山を過ぎんとす、會稽の人孔稚珪、字は德璋、大に之を鄙み、山靈の意を假りて、之に移して、再び至ることを得ざらしむ、故に其の書を北山移文と名く、移は文書の名にして、文書を各處に遷移するの義に取る、後世の移文なり。近くは古文眞寶、續文章軌範に出づ。

【北斗七星】 故に七星といふ。出典史記天官書に、北斗七星と。索隱に、春秋運斗樞に云、斗の第一は天樞、第二は璣、第三は璇、第四は權、第五は玉衡、第六は開陽、第七は搖光なり、第一より第四に至るを魁と爲し、第五より第七に至るを杓と爲し、合して斗と爲す。又た唐詩選に、西鄙人の哥舒歌に、北斗七星高、哥舒夜帶ル刀。

【北門鎖鑰】 北方の守衛を爲すをいふ。出典世語に、魏衆公儀ニ大名ニ、北使至、語ニ寇曰、相公望重、何故不ル在ニ中書ニ、寇曰、主上以朝廷無ル事、北門鎖鑰、非ル壻不可。壻は魏衆公の名、大名は府の名にして、汴京の北に在り。出典晉箱雜記に、魏野贈寇萊公詩云、有ル官居ニ鼎鼎、無ル地起ニ樓臺ニ、而其詩傳ニ播漢北ニ、故眞宗末年嘗有ニ北使詣ル闕、詢ニ於輩者ニ曰、那箇是無ル地起ニ樓臺ニ的宰相、時萊公方居ニ歇地ニ、眞宗卽召還、授ニ以北門管鑰ニ。

【北門之歎】 左傳僖公三十二年、杞子自鄭使告ニ于秦ニ曰、鄭人使ル我掌ニ其北門之管ニ、若潛師以來、國可ニ得也ニ。杜注に、管鑰也。

【北門仕官】 をいふ。出典世說言語中篇に、李弘度常歎不ル被ル遇、殷揚州知ル其家貧、問君能屈志百里不、李答曰、北門之歎、

久已上聞、窮猿奔ル林、豈暇擇ル木、遂授ニ刺縣ニ。出典詩經都風北門篇の序に、北門、刺ル仕不ル得ル志也ト。其の詩に、出ル自ニ北門ニ、憂心殷殷、終窶且貧、莫ル知ニ我艱ニ、已焉哉、天實爲ル之、謂ニ之何ル哉。

【北里之舞】 北里は、北鄙なり、淫靡なる音樂なり。出典史記殷紀に、子ル是使ニ師涓作ニ新淫摩、淫摩之舞、靡靡之樂。

【北方之强】 義の如何に拘はらずして、單に强勇なる者をいふ。出典中庸第十章に、南方之强與、北方之强與。

【北山之感】 公事に勞して父母を養ふことを得ざるを嘆ずるなり。出典曾參の祖州上ニ執政書ニ、苦ル於政役ニ、而不ル得ル養ニ父母ニ、則有ニ北山之感ニ、鴇羽之嗟ニ。出典詩經小雅北山篇の序に、北山、大夫刺ニ幽王ニ也、役使不ル均、已勞ル於從事ニ、而不ル得ル養ニ其父母ニ焉。

【北山之石】 長安の北方の山の石にて、硯き石の稱とす。出典史記張釋之傳に、嗟乎以ニ北山石ニ爲ル椁、用ニ紵絮ニ斮陳漆ニ其間ニ、豈可ル動哉。

【北溪字義】 書名。出典宋の陳淳の撰にして、二卷あり、淳は平生臨九淵の師を以て儒を扮するを惡み、之を排闢するを任とす、此書は命・性・心・情・才・志・意・仁・義・禮・智・信・忠・恕・一貫・誠・敬・道理・德・鬼神の事を二十六門に分ちて詳論し、旁通曲證して、頗る發明する所あり。故に此書を後世の人性理字義と稱するあり。

【北堂書鈔】 書名。出典唐の虞世南の撰する所にして、一百六十卷とす、世南、隋の秘書省に在りしとき、此書を編せり、類書にして其目は帝王・后妃・政術・刑法・封爵・設官・禮儀・樂文・樂・武功・衣冠・儀飾・服飾・舟・車・酒食・天・歲時・地の諸部に分てり。

【北夢鎖言】 書名。出典宋の孫光憲の撰なり、光憲初め高季興に從ひ、荊州夢澤の北に在り、故に北夢と名づく、記載する所は、唐宋の末五代の軼事にして、雜錄なりと雖も、往往考訂に資すべきものあり、凡そ二十卷あり。

【北叟失馬】 北叟は塞方邊塞に住める老翁なり、馬を失ふて卻つて馬を得たる故事にて、人間の禍福常なきをいふ。出典淮南子に、北叟失ル馬、人皆弔之ト。又た舊唐書蘇瑰傳に、太宗嘗從容謂ニ房元齡ニ曰、蘇瑰大業之日、進諫隋主ニ、出ル河池郡守ニ、應遭罰心之譴ニ、翻見ル太平之日、北叟失ル馬、瑰亦難常、頓首拜謝。

【北風驅雁】 北より吹く寒風が雁を驅り送り來るをいふ。出典洛陽伽藍記に、北風驅ル雁、飛雪千里。

【北風吹白雲】 唐人の詩の句。出典蘇頲の汾上驚秋に、北風吹ル白雲、萬里渡ル河汾、心隨邊鴈落、秋聲不ル可ル聞。

【北斗七星高】 唐人の詩の句。出典唐詩選に、西鄙人の哥舒歌に、北斗七星高、哥舒夜帶ル刀、至ル今窺ル牧ル馬、不ル敢過ル臨洮。

【北斗星前橫旅雁】 唐人の詩の句。出典劉禹錫の送開征戰赴ニ靈州ニ詩に、空閨遙開征戰赴ニ靈州ニ、夜夜思ル君遼海北、年年棄妾渭橋西、陽春白日照空閨、紫燕銜ル花向ル庭滿、彩鸞鬱裏起ル夜、飛鶴鏡前妝梳籬、誰家夫壻不ル從征、應是遼陽別有ル情、莫ル道紅顏燕地少、家家還似洛陽城、且逐新人殊未厭、還令秋至一夜霜飛、北斗星前橫ル旅雁、南樓月下凉ル來衣、又聞、暗啼羅幙空自憐、夢絕、獨坐綺ル衣燈又滅、度ニ陽關一向ル誰說、每憐容貌宛如ル神、如何薄命不ル如ル人、待ル君朝夕燕山至、好作ニ明年楊柳春ニ。

【北海陰風動地來】 唐人の詩の句。出典常建の塞下曲に、北海陰風動地來、明君砌上望ル龍堆、關雎是長城卒、日暮沙場飛作ル灰。

【北斗以南一人而已】 北斗星の在る所より南といふこと。出典唐書狄仁傑傳に、授ニ并州法曹參軍ニ、同府倉軍鄒崇質、母老且疾、當ル使ニ絕域ニ、仁傑謂ニ長史閻仁基ニ、請ニ代行ニ、仁基曰、狄公之賢、北斗以南、一人而已。

【北山愚公河曲智叟】 ク(グ)公移ル山を見よ。出典列子湯問篇に、太行王屋二山、方

七百里、高萬仞、本在冀州之南河陽之北、北山愚公者、年且九十、面山而居、懲山北之塞、出入之迂也、聚室而謀曰、吾與汝畢力平險指通豫南達於漢陰可乎、云云、何曲智叟笑而止之曰、甚矣汝之不慧、以殘年餘力、曾不能毀山之一毛、其如土石何、云云。（クの部愚公移山を參看せよ）

【牧正】 牧正。 意味 禽獸を飼ふことを掌る長官なり。 出典 列子黃帝篇に、周宣王之牧正。

【牧民】 意味 人民を養ふなり、國君の稱なり、後世は地方官の稱とす。 出典 管子牧民篇に、凡有土地牧民者、務在四時、守在倉廩。

【牧童】 意味 牛を飼ふ童子。 出典 清明の詩に、借問酒家何處有、牧童遙指杏花村。

【牧圉】 意味 牛馬を養ふものをいふ。 出典 左傳襄公十四年に、庶人工商皁隸牧圉皆親聽有以補佐也。

【牧笛】 意味 牛羊を牧するものゝ吹く笛。 出典 陸游の詩に、牛圉牧笛入柴門。

【牧忠】 意味 賀朴忠實なり。 出典 漢書卜式傳に、上以式朴忠、拜爲齊王太傅。

【牧野】 意味 周の武王が殷の封王と戰ひて之を滅したる地名なり。 出典 詩經大雅大明篇に、矢于牧野、維予侯興。（次條を參看せよ）

九 冒

【牧誓】 意味 書經周書の篇名にして眞古文なり。 出典 序に曰く、武王戎車三百兩、虎賁三百人、與受戰于牧野、作牧誓、と、即ち武王商の地牧野に軍し、戰に臨て衆に誓ひしが故に、地名を以て篇名づく、其篇首に曰く、時甲子昧爽、王朝至于商郊牧野、乃誓、王左杖黃鉞、右秉白旄、以麾、曰、遠矣西土之人、と、其武王衆に誓ふ其一斑に過ぎざるも、以て全豹を窺ふに足る、而して其言ふ所は、嚴肅にして溫厚、克く戰の術と敵に應ずるの戒とを盡ゆ、彼の湯誓湯誥と相表裏す、眞に聖人の言なり。

【牧牛兒】 意味 牛飼の小童をいふ。 出典 夢溪筆談に、有牧牛兒。

【牧羊奴】 意味 羊を養ふ奴隸なり。 出典 史記衞將軍傳に、衞青父鄭季、爲平陽侯家、與侯妾衞媪通、生青、故冒衞氏、少時爲其父、其父使牧羊、先母之子皆奴畜之、不以爲兄弟數、有人奴之生、得母、皆屈、即足矣、安得封侯事乎、元朔元年、青爲車騎將軍、明年、封爲長平侯、

【牧豬奴】 チの部椓（チョ）猶牧椓奴戲耳を見よ。

【牧童遙指杏花村】 意味 唐人の詩の句。 出典 杜牧の清明節雨紛紛、路上行人欲斷魂、借問酒家何處有、牧童遙指杏花村。

十 駕

【駕駕】 意味 蝸牛なり。 出典 漢書鮑宣傳に、蝸牛之思。

【駕蝸】 意味 蝸牛をいふ。 出典 廣韻字典に、駕蝸、蝸牛也。

【駕賃】 意味 人の僕と爲りて履ひ賃を得るなり。 出典 左傳襄公二十七年に、申鮮虞來奔僕賃于野、と。又た與于襄陽書に、芻米僕賃之資是急。

【駕遨】 意味 凡庸短才の貌。 出典 漢書息夫躬傳に、僕遨不足數。

十一 僕

【僕射】 意味 秦の時の官名、左右大臣なり。 出典 事物紀原に、秦官、史始皇本紀有僕射周青臣、是也、古者蓋武以書、射者、掌事、故曰僕射、僕射者僕役於射也、一云、僕主也、古有主射以督課、漢因秦事、自侍中謁者博士將軍屯騎書僕射、尚書皆有之、成帝建始元年初置尚書五人、以郎秦爲僕射、此蓋其始也、靈帝建安四年、以郎秦爲左僕射、衛臻爲右僕射、置左右之始也。

【僕僕爾】 意味 煩瑣の貌。 出典 莊子萬章下篇に、僕僕爾亟拜也。

【更僕未可終】 意味 僕は大僕なり、朋の詩に、借問酒家何處有、牧童遙指杏花村、と、雖も、尚未だ盡ひ盡すべからざるをいふ。 出典 禮記儒行は、夠奴の天子の稱。 出典 史記匈奴傳に、單于太子曰冒頓、と、索隱に、冒、音墨、又如字、と。漢書顏注に、冒、音墨、頓、音毒。 讀音 正讀、故に頓、當沒切、音噸とあり。 注音 音毒は、從ふ可らず。

【駑駑】 意味 臘み懇ふ貌。 出典 漢書鮑宣傳に、福場駑駑之思。

篇に、魯哀公問、於孔子、曰、夫子之服、其儒服與、孔子對曰、丘少居魯、衣逢掖之衣、長居宋、冠章甫之冠、丘聞、之也、君子之學也博、其服也鄉、丘不知儒服、哀公曰、敢問儒行、孔子對曰、遽數之不能終其物、悉數之乃留、更僕未可終也、と。留は久なり、據相が久くして倦み疲れたるにより、之を代へるも、盲ひ盡す可らざるなり。

十二 墨

【墨】 意味 スミなり。 出典 說文に、墨者、黑也、松烟所成、土之類也、と。又た釋名に、墨、嘿也、言似物嘿黑也、と。又た三才圖會に、後漢李尤墨硯銘曰、書契既造、墨硯乃陳、則是墨與硯者、與文字同興、於黃帝之時、一曰、田眞造墨、と。又た洞天清錄に、上古無墨、竹挺點漆而書、中古以石磨汁、或云、是延安石液、魏晉時始有墨丸、

墨牀（其一）

墨牀（其二）

乃漆煙、松煤、膠之、晉人用四心硯煮、欲膠墨貯、惟耳、自後有螺子墨、亦墨丸遺製、と。學硯之具、三胡先生作傳、と。胡先生名は鈞、海陵の人、と。又た張邦基の墨莊漫錄序に、僕性喜藏書、閒所寓、榜曰墨莊、故題、其莫曰墨莊漫錄。

【墨場】 意味 文藝の場所をいふ。 出典 宋之問の僧王秘書監詩に、書乃墨場絕、文稱、阿伯峰。

【墨池】 意味 硯を洗ふ池なり、又た地名ともなれり。 出典 成都古今記に、揚雄宅後、費圓宅、今爲宮亭、有墨池焉、と。又た晚賓王の詩に、登明書帳唫、水靜墨池寒、と。又た貨殖の墨池記に、臨川之城東、有地隆然而高、以臨於溪、曰新城、新城之上、有池窪然而方以長、曰玉池、之墨池者、荀伯子臨川記云也、羲之書墨、張芝臨池學書、池水盡黑、此爲其故蹟、豈信然邪。

【墨點】 意味 スミとテン。 出典 管子に、於是百官有司、制方圓筆、明日皆朝於太廟之門、又た新序に、周舍曰、願爲朝謁之臣、墨筆操牘、隨君之後、司君之過、而書之。

【墨書】 意味 墨にて書くをいふ。 出典 北史王延宗傳に、先是、高都郡有山琦、絕壁臨水、忽有墨書、云、齊亡、延宗晚視愈明、帝使人就寫、使者改亡爲上、亟是應驗。

【墨寶】 意味 法帖を摹り出す家の名なり。 出典 開見錄に、蔡田帖、王羲之題、鍾繇書、南唐墨寶堂石也、今在、郡村家、但已損不拓、

故事に、宋朝劉幾死、妻張書千餘卷、相與諦子曰、汝父謂此爲墨莊、今始知汝輩爲墨賊子、

【墨莊】 意味 善語を發せざるをいふ。 出典 ㊀管子四稱篇に、政令不一、善、墨莊若夜、㊁新序雜事篇に、晉平公閒居、師曠侍坐、平公曰、若奚子之學墨也、師曠曰、天下有五墨焉、臣之墨蟲、小墨墨耳。

【墨如】 意味 清夫論に、堯御、務成、舜師、紀后、禹御、墨如。

【墨莊】 意味 藏書の多きをいふ、莊は藏、衆の義、墨は墨跡なり。 出典 書言

【墨君】 墨竹を此君といひしに本づき て墨鈴の竹をいふ。中国蘇軾の墨君堂記に、王獻之謂竹君、天下從而君之、今與可（姓は文）又能以墨象君之形容、作堂以居君、而屬余爲文、以頌君德。と。又た蘇游の成都行に、墨君秀潤瘦不枯、風枝雨葉筆筆殊と。又た吳鎮の詩に、長憶前朝李蒲邱、墨君天下擅風流。

【墨客】 墨書をかく人をいふ。中国海棠譜序に、梅花古於春前、牡丹殿於春後、騷人墨客、特注意焉。又た劉禹錫の詩に、糟歌能謔曲、墨客翰分題。

【墨家】 墨子派の學者をいふ。中国史記太史公自序に、太史公（司馬談）六家の要旨を論じて曰く、墨家儉而難遵、於其節用不可廢也、六家、陰陽、儒、墨、名、法、道也。

【墨者】 墨翟前條に同じ。中国孟子滕文公上篇に、墨者夷之因徐辟而求見。孟子。

【墨迹】 墨蹟筆迹に同じ。中国宋書范曄傳に、示以墨迹。と。又た宋史職官志に、眞宗書籍萬餘卷、及內出、古書墨跡、藏其中。

【墨辟】 墨刑罪人の額にイレズミをする刑なり。辟はツミなり。中国書經呂刑篇に、墨辟疑赦、其劓百鍰、閪、實其罰。と。孔傳に、劓其鼻、涅之曰墨刑。

【墨刑】 前條に同じ。

【墨汁】 墨を磨りて汁としたるなり。中国圖繪寶鑑に、夏珪善畫人物、云云、筆法者老墨汁淋漓奇作也。

【墨樣】 墨を製造する型をいふ。中国墨經に、凡墨樣、當取則於古、無大小厚薄之限、世人遂以薄小爲貴。

【墨色】 墨の色をいふ。中国墨經に、凡墨色紫光爲上、墨光爲次、青光又次之、白光爲下。

【墨衣】 墨染の衣をいふ。中国唐書に、居父母之喪、斷髮爲服、墨衣、既葬而吉。

【墨絰】 墨は黑き麻の衣なり、絰は首絰腰絰なり、並に喪の服。中国南史に、王詡後爲吳國內史、母憂去職、武帝伐劉鋭、起爲補國將軍、詡固辭、以墨絰從行。

【墨綬】 墨絰絰を見よ。

【墨丈】 五尺を墨とし、十尺を丈とす。中国小爾雅に、五尺謂之墨、十尺謂之丈。と。又た國語周語に、不過墨丈尋常之閒。と。韋注に、五尺爲墨、倍墨爲丈、今木工各用五尺、以成宮室、其名爲墨、則墨者、工師之五尺也。

【墨劍】 石摺本をいふ、墨本に同じ。中国晦庵朝政に、故集其墨劍、以爲此卷、而猶以衆說相雜經、爲絕倉、不知墨賞之士、以爲如何也。

【墨戲】 書畫をいふ。中国書畫に、近世牧溪僧法、常作墨戲、粗惡無古法。

【墨辯】 名墨を好む辯あるをいふ。中国文字禪に、司馬君實、無所嗜好、獨喜墨戲百爾、逢道之奇、蹟、其亦司馬之墨辯也。

【墨行】 墨子の行を爲すものをいふ。中国韓愈の送浮屠文暢序に、人固有儒名而墨行者、問其名則是、校其行則非、可與之游乎。

【墨子】 書名。中国此書は、寫本組して周の墨翟撰すと曰へり、然れども書中多く墨子と稱するを以て見れば、其の門人の撰する所なり。原本七十一篇ありしも、今は其八篇を佚し、見て十五卷あり、其說く所、兼愛とて其弊實に父無く君無きに至る、故に孟子に排斥せられ、世に行はれず、然れども亦大に取るべき所ありて、歷代の著錄には大抵九流の一に列せり。案此の書は後世の學者異端の書として排斥し、蹈鼠穿に任せしかば、誤闕極めて多し、明末に至り、李贄茅坤の徒、之を挍刪し、清朝に至り、孫詒讓の墨子閒詁は、最も讀者に便なり。

【墨守】 墨翟の守りの義なり、固く自說を執りて動かざるにいふ。中国後漢書鄭玄傳に、時任城何休好公羊學、遂著公羊墨守。

【墨尿】 假設の人名、韓じて多辯の義とす。中国列子力命篇に、墨尿

羅至、嘩喧、鬻鬻四人、相與遊於世。

【墨林】 墨書畫をいふ。中国宋史王柏傳に、著有天文考、地理考、墨林考。

【墨梅】 墨畫の梅をいふ。中国畫墨に、楊補之、墨梅甚清絕、水仙亦奇、自稱逸齋老人。

【墨蘭】 墨畫の蘭をいふ。中国鄭耕錄に、鄭所南先生工畫墨蘭、不妄與人、邑宰求之不得、聞先生有田三十畝、因脅以賦役、泣訴、先生怒曰、頭可斫、蘭不可畫。

【墨竹】 墨畫の竹をいふ。中国畫鑒に、東坡先生、文章翰墨、照耀千古、復能留心筆墨、戲作墨竹、師文與可、枯木奇石、時出新意。と。又た畫苑に、李衍竹譜詳錄、墨竹亦起於唐、而源流未審、舊說五代李氏描竹影、乘始倣之、黃大史爽、出於吳道子、迨至宋朝、作者寖盛。と。又た云、舊說郭崇韜夫人李氏、月夜摸寫竹影、是後往往有效之者。

【墨石】 墨畫の石をいふ。中国畫鑒に、徽宗性嗜畫、作花鳥山石人物、入妙品、作墨花鳥石、閒有入神品者。

【墨翟守】 口の部貧（ロ）餓之巧を見よ。

【墨縗絰】 喪服、喪の時に着するサ麻ないふ。中国左傳襄公二十一年に、樂王鮒侍坐范宣子、或告曰、欒氏至矣、宣子擐、相子曰、奉公以走、固宮、必無害也、王鮒使宣子墨縗冒絰、二婦人登以如固宮、奉公以如固宮。

【墨綬銅章】 墨色の綬と、銅製の印となり、諸侯の佩びもの。中国漢書百官公卿表に、縣令長、皆秦官、掌治其縣、萬戶以上爲令、秩千石至三百石、凡吏、秩比二千石以上、皆銅印黑綬、秩比六百石以上、皆銅印黃綬。又た後漢書蔡邕傳章懷太子注に、漢官儀曰、秩六百石、銅章墨綬。又た同書左雄傳に、雄上疏曰、今之墨綬、謂令長、即之諸侯。と。韋懷太子注に、墨綬、謂令長、即古子男之國也。

【墨子薄葬】 墨翟は親を葬るに極めて薄くせしをいふ。中国孟子公孫丑下篇に、墨之治喪也、以薄爲其道也。と。又た莊子天下篇に、墨子生不歌、死無服、桐棺三寸而無絿。案孟子に、節葬篇あり。

【墨氏兼愛】 墨翟は君父と他人との別なく立てず平等に人を愛するをいふ。中国孟子滕文公下篇に、楊墨之言、盈天下、天下之言、不歸楊、則歸墨、楊氏爲我、是無君、墨子兼愛、是無父也、無父無君、是禽獸也。案墨子に、兼愛篇あり。

【墨子悲染】 人は習慣により善惡を殊にするをいふ。中国墨子說林訓に、墨子見練絲而泣之、爲其可以黃可以黑也。と。又た墨子所染篇に、墨子見染絲者而歎曰、染於蒼則蒼、染於黃則黃、所入變、其色亦變、五入必而已、則爲五色矣、故染不可不慎也、非獨染絲然也、國亦有染、舜染於許由、伯陽、禹染於皐陶、伯益、湯染於伊尹、仲虺、武王染於太公、周公、此四王者、所染當、故王天下、云云（以下種種の例を擧げ）と。又た、呂氏春秋當染篇の文も是と同じ。

【墨名儒行】 シの部儒（ジュ）名墨行を見よ。

【墨者夷之】 昔時、墨子の學を修めたる夷之といふ人なり。中国墨者を見よ。

【墨離爲三】 墨子の學派が分れて三家となりしをいふ。中国韓非子顯學篇に、世之顯學、儒墨也、儒之所至孔丘也、墨之所至墨翟也、自孔子之死、有子張之儒、有子思之儒、有顏氏之儒、有孟氏之儒、有漆雕氏之儒、有仲梁氏之儒、有孫氏之儒、有樂正氏之儒、自墨子之死也、有相里氏之墨、有相夫氏之墨、有鄧陵氏之墨、故孔墨之後、儒分爲八、墨離爲三、取舍相反不同、而皆謂眞孔墨、孔墨不可復生、將誰使定後世之學乎。

【墨突不得黔】 墨子は吾道を行はんとして、天下に周游す、故に、家の煙突も煤にて黑くなりしことなきをいふ。中国韓愈の諍臣論に、孔席不暇暖、而墨突不得黔。案論語、新論に、仲尼栖栖、突不暇黔、墨翟遑遑、席不及暖。

【墨池飛出北溟魚】 唐人の詩の句。中国李白の草書歌行に、少年上人號懷素、草書天下稱獨步、墨池飛出北溟魚、筆鋒殺盡中山兎、八

月九月天氣涼、酒徒詞客滿高堂、護麻素絹排氈廠、宣州石硯發色光、吾師醉後倚繩墨、須臾掃盡數千張、飄風驟雨驚颯颯、落花飛雪何茫茫、起來向壁不停手、一行數字大如斗、恍恍如聞神鬼驚、時時只見龍蛇走、左盤右蹙如驚電、肰同楚漢相攻戰、潮南七郡見幾家、家家屏障書題徧、王逸少墨伯英、古來幾許浪得名、張顛老死不足數、我師此藝不師古、古來萬事貴天生、何必要公孫大娘浦脫舞。

【撲滅】（ボクメツ）　悉滅撃ち消すなり。　出典書經參庚上篇に、若火之燎于原、不可嚮邇、其猶可撲滅。

【撲朔】（ボクサク）　兎脚撲朔、雌兎眼迷離と。迷離は、眩亂の貌なり。

【撲滿】（ボクマン）　錢を貯ふる器なり、土にて作り、口小にして、一たび入るれば復た出だす可らず、錢滿つれば撲ち發して之を出だすなり。　出典堅氣集に、撲滿即今小兒積受罐、以土爲之、斉錢之具、可入不可出、滿則撲之、有聚而不能散者、致有撲滿之敗、可不戒哉、鄱長倩贈公孫弘撲滿一枚、元艾性夫有撲滿吟、云、匯區小器安足憑、黃金寒塢訝亦然、宋景濂有撲滿說、意皆倣此。

【撲地】（ボクチ）　一に沸つるといふ巻。　出典一水濟傳楔子に、撲地跳出、一隻吊睛、白額錦毛、大蟲來と。大蟲は虎なり。二鮑照の蕪城賦に、驅鬥撲地、歌吹沸天と。李善注に、方言曰、撲、盡也、郭璞曰、今種物皆生、云撲地出也と。又た玉勃の膝玉閣詩序に、山原驥其盈觀、川澤盱其駭瞩、閃閃撲地、鐘鳴鼎食之家、制錯迭津、青雀黃龍之軸。

【撲蝶會】（ボクテウクワイ）　いふ。　出典楊誠齋詩話に、東京二月十五日曰花朝、爲撲蝶會。

【幞頭】（ボクトウ）　唐人幞頭巾なり。　出典朱子語類に、幞頭、初止以紗爲之、後以紗裹鐵、漆、以木作一山子、在前襯起と。又た宋史輿服志に、幞頭、一名折上巾、起自後周、然止以軟帛垂脚、隋始以桐木爲之、唐始以羅代絹、龍帝服則脚上曲、人臣下垂、五代漸變平直、國朝之制、君臣通服平脚、乘輿或服上銳、其初以藤織草巾子爲裏、紗爲表、而漆以漆、後惟以漆爲堅、去其藤裏、前爲一折平、施兩脚、以鐵爲之。　出典孔氏雜說に、齊隋婦人施幕縛、全身障蔽也、唐永徽以後、皆用帷帽、施紗、到頸、漸爲淺露、若今之蓋頭矣、唐乾元以來乃用兜羅、若今之擔子矣、唐志云、咸亨中勅多著帷帽、遂棄羅、曾不乘車、別坐擔子、○沙宮亭の日本雜詠に、袖蔽軟帽頭埃雪と。注に云、以紗裹頭爲禮。

【暴露】（ボクロ）　出典躬を風雨に曝すなり。　出典國語越語に、句踐說於國人曰、寡人不知其力之不足也、而又與大國執讐、以暴露百姓之骨于中原、此則寡人之罪也。

【穆】

【穆穆】（ボクボク）　和敬の貌。二美なり。又た深遠の意なり。　出典一書經呂刑篇に、穆穆在上、明明在下。二詩經周頌雍篇に、相維辟公、天子穆穆。

【穆然】（ボクゼン）　深遠の貌。　出典史記孔子世家に、有所穆然深思焉。

【穆清】（ボクセイ）　天子美德ありて其の政清きをいふ。　出典漢書司馬遷傳に、於穆清。

【穆如清風】　和なる氣象を形容せるなり。　出典詩經大雅烝民篇に、吉甫作頌、穆如清風。

【璞玉渾金】　璞の部璞（ハク）玉渾金を見よ。

【樸】

【樸學】（ボクガク）　上古樸實の學にして、後世の用に適せざるをいふ。　出典漢書儒林傳に、兒寬有俊材、初見武帝、語經學、上曰、吾始以尚書爲樸學、非好、及聞寬說、可觀、乃從寬問一篇と。又た蘇軾の贈孫志學詩に、我家二男子、樸學非時新と。又た隨游の詩に、高談對隣父、樸事付番兒。

【樸屬】（ボクシヨク）　堅く附著するをいふ。　出典詩經大雅棫樸に、芃芃棫樸と。鄭箋に、白桜相樸屬而生者と。又た周禮考官考工記に、察車之道、欲其樸屬而微至と。鄭注に、樸屬、猶附著堅固也。

【樸椎】（ボクツイ）　出典漢賈樸椎魯なり、愚直をいふ。　出典漢書周勃傳に、樸椎少文。

【樸斲】（ボクタク）　アラケグリなり。　出典書經梓材篇に、若作梓材、既勤樸斲、惟其塗丹雘。

【樸樕】（ボクソク）　小木なり、轉じて知才をいふ。　出典詩經野有死麕篇に、林有樸樕。

【濮】

【濮上之音】（ボクジヤウノオン）　亡國の音樂なり。　出典淫樂の音樂、安濮上之音、　出典ハの部亡（バカ）國之音を見よ。

【曝】

【曝書亭集】（ボクシヨテイシフ）　清の朱彝尊の撰する所にして、凡て八十卷あり、順治二年より康熙四十八年に至る六十五年間の詩文を編年に排次し、賦、古今詩より哀辭、祭文に至るまで、漏らさざるなり、其才學は、王漁洋と頡頏するものにして、詩を以て論ずれば、王氏に先つ能はざるも、文を以てすれば、漁洋は素より後に瞠若たるべしといふ。

【戈】

【倒戈】（タウカ）　タの部倒（タウ）戈を見よ、

【槊】

【橫槊賦詩】（ヨクシ）　出典軍中にて刀槊を小脇に挾みて詩を賦すと傳の活達なるをいふ。　出典蘇軾の前赤壁賦に、曹操のことを述べて、釃酒臨江、橫槊賦詩、固一世之雄也、而今安在哉。　出典岡田挺之の槊確錄に、東坡赤壁賦に、橫槊賦詩といふは、南史柔桓組傳に、曹操曾西上馬橫槊、下馬談論といふに出づ。元微之の老杜墓誌銘に、曹氏父子、往往橫槊賦詩といふも、南史に據るなるべしと。案ずるに、老杜とは杜甫のことなり、墓誌は元氏長慶集五十六卷に出づ。

【伐】

【不伐】（ホコラズ）　出典功名に誇らざるをいふ。　出典論語雍也篇に、孟之反不伐、奔而殿。

【星】

【摘星】（ホシ）　出典樓の高くして天上の星を摘むべきをいふ。　出典竹坡詩話に、世傳楊文公(億)方離禊禊、猶未能言、一日家人摘以登樓、忽自語如成人、因戲問之、今日上樓、汝能作詩乎、即應聲曰、危樓高百尺、手可摘星辰、不敢高聲語、怕驚天上人。

【戴星而往】　出典星の未だ沒せざる中に出で行くこと、朝早く行くをいふ。　出典呂氏春秋に、宓子賤爲單父宰、彈琴不下堂、而單父治、巫馬期爲單父宰、戴星出、戴星入、而單父亦治。

【膊】

【噬膊】（ホツ）　出典杜預云、腹の膊を罰むが如しとて、國一世之雄也、而今安在哉。　出典左傳莊公六年に、亡郭國一者、必此人也、若不早圖、後君噬臍、臍、齊人、谷臥餘に、獲者抽磨以取其腑、磨象、自噬臍、則人不之取、若既就縛、雖欲噬臍、亦無及矣。

【沒】

【沒沒】（ボツボツ）　出典沈滅するなり。　出典左傳襄公二十四年に、子產告宣子曰、諸侯貳、則晉國壞、晉國壞、卿子之家、何沒沒也と。杯注に、沒沒、沈滅也、言何沒沒於貧賤即此也と。又た清史王僧達傳に、大丈夫、寧當玉碎、安可以沒沒求活。　出典書は年なり、身を終ふるといふ意、出典曾語變動篇に、沒書に、沒

無慾言。

【沒骨】（ボツコツ）　出典繪畫上の術語にて、線を畫はさぬように描くなり。　出典夢溪筆談に、徐熙之子、乃效諸黃之法、更不用墨筆、直以粉色圓之、謂之沒骨圖。

【沒世】（ボツセイ）　出典一沒は終なり、一生を終ふるなり。二永久の義なり。　出典一論語衛靈公篇に、君子沒世而疾名不稱焉。二大學に、此以沒世不忘也。

【沒人】（ボツジン）　出典水底に入りて物を捕ふる人。　出典莊子達生篇に、沒人之水、嘗見舟而便操之也。

【沒入】（ボツニフ）　出典罪ある人の家を官に取り上るをいふ。　出典漢書食貨志に、沒入其器物。

【沒落】（ボツラク）　出典おちいるなり。　出典呂氏春秋中に、文侯、問中期、人沒將奈何。

【沒了】（ボツリヤウ）　出典なくなるをいふ。　出典水滸傳楔子に、夢魂下會魂嶋都沒了。

【沒了期】（ボツリヤウキ）　出典際限のなきをいふ。　出典唐書統記に、吳越王錢鏐沒了期欲、沒了期沒了期、費基繼了又倉皇。

【沒字碑】（ボツジヒ）　出典表は無なり、文字のなきをいふ。　出典五代史任圓傳に、圓曰、天下皆知崔鴻不識文字、而虛有碑表、號沒字碑と。又た同書安叔于傳に、叔于狀貌雄堂、而不通文字、所爲鄙陋、時人謂之沒字碑。　出典北夢瑣言に、趙崇穆質堂而不學、人號無字碑。

八 拂

【拂子】（ホツス）蚊や蠅を拂ふ爲に手に持つものなり。出處釋氏要覽に、律云、比丘患草蟲、佛聽作拂子と。又た、同

書に、僧祇云、佛聽線拂、列氈拂、蕉拂、樹皮拂、制若牛尾、馬尾拂、并金銀裝柄者皆不得執。

九 勃

【勃勃】（ボツボツ）盛なる貌。出處淮南子時則訓に、勃勃陽陽、惟德是行、變長化育、萬物繁昌。

【勃然】（ボツゼン）一顏色を變ずる貌。二興起の貌。出處一孟子梁惠王下篇に、王勃然變於色。二孟子梁惠王上篇に、苗浮然興之と。浮は勃に通ず。

【勃如】（ボツジヨ）顏色を變ずる貌。出處論語鄉黨篇に、色勃如也。

【勃焉】（ボツエン）盛なる貌。出處左傳莊公十一年に、焉遏罪己、其興也勃然。

【勃爾】（ボツジ）ムツトする貌。出處儀禮詩品序に、逐於有晉太康中、三張二陸兩潘一左、勃爾復興、踵武前王、風流未泯、亦文章之中興也。

【勃磎】（ボツケイ）人、相爭ふて反き戾る貌。出處莊子外物篇に、縣姑勃磎。

【勃窣】（ボツソツ）切ならざるを形容す。出處司馬相如の子虛賦に、擊瑲勃窣、上乎金堤と。又た晉書張憲傳に、勃窣爲理篤。

【勃屑】（ボツセツ）篤に、饑母勃屑而日侍と。饑母は醜女なり。出處楚辭沈江膝行する貌。

十 浮

【浮然】（ボツゼン）勃（ボツ）然の二を見よ。

十一 發

【發心】（ホツシン）出處華嚴經に、佛道を思ひ立つをいふ。

【發起】（ホツキ）オコスなり。出處論語の注に、無可發起者、蓋於已也。

【發足】（ホツソク）出發といふが如し。出處楚辭に、何親發發足と。又た人物志に、驍士發足、衆士乃誤、韓信立功、淮陰乃震。

十二 渤

【渤海】（ボツカイ）海の名なり。出處書に、此三神山者、其傳在于渤海中、去人不遠、患且至則船風引而去、蓬萊有至者、諸仙人及不死之藥、在焉。

【渤蕩】（ボツタウ）波の大に動く貌。出處史記封禪書に、木華海賦に、掇敝漂瀚、渤蕩成坯。

【渤潏】（ボツイツ）海水の沸騰する形容なり。出處李白の詩に、海水渤潏、人羅網。

十三 骨（ホネ）

【骨鯁】（ホネ）骨を以て喉に刺さるなり。出處左傳襄公九年に、暴鯁。

【骨鵬肉飛】（ホネ）秋に、慶忌之勇、萬人莫禦、骨鵬肉飛、拊膝而行百里。出處吳越春秋に、慶忌之勇、萬人莫禦、骨鵬肉飛、拊膝而行百里。

【炊骨爨骸】（ホネ）極貧困窮乏の極狀をいふ。出處ヨの部易子（コ）析骸を見よ。

【刺骨之恨】（ホネ）深き恨みをいふ。出處風俗通に、有孤生者少興、富鄭公喜、後以失、懷游於韓公之門、未幾韓富不協、遂怒孤、謂背有所短也、及魏公卒、富公至、不往弔、且欲甘心於孤、或謂孤、孤須面請謝、孤曰、刺骨之恨、豈逡面可消、但富公正人、韓公君子、疑正人於君子之前、能不入於韓之絲乎、富公聞之、於是釋然。

【刻骨銘心】（ホネ）深く心に記臆するをいふ。出處後漢書鄧騭傳に、上疏曰、臣節實以蹈愆長慎、一心來報、上全天恩、下完性命、刻骨定分、有死無二と。又た三國吳志周魴傳に、魴仕吳典郡、始願已獲、銘心立報、永矢無貳。

【瘞骨不埋名】（ホネ）後世に傳ふべき文章あれば、其身は死して骨を埋みたりとも、其の名は埋まることなしとの義なり。出處白居易の詩に、遺文三十軸、軸軸金玉聲、龍門原上土、瘞骨不埋名。

【側聞】（ホノカ）うす〳〵と聞くといふ義。出處賈誼の弔屈原賦に、側聞屈原兮沈汨羅。

【凡人】（ボンジン）凡庸の俗人をいふ。出處列仙傳に、或謂凡人。

【凡夫】（ボンブ）一道を聞かざる人をいふ。二常の人をいふ。出處一法華經に、凡夫淺識、深著五欲。二盲龜の任城

の誅に、凡夫寶命、遂士徇名と。又た品子篇に、廣雅、凡輕也、今人鄙人爲凡夫、輕賤之稱也。

【凡子】（ボンシ）故事に、侯嬴時、嬴、其女曰、吾一女憐之、必嫁官人、不以與凡子。

【凡庸】（ボンヨウ）常なみの人をいふ、庸は常なり。出處史記周勃世家贊に、才能不過凡庸。

【凡民】（ボンミン）孟子盡心上篇に、待文王而後興者、凡民也。

【凡鳥】（ボンチウ）鵬（ホウ）を見よ。

【凡虫】（ボンチユウ）奴を罵りていふ。出處摯虞札記に、金樸子、世人有恣者、題其門爲鳳字、彼不覺大以爲欣、而竄在凡鳥也、有寄稽鄉、與家人書、題合字、蓋人一口也、有屬奴而命、風者、凡虫也。

【凡鄙】（ボンヒ）イヤシキ人。出處晉書庾亮傳に、臣凡鄙小人。

【凡俗】（ボンゾク）出處晉通の徒をいふ。出處寇謙之に、以戲、凡俗。

【凡夫肉眼】（ボン）常ナミの人の見る所の短淺なるをいふ。出處摭言に、鄭光業試夜、有同人突入、吳語曰、必先必先可相容否、光業爲輕半餉之地、其人曰、貸取水瓶茶、居二日、光業狀元及第、欣然爲取水瓶茶、居二日、光業狀元及第、其人啓謝曰、既預取水、更使煎茶、當時不識貴人、凡夫肉眼、今日俱爲後進、窮相骨頭。出處涅槃經に、天眼通非礙、肉眼廢非通。

十五 本

【本】（ホン）出處書籍をいふ。出處文選左思の魏都賦の李善注に、風俗通曰、案劉向別錄、讐校、一人讀書、校其上下、得誤謬爲校、一人持本、一人讀書、若怨家相對爲讐と。又た後漢書延篤傳注に、先賢行狀云、延篤少從師、席溪季度受左氏傳、欲寫無紙、乃借本師之。

【本道】（ホンダウ）出處正道といふが如し、傍徑に對していふ。出處法珠林に、依隨本道。

【本教】（ホンケウ）出處本原となるべき教。出處呂覽孝行篇に、民之本教曰孝。

【本宮】（ホングウ）出處本堂に同じ。出處佛本行經に、即還本宮。

【本寺】（ホンジ）出處僧がその居る所の寺を指していふ。出處周賀の詩に、潛府十年爲徙業、南朝本寺往來新。

【本宅】（ホンタク）出處我が自宅をいふ。出處宋書徐湛之傳に、歸居本宅。

【本家】（ホンカ）出處後漢書樂節傳に、節爲家令、出處賢家といふ義。出處其無子者願還本家、自選擇、蹤動奴婢二百人、其餘所受虎賁宮騎、及諸工技、鼓吹、蒼頭、奴婢、兵弩、庭馬、皆上還本家。

【本座】（ホンザ）出處太平廣記劉式之條に、其像忽然現本座。

【本房】（ホンバウ）出處唐高僧傳に、於本房內、所患漸重。

【本性】（ホンセイ）出處人の生れつきて持てる性なり、習慣の性となりしものに對していふ。出處荀子性惡篇に、豈人之本性也哉。

【本姓】（ホンセイ）出處我が生れたる家の姓なり、他の姓を冒すに對していふ。出處漢書高帝紀の注に、蒙有劉姓本姓實存、史遷不肯詳載と。又た增一阿含經に、皆捨本姓、稱釋子沙門。

【本名】（ホンメイ）出處實名なり。出處唐高僧傳に、忘其本名。

【本望】（ホンバウ）出處本來の期望。出處宋書劉粹傳に、深思自餐、以副本望。

【本心】（ホンシン）出處人の固有の良心をいふ。出處孟子告子上篇に、此之謂失其本心。

【本懷】（ホンクワイ）出處我の本來の懷ひをいふ。出處晉書載記に、今送一瓶、以明本懷。

【本意】（ホンイ）出處根本の意をいふ。出處後漢書張敏傳に、臣伏見、孔子垂經典、阜陶造法律、原其本意、皆欲禁民爲非也と。又た同書竇融傳に、不聽國家及將軍本意。

【本領】（ホンリヤウ）出處根本と衣領なり、因て大本の義とす。出處劉寶客嘉話に、貞元中、廣昆侖琵琶第一手、登綵樓彈一曲、心謂無敵、西市樓上相一女郎、亦彈此曲、下擲靡如貫、絕妙入神、昆侖謂拜爲女師、女郎更衣出、乃曾養本、俗姓段師、彈一曲、及彈、曰本領何雜。

【本願】（ホングワン）出處本來の願望をいふ。出處涼武昭王傳に、今日之舉、非本願也。

【本分】（ホンブン）出處己の身に在る所をいふ。出處荀子非相篇に、見竭不如

見本分と。楊倞注に、分、貴賤上下之分と。又た白居易の詩に、忽驚鬢後蒼浪髮、未得心中本分官。

【本色（ホンシヨク）】〔解説〕㊀天然の色なり。㊁人の得手なり、持前なり。〔出典〕㊀教坊記に、皆隨其衣本色。㊁後山詩話に、退之以文爲詩、子瞻以詩爲詞、如教坊雷大使之舞、雖極天下之工、要非本色と。退之は韓愈の字、子瞻は蘇軾の字なり。

【本業（ホンゲフ）】〔解説〕人人勤むべき職務をいふ。〔出典〕鹽鐵論に、方今之務、在下除本業、樂豕、盡地力也。

【本斑（ホンパン）】ハの部班（ハン）を見よ。

【本國（ホンゴク）】〔解説〕その人の生國。〔出典〕列子周穆王篇に、及老而還本國。

【本邦（ホンパウ）】〔解説〕我が邦をいふ。〔出典〕唐書に、讓皇帝曰、蓋見本邦人將身投外裔。

【本朝（ホンテウ）】〔解説〕㊀國君の朝なり。㊁地方の州郡に對して君の朝廷をいふ。〔出典〕㊀孟子萬章下篇に、立乎人之本朝、而道不行、恥也と。又た淮南子に、齊桓失之乎國內、而得之本朝。㊁漢書蕭望之傳に、以望之爲平原太守、望之雅意在本朝、遠爲郡守、內不自得。〔國語〕鷲津毅堂の親發餘影に、余嘗贊本朝之義于敬所（猪飼先生）、先生曰、世俗以爲本朝本邦也、此固失矣、儒者或云、本朝對郡朝而言、亦未爲得也、四土載籍本朝之義有三、孟子曰、立乎人之本朝、而道不行恥也、淮南子曰、齊桓失之乎國內、而得之乎本朝、漢書蕭望之傳曰、望之雅意在本朝、遠爲郡守、內不自得、後漢書李固傳曰、本朝者心膂也、州郡者四支也、此謂天子諸侯之朝廷也、本猶根也、宗也、所謂對郡朝者泥矣、要與我邦之人所稱不同、一也、通鑑、後魏太皇太后馮氏崩、孝文帝以古禮居喪、齊使裴昭明謝竣如魏弔、欲以朝服行事、主客不可、昭明等曰、受命本朝、不敢輒易、此對他國而稱自國之朝也、本猶本國本州之本、我邦之人所習稱是已、二也、自是而興、又爲對前代之稱、唐宋以下所稱比比皆是、此義於我邦所用、三也、然則我邦所謂本朝者、對他國而稱朝廷也、故事係國家者當用此稱、如藤納言本朝世紀、林春齋本朝通鑑是也、事不係國家者不宜用此稱、如藤井懶齋本朝孝子傳、國朝諫諍錄、所載多不係朝廷者是也、國朝我朝皇朝熙朝之類、亦皆倣之。

【本地（ホンチ）】〔解説〕人性の地質をいふ。〔出典〕論語子罕篇子絕四章、皇侃義疏に、故正明絕此四、以見本地也。

【本身（ホンシン）】〔解説〕その身を指していふ。〔出典〕太平廣記に、返顧本身、則已殭矣。

【本體（ホンテイ）】〔解説〕前條に同じ。〔出典〕通鑑晉武紀に、以違本體。

【本貫（ホンクワン）】〔解説〕本籍の所在地なり。〔出典〕正字通に、本貫鄉籍也。

【本據（ホンキヨ）】〔解説〕本づき據る處をいふ。〔出典〕後漢書荀彧傳に、操上書表彧曰、云云、復若南征劉表、委棄兗豫、飢軍深入、踰越江沔、利既難要、將失本據、而或建二策、以亡爲存、以禍爲福、謀殊功異。

【本師（ホンシ）】〔解説〕本宗として崇べる師匠なり。〔出典〕史記樂毅傳に、樂臣公學黃帝老子、其本師號曰河上丈人。〔佛〕〔解説〕佛身を指す、本として尊ぶところの義。〔出典〕盂蘭盆經に、見本尊圓滿悉地。

【本尊（ホンソン）】

【本妻（ホンサイ）】〔解説〕嫡妻、正しき妻なり、妾に對していふ。〔出典〕冥祥記に、遂棄本妻。

【本人（ホンニン）】〔解説〕富人なり。〔出典〕唐才子詩に、夫亦從本人自己心窩中設身處地、代抒其誠然者。

【本源（ホンゲン）】〔解説〕大本なり。〔出典〕舊唐書儒學傳序に、啓聖人之耳目、窮法度之本源。

【本富（ホンプウ）】〔解説〕農業を以て富みを致せるをいふ。〔出典〕史記貨殖傳に、本富爲上、末富次之、奸富最下。

【本錢（ホンセン）】〔解説〕資本の金錢をいふ。〔出典〕續博物志に、止有本錢五十緡。

【本文（ホンブン）】〔解説〕正文といふに同じ。〔出典〕後漢書徐防傳に、上疏曰、臣聞詩書禮樂定自孔子、發明章句始於子夏、其後諸家分析各有異說、漢承亂秦、經典廢絕、本文略存、或無章句、收拾缺遺、建立明經と。又た後漢書賈逵傳に、鄭左氏傳及五經本文。

【本紀（ホンキ）】〔解説〕司馬遷の史記に、十二本紀あり帝王の事蹟を叙述せり。〔出典〕史記に本紀十二篇あり。又た史記大宛傳贊に、禹本紀言、河出崑崙。〔解説〕司馬遷が本紀と名づけたる所以は、文心雕龍史傳篇に、子長取式呂覽、通號曰紀、紀綱之號、亦宏稱也、故本紀以述皇王と。我邦中井履軒翁は曰く、凡帝紀稱本者、對諸侯明本統也、本、幹也、謂宗也、詩云、本支百世、紀、是綱目之紀、謂相比次有倫理也と。この兩說にて明かなり。又た佐藤一齋翁は、本紀、列傳皆原本於春秋、本紀猶經、不曰經曰紀遜也、列傳猶傳、仍曰傳、不遜也と。此れまた一說として見るべし。

【本格（ホンカク）】〔解説〕舊例に同じ。〔出典〕魏書高陽王傳に、今試以本格責其如初。

【本所（ホンシヨ）】〔解説〕我が本居をいふ。〔出典〕皇侃の論語義疏に、各得其本所也。

【本田（ホンデン）】〔解説〕現在所有の田地をいふ。〔出典〕漢書匡衡傳に、鄉本田。

【本根（ホンコン）】〔解説〕本源根據なり。〔出典〕舊唐書狄仁傑傳に、本根一搖、憂患不淺。

【本命年（ホンメイノトシ）】〔解説〕我が生れたる幹枝の年に相當る年をいふ。〔出典〕白居易の七年元日對酒に、今朝吳與洛、相憶一欣然、夢得君知否、俱過本命年と。自注に、余與蘇州劉郎中同壬子歲、今年六十二。

【壯本朝（ホンテウヲサカンニス）】〔解説〕我が本朝を盛大にするをいふ。〔出典〕宋の超鼎自ら銘を旌に書して曰く、身騎箕尾歸天上、氣作山河壯本朝。

【本來面目（ホンライノメンモク）】〔解説〕天然自然にして、一點の人意を雜へざる所をいふ。〔出典〕傳習錄卷中に、不思善、不思惡、時認本來面目（六祖法壇經の文）此佛氏爲未識本來面目者設此方便、本來面目、卽吾聖門所謂良知、今既認得良知明白、既已不消如此說矣と。又た六祖法壇經に、不思善、不思惡、正與麼時、那箇是明上本來面目。

【本支百世（ホンシヒヤクセイ）】〔解説〕本は幹にして、宗子なり、支は枝にして庶子なり、一家の長く榮ゆるをいふ。〔出典〕詩經大雅文王篇に、文王孫子、本支百世。

【本草綱目（ホンザウカウモク）】〔解説〕書名。〔出典〕本書は三十九卷あり、明の李時珍の著なり、本草の名の始めて書目に見えたるは、齊の七錄なり、蓋本草の原書は、張仲景華陀等の手に成りし者なるべし、梁の陶宏景、唐の李世勣等、更に益す所あり、宋の嘉祐中、掌禹錫之が注を作れり、歷世增益して、遂に時珍に至り、更に又た增益して之が注を作り、本草綱目と名づけたり。此の書の沿革に就いては、陔餘叢考卷三十三に之を詳論せり。

【本來無一物（ホンライムイチブツ）】〔佛〕〔解説〕本は何物もなしとて、心の眞空なるをいふ。〔出典〕傳燈錄に、五祖求法嗣、俾寺僧各述一偈、上座神秀曰、身是菩提樹、心如明鏡臺、時時勤拂拭、不令有塵埃、六祖慧能在碓坊杵臼之間、夜書曰、菩提本非樹、明鏡亦非臺、本來無一物、何處惹塵埃。

【本然之性氣質之性（ホンゼンノセイキシツノセイ）】〔解説〕程朱學派の說にて、人に二樣の性あり、本然の性は、純然たる天より附與せられたる性なり、氣質の性は、血氣融混して後ち生ずる性なり。〔出典〕朱子語類に、有天地之性、有氣質之性、天地之性、則太極本然之妙、萬殊而一本也、氣質之性、則二氣交運而生、一本而萬殊也。

〔七〕

坌　奔

【坌湧（ホンヨウ）】フの部坌（フン）湧を見よ。

【奔奔（ホンホン）】キの部彊（キヤウ）彊を見よ。

【奔走（ホンソウ）】〔解説〕ハシリ廻るをいふ。〔出典〕孫子行軍篇に、奔走而陳兵者期也。

【奔馳（ホンチ）】〔解説〕馬にて走り馳するをいふ。〔出典〕後漢書隗囂傳に、亦東奔馳と。又た韓愈の詩に、浮屠西來何施爲、擾擾四海爭奔馳。

【奔散（ホンサン）】〔解説〕離散するをいふ。〔出典〕漢書禮樂志に、樂官師瞽抱其器而奔散。

【奔踶（ホンテイ）】〔解説〕人が馬に乘れば、その馬奔り、立ちて人を蹴むなり。〔出典〕漢書武帝紀に、馬或奔踶而致千里、士或有負俗之累而立功名、夫泛駕之馬、跅弛之士、亦在御之而已と。泛は覆なり。

【奔命（ホンメイ）】〔解説〕人の命令を聽きて走り廻ること。〔出典〕莊子駢拇篇に、天下莫不奔命於仁義（觀於奔命を參看せよ）

【奔波（ホンパ）】〔解説〕爭ひ趨むくこと、打ち寄する波の如きをいふ。〔出典〕晉書慕容垂傳に、寔會上慕容垂疏、杜豪强之門、塞奔波之路と。又た韓愈の論佛骨表に、老少奔波、棄其業次。

【奔北（ホンホク）】〔解説〕戰爭して敗走するをいふ、北は背に通ず。〔出典〕晉經甘誓篇に、弗用命戮于社と。孔傳に、不用命奔北者、則戮之於社主前と。孔疏に、奔北、

謂ゆ背陳走也と。又た荀子議兵篇に、遇敵慶戰則必北、勞苦煩辱則必奔と。楊倞注に、北、敗走也と。北者乖背之名、故以敗走爲北也、奔與奔同。

【奔放】 義解 勢よく走るをいふ。 出處 後漢書禰衡傳に、飛兎騰襲、絶足奔放、良樂之所急と。良樂は王良と伯樂とをいふ。

【奔湊】 義解 はしりあつまるをいふ。 出處 曾書會稽王道子傳に、稽朝野奔湊。

【奔雷】 義解 はげしき雷鳴。 出處 杜甫の詩に、昨夜有奔雷。

【擒奔馬】 義解 人の强きを形容す。 出處 舊唐書史敬奉傳に、敬奉形甚短小、若不能勝衣、至於野外驟逐能擒奔馬。

【奔軼絶塵】 義解 奔軼の迅速にして、車塵を絶するをいふ。 出處 莊子田子方篇に、顏淵問於仲尼曰、夫子步亦步、夫子趨亦趨、夫子馳亦馳、夫子奔軼絶塵、而回瞠乎其後矣。

【罷於奔命】 義解 君命に從ひ奔走するをいふ。 出處 左傳成公七年に、余必使疲於奔命以死。

【奔車之上無仲尼】 義解 聖賢の士は危險の地に居らざるをいふ。 出處 韓非子安危篇に、奔車之上無仲尼、覆舟之下無伯夷。

【盆】 義解 器の名。 出處 爭物紀原に、闕雅曰、盎謂之缶、注云、今盆也、呂氏春秋曰、甕使、質幹、缶而擊之、則缶已爲用於幾世矣、周官牛人、祭紀共其盆簋禮器、孔子曰、奧者老婦之祭也、盛於盆尊於瓶、此又二物之名、出於周代也。

【盆山】 義解 小き山をいふ。 出處 蘇軾の詩に、微雨止還作、小聰幽更新、盆山不見日、草木自蒼然。

【盆水】 義解 盆中の水をいふ。 出處 淮南子に、人神易濁而難清、發盆水之類也。

【盆底】 義解 盆の中をいふ。 出處 王建の詩に、秋天盆底新荷色、夜地房前小竹聲。

【盆甕】 義解 盆とカメとをいふ。 出處 世說に、今吾命在盆甕之中耳、乃枯魚之肆矣、我見楚王決江潯以資我、汝則求我於盆甕之中。

【盆瓶】 義解 盆と瓶とをいふ。 出處 禮記禮器篇に、夫奧者老婦之祭也、盛於瓶、於盆尊於瓶と。鄭注に、老婦先炊者也、盆瓶炊器也。

【盆餅】 義解 スリバチの如き形の餅（コシキ）をいふ。 出處 西陽雜俎に、盆瓶、即率牛子也、秋節後、斷之、狀如盆瓶、其中有子、似蠶蔟著預。

【盆盂】 義解 盆と平鉢をいふ。 出處 淮南子に、今夫救火者、汲水而趨之、或以甕瓶、或以盆盂、又た新論に、盆盂之水、鼠尾一曳、必區吐而棄之者、量小故也。

【盆槌】 義解 盆と小さき樽とをいふ。 出處 新論に、戒提、盆樽、或擊瓶盂、其器、方圓、形體雖反、名實相乖、至於盛水滅火、功亦齊焉。

【盆池】 義解 庭前に在る小池をいふ。 出處 明一統志に、有盆池、龍口水注其中。

【盆景】 義解 花卉の鉢植なり。 出處 王鑒の姑蘇志に、虎邱人善於盆中植奇花異卉、盤松古梅、置之几案、清雅可愛、謂之盆景。

【盆甑】 義解 酒壺等を容るゝ土器、甑は、缶に同じ。 出處 史記廉頗藺相如傳に、藺相如曰、趙王竊聞秦王善爲秦聲、請奉盆甑秦王以相娛樂と、注に、應劭曰、甑者瓦器、所以盛酒漿、秦人鼓之以節歌也。

【傾盆】 義解 雨の盛に降る形容。 出處 陶潛の詩に、黑雲寒空萬馬屯、轉盼白雨如傾盆。

【鼓盆歌】 義解 妻を失ふをいふ。 出處 莊子至樂篇に、莊子妻死、惠子弔之、莊子則方箕踞鼓盆而歌、惠子曰、不哭亦足矣、又鼓盆而歌、不亦甚乎、莊子曰、不哭亦足矣、又鼓盆而歌、不亦甚乎、莊子曰、人且偃然寢於巨室、而我噭噭然隨而哭之、自以爲不通乎命、故止也。

【戴盆望天】 義解 頭に盆を載けば天を望む能はず、事は兼ね施す可からざるに喩ふ。 出處 司馬遷の報任安書に、主上幸以先人之故、使得奏薄技、出入周衛之中、僕以爲報盆何以望天と。又た後漢書に、第五倫傳、諸外戚曰、苦身待士、不如爲國薦賢、盆望天、事不兩施。

【卷】

【卷鍾】 義解 卷ほ、モッコ、土を盛りて運ぶ器、鍾は、スキ、土を掘り起す器

なり。 出處 管書石勒、載記論に、卷鍾相尋、干戈不息。

【卷土之基不成其高】 義解 物各その限度ある喩へ、卷に一杯の土ほどの基礎にては、高き建物を作る能はざるをいふ。 出處 鹽鐵論に、卷土之基、雖良匠不能成其高。

【笨車】 義解 鑑造なる車をいふ。 出處 通志紀に、顏延之嘗乘羸牛笨車と。胡注に、笨、部本翻、竹裏也、一曰不精也。

【笨伯】 義解 肥大なるをいふ、笨はウツロなり。 出處 管書辛曼傳に、大鴻臚江泉以能食爲穀伯、陳章太守史嘲以肥大爲笨伯。

【梵天】 解 義解 佛の住める天といふ義にて、淨界をいふ。 出處 雲笈七籤に、佛即西方得道之聖人也、在三清之中、別有梵天居之、于上帝、則如世之九卿率天子也と。又た舊唐書天竺國傳に、其人皆學悉曇章、云是梵天法、書於貝多樹葉、以紀事、謂梵は扶泛反（音ハン）なり、然れども俗にボンの音に讀めり。

【梵王】 解 義解 梵天王の略語。 出處 法華經に、爾時諸梵天王諸天帝釋。

【梵宮】 解 義解 寺をいふ。 出處 朱慶餘の詩に、流水際經閣、浮雲入梵宮。

【梵刹】 解 義解 佛寺。 出處 釋氏要覽に、梵文、此云笨、今譯名刹、即幡柱也、長阿含經云、若沙門於此寺中、勤苦得一法者、便當堅幡苦四遠、今有少欲知足人居此。

【梵鐘】 解 義解 寺に在る鐘をいふ。 出處 梵阜の詩に、半樹殘陽又梵鐘。

【梵唄】 解 義解 讚會に云、西域語を讚唄と曰ふと、讚經の聲なり。 出處 楞嚴經に、十方微塵、國土合成一界、梵唄詠歌、自然敷奏と。又た書言故事に、梵音曹子建遊魚山、忽聞空中梵天之音、清響哀悅、獨聽良久、乃摹其節、寫爲梵唄、自此始也。

【梵貝】 解 義解 法螺貝のこと。 出處 文獻通考に、貝之爲物、其大可容數升、蠡之大者也、南蠻之國取而吹之、所以和銅鈸、釋氏所以調法螺、亦土國吹螺以迎隋使、是也、梁武帝天竺國傳、有童子伎、倚而歌梵貝。（ハの部寶（ハウ）に圖あり）

【梵嫂】 解 義解 僧の妻なり。 出處 輟耕錄に、居鄧無番偶鐘記、廣中僧有室家者、謂之火宅僧、宋陶穀清異錄、京師大相國寺僧有妻曰、梵嫂。

【梵王宮】 解 義解 寺のことなり。 出處 法華經に、爾時諸梵王、諸天帝釋と、又た朱慶餘の詩に、流水離經閣、浮雲入梵宮。

【賁育】 義解 孟賁、夏育の二人は、古の勇力の者なり。 出處 蘇軾の潮州韓文公廟碑に、賁育失其勇。

【溢江】 義解 川の名なり、江西省にあり。 出處 白居易の琵琶行に、住近溢江、地低濕、黃蘆苦竹繞宅生。

【溢溢】 義解 水の溢れ溢るをいふ。 出處 漢書溝洫志に、渤海清河信都、河水溢溢、湛、縣色三十一。

【煩惱】 義解 人欲の私をいふ。 出處 河上公老子注に、天地惡煩惱入心惡多欲。

【翻車】 義解 水車なり。 出處 三才圖會に、翻車今人謂龍骨車也、魏略曰、馬鈞作翻車、又漢靈帝使畢嵐作翻車、其車之制、除壓欄木、及列槽木外、車身用投作槽、長可二丈、闊則不等、或四寸至七寸、高約一尺、槽中架行、造板一條、隨槽闊狹、比槽板兩頭俱短一尺、用置大小軸、軸同行造板、上下通週、以龍骨板葉其在上、大軸兩端、各帶拐木四葉、置於岸上木翻車（三才圖會）

架之間、人惡架上、踏動拐木、則龍骨板隨轉、循環行造板、刮水上岸、此制關雎頗多、必用木匠、可易成造、其起木之法、若岸高三丈有餘、可用三車、中間小池、倒水上、之足教三丈と。又た水碓といふものあり三才圖會に、機碓、水搗器也、王祭書

水碓 (三才圖會)

日、石崇有水碓三十區、今人造作水輪、輪軸長可數尺、列貫橫木相交、如滾槍之制、水激輪轉、則軸間橫木、間打所排碓、稍一起一落舂之、即連機碓也、凡在流水岸傍俱可設置、須度水勢高下爲之、如水下岸淺、當用陂柵、或平流當用板木障水、俱使傍流急注、貼岸爲輪、高可丈餘、自下衝轉、名曰撩車碓、水若高岸深、則爲輪

水轉高車 (三才圖會)

減小、而濶以板爲級、上用木槽引水直下、射轉輪板、名曰斗碓、又曰鼓碓、此隨地所制、各趁其巧便也と。又た水轉高車といふものあり、三才圖會に、水轉高車、遇有流水岸側欲用高水可立此車、其車亦高轉、筒輪之制、但於下輪軸端、別作竪輪、傍用臥輪撥之、與水轉翻車無異、水輪既轉則筒索兜水、循槽而上、餘如前例、又須水力相稱、如打輾磨之重、然後可行、日夜不息、絕勝人牛所轉、此誠秘術、今表暴之、以諭來者。

【翻譯(ホンヤク)】〔意義〕夷語を華語に代ふるをいふ。〔出處〕翻譯名義集に、夫翻譯者、謂翻梵天之語、轉成漢地之言、音雖似別、義則大同、宋僧傳云、如翻錦繡背面俱華、但左右不同耳、譯之言易也、謂以所有易其所無、故以此方之經、而顯彼土之法、周禮掌四方之語、各有其官、東方曰寄、南方曰象、西方曰狄鞮、北方曰譯、今通西言而云譯者、蓋漢世多事北方、而譯官兼善西語、故摩騰始至、而譯四十二章、因稱譯也。

二 馬(マ)

三 麻

マ

【馬草(マグサ)】〔意義〕馬に食ばせる草にて、即ち秣なり。〔出處〕酉陽雜俎に、取馬草一掬。

【麻冕(マベン)】〔意義〕緇布冠なり、平板を以て主とし、三十升の麻布を以て板上に衣す、古の冠なり。〔出處〕書經顧命篇に、王麻冕黼裳、由賓階隮、卿士邦君麻冕蟻裳、入卽位、太保太史太宗皆麻冕彤裳。又た論語子罕篇に、子曰、麻冕、禮也、今也純、儉、吾從衆。

【麻衣(マイ)】〔意義〕㊀白き衣服なり、後世は僧侶の衣とす。㊁白き麻の衣にて、即ち喪の服なり。〔出處〕㊀詩經曹風蜉蝣篇に、蜉蝣掘閱、麻衣如雪。㊁禮記雜記上篇に、大夫卜宅與葬日、有司麻衣、布衰布帶。

【麻鞋(マアイ)】〔意義〕麻にて造りしワラヂをいふ。〔出處〕古今注に、麻鞋、起自伊尹、以草爲之、周文王、以麻爲之、名曰麻鞋。

【麻紙(マシ)】〔意義〕麻を以て製したる紙をいふ。〔出處〕唐書藝文志に、月給蜀郡麻紙五千番。

【麻紵(マチヨ)】〔意義〕麻の布なり、紵はイチビといふ、麻の一種なり。〔出處〕宋史高麗傳に、少絲蠶、匹縑直銀十兩、多衣麻紵。

【麻苧(マチヨ)】〔意義〕アサとカラムシとなり。〔出處〕明一統志に、朝鮮國風俗、多衣麻苧、市䊮如唐。

【麻絲(マシ)】〔意義〕アサとキヌイトとをいふ。〔出處〕禮記禮運篇に、昔者先王云云、未有麻絲、衣其羽皮。

【麻枲(マシ)】〔意義〕麻をいふ、枲も亦麻なり。〔出處〕後漢書崔寔傳に、出爲五原太守、五原土宜麻枲、而俗不知織績、民冬月無衣、積細草而臥其中。

【麻菽(マシユク)】〔意義〕麻と豆とをいふ。〔出處〕史記周紀に、棄爲兒時、屹如巨人之志、其游戲、好種樹麻菽、麻菽美、及爲成人、遂好耕農。

【麻麥(マバク)】〔意義〕麻とムギとをいふ。〔出處〕詩經大雅生民篇に、麻麥幪幪、瓜瓞唪唪と。又た宋史高麗傳に、地寒多山、土宜松栢、有秔黍麻麥、而無秫、以秔爲酒。

【麻布(マフ)】〔意義〕麻にて織りたる布なり。〔出處〕後漢書に、土地多山險、人形似夫餘、而言語各異、有五穀麻布、出赤玉好貂と。又た周書異域傳に、稽胡劉元海五部之苗裔也、其俗少桑蠶、多麻布。

【麻屨(マク)】〔意義〕麻にて造りしクツをいふ。〔出處〕後漢書梁鴻傳に、同縣孟氏有女、狀肥醜而黑、力擧石臼、擇對不嫁、至年三十、父母問其故、女曰、欲得賢如梁伯鸞者、鴻聞而聘之、女求作布衣麻屨。

【麻姑(マコ)】〔意義〕㊀山の名。㊁仙女の名。〔出處〕㊀康熙字典に、麻姑、山名、在建昌南城縣西南、道書、三十六洞天之一、顏眞卿有麻姑壇記、李覯有麻姑山賦、又從姑山在縣東南、以山次于麻姑因名。㊁麻姑搔痒を見よ。

四 麽

五 摩

【麻胡(マコ)】〔意義〕人名。〔出處〕事物紀原に、朝野僉載曰、後趙石勒將麻胡、性虎險鴆毒、有兒啼、每輒恐之、麻胡來、啼聲絕、本草拾遺曰、煬帝將幸江都、命麻胡濬汴河、以木鵝試波深淺、止者死、每兒啼、言麻胡來、即止、人畏若是、演義曰、今俗以麻胡恐小兒、俗傳、麻胡祜爲隋煬帝將軍、開汴河、甚毒虐、人多懼之、胡祜聲相近、以此呼之耳、誤矣、會稽錄云、會稽有鬼號麻胡、好食小兒腦、遂以恐小兒、若麻祜、可以恐成人、豈獨小兒也。

【麻兩(マリヤウ)】〔意義〕數目四十をいふ。〔出處〕雞林類事に、四十曰麻兩。

【麻中之蓬(マチユウノホウ)】ホの部蓬(ホウ)生麻中不扶自直白沙在涅與之俱黑を見よ。

【麻姑之手(マコノテ)】次條を見よ。

【麻姑搔痒(マコソウヨウ)】〔意義〕麻姑は仙女なり、其爪長くして鳥の爪に似たり、若し之を以て痒き處を搔かば、能くその場所に至る、故に事の意の如くなるをいふ。〔出處〕神仙傳に、麻姑手爪不如人爪、形皆似鳥爪、蔡經心中私言、若背大痒時、得此爪以爬背、當佳也。又た李白の詩に、麻姑搔背指爪輕。

【麽蟲(マチユウ)】〔意義〕微細なる蟲をいふ。〔出處〕列子湯問篇に、江浦之閒、生麽蟲。

【摩壘(マルイ)】〔意義〕城壘に逼り近くをいふ。〔出處〕左傳宣公十二年に、摩壘而還。

【摩挲(マサ)】〔意義〕手にて摩擦するをいふ、挲はスルなり。〔出處〕韓愈の石鼓歌に、誰復著手更摩挲。

【摩戛(マカツ)】〔意義〕物と物とが擦れ合て、音響を發するをいふ。〔出處〕晁補之の新城游北山記に、窓閒竹數十竿、相摩戛、聲切切不已。

【摩滅(マメツ)】〔意義〕文字などの摺り消えるをいふ。〔出處〕漢書司馬遷傳に古者富貴而名摩滅、不可勝記と。又た孔安國の尙書序に、錯亂摩滅、弗可復知。

【摩尼(マニ)】〔佛〕〔意義〕珠の通名なり、龍王の腦中より出づといふ。〔出處〕翻譯名義集に、摩尼、因覺鈔又云如意、謂意中所須財寶衣服飲食種種之物、此珠悉能出生、令人皆得如意、故名爲寶。

【摩訶(マカ)】〔佛〕〔意義〕大に勝るといふ義なり。〔出處〕智論に、摩訶具大多勝三義。又た翻譯名義集に、摩訶摩耶、西域記云、唐言大術、或云大幻。

【摩訶陀(マカダ)】〔意義〕〔佛〕中印度の國名にして、城を王舍と名づく、摩訶陀は、不害と譯す、刑殺の法なきを以てなり、又た摩竭提と名づく。〔出處〕楞嚴經に、佛生迦維衞、成道摩竭提、說法波羅柰、入滅俱尸那。

【摩耶夫人(マヤブニン)】〔佛〕〔意義〕淨飯王の后にして、釋迦の母なり。〔出處〕西域記に、摩阿摩耶、唐言大術、或言大幼。

【摩利支夫(マリシフ)】〔佛〕〔意義〕帝釋の眷族にして、日天に附屬し、常に其先驅となりて天下を巡行し、護國護民の

事に從ふといふ。【出處】摩利支天經に、有レ天名摩利支、无レ人能見、常行日前。

【磨子】【意義】挽き臼なり。【出處】品字箋に、磨は今磨子也と。又た河東記に、安邕小磨子、磑成麪訖、即取レ麪作レ餅數枚。

【磨石】【意義】石臼なりといふ、俗に之を挽臼ともいふなり。【出處】晉書天文志に、譬之于蟻行磨石之上、磨左旋、而蟻右去、磨疾而蟻遲、故不レ得レ不レ隨レ磨以左旋焉。

【磨礱】【意義】砥ぎ磨くこと。【出處】磨礱提磑を見よ。

【磨滅】【意義】スリケスなり。【出處】司馬遷書に、古者富貴而名磨滅、不可勝記、惟倜儻非常之人稱焉。又た謝靈運の入華子岡詩に、闕蹤復磨滅、碑版誰問傳。【補】易林に、雷霆所擊、跡者互逆、蹤滅無迹、有懼方息。○賈山の至言に、雷霆之所擊、萬鈞之所壓、無不レ摩滅者。劉勰楊戰の詩に、使君有意仍深遠、即此光華豈滅磨。

【磨勘】【意義】宋の中ごろより、磨勘院を置きて、內外の官吏の淸濁を考課す、後ちに審官院と改稱せり、その例を考ふるに、文官は三年目に一遷し、武官は五年目に一遷し、賢不肖共に進むなり、故に官吏は自ら怠惰に流れ易し。范文正公（名は仲淹、字は希文）大にその弊病を論じて之を變革せられたり。磨はミガクなり、勘は挍勘の義にて、シラベルなり。【出處】宋史孝宗紀に、七年正月、劉煒以平章李接、功擬レ樂英殿修撰、將佐幕屬吏士進官、減磨勘年、有差。又た范文正公文集敍府奏議に云、我祖宗朝、文武百官皆無磨勘之例、惟政能可旌者、擢以不次、無所稱者、至老不遷、故人人自厲以求、積效、今文資三年一遷、武職五年一遷、謂之磨勘、不限內外、不問勞逸、貧不肖並進、此豈堯舜黜陟幽明之意耶。又た歐陽修の范文正公神道碑銘に、革磨勘例遷、以別能否。

【磨崖碑】【意義】唐の元結の撰に係る、大唐中興頌を浯溪の墨石に磨して刻したるによりていふ。【出處】墨池編に、唐元結作中興頌、顏眞卿書、勒于浯溪墨石、名磨崖碑。

【磨礱砥礪】【意義】譏らず〳〵物の減損する喩へ、四字ともトギ。【補】枚乘の諫吳王書に、磨礱砥礪、不見其損、有時而盡。

【磨揉遷革】【意義】磨は琢磨（ミガク）、揉は矯揉（タメル）、遷は善に遷る、革は面を革む、生徒を教へ導きて善に遷らしむるをいふ。【出處】歐陽修の吉州學記に、教學之法本於人性、磨揉遷革、使趨於善、其勉於人者勤、其入於人者漸。【意義】君子は外物の爲めに中心を變ぜざるをいふ。【出處】論語陽貨篇に、不レ曰堅乎、磨而不磷、不曰白乎、涅而不緇と。磷は薄ろぐなり、涅は皂を染むるもの、至堅の物は磨げども薄ろぐことなく、至白の物は涅にて染むれども黑く染むることなしとの義にて、君子は濁亂の中に在りと雖も、汚されざるに喩ふ。

【魔軍退散】【意義】惡魔のムレが退き去るなり。【出處】ネの部念（ネン）佛を見よ。

【毎毎】【意義】常常といふに同じ。【出處】莊子胠篋篇に、天下毎毎大亂と。又た柳宗元の與韓愈論史書に、徒信人口語、毎毎異辭。

【毎月】【意義】一ケ月ごとにといふこと。【出處】北魏書范紹傳に、毎月入見。

【毎頁】【意義】一區畫の場所をいふ。【出處】刑錢必寶に、毎頁兩面各十戶（ケの部頁（ケツ）を參看せよ）

【毎度】【意義】その度ごとにといふ義。【出處】王建の詩に、毎度報初愁入關。

【玫瑰】【意義】美玉の名なり。【出處】念奴篇に、嬖碧珠璣玫瑰巵。注に、玫瑰、美玉也、以美玉爲巵、巵、酒瓶也。

【枚笠】【意義】ハの部枚（バイ）笠を見よ。

【枚卜】【意義】ハの部枚（バイ）卜を見よ。

【枚舉】【意義】ハの部枚（バイ）舉を見よ。

【昧昧】【意義】暗き形容。【出處】書經泰誓篇に、昧昧我思之と。又た楚辭懷沙に、日昧昧其將暮。

【昧爽】【意義】昧は晦、爽は明なり、天明けんとして未だ明けざる時をいふ。【出處】書經太甲上篇に、先王昧爽、丕顯思以待旦。

【昧旦】【意義】前條に同じ、旦は明なり。【出處】詩經鄭風女曰雞鳴篇に、女曰雞鳴、士曰昧旦。

【昧死】【意義】昧は冒に通ず、人臣上書するに、若し言ふ所理に當らざれば、死を以て謝せざる可らず、故に昧死といふ、秦以來上書の套語となれり。【出處】戰國策に、臣昧死望見大王、言所以舉。又た漢書高帝紀に、昧死再拜言大王陛下。

【昧谷】【意義】日の入る處なり、昧は冥なり、日、谷に入りて天下冥し、故に昧谷といふ。【出處】書經堯典篇に分命羲和仲宅レ西、曰昧谷。

【埋沒】【意義】地中にうづもれて世に出でぬこと。【出處】南史郭祖深傳に、飾口利辭、鑽相推薦、訥直守信、坐見埋沒。

【埋玉】【意義】英才ある人の死するをいふ。【出處】晉書庾亮傳に、庾亮將レ歸、何充會之、嘆曰、埋玉樹於土、使人情何能已。

【埋胞】【意義】生るゝ子の胞衣を埋むをいふ。【出處】北魏書太祖道武帝紀に、明年有レ檢、生於埋胞之坎。

【邁】【意義】碩みざるをいふ。【出處】詩經小雅白華篇に、念子悼懊、視我邁邁と、毛傳に、邁邁不悅也、朱傳に、不顧義也。

【參】【意義】マイルと訓し、朝廷へ詣る也。【出處】資治通鑑に、陳文帝永元三年、北齊高歸彥至明欲參と。胡注に、參、朝參也、毛晃曰、參、造也、趨承也

【亡者】ハの部亡（ボウ）者を見よ。

【埋】

【毛】

【毛詩】【意義】詩經をいふ、毛公が傳を作りしにより、齊韓の二家の詩に、區別せんが爲めに、毛の字を冠らして呼ぶなり。【出處】次條及びシの部詩（シ）經を見よ。

【毛公】【意義】一趙の賢士なり。二詩を傳へし人。三後漢の毛萇をいふ。【出處】一史記信陵君傳に、公子聞趙有處士、毛公藏於博徒、薛公藏於賣漿家、乃聞步從兩人游、甚歡。二鄭玄の六藝論に、河間獻王好學、博士毛公善說詩と。又た初學記文部に、孔子刪詩、凡三百十一篇、荀卿授漢人魯國毛亨、亨爲大毛公、萇爲小毛公、以二公所傳、故名其詩曰毛詩。三孟浩然の詩に、捧檄懷毛公、毛義奉檄を參看せよ）

【毛穎】【意義】筆の異稱なり、穎は尖なり、名く。【出處】韓愈、史記列傳に擬して、毛穎傳を作り、毛穎者中山人也云云といひ、其の終りに、太史公曰云云と論贊を揭げたり、近くは唐宋八家文讀本に出づ。

【毛擧】【意義】毫毛ほどの小罪までも擧げるをいふ。【出處】漢書刑法志に、徒鉤一抵微細、毛擧數事。

【毛銖】【意義】極めて小量なるをいふ。【出處】晉書祁嘉傳に、所得未一毛銖所喪如山岳。

【毛食】【意義】毛の食物なり。【出處】後漢書馮衍傳に、飢者毛食と。注に、臣賢按、衍集毛字作無、今俗語猶然者、或古亦通用。

【毛毬】【意義】鳥獸の毛落ち、更に新毛を生じて、潤澤鮮好なるなり。【出處】書經堯典篇に、鳥獸毛毨。

【毛毬】【意義】毛の織物。【出處】鄭玄代酔編に、氈之異名曰毛毬、毛毬之異名曰毛褥、猶竹笠呼爲竹巾、東漢西域傳注、氈曰毛席。

【毛物】【意義】毛ある物、即ち獸類をいふ。【出處】周禮大司徒に、其動物宜毛物。

【毛族】【意義】禽鳥の類をいふ。【出處】馬融の廣成頌に、鼓毛族、牲羽羣。

【毛病】【意義】毛に病のあることをいふ。【出處】山谷刀筆に、此荆南人毛病。

【毛錐子】【意義】イの部安（イグク）用毛錐子を見よ。

【毛鄭詩】【意義】詩經をいふ、毛は毛公、鄭は鄭玄なり。【出處】韓愈の施先生墓銘に、明毛鄭詩。

【毛嬙西施】【意義】二人とも古の美女なり。【出處】管子に、毛嬙西施、天下之美人也と。又た莊子齊物論篇に、毛嬙麗姬、人之所美也、魚見之深入、鳥見之高飛、麋鹿見之決驟、四者孰知天下之正色哉と。又た王褒の讀德論に、毛嬙西施、善毀者不能、善譽者不能、譽其好、毀其惡、譽者不能、揜其醜。

【毛義奉檄】【意義】毛義は貧にして母老いたるを以て、府の召狀來れば、喜びて檄を來したりと。【出處】後漢書趙淳于江劉周趙傅序に、中興、廬江毛義、少節家貧、以孝行聞、南陽張奉慕其名、往

候レ之、坐定而府檄適至、以義守令、義奉レ檄而入、喜動ニ顏色一、來心賤レ之、固辭而去、及ニ義母死一、去レ官行服、後舉ニ賢良一、公車徵、遂不レ至、張奉歎曰、賢者固不レ可レ測、往日之喜、適爲レ親屈也。注に檄、召書也、東觀記曰、義爲ニ安陽尉一、府檄到當レ守レ令也。

六 妄

【妄言】 基義 道理に合はざる言なり。 出處 莊子齊物論篇に、爲レ女妄言之一、女以妄聽之。

【妄語】 基義 他人を誑す語。 出處 後漢書王莽傳に、果妄語也と。又た无量壽經に、兩舌惡口、妄言綺語。

【妄想】 基義 妄りに想像するをいふ。 出處 白居易の詩に、直到ニ曉來一猶妄想。

【妄人】 基義 眞妄なる者。 出處 孟子離婁下篇に、君子曰、此亦妄人也已矣、如レ此則與ニ禽獸一奚擇哉。

【妄語兒】 基義 虛語をいふ者。 出處 世說欲令ニ卿一詣レ許、妄ニ見朝士一、以折ニ中國妄語兒一、卿不レ願レ行、便使ニ張子綱一、恐子綱不レ能レ結ニ兒輩舌一也

【認妄爲眞】 解 基義 妄なることを認知して眞となすをいふ。 出處 圓覺經に、認レ妄爲レ眞、雖眞亦妄。

【自不妄語始】 基義 人は德を誠にする誠は妄語せざるより始まるをいふ。 出處 小學嘉行篇に、劉忠定公見ニ溫公一、問ニ養心行己之要一、可ニ以終ニ身行一之者一、公曰、其誠乎、劉公問ニ行之何先一、公曰、自不ニ妄語一始。

子一則稱爲ニ孟一、所ニ以別一適庶一也。

【孟春】 基義 孟は始なり、玉篇に四時の首月なり、孟月といふと、陰曆にては正月二月三月を春とす、故に孟春は正月なり、夏秋冬皆これに準ず。 出處 禮記月令篇に、孟春之月、日在ニ營室一。

【孟夏】 基義 陰曆四月なり、（前條を見よ） 出處 屈原の懷沙賦に、陶陶孟夏兮、草木莽莽と。又た禮記月令篇に、孟夏之月、日在ニ畢一。

【孟秋】 基義 陰曆七月なり。（孟春を見よ） 出處 禮記月令篇に、孟秋之月、日在ニ翼一。

【孟冬】 基義 陰曆十月なり。（前條を見よ） 出處 禮記月令篇に、孟冬之月、日在ニ尾一。

【孟陬】 基義 陰曆正月の異稱なり。孟は始なり、陬は隅なり。 出處 爾雅に、正月爲ニ陬一と。又た離騷に、攝提貞ニ于孟陬一兮。

【孟月】 基義 四時の始めの月にして、正月四月七月十月をいふ、孟は始めなり。 出處 玉篇に、孟、始也、四時之首月曰ニ孟月一と。又た漢書李尋傳に、貴孟之月。

【孟子】 基義 書名。 解說 此書は、周の孟軻の撰なり、孟子は孔子に後るゝこと百餘年、鄒國（今の山東省に屬す）に生れて、樂を子思の門人に受く、戰國の尤も亂れたる時に出でたれば、其論ずる所切當なれども、之を用ふる君なく、施す所なく、門人萬章の徒と孟子七篇を作れりと云ふ、其說性善の二字を本と爲し、仁義王道を行ふを主張せり、十三經に列するは、後漢の趙岐の注、宋の孫奭（爲撰）の疏にして、十四卷あり、四書に列するは、宋の朱熹の注、孟子集注七卷是なり。

【孟叟】 基義 孟子を指す、叟は老父の稱。 出處 抱朴子に、散ニ微言于將ニ墜一、孟叟者、周孔之遐武也、情孜孜以爲ニ利者一、孟叟一の叟不レ達ニ千里一而來に本づけり。

【孟勞】 基義 寶刀の名なり。 出處 孫氏家訓勉學篇に、穀梁傳稱、公子友與ニ莒挐一相搏、左右呼曰、孟勞、孟勞者、魯之寶刀名と。又た廣雅釋器に、孟勞、孟勞者、魯之寶也。

【孟浪】 基義 莊子の音義に、向氏云、趣舍なきの謂なり。崔氏云、精要ならざる貌、文選の注に、委細ならざる貌。 出處 齊物論篇に、瞿鵲子曰、夫子以爲ニ孟浪之言一、而我以爲ニ妙道之行一也。 解說 この二字、古來漫漶（マンラン）の音に讀むは、唐音なり、されど清の朱亦棟は、孟浪二字切音爲ニ莽、皆宜ニ如字作ニ去聲一讀一といり、此說從ふべし。

【孟行】 基義 妄りなる行なり、孟は大なり。 出處 管子任法篇に、高言孟行以過ニ其情一。

【孟晉】 基義 勉めて進取するをいふ。 出處 班固の幽通賦に、盡ニ孟晉以資進一也。

【孟韓】 基義 孟子と韓愈となり、二人並に文章に長ず、故に併せて稱するなり。 出處 蘇洵の上田樞密書に、孟韓之溫醇。

【孟婆】 基義 風神をいふ。 出處 堅瓠集に、古稱ニ風神一爲ニ孟婆一、按北齊李騊駼聘陳、問ニ陳士秀一曰、江南有ニ孟婆一、是何神也、士秀曰、山海經帝女遊ニ于江一、出入必以ニ風雨一自隨、以其帝女、故稱ニ孟婆一。

【孟子編年】 基義 書名。 解說 清の狄子奇の撰にして、四卷あり、孟子は鄒人なるも、其世系の考ふべきなし、因て周史を以て年を綴し、七國諸侯の年を其下に繫け、孟子の事蹟七國と相涉るものは悉く之を擧ぐ、又列國の孟子と關係なきものといへども、孟子と相發明するに足るものは、附錄として參考に供せり。

【孟浩然集】 基義 書名、解說 唐の孟浩然の撰にして、四卷あり、刊本數種ありて、其詩多寡各同じからざるも、宣城の王士元の詮次せるを以て正本とす、之を遊覽、贈答、旅行、送別、宴樂、懷思、田園、美人、時令、拾遺に類別して列せり、卷一は五古、卷二は七古五排、卷三は五律、卷四は五律七律五絕七絕とす、其詩の流派は、陶淵明に近く、自然を以て宗とす、王維と名を齊しくせり。

【孟東野集】 基義 書名。 解說 唐の孟郊の撰にして、十卷あり、此書數種あるも、宋敏求、遺逸を總括し、重複を刪除して、十四類に分つ、樂府感興、詠懷、遊適、居處、行役、紀贈、懷寄、酬答、送別、哀傷、聯句、讚書なり、其詩は興に託する深微にして、結體は古奥なり、韓愈之を稱引し

六 罔

【罔罔】 基義 心のウツトリとする貌。 出處 張衡の東京賦に、罔罔然若レ醒。

【罔然】 基義 前條を見よ。

【罔罟】 基義 アミなり、獸を取るを罔と曰ひ、魚を取るを罟と曰ふ、罔は本字なり。 出處 易經繫辭下傳に、古者包犧氏之王ニ天下一也、作ニ結繩一而爲ニ罔罟一、以佃以漁と。又た關尹子に、聖人師ニ蜂立君一臣、師ニ蜘蛛一立ニ罔罟一、師ニ拱鼠一制レ禮、師ニ戰蟻一置レ兵。

【罔兩】 基義 莊子齊物論篇に、罔兩問ニ景曰、曩之行、今之止、曩之坐、今之起、何其無ニ特操一與、景曰、吾有ニ待而然者邪、吾待ニ蛇蛻蟬翼一邪、惡識ニ所一以然一、惡識ニ所一以不レ然。（チの部蟒（チ）魅罔兩を參看せよ）

【罔象】 基義 水中に居る怪物なり、一には水神といふ。 出處 莊子達生篇に、水有ニ罔象一と。音義に、罔象は狀小兒の如く、赤黑色、赤爪大耳長臂。

【罔風】 基義 秋季に吹く暴風なり。 出處 禮記月令篇に、仲秋盲風至。

【盲目】 基義 西國行記に、盲目如レ故。 出處 淮南子說林訓に、母、貽ニ盲目鏡一、母、予ニ聾者履一。

【盲者】 基義 林訓に、母、貽ニ盲者鏡一、母、予ニ聾者履一。

【盲棋】 基義 定石の法に從はざる棋の打ち方なり。 出處 洪咨夔の詩に、掠レ邊趁手是盲棋。

【盲者失レ杖】 基義 危輯する所を失ふをいふ。 出處 陳同甫集に、惘然若ニ盲者失一杖。

【盲者不レ忘レ視】 解 基義 逸ひ難きに喻ふ。 出處 阿含經に、佛告ニ諸比丘一、譬如ニ大海中有一盲龜一、壽無量劫、百年一過出ニ頭一、浮有ニ一木一、正有ニ一孔一、漂流海浪、隨ニ流東西一、盲龜百年一出得レ遇ニ此孔一、至ニ海東一、浮木或至ニ海西一、闇龜亦爾、雖ニ復差遇一、或復相得、凡夫漂流五趣之海、還復人身、甚難ニ於此一。

【盲者鏡】 基義 盲人に鏡を贈るなかれとて、用を爲さゞるをいふ。 出處 淮南子說林訓に、母、貽ニ盲者鏡一、母、予ニ聾者履一。

【盲人騎ニ瞎馬一夜半臨ニ深池一】 基義 危險なる喩なり、瞎は獨眼なり。 出處 世說排調篇に、桓南郡（玄）與ニ殷荊州一（仲堪）語夾、因共作ニ了語一、夾復作ニ危語一、桓曰、矛頭淅ニ米劍頭炊一、殷曰、百歲老翁攀ニ枯枝一、（顧愷之曰、井上轆轤臥ニ嬰兒一、殷有ニ參軍一在坐一、云、盲人騎ニ瞎馬一、夜半臨ニ深池一、殷曰、喃喃過レ人、仲堪眇目故也。

【孟】 基義 庶出の長兄を孟といふ（嫡出の長兄を伯といふ） 出處 禮緯に、嫡長曰ニ伯一、庶長曰ニ孟一と。又た左傳隱公元年惠公元妃孟子の疏に、孟仲叔季、兄弟姊妹、長幼之別字也、孟伯、俱長也、禮緯云、庶長稱ニ孟一、然則適妻之子長者稱ニ伯一、妾子長者稱

て忘年の交を爲すといへり。

【孟賁之勇】 [訓]衛の人にて大勇あり。[出]説苑に、勇士孟賁水行不レ避二蛟龍一、陸行不レ避二狼虎一。

【孟詩韓筆】 [訓]孟郊の詩と、韓愈の文となり。[出]四語錄に、韓文公與二孟東野一友善、韓公文至高、孟長二於五言一、時號二孟詩韓筆一。

【孟嘉落帽】 [訓]晉の孟嘉が九月九日の宴席にて、風に帽子を吹き落されし故事。[出]晉書孟嘉傳に、嘉字萬年、江夏人、少知名、爲二征西桓溫參軍一、溫甚重之、九月九日、溫燕二龍山一、寮佐畢集、時佐吏皆著二戎服一、有風至吹二嘉帽一墮落、嘉不二之覺一、溫使二左右勿言一、欲二觀其舉止一、嘉良久如レ廁、溫令二取還之一、令二孫盛一作レ文嘲レ嘉、著二嘉坐一、嘉還見即答之、其文甚美、四坐嗟嘆。又た蘇軾に、孟嘉落帽と。[解]唐の趙嘏の重陽日寄二韋會人一に、節過二重陽一菊委レ塵、江邊病起杖扶レ身、不レ知此日龍山會、誰是風流落帽人。[解]杜甫の九日藍田崔氏莊の詩に、老去悲二秋强一目寬、興來今日盡二君歡一、羞將二短鬢一迎吹レ帽、笑傳二旁人一爲正冠、藍水遠從二千澗落一、玉山高並二兩峰寒一、明年此會知誰健、醉把二茱萸一仔細看。詩人玉屑に云、孟嘉以二落帽一爲二風流一、少陵以二不落一爲二風流一、翻二盡古人公案一、最爲二妙法一。

【孟母斷機】 [訓]タの部斷(ダン)機之譬を見よ。

【孟曰取義】 [訓]孟は孟子、取義は、命を生而取レ義の略なり、生命を抛ちて義を行ふなり。[出]文天祥の衣帶贊の語なり。(全文コの部孔(コウ)日)成仁に見ゆ) [出]これ孟子告子上篇に、生亦我所レ欲也、義亦我所レ欲也、二者不レ可レ得レ兼、舍二生而取一レ義者也とあるに本け

二 猛

【孟施舍之勇】 [訓]古の勇者の名。孟は姓にして、舍は、名なり、施とは發語の詞なり。[出]孟子公孫丑上篇に、孟施舍之所レ養、勇也、曰、視レ不レ勝、猶レ勝也、量二敵而後進一、慮二勝而後會一、是畏二三軍者也。

【孟母三遷之教】 [訓]サの部三(サン)遷之教を見よ。

【孟子十七弟子】 [訓]シの部十(ジフ)七弟子を見よ。

【孟子生卒年月日考】 [訓]書名なり。[出]此書は一卷にして、清の閻若璩の撰なり、若璩字は百詩といふ、尙書古文疏證の著あり、由來孟子は生卒年月日を詳にせず、今此書は生卒年月日より、齊梁諸國に往來せし年月、及び七篇の作者等に就きて、精細に考據する所あり。

【孟宗冬節入レ林得筍】 [訓]孟宗は、王孝の人なり、冬月に筍を得たりといふ故事。[出]三國吳志に、左蒙御史孟宗有二孝道一、母性嗜筍、及母亡、冬節宗入レ林哀泣、而筍生、得二以供一二祭祀一。

【猛將】 [訓]陵の書に、猛將如レ雲、謀臣如レ雨。[出]李陵の答二蘇武一書に、猛將如レ雲、謀臣如レ雨。

【猛士】 [訓]漢高帝の大風歌に、安得二猛士一守二四方一。

【猛火】 [訓]烈しく燃えたる火。[出]書經胤征篇に、烈二于子猛火一。

【猛虎】 [訓]書兵志に、猛虎所二以百獸畏一者、爪牙也、爪牙廢、則孤豚特豕能爲レ敵。

【猛獸】 [訓]春秋に、猛獸將レ擊、必弭耳帖伏。

【猛將如レ雲】 [訓]勇猛の將士多く集りたるをいふ。[出]李陵の答二蘇武一書に、猛將如レ雲、謀臣如レ雨。

【猛虎爲レ鼠】 [訓]虎も威を失へば鼠のごとくなる、君の權を失ふときは、下臣に制せらるに比す。[出]李白の詩に、君失レ臣兮龍爲レ魚、權歸レ臣兮虎變レ鼠。

【猛虎一聲山月高】 [訓]唐人の詩の句。深山夜中の物凄き光景を寫せしなり。[出]俞紫芝の詩に、夜深童子喚不レ起、猛虎一聲山月高。

【猛虎在二深山一百獸震恐】 [訓]載傑の士其の處を得れば、衆人畏服するに喩ふ。[出]司馬遷の書に、猛虎在二深山一百獸震恐、及レ在二陷穽之中一、搖二尾求一レ食。

【猛獸將擊必弭耳帖伏】 [訓]猛き獸が將に擊んとするときは、耳を垂れ平伏して故意にその驕きを示すをいふ。[出]吳越春秋に、猛獸將擊、必弭耳帖伏。

【猛虎猶豫不レ如二蜂蠆致一レ螫】 [訓]事は決斷して行ふべき喩なり。[出]史記淮陰侯傳に、知者決之斷也、疑者凶之害也、蜂蠆之小計、遺二天下之大數一、智誠知之、決非敢行者、百事之禍也、故曰、猛虎之猶豫、不若二蜂蠆之致一レ螫、云云、此言貴二能行一之。[解]說苑說叢篇に、猛獸狐疑不若二蜂蠆之致一レ毒也、高議而不レ可レ及、不若二卑論之有一レ功也。

三 惘

【惘惘】 [訓]同同に同じ、志を失ふ貌。[出]楚辭九章に、超惘惘而遂行と。又た晉書荀勗傳に、勗久在二中書一、專管二機事一、及爲二尙書令一、甚惘惘恨恨。

【惘然】 [訓]ボンヤリとして明かならざる貌。[出]江淹の詩に、酒至情蕭瑟、視登遐惘然。

四 莽

【莽莽】 [訓]草木莽莽。[出]楚辭天問に、草木莽莽。

【莽蒼】 [訓]莊子逍遙遊篇に、適二莽蒼一者、三飡而反、腹猶果然。

【莽大夫揚雄死】 [訓]揚雄は王莽に仕へて大夫となりたれば、朱子、通鑑綱目に、その節を失へるを責めて、此の如く筆誅せられしなり。[出]通鑑綱目に、戊寅(新莽天鳳五年)莽大夫揚雄死と。書法に云、莽大夫多矣、特書二揚雄一、所二以深病一雄也。

四 網

【網羅】 [訓]一獸を捕り魚を取るアミをいふ。二轉じて人物を一歳に網めるをいふ。[出]一莊子山木篇に、然且不レ免二于網羅機辟之患一、是何罪之有哉。又た淮南子に、伯余之初作レ衣也、絟二麻索一、綫、手經指挂、其成曾網羅、後世爲之機杼。二

【網中】 [訓]網の中に入るをいふ。[出]宋史に、前有二堅城一、後有二大河一、勁兵四面至、被或南下、墜二吾網中一矣。

【網目不レ疎】 [訓]ず、法律の細密なるをいふ。[出]世說言語上篇に、劉公幹以二失敬一罪、文帝問曰、卿何以不レ進二於文章一、植答曰、臣誠庸短、亦由二陛下網目不レ疎一。

【網漏二於呑舟之魚一】 [訓]アの部網(アミ)漏二於呑舟之魚一を見よ。

【網巨】 [訓]同(マウ)巨を見よ。

【網疏】 [訓]網の目のあらきをいふ、法律の寬なるに比す。[出]鹽鐵論に、網疏則獸失、法疏則罪漏。

【網捕】 [訓]網にて魚を捕ふるをいふ。[出]張籍の青溪閣記に、放生池者、皆禁二網捕一、所以宣二皇明一而廣二慈愛一。

【網蟲】 [訓]網を張りたるが如く巢をかける蜘蛛をいふ。[出]沈約云云、皆禁二網捕一、所以宣二皇明一而廣二慈愛一。

【網積】 [訓]蜘蛛の巢の多きをいふ。[出]駱賓王の詩に、網積窓文亂、苔苔若二蹤跡一殘。

【網密】 [訓]網の目の細密なるをいふ。[出]薛道衡の老氏碑に、魚驚二網密一、鳥亂二弓多一と。又た元稹の蜘蛛の詩に、網密將レ決レ食、絲劣誤レ著レ人。

【網周】 [訓]道德指歸論に、隆刑網密將レ決レ食、絲劣誤レ著レ人。[出]飯間、網直刻深、法察網周、愛毒少恩、諸侯長忌。

【網絡】 [訓]網カゝりなり、堂の軒に垂れて鳥を拒ぐもの。[出]大鍵雜記に、乾陽殿基柱大二十四圍、倚井垂二連、仰之者眩曜、南軒垂以二珠絲網絡一、下不レ至地七尺、以防二飛鳥一。

五 網

【網川圖】 [訓]川の勝景を畫きたる圖なり。[出]唐朝名畫錄に、王維畫二網川圖一、山谷鬱盤、雲水飛動、意出二塵外一、怪生二筆端一、案太虛云、余臥レ病、高符仲携二網川圖一示予曰、閱此則可二以寧一病、予莞喜、恍然若二與二摩詰一入二網川一、數日而疾癒。

六 魍

【魍魎】 [訓]チの部魑(チ)魅罔兩を見よ。

蒔

【蒔繪硯】 [訓]マキエを施したる硯をいふ。[出]宋史日本國傳に、端拱元年、貢二金銀蒔繪硯一、宮一、合納金硯一、鹿毛筆、松煤墨、金銅水瓶、鐵刀。

枕

【扇レ枕】 [訓]扇ぎしをいふ。[出]東觀漢記に、黃香年七歲、事二親孝一、暑月扇レ枕、寒則身溫二枕席一。

【高枕而臥】 [訓]安心して寢ぬること。[出]史記張儀傳に、無二楚患一、卽大王高枕而臥、國必無憂と。又た史記留侯世家に、君安得二高枕而臥一。

マクラ 枕

【安枕而臥】 意義安心して眠るをいふ。出典漢貴妻敬傳に、陛下亦未得安枕而臥。

マゴ 孫

【孫】 意義子の子をいふ。出典説文に、孫、系也。

マコト 允

【允矣】 意義誠に當れりといふこと。出典詩經小雅車攻篇に、允矣君子、展也大成。

【允文允武】 意義誠に文武の兩道並び盛なるをいふ。出典詩經魯頌泮水篇に、穆穆魯侯、敬明其德、敬慎威儀、維民之則、允文允武、昭假烈祖、龔承于孝、自求伊祜。

【允執其中】 意義誠に其の中庸の道を執り行ふをいふ。出典書經大禹謨篇に、惟精惟一、允執厥中。又た論語堯曰篇に、堯曰、咨、爾舜、天之曆數在爾躬、允執其中。

マコト 誠

【誠哉】 意義其の言の如くなりと許し如期曲、智、齊萬年、亦誠哉。

【致誠則無他事】 意義人は誠より外に一事なきをいふ。出典荀子不苟篇に、君子愛心、莫善於誠、致誠則無他事矣、唯仁之爲守、唯義之爲行。

【誠者天之道也】 意義實著にして僞なきは、天道の本也、誠之人之道也と。又た孟子離婁上篇に、誠者天之道也、思誠者人之道也、至誠而不動者、未之有也、不誠未有能動者也。

マサニ 鼎

【鼎盛】 意義年の壯なるをいふ、鼎は、書賈說傳に、春秋鼎盛。

當

【當從古人中求】 意義人の大に優れて、當世に其の比なし、只古人中に求むべきないふ。出典帝閏、其名問、我曰、爽甫、晉書王衍傳に、武帝閏、其名問、我曰、當世誰比、我曰、宋、見其比、當從古人中求耳。

【當斷不斷反受其亂】 意義猶豫して時機を失へば、利を得べきことも卻て害を受くるに至るをいふ。出典史記春申君傳贊に、當斷不斷、反受其亂。又た齊悼惠世家に、道家之言を引て曰く、當斷、不斷反受其亂。

應

【應有】 俗語意アルトアラユルといふこと。出典水滸傳楔子に、應有民間殺賦、悉皆赦免。

【賣交】 意義賣は賣くり、友人を賣くを天下稱して賣交と。況は賣寄の字なり、意義漢書に賣、友に作る。

【息交】 意義世間の人と交際を絶つなり。出典陶潛の歸去來辭に、息交以絶遊。

【交淺言深】 意義交際日淺くして、その言ふ所反りて深きないふ。出典戰國策に、客有見人於服子者、服子謂之曰、交淺而言深、是亂也、客曰、不然、交淺而言深忠也、昔者、堯見舜於草茅之中、桑陰移而受天下傳、使交淺者不可以深談、則天下不傳也と。又た後漢書崔駰傳に、交淺而言深者愚也。

【交絶不出惡聲】 意義君子は絶交の後も、其人の惡事を言はざるをいふ。出典史記樂毅傳に、古之君子、交絶不出惡聲、忠臣去國、不潔其名。

マス 升

【升】 意義物を量るに用ふる具、マスなり。出典孫臏傳論經に、得一水升、其實是斛攫。

マタ 又

【又生一秦】 意義秦は既に我が敵なり、今又た一の敵を增すなり。出典史記張耳傳に、陳王大怒、欲盡族武臣等家、而發兵擊趙、陳王相國房君諫曰、秦未亡而誅武臣等家、此又生一秦也。

也

【也】 意義マタと訓ず。亦と略ず同じ。出典宋參の詩に、也知鄉信日應疎と。又た杜甫の詩に、也傳敲詩夢、獨鳧。

タ 亦

【亦】 意義マタと訓ず其の用法種種あり。出典經傳釋詞に、亦承上之詞也、若書康誥曰、怨不在大、亦不在小、是也、昭十七年公羊傳注曰、亦者、兩相須之意、常語也。○有不承上文而但爲語助者、若易井象辭曰、亦未繘井、是也。○凡言不亦者、皆以亦爲語助、不亦說乎、不說乎也、不亦樂乎、不樂乎也、不亦君子乎、不君子也、趙岐注孟子滕文公篇曰、不亦者、亦也、失之。○凡言盍亦者、亦以亦爲語助、盍亦求之、盍求之也。（左傳僖公二十四年）。

ヤ 復

【復奚疑】 意義天命に一任したれは否は亦何を疑はんやといふ意。出典陶潛の歸去來辭に、樂夫天命、復奚疑。

【非復吳下阿蒙】 コの部吳（ゴ）下阿蒙を見よ。

マツ 末

【末】 ハの部末（バツ）を見よ。

【末學】 ハの部末（バツ）學を見よ。

【末光】 ハの部末（バツ）光を見よ。

【末節】 ハの部末（バツ）節を見よ。

【末減】 ハの部末（バツ）減を見よ。

【末作】 ハの部末（バツ）作を見よ。

【末利】 ハの部末（バツ）利を見よ。

【末疾】 ハの部末（バツ）疾を見よ。

ハ 抹

【抹額】 意義布を以て額を括ること、俗原に、二儀實錄曰、禹娶塗山之夕、大風雷電、中有甲卒千人、其不被甲者、以紅帕抹其頭額云、海神來朝、禹問之、對曰、此武士之首服也、秦始皇至海上、有神朝、皆抹額、緋衫大口袴、侍衛自此抹額、遂爲軍容之服。

マツ 抹

【抹殺】 意義抹は拂ふなり、又た塗り滅すなり、殺は助字なり。出典陳書谷永傳に抹殺災異。出典殺、又た手に从ひ殺に作る。韓は拂ひ滅すなり。韓愈の孟郊墓誌に、惟其大醜於鮮、而與世抹韓。

【抹餘】 意義茶の煮立ちたる花の浮きもの。出典茶經に、凡酌茶置諸器、謂之水餘、細輕者曰花。

マツ 松

【夢松】 意義松が腹の上に生ずる夢を見て、それより十八年にして三公の位となりし故事。出典吳錄に、丁固夢松樹生其腹上、人謂曰、松字十八公也、後十八年其爲公乎、遂如夢。

マツタキ 全

【求全毀】 意義完全なることを求むるをいふ。出典孟子離婁上篇に、有不虞之譽、有求全之毀。

マツリ 祭

【祭】 意義天神地祇の祭りなり。出典周禮春官に、春祭曰礿、夏祭曰禴、秋祭曰嘗、冬祭曰烝と。又た邢疏に、此皆周禮也、殷以上則礿禴烝嘗王制文也、周公去夏禘之名、以春祠夏禴、嘗之更名、春曰祠と。又た禮記王制篇に、天子諸侯宗廟之祭、春曰礿、夏曰禘、秋曰嘗、冬曰烝と。鄭注に、此蓋夏殷之祭名、周則改之、春曰祠、夏曰礿、以禘爲殷祭。

【末造】 ハの部末（バツ）造を見よ。

【末坐】 ハの部末（バツ）座を見よ。

【末路】 ハの部末（バツ）路を見よ。

【末葉】 ハの部末（バツ）葉を見よ。

【末代】 ハの部末（バツ）代を見よ。

【末世】 ハの部末（バツ）世を見よ。

【末孫】 ハの部末（バツ）孫を見よ。

【末茶】 ハの部末（バツ）茶を見よ。

【末香】 ハの部末（バツ）香を見よ。

【末代孫】 ハの部末（バツ）代孫を見よ。

マツダイ

マツヒ

マツ

マツ

**マツ

マツリコト 政

【祭豐年不奢】 意義祭祀は豐年にても例年に增さずといふこと。出處禮記王制篇に、祭、豐年不奢、凶年不儉。

【安政】（マツリコト） 意義人民は上の政事の善なるに、安堵してゐるといふ。出處荀子に、庶人安政、然後君子安位。

【政貴有恆】（マツリコト） 意義政を爲すには仁義を主として恆に守る所あるべきをいふ。出處書經畢命篇に、政貴有恆、辭尙體要、不惟好異、商俗靡靡、利口惟賢、餘風未殄、公其念哉。

【政如魯衞】（マツリコト） 意義政事は魯と衞とのいふ、魯の周公と衞の康叔とは、元來兄弟なればなり。出處論語子路篇に、魯衞之政兄弟也と。又た漢書馮奉世傳に、大馮君小馮君、兄弟繼、踰相因循、聰明賢智、惠吏民、政如魯衞、德化均、周公康叔猶二君。

【政如蒲蘆】（マツリコト） ホの部蒲(ホ)蘆を見よ。

【政寬則民慢】（マツリコト） 意義政事が寬大なるときは、民は上を畏れずして怠るをいふ。出處グの部寬(クワン)猛相濟を見よ。

【爲政在去三冗】（マツリコト） 意義政事を爲すは、三の冗多なるものを去るに在りといふ。出處增韻に、冗、雜也、剩也、忙也、今無事俗員曰冗官、蘇軾曰爲政在去三冗、冗官、冗兵、冗費。

【窗含西嶺千秋雪】（マト） モの部門(モン)泊東吳萬里船を見よ。

マトヒ 惑

【解惑】（マトヒ） 意義人の心に迷ひ惑へることを解くをいふ。出處韓愈の師說に、古之學者必有師、師者、所以傳道授業解惑也。

マナヒ 學

【學而不思則罔】 意義學問しても己の心に思考せざれば昧くして明かならざるをいふ。出處論語爲政篇に、學而不思則罔、思而不學則殆。

【學不厭而敎不倦】（マナビ） 意義孔子の篤學、人に過ぐるをいふ。出處孟子公孫丑上篇に、宰我子貢善言德行、孔子兼之、曰、我於辭命、則不能也、然則夫子既聖矣乎、曰、惡是何言也、昔者子貢問於孔子曰、夫子聖矣乎、孔子曰、聖則吾不能、我學不厭、而敎不倦也、子貢曰、學不厭智也、敎不倦仁也、仁且智、夫子既聖矣。 論語述而篇に、子曰、默而識之、學而不厭、誨人不倦、何有於我哉。 論語呂氏春秋に、好學而不厭、好敎而不倦。

【學者如牛毛成者如麟角】（マナブ） 學問に志す者は牛の全身に毛あるが如く衆きも、成業するものは麒麟の角の如く稀なりといふこと。出處抱朴子極言篇に、或問曰、古之仙人、皆由學以得之、將特稟異氣耶、答曰、被莫不負笈隨師積其功勤、乃得升堂以入於室、或朝爲而夕欲其成、或坐修而立望其效、故爲者如牛毛、獲者如麟角也と。又た北史文苑傳序に、及朗皇御曆、文雅大盛、學者如牛毛、成者如麟角、孔子曰、才難、不其然乎。 意義路賓王の啓に、業成麟角、引茅茹而彈冠。 出處蔣子萬機論に、學如牛毛、成如麟角。

【謂學不暇者雖暇亦不能學矣】（マナブ） 意義凡民の學を好まざるをいふ。出處淮南子說山訓の語なり。高注に、言有事務、不暇學、如此賈之人、雖閒暇無務、亦不能學也。

マネカ 速

【不速之客】 意義速は招なり、待ち設けざる客なり。出處易經需卦に、上六、入于穴、有不速之客三人來、敬之終吉と。象傳に、不速之客來、敬之、終吉、雖不當位、未大失也。

マヘ 前

【跋前疐後】（マヘ） 意義進退共に自由ならざるをいふ。出處傳愈の進學解に、跋前疐後、動則得咎。 意義詩經豳風狼跋篇に、狼跋其胡、載疐其尾。載は則なり、路は路づくなり、老狼には胡として垂るる肉あり、進めば其の胡をふみ、退けば其の尾に路くなり。

【瞻前顧後】（マヘ） 意義事を處するに能く、前後を顧慮するなり。出處離騷に、瞻前而顧後兮、相觀民之計極と。又た後漢書張衡傳に、向使能瞻前顧後、則何陷于凶患乎。

【前不見古人後不見來者】（マヘ） 意義唐人の詩の句。出處陳子昇の登幽州臺歌に、前不見古人、後不見來者、念天地之悠悠、獨愴然而涕下、

マン 卍

【卍】（マン） 意義萬の字なり。出處康熙字典に、字彙補、內典萬字。亮敢詩、蓮花卍字總由天。

【卍字欄】（マンジ） 意義卍の形に組み成せる手摩欄干菊半開。出處和凝の詩に、卍字欄干菊半開。

マン 孟

【孟浪】（マンロウ） 孟(マ)浪を見よ。

マン 曼

【曼曼】（マンマン） 意義長き貌。出處離騷に、路曼曼其修遠兮と。又た寄戚の飯牛歌に、長夜曼曼何時旦と。又た司馬相如の長門賦に、夜曼曼其若歲。

【曼聲】（マンセイ） 意義長き聲なり。出處淮南子汎論訓に、曼聲之歌と。又た列子湯問篇に、昔韓娥東之齊匱糧、過雍門、鬻歌假食、既去而餘音繞梁欐、三日不絕、左右以其人弗去、過逆旅、逆旅人辱之、韓娥因曼聲哀哭、一里老幼悲愁垂涕、相對三日不食、遽而追之、娥還復爲曼聲、長歌一里老幼喜躍忭舞、弗能自禁、忘向之悲也、乃厚賂發之、故雍門之人、至今善歌哭、放娥之遺聲。

【曼辭】（マンジ） 意義美しく飾りたる辭。出處戰國策に、夫從人飾辯曼辭高坐平之節行。

【曼膚】（マンフ） 意義肌膚の光澤あるをいふ。出處楚辭天問に、平脅曼膚、何以肥之。

【曼頰】（マンケウ） 意義キメの細かなる頰。出處淮南子俶務訓に、曼頰皓齒。

【曼姬】（マンキ） 意義美姬をいふ。出處漢書司馬相如傳に、鄭女曼姬と。注に、曼者言其色理曼澤也。

【曼陀羅】（マンダラ） 意義雜色の纖なり、また浮土の貴相を蔓けるものをいふ。出處本草曼陀羅花の條に、李時珍云、曼陀羅、梵言雜色也。

マン 萬

【萬寶】（マンハウ） ハの部萬(バン)寶を見よ。

【萬乘】（マンジヨウ） ハの部萬(バン)乘を見よ。

【萬歲】（マンザイ） ハの部萬(バン)歲を見よ。

【萬有】（マンイウ） ハの部萬(バン)有を見よ。

【萬刼】（マンカウ） ハの部萬(バン)刼を見よ。

【萬全】（マンゼン） ハの部萬(バン)全を見よ。

【萬區】（マンク） ハの部萬(バン)區を見よ。

【萬福】（マンフク） ハの部萬(バン)福を見よ。

【萬金】（マンキン） ハの部萬(バン)金を見よ。

【萬葉】（マンエウ） ハの部萬(バン)葉を見よ。

【萬石】（マンセキ） ハの部萬(バン)石を見よ。

【萬一】（マンイチ） ハの部萬(バン)一を見よ。

【萬鎰】（マンイツ） ハの部萬(バン)鎰を見よ。

【萬頃】（マンケイ） ハの部萬(バン)頃を見よ。

【萬鈞】（マンキン） ハの部萬(バン)鈞を見よ。

【萬斤】（マンキン） ハの部萬(バン)斤を見よ。

【萬鍾】（マンシヨウ） ハの部萬(バン)鍾を見よ。

【萬仞】（マンジン） ハの部萬(バン)仞を見よ。

【萬花會】（マンクワクワイ） ハの部萬(バン)花會を見よ。

【萬年芝】（マンネンシ） ハの部萬(バン)年芝を見よ。

【萬人坑】（マンニンカウ） ハの部萬(バン)人坑を見よ。

【萬歲塲】（マンザイヨウ） ハの部萬(バン)歲塲を見よ。

【萬歲樂】（マンザイラク） ハの部萬(バン)歲樂を見よ。

【萬歲後】（マンザイゴ） ハの部萬(バン)歲後を見よ。

【萬歲天子】（マンザイテンシ） ハの部萬(バン)歲天子を見よ。

【萬代不易】（マンダイフエキ） ハの部萬(バン)代不易を見よ。

【萬世不刊】（マンセイフカン） ハの部萬(バン)世不刊を見よ。

【萬世統譜】（マンセイトウフ） ハの部萬(バン)世統譜を見よ。

【萬夫之望】（マンプノボウ） ハの部萬(バン)夫の望を見よ。

【萬乘之君】（マンジヨウノキミ） ハの部萬(バン)乘之君を見よ。

【萬乘之主】（マンジヨウノシユ） ハの部萬(バン)乘之主を見よ。

【萬壽無疆】（マンジユムキヤウ） ハの部萬(バン)壽無疆を見よ。

四 滿

【萬人異心】 ハの部萬(バン)人異心を見よ。

【萬不失一】 ハの部萬(バン)不失一を見よ。

【食萬人之力】 ハの部食萬(バン)人之力を見よ。

【得萬人之兵】 ハの部得萬(バン)人之兵を見よ。

【萬死不顧一生】 ハの部萬(バン)死不顧一生を見よ。

【滿月】 ふくらみ子を孕みて十月に滿つるをいふ。出典通俗編に、北史節婦傳に、李式坐事被收、子憲生、始滿月、汲固抱歸撫之、按、滿月二字見此、其以爲慶宴則始于唐、周書高宗紀、龍朔三年子旭輪生、滿月大赦、外戚傳、安樂公主產男、滿月、中宗幸后幸其第、李嶠有長寧公主滿月侍宴詩、今或文其辭、曰、彌月、詩經彌月、彌猶滿也、鄭氏曰終、十月而生、惟呂文成注、彌滿也、然亦非、謂見生及月、不若直云滿月爲是矣、元稹集有妻滿月詩、蘇乳酪論、一月、亦云滿月、今語猶然。

【滿籯】 籯は、カゴ、三四斗を受く、滿と。出典ヨの部遺子(コ)黃金滿籯、不如一經を見よ。

【滿讕】 讕は誣ひ欺くなり。出典漢書谷永傳に、滿讕誣天。

【滿假】 すなり。出典書經大禹謨篇に、克勤于邦、克儉于家、不自滿假。

【滿貫】 エの部錢(ェイ)貫を見よ。

【滿坐】 坐中の多くの人をいふ。出典福林玉露に、滿坐失色と。又白居易の琵琶行に、滿座聞之皆掩泣。

【滿足】 十分に足るをいふ。出典南齊張敬兒傳に、意知滿足。

【滿酌】 杯に一ぱい酒を酌むこと。出典西陽雜俎に、命吏滿酌。

【滿洲】 朝先世、發詳於長白山、山高二百餘里、鴨綠混同愛滑三江出焉、望氣者地夢生聖人、註諸國、山之東有布庫里山、山下有池、曰布爾里湖、相傳有天女三、長恩固倫、次正固倫、季佛庫倫、浴於池、浴畢、有神鵲銜朱果置季女衣、季女吞之、遂有身、娶產一男、生而能言、體貌奇異、及長、母告之、故因命之曰天生、汝以定亂國、其以愛新覺羅爲姓、布庫里雍順爲名、母凌波去、子乘小舟、順流至河步、登岸折柳及野葡萄爲坐具、端跌其上、其地有三姓、爭雄長、擁兵仇殺、有取水者、奇其狀貌、歸告、衆走問、語以姓名、且曰、我天女佛倫所生、故等之鳳、衆驚曰、天生聖人也、舁歸、奉爲主、居長白山東俄漢惠之野、俄朱里城、國號滿洲。

【持滿】 十分に滿てるを持ちコタフルこと。ヨ弓を引き張ること。出典ヨ史記越世家に、持滿者與天。又た淮南子に、周公可謂能持滿矣。ヨ史記周亞夫傳に、章士吏、被甲、銳兵刃、彀弓弩持滿。又た同書李將軍傳に、廣乃持滿毋發。

【引滿】 弓を引き張ること。ヨ杯に酒を十分に酌むこと。出典ヨ漢書李廣傳に、廣乃持滿毋發と、顏注に、往矢於弓弩、而引滿之、令不發矢也。ヨ引滿舉白を見よ。

【滿園春】 ケシの花の大なるものをいふ。出典王世懋の花疏に、罌粟花最繁華、又有一種、小者曰、眞美人、大者曰滿園春。

【滿眼酤】 酤は買なり、蜀人竹箭もて酒を買ふ、情上に、繩を穿つの眼あり、酒滿ちて箭眼に近づくを滿眼酤といふ。出典杜甫の入奏行に、江花未落盡、成都、貴訪浣花老翁無、爲君酤酒滿眼酤、與叔白飯馬青芻、(ハの部白(ハク)飯青芻を見よ)

【滿洲八旗】 ハの部八(ハツ)旗兵を見よ。

【滿堂春色】 桃の一大枝をいふなり。出典米芾寶史に、徐熙桃一枝謂之滿堂春色。

【滿面春風】 一ツバイに溢れんばかりの喜びあるをいふ。出典王實甫の鬱春曲に此語あり。

【引滿舉白】 酒をなむ〳〵と注ぎたる杯を引き取りて飲み干すこと。白は杯なり。出典漢書叙傳に、蠻李豬侍中皆引滿舉白と。又た同書に自ら大將軍爲後、當平定陵侯張放、淳于長等飲愛幸、出爲後行、行則同輿載、輿、入侍奇持滿と。又た同書李將軍傳に、廣乃持滿毋發。

禁中、設宴飲之會、及趙李諸侍中、皆引滿舉白、談笑大噱。

【滿漢名臣傳】 書名。出典攜李評かならず、八十卷あり、滿初より乾隆の末に至るまでの滿洲及び漢の名臣の傳記を國史館の原本より抄錄したるものにて、滿洲の名臣は七百六十九人、漢の名臣は三百七人あり、漢とは支那本部をいふなり。

【滿洲源流考】 書名。出典二十卷清の乾隆四十三年阿桂等勅を奉じて撰す、滿洲の地誌、部族、疆域、山川、國俗の四門に分ちて詳說せり。

【滿身都是膽】 イの部一(イツ)身都是膽を見よ。

【滿招損謙受益】 缺け、謙すれば利益を受くるものなるをいふ。出典書經大禹謨篇に、滿招損、謙受益、時乃天道。

【滿腔子都是春意】 身中に春の氣候の如き和氣が靄靄として滿てるをいふ。一團和氣といふに同じ。出典宋の程頤(明道先生)の語なり、程子全書に見ゆ。

【滿目山陽笛裏人】 唐人の詩の句、出典賈牟の奉酸棗門觀聞笛に、曾絕朱纓吐錦茵、欲披荒草訪道塵、秋風忽遇西園奏、滿目山陽笛裏人、

【滿街楊柳綠絲煙】 唐人の詩の句。出典韋莊の鄭州遇寒食、城外醉吟に、滿街楊柳綠絲煙、寶出滿明二月天、好是隔簾花影動、女郎潦亂卷絲鞭。

【滿身花影倩人扶】 唐人の詩の句。出典陸龜蒙の和襲美春夕酒醒に、幾年無事傍江湖、醉倒黃公舊酒壚、覺後不知新月上、滿身花影倩人扶、(覺、一に醒に作り、新、一に明に作る。)

【滿城風雨近重陽】 城中に風雨が滿ちて、最早九月九日の節句に近づきたりといふこと。出典許詩話總龜に、謝無逸書問、滿大臨、有新詩否、答曰、秋水景物、幷作是佳句、昨日、滿城風雨、忽催租人至、遂散、與只此一句奉寄と。滿大臨は宋の世の人にして、字は邵老、黃岡の人なり。出典事文類聚に、謝無逸送堂集云、滿邵老有滿城風雨近重陽句、今去重陽四日、風雨大作、遂用邵老句、廣爲三絕。

【滿天風雨下西樓】 唐人の詩の句。出典許渾の謝亭送別の詩に、勞歌一曲解行舟、紅葉青山水急流、日暮酒醒人已遠、滿天風雨下西樓。

【滿腔子是惻隱之心】 俗語にして、腔子は、軀殼といふ義なり、惻は傷の切なるなり、惻隱は痛の深きなり、人體中には仁愛の心の充滿せるをいふ。出典宋の程顥(明道先生)の語なり、程子全書及び、近思錄道體篇に見ゆ。

漫

【滿堂燕笑一人向隅而泣則衆爲之不樂】 滿堂燕飲中、一人隅に向ふて泣く者あれば、之が爲めに興の醒むるをいふ。出典說苑貴德篇に、聖人之於天下也、譬堂一堂之上也、今有滿堂飲酒者、有一人獨索然向隅而泣、則一堂之人皆不樂矣。

【漫漫】 長き貌、遙なる貌、盛なる貌、悠、種種に働きて、總べてノビヤカにして、取り留めなき意に用ふ。ヨ路の長く遠き形容。ヨ夜の長き形容。出典ヨ楚辭橘頌に、終長夜之漫漫兮と。又た嵇康の飯牛歌に、從、昏飯牛薄夜半、長夜漫漫何時旦。ヨ楚辭に、路漫漫其修遠兮、君將上下而求索。ヨ劉長卿の詩に、春山無限水漫漫。出典此の他雪漫漫、露漫漫、烟漫漫、海漫漫、意漫漫、綠漫漫、碧漫漫等、みな長遠の意なり。

【漫瀾】 遙にして際限なきこと。出典韓愈の送鄭尙書序に、風一日蹄數千里、漫瀾不見蹤跡。

【漫爾】 ミダリなる貌。出典陸游の詩に、投老官遊眞漫爾、平生懷抱固超然。

【漫浪】 ラツキモノといふことなり。出典書言故事に、元結自稱曰、結從、家國、自稱浪士、及爲官、人以爲浪者、亦漫爲官乎、呼爲漫郎、既將爲樊上、漁者相歡、更曰、繁更酒徒、又曰公、又漫浪於人間、得非繁酒乎。

幔

【漫慝】（マンダツ）　出處漢書揚雄傳、爲其泰漫慝而不知。　意義文字などの摺り消えること。　出處メの部名「メイ」剌を見よ。

【漫滅】（マンメイ）　意義マクなり。四面に垂るを慢といひ、一方に垂るを帷といふ。

【幔帷】（マンイ）　出處司馬相如の長門賦に、張羅綺之幔帷兮。

【幔幕】（マンバク）　意義マクなり。　出處名畫錄に、以幔幕遮蔽、不令相見、欲驗誰之筆力强弱。

【幔省】（マンセイ）　意義幔幕を張りて役所を設くること。　出處齊書禮志に、止車門外、別立幔省、若日色有異、則立省前。

【幔室】（マンシツ）　意義幔を以て仕切りて室とする。　出處宋史禮志に、舊禮、明堂五帝位、皆爲幔室。

【幔城】（マンジヤウ）　意義幔張りて、假り舍を造り城と名づけたるなり。　出處唐書原縣、夜大風、行宮幔城火。

慢

【慢心】（マンシン）　意義己れ自ら誇りて人を侮るをいふ。　出處法界次第に、自恃輕他之心云慢、若恃種姓富貴有德才能、輕蔑於他、卽是慢也と。又た華嚴經に、起慢心、自高陵彼。

五　蔓

【蔓蔓】（マンマン）　意義長久の貌。　出處漢書樂志に、蔓蔓日茂と。注に、蔓蔓、言其長久也と。又た逸周書和寶解に、緜緜不絕、蔓蔓若何。

【蔓草】（マンサウ）　意義ハビコレル草なり。　出處詩經鄭風野有蔓草篇に、野有蔓草、零露漙兮。

【蔓衍】（マンエン）　意義瓜又は草の蔓がのびるなり。　出處蔡邕令問辭に、繁多而蔓衍、非所謂理約而達也と。又た楚辭に、菽藿兮蔓衍、芳蘭兮挫枯。又た漢書晁錯傳に、土山丘陵蔓衍相屬。

【蔓延】（マンエン）　意義前條に同じ。　出處爾雅の注に、流蔓皆謂蔓延相被。

【蔓菁】（マンセイ）　意義カブラ。なり　出處禮記坊記篇に、采葑采菲と。鄭注に、葑、蔓菁也。

六　瞞

【蔓草寒烟】（マン）　意義ハビコレル草とサムキ烟なり、古城趾などにいふ。　出處吳融の秋色の詩に、染不成乾蕾未消、霏霏拂拂、又迢迢、曾從建業城邊過、蔓草寒烟鎖六朝。

【蔓草猶不可除】　意義草は微細の中に、之を處置せざれば、既に巨大に至れば何如とも爲し難きをいふ。　出處左傳隱公元年に、姜氏何厭之有、不如早爲之所、使滋蔓、難圖也、蔓草猶不可除、況君之寵弟乎。　參考詩晉書王戎傳に、蔓草不可長、況虎兕之害乎。　意義唐人の詩

【蔓草寒烟鎖六朝】　意義前條に同じ。　出處蔓草寒烟を見よ。

【瞞然】（マンゼン）　意義惡づる貌。　出處莊子天地篇に、子貢瞞然慙俯而不對。　備考瞞は欺くなり。瞞は俗語

【瞞着】（マンチヤク）　意義瞞の助字なり。　出處康熙字典に、匿情相欺亦曰瞞、況蔡周書、淺薄閒瞞、其瞞乃獲。

七　蹣

【蹣跚】（マンサン）　意義ヨロメキて行く貌。　出處皮天祿行蹣跚と。又た蘇軾の詩に、侵尋作風雨、兩足幾蹣跚。

八　縵

【縵縵】（マンマン）　意義廣がり延ぶる形容、廣遠なる貌。　出處前書大傳に、禮縵縵兮、注に、縵縵、教化廣遠貌と。又た隋書天文志に、有飛星、大如缶若瓮、後蛟白縵縵然、長可十餘丈、而委曲、名曰天刑。

九　饅

【饅頭】（マンヂウ）　意義麵を以て餡を包みて之を蒸したる食品なり。　出處晉の東晳の餅賦に、若夫三春之初、陰陽交際、寒氣既除、溫不至熱、於時享宴、則蒸頭宜設と。又た事物紀原に、諸葛亮南征、將渡瀘水、土俗殺人、首祭神、亮以羊豕代、取麵蒸人頭、祭之、饅頭名始此と。又た宋會三異同語錄に、食品饅頭、本是蜀饌、世傳以爲諸葛亮征南時、其俗以人首祀神、孔明欲止其殺、教以肉麵二像人頭而爲之、遂傳作饅字、不知當時晉義如何、遂以饅瞞同音、孔明與馬謖謀征南、有攻心喪之說、至伐孟獲、熟視蜀陣、七縱而七擒之、豈於事物間、有欺瞞之學、特世俗無之如此耳。　參考餅賦に、奥に作る、字相通ずるなり。

十　豆

【煑豆燃萁】（マメガラ）　意義豆を煑るにその萁兄弟相苦むるに喩ふ。　出處シの部七（シチ）

歩之詩を見よ。

マモリ　守

【守在四夷】　意義國家の守衛は東西南北の四夷にあるをいふ。左傳杜注に云、德及遠と。　出處左傳昭公二十三年に、沈尹戌曰、子常必亡、郢、苟不能衛城無益也、古者天子守在四夷、天子卑、守在諸侯、諸侯卑、守在四竟。　備考李華の弔古戰場文の結末に、嗚呼噫嘻、時邪命邪、從古如斯、爲之奈何、守在四夷。

マヨフ　迷

【迷者不問路】　意義道理に迷へる者は意に任せて事を處して、賢者に謀らざるをいふ。　出處荀子大略篇に、迷者不問路、溺者不問遂、亡人好獨と。遂は徑隧を謂ふ、水中涉るべきの徑なり、好獨とは、自ら其計を用ふるを謂ふ。又た晏子春秋に、夫患者多悔、不肖者自賢、溺者不問隧、迷者不問路、溺而後問隧、迷而後問路。

マロ　麿

【麿】　意義麻と呂との二字を合せて一字となし、我邦古代に男子の名に用ゐたる文通考に、麻呂二合字、古俗命男子、曰某麻呂、猶漢人曰某甫曰某兒也、麻呂又用丸字、丸字讀與麻呂方音同。

ミ　未

【未乃伊】　意義ミーラと讀む。人の屍に防腐劑を施して腐爛を妨ぐたるものをいふ。　出處本草綱目人部に、木乃伊の條あり。同書集解に云ふ時珍曰、按陶九成綴耕錄云、天方國有人年七八十歲願捨身濟衆者、絕不飲食、惟澡身啖蜜、經月便溺皆蜜、既死、國人撿以石槨、仍滿用蜜浸之、鐫年月于槨、瘞之俟百年後、立愈、雖彼中亦不多得、亦謂之蜜人、陶氏所載如此、不知果有否、姑附卷末、以俟博識。

【未然】（ミゼン）　意義未來といふごとき詞なり。　出處文中子に、昭治亂於未然。

【未來】（ミライ）　意義未だ來らぬ時世。　出處地持論に、顯未來世爲衆生故云云。

【未明】（ミメイ）　意義天將に明けんとするときをいふ。　出處齊書盧思道傳に、未明而行。

【未熟】（ミジユク）　意義未だ十分に熟せざるをいふ。　出處因果經に、觀諸衆生熟與未熟。

【未嘗有】（ミシヤウイウ）　意義未だ是までに有らざることをいふ。　出處墨子修身篇に、可以爲士於天下者、未嘗有也と。又た孟子告子上篇に、人見其濯濯也、以爲未嘗有材焉と。又た戰國秦策に、萬乘之境、未嘗有也。　參考未曾と、曾の字を未の字に連ねて用ふるは、史記に始るとのこと、東條一堂の助辭新際に精しく論じたり、就いて見るべし。

【未曾有】（ミソウ）　參考前條に同じ。　出處墨子親士篇に、未曾有也と。又た地持論に、轉未曾有法。

【讀未見書】　イの部讀未見書を見よ。

七　身

【身】　意義刀の身をいふ。　出處周禮に、身長五其鋒、重九鋝、謂之上制と。疏に、身者、去劍柄而言也。

【身分】（ミブン）　シの部身分（シン）を見よ。

【身內】（ミウチ）　意義吾一身の內といふこと。　出處大方等陀羅尼經に、一切種智入其身內。

【身重】（ミカサネル）　參考婦人の懷胎するをいふ。　出處詩經大雅大明篇に、大任有身、生此文王と。毛傳に、身重也と。又た案問に、問岐伯曰、婦人重身、毒之奈何と。又た儒門事親に、婦人身重。

【身代】（ミガハリ）　意義我身を以て君父の爲に代り死するをいふ。　出處朝野僉載に、崔渾至孝、母病、祈神、請以身代。

【出身】（ミ）　意義我が身を投げ出だして、國の爲め又は世の爲めにすること。　出處漢書に、鄧都曰、已貴親而出身、國當奉職也。

【立身】（ミ）　立身行道を見よ。

【乞身】（ミ）　意義君に奉げし身を乞ひ退くをいふ。　出處後漢書李通傳に、

以病上書乞身。

【脱身】 一身を脱して逃げ去ること。史記張耳傳に、亡命外黄、外黄富人女嫁之、耳是時乃脱身游と。又た漢書卜式傳に、與兄弟田宅財物、脱身去。

【挺身】 吾身を引き逃れ出すこと。漢書劉屈氂傳に、屈氂挺身逃と。顔注に、引身而逃、離と。又た五代史王思同傳に、諸鎖兵潰、思同挺身走、長安。遁俗編に、世俗以挺身爲勇往之義、據諸文乃適相反、惟三國志注、龐娥親挺身、奮手拔刀、而挺身仍只作引身解、蓋引身而逃、引身而退、同一引也と。又た蘇軾の留侯論に、匹夫見辱、拔劍而起、挺身而鬬、此不足爲勇也。

【忘身忘家】 忠臣は其の身其の家あることを忘れて君國の爲にすることをいふ。漢書賈誼傳に、化成俗定、則爲人臣者、主耳、忘身、國耳、忘家、公耳、忘私。

【立身行道】 吾が身を起して、以て古道を行ふをいふ。孝經開宗明義章に、立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也。

【以身役物】 吾一身を以て物欲の爲に使役せらるゝをいふ。淮南子に、聖人不以身役物。

【以身殉利】 利益のために一命を抛つをいふ。莊子駢拇篇に、小人則以身殉利、士則以身殉名、大夫則以身殉家、聖人則以身殉天下。賈誼の服鳥賦に、貪夫殉財兮、烈士殉名兮、夸者死權兮、品庶馮生。

【殺身成仁】 身命を抛ちて世道の爲めにするをいふ。論語衛靈公篇に、志士仁人無求生以害仁、有殺身以成仁と。又た戰國策に、君子殺身、以成名、義之所在、身無死無

【身体髮膚】 身體に漆液を塗布して癩病患者の如く粧ふなり。戰國策趙策に、豫讓又漆身爲厲、滅鬚去眉、自刑以變其容、爲乞人。厲、癩、鬚去眉、自刑以變其容、爲乞人と。又た同書秦策に、范雎曰、漆身而爲厲、被髮而爲狂、不足以爲臣恥。

【捨身施佛】 佛を信奉する者の行ひをいふ。南史梁武帝紀に、太清元年三月乙巳、帝升光顔殿講堂、坐、師子講金字三慧經、捨身と。又た韓愈の論佛骨表に、惟梁武帝在位四十八年、前後三度捨身施佛、宗廟之祭、不用牲牢。

【漆身爲厲】

【殺身成仁】

【身在江海之上】 吾の身は江や海の上に在りて閒居易の送蕭處士遊黔南の詩に、能文好飲老蕭邨、身似浮雲鬢似霜、生計拋來詩是業、家園忘卻酒爲鄉、江葵巴蜀初成宇、猿過巫陽始斷腸、不醉黔中爭去得、磨崖山月正蒼蒼。

【身行萬里半天下】 宋人の詩軾の龜山の詩に、我生飄落去何求、再過龜山識五周、身行萬里半天下、曾臥一菴初白頭、地隔中原旁北望、潮連滄海欲東游、元嘉舊事無人記、故國攜頼在不。

【立身以孝悌爲甚】 一身を立つるは孝と悌とを以て根本とするをいふ。鹿門柳玭傳に、立身以孝悌爲基、以恭默爲本、以長怯爲務、以勤儉爲法。

【眉間】 眉の上額のことをいふ。呉越春秋に、伍子胥眉間一尺。

【眉間尺】 左右の眉の間の廣きを呉越春秋に、干將、呉王闔閭、使作劍、三月而成、其雄曰干將、其雌曰莫邪、雄藏而不出、干將之妻、有身、將劍之時、謂曰、夫人生子、當如何、干將曰、雄生當南山松、雌生當北堂柳、子長大、當爲我殺王、子出戶而見南山松、乃掘柱、得雄劍、將之、王使相劍者、相曰、此劍有雄雌、王曰、何以知之、對曰、夫干將爲呉王作劍、三月而成、王怒、將欲殺之、其子聞之、乃之南山、南山有一人、眉間廣尺、王聞之、乃悉國而求之、子遇之、謂曰、子之仇、吾能爲子報之、子曰、聞子之義、吾不能死、子以我頭與之、吾有一策

遺棄物於澤壑、彼無貧不忍以身爲溝壑、是以不敢當。

【惠道】に同じ。【出處】恩經大禹謨篇に、禹曰、惠迪吉、從逆凶、惟影響。

【路盤】【意義】路の屈曲して迂回すること。【出處】韓愈の詩に、路盤暫見樵人火、棧轉時聞驛使鈴。

【戴路】【意義】車や馬などの路に滿つるを、帝遷明德、串夷載路。

【異路同歸】イの部異（イ）路同歸を見よ。

【路半嘉陵頭已白】【意義】唐人の詩の句。【出處】武元衡の嘉陵驛に、悠悠風旆遶山川、山驛空濛雨作煙、路半嘉陵頭已白、蜀門西更上青天。

三 道

【得道】【意義】道德を身に行ひ得るなり。【出處】素問金匱眞言論に、非其人勿教、非其眞勿授、是謂得道。

【愛道】【意義】道理を施し行ふを好むを いふ。【出處】禮記禮運篇に、天不愛其道、地不愛其寶、人不愛其情。

【清道】【意義】天子の通行には道路を掃除するをいふ。【出處】周禮の鄭注に、天子行在所至、清道以慮非常。と。又た三輔黃圖に、天子賞出、先令道路、掃洒清淨。

【爭道】【意義】爭ふをいふ。【出處】史記吳王濞傳に、孝文時吳太子入見、得侍皇太子飲博、吳太子師傅皆楚人、輕悍又素驕、博爭道不恭、皇太子引博局投吳太子殺之。

【倍道】【意義】一日に二日の道程を行くをいふ。【出處】詩話衛永に、倍道以行、笑語欣然。

【假道】クの部屈（クツ）產之乘を見よ。

【道聽塗說】【意義】善言あり と雖も、心に留めて己れの有と爲さず、【出處】論語陽貨篇に、道聽而塗說、德之棄也。と。又た漢書藝文志に、小說家者流蓋出於稗官、街談巷說、道聽塗說之所造也。【出處】荀子勸學篇に、小人之學也、入乎耳出乎口、口耳之間則四寸耳、曷足以美七尺之軀哉。と。楊注に、今之學者爲人道聽途說也。

【道遠知驥】【意義】千里の馬の技能は遠途を行きて然る後ちに知らるゝをいふ。【出處】賈誼の鵩鳥賦の詩に、道遠知驥、世固知寶。

【道遠】【意義】道理は一源に出でて二途なしといふ義。【出處】禮出一原、通九門。

【道出一原】【意義】天道には升り降んなると、降り汙がるとあるいふ。【出處】書經洪範篇に、道有升降、惟命不于常。

【道出一原】【意義】道理を迷ふも遠からずい、直に本道に立ち返るをいふ。【出處】楚辭に、迴朕車以復路兮及行迷之未遠。又た吳越春秋に、惑者知返、迷途其未遠、覺今是而昨非。

【迷道不遠】【意義】道を迷ふも遠からずい、直に本道に立ち返るをいふ。【出處】楚辭に、迴朕車以復路兮及行迷之未遠。又た吳越春秋に、惑者知返、迷途其未遠、覺今是而昨非。

【行道遲遲】【意義】道を步行するに悉ひ悲しみあるをいふ。【出處】詩經小雅采薇篇に、昔我往矣、楊柳依依、今我來思、雨雪霏霏、行道遲遲、載渴載飢、我心傷悲、莫知我哀。

【論道經邦】【意義】國を治むる道を論じて、邦家を經綸するを爲政也、三月則釋牛馬者不儲偫、男女行者別其塗、道不拾遺。と。又た韓非子外儲說左上に、子產爲政、五年、國無盜賊、道不拾遺。と。又た史記齊世家に、齊威王曰、吾有臣種首者、使備盜賊、則道不拾遺。と。又た同書商君傳に、行之十年秦民大說、道不拾遺、山無盜賊、家給人足。【出處】史傳に多く道不拾遺の語あり、されど其の原因は一に非ず、或は道德の篤きに因り、或は刑法の嚴なるに因る、所謂美惡同辭を兼はさるものなり。

【有道則見】【意義】天下治りて道理の行はるるときには、此世に出て活動するをいふ。【出處】論語泰伯篇に、天下有道則見、無道則隱。

【違道干譽】【意義】道理に違ひ背きて、無理に人民の名譽を求むるをいふ。【出處】書經大禹謨篇に、罔違道以干百姓之譽。

いふ。【出處】書經周官篇に、立太師太傅太保、茲惟三公、論道經邦、燮理陰陽、官不必備、惟其人。

【問道於盲】【意義】方角を失ふて盲人に問ふといふ義にて、知らざるものに物を問ふの喩なり。【出處】韓愈の答陳生書に、足下求速化之術、不於其人、乃以訪愈、是所謂借聰於聾、求道於盲、雖其請之勤勤敎之云云、未有見其得者也。

【道合則服從】【意義】臣たる者は、君と道合へば、則ち官政に服從するをいふ。【出處】禮記內則篇に、四十始仕、方物出謀、發慮、道合則服從、不可則去、五十命爲大夫、服官政、七十致事。

【同道者相愛】【意義】道を同じくするものは、互に愛し合ふをいふ。【出處】尤倉子用道篇に、同道者相愛、同藝者相妒。

【憂道不憂貧】【意義】道德の修らざるこそ其の憂ふる所にて、貧困は憂へずといふ意。【出處】陶潛の懷古田舍に、先師有遺訓、憂道不憂貧。

【道者萬世之寶】【意義】道理は變ずることなし、萬世此道に由る、故に寶といふ。【出處】新書に、道者萬世之寶。

【道可道非常道】【意義】道は、事と場所とに應じて異るものなれば、若し一定の道として、極る あれば、是れ眞の道に非るなり。【出處】老子第一章に、道可道非常道、名可名非常名。

【道在邇求之遠】チの部在邇（チカキ）求遠を見よ。

【守道不如守官】【意義】道を守るの要は、官を守るに如かず。【出處】左傳昭公二十年に、仲尼曰、守道不如守官、君子韙之。と。杜注に、韙は、是なり。

【道之大原出於天】【意義】道理の根づるをいふ。【出處】董仲舒の對策に、道之大原出於天、天不變道亦不變。

【道本無爲唯在人】【意義】明人の詩の句。【出處】王守仁の別方叔賢詩に、道本無爲唯在人、自行自住豈須隣、坐中便是天台道、不用漁郎更問津。

【道雖邇不行不至】【意義】道里近しといふとも、行かざれば至り着くことなしといふ。【出處】荀子修身篇に、道雖邇、不行不至、事雖小、不爲不成、成績、晏子春秋に、爲者常成、行者常至。

【道不同不相爲謀】【意義】操り守るところなれば、互に相謀らざるをいふ。【出處】孔子の語なり、論語衞靈公篇に見ゆ。【補】史記老子傳に、世之學老子者、則絀儒學、儒學亦絀老子、道不同不相爲謀、豈謂之乎。

【道二仁與不仁而已矣】【意義】仁の一道なるをいふ。【出處】孔子の語なり、孟子離婁上篇に見ゆ。

四 水

【以道制欲則樂而不亂】【意義】道理欲情を制するときは、樂みて亂るることなしといふ意。【出處】禮記樂記篇に、以道制欲、則樂而不亂、以欲忘道、則惑而不樂。

【水落】【意義】谷川の水のカサの減ずるをいふ。【出處】入蜀記十月十四日の條に、若乘十二月正月、水落、石露出時、亦可併力盡曩日所餘石。と。又た蘇軾の後赤壁賦に、山高月小、水落石出。

【水攻】【意義】城を攻むるに、川を塞ぎて、其水を城に灌ぐなり。【出處】漢書鄧陽傳に、水攻則齊郡以亡其城。

【水桶】【意義】水を貯ふ桶をいふ。【出處】錄氏私誌に、能下水桶。

【水哉】【意義】水を贊していへる語なり。【出處】孟子離婁下篇に、仲尼嘆稱曰、水哉水哉、何取於水也。

【水則】【意義】水は器に隨ふて或は方或は圓なるをいふ。【出處】水臨方圓器を見よ。

【樂水】【意義】知者は水を樂むとは、智の流通する水の如くなるに取る。【出處】論語雍也篇に、子曰、知者樂水、仁者樂山、知者動、仁者靜、知者樂、仁者壽。

【畫水】【意義】水に畫がくなり。【出處】觀經序分義に、從發清淨心、猶如畫水。

【水流濕】【意義】水は濕ひたる所に流るるをいふ。【出處】易經文言に、水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎。

【聽水狐】 ミツ 狐は疑心深く、河氷を渡るに、水聲を聽きて後に渉るといふ。出處 漢書 底鈞の詩に、疑懼聽水狐。 解釈 水經注に、遠征記曰、盟津河津恆濁、方江爲狹、比淮濟則爲闊、寒則冰厚數丈、水始合、車馬不敢過、要須狐行云此物善聽、冰下無水、乃過、人見狐行方渡、

【水落石出】 ミツ 冬日江流の景なり、江水減少して巖石の露出せるをいふ。出處 水落を見よ。

【水到魚行】 ミツ 水中を行くことて、何事も時節ければ成るといふ。出處 餘冬序錄に、東坡與人書、聞及生事不濟、輒自解云、水到渠成、不須預慮、愚謂、水到魚行、水到渠成、其意同也、皆事任自然、時至輒濟之意。 解釈 水が流れ來りて、自然ことにて、學問を極むれば、自ら道の修るに喻ふ。出處 朱子文集に、答路德章、曰所喻水到渠成之說、意思畢竟在渠上未故、水東流時、已先作屈曲整飾了矣。又た范成大の詩に、學問根深方蒂固、功名水到自渠成。 考 群書札記に、韓使水工鄭國間說秦、令鑿涇水、自中山西底氣口爲渠、並北山東注洛三百餘里、欲以溉田、中作而覺、秦欲殺鄭國、鄭國曰、始臣爲間、然渠成、亦秦之利也、秦以爲然、卒使就渠、今俗有水到渠成語、本此、案龍川志譚曰、水到魚行、則渠成二字、又似魚行之訛矣。

【水激則旱】 ミツ 水は物に觸れ激すれば、流の迅急となるなり。出處 史記賈生傳に、水激則旱兮、矢激則遠、精神回薄、振蕩相轉、選遠有命、必中三五、合散消息、孰識其時。 解釈 水の性質は清潔なるをいふ。出處 孔叢子に、水之性清、而土壤汨之、人之性安、而嗜欲亂之。

【水積成川】 ミツ 水も積りて川と成る、小を積みて大を成す。出處 說苑に、水積成川、則蛟龍生焉、土積成山、則豫章生焉、學積成聖、尊德樂道、則聰明自得、聖心備焉。○史記貨殖傳に、淵深而魚生之、山深而獸往之、人富而仁義附焉。○說苑に、水積成川、則蛟龍生焉、土積成山、則豫章生焉、學積成聖、尊德樂道、則聰明自得、聖心備焉。○說苑に、水有四德、沐浴萬生、通流萬物、仁也、柔而難犯、勇也、流江海、河、惡、盈流、謙、智也。

【水濁魚噞】 ミツ 水の濁るときは、魚仰ぎて口を開くもの なりといふ。噞は、困み疲れて喘ぐ形容なり。出處 文子に、水濁者魚噞、令苛者、民亂と。又た韓詩外傳に、水濁則魚噞、令苛則民亂と。又た淮南子主術訓に、水濁則魚噞、政苛則民亂と。又た同書說山訓に、水濁而魚噞、形勢則神亂。

【水廣者魚大】 ミツ 水の廣く深き所には大魚の住むをいふ。出處 淮南子に、水廣者魚大、山高者木修。 解釈 論語に、水廣者魚大、父尊者子貴。○說苑に、水廣則魚大、君明則臣忠。○韓詩外傳に、溺廣者其魚大、主明者其臣忠。

【水積而魚聚】 ミツ 水は積りて深くなれば魚集り來るをいふ。出處 淮南子に、水積而魚聚、木茂而鳥集。 解釈 中庸第二十六章に、今夫天一卷石之多、及其廣大、草木生之、禽獸居之、寶藏興焉、今夫水一勺之多、及其不測、黿鼉蛟龍魚鼈生焉、貨財殖焉。○尸子に、水積而生、舟之魚、積土成山、風雨興焉、積水成淵、蛟龍生焉、積善成德、而神明自得、聖心備焉。○史記貨殖傳に、淵深而魚生之、山深而獸往之、人富而仁義附。○說苑に、水積成川、則蛟龍生焉、土積成山、則豫章生焉、學積成聖、尊德樂道。

【水清無大魚】 ミツ 水至て清めば魚の形を曝す所なし、故に此處に住まず、以て人明察なれば、他に畏憚せられて友なきに喩ふ。出處 後漢書班超傳に、任尚代爲都護、謂敦、超曰、君性嚴急、水清無大魚、宜蒲侯簡易。 解釈 孔子家語及び東方朔の客難に、水至清則無魚、人至察則無徒。

【水之性欲清】 ミツ 水の性質は清くなるを欲するものなるをいふ。出處 文子に、水之性欲清、沙石濁之、人之性欲平、嗜欲害之。

【水隨方圓器】 ミツ 民の善惡は、君の善惡に隨ふに喩ふ。出處 韓非子外儲說傳一に、孔子曰、爲人君者、猶盂也、民猶水也、盂方水方、盂圓水圓、君者盂也、盂方而水方。

【掬水月在手】 ミツ 唐人の詩の句。出處 于良史の春山夜月に、春山多勝事、賞翫夜忘歸、掬水月在手、弄花香滿衣、興來無遠近、欲去惜芳菲、南望鳴鐘處、樓臺深翠微。

【水者地之血氣】 ミツ 水の地中に在るは、人の身體に血脈あるがごときをいふ。出處 管子水地篇 解釈 水者地之血氣、如筋脈之通流者也。

【水因地而制流】 ミツ 水は地勢によりて流を制するものなるをいふ。出處 孫子虛實篇に、水因地而制流、兵因敵而制勝。

【水淺者大魚不遊】 ミツ 水の淺き所には、大魚は遊ばざるをいふ。出處 黃石公素書に、地薄者大木不產、水淺者大魚不遊。

【水避礙則通于海】 ミツ 水は礙はるものなれば、海に流れ入るといふ。出處 揚子法言君子篇に、水避礙則通于海、君子避礙則通于理。

【拂水柳花千萬點】 ミツ 唐人の詩の句。出處 元稹の過襄陽樓に、呈上府主嚴司空、樓在江陵節度使宅北隅、詩に、襄陽樓下樹陰成、荷葉如錢水面平、拂水柳花千萬點、隔樓營舍雨聲、時水畔看鷺立、每日樓前信馬行、早晚暫教王樂上、庾公應待月分明。 解釈 有力者の側に居る者は、早く榮位に昇るに喩ふ。出處 事文前集 考 群書札記に、范文正知杭州、蘇舜卿爲屬縣巡檢、城中兵官、往往皆獲、舜卿、因公事入府獻詩曰、近水樓臺先得月、向陽花木易爲春、文正覽之、遽先得月、向陽花木易爲春、文正覽之、命文豹之清夜錄を引きて、爲の字を逐に作れり、通俗編には、爲の字とせず、未だ孰れか是なるを知らず。

【近水樓臺先得月】 ミツ 唐人の詩の句。出處 張說阿餘叢考に、金文豹の唾玉集を引き、爲の字は爲文豹の清夜錄に作れり、通俗編には爲の字とせず、未だ孰れか是なるを知らず。

【隔水青山似故鄉】 ミツ 清人の詩の句。出處 燕叔倫の題雒川山水の詩に、松下茅亭五月涼、沙鷗樹樹晚蟬蒼、行人無限秋風思、隔水青山似故鄉。

【隔水鳴雞報曉寒】 ミツ 清人の詩の句。出處 燕士銳の撫州聽發の詩に、隔水鳴雞報曉寒、五更鷹夢未全安、燈中柔膩初醒岸、渡口明星欲下灘、客思從回榮冷外、鐘聲一點在林端、平蕪風月千條柳、故國秋程取次看。

【水則載舟水則覆舟】 ミツ 水は舟を載せ浮べ、又た舟を覆へすことあるをいふ。出處 荀子王制篇に、君者舟也、庶人者水也、水則載舟、水則覆舟。 解釈 三國魏志王基傳に、古人以水喻民、曰水所以載舟、亦所以覆舟、故在民上者、不可以不戒懼。○孔子家語五儀篇に、夫君者舟也、庶人者水也、水所以載舟、亦所以覆舟。○陸宣公文集に、奉天論、前所答奏未施行狀曰、故喻君爲舟、喻人爲水、水能載舟、亦能覆舟、舟即君道、水即人情、舟順水之道、乃浮、逆則沒、君得人之情、乃固、失則危。

【水擊鵠鴈陸斷駒馬】 ミツ 名劍の喩へ。出處 韓非子顯學篇に、夫視鍛鍚而察青黃、區冶不能以必劍、水擊鵠鴈、陸斷駒馬、則緘獲不疑、鈍利。

【水斷龍舟陸剸犀甲】 ミツ 水中にては龍を畫ける舟を斷切し、陸上にては犀にて造れる甲を切る、これ劍の銳利なるをいふ。出處 淮南子脩務訓に、夫純鈞魚腸之始下型、擊則不能斷、剸則不能入、及加之砥礪、摩其鋒剸、則水斷龍舟、陸剸犀甲、と、高注に、純鈞利劍名、魚腸、文理屈曲若魚腸者、良劍也。

【水濁則無掉尾之魚】 ミツ 水の濁る所には、尾を掉り游ぐ魚なきをいふ。出處 鄧析子に、水濁則無掉尾之魚、政苛則無逸樂之士。

【如水在器方圓不常】 ミツ 常人の性、善惡不

定、水の方圓の器に隨ふが如きをいふ。【出典】宋史化基傳に、盞中人之性、如水之在器、方圓不常、顧用之者如何耳。

【不鏡於水而鏡於人】クの部「君子不鏡於水而鏡於人」を見よ。

【水流心不競雲在意俱遲】【高義】居人の詩の句。【出典】杜甫の江亭の詩に、坦腹江亭暖、長吟對望時、水流心不競、雲在意俱遲、寂寂春將晚、欣欣物自私、故林歸未得、排悶强裁詩。

【密如】【高義】ヒツリとして靜かなる貌。【出典】漢書張湯傳の政論に、孝宣皇帝明于人君之道、審于賞罰之理、海內清肅、天下密如。

【密爾】【高義】密は靜なり、安なり、沈默の意とす。【出典】班固の答賓戲に、儀亦不任、任調技於彼列、故密爾媒斯文。

【密邇】【高義】猶ほ近接のごとし。【出典】晉書經太甲上篇に、密邇先王一と。又た左傳文公十七年に、以離蔡之密邇于楚、而不敢貳焉。

【密勿】【高義】勉め勵みて、事に從ふ意。【出典】漢書劉向傳に、君子獨處守正不撓、秉枉勉强、以從王事、反見讒惡、故其詩曰、密勿從事、不敢告勞、無罪無辜、讒口囂囂と、又た班固の表に、雖密勿在公、而身出心醒、不殉名而求譽、不聽駕以要寵、【用】人臣の密勿するといふ義より、高顯なる職をも密勿といひ、又た緊要なる政事といふ義にも用ふ。

【密率】【高義】安らかにして靜かなる、と。【出典】王筠の洞簫賦に、淋漓密率。

【密旨】【高義】秘密の命令なり。【出典】南史梁元帝紀に、宣猛將軍朱買臣等、密旨、害豫章王棟及其二弟僧辯。

【密函】【高義】秘密の文書を入れたるもの。【出典】南史に、密函去來、日中以

【密網】【高義】網の目の密なるをいふ、以て法令の煩碎なるに喩ふ。【出典】史記酷吏傳に、昔天下之網嘗密矣。

【密事】【高義】秘密の事件をいふ。【出典】後漢書鄭弘傳に、蕩滌密事。

【密雲不雨】【高義】雲が凝り聚りて雨が降らざるなり。【出典】易經小畜卦に、密雲不雨、尚往也、自我西郊と。象傳に、密雲不雨、自我西郊、施未行也と。又た同書小過卦に、六五、密雲不雨、自我西郊、公弋取彼在穴。

【密嚴淨土】【高義】秘密嚴經に、佛已超過世尊无量義。【出典】密嚴經に、住秘樂莊嚴國、世尊无量義。

【蜜酒】【高義】蜜にて造れる酒をいふ。【出典】宋史三佛齊國傳に、有花酒。

【蜜蜂】【高義】小なる蜂にて、花を吸ひ蜜を造る、百千群を成すものなり。【出典】杜甫の蜂蜜詩興率寄嚴公詩に、風輕粉蝶喜花暖、蜜蜂喧。

【自怡】【高義】自分の心に悅ぶをいふ、【出典】陶弘景の詩に、藏訂自怡悅。

【自嗤】【高義】自分にて吾身の事を笑ふなり。【出典】拾遺記に、石季倫有愛婢、日翔鳳、年三十、季倫乃退爲房老、翔鳳怨而作詩云、春葉能不美、卒傷秋落時、坐見芳時歇、憔悴空自嗤。

【自認】【高義】口に發ぜずして心に自ら皆むるをいふ。【出典】論語公冶長篇に、吾未見能見其過、而內自訟者。

【自持】【高義】自分己の節操を守るをいふ。【出典】史記儒林傳に、兒寬爲人溫良有廉智、自持而善著書。

【自卑】【高義】自分と吾身を卑下するをいふ。【出典】禮記曲禮上篇に、夫禮者自卑而尊人。

【自恥】【高義】自分の心中に恥かしく思ふこと。【出典】申鑒に、自恥者本也、恥諸神、其次也、恥諸人、外矣、夫惟外則懼懼于內矣、故君子要乎自恥。

【自多】【高義】自分にて賢才ありと思ふこと。【出典】後漢書朱浮傳に、浮性矜念自多、有不平、以緘文詆之。

【自笞】【高義】自分の身を鞭うちて責むること。【出典】五代史王殷傳に、王殷事母孝、爲貶州刺史、政有小失、母責之、殷即取杖棰、婢僕、自笞于母前。

【自見耳】【高義】耳の大なるをいふ。【出典】タの部大タイ耳兒を見よ。

【毋自欺】【高義】自分の心にて爲しかしと思ふことを人には偽しまい

ふ、之を自ら欺くといふ、此の如きことを爲す勿れと戒むるなり。【出典】大學に、所謂誠其意者、毋自欺也。

【自知者英】【高義】人、自己の心身を知るものは、英俊の人なりといふ。【出典】中說に、李密問英雄、子曰、自知者英、自勝者雄。

【自彊不息】【高義】自ら勉强して休息せざるをいふ。【出典】易經乾卦象傳に、天行健、君子以自彊不息。

【自隱無名】【高義】自ら隱遯して世に名なきことなり。【出典】史記老子傳に、老子修道德、其學以自隱無名爲務。

【自取富貴】【高義】己の力を以て富貴となるをいふ。【出典】事文類聚別集に、北齊高昂曰、勇兒當橫行天下、自取富貴、誰能端坐讀書、作老博士一也。

【自比於金】【高義】我身もて金に喩ふ。【出典】唐の太宗が魏徵に語りし辭。【出典】唐書魏徵傳に、多病辭職、帝曰、公獨不見金在礦、何足貴邪、美冶鍛而爲器、人乃寶之、談方自比於金、以卿爲良匠而加礪焉、卿業疾未及衰、庸得便爾。

【自詒伊阻】【高義】詒は、遺なり、ノコスと訓ず、阻は、隔なり、隔たりを遺すは、人と相遠かるをいふ。【出典】詩經邶風雄雉篇に、我之懷矣、自詒伊阻。【出典】詩經小雅小明篇に、心之憂矣、自詒伊戚。

【不自滿假】【高義】自己に十分なりといふ。【出典】書經大禹謨篇に、克勤于邦、克儉于家、不自滿假、惟汝賢。

【自見者不明】【高義】自分にて自分の事を見ては明白ならずといふ。【出典】老子第二十四章に、自見者不明、自是者不彰、自伐者無功、自矜者不長。【成語】老子第二十二章に、不自見、故彰、不自是、故明、不自伐、故有功、不自矜、故長。

【自疑不信人】【高義】自己に疑ふ心あれば、決して人を信用せぬをいふ。【出典】素書に自疑不信人、自信不疑人。

【自知者不怨人】【高義】人自ら己を知るものは、人を怨むることなきをいふ。【出典】荀子榮辱篇に、自知者不怨人、知命者不怨天、怨人者窮、怨天者無志。【類】荀子法行篇に、怨人者窮、怨天者無志、の二句あり、志を識に作る。【類】說苑說叢篇に、知命者不怨天、知己者不怨人。

【自損者益、自益者缺】【高義】人、自ら謙遜するものは益すといふ。【出典】易經謙卦象傳に、天道虧盈而益謙、地道變盈而流謙と。又た史記蔡澤傳に、語曰、日中則移、月盈則虧。

【認得】【高義】物を確に見得るをいふ。【出典】水滸傳楔子に、認得我一慶。

【咸有一德】【高義】イの部一（イツ）德を見よ。

【皆擯而充】【高義】皆推し廣めて十分にするをいふ。【出典】孟子公孫丑下篇に、凡有四端於我者、知皆擴而充之矣。

【巷】【高義】船舶の聚る處、即ミナトなり。【出典】葛原詩話に、或人云、樵漁餘適の序に、巷中一寺と云語あり、强鱗の自書にて巷に作る、近ごろ海舶來の古文孝經の跋の中に、巷は海水のロドミたる處、瓊バタと云やうなることなりと、永田東皐の話なり、五雜俎の中にも、この字あり、海舶の船つき處を指すに似たり、長崎巷もそれなり、字典等を檢するに、この字なし、或人云、篇海貫珠集に、澳、烏告切、與陝同、說文曰、水隈曰也、又俗名澳同と、又た同書後編に、巷は蓬澳の俗字なり、（澳は、廣韻に於六切、通じて陝に作る）岳元聲の圖書編に、巷の字を用ひ、明史曾澳に作る、五雜俎に、南田巷あり、廣東新語に曰く、凡番船停泊必以海濱之灣環者爲澳、澳者船口也、（以上葛原詩話）

【麼】【高義】多く人を殺して其土地を減するものにはなすといふ。【出典】漢書霍去病傳に、合短兵、麼皐蘭下。顏注に、晉灼曰、世俗謂殺死殺人爲麼糜、文穎曰、麼音亡、師古

曰、鑷字本從金、鑷聲、韓宮此耳、鑷謂苦聲而多殺也、言苦職於皐蘭山下、而多殺鑷也、今俗、猶謂打聲之甚者曰鑷。**補遺** 鑷の字は、單に多殺の義に非ず、篠崎小竹の復問行藏書、詳に之を辯ぜり、其の略に曰く、漢書注、打聲之甚曰鑷、又曰、苦聲而多殺也、是正解矣、晉灼曰、世俗謂盡死爲殺人爲鑷積、是旁及之辭、故汎然用之於多殺、則可矣、必係之於所殺之人數、則不可矣、霍去病轉戰六日、過焉支山千有餘里、合短兵鑷皐蘭下、皐蘭山名、皐蘭下者地也、非人數也、故其下文曰、殺折蘭王、斬盧侯王、今兄所謂李太伯冀州學記、秦以山西歷數六國、六國、地也、非人數也、古人用鑷字者、僅不能多記、唐書王翃傳、引兵三千、與陰堅戰、翃府有相鑷勇邦人諺用、蓋爲訓讀所誤耳。

【耳熟】 漢書酒に醉ひたるをいふ。**出處** 漢書楊惲傳に、「酒後耳熟、仰天拊缶而呼」。**補遺** 耳に聞き慣れて居ること。**出處** 歐陽修の鑑岡阡表に、其平居教他子弟、常用此語、吾耳熟焉、故能詳也。

【耳鳴】 イの部陰（イン）德猶耳鳴を見よ。

【屬耳】 **補遺** 耳を注ぎて善く聽くをいふ。**出處** 戰國策に、趙使者來屬耳。

【植耳】 **補遺** 耳をそばだてゝ聽くことをいふ。**出處** 淮南子に、踵侯必植耳。

【耳加聰】 **補遺** 日に〳〵智識の進むことをいふ。**出處** 說苑に、齊桓公得管仲隰朋、曰吾得聰二子之耳、吾目加明耳加聰。

【耳而目之】 **補遺** 耳に聞て目に之を見るなり、聞達ひなきをいふ。**出處** 呂氏春秋に、襄子曰、吾畢登也已、耳而目之矣、登所舉、吾又耳而目之矣、是耳目、人終無已也、遂不復問、而以爲中大夫。

【入耳不煩】 **補遺** 耳に入りて聞苦しからずと、謂ふ辭をいふ。**出處** 韓愈の送李愿歸盤谷序に、才俊滿前、道古今而譽盛德、入耳不煩。**補遺** 惡事を行ふて人の聞を畏れ、自ら耳を掩ふ、呂氏春秋に、惡聞其鐘聲者、欲負而走、則大鐘不可負、以椎毀之、鐘銘然有聲、恐人聞之而奪己、遽掩其耳、惡聞其過、亦猶此也。**補遺** 通鑑殆紀に、李潤曰、此可謂掩耳盜鐘、然逼於時事、不得不爲。○任昉の勤進箋に、惡甚盜鐘、功疑不賞。

【掩耳盜鈴】 **補遺** 前條に同じ。**出處** 龍偉鈴、非鈴也、鐘也、亦有所本、按呂氏春秋云云、（此下に前條に揭げたる文を引けり。）又た通俗編に、掩耳偷鈴、始めて傳燈錄に見えたり、元沙彌云、塞耳偷鈴、徒自欺誑。又た朱熹の江傳功に答へたるに、成書不出姓名、以避近名之譏、此與掩耳偷鈴之見何異。

【入耳著心】 **補遺** 聞く所なる心に留めて忘れざるをいふ。**出處** 荀子勸學篇に、君子之學也入乎耳、著乎心、云云、小人之學也入乎耳、出乎口、口耳之間、則四寸耳、曷足以美七尺之軀哉。

【貴耳賤目】 **補遺** 聞く所を貴び見る所を賤むなり。**出處** 張衡の東京賦に、蕩闕而矣曰、若客所謂末學膚受、貴耳而賤目也と。又た顏氏家訓に、世人多藏、貴耳賤目、若有實智、每相狎侮、他鄉異縣、延頸企踵、甚於饑渴。**補遺** 漢書揚雄傳に、天鳳五年卒、侯芭爲起墳、喪之三年、時大司空王邑・納言嚴尤聞雄死、謂桓譚曰、子常稱揚雄書、豈能傳於後世乎、譚曰、必傳、顧君與譚不及見也、凡人賤近而貴遠、親見揚子雲、祿位容貌不能動人、故輕其書、昔老聃著虛無之言兩篇、薄仁義、非聖智、然後世好之者、尙以爲過於五經、自漢文景之君、及司馬遷皆有是言、今揚子之書、文義至深、而論不詭於聖人、若使遭遇時君、更閱賢知、參所稱義、則必度越諸子矣。

【洗耳潁川之水】 キの部許（キョ）由掛瓢を見よ。

【入乎耳出乎口】 耳に聽き、面ちに之を口に發するのみにて實踐躬行せざるをいふ。**出處** 入耳著心を見よ。

【忤於耳而倒於心】 書言は耳にさからゐて心に倒になるとて、人の心に入り難きをいふ。**出處** 韓非子雖言篇に、且至言忤於耳、逆倒於心、非賢聖英能聽。

五 民

【民人】 **補遺** 人民を同じ、平民をいふ。**出處** 論語先進篇に、子路曰、有民人焉、有社稷焉、何必讀書、然後爲學。**補遺** シの部人（ジン）民を見よ。

【民望】 **補遺** 衆心の仰望する所のもの。**出處** 左傳襄公二十五年に、人謂崔子必殺之、崔子曰、民之望也、舍之、得民也。杜注に、舍、置也。

【民部】 **補遺** 官名なり。人民戶籍の事を掌る。**出處** 北齊書程駿傳に、祖父臺呂光民部尙書と。又た酉唐書職官志に、戶部尙書一員と、注に隋爲民部尙書、貞觀二十三年改爲戶部、顯慶元年改爲度支、龍朔二年改爲司元太常伯、光宅元年改爲地官尙書、神龍復爲戶部。

【民彝】 **補遺** 人の秉執する所の常性なり、父子あれば慈孝の心おるが如きこれなり。**出處** 詩經大雅烝民篇に、天生烝民、有物有則、民之秉彝、好是懿德。

【民瘼】 **補遺** 人民の惡政に苦しむこと、瘼は病なり。**出處** 杜世南の詩に、如何事巡撫、民瘼諒斯求と。又た宋史魏了翁傳に、了翁提舉常平等事、遷轉運判官、載吏姦、詢民瘼、鄙刺不避權右、風采肅然。**補遺** 詩經小雅桑柔篇に、瘼此下民。

【民隱】 **補遺** 人民の惡政に痛み苦むをいふ。**出處** 張衡の東京賦に、勤恤民隱而除其害。

六 明

【民籍】 **補遺** 人民の戶口を調査して記したる帳簿。**出處** 孔氏雜說に、東漢之定民籍、顏若勞奏、今之造戶口簿、卻不如此也。

【民房錢】 **補遺** 家賃をいふ。**出處** 事物紀原に、宋許京編民住官舍者、出僦直、謂之房錢也、宋史王堯臣傳に、時都知張永和、建議收民僦舍錢、即房錢也。

【民風】 **補遺** 人民の風俗を觀察するなり。**出處** 禮記王制篇に、天子年一巡守、云云、命太師陳詩以觀民風。

【民疲】 **補遺** 人民の疲れ獲せたるを惘むをいふ。**出處** 國語に、夫二日不食、嘗味、耳不樂聲、目不淫色、身不懷於安、朝夕勤志、恤民之疲。

【民心無常】 **補遺** 人民の心は常に一定することなし、政事に因りて善ともなり、惡ともなるをいふ。**出處** 書經蔡仲之命篇に、皇天無親、惟德是輔、民心無常、惟惠之懷、

【明史】 **補遺** 書名。**出處** 此書は清の世宗の世、保和殿大學士張廷玉等勅を奉じて撰せる書なり、康熙十八年、其編纂を始め、雍正二年更に諸臣に詔し其事を續がしむ、乾隆四年に至りて完成せり、而して其中考究の未だ詳ならざる所は、又其後勅命を承けて刊正せり、本紀十六にして二十四卷、志十五にして七十五卷、表五にして十三卷、列傳百八十にして二百二十卷、目錄四卷、凡て三百三十六卷あり。明朝一代の史なり。又た王鴻といへる者明史稾を著せり、明史は頗る材料を此に取れり。

【明律】 **補遺** 書名。**出處** 此書は一に大明律といふ。明の刑部尙書劉惟謙、敕を奉じて撰せるものにして、大抵唐律に擬して編纂せり、名例律四十七條、吏律三十三條、戶律九十五條、禮律二十六條、兵律七十五條、刑律七十一條、工律十三條、總て三十卷あり。**考** 我國荻生徂徠の明律國字解二十卷あり、初學者に便なり。

【明史稾】 **補遺** 書名。**出處** 清の王鴻緒撰する所にして、三百十卷あり、此書は明一代の史にして、唯だ帝紀のみ、未だ成らず、餘は皆排列整備す、故に張廷玉等の勅を奉じて明史を撰するに當り、此書に因りて增減を加へしといふ。

【明會典】 **補遺** 書名。**出處** 此書は明の李東陽等勅を奉じて撰する所にして、凡そ一百八十卷あり、明一代の制度を集めたるものにして、吏部・禮部・兵部・工部・戶部・刑部を以て綱となし、諸官制を分載す、其一百七十八卷は文職の事にして、末の二卷は武職の事なり、尤も該博を極めたり。

【明詩綜】 **補遺** 書名。**出處** 清の朱彝尊の撰にして、一百卷とす、明の洪武年間より崇禎に至るまで、上は帝后より下は僧尼道流に至り、近くは宗親より、遠くは番服に至るの詩を集め、選に入るもの三千四百餘家、或は詩によりて其人

為存し、又は其人によりて其詩を存す、間と綴るに詩話を以てして、作者の旨を失はざるを期せり。

【明儒學案】 意義書名。解説清の黄宗羲撰す、此書は明代諸儒の小傳、及び其學説を纂せるものにして、六十卷あり、四庫提要に曰く、此書は明一代の講學諸家の文集語録を參考し、師承を條析し以て宗派を辯別す、大抵門戸多しと雖も、河東姚江兩家、互に相出入するに過ぎず、宗義姚江に生るを以て、王陽明の學を主持す、隨て其品題未だ必しも公を盡さず、諸儒の源流に於て、分合叙述すること頗る詳かなり。

【明一統志】 タの部大（タイ）明一統志を見よ。

【明十才子】 シの部十（ジフ）才子を見よ。

【明詩別裁集】 意義書名。解説清の沈德潛と周準と共に撰する所にして、十二卷あり、明朝の陳子龍等の明詩選、錢謙益の列朝詩集、朱彝尊の明詩綜等より、其輕浮なるもの其形似せるものを刪り拔して別に之を裁せるものなり、凡て三百十四人にして、詩は一千餘首ありといふ。

【明名臣言行錄】 意義書名。解説九十五卷あり。明の徐開任の撰なり、この書、朱子の宋名臣言行錄に倣ひて作る、その主とする所ろは品行に在りて官爵を論ぜず、故に小吏布衣と雖も、品行の卓として觀るべき者はすべ

ミ 眠

【眠食】 意義睡眠と飲食となり。出典韓詩に、日力孳孳有食眠。伏惟萬福。解説世間へ名の聞へるをいふ。出典涅槃經に、名聞利養、家法

ミヤウ 名

【名聞】 解説名譽を敬めんとする慾

【名欲】 解説名譽を敬めんとする慾をいふ。出典大藏法數に、名即世間之經也、謂人因聲名、能顯親榮己、故至食求樂者、而不知此、是爲名欲。

【名詮自性】 解説名は其の體を顯す語聲分位差別、句詮差別。而假建立名句文身、名詮自性、句詮差別。

ミヤク 冥

【冥加】 解説佛の力によりて、智慧を增すをいふ。出典大藏法數に、以苦薩智慧、證密離見、故曰冥加。

ミヤク 脈

【脈脈】 意義絶えざる形容。出典温庭筠の詩に、花情蕊脈脈、柳意恨微微。

【脈絡貫通】 意義系統の立てること。出典朱熹の中庸章句の序に、支分節解、脈絡貫通。

ボク 霧

【霧霧】 信南山篇に、上天同雲、雨雪雰雰、益之以霧霧。

て之を收めたり。

【眠食】 意義睡眠と飲食となり。出典韓詩に、秋來、眠食何似、伏惟萬福。解説黄庭堅の詩に、日力孳孳有食眠。

ミル 見

【少所見多所怪】 意義不生見聞れぬ者は、人之を怪むをいふ。出典平子に、少所見多所怪、見橐駝謂馬腫背。

ミユキ 幸

【幸】 意義天子の臨行ぜらるゝをいふ。出典漢書孝文紀に、上幸甘泉、注に、如淳曰、蔡邕云、天子車駕所至、民臣以爲僥倖、故曰幸。又た蔡邕獨斷に、幸者、寵幸也、世俗謂幸爲僥倖、車駕所至、民臣被其德澤、以僥倖、故曰幸也。

ミ 視

【學視者先見輿薪】 意義視ることを學ぶものは、先づ車に積みたる薪を見るなり、大より小に及ぶないふ。出典列子仲尼篇に學視者先見輿薪、學聽者先聞撞鐘。

ミル 觀

【觀者如堵】 意義見物する人多くして墻の如くに立ち並ぶをいふ。出典禮記射義篇に、孔子射於矍相之圃、蓋觀者如堵牆。又た晉書衛玠傳に、玠字叔寶、以王敦素爽不羣、而好居物上、愈非國之忠臣、求尚建鄴、京師人士、聞其姿容、觀者如堵。

ム

ム 亡

【亡用】 意義無用に同じ。出典漢書楊王孫傳に、故聖人生易尚、死易葬也、不加功於無益、不損財於亡用。

【亡慮】 意義大凡を擧げていふ辭にて、計慮を待たざるをいふ。出典漢書趙充國傳に、將軍武賢將兵六千、敦煌太守快將二千、長水校尉富昌、酒泉侯奉世、將護月氏兵四千、亡慮萬二千人と。顏注に、亡慮、大計也。解説無ム慮を見よ。

ボ 母

【母望之禍】 意義望まずして忽ち至れる幸をいふ。出典史記春申君傳に、朱英謂春申君曰、世有母望之禍、又有母望之福、今君處母望之世、事母望之主、安可以無母望之人乎。

【母望之禍】 意義望まずして忽ち至れる禍をいふ。出典前條を見よ。

【母望之世】 意義人世の事は禍福常ともすべからざるをいふ。出典母望之禍を見よ。

【母望之主】 意義人主は寵幸恃む可らざるをいふ。出典母望之禍を見よ。

【母望之人】 意義急難あるときに、我より求めざるも、來りて救ひ與る人をいふ。出典母望之禍を見よ。

【矛楯之說】 意義自ら言ふこと彼れ此れ撞着するをいふ。出典韓非子難篇に、楚人鬻有矛與盾者之譽盾曰、吾楯之堅、莫能陷也、又譽其矛曰、吾矛之利、於物無不陷也、或曰、以子之矛、陷子之楯、何如、其人弗能應也、夫不可立之勢、而立之。又た尸子仁意篇に見ゆ。又た宋書徐湛之傳に、首尾垂亙、自爲矛楯。

ム 冏

【冏極】 意義㊀窮極なきの意なり、物の窮極なき人を指す。㊁極は中なり、中正の道なきなり。出典㊀詩經小雅鼓鐘篇に、欲報之德、昊天罔極。㊁詩經大雅民勞篇に、無縱詭隨、以謹罔極、以安王國。㊂賈誼の弔屈原賦に、遭世罔極兮、乃隕厥身。

ム 無

【無慮】 意義廣義に、都凡なり。通雅に、計慮を待たずして之を知るをいふ。猶ほ無論といふがごとし漢書の注に、大率にして小計慮無きを謂ふ。出典漢書食貨志に、天下大抵無慮皆鑄金錢矣。解説亡ム慮を見よ。

【無射】 意義律の名。出典シの部十（ジフ）二律を見よ。

【無雙】 意義一世に雙ぶ者なきをいふ。出典史記淮陰侯傳に、諸將易得耳、至如信者、國士無雙と。又た同書李將軍傳に、李廣才氣、天下無雙。

【無我】 意義心の公平無私なるをいふ。出典論語子罕篇に、子絶四、無意、無必、無固、無我。

【無知】 意義知慧なきをいふ。出典老子第三章に、常使民無知無欲。

【無欲】 意義物を欲する心なきをいふ。出典劇條を見よ。

【無益】 意義功勞なきなり。出典書經旅獒篇に、不作無益害有益、功乃成、不貴異物賤用物、民乃足。

【無祿】 意義不幸に同じ。出典詩經小雅正月篇に、憂心惸惸、念我無祿。

【無虞】 意義無憂に同じ。出典書經大禹謨篇に、益曰、吁戒哉、儆乎戒無虞、罔失法度。

【無二】 意義外に並びなきこと。出典史記淮陰侯傳に、功無二於天下。又た漢書匡衡傳に、於天下無二。

【無藝】 意義伎藝なきをいふ。出典太平廣記に、無藝子弟。

【無能】 意義才能なきをいふ。出典漢書司馬遷傳に、無能之辭。

【無狀】 意義㊀功狀なきをいふ。㊁善行なきをいふ。出典㊀史記夏紀に、視蘇之治水無狀。㊁史記賈生傳に、賈生自傷爲傅無狀、哭泣歲餘。

【無常】 解説世の轉變、人の死去をいふ。出典釋氏要覽に、梢法師序に、生滅輪廻是謂無常。

【無道】 意義行ひ道理に從はざるなり。出典論語衛靈公篇に、子謂衛靈公之無道也。

【無情】 意義眞實の心なきをいふ。出典漢書に、汲黯詰公孫弘曰、齊人多詐、而無情實。

【無罪】ムザイ　孟子梁惠王上篇に、吾何愛二一牛一、卽不レ忍二其觳觫若一無レ罪而就二死地一、故以レ羊易レ之也。

【無辜】ムコウ　孟子梁惠王下篇に、若レ殺二無辜一、則可乎。いふ。出處周禮夏官に、救二無辜一伐有罪。

【無告】ムコク　孟子梁惠王下篇に、何處へも告ぐべき處なき窮民なり。出處書經大禹謨篇に、不レ虐二無告一、不レ廢二困窮一。（クの部鰥（クワン）寡孤獨を參看せよ。）

【無聊】ムリヤウ　孟子梁惠王下篇に、心憂ふる所ありて樂まざるなり。出處李陵の答二蘇武一書に、與レ子別後、經復無聊。

【無貨】ムクワ　孟子萬章下篇に、無資本をいふ。出處唐書馬周傳に、遣人以鬪雞レ宅、柔以其興二書生一、素無二貨、皆竊笑。

【無疵】ムシ　孟子萬章下篇に、疵のなきをいふ。出處荀子賦篇に、明達純粹而無疵也、夫是之謂二君子之知一。

【無法】ムハフ　孟子萬章下篇に、キマリなきをいふ。出處荀子非十二子篇に、知而無法、勇而無憚。

【無數】ムスウ　孟子萬章下篇に、一多くして數ふ可らざるなり。二或は多くして或は寡くして、定數なきをいふ。出處一杜甫の詩に、無數蟠奪齊上下。又た劉長卿の詩に、木葉辭洞庭、紛落無數。二周禮序官に、男巫無數、女巫無數。

【無垢】ムク　孟子萬章下篇に、清淨の義なり。出處華嚴經に、國名二無垢一、琉璃爲レ地。

【無題】ムダイ　孟子萬章下篇に、詩歌に題なきものをいふ。出處佩文韻府に、李商隱有二無題詩一。

【無逸】ムイツ　孟子萬章下篇に、フの部無（ブ）逸を見よ。

【無方】ムハウ　孟子萬章下篇に、道を行ふことを知らざるものをいふ。出處史記禮書に、謂二之無方之民一。

【無疆】ムキヤウ　孟子萬章下篇に、限りなきをいふ。出處書經呂刑篇に、哲人惟刑、無疆之辭。

【無邊】ムヘン　孟子萬章下篇に、ヒロ〳〵として限りなきなり。出處起世經に、一切諸天、行時來去、無邊無礙、無有遲疾。

【無紋】ムモン　孟子萬章下篇に、アヤのなきをいふ。出處金史與服志に、八品九品、服無紋羅。

【無類】ムルイ　孟子萬章下篇に、類のなきこと、此物は此類はと區別せざるをいふ。出處論語衛靈公篇に、有二教無一類。

【無病】ムビヤウ　孟子萬章下篇に、病なき、健全の身をいふ。出處淮南子說山訓に、良醫者常治二無病之病一、故無病。

【無閒】ムカン　孟子萬章下篇に、無閒地獄なる見よ。

【無慙】ムザン　孟子萬章下篇に、人の愧づべきを愧ぢざるをいふ。又た情なきことをいふ。出處俱舍論に、於二諸功德及有德者一、無敬無崇、無所二忌憚一、無所隨屬一、說名二無慙一。即是卷敬所對敵法。

【無漏】ムロウ　孟子萬章下篇に、漏の對にして、漏とは、煩惱の義、煩惱の異名、煩惱を增長せしめざるを無漏といふなり。出處法華經に、國名二無垢一、琉璃爲レ地。

【無名指】ムメイシ　孟子告子上篇に、手の第四指、卽ち薬ユビなり。出處孟子告子上篇に、孟子曰、今有二無名之指一屈而不レ伸、非二疾痛害一レ事也、如有二能信一之者一、則不レ遠二秦楚之路一、爲二指之不レ若一人也。

【無名錢】ムメイセン　孟子告子上篇に、租稅以外の錢なり。出處漢書張湯傳に、安世辭、曉二部內一別藏二張氏無名錢一、以百萬一致レ之。顏注に、張晏曰、或曰以遺二宮、皆不レ得也。

【無常厄】ムジヤウヤク　孟子告子上篇に、底のなきサカヅキなり。用を爲さざるにも喩ふ。當は底なり。出處韓非子外儲說右上傳に、堂谿公見二韓昭侯一曰、今有二白玉之厄一而無レ賞、君以爲何如。君曰、以二瓦厄一而有レ賞、君渴、將二何以飲一、君曰、以二瓦厄一。又た皇甫謐の三都賦序に、玉厄無賞、雖レ寶非レ用。

【無絃琴】ムゲンキン　孟子告子上篇に、絃の張り居らざる琴なり。出處嵇統の陶靖節傳に、淵明不レ解二音律一、而蓄二無絃琴一張。

【無鹽女】ムエンヂヨ　孟子告子上篇に、醜婦の稱なり。出處新序雜事篇に、鍾離春者、齊鄒人也、極醜無雙、號曰二無鹽女一。

【無分別】ムフンベツ　孟子告子上篇に、物の是非を分別することなきをいふ。出處太平廣記に、孟宰二銓衡一、曾無分別。

【無一物】ムイチブツ　孟子告子上篇に、ホの部本（ホン）來無一物を見よ。

【無鬼論】ムキロン　孟子告子上篇に、天地間に鬼神といふものなしとの議論にして、晉の阮瞻が此說を立てゝ、世の有神論者に反對せしなり。出處晉書阮瞻傳に、瞻字千里、素執二無鬼論一、物莫二能難一、忽有二一客一通

レ名詣レ瞻、瞻有二才辯一、隨興之言、良久及鬼神之事、反覆甚苦、客遂屈、乃作色曰、鬼神古今聖賢所共傳、君何得二獨言一無、卽僕便是鬼、於是變爲二異形一、須臾消滅。

【無字碑】ムジヒ　孟子萬章下篇に、一文字を識らざる人を嘲りていふ。出處一通志略に、泰山高四十餘里、凡十八盤、由二南天門一、歷二東西二大門一、至二絕頂上一、有二秦時無字碑一、其祠曰、青帝去二黃河一二百餘里。二北夢瑣言に、趙崇標質堂堂而不レ學、人號二無字碑一。（ホの部沒（ボツ）字碑を見よ。）

【無常堂】ムジヤウダウ　孟子萬章下篇に、闍維場の西北角にある堂なり、病者死に近づけば此堂に送り、佛を念じ、淨土に赴くの觀を爲し、世の執着を斷たしむるなり。出處釋氏要覽に、無常堂內置二一立像一。

【無垢衣】ムクイ　孟子萬章下篇に、袈裟の異稱。出處格致鏡原に、袈裟一名無垢衣、又名二忍鎧一、又名二覆體一、又名二掩衣一、請覆二左肩一而掩二右腋一也。

【無盡燈】ムジントウ　孟子萬章下篇に、燈明なり。出處維摩經菩薩品に、維摩詰言、諸妙有二法門一、名二無盡燈一、汝等當學二無盡燈者一、譬如二一燈一、然二百千燈一、冥者皆明、終不盡。

【無盡藏】ムジンザウ　孟子萬章下篇に、物を取るも盡きざる義なり。出處大藏法數の無盡藏下に、藏者含攝也、此之十藏、乃功德林菩薩於二華嚴會上一、爲二諸菩薩一、演說欲令其普入二一切佛法之門一、成二就無上菩提一、饒益一切衆生一、以其各能含攝無盡法故、故皆名爲二無盡藏一也、又た盧舍の宜州新興寺碑序に、縛二俗多種一、爲二講受一、置二無盡藏一、爲二莊嚴一。又た蘇軾の前赤壁賦に、天地之間、物各有レ主、苟非二吾之所一有、雖一毫莫二取、惟江上之清風、與二山間之明月一、取之無禁、用之不レ竭、是造物者之無盡藏也。

【入無閒】ムカンニイル　孟子萬章下篇に、道の微妙なることをいふ。二議論の文の微細なる處に至るをいふ。出處一老子第四十三章に、天下之至柔、馳二騁天下之至堅一、無有入二無閒一、吾是以知二無爲之有益一。二揚雄の解嘲に、太玄經の內容を述べて、深者入二黃泉一、高者出二蒼天一、大者含二元氣一、細者入二無閒一。

【無偏無黨】ムヘンムタウ　孟子萬章下篇に、よくよく中正にして公平なる義なり。偏は不中、黨は不公なり。出處書經洪範篇に、無偏無黨、王道蕩蕩、無偏無黨、王道平平。

【無私無偏】ムシムヘン　孟子萬章下篇に、私心なく偏頗なく、至極公平なるをいふ。出處文子禮篇に、房玄齡、問二事君之道一、子曰、無私而掩二右腋一也。

【無量無邊】ムリヤウムヘン　孟子萬章下篇に、量りなく限りなく、廣大なるをいふ。出處法華經に、起二塔寺一及造二僧坊一、他經等、或云、供二養衆僧一、其德最勝、無量無邊。

【無念無生】ムネンムシヤウ　孟子萬章下篇に、心に思念することなく、生命を惜しむことなく、一心となること。出處白居易の詩に北閣停二朝籍一、西方入二社名一、唯名吟一句、偶無念無生。

【無爲而治】ムヰジチ　孟子萬章下篇に、一聖人の德盛大にして、其民自然に化す、故に作爲ずる所なくして國治るをいふ。二老子の所謂自然の道に從て治むるをいふ。出處一論語衛靈公篇に、子曰、無爲而治者、其舜也與。夫何爲哉、恭己正南面而已矣。二老子第三章に、常使民無知無欲、使夫知者不敢爲也、爲無爲、則無不治。

【無腸公子】ムチヤウコウシ　孟子萬章下篇に、蟹の異稱なり。出處抱朴子內篇登涉に、山中辰日稱二雨師一者、龍也、稱二河伯一者、魚也、稱二無腸公子一者、蟹也と。又た宋簡齋の詩に、但見橫行疑是蟹、不レ知公子實無腸。

【無閒地獄】ムカンヂゴク　孟子萬章下篇に、梵名阿鼻、無閒無救などゝ譯す、國浮提の下二百由旬にある極苦の處にして、苦に閒隙なきの義なり。出處翻譯名義集に、阿鼻此云二无閒一、觀佛三昧經云、阿育无、鼻言救、成論明二五无閒一、一趣果无閒、捨身生報、故二受苦无閒一、中无二樂故一、三時无閒、定二一劫故一、四命无閒中不二絕故一、五形无閒、如二阿鼻相一、縱廣八萬由旬、一人多人、皆偏滿故。

【無量寶塔】ムリヤウホウタフ　孟子萬章下篇に、阿育王は神力を以て佛舍利を鬼神に分ちへ萬四千塔を造るといふ。出處魏書釋老志に、佛既謝レ世、於後百年、有二王阿育一、以二神力一、分二佛舍利一、於二諸鬼神一、造二八萬四千塔一、布於世界、皆同日而就、今洛陽彭城妹喊疑澗、皆有二阿育王寺一、蓋承二其遺址一焉。又た宋書夷蠻傳に、務化已周、入二于涅槃一、舍利流布、起二無量塔一。

【無法之法】ムハフノホフ　孟子萬章下篇に、法則を設けざるも、自然に法則の備はれる

をいふ。出處傳燈錄の世尊付法の偈に、法本法無法、無法法亦法、今付無法時、法法何曾法。

【無用之用】 意義世に用なきもの、卻て莊處無を以て宗旨とするもの、言なり。出處莊子人間世篇に、人皆知有用之用、而莫知無用之用也。

【無疆之休】 意義無窮の美といふが如し。出處書經太甲中篇に、作書曰、民非后罔克胥匡以生、后非民罔以辟四方、皇天眷佑有商、俾嗣王克終厥德、實萬世無疆之休。

【無用之辯】 意義不必要なることを喋々と語るをいふ。出處荀子天論篇に、無用之辯不急之察、案而不治、苦雨夫君臣之義、父子之親、夫婦之別、則日切磋而不舍也。

【無稽之言】 意義根據なき妄說なり、古書經大禹謨篇に、無稽之言勿聽、弗詢之謀勿庸と。又た荀子正名篇に、無稽之言、不見之行、不聞之謀、君子愼之。

【無爲之治】 意義何事をも爲さずして、自然に治るるをいふなり。出處易經繫辭上傳に、易无思也、無爲也、寂然不動感而遂通天下之故と。又た論語衛靈公篇に、子曰、無爲而治者、其舜也與、夫何爲哉、恭己正南面而已矣。又た老子第三章に、爲無爲、則無不治。又た同書第三十七章に、道常無爲、而無不爲。

【無妄之福】 意義無妄は必すべきない幸福なり。出處戰國策策に、有無妄之福、又有無妄之禍、今君處無妄之世、以事無妄之主、安不有無妄之人乎。

【無妄之禍】 意義必得すべき禍なり。出處前條を見よ。

【無妄之世】 意義必す利益を得べき世なり。出處無妄之禍を見よ。

【無妄之主】 意義能幸せらるゝ人君なり。出處無妄之福を見よ。

【無妄之人】 意義我を助け吳ろゝ人なり。出處無妄之福を見よ。

【無窮之門】 意義花漠として窮りなき所をいふ。出處莊子在宥篇に、入無窮之門、遊無極之野と。

【無窮之規】 意義永久の規則とするをいふ。出處漢書蕭望之傳に、先帝舉德賢良在位、作憲垂法爲無窮之規。

【無籍之徒】 意義原籍なき民。出處律例類抄に、各處無籍之徒、引誘刼掠、以復私讐。

【無中生有】 意義萬有は無中より生出するをいふ。出處老子第四十章に、天下萬物生于無と。又た列子天瑞篇に、黃帝書曰、形動不生、形而生、影、聲動不生、聲而生、變、無動不生、無而生有。

【無心出岫】 意義雲の心意なくして山岫より出づるが如く、心に事を營まず、自ら縱逸なるに喩ふ。出處陶潛の歸去來辭に、雲無心以出岫、鳥倦飛而知還。

【聽于無聲】 意義聲のなきに聽くことは、注意の甚しきをいふ。出處禮記曲禮上篇に、爲人子者、視于無聲、聽于無形。

【不珍無用】 意義用に立たざる不急の器物を珍重せざるをいふ。出處墨子經說論に、不珍無用、以節其民、不愛奇貨、以富其國。

【無極而太極】 意義無中に有を生ずるを和尙の華嚴法界觀に見ゆ。又た周濂溪の太極圖說に見ゆ、宋史周茂叔傳に、自無極而爲太極とあり、朱子は自爲の二字削實の累を爲し、後學の疑を啓くとて之を改められたり、朱子文集の記、謝溪傳、答陸子靜書の二文に見えたり。

【無何有之鄉】 意義無は、ナシ、何有は何カ有ラン、なり、これ莊子の寓言にて、無何有の里といふことなり、以て造化の自然樂しむ可きの地に喩ふ。出處莊子應帝王篇に、予方將與造物者爲人、猶則又乘夫莽眇之鳥、以出六極之外、而遊無何有之鄉、以處壙埌之野。

【無情還有情】 意義唐人の詩の句。天瑞篇に、楊柳青青江水平、聞郎江上唱歌聲、東邊日出西邊雨、道是無情還有情。

【無稽之言勿聽】 意義考ふるなきの言語、俗に云ふデタラメなる話は聽く勿れといふ。出處書經

大禹謨篇に、無稽之言勿聽、弗詢之謀勿庸。

【無赦之國其刑必平】 意義罪あるものを赦すことなき國は、其刑法、必ず公平なるをいふ。出處文中子に、無赦之國、其刑必平。

【無形者物之大祖也】 意義此世に形を顯はすものは、元來無形より出づ、故に無形は物の大祖なりといふ。出處淮南子原道訓に、無形者、物之大祖也、無音者、聲之大宗也。

【無功之師君子不行】 意義功績なし軍は、君子は之を行らずといふ。出處鹽鐵論に、無功之師、君子不行、無用之地、聖王不食。

【刻畫無鹽唐突西施】 意義比擬するに倫類を失へるをいふ。無鹽は齊の邑の名にして、其の地に住める醜女なり、西施は美人の名。出處世說輕詆上篇に、庾元規語殷耶、庾曰、不爾、樂令耳、周曰、何樂、謂樂無鹽、以唐突西子也と。樂令は中書令樂廣なり。劉孝標注に、列女傳曰、鍾離春者、齊無鹽之女也、其醜無雙、行年三十、無所容入、乃自謁宣王、乞御後宮、因說王以四殆、王拜爲正后、

【夢中】 意義夢の中といふこと。出處列子周穆王篇に、以夢中所爲者實。

【夢徵】 意義夢に見たるしるしなり。出處老學菴筆記に、夢徵止此。

【夢想】 意義寢て夢中に想ふなり、思の切なるをいふ。出處司馬相如の長門賦に、忽寢寐而夢想兮と。又た漢書王莽傳に、莽又令太后下詔曰、云云、朕不身師、將謂天下何夙夜夢想五穀豐熟百姓家給。

【夢思】 意義夢に思ふをいふ。其の身の到り難き故へなり。出處杜甫の詩に、最悵巴山裏、淸猿惱夢思と。又た黃庭堅の詩に、千里常夢思。

【夢厭】 意義妖怪などを夢みて安眠するを得ざるをいふ。出處康熙字典に、廣韻厭、魘也、別作魘と。又た韓愈の潮州祭鱷魚文に、夢見と占とをいふ。出處

【夢卜】 意義夢見と占とをいふ。出處書經泰誓中篇に、朕夢協朕卜、朕夢吉、朕卜襲于休祥、戎商必克と。又た尙書說命上篇に、王庸作書以誥曰、云云、夢帝賚予良弼、其代予言、乃審厥象、俾以形旁求于天下、說築傅巖之野、惟肖、爰立作相、王置諸其左右と。又た六韜文韜篇に、文王將田、史編布卜曰、田於渭陽、獲大得焉、非龍、非彲、非虎、非熊、兆得公侯、天遣汝師、以之佐昌、施及三王、文王乃齊三日、乘田車、駕田馬、田於渭陽、卒見太公坐茅以漁、乃載與歸、立爲師。

【夢溪筆談】 意義書名。出處宋の沈括撰す、夢溪は、其の別墅の名なり、二十六卷、補筆談二卷、續筆談一卷あり、凡そ十七門に分つ、遺聞舊典、文章技藝より、小說家の言に至るまで、兼ね載せざるなし、而して樂律象數、二類尤も其專門絕學なり、補筆二篇は、舊本別行す、今は後に附載せり。

【夢幻泡影】 意義幻はマボロシ、泡は水のアワなり、事の捕捉すべき所なきに喩ふ。出處金剛經に、一切有爲法如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀。

【夢中相尋】 意義夢中に友人を尋ぬるなり、親密なるをいふ。出處書言故事に、六國張敏與高惠爲友、每相思不能得、便於夢中往尋、但行至半路、卽迷不知路。

【夢中夢夢】 意義人世の測り知る可らざるに喩ふ。出處莊子齊物論篇に、方其夢也、不知其夢也、夢之中又夢其夢焉、覺而後知其夢也。

【夢中占夢】 意義前條の莊子の語に本づきて、此の語をなせしなり、占とは吉凶を判斷するなり。出處王績の題酒店壁詩に、夢中占夢說、醒向酒家來。

【夢筆生花】 意義唐の李白が筆に花を生ぜしを夢み、其の後文名大に世に顯れたるをいふ。出處開天遺事に、李太白少時夢所用之筆頭上生花、後天才贍逸、名聞天下。

【夢中許人覺且不背其信】 意義夢の中にて人と約束して承諾したることを、覺て後之に背かずといふ、信義の厚きを

いふ。出處新書の語なり。

【謀反】ムホン 高祖君にソムクないふ。出處史記高祖紀に、楚王信謀反。

六 霧

【霧毅】コロウ 高祖紀絳侯の輕きこと霧の如くなるいふ。出處司馬相如の子虛賦に、垂霧毅と。顏注に、張揖曰、毅縟如霧、垂以爲裳也、師古曰、霧毅者、言其輕靡如霧、垂謂縟交垂也。

【霧綃】セウ 高高海き綃なり。出處曹植の洛神賦に、曳霧綃之輕裾。

【霧氣】キ 高高キリの降る模樣をいふ。出處水經、注に、大溪南北、夾岸有温泉、酈注、夏暖冬熱、上常有霧氣、瘴疾百病、浴者多愈と。又た梅堯臣の詩に、霧氣橫江白、雜聲隔岸聞。

【霧曉】ケウ 高高霧の降りたるアカツキ。出處宣和畫譜に、黃筌作風烟欲雨圖、非除非霽、如梅天霧曉時節之狀。

【霧朝】テウ 高高霧の降りたるアサ。出處劉夢得の詩に、桂水步秋漢、火山霧霧朝。

【霧島】タウ 高高霧のかゝりたるシマをいふ。出處白居易の詩に、霜鳥沈黃氣、風帆歷白波。

【霧窒】ガク 高高霧ふかき谷をいふ。出處李賀の詩に、秦商重沓雲巖近、河渭榮紆霧窒深。

【霧鬟】クワン 高高美の美はしくヤヤ〳〵としたるをいふ。出處何景明の詩に、霞裳羽衣世其人、霧鬟雪貌人難見。

【霧袖】シウ 高高うすき綃の袖をいふ。出處梁簡文帝の文に、疾趨巧步、霧袖芬披、舒輝留之延賓、委翰骨之盛遇。

【霧裏】リ 高高霧の降る所をいふ、霧中に同じ。出處杜甫の詩に、霧裏江船度、風前徑竹斜。

【霧散】サン 高高霧の時晴れて散ずるをいふ。出處後漢書に、於是、智者聽、詐辯者、聽說、武夫奮、略、戰士鬪、銳、電駭風靡、霧散雪披、變詐乘詭、以合時宜。

【霧集】シフ 高高霧の集ること、霧聚・霧合も亦同じ。出處史記淮陰侯傳に、蒯通曰、天下之士、雲合霧集、魚鱗雜遝、熛至風起、當此之時、秦在亡秦而已。

【霧亂】ラン 高高霧の亂るるいふ。出處伍輯之の柳花賦に、或風迴而遊蕩、或霧亂而飛零。

【霧湧】ユウ 高高霧の湧き起るをいふ。出處劉峻の絕交論に、故網羅相感、霧湧雲蒸、噏鳴相召、星流電馳。

【昔者】シヤ 高高上古のことをいふ。又た過去の年月を指していふことあり。出處易經說卦に、昔者聖人之作易也と。疏に據、今而觀上世、謂之昔者也。

【昔談】ダン 高高古昔の談話をいふ。出處隋書字文慶傳に、方悟昔談。

【昔爲京洛聲華客】ヤクラクセイクワカク 高高唐人の詩の句。出處白居易の詩に、昔爲京洛聲華客、今作江湖潦倒翁、意氣銷磨群勁裘、形骸變化百年中、霜侵鬢雪無多黑、酒伴詩朋只半空、紅、賴學鄧門非想定、千悲萬年一時空。

【自昔英雄有屈伸】シヤエイユウ 高高宋人の詩の句。出處陸游の劍門城北回望劍閣諸峰、青入雲樓、感懷亡事、慨然有感の詩に、自昔英雄有屈伸、危樓變化亦遊塵、陰平窮寇非謀策、如此江山坐付人。

【昔聞洞庭水今上岳陽樓】ヤクブンドウテイスイコンジヤウガクヤウロウ 高高唐人の詩の句。出處杜甫の登岳陽樓に、昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤日夜浮、親朋無一字、老病有孤舟、戎馬關山北、憑軒涕泗流。

【所向無前】ムカフ 高高吾軍の向ふ所は、前に敵するものなしといふこと。出處後漢書岑彭傳に、彭復悉衆、軍顧風益進、所向無前。

【所向無敵】ムカフ 高高前條に同じ。出處諸葛亮の心書に、因天之時、就地之勢、使人之利、則所向無敵、所擊者萬全矣。

【濕麥】ムギ 高高後漢の高鳳は讀書に耽りて、暴雨來りて庭上に曝せる麥を雨水の爲に漂流されしを知らざりし故事。出處後漢書逸民傳に、後漢高鳳字文通、南陽葉人、家以農爲業、鳳專精誦讀、晝夜不息、妻嘗之田、鳳妻於庭、令鳳護雞、時天暴雨、而鳳持竿而讀、不覺水漂麥、妻還怪問、方悟、後爲名儒。

【麥秀漸漸】ムギ 高高麥の穗の形容。

【麥穗兩岐】ムギ 高高麥を磨り粉にしたる夢をみて、失ひし夫に遇ひ、梨を剖る夢をみて、失ひし子の歸りしをいふ。出處異夢錄に、有一婦、失夫寄食於尼、夢人使磨麥、尼解之曰、磨麥見穗麥也、果得來首、又一人登舟失子、夢與人分梨、心甚快快、解者曰、梨開見子矣、未幾子果至。

七 報

【報以國士】ムクフ 高高人、國士を以て遇すれば、また國士を以て報ふとの意にて、知己の恩に感ずるをいふなり。出處史記刺客傳に、晉人豫讓曾事范中行氏、去而事知伯、知伯尊寵之、趙襄子殺知伯、讓曰、我必爲報讎、乃變姓名、入塗圃、欲刺襄子、襄子如圃、心動索之、獲讓、釋之、又漆身爲癩、吞炭爲啞、伏橋下、襄子過橋、馬驚、曰、必豫讓、問曰、子事中行氏、知伯滅、之、不爲報讎、而反臣知伯、今何報讎之深、曰、中行氏以衆人遇我、我故以衆人報之、知伯以國士遇我、我故以國士報之。(シの部士(シ)爲知己者死に關あり)

八 壻

【壻】ムコ 高高ムスメの夫をいふ。出處爾雅に、女子之夫爲壻と。疏に、廣雅云、壻謂之倩。

【蜡】ムコ 高高前條に同じ。出處類書纂要に、壻爲蜡、孟子曰、帝館蜡於貳室是也。

【以不貪爲寶】ムサホラ シの部子罕以不貪爲寶を見よ。

九 無

【無乃】ムシロ 高高乃ち何何すること無らんやと用ゐ、二字にて零の字の意なり。出處經傳釋詞に、無乃猶得無也。(宣十二年公羊傳注)周語曰、其無乃廢先王之訓、而王幾頓乎、襄三年左傳曰、無乃不可乎。

【無寧】ムシロ 高高前條に同じ。出處經傳釋詞に、無寧猶無乃也、家大人(王念孫、言宋若自誅、鞏氏、無乃以爲宗族之羞、不如使楚殺之也と。注に云、杜注に、無寧、寧也といへるほゝ之を失へり、寧は訓じて乃と爲すなり。

十 寧

【寧爲雞口勿爲牛後】ムシロ 高高雞口は小と雖も食を進む、牛後は牛の尻なり、牛後は大と雖も糞を出だす、以て小なるも潔く上に立つべし、大なるも車汚の地に居るべからずとの意を寓せし語なり。出處史記蘇秦傳に、韓話曰、寧爲雞口、勿爲牛後、今西面交、臣、事秦、何異、於牛後乎。

【寧可以馬上治之乎】ムシロ 高高何ぞ牛後の後の字は、尻と音義相通ず、老子、第十四章に、迎之不見其首、隨之不見其後と、とこれ亦た首を以て尻に對せしなり。出處前條に同じ。出處史記陸賈傳に、陸生時時前說誦詩書、高帝罵之曰、迺公居馬上而得之、安事詩書、陸生曰、居馬上得之、寧可以馬上治之乎。

【寧爲百夫長勝作一書生】ムシロ 高高唐人の詩の句。出處韓爌の從軍行に、烽火照西京、心中自不平、牙璋辭鳳闕、鐵騎繞龍城、雪暗凋旗畫、風多雜鼓聲、寧爲百夫長、勝作一書生。

十一 笞

【笞】ムチ 高高刑罰に用ふるムチなり。出處唐律疏議に、漢時笞則用竹、今時則用鞭、故書經云、作教刑、即其義也。

十二 鞭

【鞭】ムチ 高高馬のムチなり。出處事物紀原に、說文所、爲驅遲者也、古用革以驅馬、左傳曰、鞭之長不及馬腹、是也、後世代之以竹、故或謂之鞭、蓋策之以鞭、馬、太王枚馬鞭去、城、是也、漢書曰、鞭作官刑、則得名於堯舜之代、始以爲薄刑之用。

【投鞭斷流】ムチ 高高川を渡る兵多くしてとゝ爲めに流れを防ぎ止むるをいふ。出處晉書苻堅載記に、石越曰、晉國有長江之險、朝無昏貳之險、未宜動師、堅曰、以吾之衆旅、投鞭於江、斷其流。

【雖鞭之長不及馬腹】ムチ 高高餘りあるも遂に用ゐざるをいふ。一說に力强大なるも騏驥及ばざる所あるに喻ふ。出處左傳宜公十五年に、楚子圍宋、宋人使樂嬰齊告急于晉、晉侯欲救之、伯宗曰、不可、古人有言曰、雖鞭之長、不及馬腹、天方授楚、未可與爭。

十三 虛

【虛延歲月】ムナシク 高高徒らに歲月を延長するのみなるをいふ。出處抱朴子內篇勤求に、後世頑淺徒得一人、自譽云、我有祕訣、便守事之、庶有異聞、

而虚引二歳月一、妨レ費二薬力一、卒無二所レ成。

四 心 ムネ

【拊レ心】 悲しむときに心胸を擗く。擗つことなり。廣熙字典に、擗人拊レ心不レ寐。出典 儀禮士喪禮に、擗人拊

六 旨 ムネトホン

【旨遠】 ソの部其(ソノ)旨遠を見よ。

九 指 ムネ

【希指】 人の意旨に背かざるやう。感傳に、董宏希レ指に善く迎ふるなり。出典 漢書外

八 胸 ムネ

【胸有二成竹一】 竹を畫がかんとすれば先づ胸中に一個の成竹あり根幹枝葉まで目積りを附けて筆を執るをいふ。出典 蘇軾の筠籠谷偃竹記に、畫レ竹、必先得二成竹于胸中一、執レ筆熟視、乃見二其欲レ畫者一、急起從之、振レ筆直遂、以追二其所レ見、少緩則逝矣。又た晁補之の詩に、與可畫レ竹時、胸中有二成竹一と、與可は、文與可なり。補註 事を處するに當り、胸中に成算あるに喩へていふ。

【傷胸捫足】 胸を矢にて傷つけられたるに、士卒の窘を安んぜんが爲めに、足を傷つけられたるまねして、其の足を捫みしをいふ。出典 史記高祖紀に、漢楚久相持未決、漢王項羽相與臨二廣武之間一而語、漢王數二項羽一、項羽大怒、伏弩射中二漢王一、漢王傷胸、乃捫レ足曰、虜中二吾指一と。漢書高帝紀の顔注に、捫、摸也、傷胸而捫足者、以安衆也。

ムラサキ 紫

【惡紫之奪朱】 古の紫(ムラサキ)は、今の茜(アカネ)色に類ぜり、故に朱と相似たり、紫は、間色にして、朱は正色なり、紫は朱に似て非なるものなり、紫等、朱は、偽物が眞物を亂るをいふ。出典 論語陽貨篇に、子曰、惡二紫之奪一朱也、惡二鄭聲之亂一雅樂一也、惡二利口之覆二邦家一者。

メ

五 目 メ

【遊目】 一隅處をのみ視ずして、遊地此地と視るをいふ。出典 儀禮士相見禮に、若父則遊レ目、母上於面一、毋下於帶一と。又た史記楚世家に、北遊目於燕之遼東。

【怡目】 美しきものを見て、目を慰むるをいふ。出典 謝靈運の撰征賦に、春二北路一以興思、看二東山一而怡目。

【厭目】 目をおさへて物を見るをいふ。出典 荀子解蔽篇に、厭目而視者、視レ一以爲レ兩。

【矐目】 矐は爍なり、馬尿をくすべて明を失はしむるをいふ。矐の字は目に从ふなり、月に从ふは誤りなり。出典 史記荊軻傳に、高漸離變二姓名一、擊レ筑而歌、人有二識者一曰、高漸離也、奏二皇帝一、敕レ之、乃矐二其目一、使擊レ筑。

【屬目】 四年に、師屬二之目一。注視なり。出典 方傳定公十

【瞋目張膽】 勇氣を顯て視。出典 史記張耳傳に、將軍瞋レ目張膽、出二萬死不一顧一之計一、爲二天下一除レ殘。

【過目不忘】 一度見たることは忘れざるをいふ。出典 晉書符融載記に、融下筆成レ章、耳聞口誦、過目不レ忘。

【掩目捕雀】 總て事を成さんには誠實を以てせざるべからざるをいふ。出典 後漢書何進傳に、陳琳曰、誘有二掩目捕雀一、微物尚不レ可レ欺以得レ志、況國家大事乎。

【目逆而送之】 人の向ふより來るを目にて逆へ、又たその人の過ぎ去るを送るなり。出典 モの部目(モク)送を見よ。

【目短於自見】 目は明に物を見能はざるなり、人の自ら知るに短なる喩へ。出典 韓非子觀行篇に、目短於自見、故以鏡觀レ面、智短於自知、故以道正レ己。

【目見二毫末一不見二其睫一】 人は他人のことは之を見得るも、己のことは知る能はざるに喩ふ。睫はマツゲなり。出典 史記越世家に、吾不レ貴二其用一、智之如二自見一毫末一而不レ見二其睫一也。

【目失レ鏡無二以正一鬚眉】 目は能く物を見るも鏡なければ、己の顏面を照らす能はざるをいふ。出典 韓非子觀行篇に、目失レ鏡則無二以正一鬚眉一、身失レ道、則無二以知一迷惑。

【目能見百歩之外而不能自見二其睫一】 目は百歩の遠き所を見るも、其マツゲを見る能はざるをいふ。皆はメジリなり。出典 韓非子喩老篇に、見ゆ。

眼 ガン

【去眼】 眼睛を抜き去るなり。出典 史記呂后紀に、去レ眼煇レ耳。

五 碼 ナウ

【碼瑙】 瑪瑙玉に次く寶石なり。集韻に、梵語摩羅伽隸(マラギヤレイ)此云二瑪瑙一、其色赤白如二馬之腦一、因以名焉、以其可二琢成一器、世所二希有一、故名爲二寶也。

【碼瑙杯】 ノウにて造りたる杯。出典 隋書西域傳序に、煬帝時遣二侍御史章節、司隸從事杜行滿一、使二於西蕃諸國一、至二罽賓一、得二瑪瑙杯一。

【碼瑙盤】 瑪瑙にて造りし大皿をいふ。出典 唐書裴行儉傳に、有二瑪瑙盤一、廣二尺、文采粲然、軍吏趨跌、盤碎、惶怖叩頭流血、行儉笑曰、爾非故也、何至二是一、色不二少吝一。

六 名 メイ

【名】 イノ部一(イチ)名を見よ。

【名山】 善き山なり。出典 禮記王制篇に、名山大澤不二以封一。

【名城】 名高き城をいふ。出典 史記始皇紀に、墮二名城一。

【名藍】 名高き寺をいふ、藍は伽藍なり。出典 入唐記八月八日の條に、登二華嚴閣一、閱二與盧舍那一、鐘樓鼎峙、皆極二天下之壯麗一、號二聞浙名藍一、所レ不能一遠。

【名園】 勝景ある園庭なり。出典 唐の李格非、洛陽名園記を著せり。

【名銜】 名と官位とをいふ。出典 文獻通考經籍考に、書二其名銜一。

【名門】 名譽ある家がらをいふこと。出典 柳氏家訓に、余見二名門右族一、莫レ不レ由二祖先忠孝勤儉一、以成二立之一。

【名宦】 名譽ある官職なり。出典 柳一貴半紙、難二政得一之、衆怒羣嫉、鮮レ有二存者一。

【名譽】 ほまれなり。出典 莊子天運篇に、名譽之觀、不足以爲廣と。

【名節】 名譽節操なり。出典 漢書周勃傳に、勝字君賓、舍字君濡、二人相友並著二名節一と。勝舍並に姓は諱。又た李密の陳情表に、本圖二官達一、不レ矜二名節一。

【名世】 一世に名ある者、即ち大賢人なり。出典 孟子公孫丑下篇に、五百年必有二王者一興、其間必有二名世者一。字詁の說に據るに、名の字は命と通じ、命世の義なり、其の說に曰く、世說に、天生二聖人一、以酒爲レ名、古名命二字通用一、謂以酒爲レ命也、孟子、其間必有二名世者一、漢楚元王傳、作二命世一、此二字通用之證と。

【名勝】 山水の景色の勝れたるをいふ。出典 ㊀北齊書韓晉明傳に、晉心學問、好レ酒縱逸、朝廷欲レ擧之貴要、辭曰、廢人飲二美酒一、對二名勝一、安能作二刀筆吏一、被反故紙邪、王導勸用二諸名勝一と。㊁晉は東晉の元帝の名なり。

【名字】 名と字となり。㊁名譽といふ義。出典 ㊀禮記曲禮上篇に、

男子二十、冠而字と。又な儀禮士冠禮に、冠而字之、敬其名也、父之前稱名、他人則稱字也と。又た左、女子許嫁、笄而字と。注に亦成人之道也。㊁朱浮の與彭寵書曰、伯通以名字、與郡有佐命之功と。李善注に、名字謂聲譽遠聞也。

【名號】 [発音] 呼び名なり。[出典] 荀子賦篇に、名號不美、與惡爲鄰。

【名言】 [発音] 世に珍しき善き言なり。[出典] 管書山濤傳に、濤與盧欽論用兵之本、以爲不宜去州郡武備、帝稱之曰、天下名言也。

【名論】 [発音] 名望と物論となり。[出典] 名勝の二ハ見よ。

【名人】 [発音] 名譽ある人をいふ。[出典] 呂氏春秋に、魁士名人。

【名將】 [発音] 名ある大將をいふ。[出典] 史記傳斬傳に、誅殺名將。

【名士】 [発音] 才德の衆に優れたるをいふ。[出典] 曜記月令篇に、季春勉諸侯、聘名士、禮賢者と。注に、名士不仕者と。疏に名士者、謂其德行貞絶、道術通明、王者不得臣、而隱居者也、賢者、乃名士之次と。又た隋書經籍志に、海內名士傳、正始名士傳、江左名士傳あり。

【名流】 [発音] 名士の類といふ。[出典] 世說に、孫綽許詢皆一時名流。

【名儒】 [発音] 名聲の高き學者をいふ。[出典] 辭談採餘に、胡安國曰、當思所以移其心、逆引置書數千卷於其上、年餘悉能成誦、不遺一卷、遂爲名儒。

【名醫】 [発音] 老練なる醫者なり。[出典] 漢書杜延傳に、昭帝末、費天下名醫。

【名僧】 [発音] 名譽ある僧なり。[出典] 北周書薛慎傳に、竺僧名僧深識玄宗者一百人、ナの部名(ナ)與器不可以假人を見よ。

【名器】 [発音] 尊き刀なり。[出典] 三國志魏濟傳に、陰市名刀、挾長持短。

【名刀】 [発音] 技巧に名ある工人なり。[出典] 周禮考工記に、輪人謂之國工。注に、國之名工と。又た韓安國の几賦に、齊賈金斧、楚人名工。

【名工】 [発音] よき酒なり。[出典] 陶潛の詩の序に、余偶有名酒、無日不飲、頗影獨盡、忽焉復醉。

【名酒】 [発音] 名譽と利達となり。[出典] 莊子駢拇篇に、無足問於知和二曰、人卒未有不興名就利者。

【名利】 [発音] 人倫の敎なり、父子の親、夫婦の別の類、みな名目ありて案なるべし。[出典] 荀子王霸篇に、古昔は此の名敎の稱なかりしが、魏晉の世に老子無名の敎を崇ぶ、因て之に對して儒敎を名敎といふ。垂名敎。(名敎內自有樂地を見よ)

【名敎】 [発音] 宋文疏、范質の戒子暴詩に、周孔

【名實】 [発音] 名は名聲、實は實功なり。[出典] 孟子告子下篇に、夫子在三卿之中、名實未加於上下。夫子は、孟子なり、又た荀子正名篇に、故知者爲之分別。

【名實】 [発音] 名實の兩字、韓非一生の編柄なり、故にその著書中に每每之を言へり、今茲には略げず。

【名籍】 [発音] 戶籍なり。[出典] 漢書高帝紀に、民前或相聚保山澤、不書名數。

【名目】 [発音] 物に名を附けるをいふ。[出典] 隋書裴矩傳に、諸國山川、未有名目。

【名貫】 [発音] 姓名と管轄とをいふ。[出典] 栄陵比事に、視絕名貫。

【名物】 [発音] 土地にある物と其の名をいふ。[出典] 周禮大司徒に、辨其山林川澤邱陵墳衍原隰之名物。

【名刺】 [発音] 姓名を書したる札なり、古昔は紙なし、竹木を削りて書せり、故に名刺といふ、後世は紙を用ふ、故に名紙といふ。[出典] 開天遺事に、長安平康坊妓女所居、每年新進士以紅箋作名紙、游謁其中と。又た留青日札に古者削竹木以書姓名、故曰刺、後以紙書、謂之名紙、嘉靖初、士夫名紙不過用白紙、如兩指闊、近者官至節悉以大紅紙爲拜帖矣と。又た後漢書鄭衆傳に、初游洛下、始達潁川、陰懷一刺、既而無所之、至刺字漫滅。

【名紙】 前條に同じ。

【名帖】 [発音] 名刺に同じ。[出典] 時用雲笈帖、紅全同拜名帖式。

【名額】 [発音] 門額などに掛ぐる額をいふ。[出典] 通鑑唐武宗紀の胡三省注に、會要、元和二年、薛平奏請賜中條山

【名數】 [発音] 人倫の敎內自有樂地を見よ。

廟若額、爲大和寺、薛官賜額者爲寺、私造者爲招提廟者。

【名簿】 [発音] 諸人の名を署したる帳簿なり。[出典] 新唐書志に、掌女史以上名籍、凡品別、條錄爲等。

【名捕】 [発音] 其人の名を指して捕縛すること。[出典] 漢書鮑宣傳に、名捕西辛興。

【名香】 [発音] 好き香なり。[出典] 蘇軾の詩に、風月五名香。

【名筆】 [発音] 名ある筆跡なり。[出典] 世說に、便成名筆。

【名馬】 [発音] 名ある良馬なり。[出典] 東觀漢記に、有獻名馬者。

【盜名字】 [発音] 僭稱して王と稱するをいふ。[出典] 蘇軾の表忠觀碑に、天下大亂、豪傑蜂起、方是時、以數州之地、盜名字者、不可勝數。

【名山大川】 [発音] 名ある山と大なる川となり。[出典] 書經武成篇に、告于皇天后土所過、名山大川一と。疏に、山川六乃有名、名大互言之耳。

【名山大澤】 [発音] 名ある山と、大なる澤となり。[出典] 禮記王制篇に、名山大澤不以封一と。鄭注に、興民同利、不得專管也。

【名聲籍甚】 [発音] 名と譽とを盛ぐ、[出典] 漢書鄭勝傳に、底屬名號者、不以利傷行と。顏注に、底屬、言其自修

【底屬名號】 [発音] セの部籍(セキ)甚を見よ。

[発音] 名と譽とを盛ぐ、品行を修むるをいふ。[出典] 漢書鄭勝傳に、底屬名號者、不以利傷行と。顏注に、底屬、言其自修

【名臣言行錄】 [発音] 書名。[出典] 宋の名臣言行錄なり、故に十四卷、續集八卷、別集二十六卷、外集十七卷、前後の二集は、宋の朱熹の撰にして、其の他は宋の李幼武の補輯に係る、朱熹の序に、近代の文集及び紀傳の書を讀むに多く世敎に裨あり、是に於て其の要を拔取し、聚めて此の書をつくるといへり、其の著撰の實を見るべし。

【名山勝概記】 [発音] 書名。[出典] この書、本と古今遊名山記といひ、十八卷あり、明の何鏜の撰に係る、漢より明に至る諸家の名山に遊びし記文を集輯せしもの、その後無名氏更に增補改訂し四十六卷とし、且つ改題せしなり。

【名下無虛士】 [発音] 聲の高き者は、必その名に伴ふ所の實力を有するをいふ。[出典] 陳書姚察傳に、太建初、報聘於周、江左善爲先在隨右者、威相傾慕、補國劉臻、竊於公餘訪漢書疑事十餘條、並爲剖析、皆有證據、臻謂人曰、名下定無虛士と。又た北史薛道衡傳に、隙作人日詩、人日、名下固無虛士。

【名花傾國兩相歡】 [発音] 唐人の詩の句。[出典] 李白の清平調に、名花傾國兩相歡、常得君王帶笑看、解釋春風無限恨、沈香亭北倚闌干。

【名敎內自有樂地】 [発音] 名敎は人倫の敎行はるれば、自ら快樂あるをいふ。

六　明

【名敎】 [発音] 神を崇びていふ。[出典] 周禮司巫に、北面詔明神。

【明神】 [発音] 神佛の封號なり。[出典] 通俗編に北魏書地形志、東莞城郡海縣有東海明王神、按、今社神封號、概曰明王、已見于此。

【明王】 [発音] 晉書樂廣傳に、王澄、胡毋輔之等、皆以任放爲通、政有至裸體者、廣聞而笑曰、名敎內自有樂地、何必乃爾。

【明明】 [発音] 大明なる貌。[出典] 詩經大雅明明、察也と。又た大雅江漢篇に、赫赫明明。

【明時】 [発音] 試表に、志欲自效于明時と。又た杜甫の詩に、混跡無蒼生、老去愛明時。

【明月】 [発音] ㊀來月といふこと。㊁明に輝ける月。[出典] ㊀楊升菴外集に、左傳(昭公七年)齊晏平之月、公孫段卒、國人愈懼、其明月子產立、公孫洩、古遺傳及俗稱謂曰明年明日、則有之矣、明月僅見此耳。㊁謝南史謝傳に、入吾至者但有清風對吾飲者、唯當明月。

【明星】 [発音] 明に輝ける星。[出典] 詩經鄘風女曰雞鳴篇に、明星有爛。

【明河】 [発音] あまの川なり。[出典] 宋之問の明河篇に、明河可望不可親、願得乘槎一問津と。又た歐陽修の秋聲賦に、明河在天、四無人聲。

【明水】 [発音] 祭祀に備ふる水なり。[出典] 周禮秋官に、取明火於日、取明水於月。

【明神】 [発音] 神を崇びていふ。[出典] 周禮司巫に、北面詔明神。

【明王】 [発音] 神佛の封號なり。[出典] 通俗編に北魏書地形志、東莞城郡海縣有東海明王神、按、今社神封號、概曰明王、已見于此。

【明治】 漢籍天下を明に治むるといふこと。出處易經說卦傳に、離也者明也、萬物皆相見、南方之卦也、聖人南面聽天下、嚮明而治、蓋取諸此也。

【明主】 漢籍賢明なる主君をいふ。出處荀子君道篇に、明主急得其人、則身佚而國治、急得其勞、則身勞而國亂。

【明辟】 漢籍明君に同じ。出處書經洛誥篇に、朕復于明辟と。又た漢書王莽傳に、成王加元服、周公則致政書曰、朕復于明辟。

【明哲】 漢籍智識の明なる人をいふ。出處書經說命上篇に、知之曰明哲、明哲實作則と。又た詩經大雅烝民篇に、既明且哲、以保其身。

【明妃】 漢籍前漢元帝の妃王昭君なり、後ち晉の文帝（司馬昭）の諱を避けて昭を明に作りて、明妃と呼び習はせしなり。出處又選石崇の王昭君辭の序に、王明君者、本爲王昭君、以觸文帝諱、故改、匈奴盛誦婚於漢元帝、詔以後宮良家女子明君配焉、昔公主嫁烏孫、今琵琶馬上作樂、以慰其道路之思、其送明君、亦必解也、其新造之曲、多哀怨、故叙之於紙、云云。又た杜甫の詠懷古跡詩に、群山萬壑赴荊門、生長明妃尚有村。

【明府】 漢籍縣知事をいふ。出處漢書孫寶傳に、侯文曰、明府、案者、威名と。又た三餘偶筆に、漢人稱太守爲明府、其見于前後漢書諸傳者、不可枚舉、章懷注、後漢書張湛傳、明府位尊德重、不宜自輕、注、郡守所居曰府、府者、尊高之稱、前書、嚴延壽傳、東郡太守、門卒謂之明府、亦其義也、今按、唐人以此爲縣令之稱、縣令何府之有。

【明察】 漢籍微密に規察するをいふ。出處韓非子孤憤篇に、不明察、不能制私。

【明發】 漢籍夜の明るときをいふ、光明開發の義なり。出處詩經小雅小宛篇に、明發不寐、有懷二人。

【明達】 漢籍聰明穎達なるをいふ。出處漢書高帝紀に、性明達。

【明經】 漢籍科目の名にして、經義を題として、試みらるゝなり。出處事物紀原に、漢始以明經一科策取人、以通元中、崔元瑋上言、問大義十道、時務策三道、宋朝定業三經義三十道也。

【明堂】 漢籍㊀王者の政を爲す所をいふ、朝廷といふに同じ。明堂と名づけたるは、陽位に就て建て、八窓四闥なるに因る。㊁象魏の名。出處㊀周禮考工記匠人に、夏后氏世室、堂修二七、（南北深さ十四歩、廣四修一、（十七歩半）五室九階、東西北各二隍、南面は三階、殷人重屋、堂修七尋、崇三尺、四阿重屋、周人明堂度九尺之筵、東西九筵、南北七筵、堂崇一筵、五室、凡室二筵と。又た孟子梁惠王下篇に、明堂者、王者之堂也と。又た禮記明堂位篇に、昔者周公朝諸侯于明堂之位、天子負斧依于前、三公中階之前立、諸侯西階之東、東面北上、諸伯之國、西階之西、東面北上、諸子之國、門東北面東上、諸男之國、門西北面東上、九夷之國、東門之外、西面北上、八蠻之國、南門之外、北面東上、六戎之國、西門之外、東面南上、五狄之國、北門之外、南面東上、九采之國、應門之外、北面東上、四塞世告至、此周公明堂之位也、明堂也者明諸侯之尊卑也。㊂事物紀原に、今醫家記鍼灸之穴、爲側人、點誌其處、名明堂、按、銅人藏穴圖序曰、黃帝問岐伯、以人之經絡、窮妙於血脉、參變乎陰陽、鍼石其實、藏於金闕之室、洎雷公請問、乃坐明堂以授之、後世之言明堂者、以此。

【明法】 漢籍科目の名にして法律を主とす。出處事物紀原に、漢新有明經、郎明法者、遺詔相府、此明法之始也、唐始設明法科。

【明器】 漢籍死者に用ふる器なり、明とは之を神明にするなり。出處禮記檀弓上篇に、孔子曰、之死而致死之、不仁、而不可爲也、之死而致生之、不知、而不可爲也、是故竹不成用、瓦不成味、木不成斷、琴瑟張而不平、竽笙備而不和、有鐘磬而無虡、其曰明器、神明之也

と。鄭注に、言神明死者也、神明者、非人所知、故其器如此。

【明旌】 銘（メイ）旌を見よ。

【明衣】 漢籍齋戒の時に著くる布にて作れる潔淨の衣服をいふ。出處論語鄉黨篇に、齊必有明衣布と。又た事物紀原に、三代以來齋有明衣、唐改用生絹單衣、今但新衣而已、段成式酉陽雜俎曰、明衣、起於左伯桃也。

【明珠】 漢籍優れたる人をタマに譬へていふ。出處梁書劉孺傳に、孺字孝穆、七歲能屬文、年十四居父喪、毀瘠骨立、叔父嶷爲義興郡、携以之官、常置坐側、謂賓客曰、此兒吾家之明珠也と。又た晉書衛玠傳に、王濟嘗語人曰、與玠同遊、若對明珠之在側、朗然照人。

【明信】 漢籍心の明白にして信誠なるをいふ。出處左傳隱公三年に、苟有明信、澗谿沼沚之毛、蘋蘩薀藻之菜、筐筥錡釜之器、潢汙行潦之水、可薦於鬼神、可羞於王公。

【明暢】 漢籍言語又は文意の明かにして通達せるをいふ。出處宋史王沔傳に、音吐明暢。

【明夷】 キの部笑（キ）子之明夷を見よ。

【明粢】 漢籍宗廟に供する米をいふ。出處禮記曲禮下篇に、凡祭、宗廟之禮、稷曰明粢。

【明眎】 漢籍兎の異稱なり。眎は、視に同じ。出處禮記曲禮下篇に、祭、宗廟之禮、兎曰明眎。

【明白】 漢籍ハッキリとしたる樣。出處六韜に、明白顯問。

【明明赫赫】 漢籍光明のかがやくことをいふ。出處詩經大雅大明篇に、明明在下、赫赫在上と。又た同書常武篇に、赫赫明明、王命卿士。

【明窗淨几】 漢籍日當り善き明かなる窓の下に、几の塵を拂ひて清淨にすること。出處歐陽修の試筆に、蘇子美常言、明窗淨几、筆硯紙墨皆極精良、不爲外物移、其好一者又特稀也、余晚知此趣、根字體不工、不到古人佳處、若以爲樂、則自是有餘と。又た謝枋得の萬蒲歌（七言古）に、異根不帶塵埃氣、孤操愛結泉石盟、明窗淨几有宿契、花林草砌無交情。

【明鏡止水】 漢籍明に磨きたる鏡と、靜にして澄める水となり、以て心體の虛明なるに喩ふ。出處莊子德充符篇に、鑑明、則塵垢不止、止則不明也と。又た同篇に、仲尼曰、人莫鑑於流水、而鑑於止水。出處莊子應帝王篇に、至人之用心若鏡。

【明目張膽】 漢籍大に奮發して事に當るをいふ。出處唐書韋思謙傳に、丈夫當敢言地須要明目張膽以報天子、焉能碌碌保妻子耶と。又た宋史劉安世傳に、明目張膽、以身任責。出處史記張耳傳に、將軍瞋目張膽、出萬死不顧一生之計。

【明德惟馨】 漢籍神に供する黍稷の香しきに非ず、君の明德の馨しきをいふ。出處書經君陳篇に、我聞曰、至治馨香、感于神明、黍稷非馨、明德惟馨。

【明眸皓齒】 漢籍明なる瞳子（ヒトミ）と、白き齒となり、美人の形容にいふ。出處杜甫の哀江頭に、明眸皓齒今何在、血污遊魂歸不得。

【明道先生】 漢籍宋朝の大儒程顥なり。出處十駕齋新養錄に、程伯淳之殁也、文潞公題其墓曰、大宋明道先生程君之墓、按、明道、仁宗年號也、不當爲人臣之私稱、而潞公以題墓、伊川受而不辭、皆所未喻、後人亦無譏及此者。

【明皇雜錄】 漢籍書名。出處唐の鄭處誨の撰する所にして、二卷と補遺一卷とあり、唐の玄宗の事蹟を雜錄せるもの、雜錄は二十六條にして、補遺は十二條あり。

【明珠暗投】 漢籍明かなる光輝を發する珠を、暗夜に人の足の下に投ずるなり。何如なる貴重なるものも、突然に人の前に出せば怪まるゝをいふ。出處史記鄒陽傳に、明月之珠、夜光之璧、以暗投人於道路、人無不按劍相眄者、何則無因而至前也。

【明日黃花】 漢籍物の時期を過ぎたるをいふ。俗に云ふ十日の菊といふ意。出處蘇軾の詞に、休休、明日黃花蝶也愁。

【明月之珠】 漢籍暗夜にも光を發する寶珠なり。出處李斯の諫

逐客書に、垂明月之珠、服太阿之劍と。又た鄒陽の獄中上梁王書に、明月之珠、夜光之璧。（ス の部隋ズキ侯之珠を參看せよ。）

【明鏡照形】 意義明かなる鏡にて形を照らすこと、昔の專を見て、今の事に照し見るに喩ふ。出處三國吳志吳主五子傳に、孫奮數遣二法度、諸葛恪上疏諫曰、語曰明鏡所以照形、古事所以知今、大王宜深以魯王爲戒。

【明鏡不疲】 意義明かなる鏡は幾度人の姿を照らすも、疲勞せざるをいふ。出處世說言語中篇に、孝武將講孝經、謝公兄弟、與諸人私庭講習、車胤子練苦問謝、謂袁羊曰、不問則德音有遺、多問則重勞、二謝、袁曰、必無此患、車曰、何以知爾、袁曰、何嘗見明鏡疲於屢照、崇流懶於惠風乎。劉孝標注に、帝講孝經、謝安侍坐、謝石執經、車胤字武子、袁羊、喬小字也。

【明哲保身】 意義理に順ひ事を處して、身を全うするをいふ。出處詩經大雅烝民篇に、既明且哲、以保其身と。又た柳宗元の書箕子廟碑陰に、是用保其明哲、與之俯仰。

【明月爲燭】 意義明月の光を以て燈火として座を照らすをいふ。出處唐斷張志和傳に、陸羽嘗問執爲往來者、對曰、太虛爲室、明月爲燭、與四海諸公共歲、未嘗少別、何有往來。

【明察秋毫】 意義眼力極めて强くして、能く微細なる者を見分くるをいふ。明月之珠、夜光之璧。（ス の部隋ズキ侯之珠を參看せよ。）

【明見萬里】 意義聰明なるをいふ。出處後漢書賢融傳に、書既至河西、咸驚以爲天子明見萬里之外。

【明駝千里足】 意義健脚なる駱駝なり。出處木蘭辭に、願驅萬里足、送兒還故鄉。類語酉陽雜俎に、明駝千里脚、謂駝臥不貼地、屈足漏明、故曰明駝、一說、明駝、眼下有毛、夜明、日行五百里と。又た升菴外集に、唐薛肇舒翰以白駝遺有明駝使、寄舒翰以白駝遺。

【明天子在上】 意義朝廷に聽明なる天子の在ますをいふ。出處史記建元侯表年表序に、況乃以中國一統明天子在上、兼文武、席卷四海、內輯億萬之衆と。又た韓愈の送董邵南序に、爲我謝曰、明天子在上、可以出而仕矣。

【明珠出老蚌】 意義蚌は溝中又は湖海に生ずる貝なり、ドブガヒと呼ぶもの、父を老蚌に譬し、子を明珠に擬して、子の優れたるをいふ。出處三輔決錄に、韋康字元將、弟誕字仲將、孔融與其父書曰、前日元將來、淵材亮茂、雅度宏毅、徐世之器也、昨日仲將來、文敏篤誠、保家之主也、不意雙珠近出老蚌と。又た北齊書陸卬傳に、邢劭謂其父曰、吾以鄭老蚌、遂出明珠。

【明鑑所以察形】 意義明かなる鏡は、人の形を照らし察するものなるをいふ。出處新書に、明鑑所以察形、往古所以知今。

【明年此會知誰健】 意義杜甫の九日藍田崔氏莊に、老去悲秋强自寬、興來今日盡君歡、羞將短髮還吹帽、笑倩旁人正冠、藍水遠從千澗落、玉山高並兩峰寒、明年此會知誰健、醉把茱萸子細看。

【明月好同三徑夜】 意義唐人の詩の句。出處白居易の詩に、平生心迹最相親、欲隱增東不爲身、明月好同三徑夜、綠楊宜作兩家春、每因暫出猶思伴、豈得安居不隣、何獨愁身數相見、子孫長作隔墻人。

【明朝漸喜登閩嶺】 意義宋人の詩の句。出處宋蘇山の次韻擇之鉛山道中詩に、行盡江湖萬疊山、家山猶在有無間、明朝漸喜登閩嶺、淚水分流繞佩環。

【明主愛一嚬一笑】 意義嚬は憂ひて顰をしかめるなり、明君は群臣に對して、絕えて寵愛の色を示さず、群臣にその中心を推測せしむるを欲せざればなり、是れ申韓刑名家の說なり。出處韓非子內儲說上篇に、韓昭侯使人藏弊袴、侍者曰、君亦不仁矣、弊袴不以賜左右而愛之、昭侯曰、非子之所知也、吾聞明主之愛一嚬一笑、嚬有爲嚬而笑有爲笑、今夫袴豈特嚬笑哉、袴之與嚬笑、遠矣、吾必待有功者、故敢賜之、未有予也。

【明主不敢以私授】 意義賢明なる君は、私愛を以て敢て人に官を授けずといふ義。出處潛夫論に、明主不敢以私授、忠臣不敢以虛受。

【明王不掩人之義】 意義賢明なる君は、人臣の功績を掩ひ蔽さずして賞はすなり。出處戰國策に、明王不掩人之義、大聖不遺人之善。

【明鏡爲醜婦之寃】 意義寃は鄙なり、明鏡は醜婦の醜を照らす、故に之を鄙とす、邪人は正人を忌むに喩ふ。出處二經全書に見ゆ。

【明君之制賞重罰輕】 意義賢明なる君の制度は、賞重くして罰輕きをいふ。出處說苑に、明君之制、賞從重、罰從輕。

【明珠兼乘未若一言】 意義明かなる珠を馬車に幾輛も積まんよりは、一言の諫を善しとするをいふ、乘は車なり。出處唐書薛收傳に、帝上書諫、王、止敬猷、王答曰、賞所以旌、知戒、我者卿也、明珠兼乘、未若一言、今賜黃金四十斤。

【明王之使人如巧匠制木】 意義賢明なる君は人を使ふに巧みなる匠人の木を制するが如きをいふ。出處唐の太宗の帝範賞罰篇に、明王之使人、如巧匠之制木、直者以爲轅、曲者以爲輪、長者以爲棟梁、短者以爲枅栿、無曲直長短、各有所施、明王之使人、亦猶如是、智者取其謀、愚者取其力、勇者取其威、怯者取其儀、無愚智勇怯、兼而用之、故良匠無棄材、明君無棄士、不以一惡忘衆善、勿以小瑕掩其功。

命

【命】 意義朱子云、命、猶令也、字書大曰命、小曰令、此命令之別也、上古王言同稱爲命、或以命官、如書說命、尙命是也、或以封畿、如書畢命、是也、或以錫賚、如書文侯之命、是也、或傳遺詔、如書顧命、是也、秦井天下、改命曰制、漢唐而下、則以策書封爵制誥命官、而命之名亡矣、然周文之見于左傳者、猶存、故首錄之、以備一體。

【命世】 意義天より命ぜられて人間の世に生れるといふ義にて、大賢人の名。（メイ世を參看せよ。）出處趙岐の孟子題辭に、孟子を評して云、命世亞聖之大才者也と。孫疏に、孟子號爲開世亞聖之大才者也と。又た三國志武帝紀に、橋玄謂太祖曰、天下將亂、非命世之才、不能濟也、能安之者、其在君乎。（命世雄を見よ。）

【命中】 意義矢が目的に當るをいふ。出處漢書李陵傳に、力挽弓、射命中。

【命婦】 意義爵名に、大夫の妃を命婦といふ、夫は命を朝に受け、妻は命を家に受くるなり。出處儀禮喪服に、爲大夫命婦者と、鄭注に、命者、加官服之名、自士至上公、凡九等、君命其夫、則后夫人亦命其妻矣。又た宋史職官志に、外命婦之號曰國夫人、曰郡夫人、曰郡君、曰縣君、曰鄉君、曰碩人、曰恭人、曰宜人、曰安人、曰孺人と。又た明史職官志に、凡封贈、外內命婦、視夫若子之品、外命婦之號九、公曰某國夫人、侯曰某侯夫人、伯曰某伯夫人、一品曰夫人、後稱一品夫人、二品曰夫人、三品曰淑人、四品曰恭人、五品曰宜人、六品曰安人、七品曰孺人、因其子孫封者、加太字、夫在卽否。

【命根】 意義其の生命を保つ根元といふ義。出處華嚴經に、如人護身先護命根と。又た種樹書に、凡花木有直根一條、謂之命根。

【將命】 意義主客の言語を傳へ、出入を通ずるをいふ。出處論語陽貨篇に、孺悲欲見孔子、孔子辭以疾、將命者出戶、取瑟而歌。

【順命】 意義天命に順從するなり。出處易經臨卦彖傳に、咸臨、貞、无不利、未順命也。

【方命】 意義方は逆なり、王命に逆ふを方命といふ。出處書經堯典篇に、方命圮族と。又た孟子梁惠王上篇に、方命虐民。

【矯命】 意義矯は、託なり、上たる者の命に託して言ふなり。出處戰國齊策に、矯命以償馬諸民。

【投命】 意義生命を投棄するをいふ。出處顏延之の文に、投命狗節。

【命世雄】 意義大豪傑大賢人といふこと。出處子實の晉紀總論に、

非命世之雄、不能取之矣。又た李陵の書に、賈誼亞夫之徒、皆信命世之才、抱將相之具と。又た漢書楚元王傳に、聖人不出、其間有命世者也。

【命世才】 出處 燕居雜話に、趙注孟子の本朝に古く傳はれるに、命世才と題せしあり、尾崎雅嘉が群書一覽に、史記に命世之宏才なりとあるを以て、如此外題を記せりといへり、是れ公孫丑下篇に、五百年必有王者興、其間必有名世者云云、如天欲平治天下、當今之世、舍我其誰也と、宜ひし詞によれるなり、名世命世と相通じ、義も亦相同じ。 解義 これ論語を圓珠經と名づけたると同じく、古人がその書を崇ぶの餘りに、別名を撰して之を呼びしなり。

【命在天】 解義 人の壽命は天にありて、人力にては、如何ともすること能はざるをいふ。 出處 史記高祖紀に、命乃在天、雖扁鵲何益。

【命緣義輕】 イの部命（イノチ）緣義輕を見よ。

【命世亞聖才】 解義 世に名ある人にして、聖人にも次ぐをいふ。 出處 命世を見よ。

【命輕於鴻毛】 イの部命（イノチ）輕於鴻毛を見よ。

【命如風中燈】 イの部命（イノチ）如風中燈を見よ。

【受命而不辭家】 解義 大將は出征の命を受くれば、即日軍に赴き、家に歸り別を爲さずといふ。 出處 吳子論將篇に、受命而不辭家、敵破而後言返、將之職也、故師出之日、有死之志、無生之望。

【信命者亡壽夭】 解義 天命を信ずるものは、死生心に關せず。故に、壽夭なしといふ。 出處 列子に、信命者亡壽夭、信理者亡是非、不逆命、何羨壽、不矜貴、何美名。

【不知命無以爲君子】 解義 天命を知れば、死生窮通に心を動かさず、故に天命を知らざるものは君子と稱するに足らざるをいふ。 出處 論語堯曰篇に、子曰不知命無以爲君子也、不知識無以立也、不知言無以知人也。 解義 阮元の揅經室集に、此章（論語學而篇首章）を指す。三節、皆孔子一生事實、故弟子論撰之時、以此冠二十篇之首也、二十篇之終曰、不知命無以爲君子、與此始終相應也。

【知命者不立乎巖牆之下】 解義 天の數を知る人は巖牆の下の危き所に立たずといふ。即ち君子は危きに近よらずといふ義。 出處 孟子盡心上篇に、孟子曰、莫非命也、順受其正、是故知命者、不立乎巖牆之下、盡其道而死者、正命也、桎梏死者、非正命也。

【迷迷】 解義 私欲に迷ふ貌。 出處 韓詩外傳に、耳不聞學、行無正義、迷迷然以富利爲隧、是俗人也。

【迷樓】 解義 隋の煬帝の建てし樓の名なり。 出處 大業拾遺記に、帝建迷樓、樓上置四寶幌、一名散春愁、二名醉忘歸、三名夜酣香、四名延秋月と。又た迷樓記に、項昇能構宮室、經歲而成、千門萬闥、工巧之極、自古無有、人悅入者、雖終日不能出、煬帝幸之、大喜顧左右曰、使人入仙遊、其中、亦當自迷也、可自之日迷樓。

【迷惑】 解義 事物の道理に暗くして、判斷を誤ること。 出處 淮南子說山訓に、不通於學者、若迷惑と。又た俗語錄に、朱子書節要云、豈不是順倒迷惑之甚乎。

【迷離】 ホの部擬（ボク）朔を見よ。

【迷藏】 解義 巾にて目を蔽み、摸索してカクシなり。 出處 致虛雜俎に、明皇與玉眞、恆於皎月下、以錦帕裹目、在方丈內、相捉戲、謂之捉迷藏と。又た過庭錄に、無名子從學山谷、嘗趨謁上書、小兒迷藏、詩云、誰剪輕綃縫巧絲、春深庭院作兒嬉、路邊有客嘲輕脫、只有迷藏不入詩。

【迷陽】 解義 莊子人間世篇に、迷陽迷陽、無傷吾行と。司馬彪云、迷陽、伏陽也、言詐狂と。一說に、迷陽蘼異名、有芒而味少苦。

【迷廬】 ッの部蘇（ソ）迷廬を見よ。

【迷者不問路】 マの部迷（マヨフ）者不問路を見よ。

【冥冥】 解義 ㊀暗き形容㊁發顯せずして、晦暗の中に在るをいふ。 出處 李誡詩經小雅無將大車篇に、無將大車、維塵冥冥。㊂荀子脩身篇に、行乎冥冥、施乎無報と。又た王吉の書に、禁邪於冥冥、絕惡於未萌。

【冥靈】 解義 龜なり。 出處 列子湯問篇に、朔之南有冥靈者、以五百歲爲春、五百歲爲秋。

【冥福】 解義 死後に追薦するをいふ。 出處 北史崔挺傳に、挺爲光州刺史、後挺州卒、故吏開之、莫不悲感、共鑄八尺銅像于城東廣固寺、赴八關齋、追奉冥福。

【冥搜】 解義 目を閉ぢて、心に考へ搜ること。 出處 李咸用の秋日訪同人の詩に、忽憶同心友、攜琴去自由、遠尋寒澗碧、深入亂山秋、見後卻無語、別來長竭愁、幸逢三五夕、對坐對冥搜と。又た蒙齋筆談に、鄭圃每欲作詩、即伏草中冥搜、或得句則躍而出、遇之者、莫不驚。

【冥途】 解義 地下のことをいふ。 出處 太平廣記に、裴逵小吏。

【冥冥之志】 解義 胸中に深く秘して其の志を外に見はさざるをいふ。 出處 荀子勸學篇に、無冥冥之志者、無昭昭之明、無惛惛之事者、無赫赫之功。

【茗】 解義 茶なり。 出處 爾雅の注に、茶晚採者爲茗と。又た茶經に、早取曰茶、晚取曰茗。

【茗樹】 解義 茶の木をいふ。 出處 李誡用の謝僧寄茶詩に、匡山茗樹朝陽偶、曉萌如爪擎飛鳳。

【茗草】 解義 草にして茶の味あるものなり。 出處 群芳譜に、隋文帝腰痛、忽遇一僧、云、山中有茗草、煮而飲之、當愈、帝服之有效。

【茗花】 解義 茶の花をいふ。 出處 草花譜に、茗花即食茶之花、色月白而黃心、清香隱然、視之、高齋可爲清供佳品、且蕊在枝條、無不開遍。

【茗芽】 解義 茶のメをいふ。 出處 白居易の春遊西林寺詩に、陽裘抽茗芽、草堂陰雪留泉脉と。又た陸龜蒙の詩に、草堂晴日留僧坐、自向前溪摘茗芽。

【茗柯】 解義 茶の木の枝幹をいふ。 出處 世說に、簡文云、劉尹茗柯有實、韻勝於人、小、中有實と。注に、謂如茗之枝柯雖小、中有實理と。注に、謂如茗之枝柯雖小、中有實理、非外博而中虛也。

【茗旗】 解義 茶の芽の開きたるをいふ。 出處 學林新編に、蘄門團黃、有一槍一旗、二葉一芽也と。又た王安石の詩に、新茗焙中試、一旗、注に、世謂茶芽始生爲一槍、大而開爲一旗。

【茗園】 解義 茶のハタケをいふ。 出處 劉禹錫の寄楊壽州詩に、往嘗南餘多鶴跡、茗園晴望似龍鱗。

【茗圃】 解義 前條に同じ。 出處 孟郊の題中山水の詩に、菱湖有餘梨、茗圃無荒蹊。

【茗器】 解義 茶を飲むに用ふる道具をいふ。 出處 廣陵雪舊像に、晉元帝時、有老姥、每旦獨提茗器、往市、鬻之、市人競買、至暮其器不減、所得錢、盡散路傍孤貧乞人、人或異之、州法曹禁之、於獄、至夜、老姥執所鬻茗器、從獄窓飛出。

【茗具】 解義 前條に同じ。 出處 袁桷の詩に、拾遺新供茗具、滴露寫經籤。

【茗鼎】 解義 茶を烹るカナヘなり。 出處 袁泰の次茶道韻詩に、茗鼎忽聆亭畔蟹眼、車聲莫煎用纏羊腸。

【茗椀】 解義 茶を飲む椀をいふ。 出處 韓愈の孟郊會合聯句に、雲絃寂寂聽、茗椀纖纖捧と。又た孟郊の寄潛公詩に、雪鼎喧喧滴、茗椀葉葉舉。

【茗甌】 解義 茶を沸かすカマなり。 出處 陳遊の詩に、蒼甌對客乳花濃、勝聽揮犀發異聞。

【茗飲】 解義 茶を飲むをいふ。 出處 茶經に、後魏錄に、瑯琊王肅、仕南齊、好茗飲酪漿、及遷北地、又好羊肉酪漿、人或問之、茗何如酪、肅曰、茗不堪與酪爲奴と。又た陸游の初夏晝眠詩に、晚窓思茗飲、自取雪芽煎。

【茗酌】 解義 茶を酌み飲むをいふ。 出處 李白の清風亭詩に、茗酌待幽客、珍盤薦彫梅。

【茗戰】 解義 茶を鬪はすなり。 出處 蘇仙雜記に、建人謂鬪茶爲茗戰。

【養茗】 解義 茶を煎ずること。 出處 六帖に、逸人王休居太白山、每冬取溪冰一瓶、其精潔者、煮建茗供賓客と。又た韋應物の詩に、林下器未收、何人適煮茗。

【啜茗】（メイ）　茶を喫する．．と。出典杜甫の詩に、落日平臺上、春風啜茗時。

盟

【盟】（メイ）　文體の名。出典文體明辯に、按、說文曰、盟、殺牲歃血、以明信也、從皿從明、明、明也、明神之所歆、故從明、盟者、明也、明白於神明者也、亦稱曰誓、謂約信之辭也、三代盛時、初無詛盟、雖有要誓、結言則退而已、周衰人鮮忠信、於是刑牲歃血、要以質鬼神、而盟繁興、然彼而渝敗者多矣、以其爲文之一體也、故列之、而以誓附焉、夫盟誓之文、必序危機、奬忠孝、共存亡、發心力、所謂陶鑄、以取聚、指九天、以爲正、感激以立誠、切至以數詞、此其所同也、然義存則克終、道廢則渝始、亦存乎人焉耳、嗚呼、篤爲斯言、其知盟誓之要者乎。

【盟府】（メイフ）　盟約の書を藏し置く庫なり。出典左傳襄公十一年に、夫質國之典也、藏在盟府。

【渝盟】（ユメイ）　約束に背くなり、渝は變なり。出典左傳桓公元年に、渝盟無享國。又た同書僖公二十八年に、有渝此盟。

【寒盟】（カンメイ）　約束を守る心を緩めるなり。出典左傳哀公十二年に、公會吳於橐皐、吳子使子貢對曰、盟所以周信也、苟有盟焉弗可改也已、若可尋也、亦可寒也。尋は續と通ず、溫むるなり。

【尋盟】（ジンメイ）　舊約を溫むるをいふ。出典前條を見よ。

酩

【酩酊】（メイテイ）　集韻に、酩酊は醉ふ．．と甚しきなり。出典皆書山濤傳に、日夕倒載歸、酩酊無所知。

莫

【莫莢】（バクケイ）　唐草（コロミグサ）なり。月の初に、一葉を生じ、漸次十五日に至り十五葉を生ず、十六日より一葉宛落ち初むといふ。出典白虎通に、日曆得其分、即蓂莢生于階間、蓂莢者樹名、月一日一莢生、十五日畢、至二十六日二莢去、故爽

蓂莢（唐草）

【莫葉】（バクヨウ）　コロミグサの葉。出典李嶠の文に、候耕耘之節、非蓂杏花、皇昏夕之期、距須蓂葉。

【莫枝】（バクシ）　コロミグサの枝。出典庾肩吾の詩に、竹葉含初綠、蓂枝發早紫。

【莫華】（バクカ）　．．ミグサの花。出典王褒の文に、「九靈之府、神淑所以降」、五英之闕、蓂華以之開。

銘

【銘】（メイ）　文體の名。出典文體明辯に、按、郝敬成曰、銘者、名也、劉勰云、銘者、器物之名也、故曰、作器能銘、焉以鑄大夫之美、考諸夏商鼎彝、珍而盤匜之屬、莫不有銘、而文多殘缺、獨鴻盤見于大學、而大戴禮備載武王踐銘、使後人有所取法、是以其後作者蜂繁、凡山川宮室門井之類皆有銘詞、蓋不但施之器物而已、然要其體不過有二、一曰警戒、二曰頌德、故今辯而列之、謝榛曰、銘貴博文而溫潤、觀古得之矣、此外又有碑銘、墓碑銘、墓誌銘、則各爲類、不並列于此云。

【銘旌】（メイセイ）　葬かるるときに、棺の前に建つる旗なり。出典儀禮士喪禮に、「銘、各以其物、」則以編長半幅經末、長終幅、廣三寸、書銘于末、曰某氏某之柩、竹杠長三尺、置于宇西階上、」と。鄭注に、銘、明旌也、韓帛爲物、大夫之旃也、無族、不命之士也、半幅一尺、終幅二尺、杠、銘糧也、と。又た禮記檀弓下篇に、銘、明旌也、以死者爲不可別已、故以其旌識之、と。孔疏に、士長三尺、大夫五尺、諸侯七尺、天子九尺、と。又た事物紀原に、禮記曰、銘、明旌也、以死者不可別、故以其旌識之、後漢趙岐遺書曰、古之葬者、至商有銘、周室制、禮二代、表以族名之旗、則喪禮之有銘旌、周制也、喪服小記に、書銘自商始、實非周禮也、周官司常、大喪共銘旌、內

商事爾、士喪禮、旗各以其物、書名於末、曰某氏某之柩、置於宇西階之上、商以前皆書姓、男名、女字、無書國者、后亦不書氏、至魏以爲天下之號、無所復別、臣子、故稱之以自別也。

【銘肌鏤骨】（メイキロクコツ）　るなり、深く心に記して忘れざるをいふ。出典韻氏家訓に、追思平昔之指、銘肌鏤骨、非徒古書之誡、經目過耳。

【鳴鑾】（メイラン）　天子の御車に附けたる鈴。出典班固の西都賦に、大輅鳴鑾、容與徘徊。

【鳴鏑】（メイテキ）　矢の一種にて、鏑に小孔を穿ち、之を射るときは、風を含みて鳴るなり。出典史記匈奴傳に、作爲鳴鏑、と。又た通鑑の注に、應劭曰、鏑、箭也、韋曜曰、矢鏑飛則鳴、余見今軍中、亦有鳴鏑、於近、胷之處、開小竅、矢飛急則淩風而鳴。

【鳴條】（メイデウ）　地名なり。夏の桀王の敗死せし地にして、山西省解州府安邑縣に在り。出典書經伊訓篇に、造攻自鳴條、朕哉自亳。

【鳴蛙】（メイア）　鳴く蛙のこと。出典齊春秋に、孔稚圭、字德璋、嘗云、知止足、居不仕、宅前有池、春月多鳴蛙、王晏鳴鼓吹而餃之、群蛙適鳴、晏曰、此蛙殊惡於人、德璋曰、我聽君鼓吹、不及此蛙。

【鳴珂里】（メイカリ）　馬具の飾りに用ふる玉を珂といふ、珂を鳴らす里とは、張氏の居る所をいふ。出典唐書張嘉貞傳に、昆弟上朝、軒蓋隣導、盈閭巷、時號所居坊、曰鳴珂里。

螟

【鳴蟬潔飢】（メイセンケツキ）　蟬の性潔くして、飢るとも汙穢の物を食はずと、いふ義。出典抱朴子に、鳴蟬潔飢、不義穢蟲。

【鳴鐸以聲自毀】（メイタクイセイジキ）　動きて鳴る、故に自ら磨滅することありといふ、人の自ら禍を招くに喩ふ。出典文子に、鳴鐸以聲自毀、膏燭以明自消。

【鳴雞吠狗烟火萬里】（メイケイハイクエンクワバンリ）　風鈴は其の舌を搖ゆるなり、深く心に記して忘れざるをいふ。出典韻氏家訓に、追思平昔之指、銘肌鏤骨、非徒古書之誡、經目過耳。

【鳴鶴在陰其子和之】（メイカクザイインキシワシ）　鳴けば、其の聲に、孔稚圭、字德璋、嘗云、知止足、居不仕、宅前有池、春月多鳴蛙、王晏鳴鼓吹而餃之、群蛙適鳴、晏曰、此蛙殊惡於人、德璋曰、我聽君鼓吹、不及此蛙。

【鳴蟬潔飢】（メイセンケツキ）　蟬の性潔くして、飢るとも汙穢の物を食はずと、いふ義。出典抱朴子に、鳴蟬潔飢、不義穢蟲。

【鳴鐸以聲自毀】（メイタクイセイジキ）　動きて鳴る、故に自ら磨滅することありといふ、人の自ら禍を招くに喩ふ。出典文子に、鳴鐸以聲自毀、膏燭以明自消。

【鳴雞吠狗烟火萬里】（メイケイハイクエンクワバンリ）　鳴けば、其の聲に、雞や狗の吠ゆるを聞くに、烟火萬里、可謂和樂者乎。

【螟蛉】（メイレイ）　稻の鳴く聲や狗の吠ゆ、太平に治ることをいふ。出典史記律書に、孝文即位、百姓無內外之憂、息肩於田畝、天下殷富、粟至十餘錢、鳴雞吠狗、烟火萬里、可謂和樂者乎。

【螟蛉有子蜾蠃負之】（メイレイ）　稻は土蜂なり、蜂に似て小腰なり、螟蛉の子を取りて之を負ひ、木空中に於て、七日にして化して其子となる、土蜂子なし、桑蟲の子を取りて己の子となす、故に異姓に養はれて子となるを螟蛉子といふ。出典詩經小雅小宛篇に、螟蛉有子、蜾蠃負之、教誨爾子、式穀似之、と。式は以なり、穀は善なり。又た揚子法言學行篇に、螟蛉之子、殪而逃、蜾蠃祝之曰、類我類、我、久則肖之矣、無螟蛉之變成己子、と。殪は始めて生れて未だ性情あらずして、死せるが如し。又た魏書胡叟傳に、叟不治產業、常苦饑寒、樂子字螟蛉、以自給養。補遺五雜俎に、蜾蠃實非取他物爲子也、國故卵窠中、而殺小蟲以飼之耳、陶隱居謝無注云、蠮螉、俗呼泥、竹壁及器物、作房、生子如粟米、乃捕取草上蜘蛛、滿中塞之、以俟其子爲糧、此語繫繫有據、足破千古之謬、且詩但言螟蛉負之、未言其作己子也、則揚子雲類、我之戲、誤之也。

【螟蟲】（メイチウ）　苗の心を食ふ蟲。出典後漢書公沙穆傳に、遷弘農令、縣界田稻、食節賊、食根蟲、百姓憧憬、穆乃設壇謝曰、有螟蟲食穀、百姓憧憬、無害我百姓、有過罪、穆之由、請以身禱、於是暴雨、既霽而螟蟲自銷、百姓稱曰、神明。

【螟滕】（メイトウ）　螟は苗の心を害する蟲、滕は葉を食ふ害蟲。出典詩經小雅大田篇に、去其螟螣、及其蟊賊、無害我田穉、と。爾雅釋蟲に、食苗心、螟、食葉、螣、食節、賊、食根、蟊、と。邢昺疏に、李巡曰、螟、言其姦冥冥靜知也、假貸無厭、散曰螟、食猥、故曰賊、秘取萬民財貨、故云蟊、曰、皆政食所致、因以爲名也、變爲文學曰、此四種蟲、皆蝗也、實不同。

謎

【謎】（メイ）　文心雕龍に、謎也者、迴互其辭、使人昏迷、也。出典文心雕龍に、謎也者、迴互其辭、使人昏迷、也。

妙

【妙思】（メウシ）　妙へなる思ひ。出典晉書范甯傳に、平叔（何晏）神悟超絕、輔嗣（王弼）妙思通微、と。又た魏文帝の與吳

質書に、妙思六經、逍遙百氏。

【妙訣】（ミョウケツ）奇妙なる口訣をいふ。出典 葉適の贈孫十五道人に、欲レ度世人無妙訣、睡長留日住蓍牙。

【妙算】（ミョウサン）精妙なる謀りことをいふ。出典 晉書石苞傳に、齊祖忘管仲之奢僭、而錄其匡合之大謀、漢高捨陳平之污行、而取其六奇之妙算と。又た陳書に、此將軍妙算遠圖發於衰誠者也。

【妙略】（ミョウリャク）不思議なる謀略をいふ。出典 晉書孫林正傳に、將軍石苞、令楚作書、遺孫皓曰、相國晉王、輔相帝室、文武桓桓、主上欽明、委以萬機、長轡遠御、妙略潛授、偏師同心、上下用力。

【妙解】（ミョウカイ）不思議に善く解するをいふ。出典 晉書王珉傳に、時有外國沙門、名提婆、妙解法理、爲珉兄弟、講毘曇經。

【妙想】（ミョウサウ）玄妙なる思想をいふ。出典 蒲道源の贈鄭神李育岩詩に、登師筆底要眞似、妙想乃與天機通。

【妙德】（ミョウトク）微妙なる德を備ふるをいふ。出典 南史袁粲傳に、粲嘗著妙德先生傳、以擬嵇康高士傳、後以自況。

【妙道】（ミョウダウ）不思議なる道といふこと。出典 莊子齊物論篇に、夫子以爲、丘誤之言、而我以爲妙道之行也と。又た粱肅樂師琉璃光如來繡像贊に、得妙道者聖之大慈、罔極者孝之至。

【妙義】（ミョウギ）義の精といふことなり。出典 徐陵の丹陽上庸路碑に、高文象緯、妙義幾神。

【妙才】（ミョウサイ）不思議に優れたる才といふこと。出典 文心雕龍に、離騷文心、詞華麗、爲詞賦之宗、可謂妙才。

【妙麗】（ミョウレイ）容貌の微妙に奇麗なるをいふ。出典 漢書外戚傳に、孝武李夫人、本以倡進、中略上乃召見之、實妙麗善舞、由是得幸。

【妙姿】（ミョウシ）妙なる姿をいふ。出典 蘇軾の詩に、已知造化含春意、故與施朱一發妙姿。

【妙容】（ミョウヨウ）妙なる容貌をいふ。出典 孔融の薦禰衡表に、激楚陽阿、至妙之容。蓋伎者之所貪。

【妙態】（ミョウタイ）妙なる姿態をいふ。出典 傅毅の舞賦に、姿絕倫之妙態、懷慈素之潔清。

【妙手】（ミョウシュ）技藝の巧妙なるものをいふ。出典 樂府解題に、伯牙爲天下妙手と。又た義熙樂傳に、後夜當使妙手至、空空兒纖至。

【妙技】（ミョウギ）微妙の技術をいふ。出典 阮瑀の箏賦に、曲高和寡、妙技難工、伯牙能琴於技爲驍。

【妙相】（ミョウサウ）美妙の人相をいふ。出典 梁簡文帝の大愛敬寺剎下銘に、儼如常住、妙相長存。

【妙士】（ミョウシ）清き節義ある士をいふ。出典 曹植の書說に、見高節妙士、其不忘食と。又た陸游の詩に、芳茎眞妙士、霜菊亦奇才。

【妙姬】（ミョウキ）美女をいふ。出典 鮑昭の文に、東都妙選、南國麗人、蕙心紈質、玉貌絳脣。

【妙色】（ミョウシキ）妙なる顏色をいふ。出典 梁簡文帝の菩提樹頌に、儼然妙色、蔭此曲技、眼若金山、尊如薬月。

【妙伎】（ミョウギ）技藝に熟する伎をいふ。出典 曹植の七啓に、才人妙伎、遺世絕俗、揚北里之淫聲、紹陽阿之妙曲。

【妙藥】（ミョウヤク）不思議に効驗ある藥をいふ。出典 沈約の齊鄮林寺尼淨秀行狀に、或得妙藥、或聞異香と。又た李華の鶴林寺徑山師碑に、勝大敵者、那羅延身、銷大毒者、伽陀妙藥。

【妙簡】（ミョウカン）精妙に人選するをいふ。出典 三國魏志、高貴鄉公傳に、妙簡德行、以充其選と。又た潘岳の夏侯常侍誄に、設官建輔、妙簡邦良。

【妙選】（ミョウセン）前條に同じ。出典 漢書劉輔傳に、選有德之士、考ト窮究之女一と。又た傳咸の贈太尉司馬虞叡機詩に、帝崇元淑、妙選其驍。

【妙書】（ミョウシヨ）精妙なる筆跡をいふ。出典 劉孝綽の酬陳長史便詩に、殷勤覽妙書、留連披雅韻。

【妙典】（ミョウテン）微妙なる意義の典籍をいふ。出典 蕭統の文に、甘露妙典、先降殊恩と。又た梁簡文の大法頌序に、極修始之妙典、所龍宮之秘法。

【妙辭】（ミョウジ）精妙なる文辭をいふ。出典 徐陵の鹽尾銘に、拂妙辭鹽蓍、引飾妙辭。

【妙詩】（ミョウシ）精妙なる詩をいふ。出典 盧諶の詩に、妙詩申寫野、清美賞

廣騁。

【妙句】（ミョウク）巧妙なる詩句をいふ。出典 宋書謝靈運傳に、至于高言妙句、音韻天成、皆暗與理合、匪由思至と。又た陳造布穀吟に、蘇黃妙句誰嗣之、雨地流傳井須紙。

【妙說】（ミョウセツ）精妙なる論說をいふ。出典 鏡書常景傳に、常景淹博、不レ至顯官、以越君平諸人高才、無重位、託レ意贊之曰、嚴公體沈靜、立レ志明霜雪、味道綜微言、端蓍演妙說。

【妙筆】（ミョウヒツ）精妙なる筆蹟をいふ。出典 圖畫見聞志に太宗御札三、卿所レ迹盡跡古賢、俱是妙筆と。又た樓鑰の詩に、右軍以來皆妙筆、名隊異代如相從。

【妙歌】（ミョウカ）妙なる歌をいふ。出典 法苑珠林に、是琴音摩及妙歌、摩隆蔵欲界諸天音樂。

【妙舞】（ミョウブ）妙なる舞をいふ。出典 後漢書邊讓傳に、繁手超于北里、妙舞麗于陽阿と。又た謝朓の永明樂に、清歌留上客、妙舞送將罷。

【妙曲】（ミョウキヨク）妙なる音曲の微妙なる盡すをいふ。出典 嵇康の琴賦に、理正聲、奏妙曲、揚白雪、發清角。

【妙用】（ミョウヨウ）巧妙なる活用をいふ。出典 李華玉の送房處士閒遊詩に、刀圭藏妙用、巖洞契冥搜。

【妙理】（ミョウリ）精妙なる道理をいふ。出典 北史高允傳に、天下妙理至多、何遽問此。

【妙甚】（ミョウジン）妙なること極るといふこと。出典 張蠡の題息齋竹石古木詩に、森然一片鐵石筆、妙甚七字瓊琚詞。

【妙絕】（ミョウゼツ）殊勝に人に卓絕すること。出典 後漢書張超傳に、超善於草書、妙絕時人、世共傳之。

【妙慧】（ミョウケイ）不思議なる才智をいふ。出典 山谷題跋に、吾友周嘗元翁、其言語文章、發明妙慧、非爲作使之合、蓋其中心純粹、而生光耳。

【妙悟】（ミョウゴ）不思議に悟りを開くこと。出典 宋史仁宗紀に、仁宗天性惠孝、應明恭儉、通達儒術、妙悟釋典、嘗曰、明心見性、佛教爲深、修身治國、儒道爲切。

【妙感】（ミョウカン）不思議なる感應。出典 雲笈七籤に、眞會妙感、陟降太元。

【妙珍】（ミョウチン）章華賦に、設長夜之歡飲、展中情之燕婉、竭四海之妙珍、盡生人之話翫。

【妙味】（ミョウミ）妙なる味をいふ。出典 李綱の荔枝に、醒華言之妙味、吐自然之清香。

【妙契】（ミョウケイ）不思議に合ひ契るをいふ。出典 二十四詩品に、海之波瀾、山之鱗鮑、俱似大道、妙契同塵。

【妙迹】（ミョウセキ）華跡の巧妙なるをいふ。出典 晉書王羲之傳に、庾翼與王羲之書云、吾昔有伯英草草十紙、過江頗損、遂乃亡失、常歎妙跡永絕、忽見足下之書、煥若神明、頓還舊觀。

【妙境】（ミョウキヤウ）妙なる地をいふ。出典 王僧孺の答釋法雲啓に、得此微言、若開金石、洞技妙境、曾蹤榛蘂。

【妙品】（ミョウヒン）珍らしき物をいふ。出典 宋史文苑傳に、李公麟自夏商以來、鐘鼎彝尊皆能考定世次、辨測欵識、闡一妙品、雖捐千金不惜。

【妙工】（ミョウコウ）藝術に巧妙なるものをいふ。出典 江淹の扇上綵雜賦に、臨瀟之雅女、宋鄭之妙工と。又た梁簡文帝の明君詞に、妙工偏見慚、無由情恨通。

【妙儀】（ミョウギ）女官の名なり。出典 北史后妃傳序に、妙儀爲御女、比正四品。

【妙麗】（ミョウレイ）美妙にして奇麗なるをいふ。出典 漢書外戚傳に、平陽主、因妙麗喜舞、由是得幸。

【妙年】（ミョウネン）少年のことをいふ。出典 曹植の求自試表に、終軍以妙年使越、欲得長纓、以系其王、羈致北闕。

【妙身】（ミョウシン）幼少の身をいふ。出典 漢三老諱君碑に、除以妙身、襲表纘業。

【妙齡】（ミョウレイ）年の弱きこと。出典 李商隱の啓に、妥自妙齡、逢肩名輩と。又た杜甫の奉贈嚴八閣老詩に、恩榮登崇禮、煥、妙齡秀發、聰敏絕人。

【妙極】（ミョウキヨク）不思議の極。出典 沈約の千佛頌に、蛙蛙摹有、均此妙極。

【妙操】（ミョウサウ）精妙の節操をいふ。出典 論衡に、高志妙操之人、恥降、意損

以稱ゝ鋼取過。

【妙譽】 ミョウヨ 稚圭の北山移文に、張ゝ英風於海甸、聽ゝ妙譽於浙右。

【妙法】 ミョウホウ 法華經に、如ゝ是妙法、如ゝ優曇鉢花時一現耳。

【妙見】 ミョウケン 菩薩の名。梵名、蘇達利舎菀、北斗星の本地、或は妙見尊星王と稱す、又北辰菩薩ともいふ、國土を護り、貧窮を救ひ諸願を成就せしむといふ。

【妙訓】 ミョウクン 沈約の究竟慈悲論に、晩就ゝ大典、弘宣ゝ妙訓。

【妙蓮經】 ミョウレンキヤウ 雨軒詩話に、清人某詩、手寫ゝ妙蓮經、載ゝ隨園詩話續編。

【妙畫通ゝ靈】 は、神靈に通じて飛び去ることあるをいふ。

【不ゝ召之臣】 いるの臣あり、事あらば車を枉げて往きて謀るなり。

【滅度】 メツド 不ゝ如ゝ是、不ゝ足ゝ與有ゝ爲也。

【滅裂】 メツレツ 時心自謂、得ゝ至ゝ於滅度ゝ（火條參看）

【滅亡】 メツボウ 奏。

【滅沒倒景不ゝ可ゝ望】 ロの部歯（ロ）莽滅裂を見よ。

【免官】 メンクワン 作ゝ私書ゝ請ゝ託郡縣、發ゝ覺免ゝ官、按漢世三公有ゝ册免、則免ゝ官自漢始也。

【免行錢】 メンカウセン 市するものに稅を賦するをいふ。

【面】

【面相】 メンサウ 經に、面相轉出。

【面色】 メンシキ 羅漢經に、面色變。

【面命】 メンメイ 經大雅抑篇に、匪ゝ面命ゝ之、言提ゝ其耳。

【面會】 メンクワイ 漢書劉楨傳に、遣ゝ使與ゝ親書ゝ欲ゝ相見、純報曰、奉ゝ使見ゝ王侯牧守、不ゝ得ゝ先詣、如欲ゝ面會ゝ宜ゝ出ゝ傳舍。

【面訣】 メンケツ いふ。

【面談】 メンダン り。

【面語】 メンゴ 傳に、帝曰、陳事千里之外、登ゝ對面語。

【面質】 メンシツ と。顏注に、質、對話也。

【面欺】 メンキ ること。

【面謾】 メンマン ふ。

【面結】 メンケツ 呉王濞傳に、身自爲ゝ使、使ゝ於膠西、面結之。

【面折】 メンセツ をいふ。

【面從】 メンジウ 益稷篇に、予違汝弼、汝無ゝ面從、退有ゝ後言。

【面譽】 メンヨ 好ゝ面譽ゝ之を見よ。

【面朋】 メンホウ 子法言學行篇に、朋而不ゝ心、面朋也、友而不ゝ心、面友也と。又た明心寶鑑に、古人結ゝ交唯結ゝ心、今人結ゝ交唯結ゝ面。

【面友】 メンイウ 前條に同じ。

【面牆】 メンシヤウ シの部牆（シヤウ）面を見よ。

【面首】 メンシユ 通鑑宋明帝紀に、帝爲ゝ姉山陽公主ゝ置ゝ面首男子左右三十人。

【面皮】 メンピ 自聖ゝ刻面皮。

【面目】 メンボク 額といふこと、無ゝ面目ゝと用ゐて、心に恥づる所ありて、人に

【面部】 メンブ 鑑に、面部手足。

【面幕】 メンマク 薬に、面幕人死以紙覆ゝ面、小說以爲起ゝ於春秋、吳王夫差臨ゝ終曰、吾無ゝ面目見ゝ子胥、爲ゝ我以帛冒ゝ之、此說恐非、只是生人不ゝ忍見ゝ死者ゝ之意。

【面門】 メンモン 面門ゝ放ゝ種種光ゝ。疏に、從ゝ口放光也。

【面縛】 メンバク 唯ゝその面を見る、故にいふ。

【面部】 メンブ 公六年に、許男面縛銜璧と。璧を銜むは、贄とするなり、手縛せらる、故に之を口に銜むなりと。又た史記宋微子世家に、周武王伐ゝ紂克殷、微子乃持ゝ其祭器ゝ造ゝ於軍門、肉袒面縛、左牽ゝ羊、右把ゝ茅、詠行而以告。

【皮面】 メンピ 史記刺客傳に、自皮面抉ゝ眼。

【唾面】 メンダ 趙策に、老聃必唾ゝ其面ゝと。又た唐書婁師德傳に、其弟守

代州ゝ教ゝ之耐事、弟曰、人有ゝ唾ゝ面漬ゝ之、師德曰、漬ゝ之是逆ゝ其怒ゝ也、正使ゝ自乾ゝ耳と。又た史記孟嘗君傳に、唾ゝ其面而大辱ゝ之。

【面面風】 メンメンカゼ 風なり。

【面藍色】 メンランシヨク 宋史丁大全傳に、丁大全、字子萬、鎮江人、面藍色。

【面皮厚】 メンピアツ 南史卞彬傳に、嘗歎云、使有八尺國、腹無一寸腸、面皮厚如ゝ許、受打未ゝ距央。

【面皮薄】 メンピウスヨ 奚信の詩に、向ゝ人長憂臉、由來薄ゝ面皮。

【好ゝ面譽】 メンヨ とを好む人なりいふ。

【面欺】 メンキ 人の面前にて譽むること。

【面謾】 メンマン 漢書張良傳に、上以ゝ湯懷詐ゝ面欺と。顏注に、對面欺謾也。

【面諛】 メンユ 目前にて人を欺誑するをいふ。

【面壁九年】 メンペキクネン 高僧達摩が山中に在て神を鍛ひし故事なり。

【面質】 メンシツ 漢書王俊傳に、面質ゝ呂須於平前ゝ。

【面目】 メンボク 人の面前にて貶むること。

【面皮】 メンピ 史記刺客傳に、自皮面抉ゝ眼。

【面目】 メンボク 人を辱むるをいふ。

【面目】 メンボク 額といふこと、無ゝ面目ゝと用ゐて、心に恥づる所ありて、人に

也。

【面從後言】 面從を見よ。

【面折廷爭】 前にて、君德又は政事上の出來事に附き、爭論すること。出典史記呂后紀に、陳平絳侯曰、於今面折廷爭、臣不如君と。君は王陵なり。臣は陳平。出典歐陽修の上范司諫書に、立天子陛下、直辭正色、面爭廷論。

【面有七星】 面に七ツの黑子あり、其形北斗星の如しといふ。出典曾書桓溫傳に、姿貌甚偉、面有七星、少與沛國劉惔善、面稱之曰、溫眼如紫石棊、蒙作蝟毛磔、孫仲謀、晉宣王之流亞也。

【面無須靡】 面に鬚も眉もなし といふこと。出典荀子非相篇に、伊尹之狀、面無須麋と。楊注に、麋與眉同。

【唾面自乾】 人我頰に、唾するこ とあらんか、若し之を拭えば其の人の意に逆ふ、故に之を拭はずして自然に乾くを待つべしとぞ、是れ世に處するの法なり。出典唐書婁師德傳に、師德字宗仁、深沈有度量、其弟守代州、辭之官、數之耐事、弟曰、人有唾面、潔之乃已、師德曰、未也、潔之是逆其怒、正使自乾耳。

【面愛不忠】 面前にて讃むるの人は、心に誠なきをいふ。出典大戴禮に、面譽者不忠、飾貌者不情。

紡宵

【紡然】 に、白雪照寒野、紡然千重平。出典恨みつゝ望む貌。出典莊子逍遙遊篇に、宵然喪其天下焉。

【宵然】 子逍遙遊篇に、宵然喪其天下焉。

緜

【緜緜】 詩經王風葛藟篇に、緜緜葛藟、在河之滸と。又た左思の魏都賦に、緜緜瓠瓞、綿綿長くして絶えざる貌。出典

【緜蠻】 に、緜蠻黃鳥、止于丘阿。出典鳥の聲なり。ヤグヒスなどいふ。出典詩經小雅緜蠻篇に、

【緜惙】 るをいふ。出典世說德行上篇に、劉尹在郡、體小緜惙。出典晉書天文志に、唐虞則羲和繼軌、有夏則昆吾紹德、年代緜邈、文籍詳傳と。又た文心雕龍に、夫宇宙緜邈、聚獸紛雜、拔萃出類、智術而已。出典後漢書卓傳に、河內太守王邑、奉公卿以下、封邑爲列侯と。

【緜邈】 書天文志に、唐虞則羲和繼軌、有夏則昆吾紹德、年代緜邈、文籍詳傳と。又た文心雕龍に、夫宇宙緜邈、聚獸紛雜、拔萃出類、智術而已。

【緜帛】 漢書董卓傳に、河內太守王邑、奉公卿以下、封邑爲列侯と。又た左思の魏都賦に、緜緜瓠瓞、獻緜帛、悉獻公卿以下、封邑爲列侯と。又た南史朱百年傳に、室家業貧、母以冬月亡、衣並無絮、自此不衣緜帛。

【緜布】 出典綿と布とをいふ。出典後漢書蔡邕傳に、知識麻紵、作緜布と。又た三國魏志馬鈞傳に、其民土著種植、知織紡作緜布。

【緜紙】 出典綿を漉き込みたる紙をいふ。出典李商隱の河陽詩に、楚絲微覺竹枝高、半曲新辭寫緜紙。

【緜絮】 書匈奴傳に、匈奴處北地、寒、穀氣早降、故詔吏、遣單于、秫、糵、金、帛、緜、絮、它物各有數。

【緜旦】 出典謝靈運の山居賦に、南山是開創卜居之處也、從江樓、步路跨越、山嶺緜亘田野、或陞或降、當三里許。

【緜密】 ること。出典微細にして、能く行き屬け用意綿密と。又た宣和書譜に、蔡思誠學書于羊欣、下筆緜密。

【緜亶】 じ、茅を剪りて地に樹て、綿綿相聯りて、尊卑の位次を表すなり。出典史記叔孫通傳に、與其弟子百餘人、爲緜蕝野外習之。

【緜地】 く連なれること。出典數樂傳文公十一年に、緜地千里。

【緜羊】 の。出典宋史曆樓國傳に、書有緜羊・山羊・沙牛・水牛・橐駝・馬・鼎・桌。

【緜手】 出典細く白く美しき手をいふ。出典崔珏の有贈詩に、莫漬殷

成斷。客騷、紡綢緜手白逗香。

【緜竹】 に、廣漢郪縣緜竹と。註注に、紫巖山緜水所出、東至新都、北入雒と。又た晉書文帝紀に、鄧艾帥萬餘人自陰平、險絕無人、至江油、破蜀將諸葛瞻於緜竹、斬瞻傳之首遂軍綿縣、劉禪降。出典

【緜裏針】 包めるをいふ。諷刺の語に喩ふ。出典通俗編に、元曲云、緜裏針。

【緜力薄材】 が如く力無きをいふ。薄材は、其材德厚からざるをいふ。出典漢書嚴助傳に、越人緜力薄材、不能陸戰。

【緜緜不絕蔓蔓若何】 薄弱なり、蔓草は、薄弱の時に除き去らざれば、終に除く可らざるに至らん、以て禍を防ぐは、宜く微細なる時に於てすべきをいふ。出典戰國策に、緜緜不絕、蔓蔓若何、毫末不拔、將成斧柯と。柯は斧柄なり。出典

【緜然】 に、緜然引領南望。出典遙遠に在るものを想像する

【緜想】 なり。出典國語楚語世說棲逸篇に、孔淳之居會稽剡縣、性好山水、每有所適、必數其幽棲、或旬日忘歸、嘗遊山、遇沙門、釋法崇、因留共止、遂停三宿、法崇歎曰、緜想人外三十年矣、今乃傾蓋於兹、不覺老之將至、淳之還反、不告以姓。

緬

瞑

【瞑眩】 治むるには毒藥を以て之を攻め、頭目をして昏暈せしめて、始て能く病根を拔去して、疾を已むなり。出典書經說命上篇に、若藥弗瞑眩、厥疾弗瘳、若跣弗履地、厥足用傷と。蔡傳に、方言曰、飲藥而瞑、海岱之間、謂之瞑眩、瞑、惑也、弗瞑眩、喻臣之言不苦口也。

麵

【麵市鹽車】 麵の粉を布きたる市の降りたる形容なり。出典李義山の詠雪詩に、人疑送麵市、馬似負鹽車。

毛

茂

【茂才】 士を取る科目なり、本と秀才と曰ひしを、後漢の世に光武帝の諱を避けて茂才といふ。出典後漢書に、議後舉茂才、議於直、不應命と。義は雷義、重は陳重なり。

【茂行】 國策に、公國修、虛信、爲茂行と。出典德の秀でたるなり。出典戰又た離騷に、夫維聖賢、以茂行令。

【茂松】 設言語下篇に、潘師正居嵩山逍遙谷、高宗召問所須、師正對曰、臣所須者茂松清泉、山中不乏。出典世

【茂宰】 氣の盛んなるなり。出典府縣の知事の尊稱、茂は才能の從孫義興宰銘詩に、天子思茂宰、天技得英才と。又た文獻通考職官門に、周官有縣正、各掌其縣之政令、春秋時、縣邑之長、曰宰、曰尹、曰公、曰大夫、漢仍秦制、萬戶以上爲令、減萬戶爲長、列侯所食縣曰國相、其職一也。出典

【茂材孝廉】 り。出典後漢書崔仲舒傳に、仲舒對策、推明孔氏、抑黜百家、立學校之官、州郡舉茂才孝廉、皆自仲舒始之。

【茂木之下無豐草】 樹下には、肥えたる草なきをいふ。出典後綱論に、茂木之下無豐草、大塊之剛氣、英苞。

【茂、選、英、俊、豪、傑、賢、聖】 [意味]人の標準となるなり。[出典]智識の大小によりて名づけたる名稱なり。[出典]淮南子修務訓に、智過萬人者謂之英、千人者謂之俊、百人者謂之豪、十人者謂之傑、と。又た鶡冠子博選篇に、德萬人者謂之俊、德千人者謂之豪、德百人者謂之傑、と。又た後周書蘇綽傳に、古人云、千人之秀曰英、萬人之英曰儁、と。又た困學紀聞に、春秋正義(宣公十五年)引辨名記云、倍人曰茂、十人曰選、倍選曰儁、千人曰英、倍英曰賢、萬人曰傑、倍傑曰聖、禮記正義(月令孟夏)引之、以爲蔡氏、白虎通聖人篇)引禮別名記曰、五人曰茂、十人曰選、百人曰俊、千人曰英、倍英曰賢、萬人曰傑、萬傑曰聖、喪禮記逸篇也、と。左に表を作りて一覽に便す。

茂	二人(辨名記)　五人(禮別名記)
選	十人(辨名記、禮別名記)
英	萬人(淮南子、春秋繁露、尹文子、詩毛傳)　千人(後周書蘇綽傳、辨名記、禮別名記)
俊	千人(淮南子、春秋繁露)　萬人(鶡冠子)　二十人(辨名記)　百人(禮別名記)
儁	百人(淮南子)　萬人(蘇綽傳)
豪	百人(淮南子)　千人(鶡冠子)　十人(春秋繁露)
傑	十人(淮南子)　百人(鶡冠子、春秋繁露)　萬人(辨名記、禮別名記)　二萬人(荀子楊倞注)
賢	二千人(辨名記、禮別名記)
聖	二萬人(辨名記)

【茂陵他日求遺稿、猶喜曾無封禪書】 [意味]宋人の詩の句。[出典]ホの部封(ホウ)禪書の讀案を見よ。

【喪與其易也寧戚】 [意味]禮は中を貴ぶ、然れども喪禮の如きは、その儀式の治り備はらんよりは、寧ろ哀痛を主とすべきをいふ。[出典]論語八佾篇に、林放問禮之本、子曰大哉問、禮與其奢也、寧儉、喪與其易也寧戚。[類語]論語八佾篇に、臨喪不哀、吾何以觀之哉。○禮記檀弓上篇に、子路曰、吾聞諸夫子、喪禮與其哀不足而禮有餘也、不者禮不足而哀有餘也。

【無喪而憂思必讐焉】 [意味]人、死喪の事なきに、憂ふべきとの生ずるをいふ。[出典]左傳僖公五年に、晉侯使士蔿爲二公子二夷吾と重耳とを謀、而與焉、不信之、公使讓之、士蔿懼、寘薪焉、夷吾訴之、公使鴆之、士蔿稽首而對曰、臣聞之、無喪而憂思必讐焉、寇讐之保、又何懼焉。[類語]荀子法行篇に、無喪而憂思必讐焉、寇讐之保、又何懼焉。

【摸擬】 [意味]摸擬、模擬、[出典]哀安の三國名臣序贊に、豈但摸擬眞在雅性。

【摸寫】 [意味]摸寫、手を以て摸寫するなり。[出典]晉書、摸寫、[出典]摸又た墓に作る。[出典]晉書、摸寫、[出典]摸又た墓に作る。[出典]晉書、摸寫、[出典]摸又た墓に作る

蒙求、純正蒙求、左傳蒙求等、皆一に李氏の體を襲へり。

【蒙経備録】 書名。宋の孟珙の撰する所にして、一卷あり、蒙古騎馬の事を記せり。

【蒙恬造筆】 秦の始皇帝の臣蒙恬始めて筆を製造せしをいふ。蒙求に、初學記云、博物志蒙恬造筆、又尚書中候玄龜負圖出、周公授筆以時文、寫之、曲禮云、史載筆、此則秦之前已有筆矣、蓋諸國或未之名、而秦獨得其名、恬更爲之損益耳、故說文曰、楚謂之聿、吳謂之不律、燕謂之弗、秦謂之筆也、魯注引博物志云、蒙恬爲秦將、製筆、自此始、今本無之。（フの部發（ハツ）蒙振落を見よ。

【發蒙振落】 ハの部發（ハツ）蒙振落を見よ。

【蒙古遊牧記】 清の盛穆の撰する所なれども、未だ業を竟らずして卒するにより、友人何秋濤ほ其遺言を以て之を增補し、凡て十六卷とす、蒙古二十四六部落に分ち、之を叙するなり、蒙古遊牧の形勢、目擊するが如く、蒙古の事情を知らんとするものゝ良書なり。

七 濛

【濛濛】 雨の降りて蹄ぐらきこと。王昌齡の詩に、玉湖堤上雨濛濛と。又た章八元の詩に、滿城春樹雨濛濛。

八 朦

【朦朦】 雨の降らんとする形容。其將に雨。晁補之の求志賦に、冬曦朦朦、蒙求、絶正蒙求、左傳蒙求等、皆一に李氏の體を襲へり。

九 朦

【朦朧】 オボロゲなり、遠文釋義に、月將入爲朦、日將出爲朧とあり。潘岳の秋興賦に、月朦朧以含光、霧淒淒以凝冷。

【朦瞍】 盲人なり。眸子ありて見るを瞍といふ。瞍は蒙と通ず、愚蒙の心を啓發するなり。

【發朦】 ことなきを朦といひ、眸子なきを瞍といふ。國語に、朦瞍不可使視。楚辭沈江に、寡幸君之發朦と。又た揚雄の長楊賦に、迺今日發朦。

十 艨

【艨艇】 蒙衝に同じ、敵艦を突く輕艦といふ。後漢書文苑傳に、黃祖在蒙衝船上、大會賓客。注に、釋名曰、外狹而長曰蒙衝、以衝突敵船。又た南史蔡道恭傳に、魏圍荊州、作大車載土、四面俱前、欲以掌圍、道恭堅內作艨艟、以待之、魏人不得過。

【艨艟巨艦一毛輕】 句。宋人の詩の句。朱熹の有感の時に、昨夜江邊春水生、艨艟巨艦一毛輕、向來枉費推移力、此日中流自在行。

四 モク 木

【木槿】 灌木の名、ムクゲ、モクゲ。詩經檜風に、隰有萬草、注に、似李樹、華朝生夕隕、可食。又た說文に、槿、木堇、朝榮暮落。又た禮記月令篇に、仲夏之月、木槿榮。

【木像】 木製の偶像なり。禮記に、其祭、木像舉、弓射之。

【木魚】 佛家にて用ふる樂器なり、木にて作り魚の形を刻せり。制作原始に、隋設木魚、僧志林造と。又た北史に、隋大業十年頃、木魚符、於京官。又た搜言に、有一白衣問天竺長老云、何名悉懸木魚、何也、答曰、用以警衆、白衣曰、必刻魚有何因也、長老不能答、遣僧以問環山悟十師、師曰、魚晝夜未嘗合目、亦欲修行者晝夜忘寐、以至于道也。又た蘇軾の宿海會寺の詩に、木魚呼粥亮且清。

【木綿樹】 木の名。晉書載記有木綿樹、高丈餘と。又た通鑑に、梁武帝送木綿樹、高丈餘と。又た史炤釋文に、木綿江南多有之、以春二三月下種、既生、一月三蘇、毛茸生、實花結實、及熟時、其皮四裂、其中綻出如綿。

五 目

【目論】 其疵を見て能はざるが如く、他人の過失を知りて、自ら知らざるに喩ふ。

晉書史記越世家に、齊使者曰、吾不貪其用智之如目見毫毛、而不見其睫也、今王知齊之失計、而不自知、越之過、是目論也と。又た王巾の頭陀寺碑文に、願非掛一微言、比微管於目論。

【目禮】 目を動かして禮意を致すなり。晉書殷傳に、班伯以侍中光祿大夫、奏、納上出過、班伯惶恐起、謝事、上以伯新起、數目禮之と。上は、孝成、班、班は古の碑の字。又た後漢書江革傳に、帝嘗假、虎賁扶持及逆拜恆目禮焉。

【目語】 八に目にて知らせること。居書則天皇后傳に、道路目語。

【目笑】 口に發せずして、目と目とを見合せて相笑ふなり、人を輕侮する態度。史記平原君傳に、十九人相與目笑之、而未發也。

【目禁】 目を放たずして人を見送ること。後漢書唐衢傳に、盧杞論事于帝前、衢意不可、欲有所言、杞目禁輒止。

【目送】 目を放たずして人を見送ること。左傳桓公元年に、目逆而送之と。又た史記周亞夫傳に、上目送之と。上は景帝なり。

【目逆】 人を迎へて見るなり。前條を見よ。

【目巧】 工匠が法度に由らずして、目分量を用ふるをいふ。禮記仲尼燕居篇に、目巧之室、則有爲而作。

【目意】 前條に同じ。韓非子有度篇に、巧匠目意中繩。

【目成】 目にて意を知らするをいふ。楚辭少司命に、滿堂兮美人、忽獨與余兮目成。

【目使】 目づかひなり、人を見さげて使役すること。居書に、目使頤令、自視王侯。

【目錄】 物のみだしなり、目次に同じ。晉書曹志傳に、有手所作目錄。

【目捷】 目早やきこと。九鑑姐俱下也、但目捷耳。

【目下】 現在といふが如し。近思錄に、古人慮遠、目下雖似相疎、其實如此、乃能久相親。

【目前】 直ぐ目さきといふこと。列子楊朱篇に、目前之事、或存或廢、千不識一と。又た後漢書左慈傳に、操曰、一魚不周、座席可更得乎、慈更餌、鉤沈之、須臾復引出、皆長三尺餘、生鮮可愛、操使目前膾之、周浹會者一座。又た三國吳志諸瑁傳に、爲鈍、目前之急、除心腹之患。

【目擊】 擊は觸るゝなり、目にて見ること。品字箋に、目擊、猶言、瞥見、目才往意已會悟、故莊子有目擊道存之說と云へり。莊子田子方篇に、子路曰、吾子欲見溫伯雪子久矣、見之而不言何耶、仲尼曰、若夫人者、目擊而道存矣、亦不可以容聲。

【目耕】 すが如く、日日讀書に勤むるをいふ。世說に、王韶之家、貧而好學、嘗三日絕糧、執卷不輟、家人誚之、困窮如此、何不耕、王徐答曰、我當目耕耳。

【目皮相】 人を觀るに、たゞ顏相を以てするをいふ。史記酷吏傳に、天下之大事、而成天下之大功、而以目皮相、恐失天下之能士。

【目指氣使】 目を以て知らせ、氣を以て人を使ふをいふ。漢書貢禹傳に、家富勢足、目指氣使。

【目食耳視】 食物を飾り染めて目の爲めにし、味の如何を問はず。又た衣裳を飾り裝ふて、耳の爲にし、體に適すると否とを問はざるをいふ。呂氏春秋に、衣冠所以爲容貌也、稱體斯美矣、世人舍其所稱、聞人所尙而慕之、豈非以耳視者乎、飲食之物、所以爲味也、適口斯善矣、世人取、果飽、而剽鍾之、朱綠之、以爲盤案之玩、豈非以目食者邪、嗚呼衣食之奢日甚一日、不以耳視、而以目食者鮮矣。

【目眦盡裂】 眦は目尻なり、目を張り睨み視る形容。史記項羽紀に、頭髮上指、目眦盡裂。

【目光如炬】 眼光爛爛として人を射ること、炬火の如きなり。南史檀道濟傳に、道濟見收、憤怒氣盛、目光如炬、厲聲投地曰、乃壞汝萬里長城。

ビ　沐

【沐浴】（モクヨク）　沐は髪を洗ふ、浴は身を洗ふなり。出典論語憲問篇に、陳成子弑簡公、沐浴而朝、告ゲ哀公ニ曰、陳恒弑ス其君ヲ、請討ジ之ヲ。又た禮記檀弓下篇に、石祁子曰、執有ル執ル親之喪ニ而沐浴佩ビ玉者ヲ乎。

【沐猴】（モクコウ）　猴の一種。出典漢書西域傳に、罽賓國出沐猴ニ。中記項羽紀に、人言ヒ楚人沐猴而冠耳。

【沐猴舞】（モクコウブ）　猿と狗と鬬ふ狀を擬して舞ふなり。出典漢書蓋寛饒傳に、平恩侯許伯入第、丞相御史將軍中二千石皆賀、蓋寛饒爲ル司隸校尉ト不ル行、許伯請ジ之ヲ往、酒酣樂作、長信少府檀長卿起舞、爲ル沐猴與ル狗鬬ヲ、坐皆大笑、寛饒不ル說、因起ツ越出劾奏、長信少府以列卿ニ而沐猴舞、失禮不敬、宣帝欲ル罪ス少府ニ、許伯爲ル謝ス免解。

【沐猴而冠】（モクコウシテカンムル）　楚人猴を謂て沐猴と曰ふ、人の衣冠を着くと雖も、其の心は人に非ざるをいひて、人の性の躁暴なるを嘲るなり。出典史記項羽紀に、項羽西屠ル咸陽ヲ、人或ル說ル項王ニ曰、關中阻ル山河ヲ、四塞地肥饒、可ル都ス以霸ス、項王見ル秦宮室皆以燒殘破、又心懷思ル欲ル東歸ヲ、曰、富貴不ル歸ル故鄉ニ、如ル衣ル繡夜行ニ、誰知ル之者、說者曰、人言、楚人沐猴而冠耳、果然、項王聞ル之ヲ烹ル說者ヲ。

【沐風櫛雨】（モクフウシツウ）　カの部櫛（カセ）風（カゼ）沐雨を見よ。

【沐浴佩玉】（モクヨクハイギョク）　髪を洗ひ身を清めて、玉を佩ぶるをいふ。出典禮記檀弓下篇に、石祁子曰、執有ル執ル親之喪ニ而沐浴佩ル玉者ヲ乎、不ル沐浴佩ル玉、石祁子弑ル簡公ヲ、沐浴而朝、告ル哀公ニ曰、陳恒弑ス其君ヲ、請討ジ之ヲ。又た禮記檀弓下篇に、石祁子曰、執有ル執ル親之喪ニ而沐浴佩ル玉者ヲ乎。

九　苜

【苜蓿】（モクシュク）　出典史記大宛傳に、馬嗜ム苜蓿、漢使取ル其實ヲ來、子ル是天子始種ル苜蓿肥饒地ニ、又た本草に、苜蓿一名牧蓿、謂ル其宿根、可ル飼ル牧牛馬ニ也。

【苜蓿盤】（モクシュクバン）　苜蓿は蔓豆なり、蔓豆を盛りたる盤なり。出典書言故事に、唐薛令之爲ル東宮侍讀ニ、時、官署簡淡、以ル詩自悼ル云、朝日上闕圓照見ル先生盤、盤中何所ル有ル苜蓿長闌干ニ、飯澁匙難ル進ス、羹稀筯易ル寬、只可ル謀ル朝夕ヲ、何由保ル歲寒ヲ。

六　默

【默默】（モクモク）　歌に、吁嗟默默令、誰知ル吾之廢ル真ヲ。又た韓詩外傳に、紂以ル默默ニ而亡。

【默爾】（モクジ）　郷谷の詩に、從來甘默爾、自ル此倍ル怡然。

【默識】（モクシキ）　口に言はずして、心中に默記するをいふ、默は言はざるなり、識は職史反（音シ）なり。出典論語述而篇に、默而識ル之、學而不ル厭、誨ル人不ル倦、何有ル於我哉ト。又た孔融の薦ル禰衡ニ表に、弘羊潛ル計、安世默識、以ル衡準ル之ヲ、誠不ル足ル怪。

【默記】（モクキ）　口に言はずして心に記憶するをいふ。出典蒙求に、世說、羅友少時多謂ル之ヲ癡、常何ル人嗣ル欲ル乞ル食、了無ル作容、爲ル人强記、從ル桓宣武代ル蜀ヲ、按ル行蜀城、道陌果木皆默ル記ス之ヲ、後宣武集ル蜀道事、亦有ル遺忘、皆名ル列ス之ヲ、坐皆歎伏。（今本世說に載せず）

六　嘿

【默契】（モクケイ）　心中に契約する義なり。出典名賢集に、眞西山越山新居成名ル其齋ニ曰、學易ル帖云、坐看吳越兩山秀、默契義文千古心、朱晦翁見ル之ヲ曰、吾且當避ル此三舍ヲ。

【默稿】（モクカウ）　腹稿といふに同じ。出典蘇軾の貢公濟和ル劉景文登介亭詩、復次韻答ル之ニ、登臨得ル佳句、江白照ル湖濱、袖ル手默不ル言、默稿已在ル腹。

【默數淮中十往來】（モクスウワイチウジフオウライ）　句、出典蘇軾の淮上早發の詩に、澹月傾雲曉角哀、小風吹ル水碧鱗開、此生定向ル江湖老、默數淮中十往來。

【嘿嘿】（モクモク）　志を得ざる貌、默默に同じ。出典史記賈生傳に、于嗟嘿嘿令、生之無ル益ヲ。又た漢書賈誼傳に、默默に作る。

モシ　若

【若使ル榮期兼解ル醉應ル言ル四樂不ル言ル三】（モシエイキケンカイルスイオウルルゲンルシラクフルゲンルサンラクフルゲンルサンヲ）　唐人の詩の句。出典白居易の琴酒の詩に、耳根得ル聽琴初暢、心地忘ル機酒半酣、若使ル榮期兼解ル醉、應ル言ル四樂不ル言ル三。

【若將ル事事ル求ル心跡恐有ル無邊受ル屈人】（モシショウルジジルルシンセキキョウユウルムヘンジュルクツジン）　宋人の詩の句。出典劉因の詩に、記錄紛紛已失眞、語言輕重在ル醫臣、若將ル事事ル求ル心跡、恐有ル無邊受ル屈人。

【若把ル西湖ル比ル西子ル淡粧濃抹總ル相宜】（モシハヲルルセイコルルヒルルセイシタンショウノウマツソウルルソウギ）　宋人の詩の句。出典蘇軾の飲湖上初晴後雨の詩に、水光瀲瀲晴偏好、山色空濛雨亦奇、若把ル西湖ル比ル西子ル、淡粧濃抹總相宜。

モスソ　齊

【攝ル齊】（セツスル）　私反（音シ）裳を揭ぐるをいふ、齊は津論語鄉黨篇に、攝ル齊升ル堂、鞠躬如ト。又た漢書朱雲傳に、攝ル齊登ル堂、抗ル首而請。出典山家は他の奇物なし、唯だ須つ所は松樹と清泉とのみなりとの意、閑淡なる生涯をいふ。出典酉唐書潘師正傳に、高宗幸ル東都ニ、因召見與語、問ル師正、山中有ル何所ル須ル、師正對ル曰、所ル須松樹清泉、山中不ル乏ル、高宗興ル天后、皆尊ル敬ス之ヲ。

モチフ　須

【所ル須松樹清泉】（ショスルショウジュセイセン）

モツテ　以

【可ル以託ル六尺之孤】（カイタクスルリクシノコ）　ヒの部百（ヒヤク）里命を見よ。

【可ル以取ル可ル以無ル取取傷廉】（カイシュスルカイムシュシュショウレン）　此に財あり、之れを取るべきか、將た取るべからざるか、之れを取れば不正なるを以て、廉潔の義を害するの意をいふなり。出典孟子離婁下篇に、可ル以取ル、可ル以無ル取、取傷ル廉、可ル以與ル、可ル以無ル與、與傷ル惠、可ル以死ル、可ル以無ル死、死傷ル勇。

モツトモ　最

【最是一年春好處絕勝煙柳滿皇都】（モツトモコレイチネンハルヨシトコロゼツショウエンリウマンクワウト）　唐人の詩の句。出典韓愈の早春に、天街小雨潤如ル酥、草色遙看近卻無、最是一年春好處、絕勝煙柳滿皇都。

モツ　本

【報ル本反ル始】（ホウスルホンハンシ）　其の恩に報謝する篇に、唯だ、丘乘供ル秦盛ニ、所ル以報ル本反ル始也ト。注に、謝ル其恩之之謂ル報、歸ル其功之之謂ル反ル。

【拔本塞ル原】（バツホンソクル）　ハの部拔（バツ）本塞原を見よ。

【本立而道生】（ホンリツシテミチヲシル）　五倫の道は孝弟の本立つて而る後に生ず。出典論語學而篇に、君子務ル本、本立而道生、孝弟也者、其爲ル仁之本與。

モト　基

【肇ル基】（ハジメルモト）　肇は、始めなり。出典書經武成篇に、先王建ル邦啓ル土、公劉克ル篤ル前烈ヲ、至ル子太王・王季ニ、王迹ル王季其勤ル王家ヲ。

モミヂ　椛

【椛】（モミヂ）　紅葉（モミヂ）なり。出典慣夏漫筆に、俗字以ル絶爲ル紅楓、按、品字箋、椛、字典亦引ル類篇ニ曰、小杙也、斷無ル紅葉之義ニ、蓋紅楓者、樹之有ル色者、故ニ然。

モノ　物

【絕ル物】（ゼツモノ）　一切人事を謝絕するをいふ。出典孟子離婁上篇に、齊景公曰、既不ル能ル令、又不ル受ル命、是絕ル物也、涕出而女ル於吳ニ。

【物化ル物】（ブツクワルモノ）　人の物欲の爲めに本心を失ふて、遂に其の物に化しし去るをいふ。出典禮記樂記篇に、夫物之感ル人無ル窮、而人之好惡無ル節、則是物至而人化ル物也。

【物交ル物】（ブツコウルモノ）　外物の我が耳目に交はるをいふ。出典孟子告子上篇に、耳目之官、不ル思而蔽ル於物、物交ル物則引之而已矣。

【物換星移】（ブツカンセイイ）　時世の變遷するをいふ。出典王勃の滕王閣の詩に、閒雲潭影日悠悠、物換星移幾度秋。

【物極則反】（ブツキヨクソクハン）　萬物その極度に達ればれば、復たその始めに返るをいふ。出典韓冠子環流篇に、美惡相飾、命曰ル復周ト、物極則反、命曰ル環流ト。又た淮南子泰族訓に、天地之道、極則反、盈則損、五色雜ル朗、有ル時而渝、茂木蔓草、有ル時而荒、物有ル隆殺、不ル得ル自若。

【物盛則衰】（ブツセイソクスイ）　萬物一たび盛んなれば、則ち又た衰ふるをいふ。出典戰國策策に、物盛則衰、天之常數也、進退盈縮變化、聖人之常道也。

【物薄情厚】（ブツハクジヨウコウ）　人に交るに、品物は薄少なるも、其の情の深厚を主とするをいふ。出典司馬光の訓儉文に、會數而禮動、物薄而情厚。

【物微志信】（ブツビシシン）　其の志の信實なるものあるをいふ。出典後漢書寒楷傳に、臣聞布穀鳴ル於孟夏、蟋蟀吟ル於始秋、物有ル微而志信、人有ル賤而言忠ヲ。

【應ル物無ル迹】（オウジルモノナシ）　シの部魂（シ）藏を見よ。

【與ル物爲ル春】（ヨルモノヲルシユン）　しむの意。出典莊子德充符篇に、哀公曰、何謂ル才全、仲尼曰、死生存亡窮達貧富賢與ル不ル肖、毀譽ル饑渴寒暑、是事之處ル命之行也、日夜相ル代ル乎前ニ、而知不ル能

規乎其始者也、故不足以貴和、不可入於靈府、使之和豫通而不失於兌、使日夜無郤、而與物爲春、是接而生時於心者也。

【玩物喪志】 出典 器物を戲弄すれば、其の本心を喪失するとの誡めなり。出典 書經旅獒篇に、玩人喪德、玩物喪志。

【開物成務】 出典 人の未だ知らざるさんと欲する所の者を成就するをいふ。出典 易經繫辭上傳に、夫易開物成務、冒天下之道、如斯而已者也。

【物各從其類】 出典 萬物各其羣類に就くをいふ。出典 易經文言に、同聲相應、同氣相求、水流濕、火就燥、雲從龍、風從虎、聖人作而萬物覩、本乎天者、親上、本乎地者、親下、則各從其類也と。又た荀子勸學篇に、蓬生麻中、不扶而直、白沙在涅、與之俱黑、君子居必擇鄉、遊必就士、以防邪僻、而近中正焉、故蓬生麻中、不扶而直、白沙在涅、與之俱黑、蘭槐之根是爾、其漸之滫、君子不近、庶人不居、其材美也、其所積者漸也、故不登高山、不知天之高也、不臨深谷、不知地之厚也、不聞先王之遺言、不知學問之大也、干越夷貉之子、生而同聲、長而異俗、教之使然也、詩曰、尸鳩在桑、其子七兮、淑人君子、其儀一兮、其儀一兮、心如結兮、故君子結於一也、昔者瞽瞍有子曰舜、舜之所過者化、所居者治、其在詩曰、尸鳩在桑、其子七兮、淑人君子、其儀一兮、其儀一兮、心如結兮、故君子結於一也、昔者瞽瞍有子曰舜、舜之所過者化、所居者治、其在詩曰、尸鳩在桑、其子七兮、淑人君子、其儀一兮、其儀一兮、心如結兮、故君子結於一也、と。

【物聚於所好】 出典 必ず其の處に聚るをいふ。出典 歐陽修の集古錄目序に、物常聚於所好、而常得於有力之士、有力而不好、好之而無力、雖近且易、有不能致之。

【物在人亡無見期】 出典 唐人の詩の句。出典 李頎の贈盧五舊居に、物在人亡無見期、閉庭繫馬不勝悲、窓前綠竹生空地、門外青山似舊時、恨望青天鳴鑒葉、感傷枯柳宿鴉鳥、憶君淚落東流水、歲歲花開知爲誰。

【物不得其平則鳴】 出典 物の聲は凡べてその中心の不平なるより之れを外部に發するものなるなりいふ。出典 韓愈の送孟東野序に、大凡物不得其平則鳴、人之於言也亦然、其謂也有思、其笑也有懷、凡出乎口而爲聲者、其皆有弗平者乎。

【物之不齊物之情也】 出典 天地間のもの、一として同じきものなしこれ物の眞相なり。出典 孟子滕文公上篇に、孟子曰、夫物之不齊、物之情也、或相千萬、或相百、或相十、子比而同之、是亂天下也、巨屨小屨同貫、人之所成也、世子之言、不若是恐、と。

【物有必至事有固然】 出典 事物には必然の道理あるをいふ。出典 史記孟嘗君傳に、馮驩曰、非爲客謝也、爲君之言失、夫物有必至、事有固然、君知之乎、孟嘗君曰、愚不知、所謂也、曰生者必有死、物之必至也、富貴多士、貧賤寡友、事之固然也。

【物必先腐而後蟲生之】 出典 原因ありて、然る後ち結果の生ずるをいふ。出典 蘇軾の范增論に、物必先腐也、而後蟲生之、人必先疑也、而後讒入之。類語 荀子勸學篇に、肉腐生蟲、魚枯生蠹。

【物之所生不若其所聚】 出典 物は其の生ずる所よりは、其の生じたるものが聚合せる所の方が優れたるをいふ。出典 管子に、道若流、云物之所生、不若其所聚。

【文選】 出典 書名。出典 梁の昭明太子蕭統編す、原本三十卷なりしが、唐の李善之が注を作り、每卷を分ちて二となし六十卷とす、今傳ふる所の文選注六十卷是なり、又六臣注文選六十卷あり、其編輯者の名傳らず、六臣とは唐の呂延濟・劉良・張銑・呂向・李周翰の五臣の注に、李善注を合して六とせるものなり、此他注釋敍稱あれど李善注を以て最善とす、四庫提要に曰く、文選は文章の淵藪と爲す、蓋の注、又考證の資料、一字一句皆實に非ざるはなし、古人の總集中、是書を以て弁冕と爲すも、良に忝むる無しと、唐宋以來此書科舉の士の尊ぶ所となれり、現今も支那にて、選學と稱し、盛に文選を研究せり、又た李善注は、攷證家の引據する好材料となれり。類語 文選を研究するには、選學集函を閱覽すべし、玄に其の目を擧ぐ。汪師韓の文選理學權輿補一卷、孫志祖の文選考異四卷、孫志祖の文選李注補正四卷、余蕭客の文選音義八卷、朱珔の文選集釋二十四卷、薛傳均の文選古字通疏證六卷、張雲璈の選學膠言二十卷。

【文殊】 類語 佛の名、智慧を具する佛なりといふ、殊の字玉に從ひて、珠に作るは非なり。出典 放鉢經に、釋迦佛言曰、今得佛是文殊、是文殊是我過去本師、過去无量諸佛、皆文殊弟子、當來亦爾、文殊乃佛道中父母也。

【文字飲】 フの部文（ブン）字飲を見よ。

【文選爛秀才半】 類語 宋の世、科擧の士、競て四六駢儷の文を學び、皆な務めて文選を誦せり、故に文選を爛熟せば試驗に及第し、秀才となるべき資格の半分を得たりといふことなり。出典 老學庵筆記に、國初尙文選、當時文人專意此書、故草必稱王孫、悔必稱驛使、月必稱望舒、山水必稱清暉、至慶曆後、惡其陳腐、諸作者始一洗之、方其盛時、一士子至爲之語曰、文選爛秀才半、建炎以來尙蘇氏文章、學者翕然從之、而窮士尤鑿、亦有語曰、蘇文熟喫羊肉、蘇文生喫菜羹。

【文選文士】 類語 梁昭明太子の文選を編輯せる時の人名。出典 升庵外集卷五十二に、梁昭明太子號令文士劉孝威・庾肩吾・徐防・江伯摎・孔敬通・惠子悅・徐陵・王固・孔燾・鮑至十人、謂之高齋十學士、集文選、今襄陽有文選樓、池州有文選臺、未知何地爲的、但十人姓名、人多不知、故特著之。

門

【門】 類語 家の由つて往來出入する所をいふ。出典 事物紀原に、易繫曰神農氏沒、黃帝堯舜氏作、重門擊柝、蓋取諸豫、爲關要紀曰、軒轅造門戶、然則門戶之制、其在上棟下宇之後乎。

【門焉】 類語 敵の城門に攻め入るをいふ。出典 左傳襄公十年に、僖陽人啓門、諸侯之士門焉と。杜注に、見門開、故攻之。

【門神】 類語 禮記月令篇に、孟春之月、其祀戶と。注に、戶神陽氣在戶內之神、故曰、祀之戶內、陽也。類語 シキヨ ちいふ。出典 禮記曲禮上篇に、大夫士、出入君門、由闑右不履閾と。注に、闑門限。

【門限】 類語 門は家の門なり、閾は村里の入り口の門なり。出典 禮記月令篇に、仲夏之月、門閭毋閉、關市毋索。

【門閭】 類語 家門と街巷となり。出典 宋書謝瞻傳に、賓客輒談、門巷喧咽、時、瞻在家、奮厲謂晦曰、汝名位未多、而令籠、門巷人歸趨乃爾。

【門巷】 類語 門內の正路をいふ。出典 禮記曲禮上篇に、居喪之禮、毀瘠不形、視聽不衰、升降不由阼階、出入不當門隧。

【門隧】 類語 門前の道路をいふ。出典 後漢書鄭玄傳に、昔子公僅有一節、猶或戒鄉人、修其門閭、刻乃鄧公之德、而無廟牡之祭、可廢門衢、令容高車、徵爲通德。

【門衢】 類語 門札に同じ。出典 通雅に、門籍、置牒于門、以案出入也、元紀令從官給事宮司馬門中者、得食父母兄弟、通籍、注應劭曰、籍者爲尺二竹牒、記其年紀名字物色、掛之宮門、案省相應乃得入也と。又た明律に、宮衞若無門籍、冒名而入者、罪亦如之。

【門籍】 類語 碪は門內の廣き處をいふ。出典 易經明夷卦に、六四、入于左腹、獲明夷之心、于出門庭。

【門庭】 類語 門と堵となり、人の家門を指していふ。出典 韓愈の與陳給事書に、夫位尊則賤者日隔、例候于門牆者、日益進、則愛博而情不專。

【門樞】 類語 門扉のくるるなり。出典 漢書五行志に、視門樞下と、顏注に、樞、門扇所由開閉者也。